ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか

テスト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか

【Ｎコード】
Ｎ８６２５Ｕ

【作者名】
テスト

【あらすじ】
齢十四を数えて、迷宮都市にやって来た。馬鹿みたいに英雄に憧れて、可愛い異性との出会いを高望みして、僕は冒険者の仲間入りを果たした。神様から恩恵を授かった、ハーフエルフの綺麗な女性（ひと）にサポートしてもらうことになった。順風満帆、意気揚々。僕は今日も出会いを求めてダンジョンにもぐる。そして――僕は、怪物（ミノタウロス）と出会ってしまった。
一つの出会いを契機に高みを目指し始める、一人の少年の物語。少し邪道な王道ファンタジーです。※この作品はＡｒｃａｄｉａにも

掲載されています。

1話　ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか

ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか？

数多の階層にわかれる無限の迷宮。凶悪なモンスターの坩堝。
富と名声を求め自分も命知らずの冒険家達に仲間入り。ギルドに名前を登録してからいざ出陣。
手に持つ剣一本でのし上がり、末に到来するのはモンスターに襲われる美少女との出会い。
響き渡る悲鳴、怪物の汚い咆哮、間一髪で飛び込み翻る鋭い剣の音。
モンスターは倒れ、残るのは地面に座り込む可愛い女の子と、クールにたたずむ格好の良い自分。
ほんのりと染まる頬、自分の姿を映す潤んだ綺麗な瞳、芽吹く淡い恋心。

時には酒屋の可愛い店員にその日の冒険を語り、仲を育んでみたり。
時には野蛮な同業者からエルフの少女の身を守ってみたり。
時には伸び悩むアマゾネスの戦士を慰め手を貸し、パーティを組んでみたり。
時には他の女の子と仲睦ましい様を目撃され、嫉妬されてみたり。

時には時には時には……。
子供からちょっと成長して、英雄の冒険譚に憧れる男が考えそうなこと。
可愛い女の子と仲良くしたい。綺麗な異種族の女性と交流したい。
少し邪までいかにも青臭い考えを抱くのは、やっぱり若い雄なりの性なんじゃないだろうか。

ダンジョンに出会いを、訂正、ハーレムを求めるのは間違っているだろうか？

結論。
僕が間違っていた。

「ヴヴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッ！！」

「ほぁあああああああああああああああああああああああああっっ！？」

少し邪までいかにも青臭い考えを抱いて冒険者になった結果、僕は今、死にかけている。
具体的にはミノタウロスに追いかけられている。
Ｌｖ．０の僕の攻撃では一切ダメージを与えられない怪物に、喰い殺されようとしている。
詰んだ。
間違いなく、詰んだ。
浅はかで卑猥な妄想に取りつかれた僕の末路。牛の餌。
僕の痴れ者。

綺麗な女の子達とイチャイチャしたいと考えた僕が馬鹿だった。
一攫千金ならぬ一攫美少女なんて夢のまた夢だった。日々数え切れない死者を出すダンジョンにそれを求めていた時点で、僕は終わっていたんだ。
あぁ戻りたい。いい年して瞳をキラキラさせながらギルドの冒険者登録書にサインした僕自身を殴り飛ばすために、あの時へ戻りたい。
物理的にも僕の命運的にも、それはもはや不可能なんだけど。

「ヴゥムゥンッ！！」

「でえっ！？」

ミノタウロスの蹄。
背後からの一撃は僕の体を捉えることこそしなかったものの、土の地面を砕きちょうど僕の足場も巻き込んだ。
足をとられ、ごろごろとダンジョンの床を転がる。

「フゥー、フゥーッ……！！」

「うわわわわわわわわわっ……！？」

臀部を床に落とした態勢で、みじめに後ずさりした。
可愛い女の子達が見たら一瞬で幻滅しそうな光景。僕には最初からお伽噺に出てくるような英雄になる資格はなかったらしい。
ドンッと背中が壁にぶつかる。行き止まりだ。
何十もの通路を抜けて、辿り着いた広いフロア。正方形の空間の隅に僕は追い込まれた。

（あぁ、死んでしまった……）

カチカチと歯を鳴らし涙をえんえん。
ミノタウロスの荒く臭い鼻息が僕の肌を殴る。
僕よりも一回りも二回りも大きい筋骨隆々の体を見上げ、狂ったように不細工な笑みを浮かべた。
――結局女の子との出会いは訪れなかった。
自分を死に追いやった考えをしょうこりもなく思い浮かべながら、僕の目は蹄を振りかぶるモンスターの姿を映す。
次の瞬間、その化物の胴体に線が走った。

「え？」

「ヴぉ？」

僕とミノタウロスの間抜けな声。
走り抜けた線は胴だけに留まらず、厚い胸部、蹄を振りかぶった上腕、大腿部、下肢、肩口、首、と連続して刻み込まれる。
銀の光が最後だけ見えた。
やがて、僕では傷一つつけられなかったモンスターが、ただの肉塊に成り下がる。

「グブゥ！？　ヴゥ、ヴゥモオオオオオオオオオオオオオオォォォォォ――――――！！？？」

断末魔が響き渡る。
刻まれた線に沿ってミノタウロスの体のパーツがずれ落ちていき、血飛沫、赤黒い液体を噴出して一気に崩れ落ちた。
大量の血のシャワーを全身に浴びて、僕は呆然と時を止める。
股が生温かい。
漏らした……。

「……大丈夫ですか？」

牛の怪物に代わって現れたのは、女神様と見紛うような、少女だった。
透き通った蒼い軽装に包まれた細身の体。鎧から伸びるしなやかな肢体は眩しいくらい美しい。

繊細な体のパーツの中で自己主張する胸のふくらみを抑え込むエンブレム入りの銀の胸当てと、同じ色と紋章の手甲、サーベル。地に向けられた剣の先端からは血が滴っている。
腰まで真っ直ぐ伸びる金髪は、いかなる黄金財宝にも負けない輝きを湛えていて。
女性からしても華奢な体の上に、いたいけな少女のような童顔がちょこんと乗っかっている。
僕を見下ろす瞳の色は、金色。

（……ぁ）

――蒼い装備に身を包んだ、金眼金髪の女剣士。
Ｌｖ．０で駆け出しの冒険者である僕でも、目の前の人物が誰だかわかってしまった。
【ロキ・ファミリア】に所属する第一級冒険者。
ヒューマン、いや異種族間の女性の中でも最強の一角と謳われるＬｖ．４。
【剣姫】アイズ・ヴァレンシュタイン。

「あの……大丈夫、ですか？」

大丈夫じゃない。
全然大丈夫じゃない。
今にも爆発して砕け散ってしまいそうなこの僕の心臓が、大丈夫なわけがない。
ほんのりと染まる頬、相手の姿を映す潤んだ瞳、芽吹く淡い……い

や、盛大な恋心。
妄想は結実、配役は逆転、想いはド頂点。
僕の心はこの時に奪われた。

ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか？

再結論。
僕は、間違えてなんかいなかった。

1話　ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか（後書き）

※この作品は「Ａｒｃａｄｉａ」にも投稿されています。

2話　世界と現実と憧憬

「エイナさぁあああああああああああああああんっっ！」

「ん？」

ダンジョンを運営する『ギルド』の窓口受付嬢、エイナ・チュールは片手に持った小冊子から顔を上げた。
ちょんと尖った耳に澄んだ緑色の瞳。セミロングのブラウンの髪は光沢に溢れている。美しいその容姿はエルフのように完璧に冴え渡っているわけではなく、どこか角が取れた風貌。仕事人然としながら親しみやすいともっぱら評判の妙齢の彼女は、ヒューマンとエルフのハーフである。
多くの冒険者達がダンジョンにもぐっている昼下がり、受付役として暇を持て余していたエイナは、自分の名を呼ぶ声の主をすぐに察する。

（今日も無事だったんだ……）

既に半月前か。
瞳を盛大に輝かせながらあの少年がギルドの手続きを行ったのは。
自分が担当したその少年の年は十四。種族はもとより老若男女も関係なく成れる冒険者であるが、その職業柄、犠牲者は絶えない。まだ年端もいかない子供だ、わざわざ危険地帯へ赴くのに無論いい顔はできなかった。
自分が担当しただけあってその身を案じているエイナは、少年――

ベル・クラネルの安否を確認して頬を緩ませる。
自らも返事をかけようと声の方向に振り向くと、

「エェイィナァさぁあああああああああああああああああああああああああああんッッ！！」

全身がドス黒い赤色に染まりきっている少年の姿が、視界に飛び込んできた。

「うぁあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！？」

「アイズ・ヴァレンシュタインさんの情報を教えてくださあああああああああいっっ！」

「ベル君、キミねぇ、返り血を浴びたならシャワーくらい浴びてきなさいよ……」

「すいません……」

僕はその言葉にうなだれた。

ギルド本部ロビーに設けられた小さな一室。

今、僕達はお互いテーブルを挟んで椅子につき向かい合っている。

身洗いしてさっぱりした僕の前で、エイナさんはこれみよがしに溜息をついた。

「あんな生臭くてぞっとしない格好のまま、ダンジョンから街を突っ切ってここまで来ちゃうなんて、私ちょっとキミの神経疑っちゃうなぁ」

「そ、そんなぁ」

見目麗しいエイナさんにそんなことを言われると冗談抜きで心が抉られる。眦に涙が浮かび上がってしまいそうだった。

エイナさんは苦笑して僕の鼻をちょんと指で押さえると、「今度は気をつけてね？」と微笑んでくれた。

ぶんぶんぶんっ、と僕は大げさに首を縦に振る。

「それで……アイズ・ヴァレンシュタイン氏、の情報だったっけ？どうしてまた？」

「えっと、その……」

赤くなりながらことの顛末を語った。
普段通っている2階層から一気に5階層まで下りてみたこと。
足を踏み入れた瞬間いきなりミノタウロスに遭遇して追いかけ回されたこと。
追い詰められたところを、【剣姫】アイズ・ヴァレンシュタインさんに救われたこと。
動揺しながらなんとかお礼を言おうとしたけど、あまりに情けない姿――股付近の地面には水たまりができていた――に発狂して、全速力で逃げてしまってきたこと。
耳を傾けてくれていたエイナさんは、僕の話を聞くうちに表情を険しくしていく。

「――もぉ、どうしてキミは私の言いつけを守らないの！　ただでさえソロでダンジョンもぐってるんだから、不用意に下層へ行っちゃあダメ！　冒険なんかしちゃいけないっていつも口を酸っぱくして言ってるでしょう!?」

「は、はいぃ……！」

“冒険者は冒険しちゃいけない”。
エイナさんの口癖だ。文字だけ見ると矛盾しているように見えるけど、つまりは「常に保険をかけて安全を第一に」という意味だ。
特に僕みたいな駆け出しのヤツは肝に銘じておかなければいけないのだとか。冒険者に成り立ての時が一番命を落とすケースが高いら

しい。
５階層でＬｖ．１にカテゴライズされるミノタウロスと遭遇するなんて誰にも予想できない。あのモンスターは少なくとも１５階層以下の迷宮に出現するというのが一般見解だ。エイナさんに言わせれば「ダンジョンは何が起こるかわからない」っていうことなんだろう。
……本当に、あの人がいなかったら今頃死んでいた。思い出すだけで背筋が震え、また尿意を催してくる。
僕はエイナさんに言われたことを二度と忘れないと心に誓った。

「はぁ……キミは何だかダンジョンに過大な夢を見ているみたいだけど、今日だってそれが原因だったりするんじゃない？」

「あ、あははははっ……」

正解。
異性との出会いを求めてちょっと冒険をしてみたくなりました……なんて馬鹿正直に言ったら、きっと叩かれちゃうな。
もともと、僕が冒険者になろうとしたのはまだ見ぬ美女美少女と仲良くなりたいという不純な動機だった。
ギルドの手続きの際に僕の胡散臭い情熱を目の当たりにしたエイナさんは、こちらの胸中は把握していないにしても、半ば確信しながら疑いの眼差しを向けてくる。
いやでも、今日からは違う。僕はそんな不純な動機をうち捨てて、純真一途な理由でダンジョンにもぐるんだ。
あの人に、出会ったから。

「あの、それで、ヴァレンシュタインさんのことを……」

「う～ん……ギルドとしては冒険者の情報を漏らすのはご法度なんだけど……」

教えられるのは公然となっていることくらいだよ？　と前置きをしてエイナさんは語り始めた。何だかんだでこの人は親切だ。僕が駆け出しだからって理由もあるのかもしれないけど。

本名アイズ・ヴァレンシュタイン。【ロキ・ファミリア】の中核を担う女剣士。

剣の腕前は間違いなく冒険者の中でもトップクラス。

単独でＬｖ．４相当のモンスターの群れを殲滅したこともあり、冒険者達の間でついた渾名が【剣姫】をもじった「戦姫」。

神様達の間でもその名前を知れ渡っており、『アイズたんテラ無双ｗｗｗ』と称賛されているらしい。

下心を持って近寄ってくる異性は軒並み玉砕、あるいは粉砕。ついこの間とうとう千人斬りを達成……。

「え～と、あと他には何があったかなぁ……あの容姿であの強さだから、話題は尽きないんだよね」

「あ、あの、冒険者としてじゃなくて……趣味とか好物とか、後は今言った最後みたいな情報を……」

僕が顔を熱くしながらおずおず言うと、エイナさんは振り向いて目をぱちくりと瞬かせた。

「なぁに、ベル君も彼女のことを好きになっちゃったの？」

「いや、その……ぇぇ、はい……」

「あはは、まぁ、しょうがないのかな。女の私でも彼女には思わず溜息をついちゃうし」

苦笑してエイナさんは口元に紅茶を運ぶ。動作一つ、どれをとっても雅やかだ。

ヴァレンシュタインさんのことを誉める彼女も、冒険者達の中では普通に人気が高い。狙っている人は数知れないともっぱらの噂。僕もエイナさんに担当してもらって浮かれていた口だ。

ハーフといっても流麗なエルフの容貌は色濃く反映しているし、それでいてこんな風に意外と人懐っこく親しみやすいものだから、印象と実態の懸隔にやられる人が多いみたいだった。

エイナさんはその後ちょっと考え込んで、ヴァレンシュタインさんと今付き合っている人というのは聞いたことがないと教えてくれた。

僕は思わずガッツポーズをとる。

「趣味とかそこまで踏み入った話は流石に聞いたことがない……って、ダメダメ、これ職務にてんで関係なし！　恋愛相談は受け付けてないって！」

「そ、そこをなんとか！」

「だーめ！　ほら、もう用がないんなら帰った帰った！」

立ち上がり、僕を追い出すように部屋の退出を促すエイナさん。
惰弱な抵抗も徒労に終わり、ギルド本部のロビー前に二人して出る。

「ああ、エイナさんのいけず……」

「あのねぇ……キミは冒険者になったんだから、もっと気にしなきゃいけないことが沢山あるんだよ？」

「うっ……」

それは、わかってる。
庇護してくれる存在がない今の僕は、明日を生きるためにこの体を使ってダンジョンにもぐり続けるしかない。お金の工面などにも意識を割いておかないと大変なことになる。
養わなければいけない人……いや、神様もいるのだ。ヴァレンシュタインさんのことを熱心に考え込む余裕は実際僕にはないのだろう。

「キミはもうロキ以外の神から恩恵を受けたんでしょう？　【ロキ・ファミリア】で幹部も務めるヴァレンシュタイン氏にお近付きになるのは、私は難しいと思う」

「……はい」

「……想いを諦めろなんて言いたくないけど、現実だけはしっかり見据えておかなきゃ。じゃないと、ベル君のためにもならない」

少なくとも今は冒険者として頑張れ。言外には、そんなところだろう。

【ファミリア】の部分を引き合いに出された時は、遠回しに死刑宣告された気分だったけど。

若干へこんだ僕に困った顔をしながら、エイナさんはギルド職員としての事務的な対応をした。

「換金はしていくの？」

「……そうです、ね。一応、ミノタウロスに遭遇するまではモンスターは倒していたんで」

「じゃあ、換金所まで行こう。私も付いてくから」

気を使わせてしまっているのが結構心苦しかった。ただでさえ、まだ右も左もわからない今の僕に良くしてもらっているというのに。

これではいつまで経ってもエイナさんには頭が上がりそうにない。

それから僕達はギルド内にある換金所に向かい、本日の収穫を受け取った。

ゴブリンやコボルトを中心に倒して手に入れた魔石の欠片。全て合わせて１２００ヴァリスほど。いつもより収入が低いけど、これはヴァレンシュタインさんから逃げ出したために、普段より短い時間しかダンジョンへもぐっていなかったからだ。

うーん、武器の整備や神様と僕の分の食事を考えると、アイテムの補充はできないかな……。

「……ベル君」

「あっ、はい。何ですか？」

帰り際、出口まで見送りにきたエイナさんに引きとめられた。
彼女は逡巡する素振りを見せながら、思いきったように口を開く。

「あのね、女性はやっぱり強くて頼りがいのある男の人に魅力を感じるから……えっと、めげずに頑張れっていれば、その、ね？」

「……」

「……ヴァレンシュタイン氏も、強くなったベル君に振り向いてくれるかもよ？」

動きを止めて、その言葉をよく咀嚼して、上目がちに僕の方を窺ってくるエイナさんを見つめて。
ギルド職員ではなく、一人の知人として自分を励ましてくれていることに気付いた僕は、みるみるうちに笑みを咲かせた。
勢いよくその場から駆け出した後、すぐに振り返り、エイナさんに向かって叫ぶ。

「エイナさん、大好きー！！」

「……えうっ！？」

「ありがとぉー！」

顔を真っ赤にさせたエイナさんを確認して、僕は笑いながら街の雑踏に走っていった。

迷宮都市オラリオ。

ダンジョンと通称される地下迷宮を保有する、いや迷宮の上に築きあげられた巨大都市。

都市、ひいてはダンジョンを管理する「ギルド」を中核にして栄えるこの都市は、ヒューマンも含めあらゆる種族の亜人が生活を営んでいる。

学に乏しい僕がオラリオについて説明できるのはこのくらい。住みついといてあれだけど、本当に大雑把な認識程度だ。

ダンジョンにもぐりそこから得た収入で生計を立てる人達を一概に冒険家と言って、今の僕の職業でもある。

僕はオラリオから少し離れた田舎育ち。世間知らずと言ってもいい僕は、一年前に育ての親の祖父が亡くなり保護者を失った後、残った財産を持って村を飛び出した。

言わずもがなダンジョンでの出会いを渇望していたからだ。当時は

盲目的だったけど、命を危険にさらされた今になると、流石に馬鹿な理由で来たものだと顧みる思考が生まれてくる。
こんなふざけた考えで冒険者になったのは僕くらいかもしれない。
まぁ、富とか名声とか、そういったものを求めている人達と中身は変わらないような気はちょっとするんだけど。
ただ「生きる」って難しい。それが今日死にかけてよくわかった。
ダンジョンだって何だって、そう簡単に思うようにはいかないってことだ。
当初とすげ替わった目的、ヴァレンシュタインさんのことも含めて。

様々な人種で溢れる大通りを縫うように駆けていく。
ドワーフ、ノーム、獣人、ホビット……市民のたたずまいをした人達もいれば物騒な装備で固められた人達もいる。
ヒューマンの田舎で育った僕にとってこの街は全てが新鮮で色鮮やかだ。この人ごみの波だけでも、いくら見続けようが飽きることはなさそうだった。やかましいと思えるほどの喧騒が妙に心を浮き立たせてくる。
すれ違った怜悧な面持ちのエルフに目を奪われながらも目的地を目指す。メインストリートを出ていかにもというような細い裏道を通り、いくども角を曲がる。
背中に届いていたざわめきが途絶えた頃、僕は袋小路に辿り着いた。

「……」

確認する必要はなかったけど、一応首を振ってから人影がないことを認め、しゃがみこむ。
僕の足元には下水道への入口……黒ずんだ円形の鉄門がある。

いつもの要領でその扉を地面から引き剥がし、するりと穴の中に侵入する。蓋を戻すのも忘れない。

（うっ……相変わらず）

梯子を下りて、存外に広いトンネル状の下水道に降り立った瞬間、えも言えない異臭が襲ってきた。

僕はひーひー言いながら鼻をつまんでトンネルの奥に進む。

薄暗く背の高い隧道を歩き続けてしばらく、お粗末な松明がたてかけられた明るい一角が現れた。赤銅色の壁面に無理矢理はめ込んだような木造りの扉に手をかけ、一気に開く。

「神様、帰ってきましたー！　ただいまー！」

声を張り上げて足を踏み入れると、広がるのは下水道にはまず似合わない生活臭のする小部屋だった。人が暮らしていく分には、まぁそれなりの広さ。

僕が呼びかけた人は部屋に入ってすぐにある、紫色のソファーの上に寝転がっていた。仰向けの姿勢で開いた本を見上げていた彼女は、ばっと起きて立ち上がる。

外見だけ見れば幼女……と少女の境界線を揺れ動いているような感じ。僕より身長は低くて、他人には「年の近い妹」で十分に通用する。

幼い顔に笑みを浮かべる女の子は、トトトトと音をたてて僕の目の前までやって来た。

「やぁやぁお帰りー。今日はいつもより早かったね？」

「ちょっとダンジョンで死にかけちゃって……」

「おいおい、大丈夫かい？　君に死なれてしまったらボクはかなりショックだよ。柄にもなく悲しんでしまうかもしれない」

小さい両手が忙しなくパタパタと僕の体を触れて、安否を確かめてくる。

その気遣いと告げられた言葉に僕は嬉しくなり、頬を染めて照れてしまった。

「大丈夫です。神様を路頭に迷いこませることはしませんから」

「あっ、言ったなー？　なら大船に乗ったつもりでいるから、覚悟しておいてくれよ？」

「なんか変な言い方ですね……」

二人して笑みを漏らし、部屋の中に進んだ。

部屋の中は正方形と長方形をくっつけた、ちょうどＰの字のような形。

正方形の部分にあたる出入り口前の二つのソファーに、僕と彼女はそれぞれ座る。

正対する女の子は、紛れもなく美少女だ。ギザギザとした漆黒の髪が耳を隠すほど伸びていて、更に横からはツインテールが作られ腰

まで届いている。見れば見るほど変わった髪型だった。少なくとも男の僕はそう思う。

将来は絶世の麗人を約束されているようなものだけど、彼女が今の姿から成長することはありえない。

神様、と僕が呼んだように、この人は「神」だ。

ヒューマンや亜人、迷宮に出現するモンスター達とも違う、一つ次元が違った僕達の上位存在。

僕達のように年はとらないし姿も変わらない。人知を越えてしまっていて、僕の憧れる英雄達よりスゴイ御方。

「それじゃあ、今日の君の稼ぎはあまり見込めないのかな？」

「いつもよりは少ないですね。神様の方は？」

「ふっふーんっ、これを見るんだ！　デデン！」

「そ、それは！？」

「露店の売上に貢献したということで、大量のジャガ丸くんを頂戴したんだ！　夕飯はパーティだ！　ふふっ、ベル君、今日は君を寝かせないぜ？」

「神様すごい！」

そんなスゴイ御方は、普通にヒューマンのお店でアルバイトをしてしまっているわけだけど。

勿論、お金を稼いで明日を生き抜くためだ。

――遠い昔、“神様達”は僕達が暮らすこの世界……彼等からすると「下界」へとあたるこの地に降り立った。
お伽噺とか一杯あるけど、目の前の神様の言葉だと要は「天界は退屈で仕方がなかった」らしい。
僕達が一般的に思い浮かべるような楽園――「天界」にて無限の時をダラダラと過ごす毎日に飽き飽きしてしまった沢山の神様達は、様々な無駄を拵えながら文化や営みを育む子供達（下界に住む僕達のことだ）に娯楽を見出したという。

『子供達と同じ地位かつ同じ能力で、彼等の視点に立つ』。

完璧の存在であるが故に不完全、無駄だらけの僕等とこの世界に興味を持ったのだ。
結果的に下界は神様達を大いに興奮させた。全く思うようにいかない事象、食事や趣味や芸術等で満たされる欲求、親交という名の不特定多数の繋がり。
笑えた、らしい。
神様達にはまるでゲームでもやっているような感覚らしいけれど、予断を許さないこの一時が楽しくて楽しくて仕方がないのだと。
そうやって、神様達はほどなくしてこの下界に住みついた。多くの神様達が永住することを決めたらしい。
先住者である僕達のご先祖様達はそれを拒める筈もなく、いやむしろ恩恵を授けてくれる存在として神様達を重宝したそうだ。言い方はあれだけど、利用して利用される関係？　現代の仕組みはその関係が如実に現れている。
子供達の中に紛れて、僕達が互いにそうするように日々を助け合い、生きていく。
不自由とは無縁の生活を捨てて、神様達は不自由なこの世界にのめ

り込んでいったのだ。

「いやぁ、それにしても……マスコットキャラとして道行く人はみんな可愛がってくれるけど、ボクの【ファミリア】に加わりたいという人は相も変わらず皆無だよ。全く、ボクの名のヘスティアが無名だからって、みんな現金だよねえ」

「うーん、どの【ファミリア】も授かる恩恵は一緒なんですけどね……」

神様の名前は「ヘスティア」。僕達と同じように神様達にも呼称が決まっているらしい。

【神の眷族（ファミリア）】とはつまり、その神様による派閥。【ロキ・ファミリア】だったら【神ロキの眷族】という意味で、【ヘスティア・ファミリア】だったら【神ヘスティアの眷族】。ロキ派とかヘスティア派とか、～派と呼ぶ人達もいる。

【ファミリア】に加わるということは、僕の感覚からすれば、神様の家族になるということと同じだと思う。

神様達も下界で僕達と同じように生きていくと決めた以上、衣食住は勿論お金も必要になってくる（神様達の間で、下界では神の力を使ってはいけないというルールが取りきめられたらしい）。

働くことが好きっていう神様もいるらしいけど、やっぱり楽しいことだけを享受したいっていう方達は断然多い。そこで、そんな神様達は自分達が好き勝手なことをするために、僕達下界の者の力を借りることにした。

【ファミリア】に加わることで下界の者は神の恩恵を受ける、神様

は色々お願いしたりお金を稼いできてもらったりする。
つまり、身も蓋もない言い方だけど、神様は【ファミリア】の構成員に養ってもらうということだ。
けれど僕達下界の者にとっても、神の恩恵のご利益は無視できないものがあって、一度授かってしまえば、どんな人でも下等のモンスターなら撃退できるようになってしまう。
「ギブアンドテイク」だと、神様はそんなことを言っていた。

「はぁ、ベル君一人に負担を強いるのはボクとしては心苦しいんだけど……」

「僕は別に……それに神様だって働いてくれているじゃないですか」

多くの構成員を抱える大きな【ファミリア】があれば、僕達のようないわゆる“矮小な”【ファミリア】もある。
こうなってくると神様も四の五の言ってられなくて……このヘスティア様のように働かなければいけなくなる。大好物の娯楽を噛み締める暇もなく、単純に生きるために。
その気になれば何だってできるのに、あくまで下界の枠組みの中に留まろうとする神様達を、僕は思わず笑みとともに親近感を抱いてしまう。

いやまぁ、中には【ファミリア】を操って意のままの王国を作っちゃう――というより【ファミリア】自体を王国にする――神様もいるんだけど。……王国経営ゲーム、なのだそうだ。
しかしそれも、人の手で運営されて人の手で築き上げられていくものだから、神様達のルールには反していないらしい。神様が下界を好きなように弄くってるなんて陰口叩く人がいるけど……それでも

それは、王族と名乗る一部の下界の者達が望んでいたことでもある。
神様は人の織りなす出来事と経過をニヤニヤと見守っているけど、結局、彼等の力は人の促進剤としての域を出ないのだ。

「……ごめんねぇ、こんなヘッポコな神と契約させちゃって」

「か、神様ぁ……」

しゅんと小さくなる神様を見て、僕も情けない声を出してしまう。
田舎から出て冒険者になろうとしていた僕は、ちょうど【ファミリア】の構成員を探しに街を回っていたヘスティア様と出会った。
有名な【ファミリア】は人員も豊富で基本的に飽和しているところが多い。中小規模の【ファミリア】だって頼りなさそうな田舎臭さ丸出しの輩より、多少なり戦闘や専門職に心得がある人材を優先させる。ことごとく門前払いを受けていた僕は、神様の勧誘に一も二もなく飛びついた。
どうやら神様はそれに負い目を感じているようだった。世間知らずの子羊ちゃんを見事に引っかけちゃったぜ、みたいな。
ヘスティア様は比較的最近に天界から降りてきて、僕に会うまでは友人の神様の【ファミリア】にお世話になっていたと、そう教えてくれた。
例にも漏れず、家でゴロゴロ転がりながら大好きな下界産の本を読み耽るという自堕落な生活を送っていたところ、勤勉なご友人の逆鱗に触れ追い出されたそうな。下水道に設けられたこの部屋は、そのご友人が加えてくださった最後の手心らしい。

でも実際、神様達の恩恵には差がない。これは事実。
神の恩恵を授かる誰もが、最初は同じ力を手に入れることになる。

そこから発展していくはその人次第。
結局【ファミリア】としての名は、どんなお店もどんな国も同じように、所属する人の能力に左右されるのだ。
神様が悪いだなんてことは決してない。

「大丈夫ですよ神様！　僕達の【ファミリア】はまだ始まったばかり、言っちゃえば発展途上ってやつです！　最初のうちはそりゃ苦しいかもしれないですけど、ここを乗り切ればずっと生活は楽になる筈ですっ、余裕もできれば加入してくれる人もきっと出てきますって！」

「ベル君、君ってやつは……！」

がばっ！　とソファーから立って力説。神様は僕のことを感動した眼差しで見上げてくる。
実はこれ全部、さっきまで聞かされていたエイナさんの弁だ。心が痛い。

でも、何だっていいから神様には喜んでいてもらいたい。
ハーレム云々なんてアレなこと考えていた僕だけど、神様はこの街に来て潰されそうになっていた僕の手を、優しく引っ張ってくれた大切な人だから。
この人を助けてあげたい。それは彼女と出会ってから僕の心に深く刻み込まれた、一番最初の自分への約束だ。

「うふふっ、君みたいな子に会えてボクは幸せ者だよ。それじゃあ、ボク達の未来のために君の【ステイタス】を更新しようか！」

「はい！」

神様も足を振ってソファーから立ち上がった。少女の体にはありえない双丘がたゆんっと揺れる。
僕はぴくりと笑みを引きつらせたまま、そっと目を逸らした。情けない意味で、僕にとって目に毒だ。
他の神様達からは『ロリ巨乳ｗｗｗ』と言われ馬鹿にされているらしい。ロリってなんだ。

「はい、じゃあいつものように服を脱いで寝っ転がって～」

「わかりました」

部屋の奥にあるベッドへ向かい、冒険者用のライトアーマーを外してインナーも脱ぐ。
上半身を包むものが一切無くなったところで、ちらと後ろを振り返った。
壁に取りつけられた姿見。そこに映るのは、老人のような白髪と色白の肌を持つ僕の後ろ姿で、特筆すべきは背中にびっしりと刻み込まれた黒の文字群だ。
これ全部神様が僕に刻み込んだもので、これこそが「神の恩恵」。

「はいはい、寝た寝た」

神様に促されるままベッドに体を横たえる。
うつ伏せでいると、ぴょんっと神様が僕に飛び乗った。僕のお尻のあたりに神様は座り込む。

「そういえば死にかけたって言ってたけど、一体何があったんだい？」

「ちょっと長くなるんですけど……」

口を動かしている間、神様は僕の背中を撫でた。ぞくり、とする。
一回、二回、と何度も同じ箇所を往復して肌を労わるように。
やがてチャリという金属の音が鳴る。神様が針を取り出したのだ。
わかっていても、訪れるだろう痛みにやはり緊張してしまう。

「出会いを求めて下の階層って……君も大概にダンジョンに夢想を抱いてるよねえ。あんな物騒な場所に、君が思っているような真っ白サラサラの処女みたいな女、いるわけないじゃないか」

「しょ、処女……！　い、いえでもっ、別に決まりきってるっていうわけでもないでしょう！　エルフなんて自分が認めた人じゃないと手も触れないなんて聞きますよ！」

「怒鳴るな怒鳴るな、痛むよ？　まぁエルフみたいな種族もいれば、アマゾネスみたいに強い子孫を残すためだけに屈強な男に腰を振る種族もいるんだ、君の過度な期待は身を滅ぼすだけだとボクは思うな」

「……ううっ」

さらりと重いことを告げられ枕に頭を埋没させる僕を尻目に、神様は背中に針を刺した。細い痛みに思わず顔を歪める。

僕の背中に彫られているのが【ステイタス】。神の恩恵。

神様達が扱う【神聖文字（ヒエログリフ）】を刻むことで対象の能力を引き上げる、神様達のみに許された力。

【経験値】というものがある。モンスターを倒したこと等によって得られる、まぁ文字通り経験した事象だ。当然不可視で、下界の者達には手にとって利用できる代物じゃない。言わば自己の歩んできた歴史なのだから。

神様達はその歴史に埋もれている「モンスターを倒した」という軌跡を引き抜いて、成長の糧へと変える。倒した敵の質と量の値、【経験値】。神様にはそれが見えて、更に料理することができるのだ。敵を倒したという偉業を称えて祝福する、っていう古代の仕来たりに似ているのかもしれない。

背中の文字群を塗り替え付け足し、レベルアップ、能力向上。この力によって神様達は下界の者達に持ち上げられる。

「それに、アイズ・ヴァレンシュタイン？　だっけ。そんな美しくてべらぼうに強いんだったら他の男どもがほっとかないよ。その女だって、お気に入りの男の一人や二人囲っているに決まっているさ」

「そ、そんなぁ……」

「ふんっ。いいかい、ベル君？　そんな一時の気の迷いなんて捨てて、もっと身の周りを注意してよく確かめてみるんだ。君を優しく包み込んでくれる、包容力に富んだ素晴らしい相手が１００％確実

にいる筈だよ」

考えまいとしていたことを指摘され、涙目になる。神様はそれからヴァレンシュタインさんのことを罵り続けた。

何だかやけに機嫌が悪い。僕は何か地雷を踏んだのか。

神様はああ言ってるけど、今のところ僕の周りにいる異性なんてエイナさんと神様しかいない。エイナさんにはきっと相手にしてもらえないだろうし、神様に末長いお付き合いを……なんて流石に口が裂けても言えないからなぁ。そんな大それたことできないって。

神様、現実って厳しいよ。エイナさんにも言われたんだ。

「ま、ロキの【ファミリア】に入ってる時点で、ヴァレン何某とかいう女とは婚約できっこないんだけどね」

「……」

とどめを刺された。

大抵【ファミリア】に加入している者は、【ファミリア】内かあるいは無所属（フリー）の異性と結婚する。

別の【ファミリア】の相手と結婚して子供ができると、じゃあその子供はどちらの所属になるの？　という話になってしまうからだ。

これは一例でそれだけが全てじゃないけど、とにかく別の【ファミリア】と深い繋がりを持つということは弊害が生まれやすい。規律のためにも神様達は【ファミリア】の管理だけは厳しかった。

また、相手が仲の悪い神様同士だったらその【ファミリア】はそれだけで敵対関係に当たる。構成員は不用意に【ファミリア】を危険に晒すわけにはいかないのだ。

エイナさんにも忠告されたけど、【ヘスティア・ファミリア】の一員である僕が【ロキ・ファミリア】所属のヴァレンシュタインさんと、健全なお付き合いをすることは中々に困難なのである。

「はいっ、終わり！　まぁそんな女のことなんて忘れて、すぐ近くに転がってそうな出会いってやつを探してみなよ」

「……酷いよ神様」

ええい、決して諦めないぞ。少なくともまだ何もやってないんだから挫折はしない。

僕とあの人との関係はまだ始まってすらないんだからっ。

僕が覚悟を新たにしながら着替を行っている最中、神様は用紙に更新した【ステイタス】を書き綴っていた。僕は【ヒエログリフ】なんて読めないから、神様が下界で用いられている共通語（コイネー）に書き換えて【ステイタス】の詳細を教えてくれる。

そもそも背中に書き込まれた文字なんて見えにくい。

「ほら、君の新しい【ステイタス】」

どうも、とその差し出された用紙を手に取る。

僕はそれに視線を落とした。

ベル・クラネル

Ｌｖ．０
力：Ｉ　８２（→５　耐久：Ｉ　１９　器用：Ｈ　１６（→９　敏捷：Ｈ　７２（→２４　魔力：Ｉ　０
《魔法》
【】
《スキル》
【
短刀：Ｉ　７０（→７

これが僕の背中に記されている【ステイタス】の概要だ。
基本アビリティ――『力』『耐久』『器用』『敏捷』『魔力』の諸項目――は五つで、更にＩからＳの十段階で能力の高低が示される。
Ｉの隣にある数字は熟練度。これが９９に達して超えればＩだったら次のＨに能力が強化される仕組み。その分野の能力を酷使すればするほど熟練度は上がるけど、Ｓに近付くにつれ伸びは悪くなっていくらしい。
Ｌｖ．は一番重要。これが一つ上がるだけで基本アビリティ補正以上の強化が執行される。“進化”と言っても決して大仰ではないのだそうだ。神様はこれを【ランクアップ】と呼んでいた。【ランクアップ】すると基本アビリティの値は全てがＩにリセットされる。あとは使った武器の熟練度もアビリティの一環として表示される。
僕は短刀使いなのだ。

……うーん？　今回のダンジョン捜索で上がったのが「力」と「器用」と「敏捷」……って「敏捷」の上がり方すごっ！？
ミノタウロスに散々追いかけ回されたからかな……？

この熟練度のシステムはその分野の能力を使用しなければ一切上がらない。例えば「耐久」を上げるには敵から攻撃を受けるしかないのだけれど、僕は逃げてばっかりだから一向に上がらないという様相を見せている。
盾や武器など装備品で防御することでも上昇するらしいけど、どうしても逃げに走ってしまう。痛いのは、ちょっと。

「……神様。僕、いつになったら魔法を使えるようになるかな？」

「それはボクにもわからないなぁ。主に知識が反映されるみたいだけど……ベル君、本とか読まないでしょ？」

「はい……」

【ステイタス】を神様に刻まれる中で誰もが関心を寄せるのが、『魔法』を扱えるようになるということだろう。
神様達が下界に来る前は、魔法は特定の種族の専売特許に過ぎなかった。けれど、神様達の恩恵はいかなる者でも魔法を発現させることを可能としたのだ。
最低一つ、最高三つと、魔法が発現する数は決まっている。一つ使用できるのが一般的。
魔法を二種類扱えるだけでその人は仲間内で引っ張りだこになると聞いたことがある。
それだけ魔法の存在は肝要なのだ。遥か昔、一人のエルフが風を操って百人のヒューマンを薙ぎ払ったという伝説の通り、言うなれば切り札、形勢を逆転させるだけの必殺になりうる。
まぁ、普通に炎の海を出す相手に剣を持って挑んでも勝てる気がしないから、つまりそういうことなんだろう。

【ステイタス】を確認しても僕の魔法スロットは一つしかないから、当然使える魔法は一種類だけなんだけど……ん？

「神様、書き忘れですか？　スキルのスロットが中途半端に終わってますけど？」

「……ん、ああ、ちょっと手元が狂ってね。いつも通り空欄だから、安心して」

「ですよねー……」

少し期待してしまった。

スキルというのは【ステイタス】とは別に、一定条件の効果や作用を肉体にもたらす恩恵のことだ。

【ステイタス】が器そのものを強化するものだったとしたら、スキルは器の中で特殊な化学反応を起こさせる。

魔法のように目に見えた派手さはないが、発現して損なものは極めて少ないとのこと。

……ゼロではないようだ。

「じゃあ、神様。夕飯の支度しましょっか？　ジャガ丸くんパーティでも、流石にそれだけじゃあ物足りないですよね？」

「うん、ベル君に任せるよ」

「はーい」

にこっと笑う神様に背を向けてキッチンへ向かう。
簡単な料理しかできないけど、うん、エイナさんに言われた通り、
今日からなるべく節約しながら考えるようにして……。

ヘスティアは戦場に向かう気概でキッチンへ入るベルを見送って、
静かに溜息をついた。
先程指摘された【ステイタス】の用紙を手に取り、少年の背と見比
べる。

（子供達は本当に“変わりやすい”んだな……不変のボク達とは全
然違う）

些細なことでもすぐさま影響が肉体に、精神に伝播する。
欲望でも文化でもなく、“変質”こそこの下界の住人である彼等の
特徴なのかもしれない。

（……あー、やだやだ。他人の手で、彼が変わってしまったという
事実が堪らなく嫌だ。認めたくないっ）

グシャグシャグシャと両手で思いっきりその漆黒の髪をかき乱す。
ちくしょー、とヘスティアは頭を抱え唸った後、もう一度ベルの背中を見た。
正確には、その華奢な背に刻まれた【ステイタス】――その中のスキル欄を、だ。

ベル・クラネル
Ｌｖ．０
力：Ｉ　８２（→５　耐久：Ｉ　１９　器用：Ｈ　１６（→９　敏捷：Ｈ　７２（→２４　魔力：Ｉ　０
《魔法》
【】
《スキル》
【憧憬一途】
・早熟する。
・懸想が続く限り効果持続。
・懸想の丈により効果向上。

短刀：Ｉ　７０（→７

有望そうな【経験値】を取り出し、自らの手で【ステイタス】にそのスキルを刻んでしまったことに、今更ヘスティアは後悔を覚えていた。

3話　だから僕は走る

「……ん」

【ヘスティア・ファミリア】の本拠、下水道の隠し部屋。
街の地中に作られているために朝日も鳥の鳴き声も届かないこの場所で、けれど僕はしっかり早朝を認め、起床を定めている定時に目を覚ました。
生まれ故郷の田舎で、朝早くから畑仕事に駆り出される習慣が染みつき、お腹のあたりに体内時計が開発されてしまっているのだ。

（……五時、ぴったし）

一応ソファーの上から頭を巡らして、壁に備え付けてある時計を確認する。
魔石技術により発明された魔石灯が、天井でぼんやり燐光のごとく輝いていて、地下でありながらも部屋は完璧な暗闇に包まれていない。周囲を見渡せる程度には肉眼がしっかり機能する。
この『魔石灯』を作り出したヒューマンを、神様は「本当に手先が器用」とこぼしていた。
あの神様達の舌を巻かせるほどなのだから、発明された当時「世紀の大発明」とまで言われた魔石製品のすごさがよくわかる。

昨日、神様とささやかなパーティを開いた後すぐに就寝した僕は、いつも通りベッドを神様に明け渡して、ソファーを寝台として扱った。結構狭いけどもう慣れたものだ。

瞬きを数度繰り返し、顔を洗うために体を起こそうとして……はたと気付く。
シーツ以外に丸いものが僕の上にもたれるようにして乗っかっている。全然軽い。息苦しくないから全く気にもならなかった。
疑問符を浮かべてそれに手をかけると……一発でわかった。神様だ。
僕の胸に顔を埋めるようにして眠りこけている。ぎょっとしたけど、すぐに苦笑した。

（寝ぼけちゃった……のかな？）

珍しいこともあるものだと思って、さぁ困ったと考える。
神様を起こさずソファーを抜け出すのには自信があるけど、なんだ、すごく温かくて抱き心地のいいこの存在を離したくない。
最高級な抱き枕を越えた、まさに神作級の抱き枕。伝説級の武器やアイテムを確保しているどんな【ファミリア】にも、これ以上のアイテムなんてないって断言できる。神様やっぱりスゴイ。
畏れ多くもつい手を回して柔く抱く。ほわん、とした感触。あぁ不味い、本当に抜け出せなくなってしまう。
いい香りも漂わせてくる神様にすこぶる力の抜けた顔をしていると、「んっ……」と小さく身じろぎして、赤ん坊のように顔を僕の胸板に擦りつけてきた。
あぁもうめっちゃ可愛い……！
などと、心中で悶えまくっていると――「むぎゅ」と神様の双丘が鳴って、僕の上で圧倒的質量のそれが潰れた。
そこからの僕の行動は迅速だった。神アイテムから劇薬アイテムに変貌した神様を直ちに除去、場所を入れ替えるように彼女を寝かせ僕はソファーから脱出した。

（神様が僕を殺しに来るなんて……！）

初めて神様に戦慄を抱いた瞬間だった。あと一秒遅かったら僕の呼吸は止まっていたかもしれない。

神様にシーツをかけ自らはいそいそと身支度をする。何だか居たたまれなくなった。冷静になって考えてみると、僕の馬鹿野郎、神様相手になんちゅーことを。

ささーっと速やかにドアを越えて、僕は音もなく部屋を出ていった。

「……ベル君のあほぉ。むゅぅ」

「あ～、朝ご飯食べてないや……」

昼間とは趣が異なったオラリオのメインストリートを一人で歩く。
東の空は既に明るい。早朝といっても既にまばらと人影があって、露店の準備をしているホビットもいれば、僕と同じ冒険者のドワーフ達が徒党を組んで何か話し合っている。これからダンジョンへ向かうんだろう。
僕もダンジョンへもぐる装備をして神様から逃げ出し……部屋から出てきたんだけど、参った、お腹の中に何も入れてない。ひもじい。この空腹感をどうにかしないと探索に集中できなそうだ。昨日の今日で節約を無視したくないんだけど、しょうがない、何かを買って……

「……！？」

ばっ、と振り返った。立ち止まって自分の背後を見る。
……嫌な感じ。殺気とか僅かな気配とか、そんな大それたものを察知できるほど一端の冒険者じゃないけど……“視られてた”？
肌を犯されるような感覚。まるで物を値踏みするかのような、普通の人にはとても真似できない、無遠慮に過ぎる視線。
一人でカフェテラスの準備を行う店員、路地の角でたむろする獣人の二人組、商店の二階の窓から大通りを俯瞰する女の子……広がる景色の中、動くものに何度も視点を移ろわせる。
半ば動転しながらぐるりと辺りを見渡した。
本格的に目覚める前の朝の商店街、不審な影はない。通りのど真ん中で棒立ちになる僕に奇異の目が集まるけど、気にする余裕がなかった。
僕の勘違い……？
やけに耳にへばりつく心臓の音を聞きながら、ちっとも納得できな

い顔を浮かべてしまった。

「あの……」

「！」

後ろからの声にすぐさま反転し身構える。周りから見れば大げさ過ぎだと思われただろう。

呼びかけてきたのは僕と同じ、ヒューマンの女の子だった。

服装は膝下まで丈のある若葉色のワンピースに、その上から長目のサロンエプロン。

鈍色の髪を後頭部でお団子にまとめ、そこからぴょんと一本の尻尾が垂れている。ポニーテールの亜種みたい。

円らな瞳は純真そうで可愛らしい。ミルクのように白く滑らかな柔肌の顔は、僕の警戒じみた挙動に驚きを示していた。

明らかに無害な一般市民……。な、なんて真似を……！

「ご、ごめんなさいっ！　ちょっとびっくりしちゃって……！」

「い、いえ、こちらこそ驚かせてしまって……」

慌てて謝るとあっちも頭を下げてきた。申し訳なさ過ぎる。

年は僕より少し上くらいだろうか。一つ二つくらしか離れてないように見える。

この人、もしかしてさっき見たカフェの準備をしていた人かな？

テーブルを一人頑張って運んでいた……。

「な、何か僕に？」

「あ……はい。これ、落としましたよ」

差し出された手の平に乗っていたのは、紫紺の色をした結晶だった。

「え、魔石？　あ、あれっ？」

首を捻ってお尻の上にある腰巾着を見る。

僕はモンスターから得られる『魔石』を、この亜麻色の腰巾着の中に回収している。いつも紐はきつく絞ってあるけど、何かの拍子で緩んでしまったんだろうか。

でも昨日の換金の時、魔石は全部ギルドに渡したんだけど。残ってたのかな？

冒険者じゃない人が魔石なんか持っている筈なんてないし……うん、きっとそうなんだろう。

「す、すいません。ありがとうございます」

「いえ、お気になさらないでください」

ほわっとする微笑みが返ってきた。すまなさそうに眉を下げながらも、僕もつられて笑ってしまう。

純粋な善意に触れて肩の力はすっかり抜けていた。

「こんな朝早くからダンジョンへ行かれるんですか？」

「はい、ちょっと軽く行ってみようかなぁなんて……」

間を繋ぐように声をかけてくれた。この場をどう収拾しようか迷っていたので、正直助かった。

あと一言二言交わしてから別れの挨拶を告げよう。

……なんて、そんなことを思っていた矢先、グゥと僕の腹が情けない声を吐いた。

「……」

「……」

きょとんと目を丸くする店員さん。

顔を赤くする僕。

すぐに店員さんはぷっと吹き出した。痛恨のダメージ、僕はうつむいて煙を排出する。

「うふふっ、お腹、空いてらっしゃるんですか？」

「……はい」

「もしかして、朝食をとられていないとか？」

恥ずかしくて堪らず、僕は店員さんに目を合わせられないままこくりと頷いた。

彼女は何か考える素振りをすると、急にぱたぱたと音をたててその場を離れる。

例のカフェテラス……そこを越えていったん店内へと消え、僕が怪訝な顔をして突っ立っていると、ほどなくして戻ってきた。

ここを離れた際にはなかったもの――ちんまりとしたバスケットが、その細い腕に抱えられていた。

中には拳大のパンとチーズが見える。

「これをよかったら……。まだお店がやってなくて、賄いじゃあないんですけど……」

「ええっ！？　そんな、悪いですよ！　それにこれって、貴方の朝ご飯じゃあっ……？」

店員さんはちょっと照れたようにはにかんだ。

うぐっ……この人、体の内から可愛さが滲み出るタイプだ。

ヴァレンシュタインさんや神様みたいに思わずはっとするような美貌ではないんだけど……。

接すれば接するほどその魅力に惹かれていくような……なんていうか、神様達だったら『良質町娘キタァー！』とか絶賛しそうな感じ。

「このまま見過ごすと私の良心が痛んでしまいそうなんです、だか

ら冒険者さん、どうか受け取ってくれませんか？」

「ず、ずるいっ……」

そういう言い方をされたら断れるわけない。その笑顔でそんな殺し文句、卑怯だ。

めちゃくちゃ困り果てながら僕が返答に窮していると、店員さんは少しの間を置いて目を瞑る。

次にぱっと瞼を開いた時、今度は少し意地悪そうな笑みを浮かべて、僕の目の前に顔をすっと寄せた。

ち、近い……。

「冒険者さん、これは利害の一致です。私はちょっと損をするけれど、冒険者さんはここで腹ごしらえができる代わりに……」

「か、代わりに……？」

「……今日の夜、私の働くあの酒場で、晩ご飯を召しあがって頂かなければいけません」

「……」

今度は僕が目を丸くする番だった。

言われたことの意味を、時間をかけてゆっくり呑み込む。

にこっと笑う店員さんを前にして、僕は初対面の人に対する壁みたいなものを、完璧に取り払われてしまった。

くしゃっ、と破顔する。

「もう……本当にずるいなぁ」

「うふふ、ささっ、もらってください。私の今日のお給金は高くなること間違い無しなんですから」

遠慮することはありません、と店員さんは言ってくれた。
何だよ、この人、全然したたかじゃんか……。

「……それじゃあ、今日の夜に伺わせてもらいますっ」

「はい。お待ちしています」

最後まで店員さんは僕のことを笑ってくれた。
終始やりこめられた感じなのに、紅茶を飲んだ時のように心地が良い。急に照れくさくなってしまった。
バスケットを片手にして店員さんに見送られる。それからちょっと歩いてふと、僕は後ろを振り返った。
不思議そうに見つめ返してくる店員さんに向かって言う。

「僕……ベル・クラネルって言います。貴方の名前は？」

目を僅かに見開いた後、彼女はすぐにぱっと微笑んだ。

「シル・フローヴァです。ベルさん」

笑みと名前を僕等は交わし合った。

神様達が下界に降り立つ以前から、ダンジョンというものは存在していた。

迷宮の上には今ほどの規模ではないにしても町が築かれており、その時からギルドの前身の機関があったらしい。

何が言いたいかというと、古代には、神様の恩恵を受けずにモンスター達と戦っていた人達がいたということだ。

「ギャウッ！？」

「はッ！」

信じられないという思いが半分と、本当に凄かったんだろうなという畏敬の念が半分。
恩恵を授かることで、こうしてやっとコボルトを屠れるようになった僕とは逆に、正真正銘の生身で凶悪なモンスターを打ち倒していた人達が、遥か昔、このダンジョンにはいたのだ。

「シャアッ！」

「ほあっ！？」

「グェッ！？」

もし、だ。
もしそんな古代の人達が今ここにいたとしたら。
純然な独力で敵を蹴散らす本物の戦士がいたとしたら。
やはり、めちゃくちゃ強い彼等は、こんな状況も鼻をほじりながら切り抜けてしまうのだろうか。

「「「「「「グルオァッッ！！」」」」」」

「無理だぁー！？」

僕にはできっこない。

「畜生ー！　卑怯だぞおおおおっ！？」

「「「「「「ガアアアッ！」」」」」」

コボルトの群れに背を向けて全力疾走。
計六匹の犬頭のモンスターが執拗に僕を追いかけてくる。
揺れる視界を埋め尽くすのは薄い青色に染まった壁面。空の見えない天然の迷路は、どこまでもどこまでも続いていた。
二また道、十字路、緩やかな下り坂。一定間隔で綺麗な道を形作っている地下空間を、僕は腕を振っては駆けていく。

早朝ということで他の冒険者の姿が全くないダンジョンの1階層、もぐってから順調にモンスターを狩り続けていた僕は、不運なことに、先程このコボルトの集団に出くわしてしまったのだ。
最初はなんと九匹もいて、囲まれる前に三体倒すことには成功したけど、あいつ等すごく綺麗な包囲網なんて敷いてきた。逃げるしか、道は残されていなかったのだ。
そもそもコボルトがあんなに群れていること自体、稀だ。駆け出しの僕が言うのもなんだけど、こんな光景は見たことがない。
先日のミノタウロスといい、この頃ろくな目にあっていない。僕、知らないところで呪われているんじゃないだろうか。

「っ！」

直角の曲がり角に勢いよく飛び込んで、ブレーキ、くるりと回転して息をひそめる。
僕が選択したのは待ち伏せ。コボルト達がすぐ前の曲がり角に現れた瞬間、一気に飛びかかる心算だ。
今からやろうとしていることに否が応でも緊張を強いれらていく。
他の冒険者がいたら僕の選択を「間抜け」と言って鼻で笑っただろうか？　けど1階層の通路は幅が広くて多数対一の戦闘が容易に成立してしまう。いくら逃げ回ったところで、ダンジョンのセオリーである一対一が上手く整わないのだ。
逃げ続けた結果、他のモンスターとの挟み撃ちにもあってしまうかもしれない。
やるなら、速攻だ。

ドダドダドダッとただ地面を蹴るだけの雑な足音が近付いてくる。
まだ現れない敵に、短刀を握る手の平がじわっと湿ってきた。
幾重にも響く野獣の遠吠えを聞きながら必死に心臓の音を抑え込み、切歯。すぅぅ、と息を吸い込む。
そして次の瞬間、目を血走らせた獣の顔が壁の向こうから姿を現した。

「うあああああああああああああっ！」

「グェ！？」

『！？』

そいつの目とこちらの目があった時、既に僕は跳躍していた。
先頭で走ってきたそのコボルトの瞳の中で僕の姿が徐々に大きくなり――刺殺。
心臓に短刀が食い込む。まず一匹。
間を置かず角を曲がってきた他のコボルト達が、思いがけない光景に動揺をあらわにした。一方、僕の仕掛けた突撃の勢いは緩まない。
始末したコボルトを盾にするように群れへと突っ込み、二匹のコボルトを巻き込んで地面に倒れ込む。

「ガ、ガァ！？」

「ふっ！」

「ギョグ！？」

もろに背中を強打した二匹とは異なり、僕は前転の要領で素早く立ち上がる。
振り返り、呻き声をあげる一匹のコボルトの喉笛に白刃を突き刺した。二匹目。

「グ、グオオオッ！！」

「！」

「ゴッ！？」

不意打ちに固まっていた三匹が再起動した。
飛びかかってくるのを往なし、ついでに未だ転がっている奴の頭に、ボールへそうするように蹴りをかます。ボキッと首のへし折れる音。犬頭がとんでもない角度と方向を向く。三匹目。

「僕の勝ちだ！」

「キャインッ！？」

勝利宣言。
残った数のコボルトでは僕を包囲することもできない。
知能の低い低級のモンスターでは、人のような連携は取れないからだ。今、四匹目の腹をかっさばいて残るは二。
恐怖の眼差しを向けてくる最後のコボルト達を、僕はもう時間をかけずに処理をした。

「ふ～～っ……勝てたぁ」

動かなくなったコボルトの群れの横でぺたんと腰を落とした。
この数を相手取るのは初めてだったけど、良かった、上手くいった。無傷で済んだんだし、かなり上出来ではないだろうか。
もしかしたらもっと上手い対応の仕方があったのかもしれない。けど、冒険者として指示を仰げる人がいない僕には、知りもしないことをやれと言われても無茶ってもんだ。
【ヘスティア・ファミリア】は僕一人だから、先輩も仲間もいない状態で我流のまま戦い続けなくてはいけない。我流なんて聞こえは

いいけど、ただの素人。今の僕には酷く頼りない響きにしか感じられない。
死にたくないんだったら、それこそなりふり構わず他の【ファミリア】の人達に教えを請うた方がいいんだろうけど……ねぇ？　僕だけじゃなくて神様も馬鹿にされそうだし、【ファミリア】のいざこざは複雑に過ぎると聞くし。

色々天秤にかけてみると、まだ一人で頑張ってみようかな、という気分になる。そう、“冒険しなければ”この通り僕でも戦えるのだ。エイナさんに叩きこまれたダンジョンの知識も、ちゃんと血肉になってる。

「……よいしょ」

立ち上がって、コボルト達の死体へ足を運ぶ。
舌を口から出して無残に息絶えている様に、少し心の壁を削られるが、僕は頭を振って短刀を再び構えた。
一息で振り下ろして胸を抉る。びくんっとはねる体と飛び散る血はもう無視して、胸部の中心にある、小さく輝く紫紺の欠片を摘出した。
これが、魔石。
モンスターからとれる魔力のこもった結晶……らしい。いつものように詳しいことは知らない。神様の言うように本を読んだ方がいいかなぁ。

まぁとにかく、この結晶には不思議な力が宿っていて、ギルドに持っていけば換金ができるのだ。言っちゃえばこれがダンジョンでの直接の稼ぎになる。

僕達のホームにあった魔石灯がいい例だけど、魔石はヒューマンの技術で加工することで色々な方面に活用できるから、貴重な資源扱いになっている。
オラリオはこの魔石製品を他の地域、他の国に輸出することで莫大な利益を上げていると聞く。この場合、オラリオっていうよりギルドなんだろうだけど。
大きければ大きいほどやっぱりギルドの方も高く買い取ってくれるみたい。
コボルトからとれたこの魔石は、正確には「魔石の欠片」。爪ほどしかない小ささで、僕が確かめた限り、1～4階層のモンスターから出るのはみんなこんなものだ。

手の中の魔石をぼーっと見つめていると、魔石を取り除いたコボルトの体に変化があった。
急に色素が抜け落ちていったかと思うと、頭がぼろりと崩れ、ついには全身が灰となって跡形もなく消えてしまった。
これが魔石を失ったモンスターの末路だ。
エイナさんの話によると、魔石はモンスター達の“核”であり、これを基盤として彼等は活動しているのだと言う。故に魔石を狙うのはモンスターを倒す上で有効打にもなりうるのだと、彼女はそうも言っていた。
魔石が砕けちゃったら換金もできないけど、生きるか死ぬかの時だったら、四の五の言ってられないしね。

僕は灰になったコボルトを最後まで見届けると、やがて同じ作業を繰り返し始めた。
最初に仕留めた三匹のところにも行かないといけないから、呆けてる時間はないんだった。
短刀を振りかぶって、振り落とす、振り落とす、振り落とす。

「ん……？」

最後の死体を処理した折、全て灰になるはずの肉体の中で、右手の爪だけがぽつんと残る。

灰の中に埋もれたそれを取り出し、ポンポンとお手玉してみても、消える気配は見せない。

どうやら「ドロップアイテム」のようだ。

魔石を除去したモンスターは、時折、体の一部の原型を残すことがある。そのモンスターの中で異常発達した部位らしく、魔石を失ってもなお独立するに至る力（この場合は魔力か）が備わっているらしい。生きていた際にはそのモンスターの強力な武器としてさぞ活躍していたことだろう。

これも換金の対象になりうる。具体的には武器や防具の原料として使用するのだ。ものにもよるけど、大抵魔力の欠片よりは高く引き取ってくれる。

「ラッキー」

魔石の欠片を腰巾着、「コボルトの爪」を背にしょっている黒色のバックパックに放り込む。

これは特殊な製法でできていて、もとの大きさよりずっと多くのアイテムが収納できる魔法の袋……とまぁ、そんな都合のいいものの筈がなくて。

生地の限界がくれば溢れるし破れる。勿論重さも健在だ。夢のような便利なアイテムはないんだよね……。

本来なら魔石やドロップアイテムは「サポーター」と言われる非戦

闘員が回収して確保してくれるんだけど、ソロの僕は以下略。
僕はお金になる重い荷物を背負って戦わなければいけないわけだ。
……フリーのサポーター雇おうかなぁ。エイナさんも今の僕の状況にいい顔してくれなかったし。
でも、そんなお金の余裕が僕と神様の【ファミリア】にある筈もなくて……。

「ウオオオオオオンッ！」

「ガアアッ！！」

「……お前ら」

ええい、休ませろよ！

魔石の存在もひっくるめて、ダンジョンは不思議に満ちている。
この迷宮、さっきも語ったように、神様のいない前から既に下界にあったのだ。

一説によるとダンジョンの最下層は地獄やら魔界に繋がっているとかいないとか。
神様達は何か知ってそうなものなんだけど、別段何も教えようとはしてこない。
『ダンジョンはダンジョンだろ。ダンジョンに他の何を求めてるんだよダンジョン』とは神様達の名言らしい。どれだけダンジョン好きなんだよ。

ダンジョンについて聞いて最も驚くのが、ダンジョンは生きている、ということだろう。
別に生きているからって階層ごとの地形は変わらないし、肉厚の壁が襲ってくるなんてこともない。冒険者が踏破してマッピングした階層の地図はギルドにも売られている（ただし下の階層に行くにつれて面積がありえないほど広くなって、マッピングしきれてない階層もちらほらとあるらしい）。
生きているとはつまり、修復されるのだ、破壊された地形が。勝手に。
ダンジョンは魔石の下位、あるいは上位物質できているらしい。迷宮の組成ばっかりは未だ学者達の間でも解明できていなくて、ただ発生する現象を見せつけられるに留まっている。
また魔石に近い物質ということで、迷宮の中は日の光が届かずとも明るい。この1階層なんて天井に当たる部分が照明のように点々と燐光を発しているものだから、時間を問わず馬鹿みたいに明々としているのだ。

更にモンスター。あいつ等はダンジョンの中で生まれる。
冗談のような話だけど、迷宮の壁から雛が卵の殻を破るように這い出てくるのだ。実際見た者も多くいる。
多くの冒険者がどれだけモンスターを倒そうとも、その数が尽きないのはそういう理由。

また、階層ごとに壁面から生まれるモンスターは決まっている。たまに生まれたモンスターが下の階層から上ってきたり、逆に下りたりするイレギュラーがあるらしいけど、大体出てくるモンスターは階層で固定していると考えていい。
階層と階層を繋ぐ経路は階段だったり巨大な下り坂だったり、まぁ色々。間違っても瞬間移動（ワープ）とかそんな反則級な行為はできない。モンスターも僕達も、ダンジョン内を徘徊するためには自分の足だけが頼りとなる。

モンスターはダンジョンの中でしか生まれない。だからダンジョンを管理すればモンスターの脅威には晒されない。そういった経緯でギルドは太古から創設されていたのだ。今では迷宮から生まれる利益も大いに絡んでいると思うけど。
僕は子供の頃ゴブリンに殺されかけたことがあるけど、それはギルドが作られる前に地上へ進出したモンスター達の子孫だったのだろう。このオラリオの周辺地域を遠く離れた世界各地でもモンスターが散見されている。
つまり、モンスター達も生殖行動ができるというわけだ。
種の繁栄が十分に可能な数多のモンスター達を生み出すダンジョンは、まさに神秘そのもの。
怖い想像をするけど、僕にはこのダンジョンこそが、下界に亜人を創造した神様達と同等のような存在に思えてならない。
口が裂けても、神様は勿論、誰にもそんなこと言えないんだけど……。

「――せいっ！」

「ゴブリャアッ！？」

通路の真ん中で突っ立っていたゴブリンに、見つけると同時、飛び蹴りをかました。土手っ腹にヒット。
体をくの字に折って、目玉を飛び出さんばかりに見開くゴブリン。
吹っ飛んだ。
僕にトラウマを与えてくれたこの緑色のニクイ奴も、神様から恩恵を受けた今では瞬殺できる。何だかなぁ。
ダンジョンに入って最初に会った時、目も当てれないほど震えあがっていたのが遠い昔のことのように思えた。

「おっ、またドロップアイテム」

今度は「ゴブリンの牙」だ。
手を後ろにやって収納すると、すっかり重くなったバックパックが体を地面に引っ張ってくる。
んー、オークの皮でできているから、容量的にはまだ余裕があるけど……僕の動きに支障が出るかな？
いや、でも、今みたいなゴブリンとか相手だったらこのくらいなんとも――

「ギシャアアッ！！」

「！？　ぐえっ！」

――訂正っ。一旦どうにかした方がいい！
不意打ちとはいえ、避けられない攻撃じゃなかった。

陰にでも隠れていたのか。僕はゴブリンと向かい合いながらバックパックを地面に下ろす。
そうだ、油断しちゃいけない。冒険なんかしなくても、ダンジョンには危険が沢山孕んでいる。「まぁいいっか」の積み重ねが一番危ないとエイナさんは言っていった。
一度地上に戻ろう。手に入れた戦利品を換金してから、また帰ってくればいい。手間だなんて言うのは無しだ。
ヴァレンシュタインさんと仲良くなるんだろっ。何をすればいいかなんて具体的なことはわからないけど、少なくとも、今の僕のまんまじゃあ駄目なんだ！
自分を助けてくれた金眼金髪の彼女の顔を思い浮かべる。募ったあの人への恋慕が、僕の体を燃焼させているような気がした。

今日はシルさんのお店にも行かなくてはいけないから、普段以上に稼ぎを得なくてはいけない。
約束の時間のその時まで、同じこと繰り返して、今日半日は踏ん張ってやる。
暴れるぞ。

「取りあえず……僕のノーミスを返せえええええええええええええっ！！」

「ブベエッ？！」

粉砕！

ベル・クラネル
Ｌｖ．０
力：Ｈ　４２（→６０　耐久：Ｉ　６６（→４７　器用：Ｈ　７１
（→５５　敏捷：Ｇ　４３（→７１　魔力：Ｉ　０
《魔法》
【】
《スキル》
【】
短刀：Ｈ　２３（→５３

「……え゛っ」

夕刻。下水道の隠し部屋に舞い戻ってきた僕は、自分の目を疑った。

神様から受け取った更新【ステイタス】の用紙、その中に記される成長っぷりが半端なかったのだ。

「か、神様、これ書き写すの間違ったりしていませんか……？」

「……君はボクが簡単な読み書きもできないなんて、そう思っているのかい？」

「い、いえっ！　そ、そういうことじゃなくて……ただ……」

ただ……ちょっとありえない数字が並んではいないだろうか？　何だか棘のある神様の言葉を否定しておきながら、僕はまじまじと用紙を見つめる。

今日は確かに頑張った。昨日までとは異なった奮闘ぶりをした自信が確かにある。

でも、この数字は流石に……熟練度上昇トータル２５０オーバーって何なの？

これじゃあ、僕のこれまでの半月は一体何だったんだという話に……。

「か、神様、でもやっぱりおかしいですよ！？　ここっ、ほら、『耐久』の項目！　僕、今日は敵の攻撃を一回だけしかもらっていないのに！」

「……」

僕が今日与えられたダメージは、あの時のゴブリンによる一撃のみだ。後は全て往なしてやった。
だというのに、『耐久』が一気に三倍以上も数値を伸ばしている。
今日まで散々殴られてきてやっと以前の数値だったんだ、いくら頑張ったからといって、一度の被撃だけでここまで熟練度が上がるのはありえない。

「だからやっぱり何かがっ……あ、あの、神様？」

「……」

おかしい。
神様の機嫌が悪い。すこぶる悪い。ていうか怖い。
幼い顔付きがむっつりとしていて、半眼で僕のことを見据えている。
不機嫌デスと尋ねずとも聞こえてくるかのようだ。
な、何で？　僕、なにかやらかしちゃったんですか？
神様のこんな様子に初めて直面しただけに、どうすればいいのかわからない。
汗を頬にかき、無力なゴブリンのように怯えあがってしまう。

「か、神様……？」

「……」

「えと、その、だから……」

「……」

「な、何で僕、こんないきなり成長したのかなー、なんて……」

「……知るもんかっ」

ぷいっ、と頬を膨らませた神様はそっぽを向いた。
ヤダ可愛い、とこの状況で思っちゃう僕は狂っているのか。
神様はじめての反抗期。

「ふんっ」

神様は僕に背を見せ、無言で部屋の奥にあるクローゼットへ向かった。うねうね動くツインテールがこちらを威嚇してくる。
扉を開け、プルプル震えながら頑張って背伸びをして、神様用に採寸された特注のコートを取り出した。
小さな体に不釣り合いな胸も覆い隠す外套を羽織り、たじたじになって立ちつくす僕の目の前を通り過ぎていく。

「ボクはバイト先の打ち上げがあるからそれに行ってくる。君もたまには“一人で”羽を伸ばして“寂しく”豪華な食事でもしてくればいいさっ」

バタンッ！　と音をたててドアが閉められた。
神様は最後まで僕と視線を合わせようとしなかった。そしてバイト先は何の打ち上げをするのかという謎を残していった。

……何だったんだ、一体。
僕に落ち度があったんだろうかと振り返ってみるけど、わかる筈もなく。
ただ神様を怒らせてしまったという事実にへこみながら、僕も隠し部屋を後にした。溜息と一緒に。
シルさんのもとに行くまで、立ち直らなきゃな……。

シルさんの勤めている酒場、『豊饒の女主人』に足を運ぶ。
すごい名前だなと飾ってある看板を仰ぎながら、入口から中をそっと窺ってみた。
最初に目についたのはカウンターの中で料理やお酒を振る舞う恰幅のいいドワーフの女性――きっと女将さん――で、ちらりと見える厨房はネコ耳を生やしたキャットピープルの少女達がてんてこ舞い

に動き回り、それぞれの客に注文をとる給仕さん達もさも当然のようにみんなウエイトレス。
まぁ何が言いたいかというと、店のスタッフがみんな女性なのだ。
……酒場の名前の由来をなんとなしに察した。

（いや、でもこれ、僕には難易度高過ぎない……？）

店員の中にプライドの高いエルフまで紛れ込んでいることに驚きながら、僕はごくりと喉を鳴らした。
昨日まで妄想していた美女美少女のお花畑が、疑似的とはいえ再現されちゃってる。ちなみに女将さんは除く。
別に、その、艶めかしいだとかそんな怪しい空間ではないんだけど……こういうのに免疫皆無の僕は、女の子のお店ってだけで赤面してしまう。
店内は本当に明るい雰囲気だった。店員さん達はみんなはきはきとして元気がいいし、飛び交うのは笑い声ばかり。客はほぼ男性冒険者で鼻を伸ばしている人なんて一杯いるけど、みんな純粋にお酒を飲んで楽しんでいる。料理も美味しそう。

内装は他の店と比べたら随分とシックな装いで、それでも酒場特有のイメージは崩れていない。
入口の脇にカフェテラスが設けられているところからわかるように、何だかこじゃれたような感じ。そういえばさっきからテラスの客の視線が痛い。
これなら、男の人だけじゃなくて女の人にも気に入ってもらえそうだ。
しかし僕は今すぐ撤退したい気分……。

「ベルさんっ」

「……」

いつのまに現れたのか、シルさんは僕の隣に立っていた。
僕は痙攣しそうになる口を封じ込めながら、無理矢理下手くそな笑みを浮かべる。
観念、しよう……。

「……やってきました」

「はい、いらっしゃいませ」

シルさんは朝と同じ服装で僕を出迎えた。
開きっぱなしになっている入口をくぐり、澄んだ声を張り上げる。

「お客様一名はいりまーす！」

（……酒場ってこんなことといちいち言うのっ？）

目立つような余計な真似しないでと胸の中で告げながら、店内へ進むシルさんの後に続く。
びくびくしながら体を縮こませた姿勢。自分のことながら失笑ものだ。

どこまで小心者なんだよ僕は。

「では、こちらにどうぞ」

「は、はい……」

案内されたのはカウンター席だった。
こう真っ直ぐ一直線に席が並ぶカウンターの中、ちょうどかくっと曲がった部分の場所。すぐ後ろは壁があって、ちょうど酒場の隅に当たる。
曲がり角の席だから隣に椅子は用意されておらず、誰かが座ってくることはない。一人きりでカウンターの内側にいる女将さんと向き合う感じ？
シルさん、入店初めての僕に気をつかってくれたのかな。これなら他の人に邪魔されることなく自分のペースで食事ができる。
かなり融通してくれたのかもしれない。

「アンタがシルのお客さんかい？　ははっ、冒険者のくせに可愛い顔してるねえ！」

ほっとけよ。
カウンターから乗り出してきたドワーフの女将さんに、僕は柄にもなく、半ば暗い視線をぶつける。
自分でも自覚があるんだから……。

「何でもアタシ達に悲鳴をあげさせるほど大食漢なんだそうじゃないか！　じゃんじゃん料理を出すから、じゃんじゃん金を使ってってくれよぉ！」

「！？」

告げられた言葉に度肝を抜かれる。
ばっと背後を振り返ると、控えていたシルさんがさっと目を横に逸らした。
逸らしたよ！　目を逸らしたよこの人！

「ちょっと、僕いつから大食漢になったんですか！？　僕自身初耳ですよ！？」

「……えへへ」

「えへへ、じゃねー！？」

誤魔化されるか！
とんだ魔女だこの人！

「その、ミアお母さんに知り合った方をお呼びしたいからたっくさん振る舞ってあげて、と伝えたら、尾鰭がついてあんな話になってしまって」

「確信犯じゃないですか！」

「私、応援してますからっ」

「まずは誤解を解いてよ！？」

悪女かよ！

誰だ良質町娘なんて言ったヤツ！

「僕、絶対大食いなんてしませんよ！？　ただでさえうちの【ファミリア】は貧乏なんですから！」

「……お腹が空いて力がでないー……朝ご飯を食べれなかったせいだー」

「止めてよ棒読み！？　ていうか汚いですよ！？」

自分で無理矢理押し付けといて一飯の恩を返せとか、どんな詐欺だよ！

「うふふ、冗談です。ちょっと奮発してくれるだけでいいんで、ごゆっくりしていってください」

「ちょっと、ね……」

ちゃっかりしてるよなぁ……。

僕は溜息をつきたくなる衝動を抑えながらカウンターに向き直った。
ご丁寧に用意されているメニューを手にとり、料理の内容より値段の方を先に見て重きをおく。
今日の僕が換金したお金は４４００ヴァリス。過去最高のモンスター撃破スコアに加えドロップアイテムが運良く発生し続けたおかげで、普段より大幅な収入を得られた。いつもは２０００ヴァリスを上下するくらい。
一度の食事は５０ヴァリスもあれば十分お腹を満たせるけど……冒険者の装備品やアイテムの相場はかなり高い。
体力を回復するポーションは最低でも５００ヴァリスはするから、僕はこれまで新しい武器等を購入することもできなかった。今使ってる短刀だって１８００ヴァリスも払った。ギルドに借金という形で。
防具も合わせて返済はやっと済ませたけど、絶対足元見られてるよね、冒険者って。

諸事情によりなるべくお金は取っておきたい。貯金もしたいし。
無難にスパゲティを頼んでおいた。それでも２５０ヴァリスかかったけど。おいおい。
料理は結構洒落てるものが多い。酒場なんてここが初めてだけど、手をかけているようなぶん、他のところより高いのかも。
「酒は？」と女将さんに尋ねられ、少し考えてからご遠慮しますと答えた。まだ子供だからなんてそんな抜けたこと言うもりはないけど、ここで一人で初めて飲酒することに踏ん切りがつかなかったのだ。お金もかかるし。
しかし女将さんは僕の言葉を無視してエールをどんっとカウンターに叩きつけた。聞いた意味ないじゃんか……。

「楽しんでいますか？」

「……圧倒されてます」

スパゲティを半分食べたところで、シルさんがやってきた。僕はちょっと皮肉をこめて素直な感想を述べる。

彼女はエプロンを外すと壁に置いてあった丸イスを持って、僕の隣に陣取った。

「お仕事、いいんですか？」

「キッチンは忙しいでしょうが、給仕の方は十分に間に合ってますので。今は余裕もありますし」

いいですよね？　とシルさんは視線で女将さんに尋ねる。

女将さんも口を吊り上げながらくいっと顎をあげて許しを出した。

「えっと、とりあえず、今朝はありがとうございます。パン、美味しかったです」

「いえいえ。頑張って渡した甲斐がありました」

「……頑張って売り込んだっていう方が正しいんじゃないんですか？」

思っていたよりの夕食の出費につい愚痴をこぼす。

シルさんは苦笑して「すいません」と謝った。その言葉が本物だと心から願いたい。
それからシルさんとここのお店のことについて少しだけ聞いた。
この『豊饒の女主人』は女将さんのミアさん（店員の人はお母さんと呼んでいるらしい）が一代で建てたもので、彼女は昔冒険者だったらしい。所属する【ファミリア】からは半脱退状態らしく、神様の許しも受けているそうだ。そんな人もいるのかと思わず感心する。
従業員は女性のみ受け付けと徹底的。何でも結構わけありな人が集っているらしく、そんな人達でもミアさんは気前良く迎え入れてくれているのだとか。
じゃあシルさんも？　と思い切って尋ねてみると、彼女は「働く環境が良さそうだったので」と答えた。
同姓だけならそれだけ気楽なのかな、と納得する。

「このお店、冒険者さん達に人気があって繁盛しているんですよ。お給金もいいですし」

「……シルさんってお金が好きな人、なんですか？　もしかして」

「ジョークですよ、ジョーク。それに、ここには沢山の人が集まるから……」

シルさんはそう言ってカウンターから顔を上げて、店内を大きく見渡す。
注文を取りにきた店員にちょっかいを出すノームの客に、それを軽くあしらうヒューマンのウエイトレス。
運ばれる料理に満足そうに舌鼓を打つエルフもいれば、テーブルをくっつけお祭り騒ぎのホビット達もいる。

みんな一様にジョッキを掲げ、顔を赤くして賑わっていた。

「沢山の人がいると、沢山の発見があって……私、目を輝かせちゃうんです」

瞳を細めてシルさんはこぼした。
横からじっと注視する僕の視線にはっと気付いた彼女は、頬を赤らめてわざとらしく「こほん」と咳をつく。

「まぁ、そういうことなんです。知らない人と触れ合うのが、ちょっと趣味になってきているというか……」

「ああ、それはわかるような気がします」

僕もオラリオに来て興奮ばかりしてる口だ。
新しい発見ばかりあるというのは、この都市に身を置く人達の特権なのかもしれない。

そんなシルさんの言葉に共感を覚えていると、突如、どっと十数人規模の団体が店に入ってきた。
予約をしていたのか、僕の位置とちょうど対角線上の、ぽっかりと席の空いた隅の一角に案内される。
一行は種族がてんで統一されていない冒険者達で、見るに全員が全員半端じゃない実力を漂わせているような……。

（って――）

心臓がとび跳ねた。

多用な外見を持つ実力者達の中に、砂金のごとき輝きを帯びた金髪の持ち主が紛れ込んでいたのだ。

整った眉を微動だにせず、静かな表情で落ち着きを払った美少女。

見間違える筈がない

ヴァレンシュタインさん……！

『……おい』

『おお、えれえ上玉ッ』

『馬鹿、ちげえよ。エンブレムを見ろ』

『……げっ』

周囲の客も彼等が【ロキ・ファミリア】だということに気付いた途端、これまでとは異なった喧騒を広げていく。

顔を近付けあって密談を交わすようなひそひそ話。

『あれが』

『……巨人殺しの【ファミリア】』

『第一級冒険者のオールスターじゃねえか』

『どれが噂の【剣姫】だ』

聞こえてくるさざ波のような声には全て畏怖がこめられていた。

中にはヴァレンシュタインさんや他の女性のメンバーを見て口笛を吹かす人もいる。

一方で僕も自若なんか保っていられない。憧れの相手にまさかこんな形で再会するなんて思いもよらなかった。
ど、どうする？

「べ、ベルさん？」

助けてもらったお礼を伝えに……いやいやいや、こんなところで出てったらいい晒し者だって。
大体あの人の前に出てどうするつもりだよ。好きです付き合ってくださいなんて言うつもりか。冷静になれよ馬鹿。僕達は赤の他人もいいところでうんやらかんやら。
決めた。様子見だ。
ていうか何をすればいいのか全くわからない。頭が真っ白になっちゃってる。

「……ベルさーん？」

赤くなったり紅潮したり放熱したりする顔をカウンターに伏せ、できるだけ姿勢を低くし、【ロキ・ファミリア】の動向を窺う。草むらにひそみ、息を殺して罠の行方を見守る狩人みたいだ。
奇行を演じる僕にシルさんが結構困った顔で声をかけてくるけど、生憎構っている余裕がない。
ヴァレンシュタインさんの席はちょうどこちらを真正面に向く形。
僕はズクンズクンと鳴り響く鼓動を耳にしながら、視線の先の彼女だけを真っ直ぐに見つめた。

「よっしゃあ、ダンジョン遠征みんなごくろうさん！　今日は宴や！　飲めぇ！！」

一人の人物が立ち上がって音頭をとった。真後ろの姿しか見えず、僕の方からは顔が窺えない。

その首唱を皮切りに【ロキ・ファミリア】の人達は騒ぎ出した。ガチン！　とジョッキをぶつけ合い、用意された料理と酒を豪快に口に運んでいく。ヴァレンシュタインさんは小食で、マイペースだった。

【ロキ・ファミリア】が宴会一色の雰囲気に突入すると、他の客も思い出したように自分達の酒をあおり始める。

「【ロキ・ファミリア】さんはうちのお得意さんなんです。彼等の主神であるロキ様に、私達のお店がいたく気に入られてしまって」

僕が興味全開で【ロキ・ファミリア】を見ていることに気付いたシルさんが、耳に顔を寄せ、手で壁を作りながらこっそり教えてくれる。

ワカッタ、もう忘れない。ここに来ればヴァレンシュタインさんに会える確率が高まる。

ぎんぎんに見開いた僕の瞳はヴァレンシュタインさんの一挙一動に翻弄されていた。

飲め飲めと勧められるお酒に困ったように苦笑していたり、隣にいる元気のいい女性の同僚と会話していたり、小動物のような仕草で口元をナプキンでこしこしと拭っていたり……。

気持ち悪いことこの上ないけど、今まで知る筈もなかったヴァレン

シュタインさんの沢山の表情が、僕の二つの目を釘付けにする。
あんな風に話して、あんな風に笑う。
心臓まで真っ赤に染まっていくわけのわからない感覚を、僕は初めて味わうことになった。

「そうそう、アイズ！　お前のあの話を聞かせてやれよ！」

「あの話……？」

アイズという言葉が彼等の間からあがる度に体を硬直させてしまう。
どうやらヴァレンシュタインさんから見て、二つほど離れた左前の席の獣人の青年が、彼女に何かの話をせがんでいるようだ。
……あんなイケメン、許されていいのか。

「あれだよ、帰る途中で何匹か逃がしたミノタウロス！　最後の一匹お前が5階層で始末しただろう！　そんで、ほれ、あん時いたトマト野郎の！」

――これまでとは違う意味で、心臓が平静さを失った。
うって変わって頭の中は凍りついたかのように動きを止める。

「ミノタウロスって……16階層で襲いかかってきて返り討ちにしたら、集団で逃げ出していった？」

「それそれ！　奇跡みてぇにどんどん上層に上っていきやがってよ

っ、俺達が泡食って追いかけていったやつ！　こっちは帰りの途中で疲れていたってのによ～」

ダンジョンは行きが自分の足なら、帰りも自分の足で階層を上っていかなければならない。
目的地の階層へ直通させるなんて便利な方法はないから、僕達冒険者は到達階層を増やす度に、何度も何度も同じ場所を往復することになる。
だからよっぽど深い階層に向かう時は行きの準備と帰りの準備、両方を充実させていかなければならない。行くだけ行って力つき、帰れなくなってしまったでは目も当てられないからだ。
深層へ向かう【ファミリア】では、豊富な人員と物資、そして帰還のタイミングを見極めるリーダーの存在が重要になってくる。

今までの聞いた情報をまとめると。
深層まで『遠征』していった彼等【ロキ・ファミリア】は。
帰路の際に遭遇したミノタウロスの群れを仕留め損ね。
何とかそれを追いかけていき、最後の一匹を5階層へと追い詰めた後。
ヴァレンシュタインさんが、とどめを刺した。
そして、その場にいたのが――

「それでよ、いたんだよ、いかにも駆け出しっていうようなひょろくせえ冒険者（ガキ）が！」

――僕、だ。

「抱腹もんだったぜ、兎みたいに壁際へ追い込まれちまってよぉ！
可哀相なくらい震えあがっちまって、顔を引き攣らせてやんの！」

全身が発火したかのようだった。
熱くない箇所が見つけられないくらい、体の奥から燃え盛る。

「ふむぅ？　それで、その冒険者どうしたん？　助かったん？」

「アイズが間一髪ってところでミノを細切れにしてやったんだよ、なっ？」

「……」

歯と歯が噛み合わない中、神経が千切れそうなほど首の筋肉を酷使して、あの人の方を見やる。
あの人は、僅かに眉を顰めていた。

「それでそいつ、あのくっせー牛の返り血を全身に浴びて……真っ赤なトマトになっちまったんだよ！　くくくっ、ひーっ、腹痛ぇぇ……！」

「うわぁ……」

「アイズ、あれ狙ったんだよな？　そうだよな？　頼むからそう言ってくれ……！」

「……そんなはず、ないです」

獣人の青年は目元に涙をためながら笑いをこらえ、他のメンバーは失笑し、別のテーブルでその話を聞いている部外者達は、つられて出る笑みを必死に噛み殺す。

「それにだぜ？　そのトマト野郎、叫びながらどっか行っちまって……ぶくくっ！　うちのお姫様、助けられた相手に逃げられてやんのおっ！」

「……くっ」

「アッハハハハハハハハハッ！　そりゃ傑作やぁー！　冒険者怖がらせてまうアイズたんマジ萌えー！！」

「ふ、ふふっ……ご、ごめんなさい、アイズっ、流石に我慢できない……！」

「……」

「ああぁん、ほら、そんな怖い目しないのぉ！　可愛い顔が台無しだぞー？」

どっと笑い声に包まれる【ロキ・ファミリア】の人達。
反対に自分のいる場所は大きな穴が空いてしまったかのようで。
あちらとこちら、まるで世界が隔たったかのようだった。

「べ、ベルさんっ……？」

隣から女の人の声がするけど、頭を素通りする。
そして彼等はまたにわかに騒ぎ出して。

「しかもそのトマト野郎……漏らしちまってよ？　水たまりできてたぜ？」

「……あらぁ～」

「ほんとネタだよな。ったく、漏らしちまうくらいだったら最初から冒険者になんかなるんじゃねーっての。ドン引きだぜ、なぁアイズ？」

「……」

頭の片隅が、削れていく音がする。

「ああいう奴がいるから俺達の品位が下がるっていうかよ、勘弁してほしいぜ」

「いい加減そのうるさい口を閉じろ、ベート。ミノタウロスを逃がしたのは我々の不手際だ。巻き込んでしまったその少年に謝罪することはあれ、酒の肴にする権利などない。恥を知れ」

「おーおー、流石エルフ様、誇り高いこって。でもよ、そんな救えねえ奴を擁護して何になるってんだ？　それはてめえの失敗をてめえで誤魔化すための、ただの自己満足だろ？　ゴミをゴミと言って何が悪い」

「これ、やめえ。ベートもリヴェリアも。酒が不味くなるわ」

ガリガリガリ。

「アイズはどう思うよ？　自分の目の前で小便を垂らす情けねえ野郎を。あれが俺達と同じ冒険者を名乗ってるんだぜ？」

「……あの状況じゃあ、しょうがなかったと思います」

ガリガリガリ、ガリガリガリ。

「何だよ、いい子ちゃんぶっちまって。……じゃあ、質問を変えるぜ？　あのガキと俺、ツガイにするならどっちがいい？」

「……ベート、君、酔ってるの？」

「うるせえ。ほら、アイズ、選べよ。雌のお前はどっちの雄に尻尾を振って、どっちの雄に滅茶苦茶にされてえんだ？」

ガリガリガリガリガリガリガリガリ。

「……私は、そんなことを言うベートさんとだけは、ごめんです」

「無様だな」

「黙れババアッ。……じゃあ何か、お前はあのガキに好きだの愛してるだの目の前で抜かされたら、受け入れるってのか？」

「……っ」

ガリ。

「はっ、そんな筈ねえよなぁ。自分より弱くて、軟弱で、救えない、気持ちだけが空回りしてる雑魚野郎に、お前の隣に立つ資格なんてありはしねえ。他ならない“お前”がそれを認めねえ」

「雑魚じゃあ、アイズ・ヴァレンシュタインには釣り合わねえ」

椅子を飛ばして、立ち上がる。
殺到した視線を振り払って、僕は外へ飛び出した。
「ベルさん！？」

道行く人々を追い抜いて、周囲の風景を置き去りにして、自分を呼ぶ声も遥か背後に押しやって。
僕は、夜の街を駆け抜けていった。

「ベルさん!?」

一つの影が決河の勢いで店外へと消え、それを鈍色の髪の少女が追いかける。
瞬く間の出来事に、酒場にいた者達の大半は何が起きたか把握できずにいた。
困惑したざわめきがあちらこちらから燻ぶり始める。

「あぁン？　食い逃げか？」

「うっわ、ミア母ちゃんのところでやらかすなんて……怖いもん知

らずやなぁ」

周囲と同じ反応をするベート達を尻目に、アイズは一人立ち上がった。

鍛え抜かれた動体視力は弾丸のごとき疾走した影の正体を詳細に捉えていた。

白い髪に細身の体。

うつむき加減に伏せられた前髪の奥で光った、昨日と見たものと同じ藍色の瞳。

（あの時の……）

店の出入り口まで進んで、柱に手をつきながら外を見回した。

右手の方角、メインストリートの先へ店員である少女の背中が遠ざかっていく。

少年の姿は、既に見えなかった。

（ベル……）

少女が叫んだ名前を小振りの唇に乗せる。

背中を叩く仲間達の呼び声より、その名前がやけに自分の胸へと響き渡った。

「ほいほい、アーイズぅ。なにやってるんー？」

「……」

背後に立った人物が両腕をアイズの腹部に回してきた。
息がかかるほど体を密着させ、恥骨をアイズの臀部に押し付けてくる。
この人物でなかったならば、いや同姓でなかったら殴り飛ばしているところだが、流石にこの相手へ乱暴することはできなかった。
アイズは困った顔をして腹に回された手をとって捻り、肘鉄、相手が後退したところでその頬っつらへ張り手をかました。

「ちょ、めっちゃ乱暴しとるやん……っ！？　表情と行動が全く噛み合ってないよアイズたん……！」

「変なことしないでください」

もみじのできた頬を押さえ涙目になる相手はプルプル震えていたかと思うと、すぐに復活して「クーデレなアイズたん萌えー！！」と叫び出した。
アイズは非常にソレから目を背けたくなった。

「まぁまぁ、そんな顔せんで。ベートと酒飲みたくなくなったんなら、ミア母ちゃんに頼んで店の外に吊るしてもらうから」

アイズが出口へ向かった原因を勘違いしているらしい。
見ると、「ぐぉおおおおおおお！？」と叫びながら獣人の青年

がみなの手で地面に取り押さえられ、縄でぐるぐる巻きにされているところだった。髪の長いエルフに頭を踏まれている。
他の客はそれをはやしたて、どんちゃん騒ぎの有り様だ。

「ほな、いこぅ。アイズたん、うちに酌してぇ」

「……」

肩を抱かれやんわり連れて行かれる中、アイズはもう一度外を見た。
魔石灯の光でぽつぽつ照らされる大通りの先に、姿求める人物を望むことはかなわない。
すっかり暗くなった夜空の中で、今にも泣き出しそうな雲が月にかかっていった。

（畜生、畜生、畜生っ！）

ベルは走る。歪められた眦から水滴が浮かび、背後へと流れていく。
反芻するのは先程の出来事。
みじめな自分が恥ずかしくて恥ずかしくて恥ずかしくて、笑い種に
使われ侮蔑され失笑され挙句の果てには庇われるこんな自分を、初
めて消し去ってしまいたいと思った。

（馬鹿かよ、僕は、馬鹿かよっ！！）

青年の放った全ての言葉が胸を抉る。
惰弱、貧弱、虚弱、軟弱、怯弱、小弱、暗弱、柔弱、劣弱、脆弱
少女と親密になるために『何をすればいいかわからない』ではない。
『何もかもしなければ』、自分は一人の少女の前に現れることさえ
許されない。
殺意を覚えるのは蔑んだ青年でも周囲で馬鹿にしていた他人でもな
い。何もしていないくせに無償で何かを期待していた、愚かな自分
に対してだ。

（悔しい、悔しい、悔しいっっ！！）

青年の言を肯定してしまう弱い自分が悔しい。
何も言い返すことのできない無力な自分が悔しい。

彼女にとって路傍の石に過ぎない滑稽な自分が悔しい。
彼女の隣に立つ資格を、欠片も所持していない自分が、堪らなく悔しい。

「……ッッ！」

藍色の双眸が遥か前方を睨みつける。
迷宮を保有する摩天楼施設が、地下に口を開けてベルを待っていた。
目指すはダンジョン。目指すは高み。
つり上げた瞳に涙をため、ベルは闇に屹立する塔に向かってひた走った。

4話　だからボクは力になりたい

時間を刻む音が部屋の中に無機的に響いている。
壁にかけられた時計の針が示す時刻は朝の六時。
ヘスティアはホームである小部屋で、同じ場所を行ったり来たり繰り返していた。

（いくらなんでも遅すぎる……！）

腕を組み眉根を思いきり寄せ合わせ、焦燥を顔に浮かべる。
ベルの成長速度にアイズへの恋慕がこれでもかと起因した【ステイタス】を見せつけられ、ちっとも面白くなかった昨夜。へそを曲げてバイトの飲み会に出ていったヘスティアが帰ってくると、彼女を迎えてきたのはがらんとした静けさだけで、ベルはこの隠し部屋にはいなかった。
一人で飯でも食べてこいと言った手前、出迎えがないことにいっそう不機嫌になったヘスティアは、シャワーも浴びずベッドへぴょんと飛び込みふて寝を決め込んだのだが……十時、十一時、十二時……深夜を回ってもまだ帰ってこないベルに、彼女はいよいよ危機感を覚えた。
ベルへの文句と不満でずっと目を開けっぱなしにして横になっていたベッド、そこから毛布をはねのけ立ち上がり、部屋から飛び出して近辺を探しにいったのだ。

「どこにいったんだ、君は……！」

収穫はゼロ。
目印である白髪頭の影も見つけられなかったヘスティアは、一縷の望みにすがってつい先程部屋に戻ってみたが、やはり少年の姿はなかった。
彼女自身一睡もせず夜の街を奔走した結果、消耗の色濃い相貌。それが緊張の色で上書きされていく。

（ボクがあんなことを言ったから？　でも、彼は人に心配をかけるくらいなら自分の私情を殺して我慢するような子だし……これが普段通りなら、ボクに平謝りに来てもおかしくないものだけど……）

最後の別れ際、捨てられた子犬のような目をしていたベルの姿を思い出す。
当時も感じた罪悪感が再び胸に去来したが、ヘスティアはかぶりを振った。
今は感傷に浸っている場合ではない。湧いて出る後悔を封じ込めて、冷静な思考に準じようとする。

（でもボクが関係していないとなると、それじゃあ、ベル君が帰ってこないのはやっぱりっ……）

何か事件に巻き込まれたのか。
冷静沈着の体など砂の城のように崩れ、すぐにぶわっと嫌な汗が噴き出す。
居ても立ってもいられなくなったヘスティアは、再びベルを捜索し

ようと扉のもとに駆け寄った。

「――ぶぎゅ！？」

ヘスティアがドアノブに手をかけようとした、その時だった。見計らったかのように四角形の板が開いて彼女に突進してきたのは。

ヘスティアは顔面を強打！

同じタイミングで双丘が「むぎゅ！」と悲鳴をあげ圧潰！

ヘスティアの信仰値が１００上がった！

顔面を押さえながらうずくまるヘスティアは、声にならない呻き声をあげる。

「か、神様……ご、ごめんなさい……」

まさかの襲撃に悶えていたヘスティアだったが、頭上から降ってきた声を聞いて、両手で押さえていた目を見開く。

声の主が望んでやまなかった人物だと察知し、ヘスティアは勢いよく立ち上がった。

「ベル君！？」

彼女の予想に違わず目の前に立っていたのはベルだった。

胸に広がる大きな安堵。ベルを見上げる姿勢となっているヘスティアは思わず瞳を涙ぐませたが……しかし、ベルの顔とその姿を見て

言葉を失った。
ヘスティアに対して申し訳なさそうに眉を落とす顔。赤色と褐色にまみれているのは切り傷と土に汚れているらしく、疲労と憔悴の色が隠せていない。
上半身。質素な薄い私服はところどころ損傷しており、その破けた口から覗く肌は青く腫れ上がっている。
最後に下半身。跳ね上げた泥で変色したパンツは裾がもうボロボロで、そして何より右膝の部分が、何かに切り裂かれたように三本の裂傷が走っている。黒く汚れ既に流血が固まりかけているこの膝の傷が、変わり果てた全身の中で一番酷い。
血相を変えてヘスティアはベルに詰め寄った。

「どうしたんだい、その怪我は!?　まさか誰かに襲われたんじゃあ!?」

「いえ、そんなことはなかったです……」

「じゃあ、一体どうして!?」

「……ダンジョンに、もぐってました」

うつむいてぽつりと吐かれた言葉に、ヘスティアは一瞬の間、怒ることも忘れ唖然としてしまった。

「ば、馬鹿っ！　何を考えてるんだよ!?　そんな格好のままでダンジョンに行くなんてっ……しかも、一日中!?」

「……すいません」

今ベルは防具を何も身に着けていない。
ダンジョンの中ではこんなもの裸も同然だ。凶暴なモンスターの一撃がそのまま致命傷になりかねない。刻まれている痛々しい傷がそれを雄弁に物語っている。
どうやら護身用に短刀だけは所持していたようだが……浅慮、愚行としか言いようがない。
このような装備でダンジョンに夜通しで挑もうなど、命知らずどころかただの間抜けだ。

「……どうしてそんな無茶をしたんだい？　そんな自暴自棄のような真似、君らしくないじゃないか？」

「……」

今のベルの有り様、ひいてはどこか暗い雰囲気に叱りつける気も失せたヘスティアは、諭すような優しい声音で語りかけた。
しかしベルは口を開こうとしない。前髪で瞳を覆って隠し、拒絶の意を言外に告げてくる。
ヘスティアは小さく溜息をつく。

「わかった、何も聞かないよ。君は意外と頑固だから、ボクが無理矢理聞き出そうとしても無駄なんだろうし」

「ごめんなさい……」

「なに、いいさ。じゃあ、先にシャワーを浴びておいで。血はもう止まっているみたいだけど、傷の汚れを落とさないと。その後すぐに治療しよう」

「……はい、ありがとうございます」

やっと小さく笑ったベルに、ヘスティアは内心で胸を痛めながら自分も苦笑した。

ドアの前から道を開けてやるとベルはぎこちなく歩き出す。どうやら右膝の怪我は思ったより体に響いているらしい。

見かねたヘスティアは己の身長の低さを恨みながらも、精一杯つま先立ちして肩を貸す。

「ご、ごめんなさい」

「謝ってばっかりだね、今日の君は。悪いと思っているなら、ちゃんと反省してくれよ？」

「は、はい……すいません」

「ほら、また」

密着し合いながらシャワー室を目指す。

部屋の一番奥にあるベッドのすぐ脇、取ってつけたような木材の白扉がそうだ。蝶番が外れかけ、微妙にドアの角度が傾いている。

うぬぅと力みながらベルの体を支えていたヘスティアだったが、そ

こでふと思い出したように口を開いた。

「ベル君、君はベッドに寝ること。いいね？」

「いいんですか……？」

「当たり前だろう。ここで君をソファーに放り出すほど、ボクは性根を腐らせてなんかないぜ？」

この怪我人に必要なのは深い休息だ。少しでも良い環境を提供するためにヘスティアは自分の本来の寝床を譲る。

そして、それを言い終えた後で、彼女はある悪戯を思いついた。

ベルの方を見て、ニヤリと笑みを浮かべる。

「その代わり、ボクも同じベッドで寝させてもらおうかな？　君を探すために散々駆け回ったんだ、もうヘトヘトだよ。……フフ、まさかぁ断ってくれないよねぇ？」

「あぁ、そうですね。神様も疲れてますよね。じゃあ、すぐに一緒に寝ましょう」

「……なぬっ？！」

キラーパスのつもりが華麗にスルーされ、挙句反撃の弾丸シュートをカウンターで決められたヘスティアは絶句した。

そこは慌てふためくところだろう、と心の中で突っ込む。逆に自分

が慌てふためいてどうするんだ、とも。
どうやら心身ともに疲れ果て思考能力が落ちているようだ。ベルは何を言われているのか自覚がないのかもしれない。
くそ、ベル君のくせに……！
と、歯を噛むヘスティアは、しかし顔を紅潮させて待ち受ける展開に胸を高鳴らせた。
抱き着く。絶対に抱き着く。胸の中でぐりぐりと顔を押し付けて少年の体を思う存分堪能する。
言質はとった、もうベルは逃げられない。じゅるり。

「神様……」

「……！　にゃ、にゃんだいっ？」

ぽつりと呟かれた声に裏返った返事をする。
まさか考えを見透かされたのかと一抹の危惧を抱きながらも、ヘスティアは次の言葉を待った。

「……僕、強くなりたいです」

「！」

はっと少年の顔を見る。彼の眼差しはここにはない何かに真っ直ぐ向けられていた。
ヘスティアはベルのその横顔に息を呑み、やがて目を伏せてから、
「うん……」と真摯に受け止めるのだった。

ベル・クラネル
Ｌｖ．０
力：Ｆ　４３（→２０１　耐久：Ｈ　５４（→８８　器用：Ｆ　５０（→１７９　敏捷：Ｆ　９７（→１５４　魔力：Ｉ　０
魔法

【】
スキル
【憧憬一途】
・早熟する。
・懸想が続く限り効果持続。
・懸想の丈により効果向上。

短刀：Ｇ　６９（→１４６

「――ッ」

ぴたっ、とヘスティアは手の動きを止めてしまった。
自分の眼下にある細い背中。
そこに秩序だって書き込まれた、あたかも古代書の一ページを彷彿させる【神聖文字（ヒエログリフ）】の全式構図――【ステイタス】。
一人のヒューマンに与えられし神の恩恵が示す成長過程を、彼女は戦慄した眼差しで受け止めていた。

ベルが帰ってきて一夜明けた。
極度の疲労から昨日丸一日を睡眠に費やし（ベルはヘスティアが一緒に寝ていることに気付いた瞬間絶叫した）、早い時間帯に起きた彼女達はとりあえずということで【ステイタス】の更新を行っている。
いつものようにベルの背にヘスティアが腰かけ、いつものように「神針」を用いて【ヒエログリフ】を刻んでいく作業……それがいつもとは異なりだしたのは、ベルの背に徐々に浮かび上がっていく【

ステイタス】が信じがたい全容を描き始めてからだった。

――早過ぎる。

ヘスティアが神の恩恵を授けるのは、自分の【ファミリア】に加わったこのベルが初めてだ。

彼女は伝聞で得た知識でしか恩恵の進捗状況について詳しいことは知らない。どのような勝手なら熟練度が構築されやすく、どのような規則性をもって魔法やスキルが発現するなどという深いノウハウは持ち合わせていなかった。

だが、下界の者に刻まれる【ステイタス】が“こんなもの”ではないということはわかっている。

早過ぎる。熟練度の伸びが、異常なまでに。

これでは成長ではなく、“飛躍”だ。

（他の冒険者達と、比べるまでもないじゃないか……）

もし冒険者が全員ベルのような速度で成長しているのだとしたら、彼等の大半はとっくに現在第三級冒険者のラインとして定められているＬｖ．１に到達していることだろう。

Ｌｖ．１――冒険者の中堅クラスに身を置く者は、ほとんどが規模の大きい【ファミリア】の構成員達だ。冒険者の半数以上がいまだＬｖ．０のもとで燃え燻ぶっていた。

ベルは、そんな己と比べてひと回りもふた回りもキャリアの長い彼等を凌ぐ猛烈な勢いで、成長、発展を遂げている。

熟練度など２０以上もぽんぽんと上がるのは最初の内だけ。すぐに壁を迎えて頭打ちに陥りやすいと、親交のある神に愚痴をこぼされたことがある。

大半の者が一つの壁を境に伸び悩んでいるのだ。

（熟練度と【ランクアップ】は確かに密接に関係してるわけじゃない……でも、それにしたってこれは……！）

Ｌｖ．が次のステージに上がるのは、言ってしまえば“絶対的な”【経験値】の一定量超過。

弱いモンスターを倒し続けたところでＬｖ．は決して上がらない。

太古の下界の者達の言葉に則って言うならば、「神の試練」。

大きな困難――己より強大な相手との交戦、それが求められる。冒険者達の器を昇華させるためには、より質の高い【経験値】が不可欠なのだ。

その法則に従って言えば熟練度の高低は必ずしもＬｖ．の事情には関係しない。

論理的には基本アビリティがオールＳでもＬｖ．の上昇……【ランクアップ】しないことになるのだから。

だが、その冒険者が特化した分野は置いておくにしても、基本アビリティがＤ～Ｂの状態で【ランクアップ】する者が多いのも事実。

少なくともベルは、最強のＬｖ．０になる可能性を孕んでいることになる。

（こうまでいっぺんに成長した原因は……）

ベルの中で“何か”が膨れ上がったのか。

【憧憬一途】というスキルの特性をただ一人知るヘスティアは、無意識のうちに唇を噛んでいた。

神から言わせれば子供のような感情――嫉妬（ヘスティア）によって心を左右に揺さぶられる。

「神様？」

「！」

針を持つ手を止めたヘスティアを訝しんだのか、ベルが少し首を捻って声をかけてくる。

気を取り戻したヘスティアは笑って誤魔化しながら「ごめんごめん」と作業を再開させた。

いや、再開する振りをした。もう【ステイタス】の更新はほぼ終わっていたのだ。

（どうする……？　彼に、この【ステイタス】をありのまま告げるのか……？）

即席の自信、即席の強さは傲慢を招く。

ヘスティアは知っている。それがヒューマンに限らない子供達の性だ。傲慢は油断を引き寄せ、油断は死を呼ぶ。

ベルがそんな驕りを抱く人物ではないと信じたい一方、彼を過保護に見るヘスティアの心情が“もし”という可能性を切り捨てがっている。ベルを失うかもしれないという“もし”だ。

信頼と不安懸念、二つの感情を天秤にかけると、どうしても後者の方に傾きがちになってしまう。

（でも、ありのまま告げないということは、ベル君を騙すことになる……）

そしてそれはベルの成長を阻むことになりかねない。
先程述べた通り自分より強い相手と戦わなければ【ランクアップ】は望めない。本人が思い込んでいるよりも上の能力で低階層に留まっていても、それは無駄な行為に成り下がってしまう。
熟練度も、実力が同等以上のモンスターと交戦した方が上昇しやすいと聞く。

（……強くなりたい、か）

やがて、ヘスティアが末に選んだのは信頼だった。
自制の心で不安を抑えつけ、天秤を無理矢理傾ける。
「強くなりたい」という言葉が少年の恋心に端を発しているのだとしても、一つの覚悟を越え一皮剥けようとする――完全である自分達にはできない事柄を行おうとする――彼の背中を、押してやりたいとヘスティアはそう思った。

「ベル君、今日は口頭で【ステイタス】の内容を伝えていいかい？」

「あ、はい。僕は構いませんけど……」

こちらを見上げてくるベルの瞳を見据え、ヘスティアは告げた。

その尋常ならざる成長速度を。
ただし、【憧憬一途】というスキルの存在は伏せて、だ。

（『レアスキル』だよね、やっぱり）

発現するスキルの多くは、内実、冒険者達の間で共有されているものが多い。
スキルの入手自体が稀な事柄であるのだが、その中でも確認されたものを見ると、名称に差異はあっても効果が他のものと重複しているというケースがよく見られるのだ。
同じ種族間ならその可能性がぐっと増す。どうやら一つの種族の中で普遍的なスキルの種子が潜在しているらしい。
エルフならば知識や精神面、ドワーフならば力の強化といった具合にだ。
そして、それ唯一、あるいはより数が希少なものを総じて「レアスキル」と、神達は勝手に言っている。

（ばれちゃ不味い。絶対不味い）

何もそれをベルに教えないのは、意地悪しているからというわけではない。
本音を言ってしまえばヴァレン何某とかいう女へのジェラシーが七割はいかなくてもまぁ九割くらい関係しているが、とにかく、明るみになると色々面倒なことになるのだ。
他の神達は、レアスキルだとかオリジナルだとか、そういう特別な言葉にアホのように反応しやすい。もはや子供のように、全力で興

味を持って全力でちょっかいをかけたがるのだ。ニヤニヤしながら。
中には既に契約しているというのに自分の【ファミリア】に勧誘してくる馬鹿もいる。ゲーマー根性ここに極まりだ。

（この子は嘘が下手だ。問い詰められたら余計な疑いを持たれる。悪いけど、この一点だけは譲れない）

口を動かしながらせっせっと【ヒエログリフ】を付け足していく。
語られる【ステイタス】に驚いた顔をするベルを視界に入れながら、ヘスティアは己のしてやることに努めた。

「とまぁ、熟練度がすごい勢いで伸びてるわけ。何か心当たりはある？」

「い、いえっ、全然……あ」

「何？」

「い、いちおう……一昨日は7階層まで行ったんですけど」

「ぶっ!?　あ、あふぉーッ!!　防具もつけないまま到達階層を増やしてるんじゃない！」

「ご、ごめんなさいっ!?」

ぴょん、と背中から下りたヘスティアはベルとしばらく受け答えを

続けた。
彼の方は服を着ることを許されないまま、半裸の状態で時には怒られ時には説教され身を小さくしていく。

「はぁ……本題に入ろう。今の君は“理由ははっきりしないけど”、恐ろしく成長する速度が早い。伸びしろが大きいと言ってもいいのかな。どこまで続くかはわからないけど、言っちゃえば成長期だ」

「は、はいっ」

「……これはボク個人の見解に過ぎないけど、君には才能があると思う。冒険者としての器も、素質も、君は兼ね備えちゃってる」

ベルの現状は果たしてスキルだけが起因しているものか。
発現したスキルだけが、この少年の急激な飛躍の原因なのだろうか。
思い返せば片鱗はあったのだ。
一度は死にかけているとはいえ、それまでいち百姓に過ぎなかった彼が誰にも師事することなく、たった一人でダンジョンへもぐり着実に成果をあげてきた毎日。
例え早熟という名のスキルを手に入れたとはいえ、戦闘に活かす身のこなしや技術は彼が実戦で組み立てていくものだ。どこを攻撃するのか、または防御するのか、一か八か回避するのか。スキルがあろうとなかろうと、戦闘の中で判断を下すのはベル他ならない。それは彼自身の“力”だ。
今日まで一人でダンジョンを戦い抜いてきたベルには、冒険者としてのセンスがあるように思える。

「……君はきっと強くなる。そして君も、今より強くなりたい」

「……はい」

ベッドに腰かけた姿勢で目を逸らさないベルに、ヘスティアは自分の両手を胸に抱いた。
心細そうに目を伏せがちにして、吐露する。

「……約束して欲しい、無理はしないって。先日のような真似はもうしないと、誓ってくれ」

「ぼ、僕は……」

「強くなりたいっていう君の意志をボクは反対しない、尊重もする。応援も、手伝いも、力も貸そう。……だから」

潤みそうになった瞳を我慢して、ヘスティアはベルに心底願った。

「……お願いだから、ボクを一人にしないでおくれ」

その効果は、覿面だった。
はっと肩を揺らし大きく目を見開いたベルは、何かを思い出すように、自分に課した約束を掘り返すように、うつむいて目を瞑り自己の内面を埋没する。
静寂がヘスティアの耳をくすぐる。二人にとって長い沈黙が訪れた。

「……はいっ」

ベルが顔を上げる。
申し訳なそうな、泣き出してしまいそうな、喜んでいるような、そしてどこかふっきれたような顔だ。
嘘偽りのない一つの笑顔が、多くの言葉で飾るより遥かに信頼を預けてくる。
目の前の少年は約束を守ってくれると、ヘスティアは確信することができた。

「無茶、しません。頑張って、必死をこいて強くなりにいきますけど……絶対、神様を一人にしません。心配、させません」

「その答えが聞ければ、もう安心かな」

その胸に飛び込みたくなる衝動を堪え、ヘスティアもにこっと笑った。
服を取ってベルに渡してやる。
照れたように「すいません」と言って着替え始める彼に背を向けて、ヘスティアは視線をどこかに馳せるように天井を見据えた。

（……よし）

早速ベルのために動こうと決める。
テテテテテ、と規則性のない歪なフローリングの上を駆け、食器棚に飛びつく。
中段ほどにある引き出しを開けて中を漁り始めた。
ビラやバイトの通達書等でごちゃまぜになっている箱を手でかき回しながら、ややあって目当てのものを見つける。
『ガネーシャ主催　神の宴』と簡単に書かれた、ある催しへの招待状だった。

（ヘファイストスも来るよね……？）

この隠し部屋を恵んでくれた友人の顔を思い浮かべる。
仕事に真面目で広大なオラリオの都市をしょっちゅう飛び回っているため、彼女とは連絡を取ろうとしてもそう簡単には捕まらない。
会うためにはこの催しを利用するしかないと判断する。
開催日は……本日の夜。
げっ、と漏らしたヘスティアは慌ただしく動き始めた。

「ベルくんっ、僕は今日の夜……いやここ何日か部屋を留守にするよっ。構わないかなっ？」

「えっ？　あ、わかりました、バイトですか？」

「いや、行く気はなかったんだけど、友達の開くパーティーに顔を出そうかと思ってね。久しぶりにみんなの顔を見たくなったんだ」

「だったら遠慮なく行ってきてください」とベルは了承した。友達は大切ですから、と笑ってむしろその行為を勧める。
勝手で悪いと思いながらもヘスティアは頷いて、クローゼットを物色する。
一番マシなものを選んでバックに詰め、その他の荷物を整理、後はバイトのシフトを頼みに行こうと部屋の外に向かった。
ドアに手をかけたところで後ろを向く。

「ベル君、もしかして、今日もダンジョンへ行くのかい？」

「そのつもりなんですけど……ダメですかね？」

今さっき約束を交わしたばかり。やはり自重しなければいけないかとベルはおずおずと上目遣いになる。
ヘスティアは顔を振って笑ってやった。

「ううん、いいよ、行ってきな。ただし、引き際は考えるんだよ？まだ怪我をしてるんだからね？」

「はい、ありがとうございますっ」

嬉しそうに頭を下げてきたベルにえくぼを作りながら、ヘスティアは部屋を後にした。

太陽が闊達と空に輝いている。
時間は多分十時くらい。既に人通りでこみあっているメインストリートを、僕は一人小走りで進んでいた。
僕の格好は冒険者用の装備で固められている。このままダンジョンへと向かうつもりだ。
神様に言われた通り、膝の傷はまだ痛む。7階層で出てきたモンスターの攻撃は痛烈だった。完治まではもう少しかかりそうな気がする。
だから、無理はしない。冒険もしない。ただ、やれることをひたすらに取り組む。

明確な目標ができた。目指す場所が遥か遠くに見えた。
一昨日までならそこまで走り続けなければいけないと、はやる感情にただ突き動かされていたけど、今は違う。
神様に説き伏せられ、頭も冷えた。僕は、僕が持続できる最高速度で進んでいく。

時間が惜しいと思う気持ちは正直拭えないけど、あの人に、ヴァレンシュタインさんに追い付くには、きっとこれが一番の近道だとも思う。
無理した分、ツケは必ずいつか返ってくるから。
神様の顔を思い浮かべながら、無理はしない無理はしない、と小さく口ずさみ、僕はある地点まで来ると足を止めた。
ダンジョンに行く前に、寄るところがあるのだ。

「ちょっと気まずいなぁ……」

『ｃｌｏｓｅ』と看板がかかっているドアの前で頭をかく。
僕はちょっとその場で悩んでから、意を決して酒場「豊饒の女主人」へ足を踏み入れた。
カランカラン、とドアをくぐった僕の頭上で鐘が鳴り響く。

「すいません、お客様。当店はまだ準備中です。時間を改めてお越しになっていただけないでしょうか？」

「まだミャー達のお店はやってないのニャ！」

テーブルにクロスをかけていたエルフの店員とキャットピープルの店員が、僕にすぐ気付いて対応しにきた。
当然どちらも可愛い。シルさんと同じ制服に身を包む彼女達は眉目秀麗に天真爛漫と、ずいぶん対象的だった。
最近エルフ好きであると自覚した僕は、つい耳の長い彼女の声に理由もなく緊張してしまう。

「すいません、僕はお客じゃなくて……その、シルさん……シル・フローヴァさんはいらっしゃいますか？　あと女将さんも……」

僕の言葉に少し目を丸くした二人は、すぐに何か気付いたように視線を改めた。

「ああぁ！　あん時の食い逃げニャ！　シルに貢がせるだけ貢がせといて役に立たなくなったらポイしていった、あん時のクソ白髪野郎ニャ！！」

「貴方は黙っていてください」

「ぶニャ！？」

「失礼しました。すぐにシルとミア母さんを連れてきます」

「は、はい……」

キャットピープルの店員さんへ見舞った一撃が見えなかった……。猫人の襟を掴みずるずると引きずっていくエルフの店員を汗と一緒に見送った後、手持無沙汰になったので、僕は店内をぐるりと見る。以前来た時とは様相が違っていて、今は本当に喫茶店みたいな装い。多くの冒険者がダンジョンに出ている昼間とそうでない夜とじゃあ、お客さんのターゲットが違うのかな？　そういえばカフェテラスもあったんだっけ。

本当によく考えられてるな……。

「ベルさん！？」

階段を急ぎ足で下りる音がして、すぐに厨房の奥からシルさんが現れた。
最後に別れた時のことを思い出すと穴に埋まりたくなるけど、僕は腹に力をこめて彼女に歩み寄る。

「一昨日は、すいませんでした。お金も払わずに、勝手に……」

「……いえ、大丈夫ですから。こうして戻ってきてもらえて私は嬉しいです」

腰を折って謝罪を告げると、シルさんはいつかのように微笑んでくれた。
事情を詮索しようともせず温かく包み込んでくれる彼女の姿に、不覚にも涙が出そうになった。
僕はさもゴミが入ったというような仕草で目元を拭った後、用意していたお金を渡す。

「これ、払えなかった分です。足りないと言うなら、色を付けてお返しします……」

「私の口からはそんなこと言えません。そのお気持ちだけ十分です

……私の方こそ、ごめんなさい」

最後にぽつりと呟かれた言葉に、僕は慌ててシルさんが罪悪感を抱く必要なんてないと言い寄った。

ばっばっ、と身ぶり手ぶりを大げさにやって説明する。

シルさんは僕の迫力に押されてきょとんとした後、クスクスと、やっといつものように笑みを漏らしてくれた。ほっと息をつく。

それからちょっと顔を赤くして、彼女は僕の顔を覗きこむように見つめてきた。……って、え？

「ベルさんは……今からダンジョンへ？」

「は、はい。そのつもりです」

「でしたら……」

少し赤くなった耳を髪の隙間から覗かせながら、シルさんはぱたぱたと音をたててキッチンに消える。

僕は今の表情に、言うのがはばかれるちょっとあれでこれなイヤそれでも僕にはヴァレンシュタインさんという心に決めた人が……！

と確証もないのにつんのめり過ぎた思考を先走らせていると、ほどなくしてシルさんが帰ってきた。

今度は大きめなバスケットを持ってきている。

「もらっていただけませんか？　今日は私達のシェフが作った賄い料理なので、味は折り紙つきです。……その、私が少し手をつけた

ものもあるので、それもよろしかったら……」

あぁそういうことですか。あくまで先日のようなノリでかつ自分も料理作ってみたんだけど味が保障できずに恥ずかしい云々。ですよねー、と僕は心の中で自嘲しながらそのバスケットを受け取った。身の程を知ろうよ僕。

「坊主が来てるって？」

ぬぅ、とカウンターにあるドアから出てきたのは女将さん――ミアさんだった。
えもいえない存在感に僕は少し後退してしまう。

「ああ、なるほど、金を返しに来たのかい。感心じゃないか」

「ど、どうも……」

「シル、アンタはもう引っ込んでな。仕事ほっぽり出して来たんだろ？」

「あ、はい、わかりました」

シルさんがお辞儀をして戻っていく傍ら、ミアさんは豪傑（豪快じゃない）な笑みを浮かべて僕の胸をその太い指でどついてきた。
ていうかドワーフなのにでかい。横も縦も僕より優にある。

そしてこの人曰く、「このまま帰ってこなかったらこっちが“けじめ”をつけに行ってやった」とか、「あと一日遅れてたら久しぶりにアタシのスコップが轟き叫ぶところだった」とか。
マジ僕ファインプレーだよ……！

『シル、あれを渡しては貴方の分の昼食がなくなってしまいますが……』

『あ、うん。一回くらいは我慢できるよ？』

『なんで我慢してまであいつに渡すニャ？　冒険者なら昼飯くらい買えるはずニャ』

『……』

『おーおー、不躾なこと聞くもんじゃニャいぜ、お二人ニャン。つまりあの少年はシルにとっての……これニャ？』

『違いますっ！！』

厨房の方が騒がしくなったような気がしたけど、気にしてる余裕がなかった。
僕はミアさんの前で不用意なことはしてはいけないと心に誓う。

「シルには改めて礼を言っときな。ウチの連中はアタシを含めて血の気が多いヤツ等だから、アイツが説得していなかったら、アンタ今頃は湖に沈んでるよ」

「……」

笑えない。

「飛び出しってったアンタを追いかけていったみたいだけど、結局、会わなかったんだろう？　肩を落として塞ぎ込んでいるアイツを見て、ほれ、あのエルフのリューが真剣もって出ていきそうになってね。止めるのにホント一苦労したんだから」

エルフ好きの僕は、どうやらエルフのことを誤解していたらしい。

（でも、そっか……あんな僕を、追いかけてきてくれたんだ……）

話を聞いて、やんわりと胸のあたりから熱が灯る。
本当にいつか恩返しをしたいと、そんなことを思った。

「……坊主」

「何ですか？」

「冒険者なんてカッコつけるだけ無駄な職業さ。最初のうちは生きてることだけに必死になってればいい。背伸びしてみたって碌なことは起きないんだからね」

僕は目を見開いた。
あの時ミアさんもカウンターにいたから、僕の事情を見通しているのだろうか？
彼女はニッと笑みを浮かべる。

「最後まで二本の足で立ってたやつが一番なのさ。みじめだろうが何だろうがね。すりゃあ、帰ってきたソイツにアタシが盛大に酒を振る舞ってやる。ほら、勝ち組だろ？」

ミア、お母さん……っ！

「気持ち悪い顔してるんじゃないよ。そら、アンタはもう店の準備の邪魔だ、いったいった」

くるりと回転させられてドンッと背中を押された。
呼吸が半分止まりながらも、僕の感謝の念はつきなかった。
今ようやく、僕の心の隅にしつこく残っていた影が取り払われた。
【ロキ・ファミリア】のあの獣人の青年の言葉が、今は純粋な燃焼材に変身している。
今できること、最大戦速で、無茶なく、後は必死に生きる。
方針が完璧に固まった。

「坊主、アタシにここまで言わせたんだ、くたばったら許さないか

らねえ」

「大丈夫です、ありがとうございます！」

僕はつい「いってきます！」と叫んでしまい、大通りを走っている最中、ずっと顔を赤くさせっぱなしだった。

夜。

点々数多と光をちりばめる巨大な都市オラリオの中でも、ソレは異彩を放っていた。むしろ奇怪を極めていた。

象の頭を持つ巨人像が、白い塀に囲まれただけのただっ広い敷地の中で、胡坐をかいてデンと座っている。

佇立する像の大きさは５０メートルはくだらないか。見さらせと言

わんばかりに威風堂々と胸を張るその姿は、見た者にちょっと変わった感情を喚起させることで市民の間で有名であった。今は多くの大型の魔石灯でライトアップされている。
驚くことなかれ、これは歴とした建造物なのである。
浅黒い肌に黒髪という出で立ちのイケメンの神、ガネーシャが何を思ったのかこれまでの【ファミリア】の貯金をはたいて建造した巨大施設。
【ガネーシャ・ファミリア】の本拠、「俺がガネーシャだ」である。
構成員達の間ではもっぱら不評であり、彼等は泣く泣くこの建物を出入りしているらしい。ちなみに入口は胡坐をかいた股間の中心だ。

『ガネーシャさん何やってんすかｗｗｗ』

『ガネーシャさんマジパネェっすｗｗ』

貴族然とした正装を着込んだ人並み外れた美丈夫達が、笑いながら股間の中をくぐっていく。
彼等は全員、神だ。
今日ガネーシャ主催で開かれる「神の宴」に招待された来賓達である。
「神の宴」とは、詰まるところ、下界にそれぞれ降り立った神達が顔を合わせる同窓会のようなものだ。
どの神が主催するだとか日程はいつだとか、そのような決まりは全くもってない。
ただ宴をしたい神が行って、ただ宴に行きたい神が足を運ぶ。神達の気まぐれと奔放さの一片がここに示されていた。
招待状はその神の【ファミリア】の能力で可能な範囲に配られるので、参加人数は主催側の規模によってまちまちだ。

【ガネーシャ・ファミリア】はオラリオの中でも指折りの【ファミリア】なので、この迷宮都市内で居を構えている神達には全てお呼びの声がかかっていた。
ヘスティアもその一人である。

「むっ！　給仕君、踏み台を持ってきてくれ！　早く！」

「は、はい！」

建物の外見とは異なり落ち着いた内装の大広間。
多くの神達が出席しているにも関わらず全く混雑しない会場は、立食パーティーの形式が取られている。
がやがやごたごたと喧騒が絶えない中、ヘスティアは【ガネーシャ・ファミリア】の構成員が務めるウエイターを使い、多種多様の料理と格闘していた。
彼女の体格ではテーブルの奥の方にある料理には手が届かないのだ。

「（さっ！さっ！さっ！）」

「……」

持参したタッパーに日持ちのよさそうな料理を次々と詰めこんでいくヘスティア。それを見せつけられる給仕はなんとも言えない顔をする。
タダ飯ということで遠慮するつもりは彼女には毛頭なかった。ヘスティアはここにいるどの神よりも貧乏【ファミリア】、ベルの負担

を減らすためなら体面など一切気にしない。どんな節約にも乗り出す意気ごみである。
見れば、彼女のみ豪奢な服やドレス等ではなく、少しフォーマルな感じで誤魔化した洋服だった。

『あれ、ロリ巨乳きてんじゃん』

『ていうか生きてたのかｗｗ』

『いや、あいつ西の商店街でバイト頑張ってるぞ。露店で客に頭撫でられてた』

『さ・す・が・ロリ神ｗｗｗ』

当然そんな振る舞いをしていれば目立つ。
どの相手との話にも興じず並べられる料理を貪っているのだから、その外見的特徴とあいまって、神達の目にとまるのは早かった。

『……あれ、ロリ巨乳の信仰値、めちゃくちゃ上がってね？』

『えっ？　それどうやって見んの？』

『そんなことも知らねえのかよ。こうだよ、こう、隠しパラメーター見るように眉間に力をこめると、視界の中に……』

『あっ、本当だ、出てきた。……あれ、お前……信仰値マイナスになってない？』

『ちょｗｗ　【ファミリア】離反フラグｗｗｗ』

神達の会話などいつもこのようなものだ。
いちいち構っていたらきりがないし、自分が馬鹿にされるのは目に見えている。
ちょっかいを出してこない限り、その他大勢には無視を決め込むのがちょうどいい。
タッパーに入れる際に時折口の中にも料理を放り込んで、ヘスティアはむくむくと丸い頬っぺたを動かしていた。

「何やってんのよ、あんた……」

「むぐ？　むっ！」

呆れた声がヘスティアの側からかかる。
振り向くと、視界に映るのは燃えるような紅い髪と真紅のドレス。
線が細くありながら鋭角的である顔立ちは秘めた意志の強さを表していた。耳につけた貴金属のイヤリングはむしろその炎のような美貌に力負けしている。
右眼には眼帯をした麗人が、ヘスティアを呆れた色をした左眼で見下ろしていた。

「ヘファイストス！」

「ええ、久しぶり、ヘスティア。元気そうで何よりよ。……もっと

マシな姿を見せてくれたら、私はもっと嬉しかったんだけど」

腰に手を当て天井を見上げるヘファイストスは、腰まで伸ばし一つに結わえている長髪をきらめかす。
天井から魔石灯の光を浴びるその紅色の細糸の束は、砂糖が練り込まれたように輝いていた。
いつ見ても綺麗な髪だと心の内で息をつきながら、ヘスティアは嬉しそうな顔をして彼女に駆け寄る。

「いやぁ、良かった。やっぱり来たんだね。ここに来て正解だったよ」

「何よ、言っとくけどお金はもう1ヴァリスも貸さないからね」

「し、失敬な！」

逆にヘファイストスは友好的ではない目を作って、ヘスティアに辛辣な物言いをした。
ヘスティアがベルと会う前に厄介になっていた神友（しんゆう）が、このヘファイストスだ。
付き合いは長く歴とした親友といえる間柄であるが、このオラリオに住みついてから【ファミリア】も作らず全く働こうとしなかったヘスティアへの信は、ヘファイストスの中でガタ落ちになっていた。
堪忍袋の緒が切れて【ファミリア】のホームから追い出した後も、ヘスティアは散々ヘファイストスを頼りにきて、やれお金がないだの仕事が見つからないだの雨を凌げる場所が発見できないだの、とにかく彼女の手を焼かせに焼かせた。

元来面倒見がいいヘファイストスは小さなこの親友を甘やかすわけにはいかず、かといって厳しく突き放して行き倒れにさせるわけにもいかず、当時は対応に悩まされたものだった。
結局、下水道の隠し部屋を与え、今のバイトを探してやったのもヘファイストスの手回しだ。
ヘスティア自身が独力でかなえたものといえば、【ファミリア】にベルを加入させたことくらい。
実はヘスティア、ベルの前では大人ぶってはいるが、一人では何もできないダメダメな神の筆頭であった。

「ボクがそんなことをする神に見えるかい！　そりゃヘファイストスには沢山手を貸してもらったけど、今はおかげでなんとかやっていけてる！　今のボクが親友の懐を食い漁る真似なんかするもんかっ！」

「たった今、普通にタダ飯を食い漁っていたじゃない」

「う〝っ……いや、これは……どうせ残るんだし……粗末に捨てるくらいならボクが有効利用してあげようかな、なんて……」

「ほーほー、立派じゃない、その乞食みたいな精神。わたしゃあ、あんたのそんな姿に感動して涙が止まらないわよ」

「ぐぬぅ……！」

ハンと鼻を鳴らすヘファイストスにヘスティアは悔しそうに唸る。
そんな中、コツコツ、と。

靴を鳴らす楚々とした音が、ヘファイストスの後ろから近付いてきた。

「ふふ……相変わらず仲が良いのね」

「え……フ、フレイヤっ？」

ヘスティアの視界に現れたその女神は、容姿の優れた神達の中でも群を抜いていた。一線を画してしまっていると言ってもいい。新雪を思わせるきめ細かな白皙の肌。細長い肢体は宙を泳いだだけで見る者を魅惑するような色香を漂わせており、小振りで柔い臀部とその上に乗るくびれた腰はもはや直視することが理性に危うい。金の刺繍が施されているドレスは胸元が開いており、生地一枚に閉じ込められている十分な容量を誇る形のよい胸は、暑いのか、谷間が桜色に染まっている。

黄金律という概念がここから摘出されたかのような、完璧なプロポーション。

睫毛は儚く長く瞳は切れ目で涼しく、相貌は後光を発するごとく凛々しく。

もはや狂っていると形容してもいいほどの比類ない美貌。

“美に魅入られた”神、フレイヤが、長い銀髪を揺らしてヘスティアの前までやって来た。

「な、何で君がここに……」

「ああ、すぐそこで会ったのよ。久しぶりー、って会話してたら、じゃあ一緒に会場回りましょうかって流れに」

「か、軽いよ、ヘファイストス……」

「お邪魔だったかしら、ヘスティア？」

「そんなことはないけど……」

常に薄く微笑を湛えている美神が問いかけてくる。
ヘスティアは口を曲げながら言った。

「ボクは君のこと、苦手なんだ」

「うふふ。貴方のそういうところ、私は好きよ？」

止めてくれよ、とヘスティアは手を振った。
神達から頭一つ飛び抜けた容姿を持つこのフレイヤは、「美の神」と呼ばれる、神々の中でも特に見目麗しい者達の中の一人だ。
基本的に移り気な神達が、涎を垂らして夢中になってしまうほどの力――美が彼等彼女達にはある。下界の者が一目見ればその瞬間より骨の髄から虜になることだろう。
だが、「美の神」達は一様に食えない性格をしている。
これも他の神々が霞んでしまうくらいに。
程度はあれど、関わりたくないというのがヘスティアの本音だった。

「おーい！　ファーイたーん！　フレイヤー！　ドチビー！！」

「……最も、君よりずっと大っ嫌いなやつがボクにはいるんだけどねっ」

「あらあら、それは穏やかじゃないわね」

品良く微笑むフレイヤから視線を切って回転すると、大きく手を振りながら歩み寄ってくる女性の神がいた。
朱色の髪と朱色の瞳。いつもは紐で結びまとめてある簡単な髪型を、今日は合わせてか夜会巻きにしている。細身の黒いドレスを着こなしていた。
フレイヤが出てきた後なので既に二番煎じな感は否めなかったが、彼女も当然ヘスティア達と同じように顔立ちが整っていた。

「あっ、ロキ」

「何しに来たんだよ、君は……！」

「なんや、理由がなきゃ来ちゃあかんのか？　『今宵は宴じゃー！』なノリやろ？　むしろ理由を探す方が無粋っちゅうもんや。はぁ、マジで空気読めてへんよ、このドチビ」

「……！　……！！」

「凄い顔になってるわよ、ヘスティア」

自分より頭二つは高いロキに馬鹿にされたヘスティアは顔を引き攣らせる。

彼女に対してもはやヘスティアが語ることは何もない。
この女は、敵だ。

「本当に久しぶりね、ロキ。ヘスティアやフレイヤにも会えたし、今日は珍しいこと続きだわ」

「あー、確かに久しぶりやなぁ。……ま、久しくない顔もここにはおるんやけど」

糸目がちになりやすい瞳を薄く開いて、ロキは銀髪の女神にニヤニヤと視線を送った。
フレイヤは骨抜きになっている給仕から頂戴したグラスを口元に、目を瞑って微笑を崩さない。

「なに、あんた達どっかで会ってたの？」

「先日にちょっと会ったのよ。といっても、会話らしい会話はしていないのだけど」

「よく言うわ、話しかけんなっちゅうオーラ、これ見よがしに出しとったくせに」

「ふーん。あ、ロキ、貴方の【ファミリア】の名声よく聞くわよ？上手くやってるみたいじゃない」

「いやぁー、大成功してるファイたんにそんなこと言われるなんて、うちも出世したなぁー。……ま、でも今の子達は確かに、ちょっと

うちの自慢なんや」

頭に手をやって照れくさそうに【ファミリア】の構成員について語るロキには、彼等へ向かう情が見え隠れしていた。
つんとしていたヘスティアはその話を聞いて、丁度いいとロキに質問を投げかける。

「ねぇ、ロキ。君の【ファミリア】に所属しているヴァレン何某について聞きたいんだけど」

「あっ、【剣姫】ね。私もちょっと話を聞きたいわ」

「うぅん？　ドチビがうちに願い事なんて、明日は溶岩の雨でも降るんとちゃうか？　ハルマゲドーン！　ラグナロクー！　みたいな感じで」

噛みつくぞこの野郎、とヘスティアは思った。

「……聞くよ。その噂の【剣姫】は、付き合ってるような男や伴侶はいるのかい？」

「あほぅ、アイズはうちのお気に入りや。嫁には絶対出さんし、誰にもくれてやらん。うち以外があの子にちょっかい出してきたら、そいつは八つ裂きにする」

「ちッ！」

「何でそのタイミングで舌打ちすんのよ……」

アイズ・ヴァレンシュタインがロキの庇護のもとで大切に扱われていることはわかった。
きっと自分がベルにそうするような感じだろう。いっそ意中の相手がいてくれれば良かったものを、とヘスティアは結構黒い思考を展開する。
その隣で呆れ返っていたヘファイストスだったが、ふと気付いたようにロキに声をかけた。

「ん、今更だけど、ロキがドレスなんていうのも珍しいわね？　いつもは男物の服なのに」

「フヒヒ、それはアレや、ファイたん。どっかのドチビが慌ただしく、パーティに行く準備をしてるって小耳に挟んでなぁ……」

ちらりとヘスティアに流し目を送ってから、腰を折り、背の低い彼女の顔にぐっと顔を寄せた。

「ドレスも着れない貧乏神をぉ、笑おうと思ったんやぁ」

（うぜぇえええええええええええええええええええええええええ！！）

眼前でニマァと口を吊り上げるロキに、ヘスティアは大爆発しそうになった。
いつもこうなのだ。ロキとは以前から大した親交もなく、初めて出会ってからまだ百年も経っていない。
にも関わらずこの神はヘスティアに会う度におちょくって……いや、馬鹿にするためにわざわざ会いにやってくる。
実は理由は既に筒抜けている。それは彼女にはないものを、ヘスティアが持っているからだ。
デデン、と胸に取り付けられたこの巨峰である。

「ふんっっ！！　こいつは滑稽だ！　ボクを笑うために自分のコンプレックスの無乳を周りに見せつけるなんて、ロキッ、君は笑いの才能があるね！」

「んなっ！？」

「ああ、ゴメンゴメン！　笑いじゃなくて穴を掘る才能だったね！　……墓穴っていう穴のさぁッ！！」

怒りに顔を赤くしていたヘスティアに代わって、今度はロキがカァーッと赤面する番だった。
今のロキのドレスはある程度露出が高い。悲しいまでに平原のような胸板が生地の中でスカスカと音をたてている。
腕を組むヘファイストスは「始まった……」と半眼でそれを静観する構え。
果実酒を嗜んでいたフレイヤは、相変わらず上品な様でクスッと笑みを滲ませた。
二人の標準以上の胸が華麗なドレスの中で形を変える。

「大体その戦闘能力ゼロの胸でどれだけ男を失望させてきたんだよッ！　絶壁なだけに絶望とか、馬鹿じゃないの！？　あっ、今ボク上手いこと言ったねぇ！」

「全然上手くないわボケェえええええええええええええええ！！」

「ふみゅぐぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅぅ！？」

瞳に涙を溜めたロキがとうとうヘスティアに掴みかかった。
その柔らかい頬っぺを両手でつまみ、引っ張る。縦に横に斜めに伸ばしてみょんみょん蹂躙する。
同じく涙目になって眉を吊り上げるヘスティアは応戦するが、彼女の短い手足ではしなやかで長い肢体を持つロキには届かず、ことごとく空を切った。

『おっ、始まった』

『ロリ巨乳とロキ無乳とかｗｗｗ』

『ロリ巨乳が勝つに１００００ヴァリス』

『無乳が最後の最後でうっかり発動させるに１００ペソ』

『打ちひしがれたロキたんを俺が全力で慰めるにスターチップ全部』

『賭けになってねーじゃねえかｗｗｗ』

見物だ見物だと取り巻き出す神達。
こいつ等……、とヘファイストスがげんなりする間にも熾烈な戦いは続いた。
プニプニの頬をがっちり掴んだロキの手が縦横無尽に動く度、ヘスティアの小さな体もつられて揺さ振られる
揺れて揺れて、揺れる。
たゆんったゆんっ、揺れる。

「……ふ、ふん。……きょ、今日は、こんくらいにしといてやるわ……」
（（（（（（（（めっちゃ動揺してる……））））））））

やりきれないように目を逸らしたロキの手の中から、どさっとヘスティアが床に落ちた。
ゴロゴロとのたうち回りながらと苦悶する幼女には一瞥もくれず、ロキは体を震わしながらその場を離れていく。
試合に勝って勝負に負けた敗者の姿だ。

「ッゥ……！　今度現れる時は、そんなド貧層なものをボクの視界に入れるんじゃないぞっ、この負け犬めっ！！」
「うっさいわアホォーッ！　覚えとけよぉおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

ついには涙をまき散らしてロキは会場を出ていった。
やっぱりな、という感想と一緒に神々がヘスティア達の周りから散っていく。

「本当に丸くなったわ、ロキ……」

「丸くなったっていうか……小者臭しかしないんだけど……」

ぽつりと呟かれるフレイヤの言葉にヘファイストスは本気で戸惑った顔をするしかない。
フレイヤはくすりと笑って自分の髪を撫でつける。

「ここに来る前までは、暇つぶしのためにどこかの神達に殺し合いをけしかけていたのよ？　今の方がずっと可愛いわ。何より危なっかしくないもの」

「そりゃあ、ね。そういえば、あんたとロキは結構付き合いが長いんだっけ？」

「ええ。貴方達と同じくらい」

よたよたと立ち上がるヘスティアをヘファイストスは後ろから支えてやる。
腐れ縁よ私達は、と彼女はフレイヤに苦笑してみせた。

「ロキは子供達が大好きみたいね。だからあんな風に変わったのかもしれない」

「……甚だ遺憾だけど、まぁ、子供達が好ましいということだけは、ボクもアレに賛成してあげるよ」

「へぇ、前まで【ファミリア】に入ってくれなくて子供達は目がないーい、なんて言ってたくせに……貴方の【ファミリア】に入ったベルっていう子のおかげ？」

「ふふん、まぁね。ボクにはもったいないくらい、すごく良い子だよ」

「確か白髪で藍色の目をしたヒューマンだっけ？　あんたが【ファミリア】ができたって報告しに来た時は驚いたなぁ……」

うんうんと頷くヘファイストスの隣で、フレイヤが動きを作った。コトン、と持っていたグラスをテーブルの上に置いて、髪を翻す。

「じゃあ、私もいくわね」

「え、もう？　フレイヤ、あんた用事があったんじゃないの？」

「もういいの。確認したいことは聞けたし……」

「……あんた、ここに来てから、誰にも聞くような真似してなかっ

たじゃない」

パーティーの最初から彼女に付き添っていたヘファイストスは怪訝な顔をした。

フレイヤはそんな彼女を無視し、ヘスティアの方を見下ろして、これまでとは少し違った形で笑む。

ぱちくりと、ヘスティアは瞳を瞬かせた。

「……それに、ここにいる男はみんな食べ飽きちゃったもの」

『『『『『『『『『『『『サーセンｗｗｗ』』』』』』』』』』』』

「……」

「……」

それじゃあ、と言い残して美の神はひしめく神達の中に消えていった。

取り残されたヘスティアとヘファイストスは微妙そうな顔をして、隣り合う互いの顔を見合わせる。

「やっぱり、彼女も『美の神』だ……だらしないよっ」

「まぁ、フレイヤ達が愛や情欲を司らなきゃ、誰が務めるんだっていう話にもなるんだけどね……」

「それでも彼女は【ファミリア】を持つ身だろう、自覚が足りな過ぎるっ。もしかしたら敵対するかもしれない神とだなんて……子供達に愛想つかされるよ！」

「フレイヤが微笑めば、それだけで構成員は補充できそうだけど……」

は、と小さい吐息をついたヘファイストスは、カリカリと右眼の眼帯をその細い指でかく。

彼女の癖だ。言葉では装っていても、胸中で納得していなかったり不満があったりすると、よくこの仕草をする。

ヘスティアはそれを見ながら自分もふんっと鼻を鳴らした。

「で、あんたはどうするの？　私はみんなの顔を見に回ろうかと思うけど、帰る？」

ぴくっ、とヘスティアは肩を揺らした。

本来の目的を思い出したからだ。

「もし残るんだったら、どう？　久しぶりに飲みにでもいかない？」

「う、うん、えーとっ……」

急にしどろもどろになったヘスティアにヘファイストスは首を傾げ

た。
細いうなじからこぼれる流麗な紅い髪に視線をさまよわせながら、ヘスティアはやがて覚悟を決める。
ゴクリと喉を鳴らした。

「そのぉ……ヘファイストスに頼みたいことがあるんだけど……」

「……」

すっ、と紅い左眼が細まる。
日頃の親しみやすい雰囲気から一変して、厳しさに溢れた空気を纏い出した。
金は貸さないと言い切った、先程と同じ姿勢だ。

「この後に及んで、また頼み事ですって？　あんた、さっき自分が言っていたことをよーく思い出してみなさい？」

「え、えと、何だっけっ……？」

「私の懐は食い漁らないって、そう言ってなかったかしら？」

あぁ言ってた、とヘスティアは空笑いした。
ゴミを見るかのような眼をする親友に、前言を撤回したくなる衝動がすごい勢いで襲いかかってくるが、ヘスティアはぐっと顎に力を入れてそれに耐える。
――胸にベルの顔を思い浮かべて、自分を奮い立たせた。

自分こそこの親友に愛想をつかされてしまうかもしれないと半ば覚悟しながら、ヘスティアはこの神の宴にやってきた目的を実行に移す。

「……一応聞いておいてあげるわ。な・に・を、私に頼みたいですって？」

目の前で仁王立ちするのは紅眼紅髪の神ヘファイストス。
天界では炎の神と称されていた彼女が作った【ファミリア】は、このオラリオにて冒険者の収入で唯一運営がされていない。
迷宮都市にも関わらず迷宮にもぐらないという奇特性を持つ【ヘファイストス・ファミリア】は、しかしこの都市に身を置く冒険者ならば誰もが知る大【ファミリア】である。
ブランド、と言ってもいい。
多くの人材を抱え、育成し、百の品に勝る一品を生み出すことで有名な業界大手の【ファミリア】。
オラリオ以外の世界諸都市からも引く手数多である彼女の【ファミリア】は、そう、『鍛治』の【ファミリア】だ。
ヘスティアは彼の【ヘファイストス・ファミリア】の永久現役社長に向かって、大きな声で自分の望みを放った。

「ベル君にっ……ボクの【ファミリア】の子に、武器を作って欲しいんだ！」

「神様、今日も帰ってこないのかな……」

ベルは夕飯の準備をしながら天井に呟きを昇らせた。

ヘスティアが出かけていって既に三日。まだ彼女は帰ってきていない。

相手は神で、彼等には手を出してはならないというルールが下界の者達の間で暗黙の了解として存在しているが、流石に心配になってきた。

出鱈目に探しにいってみようかと不安が募るのと、自分もこんな風に心配をかけていたのかと心を痛めるのは同時で、ベルは二つの意味で眉を落とす。

ドカンッ、バタッ、と扉が開いて何かが倒れる音が聞こえたのは、

それからすぐのことだった。

「え！？」

驚愕してキッチンを離れると、視界に飛び込んできたのは開けっ放しのドアの前で倒れ伏しているヘスティアの姿だった。下水道のフローラルな香りが開いた扉を通じて部屋に流れ込んでくる。

悲鳴をあげながらベルは彼女のもとに駆け寄った。ドアを蹴りで閉めるのも忘れない。

床に膝をついた態勢で、その小さな体を横抱きの形で抱きあげる。

「か、神様っ、神様！？　どうしたんですか、一体何があったんですか！？」

「……ど、土下座だ」

「ど、ドゲザっ？」

「首を縦に振ろうとしない頑固女神の前で、土下座を２９時間続けるという耐久レースを……」

「にっ、２９時間……！？　ご、拷問なんですか、ドゲザって！？」

「いや、それをすれば何をしたって許されて、何を頼んでも頷いてもらえる最終奥義……って、タケから聞いた……」

「タ、タケ？」

「タケミカヅチノカミ……」と息絶え絶えに呟くヘスティア。
神様絶対に騙されてるよ、とベルは悔し涙を堪えた。

「でも何でそんなことを……パーティーに行ってきたんじゃなかったんですかっ！？」

「……これ」

「えっ？」

懐から取り出されたケースにベルは目を丸くする。
ヘスティアの手がそれをたどたどしく開けると、中には棒状のようなもの――間違いなく鞘に収められた短刀が入っていた。
ベルは息を呑んだ。鞘に【？φαιστο？】という【ヒエログリフ】に酷似した刻印を見つけたからだ。
――ヘファイストス。
こればっかりは読めなくたってわかる。自分には一生縁がないと思っていた、あの【ヘファイストス・ファミリア】の店頭に掲げられているロゴタイプと一緒だったからだ。

「か、神様、これってっ……」

「ごめんね、心配かけて。……でも、ボク、見ているだけは嫌なんだ。養われるだけじゃあ……助けられてばかりじゃあ、嫌なんだよ」

ベルの震える手が柄を握っていると、ヘスティアはゆっくりと鞘を抜きとった。
現れるのは漆黒の刀身。
反りのない直刀は、現在使っている短刀と比べるまでもない切れ味を、その身へ宿しているのが一目でわかった。
びっしりと細かく刻み込まれているのは果たして【ヒエログリフ】か。
刃の先端から柄の終わりまでヘスティアの髪と同じ色に染まった短刀は、紫紺の光に濡れ、ベルの手の中でまるで赤ん坊のように息づいているかのようだった。

「知ってたよ。君がメインストリートにあるヘファイストスの店の陳列窓に、いつも顔を貼りつけていたのを。君の欲しがってたものじゃないと思うけど、でもコレ、世界に一つしかないんだ。すごいだろ？」

「そんなっ、でも、だってっ……ヘファイストスの武器はすごく高価でっ……お、お金はっ……！？」

「大丈夫、ちゃんと話はつけてきたから」

声も震え出せば瞳も震え出す。
そんなベルにヘスティアは疲労の濃い顔で、けれど穏やかな笑みを向けた。

「強くなりたいんだろ？」

「！」

「言ったじゃないか、手を貸すって。これくらいのお節介はさせてくれよ」

「ひっ……ひぐぅっ……」

「誰よりも、何よりも、ボクは君の力になりたいんだよ。……だってボクは、君のことが好きだから」

「……！」

ぼろろっ、とベルの瞳から涙滴が溢れ出す。
ヘスティアは頬を桜色に染め、満面の笑みを湛えた。

「いつだって頼ってくれよ。大丈夫、なんていったって、ボクは君の神様なんだぜ？」

ベルは限界を迎えた。
流れ出る涙をそのままに、くしゃあっと顔を歪めてヘスティアを抱きしめる。

「神様ぁ〜ッ！！」

「おいおい、刃が抜き身のまんまだ、危ないよ？」

口では言うが、ヘスティアもベルの背中に手を回した。
自分より大きなベルが首筋に顔を埋めてくるのを受け入れ、雪のように白い髪に指を這わす。
嗚咽と鼻水をすする音が耳朶を撫でてきた。
自分のためにみっともなく、その感情を隠しもせずにえんえんと泣いてくれる少年のことを、ヘスティアは誰よりも愛しく感じた。

（あぁ、良かった……）

本当の自分は愚図でノロマで要領が悪くて、少年の前で見せているヘスティアは、背伸びをして強がっているに過ぎないけれど。
でも、この子のためなら、ちょっとくらいカッコつけても構わないだろうと。
今この時を幸せと一緒に噛み締めながら、ヘスティアはそう思い。

（これでボク達は、相思相愛だ）

最後の最後で、彼女は盛大な勘違いをした。

【ベル・クラネル】
所属：【ヘスティア・ファミリア】
ホーム：下水道の隠し部屋
種族：ヒューマン
ジョブ：冒険者
・到達階層：７階層
・武器：短刀
所持金：７１００ヴァリス

【ステイタス】
Ｌｖ．０
力：Ｆ　４３　耐久：Ｈ　５４　器用：Ｆ　５０　敏捷：Ｆ　９７
魔力：Ｉ　０
《魔法》
【】
《スキル》
【憧憬一途】
・早熟する。
・懸想が続く限り効果持続。

・懸想の丈により効果向上。

短刀：Ｇ　６９

【装備】

≪短刀≫

・ギルドの支給品。威力は実は最底辺。

・防具とアイテムも合わせてベルは借金して購入。全額６８００ヴァリス。武器は日頃から整備費がかかるため、返済するのには半月かかった。

≪神様（ヘスティア）のナイフ≫

・３５年ローン４２０回払い。

・【ヘファイストス・ファミリア】のバベル支店で強制労働が確約されている。ヘスティア渾身の買物。

・「駆け出し冒険者に持たせる一級品」ということで頭を抱えたヘファイストスが、悩みに悩んで考案した作品。

・ヘスティアの髪と彼女自身の【ヒエログリフ】を編み込んだ特殊製法。ナイフ自体に【ステイタス】が発生している。

・装備者の成長――【経験値】の獲得――と連動して強化されていく。“生きた”武器。

・ヘスティアの恩恵を受けた者しか使いこなせない。それ以外の者が扱うとガラクタに成り下がる。

・装備者が“最強”になった時、このナイフも事実上“最強”になる。ヘファイストス曰く「邪道の武器」。

5話　デートのちサポーター

じり、じり、と土を噛む音が鳴る。
天井から燐光の光が落ちてきて、四方八方を薄緑色の壁に囲まれた辺り一帯を照らし出す。「ルーム」と呼ばれている、ダンジョン内で正方形に開けた空間だ。
僕は逆手に持った《神様のナイフ》をソイツに向けていた。
計六本の足に二本の腕、大きな二つの瞳。茶色一色に染まっている全身はまさしく蟻というような風貌。
普通の蟻とは異なるのは、全長が僕と同じくらい巨大なことと、そのくびれた腰を起点にして上半身がもたげるように起き上っているということ。無理矢理わかりやすいイメージをあげるなら、虫の下半身をしたケンタウロスといったところだ。
キラーアント。
7階層になって初めて姿を現すモンスター。冒険者の間では「新米殺し」と呼ばれているらしい。
その名前の謂れは身に纏った頑丈な甲殻と、ゴブリンやコボルトとは比べ物にならない攻撃力。
体の表面を覆っている外皮はまるで鎧のように硬い。半端な攻撃は弾かれてしまい、そうでなくともあの殻の上から肉体に直接ダメージを与えるのは大変手こずる。
細い腕――本来なら前足なんだろうけど、その外見から腕と呼ぶ――の先には発達した三本の鉤爪。僕の右膝に深手を与えた爪だ。
中々防御を攻め崩せない間に鋭い爪で致命傷を与えられる。これがキラーアントにやられるパターン。
これまでとは明らか勝手が異なったモンスター故に、5階層までの敵に慣れ切った冒険者達はことごとく奴等の餌食になるのだ。

「……」

「ギギッ」

キチキチキチッ、とキラーアントが口をもごもごと動かし歯を鳴らしている。

実はこのモンスター、仲間を呼んだりする。叫び出したりはしないけど、どうやら僕達にはわからないフェロモンみたいなものを、ピンチに陥ると発散するらしいのだ。

本当に甲殻との相性がいい。僕達冒険者からすれば最悪なんだけど。

とにかく、倒すなら速攻。最良なのは一撃で完全に息の根を止めることだ。

数歩の間合いを置いて、僕とキラーアントは睨み合う。

「――ふっ！」

「！　キシャアアッ！」

動いたのは僕。

反撃とか後攻とか、そういうのは性に合わない。こっちから仕掛ける。

ナイフの柄を握る指に力をこめ、相手に肉薄。キラーアントは右腕を振りかぶって僕を迎撃しようとする。

宙に白い弧を描いた三本の鉤爪が、視界の左側から迫って――切断。

僕の方が一瞬早い。キラーアントを上回るスイングスピードで、その鉤爪を前腕から斬り裂いた。

「ギュッ！？」

右腕――武器の無くなったキラーアントの右側面へ回り込み、その痛みの呻き声を耳にしながら、僕は《神様のナイフ》を次の瞬間のために溜める。

キラーアントを上手く倒すには、甲殻の隙間を狙い、奥の柔らかい肉を攻撃するのが常套手段。細い殻の間をつくのは駆け出しの冒険者には難しいけど、少なくともそれがセオリー。

だげど、僕はあえてそれを無視した。

腕がなくなって無防備な半身を晒すキラーアントの首めがけ、漆黒の刃を真一文字に薙いだ。

「シッ」

「――」

首を守る甲殻ごと刃が沈み込んでいく感覚。

感触は最初だけ。後は大した抵抗もなく刃は滑り込み、僕はいつもそうするように自然体で腕を振り切った。

サンッ、と小気味いい音とともにナイフが流れ出て、そしてキラーアントの首は宙を飛ぶ。

何が起こったのかわかっていない眼をする顔が上空を錐揉みし、紫色の体液を首の断面から滴らせながら、ぼとっと地面に墜落した。

間を置かず、首を失った体が思い出したように脱力し、地面に崩れ落ちる。

「……うん、いい！」

ヒュン！　と振るって付着した体液を飛ばしながら、僕は《神様のナイフ》を見た。

まるで手の平に吸いついているかのようだった。これまでずっと一緒に居たかのように、僕の手に馴染んでいる。

威力も申し分無し。あのキラーアントの甲殻をバターのように切り裂いてしまった。

すごい、これがヘファイストスの武器！

神様が僕のために贈ってくれたもの！

「～♪」

新しいおもちゃを与えられた子供のように浮かれながら、葬ったキラーアントの魔石回収作業を行う。

実際、今の僕は子供と変わらないだろう。田舎で畑を耕してばっかりだった毎日、年一回の誕生日に英雄達の絵本をもらった、あの時の気持ちと似ている。

ずっと大切に使おうといつも思っていて、最初のうちは触れて汚れるのが怖かったくらい。

今もそんな感じ。流石に使うのがもったいないなんて言わないけど、心が浮かれ立つのは止められない。モンスターを殺す道具だっていうのに、ちょっとおかしいかな？

思わず鼻唄も歌ってしまった。

（ありがとう、神様……）

神様と同じ髪の色をしたナイフに視線を落として、僕は感謝の思いを笑みと一緒に滲ませた。

絶対強くなる。この武器に振り回されることのないように、神様の苦労と思いを蔑ろにしないために。

腰に差した鞘にナイフをしまい、僕はダンジョンの捜索を続けた。

「ななぁかぁいそぉ～？」

「は、はひっ！？」

ベルは悲鳴をあげた。
胡散臭げな声とは裏腹に、目の前で眉根を寄り合せるエイナから怒気の匂いをぷんぷんと感じ取ったからだ。
ギルド本部にある面談用ボックス。机を置いてベルは自分の担当官であるハーフエルフの少女と相対している。一触即発の空気に体を抱かれながら。
本日7階層にてキラーアントを始めとしたモンスターの狩りを終えたベルは、ヘスティアから贈られたナイフの存在もあって、上機嫌にギルド本部へ凱旋した。
しばらくご無沙汰していたエイナのもとに、顔を出すがてら近況報告をと意気揚々に足を運んだのだが、到達階層を7階層まで増やしたと彼女に話した瞬間、ベルの絶頂期は終わりを迎えた。

「キィミィはっ！　私の言ったこと全っ然っわかってないじゃない！！　5階層を越えたうえにあまつさえ7階層!?　迂闊にもほどがあるよ!」

「ごごごごごめんなさいぃっ!?」

ダンッ！　とエイナは机に両手を叩きつける。彼女の斜に構えられたエメラルド色の瞳に射竦められ、ベルは蛇に睨まれた蛙状態だった。
エイナが怒っているのは言葉の通り、ベルが身の程もわきまえず到達階層をホイホイと増やしたことにある。
彼女の持論でいうのなら、冒険を犯したこと、それを責めているのだ。

「一週間とちょっと前、ミノタウロスに殺されかけたのは一体誰だったかしら!?」

「ぼ、僕ですっ!?」

「じゃあ何でキミは下層に降りる真似してるの！　痛い目にあってもわからないのかな、ベル君は！」

「す、すいませぇん……！」

ベルは涙目になるが、エイナにしてみれば少年のことを本当に思いやっての叱りつけだ。ベルに死んでもらいたくない一心で身も心も鬼人（オウガ）のようにして吠えている。

まだ冒険者になって一ヶ月も経っていないヒヨコの、５階層以上に進出するというその行為――しかもソロでだ――は、ギルド受付役兼冒険者指導役のエイナにしてみれば、断じて許せるものではない。これがきちんとしたパーティを組んでいるのだったら、彼女も念を入れた注意程度で済ませただろう。

しかしサポーターも連れていないベルの場合、言ってしまえば常に後がないのだ。正真正銘の孤立無援、一つのイレギュラーが死に直結する。

５階層からはダンジョンの傾向が様変わりしてぐっと難易度が増すし、ベルが足を踏み入れた７階層で例えるなら、キラーアントが仲間を呼んだ瞬間そこで終わり。

コボルトの群れとはわけが違う。一人ならあっという間にあの蟻のモンスター達に食い散らされてしまうだろう。

「キミは危機感が足りない！　絶対に足りない！　今日はその心構

えの矯正に加えて、徹底的にダンジョンの恐ろしさを叩き込んであげる！！」

ひぃっ、とベルは情けない声を出した。エイナのスパルタぶりはこの半月の間で身にしみているからだ。

彼女の教えは間違いなくベルにとって実利として表れているが、しかしその特訓まがいの猛勉強を、ハイ任セテクダサイと快諾できるかはまた別問題。

ベルは慌てながら弁明に入る。

「ま、待ってくださいっ！？　その、僕、あれから結構成長したんですよ、エイナさぁん！？」

「各アビリティ評価Ｈがやっとのくせに、成長だなんて言うのはどこの口かな……！」

「ほ、本当です！　僕の【ステイタス】、アビリティがいくつかＦまで上がりました！　う、嘘じゃないですよ！？」

「……エフ？」

ぴたり、とエイナは動きを止めた。きょとんと目を丸くさせる。

ベルの咄嗟の発言が何を言っているのかわからず、理解したところで、すぐに信用していない表情を浮かべる。

「そ、そんな出まかせ言ったって、騙されるわけ……」

「本当です本当なんです！　なんかこのごろ伸び盛りっていうか、とにかく熟練度の上がり方がすごいんです！」

「……本当に？」

勢いよく頷くベルの姿に、エイナは戸惑った顔をした。
彼の担当になってまだ日は浅いが、目の前の少年が嘘をつく時とそうでない時は、なんとなしにはわかるからだ。
エイナの洞察力によれば、今ベルは嘘を言っていない。

「……本当に、Ｆ？」

「は、はいっ」

ちょっと待って、とエイナはベルに手の平を向ける。
残っている手でＳ、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅ、Ｆ……と指を七本分折ったところで、「むむむっ」と声をこぼす。もう一度。Ｓ、Ａ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅ、Ｆ……七回。結果は変わらない。
エイナも混乱していた。ベルは嘘を言っていない、言っていないが、とても基本アビリティがＦまで上り詰めたなんてホラ話信じられないのだ。

エイナがついさっき口にした各アビリティ評価がＨというのは、何も当てずっぽうに言ったものではない。
半月という期間で冒険者が達することのできる妥当なラインが、得意不得意な分野関係なしにＨなのだ。それもかなり腕の良い冒険者

達に限った話。
Gだったらもうでき過ぎで、そしてFというのはいくらなんでも早すぎる。
これが冒険者になる前から戦いの心得を持つ者だったなら多少の説得力があったのだが、生憎目の前の少年は元農民だ。しかし、ベルは嘘をついていないときている。
「むむむっ」と難しい顔を継続するエイナは、人差しをその細い顎にあて考え込む。

（実は『敏捷』とかがEにいってる可能性がぁー……なんて言ったら、余計にややこしくなるんだろうなぁ……）

唇を引き結びながら思考の海に沈んでいるエイナの前で、ベルは作ったような笑みを引きつらせていた。
ヘファイストスのナイフを持って帰ってきてからというもの、ヘスティアは私用に忙殺されているらしく、ベルの【ステイタス】更新は一切行われていない。
彼女がパーティーに出かけたあの日から、ベルの【ステイタス】の時間は止まったままなのだ。
彼女の口から聞かされた【ステイタス】を思い出せば、確かに敏捷は次の段階に上がる一歩手前だったような気がする。
しかしこのエイナの様子を窺っていると、とてもではないが言えないと、ベルは汗を流しながら思った。十中八九、話が更にこんがらがる。

「……ねぇ、ベル君」

「は、はい？」

「キミの背中に刻まれてる【ステイタス】、私にも見せてくれないかな？」

「……えっ！？」

至って真面目な顔をしてそんなことを言ってくるエイナに、ベルは声を高くはね上げた。

「あっ、キミの言っていることを信じていないわけじゃないんだよ？　ただ……」

エイナは慌てながらぱたぱたと両手を振って誤解を解く。

そう、ただ……ベルの主神であるヘスティアが、彼に間違った情報を与えているのも無きにしも非ずではないか……と彼女は考えていた。

もしくは、情報伝達の間で何らかの齟齬があったのではないのか、と。

そんなふうに疑ってしまうだけ、Ｆという記号はエイナにとって非常識な代物だったのだ。

ベルの言葉を信用するには、それこそ動かぬ証拠を提示してもらわなければ、とてもではないができない。

「で、でも、冒険者の【ステイタス】って、一番バラしちゃいけないことですよね……？」

冒険者という職業を管轄下に置くギルドの中でも、個人情報の漏洩はご法度だ。
Ｌｖ．などは各個人のランク付けや【ファミリア】の強さの指標として報告の義務があるが、後はその限りではない。
中にはレアスキルや特殊な魔法を持っている者もいる。【ファミリア】という組織の特性からして、簡単に今日の友が明日の敵になる現今、弱点等を晒さないためにも情報の黙秘は行われて然るべきだ。

「今から見るものを私は誰にも話さないと約束する。もしベル君の【ステイタス】が明るみになることがあれば、私はキミの奴隷になる。絶対服従を誓うよ」

「ど、奴隷って……。そ、そもそも、エイナさん【神聖文字（ヒエログリフ）】読めるんですか？」

「うん、ほんのちょっとだけど。【ステイタス】のアビリティくらいは読み取れると思う」

これでもエイナは学区に通い、総合神学を専攻していた秀才だ。
簡単な【ヒエログリフ】なら読み書きできる。

「この目で確認させてもらえなかったら、私、いつまで経ってもベル君に５階層より先に行っちゃダメー、って言うようだよ？」

「そ、それは確かに、勘弁して欲しいです……」

「魔法やスキルのスロットの方は見ないから、ね？　お願いっ！」

「別に僕はスキルも魔法も発現してないから、それはいいですけど……わかりました」

両手をぱんっと鳴らして頭を下げるエイナにベルは折れた。

今まで散々世話になってきたことに加え、彼女にはヘスティアと同じように絶対の信頼を寄せている。

ベルはエイナの言葉を疑う気にすらならなかった。

「えっと、じゃあ……脱ぎますよ？」

「顔を赤くするくらいなら一々確認しないっ！　私の方も恥ずかしくなっちゃうよ！」

お互い頬を染めながら席を立ち、空間にゆとりがある部屋の隅へ向かう。

ベルは気恥かしさを呑み込んでさっさと上半身裸になった。

背中を埋めつくす黒刻の【ステイタス】より先に、意外に鍛えられている上半身に少しのあいだ見とれてしまったエイナだったが、すぐにはっとして顔を左右に振る。

ほっそり尖った耳を赤くしながら、じっと【ヒエログリフ】の解読に入った。

ベル・クラネル
Ｌｖ．０
力：Ｆ　４３　耐久：Ｈ　５４　器用：Ｆ　５０　敏捷：Ｆ　９７
魔力：Ｉ　０
短刀：Ｇ　６９

（うそ……）

半ばその可能性は受け入れていたものの、いざこうして突きつけられると面食らってしまう。
『魔力』は除いたとしても、５階層クラスのモンスターなら単独でも十分遅れを取らないレベル。防御を重視しているエイナからすると『耐久』の低さには小言を挟みたくなるが、それでも、ベルの戦闘スタイルはアビリティ傾向から見ても撹乱回避を主眼に置いたヒットアンドアウェイ、許容範囲内だろう。
また、『敏捷』がＥを目前にしていることに吹き出しそうになった。たった半月の間にここまで成長を遂げるなんて、とエイナは舌を巻く思いだったが……そこでふと、一つの魔が差してしまう。

（……ちょっとだけなら）

腰の方へと続いている【ヒエログリフ】に目が奪われる。その先に

あるのは、『魔法』と『スキル』のスロットだ。
蓋が開けっ放しの宝箱の中身をついつい覗いてしまおうとするのは、もはや亜人の性か。
好奇心が疼き、エイナはちらりと魔法とスキルのスロットを確認してしまう。

（……あ、駄目だ）

読めない。
高度な【ヒエログリフ】の羅列によって、エイナでは魔法とスキル欄自体が解読できなかった。
実は、親馬鹿であるヘスティアが万が一に備えて、ベルの能力に影響を与えない範囲で余計な【ヒエログリフ】を刻み、文字配分を調整することで【ステイタス】に“プロテクト”をかけていたのだである。
【ヒエログリフ】の体系と真髄を把握しきっていないエイナには、その嫌に複雑で奇怪な神聖文字の構成がヘスティア独自の書き方、つまりは彼女の“癖”だという風に映ってしまい、勘違いしてしまう。
ベルの実態をめぐる駆け引きは、今回はヘスティアに軍配が上がった。

「あのー、エイナさん……まだですか？」

「！　も、もういいよ」

ベルの恥ずかしそうな声に、エイナは耳をピクッと揺らして今の状況に気付いた。
照れて笑いながら【ステイタス】から目を背け、いそいそと着がえ出すベルにごめんねと小さく呟く。
しかし本当だったのか、とエイナは内心唸る。この【ステイタス】ならば、ベルの7階層進出も許可しないわけにもいかない。十分とはいかなくても、間違いを起こさなければソロでも通用するレベルだ。
――だがそうすると、次に巻き起こるのをまた別の懸念だった。

「……」

「な、なんですかっ？」

着がえを終えた体の爪先から頭の天辺まで、無遠慮にじろじろ見てくるエイナにベルは声を上擦らせる。
一方で彼女の方は、“ベルの全身”を舐めるように見ているわけではなかった。
エイナが見ていたのはベルの体ではなく、それを覆っている装備品……防具だ。

「ベル君」

「は、はい？」

「明日、予定空いてるかな？」

「……へっ？」

あれから一日経った。
今の僕の視界には、広い道を埋め尽くさんばかりの亜人達が次々と往来していっている。
オラリオの北側の区画。北西のメインストリート。
僕は大通りの沿道に設けられた、小ぢんまりとした半円形の広場にぽつんと立っていた。
エイナさんと待ち合わせをしているためだ。
そう、待ち合わせ……。

（こ、これって……デート？）

そんなことあるわけないのに、つい思ってしまう。
昨日、予定を尋ねてきたエイナさんが持ちかけたのは、僕の装備品を一緒に買いに行かないかというお誘いだった。
僕のダンジョン攻略状況と現在の装備を照らし合わせて、今の防具では頼りないと判断をしたらしい。面倒見のいいあの人が、僕のためにわざわざ世話を焼いてくれたのだ。
そう、エイナさんは駆け出しで危なっかしい（らしい）冒険者の僕を見ていられないだけ。
他意なんてない。心配性なあの人の、親切なお節介……。

（……なんだけど、外から見たら、もう……）

形式的には、なり立っちゃう。
朝十時に広場の銅像前集合とか！
二人きりだけとか！
うわー！　うわーっ！？

「おーい、ベールくーん！」

「！」

これはデートじゃない決して浮気じゃないヴァレンシュタインさんごめんなさいなんて頭を両手で抱えながら悶々としていると、とうとうその時がきた。
あの鈴のように透き通った声の持ち主が、僕の視界の中、小走りを

しながら徐々に大きくなってくる。

「おはよう、来るの早かったんだね。なぁに、そんなに新しい防具を買うのが楽しみだったの？」

「あっ、いや、僕は……！」

――エイナさんと二人きりになることを、変に意識していました。なんて、はっきりと伝えられない僕は意気地無しなんだろうか。僕は落ち着かない表情で視線を左右にめぐらせた。

「まぁ、実は私も楽しみにしてたんだよね。ベル君の買い物なんだけどさ、ちょっとわくわくしちゃってっ」

エイナさんの服装はいつもと異なっていた。

普段はギルドの制服である黒のスーツとパンツでぴしっと決めている感じだけど、今日はレースをあしらった可愛らしい白のブラウスに、丈の短いスカート。これってもしかして、キュロットスカートってやつかな？　ちょっとお洒落で軽い感じ。

ギルドの制服姿を見慣れちゃってるせいか、大人びた雰囲気ががらっと変わったエイナさんは、なんていうんだろ……凄く眩しい。

そう、可愛いんだ。

エイナさんお得意の懸隔の術中に、僕は見事にはまってしまっていた。

「装備品なんて物騒なものを買いにいくのにわくわくするなんて、私おかしいかな？」

「そ、そんなことないですっ！」

僕が慌てて否定すると、エイナさんはくすくすと笑い出した。うわぁ、うわぁー……。

ギルド職員の中でも人気が一、二を争うのも頷けてしまう。いや、他の冒険者が今のこの姿を見たら、もうぶっちぎっちゃうんじゃないだろうか。

ハーフエルフって、どの人もエイナさんみたいなのかな……。

「コホン。それで、ベル君？」

「なんですか？」

「私の私服姿を見て、何か言うことはないのかな？」

悪戯好きな子供みたいな瞳で、上目遣い。

うわぁ、ウワァー……。

「……そ、その、すっごく……いつもより、若々しく見えます」

「こら！　私はまだ十九だぞぉー！」

「あいたたたたたたたたっ！？」

エイナさんの細くて白い腕が、僕の頭の付け根あたりに巻き付く。
そのまま脇に抱えられるように締めつけられて……ぐいぐいって、
僕の頬が、エイナさんの胸に……。

「ほら、謝れー！」

「や、やめっ、許してくださあああああああああああああああああ
あああああああああいっ！？」

エイナさんの可笑しそうな声音が耳をくすぐる中、僕は思いっきり
叫んだ。

「誰かとこんな風に買物に行くなんて、久しぶりだなぁ」

「そう、なんですか？　エイナさんなら誰も放っておかないと思うんですけど。……男の人だったら、特に」

「ふふ、上手だね、ベル君。でも本当だよ。ギルドに入ってからはずっと仕事一筋だったから」

僕達は今、都市オラリオの中心地に繋がるメインストリートを進んでいる。

空は快晴。絶好のデート日和……なんて言うつもりはないけど、青い空は澄み切っている。気持ちのいい風が泳いでいた。

時間帯もあって大通りは賑やか。相変わらず人通りが激しい。商店の大小関係なしに、それぞれの店の店員達が盛んな呼び込みを行っている。ドワーフの地鳴りのような声が強烈。

時にはエイナさんにも声がかけられたが（僕は下男と間違えられた）、彼女はそれを愛想良く手を振り返してやり過ごす。声をかけてきた犬耳を生やす獣人の店員は、顔を幸せそうにだらっとさせた。

「あの、エイナさん、どこまで行くんですか？　このままだとダンジョンの方まで行っちゃいますけど……」

「着いてからのお楽しみ、だと流石に意地悪かな？　うん、じゃあ、教えてあげる」

オラリオには、都市の中央からメインストリートと呼ばれる大通りが方位に合わせて八本伸びている。つまり北、北東、東、南東、南、南西、西、北西の方角だ。都市を鳥瞰すれば、太い四本の線が中央を通り走っていることがわかる。

それぞれのメインストリートが交差する都市の中心地、そこにダンジョンはあった。
ダンジョンに近付くにつれ、客を冒険者に絞ったお店が増えてきて、中でも武器・防具屋の数はすごいことになってくる。僕は当初、その店の内の一つ二つくらいに行くものだとばかり思っていたんだけど……エイナさんは一向に立ち並んでいるお店へ寄ろうとする気配を見せない。
メインストリートが集結する中央広場（セントラルパーク）はもう目と鼻の先だ。圧倒的な存在感となって迫ってくる摩天楼施設を視界の真ん中に置きながら、僕はエイナさんの返答を待った。

「今日行くところは……ダンジョンだよ」

「はあ！？」

「正確にはダンジョンの上にある、あの魔天楼（バベル）だね」

仰天する僕を尻目にエイナさんは微笑んだ。
『バベル』とは、地中の中のダンジョンの蓋をするように築かれた超高層の塔、つまり先ほどの摩天楼だ。
オラリオの中心にそびえるあの塔は、都市のあらゆる建築物より背が高い。
蓋、と述べたように、バベルの役割はダンジョンの監視と管理。ギルドが保有するこの施設は、冒険者達にとって最も馴染みの深い建物の一つだった。

「バベルって……冒険者用のシャワールームとか、公共施設がある

だけじゃないんですか？」

「キミは本当に何も知らないんだね……。でも、まだ冒険者になって一ヶ月も経ってないからしょうがないのかな？　じゃあ、今日は役に立つ情報をかい摘んで教えるね？」

――徹底的にダンジョンの知識を詰め込まれた当時の記憶を思い出して、僕は正直なところ、エイナさんのその得意そうな顔に、怯えた。

あの時のようなことにはなりませんようにと祈りながら、僕は彼女の話に耳を傾ける。

「ギルドが所有しているバベルは、ベル君も言ったとおり冒険者のための公共施設という役割がまず一つ。簡易食堂や宿泊施設の他に、換金所もあるなんて知ってた？」

「えっ、ギルドの本部だけにあるんじゃないんですか？」

「ううん、バベルにもちゃんと設置してあるよ。ただ鑑定役員が少ないから、結構順番を待たされちゃうと思うけど……。続けるね？　あと一つ、これが今日の目的地でもあるんだけど、バベルは一部の空いているスペースを、色々な事業者にテナントとして貸し出しているの」

「テナント……ですか」

うん、とエイナさんは頷く。

話がちょっと見えてきた。つまり僕達がバベルに向かうのは、その塔中で営業させてもらっている武具系統のお店に足を運ぶということだろう。

「ダンジョンの真上にあるだけに、出されているお店は全部、冒険者用の専門店。多くが商業系の【ファミリア】だね。バベルにお店が出せるっていうのはそれだけで結構な羽振りなの。冒険者達は職業柄お金に糸目は付けないから、こぞって事業者達はバベルに出店しようとしてる」

それじゃあ、場所を貸し出しているギルドも相当儲かっているんだろうな。

貸し出し有料だよね、当然。

「迷宮にもぐる冒険者達がバベルに求めているのは質だから、事業者達が競い合って出店することで、質が質を呼ぶ形になる。この流れができるようになってから、冒険者達はバベルの中では全幅の信頼を寄せて買物をしてるの」

バベルの外では酷いものを掴まされるのもざらだと、エイナさんは苦笑する。

名前が有名なところ以外は、目利きができもしない限り滅多に行かない方がいいと教わった。

小さな路地に隠れた名店……なんてものに憧れちゃう僕は、やはり騙されやすい鴨なのだろうか？

「【ヘファイストス・ファミリア】なんかは、ババルに出店してるお店の中でもその代表だね。名前くらいは聞いたことあるかな？」

「は、はいっ」

どきっとした。

思わず、今も腰に差さっているナイフを確かめてしまう。

「ベル君は【ヘファイストス・ファミリア】のことについてどのくらい知ってる？」

「えっと、装備品を扱う大人気【ファミリア】で、すごく品の価値が高くて、冒険者なら誰でも欲しがるってことくらいですかね……」

「うん、間違ってはないね。……ちなみに、私達が今日行く予定なのが【ヘファイストス・ファミリア】のテナントだから」

「え、えええぇ～～～～～～～っ！？」

今日一番の絶叫をした僕を見て、エイナさんはまた悪戯に成功した子供のような笑みを浮かべた。

路上で突然叫んだ僕に周りの人達の視線が突き刺さるけど、こっちはそれどころじゃない。

どういうことですか、と慌てて詰め寄ろうとしたら、エイナさんは気まぐれな妖精のように僕をひょいっとかわして、そして一気に開けた視界の中へ足を踏み入れた。

「つ、着いちゃった……」

セントラルパーク。

天を衝かんばかりの巨塔、バベルをぐるっと取り囲む円形の大区画。

ところどころに緑木が植栽されたり噴水が設置されていて、公園という呼び方もあながち間違いでもない。

パークの縁、つまり円形の外縁を形作っている商店は、どれも派手な看板を掲げている。店の前のいくつもの人だかりは繁盛の証だろう。目に見えて多い店の種類は、これぞと言わんばかりの大きな酒場。

ここまで来る途中のメインストリートは冒険者や市民が関係なく入り混じっていたけど、このセントラルパークは大きな剣や槍、ほか様々な得物を携えた冒険者達がほとんど。恐ろしいのはこの目眩のするような人の数をもってしても、全くこの場所が飽和する気配を見せないということだ。

まだ小さい亜人の子供達が、ベンチに座りながら彼等を見てきらきらと目を光らせている。

「エイナさんっ、どういうことですか!?　僕、【ヘファイストス・ファミリア】で買物できるような大金、持ってないですよ！」

「まぁまぁ、それは着いてからのお楽しみってことで」

「僕はずっとハラハラしっぱなしですよぉ！？」

にこにこと笑っているエイナさんは泣き叫ぶ僕を見てもどこ吹く風。
歩く速さをちっとも緩めようとしてくれない。
逆にだんだん置いてかれていく形になる僕の手を、その細い指でぎゅっと握ってきた。
僕の頭は真っ白になる。

「いいから行くよ！　男の子なんだからぐずぐず言わない！」

赤くなって呆然とする僕はエイナさんにずるずると引っ張られていく。
柔らかい手は、以前から畑仕事をしていてすっかり硬くなっている僕の手とは対照的で……温かくて、くすぐったい。
頭がくらくらして思考がおぼつかなくなってくる。
けれど、雑踏を縫っていくうち、これからさぁダンジョンにもぐろうという男の冒険者達から、「殺スゾ」という視線を一斉に浴びた。
僕は蒼くなってかえって落ち着くことができた。

「え、エイナさん、ててっ、手を離して頂けないでしょうかっ？
おおおっ、お願いします……」

「世界でも屈指の『鍛冶』の【ファミリア】に行くんだから、『鍛冶師』についてもちょっと知っておこうか。ベル君、『発展アビリティ』って聞いたことある？」

男なのにグズグズする僕の申し出は、エイナさんにもう受け取ってもらえないらしい。死活問題なんだけど。

僕は諦めて、震えながら必死に体を小さくした。

「いえ、知りません……」

「『発展アビリティ』っていうのはね、【ステイタス】のＬｖ．が上がると任意で発現できるアビリティのことなの。『基本アビリティ』より更に専門的な能力を特化するのが特徴かな。獲得した【経験値】の傾向で発現できるアビリティの選択肢は決まってくるんだけど、その中に『鍛冶』っていう発展アビリティがあるんだ」

『発展アビリティ』に、『鍛冶』……。

どれも初耳の言葉だった。僕は気を取り直して情報を整理しようとする。

「【ヘファイストス・ファミリア】の鍛冶師の大半が、この『鍛冶』のアビリティを習得してる。現代の武具を鍛える職人には、このアビリティが必須と言われているの」

「だから、【ヘファイストス・ファミリア】のほとんどの鍛冶師達はＬｖ．１以上なんだよ」と、とんでもないことをさらりと告げられた。

それって、商業系の【ファミリア】にも関わらず、そこら辺の【ファミリア】より強いってことですよね……？

バベルが徐々に近付いてくる。エイナさんは引き続いて説明を行った。

「鍛冶師っていうのは当然昔からいた。古代の作品はアンティークが多いけど、今でも通用するものも存在してる。でも現代の……『鍛冶』のアビリティを持つ鍛冶師達は、その神の恩恵によって属性を付加できるの」

「属性……？」

「つまり特殊な能力だね。冒険者に発現するスキル、それが武器にも付与されていると考えてくれればいいよ。絶対折れない剣だとか、切れ味が落ちない刀とか。普通に鉄を打つだけじゃあそういうのは作れないでしょ？」

確かに、と僕は頷く。

「中には、武器が魔法に等しい現象を引き起こすものもあるの。振り下ろすと炎を吐き出す、とか」

「うえっ！？」

「これも結構常識なんだけどなぁ……。とにかく、そんな魔法と同じ効果を生み出す武器を、私達は『魔剣』って言ってる。これを作れるのは本当に一握りの鍛冶師だけ」

装備者の生気を吸って硬度を激上させる呪いの鎧なんてのもあるよ、とエイナさんはあっけらかんと言った。

僕はごくりと喉を鳴らす。

簡単に言われてしまったけど、つまりそれは、一人の冒険者が自分のもの合わせれば二種類以上の魔法を保有できるということだ。
例えその武器を使いこなせなくても、持っているだけで、手練の剣士を打ち負かすことのできる力を得られるということになる。

「ただし魔剣は消耗品で、限界を迎えると砕ける特徴を持つんだけど。詠唱を唱えないで即座に発動できるぶん、魔法より効果は低いしね」

とてもお金のかかる使い捨て武器、とエイナさんは苦笑した。
その表情から察するに、魔剣を所持している人は少ないようだ。
人気がないわけでは決してないんだろうけど、必ず壊れるというデメリットは、何が起こるかわからないダンジョンで安定したパフォーマンスを求める冒険者に、購入を遠慮させるのかもしれない。
何よりは、まぁ、べらぼうに高いのだろう。

「後は、『鍛冶』のアビリティは武具を通常鍛えたものより遥かに強化させる。ないのとあるのとじゃあ、例え同じ鍛冶師が同じ材料で打ったって、全然出来が違うの」

なるほどと相槌を打つ。
そういうことなら鍛冶師にとって『鍛冶』のスキルは必要不可欠というのもわかる。
鍛冶師は武器を打つだけと言っても、最終的には商売業。
競争相手を退けて買い手の目にかかる作品を生み出さなければ、次回作の費用も得られず落ちぶれていくしかない。

「発展アビリティって、『鍛冶』以外の他に何があるんですか？」

いち冒険者として気になることを聞いてみた。

僕もいつかは通るだろう道だ。いや、絶対に通ってみせる。

「ん～、冒険者に代表的な発展アビリティなら『耐異常』とか『魔導』なんかがあるかな。それ以外だったら、『神秘』なんてものもあるね」

「神秘？」

「うん。これはどちらかというと、神達の十八番の“奇跡”なんてものを発動させるの。“神の御技”っていうやつかな。賢者の石の話、ベル君は知ってる？」

当然、ノー。

僕は首を横に振る。

「ずーっと前のことらしいんだけど、ある【ファミリア】に所属して『神秘』のアビリティを持つ構成員……賢者様が、賢者の石っていうアイテムを作り出すことに成功したの。効果はずばり、永遠の命の発現」

「……なんかもう、あいた口が塞がらないです」

「ふふっ、そうだね。でもこの話には続きがあって……その賢者様は歓喜して自分の主神のもとに賢者の石精製の報告に行ったんだけど……その石を手にとった神は、賢者様の目の前で、床に叩きつけて壊しちゃったの。……永遠の命を」

「……」

「魂の抜け殻になった賢者様を指差して、その神は腹がよじれるほど笑い続けたんだって」

僕が聞いた中でも最も酷い神様の神話だった。
ちなみにここでいう神話とは、神様によるどうしようもないオチが待ち受けているものを指す。
僕、初めて会えた神様がヘスティア様で本当に良かった……。

「賢者の石は偶然の産物だったらしくて、二度と精製されなかったらしいんだ。賢者様以上に『神秘』のアビリティを極められる人は出てこなくて、文字通り伝説のアイテムになっちゃったんだね」

「極められない……？　発展アビリティも、基本アビリティみたいに熟練度があるんですか？」

「ううん、熟練度はないの。ただ基本アビリティと同じようにIからSの十段階の能力高低に別れていて、それを次の段階に上昇させるのがすごく難しいんだ。基本アビリティの比じゃないくらいに。【ヘファイストス・ファミリア】の最高鍛治師でも、『鍛冶』のアビリティはいまだにEって聞いてる」

それは、多分とんでもないんだろうな……と僕は言葉だけの感想を抱いた。
まだ自分自身が実感できる場所にいないから、そう感じることしかできない。

話しているうちにバベルの門の前までやってきていた。
門といっても、いくつもの台形の穴が塔の一階部分にぐるりと張り巡らされている。冒険者達が何人でも、どこからでも入れるように配慮された形だ。ちなみに塔の円周の長さは、百人の僕が手を繋いで囲おうとしても届かないくらい。
門をくぐると白と薄い青色を基調にした大広間が現れる。ダンジョンの入り口はこの地下だ。

「ここからは……」

「上だね。バベルが場所を提供しているのは四階からだから」

当然か。下にはもうダンジョンがどっしり構えているわけだから、テナントがあるとすれば上階しかない。
僕はこのバベルで利用するのは地下に備え付けられてある個別のシャワールームくらいで、ご飯なんかは全部神様と済ませている。言っちゃえば、僕のバベルでの移動範囲は地下と一階だけ。何も知らないわけだよね。
バベルの一階はいわば玄関みたいなもので、主要な公共施設は二階から。
僕とエイナさんは階段を使って三階まで出た。エイナさんの言う換

金所を壁際の一角に見つけながら、このフロアで途切れてしまった階段の姿を探していると、エイナさんは繋いだままの僕の手を引っ張ってフロアの中心に赴く。
いくつもある円形の台座、そのの一つに乗った。
硝子とはまた違う透明な壁が取り付けられていて、まるでコップみたいだと見たままの感想を抱いていると……なんと地面から離れて、浮遊。
そのまま上へ上へと浮かび、いや昇り始めた。

「!?」

「あはは、私も最初はそんな感じだったよ」

どうやらこのコップもどきが上の階へとゆく装置……魔石製品の一つなのだそうだ。地上四十階もあるこのバベルの上下間移動をスムーズに運べるよう設置されたとか。
何でも台座の下に大量の魔石が取りつけられていて、石から生じる魔力を浮力に転用しているらしい。
そんなこともできるのかと僕が愕然としていると、エイナさんが一日の周期で魔石を交換しなければいけないと教えてくれた。万能、というわけにはいかないらしい。
実験的導入の意味合いが強い、なんてぞっとしないことを聞いていると、ほどなくして四階についた。
……階段で行った方が断然早かったかも、なんて思う僕は、この世紀の大発明をした方々に謝った方がいいのだろうか。

「お目当てのお店はまだ上の階なんだけど、せっかくだから寄って

いこうか？　ベル君もちょっと見てみたいでしょ？」

ざっと見ただけでも武器・防具のお店がそこかしこを埋め尽くしている。僕はちょっと興奮しながら、エイナさんの確認に頷いた。
って、あのロゴタイプ……もしかしてここからここまでのお店、全部が【ヘファイストス・ファミリア】の……？

「ああ、この四階から八階は【ヘファイストス・ファミリア】が全部入居しているから」

……フロア丸ごとだった。
どれだけ凄いんだ、【ヘファイストス・ファミリア】って。
ちなみに、僕と神様のホームの近く、北西のメインストリートにも【ヘファイストス・ファミリア】の支店がある。
そこで僕がいつも店頭のショーウィンドウから見ていた短刀の値段は……８００万ヴァリス。普通に位のいい家がいくつも買えてしまう。
ちょうど側の店先に、似たような陳列窓があったので、その奥に鎮座している紅の剣の価格を見やると……

（……３０００万ヴァリス！？）

くらぁ、と僕は手をおでこにやって二、三歩引き下がった。
エイナさんが隣で苦笑しているのがわかる。
僕のこのヘファイストス製のナイフ、神様は世界で一つしかないだ

なんて言ってたけど、一体いくらかかったんだろう……？

「いらっしゃいませー！　今日は何の御用でしょうか、お客様！」

唾を飲み込んで陳列窓の商品を凝視していると、お客と勘違いされたのか、店員さんに明るく声をかけられた。
その女の子は身長は低かったけれど、とても目鼻立ちが整っていて、訓練された美しい店員さんスマイルを浮かべている。
可愛らしい黒髪のツインテールがぴょこぴょこと揺れていて微笑ましい。
紺色の制服エプロンの下では、その小さな体に不釣り合いな胸がデデンと盛り上がっており……

「……なにやってるんですか、神様」

「……」

ひくっ、と神様の店員スマイルが引きつる。
そうか。近頃やけに慌ただしいと思っていたら、こんなところで働いていたのか……！

「何でこんなところにいるんですか！？　バイトのかけ持ち！？
到達階層が増えてお金にちょっと余裕ができるようになったって、僕言ったばっかりじゃないですか！？」

「いいかい、ベル君……！　今あったことは全部忘れて、目と耳を塞いで大人しく帰るんだっ……！　ここは君が来るにはまだ早い！」

「神様だって早過ぎですよ!?　今まで時給３０ヴァリスだったくせに!?」

「ジャガ丸くんを馬鹿にするなぁー！」

「いいから、ほら、帰りましょう!?　神様は神様なんですから、恥も外聞も捨てちゃダメです！」

「ええい、離せ、離すんだベル君！　神にはやらなくちゃいけない時があるんだ！」

「神様がやらなくちゃいけない時ってどんな時ですか!?　お願いですから、言うこと聞いてください！」

右手首を両手で掴まえる僕から神様は顔を背け、必死に逃げようとする。

一体何がそんな神様を頑なにさせているんですか……！

エイナさんが目を丸くしているのが視界に掠ったけど、そんなこと気にしてる場合じゃなかった。

「こらぁっ！　新入りぃ、遊んでんじゃねー！　とっと次の仕事しろぉおっ！！」

「はぁーい！！」

「あっ！？」

ぴゅーん！　と神様は僕の拘束を振り払って飛んでいく。
わたわたと慌てるツインテールと一緒に、小さな後ろ姿が店内へと消えていった。

「かみさまぁ～……」

「……か、変わった神だね？」

情けない声を出す僕に、エイナさんが対応に困るような笑みを作った。
僕はしばらく落ち込んでいたけど、今は一人ではないことを思い出し、無理矢理立ち直る。
神様のことは、今は忘れよう。

「お見苦しいところを見せてすいません……」

「大丈夫だよ。じゃあ、上に行こうか？」

頷く僕と苦笑するエイナさんは目的地、八階への移動を始める。
本当にこのまま【ヘファイストス・ファミリア】のお店で買物する気なのかな……。
僕はエイナさんに付き従った。どうやら今度も魔石昇降器を使うようだ。

「今更ですけど、普通の装備品とは値段の桁が違いますね、【ヘファイストス・ファミリア】って。武具の材料とかも特別なんでしょうか？」

「うん、鍛冶師の腕以外にもそれはあると思う。深層モンスターのドロップアイテムを使ってるんだろうね」

昇降機へと戻る道すがら、僕とエイナさんは会話を続ける。
デートとは程遠い会話の内容だ。

「【ヘファイストス・ファミリア】の職人の中には、冒険者や【ファミリア】と直接契約する人もいるわ」

「直接契約？」

「そう。今、武器や防具の原材料はモンスターのドロップアイテムが主流だから、ダンジョンにもぐる冒険者達に調達をお願いして、それを譲ってもらうの」

普通なら、ドロップアイテムはギルドの換金所で買い取ってもらう。ギルドによって押さえられたアイテムは、そこからそれぞれの商業系の【ファミリア】等が買い取るのだそうだ。
だけどそれだと一々手間になることに加え、ギルドの決めた取引価格……つまり高値で引き取らなければならない。ギルドは中々したたかなのだ。

鍛冶屋の集まりである【ヘファイストス・ファミリア】としては、より早く、より安く、そして確保できるのならできるだけ数を確保しておきたいというのが心情らしい。
それならばと、彼等は有名な冒険者かあるいは【ファミリア】と直接繋がりを持つことで、手軽に、そして安値でドロップアイテムを手に入れることにしたのだと、エイナさんはわかりやすく教えてくれた。

「魔石の所有権はギルドにあるから、誰も、どの組織も扱っちゃいけないことになってるけど、ドロップアイテムは別。過去に色々な【ファミリア】から抗議の声が上がって、散々叩かれたギルドも折れたんだね、ドロップアイテムの売買の自由を特定の【ファミリア】に与えたの」

魔石はオラリオの特別産業だ。
オラリオ……ギルドはこれで懐を肥やして成り立っているといってもいい。個人が転売することを彼等は許さなかった。
代わりにといっては何だけど、ギルドはドロップアイテムの独占だけは手放した、ってところか。

「鍛冶師達ではとてもたどり着けない深層まで、第一級を始めとした冒険者達に行ってもらって、貴重な原材料を譲ってもらう。その代わりに冒険者はその鍛冶師に武具を作ってもらう。相互の契約内容にもよるけど、１億ヴァリス以上の価値がある装備品をただで提供されている【ファミリア】もあるそうだよ」

「いっ、１億……！？」

そんな数字、僕じゃあ卒倒するしかない。値の次元が違い過ぎる。
もしかしたら、ヴァレンシュタインさんもそうなのだろうか。
僕は改めて、自分と第一級と呼ばれる冒険者達の住む世界の違いを思い知らされた。

「はい、到着」

「しちゃいましたね……」

ポン、と音を立てて静止した昇降機から手動のドアを開けて下りると、先程の四階と同じような光景が広がった。
剣、槍、斧、槌、刀、弓矢、盾、鎧、その他防具……様々な種類の武具の専門店が、広いフロアに展開されている。
あと、何だか四階よりお客さんの数……冒険者の姿が多い。この人達みんなが一流の冒険者だと思うと（お金をたんまりと所持していると思うと）、途端に尻ごみしてしまう。
そんな居心地を悪くする僕にエイナさんは気付き、声をかけてきた。

「【ヘファイストス・ファミリア】みたいな高級ブランド、自分には縁がないものだとベル君思ってるでしょ？」

何を今更、と僕は素直に肯定する。
エイナさんはそれを見て、ここぞとばかりに鼻高々と笑ってみせた。

「実はそうでもないんだなぁ。まぁ、百聞は一見にしかず！　ちょっと付いてきて」

エイナさんは僕を連れて最寄りの店へ入っていく。ここは、槍のお店か。

入口の前で腕を組んで悩んだり、商品を手にとって見比べてみたり、そんな過激な服装をしたアマゾネス達の横を通ってエイナさんに追い付いた。

彼女は垂直に設置された槍棚の前にいる。立派な戦槍が壁に沿って並列していた。

ちょいちょい、とその中の一つの価格札を指す。

どうせまた……と思いながら見ると、１２０００ヴァリス。

「あ、あれ……？」

これだったら、手が届くかも……。

「ふふ、驚いた？」

「は、はい。でも、どうして？」

呆気に取られた僕にエイナさんが機嫌良く尋ねてくる。

僕の視線はその立派な槍に縫い止められたままだったけど。

「【ヘファイストス・ファミリア】が他の鍛冶系【ファミリア】と違うところは、末端に当たる職人にもどんどん作品を作らせて、それでお店に並べちゃうことなの」

「えっ……いいんですか？　だってそれ、一流の人達と比べたら全然……」

1億ヴァリスもする作品と並べたら明らかに見劣りする筈だ。

【ヘファイストス・ファミリア】は有名鍛冶店、お店の評判に傷がつくことはないのかと思ってしまう。

「勿論、熟練の鍛冶師の作品とは販売する環境が違うよ？　でも、こうして作られた武具を【ヘファイストス・ファミリア】……店の経営陣が確かな値踏みをする、そして冒険者達が直接手をとって購入する……そういった評価が未熟な鍛冶師達には確かなプラスになるの。千切って称えられる栄誉も、目も当てられないような厳しい評価も、全部。彼等はそれを起爆剤にしてよりよい作品を、って奮起するみたい」

驚く一方で、なるほど、とも思えた。

確かに試作や習練だけしか許されず狭い工房に閉じ込められるより、より広い世界で多くの声と刺激を受けた方が成長の糧にはなる。

「それに店側にもそんな悪い話じゃないから。よっぽどお金に余裕がある冒険者達じゃないと本来なら手は出せないけど、こういう場

を設けることで下の下の冒険者達の客も取り込むことができる。中には第一級冒険者になるような卵もいるわけだし、そういった人達がお得意様になるってことはこの迷宮都市では重要なの。大成したら、一級品を購入する上客になってもらえるわけだからね」

要は上手いピラミッドができているのだとエイナさんは言う。

幅が広い底辺層で多くの客を取り入れ、その中で何人かの顧客を見繕い、そしてその客が成り上がっていくことで上の層でも収入を見込める。

迷宮都市の特性。総合的に見れば、冒険者や【ファミリア】は多大な利益を生む可能性を秘めているらしい。

「で、一番重要なのが、冒険者と鍛冶職人の駆け出し同士が、この時点で繋がりを構築できるっていうことなの。細い太いに関わらずね」

どういうことですか？　と僕は目で尋ねる。

「新米の鍛冶師が出した作品を通して、新米の冒険者がその名前を覚える。気に入ったなら面識も得られるかもしれない。スポンサーになる、なんて身も蓋もないけど、とにかく隠れた原石の鍛冶師は、経営側も見抜けなかったその才能を、慧眼を持つ同じく才能ある冒険者によって発掘されるんだ。類は友を呼ぶじゃないけどね、やっぱり実際使って直接肌で感じる冒険者の方が、その武具に思うことは一杯あるみたい」

「そう言われてみると……」

そうかもしれない。
少なくとも僕は、ギルドの支給品である装備一覧に多少なりとも思うところはある。

「何より、特定の誰かのために打つ武具っていうのはね、思い入れが深い分、より特別な威力を発揮するの。……なーんて、これは他の人の受け入りなんだけど」

ぺろ、と小さく舌を出すエイナさんにどきっとしてしまった。
エイナさんがこんな子供っぽい仕草をするとは夢にも思わなかったからだ。
胸の真ん中あたりがうるさい。

「話が長くなっちゃったけど、とにかくベル君の手持ちでも買える【ヘファイストス・ファミリア】の商品はあるってこと。ベル君、手持ちはいくら？」

「え、えっと、ちょうど１００００ヴァリスです」

「じゃあ、品によっては防具一式を揃えられるかな。原石の鍛治師の作品なんてさっきも言った通り、中には掘り出しものもあったりするんだよ。さっ、行こう！」

僕よりエイナさんの方がはりきっている。
ちょっと冷静になれた僕は苦笑い。
だけど話を聞いたせいか、すぐにわくわくするような気持ちが止まらなくなった。
期待感と高揚感、それが体を火照らせる。

「ベル君さ、もしよかったら防具の傾向を変えてみない？　動きにあまり支障が出ない鎧とか」

「どうしてですか？」

「……キミをギルドで見送る時、その頼りない格好を見て、私いつもはらはらしちゃってさ……」

「そ、そうなんですか？」

「うん。小さい攻撃に、薄い防御、小回りはそのぶん利くけど……ベル君の装備って思いっきり玄人のスタイルなんだよね。貧乏ファミリアの宿命なのかもしれないけど……」

眉を下げて沈痛そうに語るエイナさん。
僕としては、なんだか今の状態に慣れちゃって、このまま短刀に軽装っていう組み合わせでいきたいんだけど……。

「エイナさんはどんな装備が望ましいんですか？」

「そうだなぁ。私としては、初心者の冒険者にはみんな鎧と盾を装

備して、きっちり防御を固めてほしいんだけど……」

それならまず低階層で間違いは起きることはないと続ける。
冒険者のことを親身に考えるエイナさんらしかった。僕はこっそりにやけてしまう。

「それじゃあ、ここで一旦別れてみる？　二人で広く探した方が、いいものが見つかり易い気もするし。掘り出しものも他の人より早く見つけられるかも！」

「あはは、そうですね。じゃあ、別々に見て回りましょうか」

気合いの入ったエイナさんに笑わせてもらいながら、僕達は鎧と盾の看板が貼ってある店の前で別れた。
女の人ってやっぱり買物好きなのかなぁ……。
まぁ、武器に目を輝かせるエイナさんは、傍から見るとちょっと毛色が違うかもしれないけど。

（うわぁ……下っ端の鍛冶師が作ったって言っても、すごいことには変わらないか……）

鎧の森と言ってもいい店内は圧巻の一言だった。
純白のトルソーが形の異なる沢山のアーマーを身に纏い、胴体だけにも関わらず威容を誇っている。
中には等身大の人形もあって、装備した自分の姿を鮮明にイメージ

させてきた。
盾や兜も壁や棚に飾ってある。質素で堅固そうなもの、煌びやかで装飾に凝ったもの、様々だ。
男性も女性も関係なく自分にあった防具を選んでいた。試装もどうやらできるらしい。

（やばい、すごい楽しみになってきたかもっ……ん？）

周囲の空気に影響されて歩みを弾ませていると、一つの光景が目についた。
店の中でも目立たない片隅。そこに、防具の各パーツを山積みにしたボックスがあったのだ。
あれは、アーマー系統？
他の防具がトルソーで展示されているだけあって、ガラクタの山のような扱いは異彩を放っている。
本当に廃物なのかと思って近付いてみると、その隣には似たようなボックスがいくつも置いてあった。
どうやら、【ファミリア】に価値が低いと評価されたものらしい。
後は機能に支障は出ないにしても、少しの不備があったとか。

「あ、やっぱり売り物だ……」

ボックスの下に価格札がかかっている。４１００、６４００、３９００……記される赤い数字はまちまちだったけど、どれも安価ではあるらしい。
さっきちらりと見た甲冑が１５０００ヴァリスで、今使ってるギル

ドの軽装が２２００ヴァリスだから……うん、多分僕の考えは間違ってない。値段でいえばお手頃なのかな？
でもエイナさんには、自分の身を守るものなんだからケチケチするなっ、とか言われそうだなぁ。

「……？」

箱の列と平行して進んでいたら、不意に僕の足は止まった。
見下ろしていたボックスの中、ある防具の塊が現れたのだ。
鉄色。赤みや暗色を帯びた黒ではなくて、白い金属光沢。彩色が何も施されていない素材のままの姿が、僕の琴線に触れる。
屈んでよく見ると、それはライトアーマーだった。
膝当てや、体にフィットするような小柄のブレストプレート。肘、小手、腰部など、最低限の箇所のみ保護する構造。とこどころ部位のかけたアーマーと言える。
今使っている防具と作りはほぼ同じだ。軽装のカテゴリ。
プレートを持ち上げてみる。軽い。ギルドのものよりも全然。叩いてもみるけど、具合はやっぱりよくわからなかった。でも守りは保障されている、そんな気がした。
飾り気はないと思っていたけど、アクセントを出すよう黒のラインが施されていた。サイズも恐らくぴったり。

「……」

強く、惹かれた。
最初に手をとったものだからという理由もあるかもしれない。

気が付けば、僕はこの防具に引き込まれていた。
持ち上げているブレストプレートをじっと見つめる。引っくり返してみると、あった、【ヴェルフ・クロッゾ】という制作者のサイン。
【？φαιστο？（ヘファイストス）】のブランド名はまだ許されていないようだ。

（ヴェルフ・クロッゾ……）

覚えた。
僕の意識を鷲掴みにして、強引に振り向かせた鍛冶師の名前。
エイナさんの言っていた冒険者と鍛冶職人の繋がり、僕はそれを聞いた側から実体験した。
もう心はこのライトアーマーに傾いている。ぜひ購入したい。
ボックスに記載されている値段に視線を落とすと……げっ、９９００ヴァリス。
ほぼ有り金全部……。何だよ、全然安くないじゃんか。

「おーい、ベル君！　私いいの見つけちゃったよ！　プロテクターに革鎧（レザーアーマー）！　ちょっと高いけど、どっちか一つかは買っといた方がっ……あれ、ベル君も何か見つけたの？」

エイナさんが小走りにやって来た。
屈んでいる僕の頭上から覗きこんで……むむっ、という顔をする。
このボックスの形もあって、心証の悪さを買ってしまったのかもしれない。

「……それに決めちゃった？」

「はい。僕、これにします」

「はぁ……ベル君って本当に軽装が好きなんだね。せっかく選りすぐんできたのになぁ……」

「す、すいません」

申し訳なくなって肩を狭める僕に、エイナさんは「いいよ、気にしてない」と苦笑した。

「ベル君が使うんだもんね。私としては耐久のことも考えて欲しいけど……キミがこれ、って決めたんなら、それでいいと思う」

「ありがとうございます……」

お礼を告げてから僕は立ち上がってボックスを抱えた。やはり軽い。会計を済ませようと出納所を探していると、エイナさんが案内してくれた。

「ありがとうございました」と店員さんに頭を下げられて外に出る。残金はやっぱり１００ヴァリス。……高い買物になっちゃったかな。

「あれ……？」

エイナさんがいない。
軽装の入ったバックパックを背負いながら辺りを見回す。
どこに行ってしまったんだろうと顔を振っていると、あっさり。にこにこしているエイナさんは僕の真後ろに立っていった。
今、店から出て来たのかな？

「ベル君」

「？」

「はい、これ」

「……へっ？」

手渡されたのは、細長いプロテクターだった。
付属の篭手に取りつける形で、手首から肘くらいまでの長さ。盾と同じ機能を有しているのが鍛えられた金属面から見てとれる。
エイナさんの瞳と同じ、エメラルドの色をしていた。

「こ、これってっ……？」

「私からのプレゼント。ちゃんと使ってあげてね？」

「ええ！？　い、いいですっ、いらないです！　女の人にお金を使わせちゃうなんて……か、返しますっ！」

「なぁに？　女性からのプレゼントはもらえないっていうの？」

「い、いえっ。でもっ……情けなくて」

慌てふためいた後、正直に本音をこぼす。

いくら年上だからって、女性の人から貢ぎ物なんて……それだけで悪いことをしているように思えてしまう。

僕はうつむきがちになっていると、エイナさんはふっと微笑んだ。

「私はもらってほしいな。私のためじゃなくて、キミ自身のために」

「え……」

「本当にさ、冒険者はいつ死んじゃうかわからないんだ。どんなに強いと思っていた人も、神の気まぐれみたいに簡単に亡くなっちゃう。私は、戻って来なかった冒険者を沢山見てきた」

「……」

「……いなくならないでほしいなぁ、ベル君には。あはは、これじゃあやっぱり私のためかな？」

笑っておどけてみせるエイナさんは、その間も僕のことをずっと見てた。

その静謐な瞳で。

「だめ？」

僕は、床を見た。
少し赤くなった顔を前髪で隠す。
そんな言い方は反則ですなんて、もう言う気にもなれない。

「……それにさ、ベル君、私のこと大好きって言ってくれたじゃない？」

「えあっ！？」

今度こそ僕は真っ赤になった。がばっ、と顔を上げて視線を合わせる。
エイナさんの頬もほんのりと染まっている。

「あれはそのっ、エイナさんが僕を励ましてくれて嬉しかったから……！」

「私もさ、嬉しかったんだよ。ベル君に好きって言われて。そういう意味じゃないってことはわかってるよ？」

どっちも、赤面。

「だからってわけじゃないけど、ちょっと恩返ししたいなって思っ

たんだよ。キミに渡したくなっちゃった。ね、受け取って？」

ちょん、と鼻をつつかれる。
僕は触れられた鼻を撫でながら、赤い顔のまま頷いた。

「ありがとう、ございます……」

「どういたしまして」

胸の中に渡された緑玉色の防具は、温もりに満ちていたような気がした。

「ちょっと遅くなっちゃったな……」

空が茜色に染まっている。もうすっかり夕暮れ時だ。
買物を終えた僕は、エイナさんを送っていって帰路についていた。
メインストリートから外れ、いくつもの小径が入り組んだ裏道へと入る。
駆け足になる足が地面を蹴る度に、膨らんだバックパックをガシャガシャと鳴らした。

（エイナさんにあんなドキドキしちゃうなんて……僕って実は浮気性？）

頭の中のヴァレンシュタインさんが非難がましく僕を見てる。勿論妄想だけど。
自分に移り気があるなんて信じたくないなぁ……って、僕ちょっと前まではハーレムがどうたらとか言ってたじゃん。
アハハハ、とちょっと壊れた笑い声を出しながら現実逃避をする。
僕はヴァレンシュタインさん一筋なんだヴァレンシュタインさん一筋なんだ……

「……足音？」

立ち止まる。

裏路地の奥から、僕以外のバタバタと何かが駆ける音が響いている。
一人……いや二人か。小さいのと大きいの、靴音の大小がはっきりしているために察することができた。
だんだん近付いてくる。

「どこから……？」

メインストリートは外れたばっか。来た道を振り返れば人の行き来がはっきりと見える位置。
喧騒に紛れていても、路地を木霊する足音は音質が異なり浮き彫りになっている。
僕達のホームの近くで面倒事が起きているんだったら不味い。
ちょっと不安に流されながら、僕はいつも曲がる道をまず覗きこもうとする。

「あうっ！」

「えっ？」

出し抜けに、一つの影が僕の前をべちゃっと転がった。
足に何かがぶつかった感触。どうやら、曲がり角から身を乗り出した僕の足にその影が引っかかってしまったらしい。
上がったか細い悲鳴に僕は慌てて近寄ってみると……

（……ホビット？）

神様より低い身長に、触れれば折れてしまいそうな細い手足。
一つ一つのパーツが小さい。耳は尖り気味だ。
特徴的な外見を持つその異種族に僕はすぐ気付いた。あの食べたり踊ったり、騒いだりすることが大好きな亜人だ。

「すいません、大丈夫ですか！？」

「ぅ……っ」

もぞりと動いてその小さな体が起き上る。
女の子だ。ダークブラウンのぼさぼさの髪がうなじを隠している。
容貌はいじらしい。何もかも小振りな顔立ちの中で、その大きく円らな瞳が印象を際立たせていた。

「追い付いたぞ、この糞ホビットがっ！！」

僕が手を貸そうとしたその時、路地の奥から一人のヒューマンが現れた。
ほとばしった怒声がホビットの少女を可哀相なくらい怯えさせた。
びくっ、と大きく震えて顔を歪めている。
目をギラギラと光らせているその男はどうやら冒険者のようだ。
二十くらい？　比較的大きな剣を背中に差していて、僕よりガタイがいい。

「もう逃がさねえからな……ッ！」

はぁ、はぁ、と息を切らす青年は悪鬼のごとき表情をしていた。
直接向けられていない僕も思わず仰け反ってしまうくらい。普通に怖い。
――この人、ホビットの子に一体何をする気なんだろう？
そんなことを考えたら、僕の体は勝手に動いていた。
少女の体を隠すように、青年の進路に立ち塞がる。

「……あぁ？　ガキ、邪魔だ、そこをどきやがれ」

男の目は今の今までその少女しか映しておらず、ここで初めて僕のことに気付いたようだった。
頬がひくつく。モンスターはいくら倒せても、こういうのにはちっとも慣れていない。
僕はその形相の迫力に押されながらも、必死に足を縫い止める。

「あ、あの……今からこの子に、何する気ですか……？」

「うるせえぞガキッ！！　今すぐ消え失せねえと、後ろのそいつごと叩っ斬るぞ！」

――あ、ダメだ、どけない。
僕は涙目になりながら覚悟した。事情は知らないけど、この人は間

違いなく、後ろの女の子に酷いことをする。
背負っているバックパックを下ろして裏路地の隅に寄せた。僕の行動にその冒険者は勿論、斜め後ろにいるホビットの少女も驚きをあらわにする。
瞠目していた男は、すぐにカァッと赤なった。

「ガキ……！　マジで殺されてえのか……！！」

「そ、その、い、一回落ち着いた方がっ……！？」

「黙れっ、何なんだよテメエは！？　そのチビの仲間なのかっ！」

「しょ、初対面ですっ」

「じゃあ何でそいつを庇ってんだ！？」

「……ぉ、女の子だからっ？」

「なに言ってんだよテメエッ……！」

本当に、何を言っているんだろう……。
でもしょうがないと思う。実際どうしようもなく、それだけが理由だから。
男だったら、普通にそうでしょ？　女の子が襲われてたら、普通に助けるでしょ？
理由を探す方が無茶ってもんだよ……！？

「いい、まずはテメエからブッ殺す……！」

男が手を後ろにやって剣を抜いた。
本物の殺気にビクッと体が揺すれて、反射的に僕も《神様のナイフ》を構えた。
はっ、と息を呑む音。見れば、ホビットの少女が目を剥いて僕を注視していた。いや、見ているのは……神様のナイフ？
男の方もこちらの構えに一旦は驚いたようだけど、すぐに双眼に力を入れ直して睨みつけてくる。

――やばい。

初めての対人戦……足が震えてくる。戦えるの、こんなんで？
初めて触れる人の殺気は僕を盛大に緊張させた。汗が吹き出してきて、唾を何度も飲み込んでしまう。
カッコ悪いほど怖じけついている僕の姿に、男は獰猛な笑みを浮かべた。目の前の相手が取るに足らない存在だと悟ったのだろう。
男が堂々と一歩間合いを詰めてくる。僕は後ろに下がりたい衝動を噛み殺して、必死に堪えた。
やられるイメージしか湧かない。でも、退けない。
僕は、有りっ丈の力を振り絞って瞳をつり上げた。
次の瞬間、男が一気に飛びかかってくる。

「止めなさい」

けれど、男の剣が僕に振り下ろされることはなかった。
芯のこもった鋭い声が場に割って入ったのだ。

弾かれるようにそちらへ振り向く僕達の目に映ったのは、大きな紙袋を片手に抱えたエルフの少女だった。
エイナさんと似た栗色の髪。彼女と違うのはその耳がより鋭角的な線を描いているということ。
空色をしたアーモンド形の瞳が、青年の冒険者を真っ直ぐ貫いている。
えっと、確か……「豊饒の女主人」のスタッフの、リューさん？

「次から次へと……！？　今度は何だァ！？」

「貴方が危害を加えようとしているその人……彼は、私の大切な同僚の伴侶となる人です。手を出すのは許しません」

彼女は何を言っているンダ。

「どいつもこいつも、わけのわからねえことをっ……！　ブッ殺されてえのかあッ、ああ！？」

「吠えるな」

――しんっ、と空気が凍る。
大声を散らしていた男が言葉を呑み込んだ。目を細めたリューさんが途轍もない威圧を放ってきてる。目に見えて彼は狼狽した。
そういう僕も言葉を失ってしまった口だ。

「っ……！？　……！？」

「手荒なことはしたくありません。私はいつも“やり過ぎて”しまう」

メインストリートの方角から伸びてくる夕日を背負って、リューさんは淡々と喋った。

多分、きっと、事実。そう思えるだけの真実味が、彼女のたたずまいからひしひしと感じられる。

冒険者の青年は口をぱくぱくと動かすだけだ。

間を置かず、リューさんは空いた手にジャキッと小太刀を装備した。

み、見えなかった……。

「く、くそがぁ！？」

「……」

「大丈夫でしたか？」

戦わずして冒険者を追っ払ってしまった目の前の女の子に、少しの畏怖を覚えてしまった。

顎の下に溜まった汗を拭う。先程の冒険者と睨み合っていたせいなのか、それとも彼女の気に当てられたせいなのか、判別がつかない。

リューさん、もしかして冒険者とか……？

「あ、ありがとうございます、助かりました……」

「いえ、こちらこそ差し出がましい真似を。貴方ならきっと何とかしてしまったでしょう」

「いや、そんなことはぁ……」

凄いビビってた。悪い想像しか浮かばないほど。
僕は頬をかいて視線を横に逸らす。

「リュ、リューさんはどうしてここに？」

「夜の営業に向けて買い出しをしていました。昼間とは違って冒険者達が押し寄せてくるので、準備をしておかないと大変なことになりますから。その途中で貴方を見かけてしまい、つい」

なるほどと納得する。「豊饒の女主人」は人気の酒場みたいだから、生半可だと食糧もお酒もすぐに底がついてしまうのだろう。
それにしても「つい」って……正義感が強い人なのかな？

「貴方は？」

「あっ、そうだ、あの子……あれ？」

周囲を見回したが、先程までいたホビットの女の子は忽然と姿を消していた。

「誰かいたのですか？」

「え、ええ。その筈なんですけど……」

怖くなって逃げ出しちゃった、のかな。
しょうがないと言えば、しょうがないのか。僕も普通に怖かったし。
なんか、後ろ髪を引かれるけど……。

「では、私はこれで」

「はい。本当に、ありがとうございました」

僕とリューさんは互いにお辞儀をして、その場を別れた。

「よし……」

装備を一新したベルは姿見で自分の姿を確認した。
昨日購入した鉄色のライトアーマーは、下に着こんだ黒のインナーとパンツと相まってよく映えていた。
鎧そのものの自重はまるで感じられず、動きに支障をきたすことは皆無だ。
左手には輝きを放つプロテクターが装備されている。
ベルはエイナからもらったそのエメラルド色の防具の表面を、微笑みながらそっと撫でた。

「神様、じゃあ行ってきますねー！」

「う～ん、いってらっしゃぁ～い……」

疲労からベッドに沈んでいる己の主神に苦笑しながら、ベルは出入り口に向かった。もうバイトの件については説得を諦めている。
最後にもう一度だけ鏡を見た。間に合わせの貧層な支給品から一転した装備状況。やっと冒険者“らしく”なってきたのではないか、とベルは少し悦に入る。
《短刀》と《ヘスティア・ナイフ》を腰に備えて完全装備、隠し部

屋を出た。

（いい天気……）

地面の鉄扉を開けた途端に広がった空は晴れ渡っていた。
今日もいいことあるんじゃないかと、青空に口元を緩めながらベルはそんなことを思う。
裏道を経由してメインストリート、そしてセントラルパーク。
冒険者達の波に乗ってベルはバベルまでやって来た。

（今日も……）

頑張ろうと、金髪金眼の少女を胸に思い浮かべながら呟こうとしたベルだったが、

「お兄さん、お兄さん。白い髪のお兄さん」

自分と思しき者を呼ぶ声に、行動を中断された。

「えっ？」

声のした方向に振り向く。

しかし自分に近付いて追い抜いていく冒険者達が視界を過るだけで、声の人物らしき者はいない。

「シシシシッ。お兄さん、下、下ですよっ」

耳朶をくすぐるような笑い声と細い言葉に従って顎を引くと、いた。身長およそ１００ｃｍ。クリーム色の外套を身につけ、深くかぶったフードからダークブラウンの前髪がばらばらとはみ出ている。その小さな体よりひと回りもふた回りも、いやもっとそれ以上に大きい、思わずぎょっとするようなバックパックを背負っていた。少女は、ホビットだった。

「き、君はっ……」

「“初めまして”、お兄さん。突然ですが、サポーターなんか探していたりしていませんか？」

ベルの声を遮って、ホビットの少女はその赤ん坊のような人差し指をベルの背へ向けた。

示す方向にあるのはベルのバックパック。

ソロと思われる冒険者がバックパックを装備している光景を見れば、その心中を察するのは容易だ。

『サポーターがいてくれたらなぁ』、と。

故に、ホビットの少女は半ば確信してベルに尋ねたのだ。

サポーターはいりませんか？　と。

「え……ええっ？」

「シシシシッ。混乱してるんですか？　でも今の状況は簡単ですよ？　冒険者さんのお零れにあずかりたい貧乏なサポーターが、自分を売り込みに来ているのです」

目を丸くするベルとは逆に、ホビットの少女はお日様のようににこっと笑ってみせた。

「そ、そうじゃなくて……君、昨日の……？」

「？？　お兄さん、リリと会ったことがあるんですか？　リリは覚えていないのですが」

首を可愛らしく傾げる少女に、ベルもつられて首を傾げそうになった。

周囲の冒険者達の「往来で何やっているんだこいつ等は」という傍迷惑そうな視線が寄せられる。

「あれぇ？」

「シシシシッ。それでお兄さん、どうですか、サポーターはいりませんか？」

「ええっと……で、できるなら、欲しいかな……？」

「本当ですかっ！　なら、リリを連れていってくれませんか、お兄さん！」

ホビットの少女は無邪気にはしゃぎ、そしてフードと前髪の中に隠れている円らな瞳があらわになった。
大きな瞳は、ベルの腰に差さっているナイフに釘付けになっている。

「まぁ、それはいいんだけど、うーん……？」

「あっ、名前ですか？　失敬、リリは自己紹介もしていませんでした」

ホビットの少女は朗らかに笑い、ベルの目を見上げた。

「シシシシッ。リリの名前はリリルカ・アーデです。お兄さんの名前は何て言うんですか？」

ベルの瞳の中に映る少女の瞳は、少し怪しく輝いていた。

6話　サポーターの事情

「じゃあ、君はフリーのサポーターじゃなくて……」

「シシシシッ。そうですよ、リリはちゃんと【ファミリア】に入っています」

バベル二階、簡易食堂。

大半の冒険者達がダンジョンにもぐっている正午前、使用者の少ないこのだだっ広い空間で、僕はホビットの少女とテーブルの上で言葉を交わしていた。

リリルカ・アーデ、と名乗ったこの女の子が持ちかけてきた話を吟味するためだ。

「【ファミリア】の名前は？」

「【ソーマ・ファミリア】ですよ、お兄さん。割と有名な【ファミリア】だとリリは思っています」

サポーターとしてダンジョン探索に同行したいと交渉してきたリリルカさんは、何でも今まで行動をともにしていた冒険者パーティに契約を解消されてしまったらしい。

困り果てながら新しい契約相手を見つけようとギルドとバベルを往復する毎日を送り、そして今日、僕を見つけ出したのだ。

パーティもサポーターもいない、まさにといったソロの冒険者。もうこの人しかいないと一も二もなく飛びついてきた……とのこと。

確かにサポーターが欲しいって前から思っていたけど、その申し出にすぐ頷けるほど、僕もおめでたくはない。
ちらり、と目の前の少女を観察する。
薄汚れたクリーム色の外套。体はやせ気味で、目深にかぶったフードの下では小さな唇がいつもにこにこと笑みを描いている。ぼさっと伸びた髪の隙間から時折ちらつく円らな瞳が、僕のことを真っ直ぐ見つめていた。
こんな無邪気そうな子を疑うなんてしたくないけど、会って間もない相手の依頼を聞き入れてしまうのも間違っていると思う。常識的に考えて。
何となく気になることもあるし、僕はひとまず、いくつかの質問を通して彼女のことを見極めようとしていた。

「どうして違う【ファミリア】の僕に？　君の【ファミリア】の仲間とはパーティを組まないの？　それに、別々の【ファミリア】の構成員が繋がりを持つことはあまり良いことじゃないのに……」

「えへへ、リリは足手まといですから。何をやっても鈍臭いリリに、【ファミリア】のみんなは愛想をつかして邪魔者扱いにしてるんです。頼んでも仲間に入れてくれないんですよ」

「……」

「【ファミリア】の関係の話はきっと大丈夫です。ソーマ様は他の神様達のことに未来永劫無関心なので、敵になるとかならないとか以前の問題です。そちらの神様がソーマ様を目の敵にしていない限り、【ファミリア】間の戦争が勃発することはまずないと思います」

後の話は聞いちゃいなかった。最初の返答の内容に、言葉が詰まる。
【ファミリア】の中で身内をのけ者にするなんて、本当にそんなことがあるの？
僕からしてみれば【ファミリア】っていうのは家族だ。
【ヘスティア・ファミリア】はまだ僕と神様しかいないけど、そこにはちゃんとした絆がある。決して気休めなんかじゃない、家族と言える温かな場所と繋がり。これから加入してくる人が増えてもそれは変わらないだろう。
苦楽をともにする生涯の関係。それが【ファミリア】の筈だ。
それなのに……この子の【ファミリア】は、家族を蔑ろにする？
リリルカさんの言葉が偽りだとは思えなかった。理由なんて説明できないけど、何でもないように笑ってみせたその表情に、漠然と確信を得てしまう。
嘘なんかじゃないんだって。

「格安とはいえ、ここの宿泊施設に泊まり込むのも手持ちのお金が心もとなくなってきました。ですから、ぜひっぜひっぜひっ！　リリはお兄さんとダンジョンにもぐりたいんです！」

【ファミリア】のホームに寝る場所が、居場所がないと、発言の裏側から拾い上げる。
胸の中で渦巻く吐き気を必死に堪え、ずれた方向に脱線しかけている思考を強引に修正した。
僕が感傷に浸ってどうするんだよ。そもそも他所の【ファミリア】の問題に口出しするのはタブーだ。僕が彼女にしてやれることなんて、ない。
ちっとも納得していない本音に建前で蓋をして、僕は意識を当初の

目的に戻した。

「リリルカさんの事情はわかったけど……最後に一つ、確認させてもらっていいかな？」

「はい、何でしょう？」

「僕達、本当に会ったことない？」

僕が気になっているのはこれだ。

昨日、冒険者の男に襲われそうになっていたホビットの女の子は、リリルカさんではないのか。

顔や声をまともに確認していたわけじゃないけど、あの子と彼女は特徴が酷似している。流石に昨日の今日で記憶が食い違う筈もない。

疑念をおおっぴらにする僕の態度に、リリルカさんは困ったように口を曲げた。

「リリはお兄さんと初対面の筈なんですが……見間違えだったりしませんか？　ホビットなんてこの都市には沢山いますし」

「……もしよければ、そのフードを取ってくれないかな？」

そうすればはっきりするから、と僕は言外に告げた。

目を覆い隠すフードの下を確認すれば判断はつく。僕が同一人物だと確信に踏み切れないのは、この子の顔が半分しか見えていないからだ。

僕の要求に目に見えて動揺したリリルカさんは、体を頼りなく左右に揺らした後、「わかりました……」とぽつりと呟いた。
小さな両手がフードにかかる。

「!?」

「……え、えへへっ。これでいいですか?」

そして、隠されていた醜い傷が、僕の視界に飛び込んできた。
右の側頭部から頭頂を経由して額まで走っている、歪な一本の線。
地割れのような太い傷痕は当時に被った傷の深刻さを物語っている。
ぼこぼことしたその頭皮からは毛がごっそり無くなっていた。
――あの子じゃない。
強烈な衝撃に見舞われ、僕は僕の疑念を放棄した。
こんな目も背けたくなるような傷痕、記憶の中の女の子にはない。
あれば嫌でも覚えている。
それほどまでリリルカさんの古傷は鮮烈だった。これだけで、些細な共通項なんて吹き飛んでしまうくらいに。

「ご、ごめんっ!　もういいからっ!」

僕の叫びにリリルカさんはするっとフードを戻した。
気まず過ぎる沈黙。犯してしまったあまりに不用意な行動に、罪悪感がたちどころにこみ上げてくる。
リリルカさんはフードの上をぺたりと撫でた。

「シシシシッ。気持ち悪いですよね。冒険者の人はこれを見るだけでリリを毛嫌いするので、いつもこうして隠しているんです」

「……その傷は、モンスターに？」

「半分はそうです。【ファミリア】のみんなに、無理矢理身代わりにされて……それで」

聞かなきゃよかった……。

完璧に藪蛇。尋ねた質問のほとんど、滑っていた感じが否めない。

見極めるどころか同情心が芽生えかけちゃってる。

リリルカさんが【ファミリア】の仲間と行動を取りたがらない一因を垣間見てしまった。

封じ込めていた胸のむかつきがぶり返してくる……。

「……わかりました。それじゃあひとまず、今日一日だけ、サポーターをお願いします」

「ありがとうございます！」

もう疑う気力がなくなった僕は、取りあえずリリルカさんに付いてもらうことにした。

一日様子を見て、という判断はこの流れからいっても妥当の筈だ。

……本音をさらけ出しちゃえば、サポーターは、今の僕が喉から手がでるほど求めてやまなかった存在だ。

本来なら一刻も早く強くなりたい身の上としては、ダンジョンでは

戦闘のみに集中していたい。
リリルカさんの提案は僕にとっても渡りに船だったのだ。

「えっと、こういう場合は契約金とか、そういうのは必要なんですか……？」

「シシシシッ。その場合もありますが、今日はお試しという形なので、ダンジョンでの収入を別ける形でいいですよ？　リリは三割も恵んでもらえると飛び上がってしまうほど嬉しいです」

「ええっ、それだけ？　いいですよ、もっとちゃんと……」

それからしばらく、屈託なく笑い続けるリリルカさんと僕は、顔を近付けあって話し込んだ。

ダンジョンは、決まった階層を境にして地形も性質も変わる。

1~4階層は薄青色の壁でダンジョン内が構築されており、出てくる敵は主にゴブリンやコボルトといった低級モンスターばかり。種類も少ない。
4階層に近付くにつれ微妙な強さの変動が起こるが、最上階層ということもあって、初心者の冒険者にとっても攻略しやすい階層と言える。
一人でいる際に複数のモンスターに囲まれることがなければ――つまりパーティを組んでさえいれば、まず命を落とすことはない。
しかし、5階層から状況は一変する。
外観が薄緑色の壁面に変わっただけでなく、ダンジョン自体の構造も複雑となり、7階層初出のキラーアントを始めとした“いやらしい”モンスターが多く出現するようになる。
またモンスターがダンジョンから産まれるまでのインターバルが4階層以上と比べ物にならないほど早い。袋小路に入った瞬間、壁から這い出てきた数匹のモンスターに囲まれるというのもざらだ。
4階層以上で緊張感が薄らいでしまった新米冒険者達の多くはここで屍と化す。
例え油断はしないにしても、ダンジョンの脅威の片鱗が示され始める5~7階層は、冒険者達の最初の難関と言えよう。
物足りなくなったからといって易々と下層へ下りてはいけない。
まずは、4階層以上で十分な下地を作ること。【ステイタス】に限った話ではなく、経験、武装、機転、その他全ての点においてだ。
熟練度が上がり難くても、駆け出しの冒険者にはまずそれが求められる。
ましてやソロの冒険者となれば尚更だ。
しかし、

「ふッッ！」

「ギシャアアッ！？」

ベルの場合は少し事情が異なっていた。
常人以上の“成長速度”を誇る彼は、いち冒険者の範疇に収まらない。
繰り出された大薙ぎの一撃が、キラーアントの細い胴を捉え真っ二つにする。
現在7階層。
本来ならばパーティの連携がより求められるこの層にて、ベルは間断なく押し寄せてくるモンスターの群れに一人で立ち回っていた。

「ジギギギギギッ！」

「よっ、と！」

「ビュギ？！」

上空から降下してきた「パープル・モス」を往なし、《ヘスティア・ナイフ》で羽を断つ。
片翼を失った巨大な蛾のモンスターは、バランスを失ったところに《短刀》を打ちこまれ、あえなく絶命した。

「そこ動くなよおおッ！」

「グシュァアアアアアッ！！」

「ギィィィィィ！」

ベルが一目散に向かう場所には再びキラーアント。それも二体。
昆虫系特有の口をがぱっと大きく開けて威嚇してくる二匹のモンスターに対し、両手に持った二本の短刀を構え直す。
そのまま一挙に加速。二匹のキラーアントを同時に相手取ると見せかけ、右の一体に狙いを絞りこむ。急激な進路転換にモンスター達は一瞬反応が遅れた。

「はあっ！」

「！？」

突撃にものを言わせた刃の刺突がキラーアントの心臓を串刺しにする。
甲殻を砕き肉を食い破った《ヘスティア・ナイフ》の威力に、その一匹は断末魔を上げることさえままならない。
双眼から光を消し、巨大蟻は沈黙した。
ベルはすぐさま残っているもう一匹に取りかかろうとするが――ナイフが抜けない。

「げっ！？」

「ギシイイイイイ！」

割れた甲殻ががっちりと《ヘスティア・ナイフ》の柄に引っかかっている。ベルは動きを止めてしまった。
藍色の目を剥く間にキラーアントが回り込んでくる。同胞を殺されて怒り狂うモンスターは、その鋭い爪をベル目がけ振り下ろした。
ベルは、咄嗟に左腕を掲げる。

「ギッ!?」

「っ……あああああッ!」

ガキンッ! と鉤爪を弾くのは緑玉色のプロテクター。
キラーアントの攻撃力をもってしって傷一つつかない防具は盛大な火花を散らす。
ベルは反攻。痺れる左腕を無視し手の中にある《短刀》をパス、《ヘスティア・ナイフ》から指を離した右手がそれをキャッチする。
斬る。
短刀が甲殻の間を縫って走り抜けた。紫の血飛沫が噴出する。
その威力は数ある武器の中で最底辺にも関わらず、白刃はキラーアントに致命傷を与える。

「――ギ」

「次ぃ!」

《ヘスティア・ナイフ》を回収しとどめを刺したベルは、休むこと

なく未だ健在しているモンスターへ駆け出していった。

「シシシシッ！　ベル様お強い～！」

ベルがモンスターを蹴散らす光景を脇に、リリルカは彼が屠った死骸をズルズルッと一ヵ所にまとめる。

手馴れた動きだった。笑っていても周囲には細心の注意を払い、間違ってもモンスターとの鉢合わせは引き起こさない。

茶色に塗装された特別製のサポーターグローブが、モンスターの足を、手を掴んで容赦なくダンジョンの床を引きずっていく。

「シッ！」

「ギャウ！？」

リリルカの何気ない働きによって足場に不自由しないベルは、「ニードルラビット」を《短刀》の餌食にする。

ベルは基本に忠実だった。

既にキラーアントクラスのモンスターを圧倒できる実力を持ちながら、驕り高ぶらない。

エイナに教わった通り、仲間を呼ぶ厄介なキラーアントを真っ先に潰し、決して複数対一を作らないようにしている。

広いルーム内での戦闘は、完全にベルが手綱を握っていた。

「――グシュ……ッ！　ギシャアアアアアアアアアア

！！」

「わああっ！　べ、ベル様ーっ、また生まれましたぁー！？」

ダンジョンの壁面を破ってキラーアントが禍々しい産声をあげる。
もう何度目ともわからない場面の遭遇に、ベルの行動は迅速だった。
最後に残っていたモンスターを片付け、壁から這い出ようともがいているキラーアントへ疾走する。
約１０メートルの助走をつけて、左足を踏み切った。

「せぇー、のッッ！！」

「グヴュ！？」

飛び蹴りが炸裂する。
ズンッと薄緑色の壁に鈍い音が響き、首の折れ曲がったキラーアントが、ぐったりと力を失った。
ルームにようやく静寂が訪れる。

「あ～ぁ……どうするんですか、ベル様？　このキラーアント、壁に埋まっちゃってますよ？」

「ど、どうしようかっ？」

まるで穴にはまったような間抜けな格好で壁面に垂れ下がるキラー

アントに、ベルは汗を流した。
己の身長より高い位置にある死体に向かってピョンピョン飛び跳ねていたリリルカは、本当に困っているベルの横顔を見て、ぷっと吹き出した。

「ベル様はお強いのに、どこか変わっているです。あはははははっ！」

「……笑わないでよぉ」

その後、戦闘を終えた二人はモンスターの魔石除去の作業に取りかかった。
といっても、その場はサポーターが本職であるリリの独壇場で、ベルはモンスターの襲撃を警戒することしかやることはない。

「はぁ～、上手いもんだねぇ……」

「シシシシッ。リリはこれくらいしか取り柄がありませんから。このモンスター達を倒してしまったベル様の方が、ずっと凄いですよ」

「……あのさぁ」

自前のナイフで綺麗に魔石のみを切り抜くリリルカの技術は洗練されていた。
その小さな手がもぞりと動くたび、モンスターは小さな穴だけを開けて灰へとかえっていく。

これがベルだったなら時間をかけ過ぎる上、ほじくり返したような不規則な穴しか開けられず、魔石には肉片がことごとくこびり付いてくる。

「その、ベル様、って止めてほしいんだけど……」

「シシシシッ。ごめんなさい、そういうわけにもいかないんです。仮契約とはいえ、上と下の立場ははっきりつけないといけません。冒険者様には、サポーターはへりくだらないといけないのです」

「いや、でも、リリルカさん」

「ベル様、リリのことはリリと呼んでください。他の呼び方でもいいですが、『さん』づけはダメです」

「ど、どうして呼び方くらいでそんな……」

三体目のキラーアントを灰にしたリリルカは顔を上げてベルを見た。目を隠すフードの下で口元が笑みを作り、「いいですか、ベル様？」と一つ前置きをして語り出す。

「サポーター、なんて聞こえはいいですけど、蓋を開けてみればリリ達はただの荷物持ちです。命を賭けて直接モンスターと戦っている冒険者様からしてみれば、リリ達は安全な場所に逃げ込んで傍観するだけの臆病者で、何もしていないくせに甘い蜜を吸おうとする寄生虫なんです」

ダンジョンへもぐる時点でサポーターも同じ危険に晒されているため、一概にはそう言えないのだが、リリルカは訂正することなく自論を続ける。

「リリ達が冒険者様と同格であろうとすることは傲慢です。冒険者様もそれを許しません。もしそんなことをしてしまえば、冒険者様は怒ってリリ達に分け前など恵んでくれないでしょう」

「そんなことっ！？」

「シシシッ。ベル様がお優しいことは、会ったばかりのリリにもわかっています。けど、けじめはつけなくてはいけません。もしリリがベル様を敬わず生意気なサポーターだという風評が流れてしまったら、ベル様以外の冒険者様とダンジョンにもぐろうとする時、リリは全く相手にされなくなってしまいます。せいぜいタダ働きがいいところでしょう」

「……」

自分自身のことならば否定できた。

しかし、他の冒険者のことになるとベルは口を挟めない。

自分にとって間違いであることが、他人にとっては当然のことであるのかもしれないのだ。

「シシシッ。ベル様には慣れないことを強要させてしまいますが、受け入れてくれませんか？　どうか、リリを助けると思って」

「……わかったよ、リリ」

「ありがとうございます！」

結局ベルは折れた。

リリルカのためにと言われたら、自分の些事など捨てるしかない。

丁寧な言葉遣いも止めて、同年代の友人にそうするようにする。

「話は変わりますが……本当にベル様は駆け出しの冒険者なんですか？　こんな数のモンスターをお一人で倒すなんて……」

リリルカは小休止というように手を止めて、まだ残っているモンスターの死体の数を数えた。

既に灰となって消えたものも入れれば、キラーアントが四匹、パープル・モスが三匹、ニードルラビットが五匹の計十二匹。

亜人と同程度の体格を誇るキラーアントを除けば、パープル・モスとニードルラビットは小型種のモンスターなので、倒そうと思えば確かにそこまで手間はかからない。

が、やはりたった一人でこの数を捌いたことを加味すると、見方は大分変わってくる。

「んー、でも倒したっていっても危なかったところは結構あったし……」

「ベル様はお一人なのだから当然です。普通の冒険者様なら三人以

上のパーティを組んでダンジョンへもぐるんですよ？　ソロというのは普通、誰もやりたがりません」

ダンジョン内での連携は攻撃・防御（補助）・支援が成立しているものが理想とされる。

三という数字は不測の事態に直面してもぎりぎりで対応を働ける数なのだ。

ソロでは一人でこの三つの動作をこなさなければいけないわけだから、当然それぞれに割けるキャパシティは低くなる。手が回らなくなる、ということだ。

「でも、それはやりたがらないってだけで、できないって言うわけじゃないんでしょ？　Ｌｖ．０で僕より強い冒険者なんて一杯いるだろうし」

「それは……そうかもしれませんが」

「リリは色んなパーティと契約してたなら、実際に僕より強い冒険者を見てきたんじゃないの？」

「……はい。確かに、リリはベル様よりお強い冒険者の方々を見てきました……」

「じゃあ、やっぱり僕はまだまだだよ」

苦笑するベルにリリルカは困ったような顔をした。論点がずれていたからだ。

一人でソロをこなせる冒険者は確かにいる。
だがリリルカが聞きたいことは、ベルが冒険者になって、本当に一ヶ月も経過していないのかということだ。

Ｌｖ．０の冒険者が攻略可能なのは１階層から１２階層の間までと言われている。
階層ごとに基本アビリティ評価による到達基準を設けると、
１～４階層がＩからＨ
５～７階層がＧからＦ
８～１０階層がＥからＣ
１１～１２階層がＢからＳ
といった具合だ。しかしこれもあくまで参考の域は出ない。
１３階層以降はＬｖ．１にカテゴライズされるモンスターが出現するために、Ｌｖ．０の冒険者には絶対攻略不可能と言われている。

冒険者達の中で“一般的”と言われるＬｖ．を仮に定めるとしたら、それはＬｖ．０。冒険者の半数がここにいる。
そして残る半分が中堅と言われるＬｖ．１と、それ以上のＬｖ．を秘める者達。Ｌｖ．０とＬｖ．１の間には下級冒険者と上級冒険者としての境界線、つまり大きな線引きがなされている。“第三級冒険者”とはっきりとした地位を認められるのもＬｖ．１からだ。
Ｌｖ．０が一般的であるなら、Ｌｖ．１から先は少なからず才能と素質を求められる世界ということになる。
基本アビリティを含めた個人情報の流出は防がれているため、Ｌｖ．０の【ステイタス】の中でもどこまでが標準的な【ステイタス】なのか規定するのは難しいが、【ランクアップ】していない冒険者達は比較的７～１０階層の間に留まっている者が多い。
つまり基本アビリティ評価Ｇ～Ｃ。これがビギナーを越えエキスパートへと至れていない“一般的”な冒険者達の【ステイタス】と言える。

冒険者としての時間を半月と僅かに越えただけのベルが、その差し当たって一端と言われる彼等と肩を並べているのだ。
リリルカが解せないという顔をするのも無理はない。

「……シシシッ。まぁ、ベル様のお強さは【ステイタス】以外にも、“武器”によるところも確かにあるのでしょうが」

さわ、とリリルカの声の調子が少し変わった。
フードと前髪に隠れた焦げ茶色の瞳が企図の色を孕み、ベルの腰、一本のナイフを直視する。
その様子に気付かないベルは照れくさそうに笑った。

「やっぱりそうだよね。僕もちょっとこのナイフに頼っちゃっているんだ。こんなんじゃあ、本当に強くはなれないかなぁ」

「いえいえ、武器は持ち主に頼られてこそ本懐です。要は武器の力に翻弄されず、御することができればそれはベル様の歴としたお力ですよ」

「そう、なのかな？」

ベルはモンスター警戒のためリリに背を向けている。彼の色白の手が後ろに回り、そっとナイフを撫でた。
先から先まで漆黒に染まった珍稀な短刀。指の隙間から覗ける鞘には【？φαιστο？（ヘファイストス）】の刻印。

リリルカの目が爛々と輝く。

「武器に疎いリリでもベル様のそのナイフは立派なものだとわかるのですが、一体どうやって手に入れたのですか？　失礼ですが、駆け出しのベル様にはお金がないんじゃあ……」

「神様に……僕の【ファミリア】の主神に頂いたんだ。何でも友達の神様に無理言って、譲ってもらったんだって。無茶するよね」

「……それは、良い神様ですね」

「うん……。僕の大切な人なんだ」

動揺と、僅かな嫉妬に揺れた声はベルには届かなかった。
最後のニードルラビットを少し乱暴に処理したリリルカは立ち上がり、ベルの背後に忍び寄る。

「ベル様」

「あ、終わった？」

自分の方に振り向くベルに、リリルカはにっこりと笑う。

「シシシシッ。あの壁に埋まっちゃっているキラーアントの魔石も取っちゃいましょう、せっかくですから」

「ああ、そうだね。でもどうやろっか？」

「あの細い胴体を切っちゃえばいいんですよ。魔石は胸にあるんですし。後はリリがやっちゃいます」

「なるほど。じゃあ……」

「はい、ベル様」

「え……あ、うん」

さっと差し出されたリリのナイフをベルは受け取ってしまう。
自分の《ヘスティア・ナイフ》を使おうと思っていたが、まぁいいかと、下半身が埋もれたままのキラーアントに歩み寄った。
死骸の甲殻を掴みながら、上半身と下半身を繋げている胴に刃を沿わせる。

（んっ、ちょっと切りにくい……）

慣れないナイフに悪戦苦闘するベルはつま先立ちになる。
意識は視界に集中させ、背後はまるで顧みない。
脇が開いて遮るものが何もなくなった腰は、無防備だった。

「っ？」

神経を過敏にさせる気配。何かが頭の感覚に引っかかった。
即座に振り返る。

「終わりましたか？」

視界の中、リリルカがちょうどベルの隣に並んで、ぐっと背伸びをしてキラーアントを見上げようとする。
目を丸くさせたベルは苦笑して、もうちょっと待ってと手を動かす。
それからすぐにキラーアントは切断され、リリがあっという間に魔石を抽出した。

「シシシッ。それでは今日はこれくらいにしましょうか、ベル様」

「えっ、もう？　僕はまだ余裕あるけど」

「いえいえ、それは油断です、ベル様。ベル様が今日沢山倒したパープル・モスは毒鱗粉を撒き散らしています。下級モンスターなので即効性こそありませんが、何度も浴びれば『毒』の異常効果が発生します」

「うっ、嘘！？」

「本当です。愚鈍なことにリリは毒消しを切らしておりまして……早急にバベルへ戻って治療してもらうことをお勧めします」

思い出してみれば、エイナもあの蛾のモンスターと交戦する際には、常に位置取りを気にするようにと言っていた。
あちゃー、と米神をおさえるベルはリリの意見に賛成した。意識をダンジョン脱出に切り換える。

「毒ってどうなるんだろう……うわぁ、発生するまで時間ないのかな？　帰り道のモンスターは全力で倒しにいかないと……」

「大丈夫ですよ、ベル様。モンスターと遭遇しないで素早く帰還できる裏技をリリが教えてあげます」

「そ、そんなのあるの？」

はい、と頷いたリリはルームの出入り口に指を向ける。
通路の奥には数人の冒険者がいて、ベル達を一度見るとモンスターがいないことを悟り踵を返していった。

「他の冒険者様達の通った道を逆戻りすれば、モンスターはいません。冒険者様達はモンスター目当てでダンジョンにもぐっているのですから」

「ああ、なるほど」

「よしんばモンスターが出ても、他のパーティの影に紛れれば勝手に倒してくれますしね。要は人がいるところを選べば、モンスターとのエンカウントはゼロにすることができます」

本来ならば、他【ファミリア】の構成員がたむろする場所は余計ないざこざを起こさないために避けるのだが、状況によってはその限りではない。
時には上手く利用することで、窮地を打開するための一手ともなるのだ。

「この時間帯なら冒険者様達は溢れるほどダンジョン内にいるでしょう。リリに付いてきてください、ベル様には一度も武器を使わせませんよ」

笑顔を浮かべて見上げてくるリリにベルは頼もしいと思った。
ダンジョンの知識は彼女の方が一日の長があるので、素直に頷くことにする。

「リリもやっぱり凄いよ。サポーターなんて、って言うけど、すごく頼りになる」

「シシシシッ。ベル様も経験を積めばこんなのすぐですよ。さぁ、早く行きましょう！」

どこか急かすリリに手を引っ張られてベルは出発した。
地面に残る足跡を辿って、度々冒険者達とすれ違い、時にはモンスターを彼等にぶつけるリリの手並みは見事だった。
慣れ過ぎているというくらい、それほど効率が良かった。

「ベル様、ベル様。今日の報酬の話なんですが……」

「うん。こんなに手伝ってもらったし、普通に山分けで……」

「回収した魔石とドロップアイテムは全てベル様にお渡します。どうか懐を温めてください」

「って、ええ！　それじゃあリリ、本当にタダ働きだよ！？　三割は欲しいってあの時に言ってなかった！？」

「シシシシッ。これでベル様の信用が買えるならお安いものです。今日はいわばベル様の中でのリリの価値付け、信頼に足る相手なのか見極める通過儀礼なのですから」

「うっ、わかっちゃってた……？」

「シシシシッ。みんなそうですよ、ベル様だけじゃないです」

リリを試すような真似をしていたことを看破され、ベルはばつが悪い思いをした。

顔を恥ずかしそうに染め、彼女に対して申し訳なくなる。

「……まぁ、あとは置き土産でしょうか」

ぽつり、と呟かれた言葉は風の中に掠れて消えた。

「？　何か言った、リリ？」

「いーえ、何でもありません。……ベル様、もしよかったらこれからもリリを雇ってやってくださいね？」

「うん、いい返事ができるように考えておくね」

リリは走ったまま、ベルに振り返って満面に笑う。

「はい。リリはいつもバベルにいますから、いつでも会えます。リリは決して逃げませんから、ゆっくりお考えになってくださいね！」

田舎者で無知な少年が違和感を抱くことは、ついぞなかった。

「うーん、別の【ファミリア】のサポーターかぁ……」

「やっぱり、不味いですかね？」

お馴染みとなっているギルド本部の面談用ボックスで、僕はエイナさんにリリのことを相談していた。

バベルの治療施設（ちなみに有料）と換金所に寄って真っ直ぐにここに来たのだ。

情けない話だけど、僕一人だけで判断するにはいかんともしがたい。

他人に指示を仰ぐのが最良と考え、恒例のようにエイナさんへ意見を求めている。

「一口に【ファミリア】間の問題といっても、【ヘファイストス・ファミリア】みたいに明るい契約関係を築いてる例もあるしね……ベル君から見てどうなの、そのリリルカさんっていう子は？」

「はい、いい子でしたよ……サポーターとしても有能そうでしたし」

サポーターとしての働きも含めて、僕のリリへの心証は悪くない。

というか、憐憫みたいなものが手伝ってあの子を放っておけなくなってる。

そんなんじゃあいけないんだろうけど……でもなぁ。
上手く言えないんだけど、リリ自身でも気付けていないくらい……
そう、寂しさに鈍感になっちゃってるっていうか。
とにかく、目を離していたらいけないような気がする。

「その子の所属している【ファミリア】はわかる？」

「確か、【ソーマ・ファミリア】って言ってました」

「【ソーマ・ファミリア】か……んんー、これまた強く反対も賛成もできないところが出てきたなぁ」

「……あの、エイナさん。【ソーマ・ファミリア】って、柄が悪い【ファミリア】だったりするんですか……？」

リリの言っていたことを思い出しながら尋ねる。
エイナさんは「ちょっと待って」と言い、用意していた大型のファイルをぱらぱらとめくり出した。
自分の知識だけじゃなくて、正確な情報を詳しく教えてくれようとしているんだろう。

「うん……【ソーマ・ファミリア】は典型的なダンジョン系【ファミリア】だね。他の【ファミリア】と少し違うのは、ちょっとだけだけど、商業系にも片足をつっ込んでいることかな」

「商業系？　ってことは、市場に何か商品を出しているんですか？」

「ええ、お酒を販売しているの」

「お酒……？」

「そう。品種や市場に回す量自体は少ないんだけど、味は絶品だっていう話だよ。オラリオの中でも需要はかなり高いみたい」

そっちで【ファミリア】を展開しても十分通用しそうなものだけど、とエイナさんは付け足す。

冒険者っていうのは常に身の危険というリスクが付きまとうから、【ファミリア】を安全に発展させたいのなら、堅気の職業に身を置くのが一番いい。

その代わり“冒険者は化ける”。この迷宮都市では、ハイリスクハイリターンを恐れないのなら、一攫千金を狙えるのもまた冒険者しかいない。

「【ファミリア】の中でも実力は中堅の中堅だね。飛び抜けた実力者はいないけど、あそこの冒険者達はみんな平均以上の力を持ってる。うわ……何より構成員の数が凄いね。これは知らなかったなぁ」

「【ファミリア】の団員の数が多いってことは……」

「主神であるソーマは、信仰はされているみたいだね。あの神はいい噂も悪い噂も、ほんっとうに全くないんだけど……」

「えっと、リリっていう子も言ってたんですけど……そのソーマ様って、他の神様達と全く関係がないんですか？」

「むしろ神ソーマはそっちの話で有名だね。神相手に浮世離れなんて言うこと自体おかしいけど、あの神はまさにそれ。神達の開く催しにはこれまで一回も出てないって聞くし、交遊もさっぱり。というか、あの神ソーマと面識ある神って誰？　って言われるくらい」

それはまた……極端というか何というか。

未来永劫無関心、なんてそうえいばリリは言ってたっけ。

エイナさんが反対も賛成もできないなんて言ったのも、無難も無難過ぎる【ファミリア】だからなのかな？

気持ちのいいくらい友好的な【ファミリア】っていうわけでもないし、絶対関わることをお勧めしないっていう【ファミリア】でもない……みたいな？

うーん……神様（ヘスティア様）に聞けば、何かソーマ様のことについてわかったりするかな？

「【ファミリア】自体に変わったところはないっていう感じかな。……ただ」

「ただ？」

エイナさんは言い難そうに眉を曲げていたけど、逡巡を断ち切るように口を開いた。

「あくまで私の主観なんだけど……【ソーマ・ファミリア】の冒険者達は、普通の【ファミリア】の冒険者とは雰囲気が違うの。仲間内でも争っているというか、死に物狂いっていうか……」

「……」

「生き急いでいるとかそういうんじゃないんだけど、何ていうのかなぁ、アレは……。とにかく必死なんだよね、あの【ファミリア】に所属する人、全員」

喋ったエイナさん自身困ったような顔を浮かべている。僕も当惑するしかない。

何だか【ファミリア】の背景を知った分、益々リリのことについて話がこんがらってきたような気がする……。

「一応、私はその彼女をサポーターとして雇うのは賛成するよ」

「えっ、いいんですか？」

「うん。確かに【ソーマ・ファミリア】にはきな臭いところもあるけど、ベル君が心配しているような【ファミリア】のもめ事は決して起きないと思うから。神ソーマのことを踏まえたらね」

リリと同じ意見、ってことか。

「【ソーマ・ファミリア】の他の構成員を刺激しないように心がけておけば、きっと大丈夫。それに私としては、ソロのキミに早くサポーターなりパーティなり組んでほしいから、むしろ勧めたいかな」

「エイナさん……」

「後はベル君の心次第。やっぱり、最後はキミが自分で決めて、自分で責任を取らないと」

……当たり前か。

エイナさんには参考までに話を聞くってだけで、何も全てを委ねにきたわけじゃない。

ここからは僕が考えて決めることだ。人の出した結論でリリに接するなんて、彼女にも失礼だと思う。

もう一度頭の中を整理して、最終的に答えを出そう。

「私の方もさ、フリーのサポーターを探してみたんだけど、やっぱり見つからなかったよ。前まではいたサポーター達も、どこかしらの【ファミリア】に加入しちゃってた」

ごめんね、とエイナさんは苦笑いする。

一度サポーターを雇うか雇わないか話し合ったから、覚えていてくれたみたいだ。

というより、ずっと気にしていてくれたのかもしれない。さっきまでの発言を振り返ってみると。

「神の恩恵を受けていない人は、わざわざダンジョンにもぐろうとはしない、ってことなのかもね。報酬も契約相手によってまちまちだし、他にもっと安全で稼ぎ高のいい仕事はありそうなものだから」

無所属（フリー）ということはどの【ファミリア】にも所属していないということだから、当然神の恩恵は授かっていない。
基本的に、一般人と変わらない身体能力しか有していないということだ。
まぁ、純粋に力自慢のドワーフとか魔法を扱えるエルフとか、普通にモンスター達と戦っても遅れをとらない種族もいるわけだから、一概に無力っていうわけでもないんだけど。
そこまで考えた僕はふと、リリの会話の中で思い出したことを尋ねてみることにした。

「エイナさん。サポーターって、冒険者に疎まれたりされるものなんですか？」

「……そうだね。専門職のサポーターは身分が低いかもしれない。理由は言わなくてもわかってると思うけど……」

ただの荷物持ち、と話していたリリの言葉が蘇る。
本当にそうなのかと、前まで憧れてすらいた冒険者像へ、失望に近い感情を抱いてしまう。

「普通、サポーターっていうのは力の弱い人がなるものなの。一流の【ファミリア】は、例え【ランクアップ】していても下っ端の冒険者にやらせるから」

ただしこの場合は、そのサポーターも先達のダンジョン探索を間近

で見られるという、いわゆるお勉強の一面もあるらしい。
荷物持ちとはいえ、自分の力では通用しない階層まで随伴することで、まだ見ぬ領域――強大なモンスターの力や、何より【ファミリア】の中でも精鋭達の戦術――を直接肌で感じることができる。

「神の恩恵を受けても誰も彼も無限大に強くなれるわけじゃない。素質もあるし、モンスターの前で畏縮することのない精神的な部分も関係してる。低級モンスターは倒せても、そこから先は全く歯が立たなくなるっていうのはざらなんだ」

「……」

「言っちゃうと、そんな落ちぶれた冒険者達が専門のサポーターに転職するから……ちょっと、ね。蔑視の対象にはなり易いのかな」

少々重苦しい空気になってくる。
エイナさんが快く思ってないのは表情から一目瞭然だったし、こんなことを話させてしまったこと自体心苦しい。

「その子も【ファミリア】に入っているみたいだけど、やっぱり神の恩恵を受けてた？」

「はい、多分。その子、ホビットなんですけど、自分の倍はあるモンスターの死骸をずるずる引きずってましたし……」

間違っていないだろう。

恩恵を受けていると考えれば、あの切れのある動きも説明がつく。
でも、そうか。リリが自分をあんな風に卑下していたのも、周りから落ちこぼれのレッテルを貼られたせいだったのかもしれない。
……やりきれない。
何だこれ。自分のことじゃないのに、居ても立ってもいられなくなる。
髪を思いっきり掻き毟りたい衝動に襲われながら、僕は自制心を利かせて席を立った。じっとしていると深みにはまりそうだ。

「ありがとうございます、エイナさん。色々参考にします」

「うん。私の方はいつでもいいから、こういう話はちゃんと相談しにきてね？」

優しい笑みを浮かべるエイナさんに、僕はもう一度お礼を告げた。
軽く伸びをして、部屋のドアへとつま先を向ける。

「あれ……ベル君？」

「何ですか？」

「ナイフは、どうしたの？」

「へっ？」と身に覚えのない問いかけに間抜けな返事をする。
今まさに立ち上がろうとしていたエイナさんは、怪訝そうな顔で僕の腰を見つめていた。

「ナイフ……？」

腰に手をやる。
短刀、ある。
魔石入れの腰巾着、ある。
神様のナイフ、ある。
……ただし、鞘だけ。

「……」

柄があるべき筈のその位置には、スカスカと鳴る空気だけしかなかった。
さあぁっ、と恐ろしいくらいの速度で血の気が顔から引いていく。
取り乱して腰を何度もばんばんと叩き出す僕を見て、エイナさんも「まさか」という表情を浮かべる。
――神様のナイフが、ない。
僕は顔を真っ青にした。

「お、落としたぁあああああああああああああああああああああああああ！？」

裏路地を進んでいた。
メインストリートに沿って広がる華やかな街とは、趣が大きく異なった細道。
上を見上げれば、レンガ造りの民家によって切り取られた空も、同じように細長い。
底をオレンジ色に染めた雲に見下ろされている小径はどこか薄暗かった。日が没しようとしている。
お粗末に設置されたゴミ捨て場に黒猫がたかっており、金色の目を向けてきた。にゃーん。逃げていってしまう。

ペタペタ、と小さな足音が響く。
迷宮よりも迷宮らしい複雑な道の連なりを、確固とした足取りで進み、角をいくつも折れ曲がり、やがてお目当ての建物が現れた。
少し開けた場所にぽつんとたたずむ、老舗。老舗どうか知らないが、そんな雰囲気。
木材だけでできた一軒家の上には、掠れて文字の見えなくなった看

板が首を傾げていた。
ドアを開けて中に入る。枯れた鐘の音が鳴る。

「ああ、またお前さんか」

「お願いします」

白い髭を蓄えた丸禿のノームが新聞紙から顔を上げた。帽子を被っているが、知っている。毛はない。
言葉少なに抜き身の短刀をカウンターに置く。

「ふぅん、これまた変わったものを持ってきて……」

眼鏡の位置を調整しながら短刀をつぶさに見つめた後、店の主人は
「少し待っとってくれ」と言ってその場を立った。
店の奥に消える丸い後ろ姿を見送り、数え切れないアンティークに飾られた店内を眺める。硝子のケースの中に並べられる色とりどりの宝石群に感嘆の息をついた。
思ったよりずっと早く、ノームの店主は帰ってきた。
珍しくしかめっ面を浮かべている。

「何じゃいこりゃあ？　ゴミかい？」

「なっ……」

「押しても引いても何も切れはしないし、中身も普通の鉄ときとる。珍しいのぉ、お前さんがこんなものを掴まされるなんて」

「ま、待ってくださいっ、そんな筈は……！」

「といってもなぁ。間違ってもこんなモノ、お得意さんに回すわけにはいかんし……ウチでよければそこら辺に飾るよ？　３０ヴァリスでどうだい？」

「っ……また来ますっ！」

「おうおう、今度は期待しとるよ。……でもあのミミズがのたくったようなワケワカメな文字、ジジイどっかで見たことがあるような……」

肩を震わせながらドアを行儀悪く閉めた。

再び裏道に入り、ベタッベタッ、と来る時よりぞんざいな足音を鳴らしていく。

３０ヴァリス？　ジャガ丸くんの値段と一緒？

馬鹿を言うな、これは化物の硬い肌を苦もなく切り裂くことのできる業物だ。豪邸を三つ作ってもお釣りが来るほどの価値がある筈だ。ついに店主はボケたのかと考える。しかし、昨日来た際には満足のいく値段を提示してくれた。果たして一日で頭がおめでたくなるものなのか。

彼の鑑定眼は本物だ。ギルドの職員などとは比べるまでもなく。

あれ以上の鑑定士、この都市の中では知らない。

（どうして……？）

手に握るナイフを見る。
刀身から柄まで薄暗い路地の影と一体化していた。真っ黒だ。
こんなにも、腐ったような暗い色をしていたかと違和を覚える。
あの時は、鋭い紫紺の光沢を帯びて、宙に光の軌跡さえ描いていたというのに。

（【？φαιστο？】のサインがあれば……鞘がいる……）

動かぬ証拠を突きつければ、例えガラクタだろうが高値で引き取るだろう。
鞘だ。鞘が必要だ。
冴えない黒刃を見下ろしながら思考をまとめあげた。
予定を変更して、危険を冒してでも、もう一度接触するしか……

「すいません、シル。荷物持ちなどさせてしまって」

「うん、それは平気だけど……リュー、いつもこんな道を通っているの？」

「ええ。道順を把握してしまえば、こちらの方が遥かに時間の短縮になります。シルが危惧しているほど不便ではありません」

「そういうことじゃないんだけど……」

前から人が来た。エルフとヒューマン。二人して紙袋を抱えている。
視線を切り、さっとナイフを袖の中に隠す。
ここまで深い裏道を人が通ることに驚きながら、自然に彼女達の横を通り過ぎる。

「待ちなさい、そこのホビット」

有無を言わせない声が背中に浴びせられた。
思わずぴたっと足を止めてしまう。次いで、ぶわっと汗が背筋を犯した。
何故呼び止められたのか。
まさか、という信じられない思いが頭の隅で明滅する。

「袖にしまったナイフ、それを見せてほしい」

盛大な舌打ちを心の中で放った。

「リュ、リュー？」

「……何故ですか？」

「知人の持ち物に似ていたので。もしよろしければ確認させてほしいのですが」

どんな視力をしていると悪態をつきたくなった。
この暗闇に、同じ闇色の刀身。目の良いホビットでも見極めることは難しい。

「生憎ですがこれは私のものです。貴方の勘違いでしょう」

反論の隙を与えず動き出す。
要求を突っぱねって、その場を立ち去ろうとした。

「抜かせ」

場が軋んだ。

「……ッ！？」

「【神聖文字（ヒエログリフ）】が刻まれた武器の持ち主など、私は一人しか知らない」

氷の刃を首筋に押しつけられたかのようだった。足首も凍らされる。
見ずともヒューマンの少女がぎょっとしたのがわかった。それほどまでの威圧だ。
振り向けない。振り向きたくない。

「え……えっ……？」

「動かないでください」

「……」

歯が噛み合わない。呼気は震える。心臓が骨を突き破ってきそうだった。

カツカツ、と足音が迫ってくる。距離と言えるほどの間合いなんて存在していない。

こうなったら、遮二無二だ。出鱈目に動いて逃げ切るしかない。

折れそうになる膝に喝を入れ、相手の足が宙に浮いた瞬間、別れ道めがけ地を蹴った。

「警告はしました」

曲がり角に入ろうとした瞬間、途轍もない衝撃が手を襲う。

「いぎっ！？」

林檎だ。

林檎が、爆発した。

ナイフを持っていた左手に赤い果実が直撃し、木端微塵に砕け散っている。

ショッキング過ぎた。

「腹に力をこめた方がいい」

「――」

ナイフを取り落とし、そこで後方を振り向いてしまった。
冷静な空色の瞳で、足を大きく後ろに反らしたエルフが、自分を見下ろしている。
そうか。自分はボールだ。ふざけんな。
間髪いれず足が振り抜かれ、予告通り脇腹を打ち抜いた。

「ふぎゃあっっ!?」

「な、何っ?」

ギルド本部のある北西のメインストリートを疾走していた時だった。
裏路地の方向から何かを殴打するような引っくり返すような、とにかくけたたましい音が鳴り響いてきたのは。
紛失した《ヘスティア・ナイフ》が路上に落ちていないか確かめるため、元来た道を逆走していたベルだったが、明らかに自然に起きたものではない騒音に足を止めてしまう。
周囲の亜人達もベルと同じ行動をならう中、次の瞬間、一本の裏道の入口から大量の猫がどばっと駆け出してきた。ベルは藍色の目を限界まで剥く。
にゃーにゃー！　と悲鳴をあげて何かから逃げ出してくる猫の波。
人ごみの足の下を次々と縫っていく。
大混乱に陥るメインストリートに汗を流しながら、ベルは裏口の前まで一人近寄った。
そして、そぉっと覗こうとしたその時、どしゃあっと派手な音を立てて、足元に小柄な影が倒れ込んでくる。

「リ、リリ！？」

「ふ、ふあ……」

思いもよらない人物の登場に動揺しつつ、ベルは膝をついてリリルカの肩を揺すった。
小さな体が小刻みに痙攣している。既に満身創痍だ。

「ちょっ、どうしたの！？　何かあったの！？」

「そ、その声は……ベル様っ？」

生まれたての子鹿のように震えながら四つん這いになるリリルカは、一瞬焦ったような顔をしたが、すぐに不出来な笑顔を作る。

「シ、シシシシッ。実は、凶暴な女……じゃあなくてっ、野良犬に襲われてしまいまして……」

「だ、大丈夫なの！？」

「なんとかぁ……」

クリーム色の外套はそこまで汚れていなかったが、リリルカは大きなダメージを負っているようだった。

ベルはひとまず彼女を抱き上げ、裏口の前から脇にずれる。

ポーションあったっけっ、と動転しながら小型のレッグホルスターに手を伸ばしかけたところで、

「まさか逃げられるとは……」

ザッ！　と靴を鳴らし、エルフのリューが裏路地から姿を現した。

昨日見た時と同じように片手に紙袋を抱いている。

「今度はリューさん！？　な、何が起こってるんですか、一体！」

「ああ、ちょうど良かった。実は貴方の……」

ベルの顔を見て何か言いかけたリューだったが、へたり込んでいるリリルカを見てすっと目を細めた。
子猫のように震えあがったリリルカは、何事かを呟いて、深く被ったフードの上をそっと手で撫でる。

「クラネルさん、どいてください」

「え、ちょ、ちょっと!?」

「ひゃっ！」

ベルを押しのけるような形でリリルカの外套に手をかけたリューは、躊躇なくそのフードをはぎ取った。
あらわになる大きな瞳と、ぼさぼさのダークブラウンの髪。そして醜悪な大きな傷痕。
顔を恐怖で引き攣らせるリリルカをじっと直視したリューは、「失礼しました」と詫びてフードをすぐに戻した。

「な、何しちゃってるんですか貴方は！　リリ、大丈夫!?」

「は、はぃ……」

「すいません、人違いでした。少々気が短くなっていたようです」

何のこっちゃ、とベルは目まぐるしいことの成行きに混乱する。へなへなと地面に崩れるリリルカを支えながら、顔を裏路地とリューの間で往復させた。
しばらく、一人だけ状況に置いてきぼりにされている孤独感を味わっていると、再び裏道の方から人影が現れる。
ぱたぱたと音をたてやって来たのは、これまた両手で紙袋を抱くシルだ。

「リュ……リュー！　食べ物をあんな風に使っちゃダメ！　お母さんに怒られるよ！」

「それは、困ります……」

「あのぅ、そろそろ、説明をしてもらえると助かるんですけど……」

「あ、ベルさん」

こんにちは、と律儀に頭を下げるシルに「ああ、どうも……」とベルは生返事をする。
リューは二人のやり取りを少しの間見守っていたが、やがて率直にベルへ質問した。

「クラネルさん。貴方は今、あの黒いナイフを持っていますか？」

「あっ、そうだったっ！？　二人とも、上から下まで真っ黒なナイフをどこかで見たりしませんでした！？」

思い出したように取り乱し始めたベルに、リューとシルは視線を交わし合う。
リューはベルに目を戻すと、切れ味の全くない抜き身の短刀を懐から取り出した。

「これですか？」

「うあああああああああああああああああああああああああああああああああ！！」

ベルの大歓声が夕暮れの空を貫く。
凄まじい大音声に、種族が全く異なる少女達は、押しなべて思いっきり肩を跳ねさせた。いつも冷静沈着なリューさえもその空色の瞳を見開く。

「ありがとうッッ！！　本っ当にっ、ありがとうございますぅっ！！」

「……クラネルさん、その、困る。こういうことは私ではなく、シルに向けてもらわなくては……」

「リューなに言ってるの！？」

ベルは半泣きして、がしっっとリューの滑らかな白い手を両手で包

んだ。
ぐっと間近に寄せられた子供のような泣き顔に、彼女はらしくないほど狼狽して目を逸らす。
シルの悲鳴を聞きながら、ごしごしと顔を拭うベルは漆黒のナイフを受け取った。

「あぁ、良かったぁ……。神様ゴメンナサイ、もう二度と落としたりしませんっ……！」

「落とした……？」

ベルがナイフを額まで持ってきて誓いの言葉を紡ぐと、そのガラクタはあたかも機嫌を戻したかのように紫紺の光を帯び始めた。
ただの棒状の塊が、《ヘスティア・ナイフ》へと舞い戻る。
ぎょっ、とリリルカがその大きな瞳をより大きくした。

「すいません、本当に。これ、どこにありましたか？」

「あった、というより一人のホビットが所持していました」

「ホビットっ？」

リューの返事にベルは目を丸くした。
その種族の名を聞いて反射的に後ろを振り返りそうになったが、首の筋肉を総動員してそれを阻止する。安易に疑いの目を向けるのは許さなかった。

ホビットの少女は、フードの中に隠れてここぞと緊張の面差しを浮かべる。

「もしかして、さっきのは……」

「ええ、先程までそのホビットを追いかけ回していたのですが、逃げられてしまい……この場にいた彼女を疑ってしまいました。すいません、私の早とちりです」

「早とちり、ってことは……？」

「はい。そのホビットは“男”でした」

おくびにも出さないようにベルは思わず安堵した。馬鹿だなぁ、と自分のことを思いながら。

そしてその後ろで、彼以上に安堵の表情をフードの中で浮かべるリリルカがいた。

「身近に男性のホビットはいますか？　何か見覚えは？」

「いや、ないですけど……」

「では、やはり貴方が落としたものをあのホビットが拾ったのでしょう。昨日、裏道で貴方のナイフを見ていたのは僥倖だった。変わったナイフでしたので、少し見ただけでも見当がつきました」

「ああ、そういうことですか」

ベルとリューが話しこんでいる間、リリルカは居心地悪そうにしていた。
シルはそんな彼女を両手に抱える紙袋の間から静かに見つめる。

やがてリュー達が買い出しの途中ということで別れることになった。
ベルはもう一度二人にお礼を言って、リューは表情を変えず会釈をし、シルは自分は何もやっていないと苦笑する。
裏道へと戻ろうとする彼女達に道を開けたベルだったが、その去り際、シルがリリルカの耳に唇を寄せた。

「――あまり“おいた”しちゃダメよ？」

「！！」

ぞくっ、とリリルカの肌が泡立ち。
びくっ、とその小さな体が可哀相なくらい揺れた。
シルは何でもなかったように立ち上がり、怪訝そうな顔をするリューと一緒に裏道へ入っていった。

「リリ、今シルさんに何て言われたの？」

「べ、別に……ぁ、あの、ベル様？」

「なに？」

「あの人達は、何者なんですか？」

「酒場の店員さんなんだ。『豊饒の女主人』っていうところの。結構有名みたいなんだけど、リリは知ってる？」

「……ベル様」

「へ？」

「絶対に、リリをそこへは連れてかないでくださいね……」

泣き笑いを浮かべるリリルカに、ベルは「えっ、ああ、うん……？」と答えることしかできなかった。

精神的不安定にしか見えないその姿を見て、静かに汗を流す。

西日が照り、ようやく混乱が収まり出した大通りで、ベルとリリルカはしばらく奇妙な空間を共有し続けた。

翌日。
僕とリリは朝早くからダンジョンへ赴いていた。1階層の真っ当な土の地面を二人して踏みしめている。
結局、僕はリリをサポーターとして雇うことにした。
多くの留意点を念頭に置いて考え抜き、その後は自分の気持ちに正直になって、ぱぱっと決めてしまった結果だ。
【ファミリア】に関わる憂慮はないとエイナさんは太鼓判を押してくれているし、神様にも許しをいだいた。もう迷うことなんてなかった。
僕とリリは特に期限はもうけないで契約を交わし、今に至っている。

「……ベル様？」

「ん？」

「あのナイフは、どこにしまったんですか……？」

「うん、今度は落とさないようにプロテクターの中へ鞘ごと収納し

ているんだ。格納スペースがちょうどあったから」

「そ、そうですか……」

がっくり、と項垂れるリリに僕は首を傾げた。
どうもさっきからリリに元気がない。笑ってはいるけど、空元気。
昨日みたいに生き生きしてないんだ。何かあったのかな？

「……シシシッ。ベル様、改めて、リリを雇っていただいてありがとうございます。ベル様に見捨てられないよう、リリは鋭意頑張りますよ」

「見捨てるって、そんなことしないよ。僕はリリ以外にサポーターの当てなんてないし」

「それはいいことをお聞きしました……なぁんて、リリもベル様がそんなことをするとは思っていませんよ。ベル様はびっくりするくらい“お優しい”ですから」

やっぱり慣れないなぁ、この距離感。
リリも砕けてはくれているんだけど、言葉遣いがちょっと。
“お優しい”なんて、何だかかゆくてしょうがない。

「ベル様、今日の予定をうかがっててもよろしいですか？」

「ええっと、今日は昨日と同じ7階層に行って、夕方まで粘ろうと

思ってるんだけど。リリはそれでもいい？」

「ベル様がお決めになったならリリはそれに従いますよ。でも、いいんですか？　リリはごらんの通りサポーターですから、戦力としてはあまりお役に立てません。ベル様はずっと連戦ですよ？」

「それは大丈夫。前なんか夜通しでダンジョンにこもっていたことがあるし、神様に溜まっていた【ステイタス】を更新してもらったから」

まぁ、夜通ししたことがあるから大丈夫ってのは根拠のない話だけど、あの酒場kら逃げ出した時は本当に独りだけだったし（しかもがむしゃらに戦ってた）、今までソロでいたということもあって長時間戦闘には慣れている。

エイナさんにみっちり仕込まれたから、ペース配分の調整だけは僕の少ない自慢の一つなのだ。だから僕はそこまで問題とは思っていない。

何より【ステイタス】が強化されたので、今の自分の力を試したくて逆にウズウズしてしまっている。

成長速度は以前と変わっていなかった。恐らく今の僕は絶好調だ。

……ただ、変化のない【ステイタス】の上がり幅を見て何故か神様の機嫌が急激に下がったけど、何だったんだろうアレ……。

「それより、リリの方に負担をかけちゃうことになると思うんだけど？　ドロップアイテムが立て続けに出たら荷物がすごいことになるし……」

ちらと横のリリを見る。
ホビットは成人になってもヒューマンの子供くらいの背丈しかない。
リリ自身、僕のお腹の辺りに頭がくる。
ダンジョンを下りて上ってえっちらおっちら大荷物を運ぶには、これ以上似合わない種族はいないだろう。

「シシシシッ。心配はご無用ですよ、ベル様。リリも神の恩恵を授かっている身ですからね、荷物がかさばったくらいでへばったりしません」

きっとその通りではあるんだろうけど……ちょっとなぁ。
僕が使っていたバックパックの大きさは、ちょうどリリくらいかそれより小さいくらい。つまり、リリ＝バックパックの式が成り立つ。
自分の体とほぼ同じ背負袋を装備するって、僕だったらろくに動けないような気がするんだけど……。
しかもリリのバックパックは標準サイズ以上なので、ドロップアイテムを回収していない今の状態でもすごい絵になっちゃってる。

「それに一応、リリにはスキルの補助があるので、万が一にも運搬作業で足手まといになることはありえません」

「ええっ！　リリ、スキル発現してるの!?」

凄い！　羨ましい！　という感情を隠しもしないで僕は叫んだ。
そんな僕の驚きにリリは苦笑して顔を振る。

「持っているだけマシ、というような情けないスキルです。ベル様が考えているような恩恵ではありませんよ？」

「それでもいいよ。僕なんてまだ一つもスキル持ってないし……」

スキルは魔法と違ってスロットの制限がないから、【経験値】の都合がつけばいくらでも発現できると聞く。五つ以上のスキルを持っている冒険者もいるなんて、小耳に挟んだことがあった。

例えリリの言うような、効果があまり実のないスキルだとしても、マイナスに作用するものでもなければあるに越したことはないのだ。

「やっぱり羨ましいなぁ。スキルって実は魔法より獲得できる確率低いんでしょう？　僕なんてその魔法だって発現してないし……あ、そういえばリリは魔法も発現してるの？」

「……シシシッ。残念ながらリリも魔法は持っていません。先にスキルが発現した珍しいケースですね」

へぇ。やっぱりそういう人もいるにはいるんだ。

と、一人で納得していると、リリに注意されてしまった。

同じ【ファミリア】の仲間でもない限り、【ステイタス】のことに大きく踏み込むのはマナー違反、厳禁なのだと。例え契約を結んだ相手だったとしても、だ。

よく考えてみれば当たり前か、個人の【ステイタス】情報は冒険者の生命線でもあるんだから。

話を聞いた僕は、迂闊だった自分の発言を猛省した。

「あとさ、本当に契約金とか前払い金はいいの？」

モンスターの気配を探りつつ、僕はおもむろに思い立ったことをリリに尋ねた。

さっきバベルの中で契約儀式の真似事をした時、リリに言われたのだ。報酬はダンジョン探索収入の分け前だけでいいと。

……僕、雇ってる側なんだけどなぁ。面目みたいなものが……。

「ええ、構いません。ベル様は他の方とパーティを組んでいませんので、配分を行う際にややこしいことになりませんし。……それに」

それに？　と僕がおうむ返しをすると。

リリは、それまでの朗らかな姿勢を変え……確かにその前髪の奥で、淀んだ瞳を浮かべた。

「……それに、そちらの方がベル様にも都合がよろしいでしょう？」

「え？」

含みを持たせた言葉に、僅かな嘲りと自嘲を滲ませた視線。

リリがどうしてそんな言動をするのかわからず、僕はうろたえてしまう。

それから一秒も経たないうちに、リリは今あったことがなかったか

のようにぱっと微笑んで、普段通りの明るい雰囲気を身にまとった。

「シシシシッ、さぁ行きましょう。ベル様が頑張ってリリの食いぶちを増やしてくれれば、何も問題はありませんから！」

「う、うん……」

僕に都合がいい……？
それはつまり、リリにお金を払わなくて済むから、ってこと？
それとも、他に意味が？
わからなかった。リリが何を言いたかったのか。
彼女ではない僕には、あの子が何を思って何を隠しているのか、ちっともわからなかった。
ただ、

――お前も他の冒険者と同じなんだ。

リリのあの瞳に、そんなことを言われたような気がした。

「エイナ、エイナ」

「ん？」

ギルド本部窓口にて、エイナがいつものように小冊子を読んでいると、同じ受付嬢のヒューマンが声をかけてきた。

なに？　と目で尋ねると、彼女は「見て見て」とある方向を指した。

導かれるように視線を移すと……換金所スペースの前で、ギルド職員と一人の冒険者が激しい口論を交わしている。

「ほら、まただよ。また【ソーマ・ファミリア】の冒険者」

「……」

エイナは条件反射で眉をしかめてしまった。

耳を傾けずともあちらの方から乱暴な怒声が押し寄せてくる。

「たったの１４０００ヴァリス！？　ふざけるなっ、あんたの目は節穴か！」

「馬鹿野郎、何年この仕事で飯を食ってきてると思ってるんだ！

俺の目が狂っている筈ねえだろ！」

換金の内容をめぐる揉め事であることは明白だった。
この光景は別段そこまで珍しいものではない。
冒険者達も命をチップに日々ダンジョンへもぐっている。多かれ少なかれ期待をもって換金所に出向いておいて、予想していたものより低い額で魔石等が取り引きされたなら、声を高らかにして食ってかかるだろう。割に合っていない、と。
ギルドの方もそういった相手の対応には慣れっこなので、換金所にどっしり構える鑑定役員はみな肝玉が大きい。今も相手の冒険者に負けないほど声を張り上げていた。
そう、この光景自体はありふれたものだ。

「ドロップアイテムもちゃんと勘定に入れたのか！？　なぁ、もう一度確かめてみろ！　ほらっ、これだけの筈、これだけの筈が……っ！」

しかし、“また”【ソーマ・ファミリア】が問題を起こしているとなると、そのありふれた光景は、度の過ぎた異常な光景となってくる。
数えることが億劫になるほど、【ソーマ・ファミリア】の構成員達は換金所のくだす判断に難癖をつけてきた。連日ことごとくだ。繰り返される茶番劇に、鑑定役員達は既に辟易している。
【ソーマ・ファミリア】の冒険者達が口を揃えて言うことは、「もっと金を寄こせ」、この一点だ。
尋常とは思えない金への執着。見ていて寒気を感じるほど、彼等は大金を求めていた。

「う～、あんな裂けるくらいに目を見開いちゃって、気持ち悪い！
私、【ソーマ・ファミリア】の担当じゃなくて良かったぁ～」

「……」

隣で好き勝手に言う同僚にエイナは渋い顔を作る。
彼女もまた【ソーマ・ファミリア】の冒険者を担当しているわけではないが、しかし今となっては他人事ではなくなっている。

「くそっ、こんなんじゃあ……これだけなんかじゃあ……っ！！」

頭を両手で抱え出すその冒険者を遠目に、エイナ自身も頭痛を堪えるように額へ手をやった。

（早まっちゃったかなぁ……）

リリというサポーターの存在は、劇的だった。
まず、彼女が魔石やドロップアイテムを一手に回収してくれるため、僕は重荷となるバックパックに悩まされることなく――戦利品をいちいち換金しに行く必要もなく、普段より長い時間ダンジョンへもぐれようになった。
これまでもぐる階層が下層に向かう度、換金所からダンジョンへの往復距離が長くなったので（つまりダンジョンに留まれる時間が短くなったので）、到達階層を増やしたところでそこまで稼ぎが増えるということもなかったのである。いわば時間のロスだ。
それが今日、綺麗に解消された。

僕は彼女のおかげでバックパックを装備する必要がなくなり、身軽になって7階層で暴れに暴れまくった。
狩ったモンスターの数はもはや僕自身覚えていない。
目の前に出てくる度に僕はナイフを振り、そしてリリが素早く魔石と時折出現するドロップアイテムを回収する。
その結果。
ギルドの換金所から受け取ったお金は――。

「「……」」

口が空いた亜麻色の袋の中身を、僕とリリは一緒に覗きこむ。
開いたその大口から見える光景は……金貨金貨金貨金貨金貨。
数え切れない金貨が、狭苦しいと言わんばかりに袋の中でひしめき合っていた。すごく眩しい。

「「２６０００ヴァリス……」」

二人一緒に袋から顔を上げて、至近距離で見つめ合う。
次の瞬間、

「「やあぁーーーーーーーーーーーっ！！」」

僕達は歓喜して飛び上がった！

「すごい、すごいですっ！　ドロップアイテムは数えるくらいしか出なかったのにっ、ベル様一人で２５０００ヴァリス以上稼いでしまいました！！」

「わっ、わっ、わっ！　夢じゃないよね!?　現実だよね?!　一日でこんなにお金が手に入るなんてっ……これもリリのおかげだよ！」

サポーター万歳！！

「馬鹿言っちゃいけないです、ベル様っ。モンスターの種類やドロップアイテムにもよりますけど、Ｌｖ．０の五人組パーティが一日かけて稼げるのが２００００ヴァリスちょうどくらいなんです。つまり、ベル様はお一人で彼等を優に凌ぐ働きをしたことになりますっ！」

「いやあ、ほら、ブタもおだてりゃ木に登るって言うじゃない！　それだよ、それ！」

「ベル様が何を言いたいのかリリには全くわけがわかりませんが、取りあえず便乗しときます！　ベル様すごい！　まだ上を目指せますよ！！」

「誉めすぎだよぉリリぃ！」

浮かれ過ぎて興奮の度合いが酷いことになっているけど、止められない。

酒場でもないのに二人してギャーギャー騒いで笑いまくる。

もう夕闇が降りてる時間だったから、このバベルの簡易食堂には僕達くらいしか冒険者はいない。他の人達はそれこそ酒場に足を運んでいることだろう。

いぇーい、と椅子の上に立ったリリとハイタッチを交わしながら、僕等の高揚感は留まることを知らなかった。

「……では、ベル様、そろそろ分け前を頂けませんか？」

「うん、はい！」

どばっっ、と１３００００ヴァリスをリリの方に渡す。

「……へ？」

「あぁ、これなら普通に神様へ美味しいもの食べさせてあげられるかも……！」

握り拳を作ってその時の光景を頭の上に思い浮かべる。
やっと神様に恩返しができるんだ！
隣でリリが目を点にしていたようだけど、僕は構わず自分の想像に耽りに耽った。

「べ、ベル様、これは……？」

「分け前だよ、決まってるじゃん！　あ、そうだ！　せっかくだしリリ、良かったらこれから一緒に酒場に行かない？　僕、美味しい店を知ってるんだ！」

僕が上機嫌にお誘いするとリリは瞠目して息を呑んでいた。
あ、「豊饒の女主人」は行きたくないんだっけ？
でもまぁ、いいよね！　今日くらい！

「じゃあ、行こうリリ！」

「べ、ベル様！」

善は急げと荷物をまとめ出した僕に、リリが叫んだ。
え？　と不思議そうな顔をする僕の目の前で、彼女は小さな唇を震わしている。

「……ひ、独り占めしようとか……ベル様は、思わないんですか？」

「え、どうして？」

心底不思議そうに僕は問い返した。
リリは質問を質問で返した僕の対応に、逆に言葉を詰まらせてしまう。

「僕一人じゃこんな稼げる筈なかったよ。リリがいてくれたから、でしょ？」

だから、ありがとう、と僕は上機嫌のまま言った。
これからもよろしくね、と言葉も添えた。
リリと会えて本当に良かったよ、と笑ってもみせた。

「……」

「リリ、ほら、行こう？」

ぼぅっと僕を見上げてくるリリに手を伸ばす。
差し出された手を、彼女はじっと見て、おずおずと自分のものと重ねた。

「……変なの」

そのちっちゃな呟きを、僕は見事に聞き逃した。

【ベル・クラネル】
所属：【ヘスティア・ファミリア】
ホーム：下水道の隠し部屋
種族：ヒューマン
ジョブ：冒険者
・到達階層：７階層
・武器：短刀
・《神様のナイフ》
・《短刀》
所持金：１８９００ヴァリス

【ステイタス】
Ｌｖ．０
力：Ｄ　９１　耐久：Ｆ　３７　器用：Ｃ　８　敏捷：Ｃ　２１
魔力：Ｉ　０
魔法
【】
スキル
【憧憬一途】
・早熟する。
・懸想が続く限り効果持続。
・懸想の丈により効果向上。

短刀：Ｄ　７３

【装備】
≪兎鎧（ピョンキチ）　Ｍｋ－ＩＩ（マークツー）≫
・【ヘファイストス・ファミリア】所属鍛治師ヴェルフ・クロッゾ

作、防具シリーズ第二弾。
・作品名がアレだったため死蔵入りしかけた経緯がある。ボックス行きになったのもほぼこの事柄が原因。ベルの心に微妙に傷を残している。
・材料にドロップアイテム「メタルラビットの毛皮」を使用。
・ヴェルフ・クロッゾは未だ『鍛治』のスキルを修得していないので、鎧自体に敏捷補正はなし。ただしベル曰く「めちゃくちゃ軽い」。
・むしろ防御力の高さが【ヘファイストス・ファミリア】経営陣に評価されている。

≪グリーン・サポーター≫
・価格７７００ヴァリス。
・エイナからの贈り物。彼女の瞳の色と同じ緑玉色をしている。
・盾と用途を同じくするプロテクター。純粋な盾より耐久は低いが、軽量。
・幅の面積が狭い代わりに細長い。短刀および短剣ならば格納可能。

7話　魔法は膝枕を喚ぶ魔法

銀の光が走った。

「グォオオオオオオオオオオオオオオオッ！？」

頭の天辺から股下まで一直線に刻まれた銀の軌跡に、骸骨のモンスター「スパルトイ」は絶叫を解き放つ。

ヒューマンをベースとした骨格がところどころ鎧のごとく隆起したような禍々しい姿。

鋭角的なフォルムを誇り、個体ごとに様々な白骨の武器（エモノ）を持つその姿は、まさに骨の凶戦士と言うに相応しい。

“深層”を縄張りとするＬｖ．３相当の強力なモンスターは、しかし一閃のもとに瞬殺された。

「……」

寒気を喚起させるほど冴え冴えとした一撃を放った剣士は、ヒュンとサーベルを鳴らして切っ先を地に下ろした。

骨、骨、骨、骨。

見渡す限りの周囲には数え切れない骨の破片が散乱している。

原型を留めていないそれら白い残骸は、十をも超すスパルトイの群れの末路ほかならない。

金髪金眼。

神にも劣らない美貌を持つ一人の少女が、モンスターの墓標の中心

で静かにたたずんでいた。

「結局一人でやっちゃたし……」

「ちょっと苦戦でもしてくれると、もっと可愛げも出てくるのにねぇ……」

仲間のこぼす台詞を耳にしているのかいないのか。
長い金髪の少女――アイズ・ヴァレンシュタインは、無言のまま細剣を鞘に収めて彼等のもとに向かった。

「はいはい、お疲れアイズ～！　ポーションいる？　エリクサーは？　アイズの大好きな小豆クリーム味のジャガ丸くんはどう！？」

「大丈夫、エルナ。ありがとう。……最後のは欲しい」

「そもそも、傷一つ付けられてないんだから、ポーションも何も必要ないわ」

「何はともあれ、あらかたモンスターは片付けたな……。この後はどうする、フィン？」

「ンー、そろそろ帰ろうか？　今回はお遊びみたいなものだし、ここで頑張って、帰りの道でダラダラと手を煩うのも面倒だ。リヴェリア、君の意見は？」

フィン、と呼ばれた黄金色の髪をしたホビットがエルフの女性に問い返す。

現在位置37階層。深層域と定義されているダンジョンの奥深くで、【ロキ・ファミリア】の面々は迷宮探索に明け暮れていた。

この場にいる彼等の総人数は少ない。パーティはサポーターも入れて計七人。アイズ・ヴァレンシュタインを筆頭にした第一冒険者の数は、五人のみだった。

「お遊び」という言葉の通り、【ロキ・ファミリア】の冒険者達を結集して行われた前回の「遠征」とは異なって、今回は気の合った少数の仲間内で行う私的寄りなダンジョン探索だ。【ファミリア】全体で取り決められたイベントではない。

内実、暇つぶしでもある。

数多の冒険者達が未踏であるこの深層においても、お遊びと豪語できてしまうほど、彼等の実力は桁違いなのだった。

「団長の指示なら従うさ。……お前達、撤退するぞ！」

超然とした風格を漂わせるエルフ、リヴェリアは声を飛ばした。

小麦色の肌をしたアマゾネスの姉妹が了解の意を示し、アイズの方は腐りかけたジャガ丸くんを両手にちょこんと持って、落ち込んでいた。

ダンジョンの深層に赴く際、食糧の保存状態が整っていなければ、こういった弊害はよく生まれる。

「にしてもさぁ、もし今頃ベートが一緒に来てたら、絶対やかましいことになってたよね～。あのええかっこしい、アイズの前では途端にはり切っちゃうんだもん！」

「あの宴会の後、酔いが醒めた後にそれとなくアイズに拒絶されたことを伝えたら、凄い勢いでへこんでたわよ」

「うっわァー！？　超見たかったー！　何で教えてくれなかったのエルマ～！」

撤収の準備といってもやることはほとんどない。魔石の回収はサポーターの仕事で、戦闘は先程からアイズの独壇場だったからだ。Ｌｖ．２になったばかりの二名のサポーターがスパルトイの魔石を集める中、騒がしい姉妹を中心に弛緩した空気が流れる。そんな中で、ジャガ丸くんから顔を上げたアイズが波紋を投じた。

「……フィン、リヴェリア。私だけまだ残らせてほしい」

名前を呼ばれた両名ともそれぞれの反応を示す。フィンは少し目を見開き、リヴェリアは怜悧な顔色を変えず片目のみ瞑った。ぎょっ、として動きを止めるエルナとエルマに構わず、アイズは淡々と主張を続ける。

「食糧も分けてもらわなくていい。みんなには迷惑をかけないから。お願い」

「ちょ、ちょっと～！　アイズ、そんなこと言う時点であたし達に迷惑かけてる！　こんなところにアイズ取り残していったら、あたし達ずっと心配してるようじゃん！」

「私もエルナと同じ。いくらモンスターのＬｖ．が低くても、深層に仲間一人を放り出す真似なんてできないわ。危険よ」

腰に手を当てて顔を鼻先まで寄せてくるエルナに、アイズは眉を少し落として困った顔を作った。エルマの援護射撃にも応戦できない。彼女達の言っていることの方が、議論の余地もなく正しいからだ。

「何でアイズはそんなに戦いたがるの？　アイズはすっごく別嬪なのに、もったいないよ～。もうちょっと女の子しようよ～。アマゾネスのあたしの方がお洒落でどうするのよぉー」

「私は……そういうのは、いいよ」

「なんでぇ？　強い雄……お気に入りの男とか見繕わないの？　アイズのその綺麗な顔は飾りなの？」

「あんた、自分でもしないことを押し付けるのは止めなさい」

押し黙って静かな表情を軽くうつむけるアイズに、一歩離れて見ていたリヴェリアは息をついた。
フィンに向き直って口を開く。

「フィン、私からも頼もう。アイズの意思を尊重してやってくれ」

「「リヴェリア！？」」

「ンー……？」

この場で誰よりも身長の低いホビットは、真意を尋ねるようにリヴェリアを見上げる。

「この子が滅多に言わない我がままだ。聞き入れてやってほしい」

「そんな、子を見守る親みたいな気持ちじゃあ動けないよ、リヴェリア。エルナ達の言っていることの方がもっともだ。パーティを預かっている身としては許可できないな」

「甘やかしている自覚はあるが……さて」

二回目の吐息をついたリヴェリアはアイズに視線を送る。
感情の起伏が少ない少女の顔が申し訳なさそうに彩られているのを見て、今度は自嘲。
それから再びフィンに目を合わせた。

「私も残ろう」

アイズのサポーターを担う、とその意図を伝えるリヴェリア。
凛とした彼女の瞳を覗きこむフィンは、手を組んでうーんと軽く唸った後、ゆっくりともったいぶるように頷いた。

「わかった、許可するよ」

「えぇ～、フィン～。説得してよ～」

「リヴェリアが残るなら万が一にも間違いは起こらないだろうしね。逆に、僕達の方が帰りの道できつくなるかもしれないけど」

「私は攻撃と回復を器用になんかこなせませんからね、団長」

リーダーが決定を下してからは早かった。
サポーターを加えたフィン達と、残留するアイズ達がその場で別れる。
一つしかないルームの出入り口で、エルナが帰り際にぶんぶんと大きく手を振り続けていった。

「ありがとう、リヴェリア」

「これっきりにしてほしいところだが、今更だな。あまり手をかけさせるなとだけ、愚痴を言わせてもらおう」

「……ごめん」

顔も見ずに交わされる彼女達の言葉の奥底には、信頼という感情がうっすらと見え隠れしていた。
37階層は上層とは異なり薄暗かった。頭上の空間は果てしなく高く、天井が肉眼では確認できない。暗澹とした闇に塞がれてしまっ

ている。
白濁色の壁面が等間隔で灯す、蝋燭のような燐光だけが視界の頼りだった。
しばらくその場を動かず無為に時間を過ごし、リヴェリアが怪訝な色を顔に映し出した頃。
何かを察知したように、アイズが剣を抜いた。

「来た」

「なに？」

その美しい眉目を若干鋭くするアイズに、リヴェリアは何を言っているのか問いかけようとしたが――すぐに彼女も気付く。
自分達の立つダンジョンの地面が、揺れている。

「まさか……」

その呟きに同調するように、アイズの視線の先、広大なルームの中心点が盛り上がる。
次の瞬間、大地が割れた。
大量の土塊を押しのけ、途轍もなく巨大な“図体”が地面から顔を出す。
ビキッビキッと鳴り響く、地面に亀裂が走る嫌な音。巻き込まれた土砂は“それ”の体に持ち上げられ、轟音、音をたててあたかも滝のように床へ叩きつけられていく。
頭蓋が、鎖骨が、肋骨が、骨盤が。剥き出しになった黒色の骨格系

が、地面から生えて全貌をあらわにしていく。
震動は最高潮。３７階層全体がわなないていた。
まるで我が子を産む代償を支払っているかのように、ダンジョンが唸り声をあげる。

『オ゛ッッ！！』

これ以上のない凶悪な産声が、真上に打ち上げられた。
天に向かって吠えるそのモンスターは余りにも鴻大だった。１０メートルを越えるか。全身を真っ黒に染め上げた骸骨の巨身。
下半身を地面に埋め、スパルトイをそのまま大きくしたような巨大モンスターは、頭に二本の突起を生やしていた。
真っ暗な眼窩の奥では、火の粉のような小さな朱色の光が揺らめいている。
そして胸部内部。肋骨と胸骨に守られるように、規格外の魔石が中空に浮いていた。

「そうか。もう、三ヶ月経ったか……」

通常、階層ごとのモンスターの出現数は種類ごとに分かれて決まっている。一定数以上に増えることはなく、減少すればダンジョンの壁を破り新たなモンスターが補充されることになる。
次のモンスターが生まれるまでのインターバルは階層ごとにばらつきがあるが、最長のものでも約一日ほどだ。

そんな中、絶命してもすぐに補充されず、一定周期のインターバルを要する特別なモンスター等が存在する。
付け加えれば、その特別なモンスターは決まったその階層ごとに“必ず”一体しか現れない。
その強さ故か、その巨大さ故か。
理由はともあれ、そのモンスター達は生まれ落ちた階層を一匹のみで徘徊することしか許されなかった。
古代から存続しているギルドは、往時からその特別なモンスター等をこう呼んでいる。
『迷宮の刺客（プライベートモンスター）』と。

「リヴェリア、手を出さないで」

特別なインターバルを持ち、外見を含めた多種多様性を持つプライベートモンスター等に共通していることは、“めちゃくちゃ強い”。
階層ごとに推定されているＬｖ．の、そのプラス２以上と言われている。
第三級以上の冒険者達からは「階層主」と恐れられているように、本来ならば超人数の冒険者達が徒党を組み、連携して攻略に乗り出す存在だ。

「アイズ、本当に一人でやるつもりか？」

険しい目付きをしてリヴェリアは問うた。
アイズは一本の銀の剣を提げ、凄まじい咆哮で威嚇してくるプライベートモンスター「ウダイオス」へ静かに歩み寄っていく。

「大丈夫」

神達が『ボスキャラ乙ｗｗｗ』と口を揃えて讃歌を送る強大な敵に、少女は一人で対峙した。

「すぐに終わらせるから」

一週間後、Ｌｖ．５に到達したという【剣姫】の噂が、オラリオ中を駆け巡ることになる。

「……？」

ベルは足を止めた。
2階層と1階層を繋げる階段の途中で、首を巡らせて下の方を見る。

「どうしたんですか、ベル様？」

「……今、ダンジョンが揺れなかった？」

すぐ後ろに控えていたリリに見上げられながら、じっと2階層の地形、いや更にその奥に広がっているだろう深層へと視線を馳せる。
まるで迷宮の底から何かが這い出してきたような、と感想を心の中で付け足しながら、ベルは意識を研ぎ澄ませた。

「揺れ、ですか？　リリは何も感じませんでしたが？」

「……気のせいかな？」

待てども一向に変化は訪れない。
首を傾げるベルは、後ろ髪を引かれながらも、自分の勘違いということで納得することにした。
前を向いて残っていた階段を上り、1階層にひょっこり顔を出す。
ルームの中心にぽっこりと空いている階段口から、リリとともに抜け出した。

「今日はちょっと長引いちゃったね」

「はい。ちょっとどころか、かなり、ですけど。もう夜中の十二時を回りますよ」

「えっ、本当に！？」

ええ、とリリは金色の懐中時計を手にして答えた。
短針と長針が見事に数字の１２に重なろうとしている。

「うわ、全然気付かなかった……」

「シシシシッ。最後の方はモンスターに群がられていましたからね」

時間を確認する余裕なんてなかったのでしょう、とリリは溜まりに溜まった背の荷物を揺らしながら言った。
多くのドロップアイテムを収納した大型のバックパックははち切れんばかりだ。

二人が契約を交わして数日が経とうとしていた。
ベルはリリの助力のもと順調と言える日々を送っている。冒険者として軌道に乗った、安定してきたと言えるかもしれない。
モンスターの戦闘以外にも様々な雑事に手間を取らされていたベルだったが、無駄な労力は全てリリによって省かれた。モンスターを狩る効率は格段に上がり、日々の収益はソロの時とは比べ物にならない。己の目標へ突き進むための全力疾走態勢も整備された。
サポーター一人の加入でこうまで違うものなのかと、ベルは頻りに

驚くばかりである。
一方で、新米冒険者としてはありえないモンスター撃破スコアを毎日叩き出すベルに、リリも舌を巻いていたが。
優に半日以上戦い続けることのできるその持久力……精神力は、どのような“想い”を源泉としているのかと、そんな思いが彼女の胸に沈殿している。

「換金所はまだやってるかな？」

「ギルドの運営するほとんどの施設は二十四時間の営業ですから、安心してくださいね」

「良かった。じゃあリリ、今日の給料も稼いだ分の山分けでいいよね？」

「……ベル様は、もう少し常識と俗世間というものを知った方がいいと思います。ありがたく頂戴しているリリが言える立場ではありませんが……人が良すぎです」

「でも、リリだって今はお金が必要なんでしょ？」

「そうなんですけど……。でも、リリはベル様のことが危なっかしくて見ていられないというか、知人に預けられた兎（ペット）にはらはらさせられてつい世話を焼きすぎてしまうというか……う～、何だか毒されているような気がします～っ」

何だかこの頃小言を言われる回数が増えてきたなぁ、とベルは思う。
少し前まではまるで主人と従者のような線引きを一方的に張られて

いたが、今ではそういう他人行儀という体が薄れつつある。
仲良くなってきてるのかな、とリリとの間にあった溝が埋まっていく感触をベルは感じていた。
一方で、関わった人物が全員「危なっかしい」と似たようなことを告げてくるのに対し、少しだけ落ち込む思いだった。そんなに甲斐性がないのかと。

深夜だろうが関係なく襲いかかってくるゴブリンを蹴散らしながら、ベルとリリは1階層内を進み、やがてダンジョンを後にする。
シャワーで体をすすぎバベルの換金所に寄ってから、常時開き放たれている門をくぐって外に出た。

「うわぁ、本当だ。すっかり夜になっちゃってる……」

「シシシッ。今までの探索の中でも最長記録ですね」

バベルを囲む中央広場（セントラルパーク）は闇の帳が降りていた。
魔石を埋め込んだこじゃれた作りの街灯が、ぽつぽつ、と燐光をあちこちで灯している反面、昼間にはない夜の静けさが辺りを満たしている。
こんな時間帯でも、むしろここからだと明るく賑わっている遠方の酒場は、流石といったところか。

「……やっぱ大きいよなぁ」

ぐるーっとセントラルパークを見回していたベルの視点は、最後に

自分の背後へ行き着いた。
宵闇を貫く巨塔。
悠然とそびえる白亜の摩天楼が、ベルのことを見下ろしている。
暗くなっている今は隅々まで視認できないが、この巨大な塔は細部まで意匠が凝らされていることをベルは知っていた。
機能的な内部からはとても結び付きそうもない、芸術作品的な外観美。それこそ神が贅を極めさせたようなバベルの威容に、ベルは頂上あたりに視線を固定させたままほうと息をついた。

「バベルって、何でこんなに高いんだろう？　テナントを貸し出すにしたって、四十階も上まで行くのは大変のような気がするんだけど……」

「ベル様、ギルドがテナントを貸し出しているのは二十階までですよ」

「え……そ、そうなのっ？」

目を丸くするベルに、リリは小さな唇で苦笑を作った。
少し気恥ずかしさを覚えながら、ベルは素直に尋ねることをした。

「お店が入っていないっていうなら、二十階から上は一体何があるの？」

「神様達が住まわれているんですよ、ベル様」

「……神様達が？」

「はい。オラリオの中でも有数と呼ばれる【ファミリア】の主神達だけですが、バベルの最上階まで彼等が居住しているんです」

すっかり軽くなっているバックパックを背負い直して、リリは説明を始めた。

「バベルはオラリオの中で最も高い塔で、この迷宮都市の象徴とも言える建造物です。位が高くて、贅沢好きでもある一部の神様達が住まおうとするのは、ある意味自然なことでした」

ギルドが保証するだけあって、設備は行き届き絢爛豪華の限りが尽くされたバベルの各個室は、間違いなくオラリオの中でも最高級の居住空間と言える。特に目玉である展望景色は、他の建築物の追随を許さない位置から広大な都市を見渡せるだけあって、絶景だ。

しかしあくまでギルドが管理者のもと賃貸されるので、法外な入居費等を払うことのできる、よっぽど蓄財のある者でなければ入ることはかなわない。

早い話が、金持ちの神だけに住むことを許された高級物件だ。金に目をつぶればオラリオでも最高の住み心地を手にいれることができる。

ちなみに、入居できる資格は神しか持ち合わせていない。

「へぇ……。ホームに住まないで、わざわざそんな場所で暮らす神様達なんているんだ」

通常ならば神は各々の【ファミリア】のホームで構成員と一緒に生活しているが、当然例外もいる。
本質的に勝手気ままな神達は、【ファミリア】に活動方針もろもろの指示を出した後、構成員達に運営を任せっきりにするというケースが少なくない。
個人の娯楽等を優先させる故の自由放任主義だ。揺るがない地位を手にいれた神もとい【ファミリア】だからこそ許される行為でもある。
そこから自分の都合で住居を購入するか、はたまた刺激を求めて都市をぶらぶらと放浪するかは、その神次第。

「神様達のプライベートルームと考えてもらえればいいと思いますよ？　リリ達と交流することが好きな神様もいれば、昔からのイメージ通り、やっぱり孤高が好きという神様もいるわけですから」

なるほど、とベルは頷いた。

「もともと、この塔はこれほどまで巨大ではなかったそうです。ダンジョンから溢れてくるモンスター達を抑える“蓋”としてようやく機能し出した頃は、周囲の建物と変わらなかったと聞きます」

「じゃあ、どうして今みたいな大きさになっちゃったの？」

「少し長くなるんですが……まず、この地に最初の神様達が降りてきた時、塔が崩壊してしまったんです」

「ど、どういうこと？」

「当たっちゃったんだそうです。こう、流れ星みたく降ってきた神様達が、塔の天辺に」

「……」

“わざと”壊したんだろうなぁ、と。

せっかくでき上がった塔を街の人々が泣いて喜んでいたところに、神達が完膚無きまでに突・撃・粉・砕……そんな光景を思い浮かべながら、ベルは空笑いした。

口を半開きにして固まっている旧オラリオ住民に、「わりぃわりぃ」とゲラゲラ笑いながら謝る神達の姿が目に浮かぶようである。

これがオラリオで最初にやらかされた神様達の神話なのかな、と妙に達観してしまう。

「それからこの塔は【崩落の塔】……【神塔（バベル）】と呼ばれるようになりました。神様達がこの搭に住まう理由はこういう背景もあるんですね」

塔を破壊した神達は、お詫びと言ってはなんだが塔の再建……というよりダンジョンの抑止に大きく貢献したらしい。他ならない、神の恩恵によって。

当時のオラリオの住民は力を授ける彼等を敬い、この塔を彼等の居住地として献上したのだ。

下界のあちこちに散った神達により【ファミリア】という体系が世界中に波及するまで、その崇め崇められる関係は続き、バベルは神

の威光を示すように高くなっていったという。
そうした結果、バベルは現在の高さへと至り、引き続いて神の殿舎としての側面を残しているのだ。
時代を重ねるごとに崇拝する側だったギルドの力が増し、今ではバベル――というよりオラリオ――の管理者に返り咲いて、立場が逆転してしまったのは皮肉ではあるが。

「何となくはわかったけど……。うーん、そういう神様達の話を聞く度に思うけどさ、“天界”ってそんな暇なところなのかなぁ？神様達がこの下界へ降りたいって思っちゃうくらい？」

「シシシッ。お仕事が嫌になって逃げ出してきたのかもしれませんよ？」

バベルを見上げていたベルだったが、聞き慣れない言葉に首を傾げてリリの方を向く。

「天界では、神様達にもやらなければならないいくつかの義務があると聞きます。その最たる例が、下界で眠りについたリリ達子供達の処理だそうです」

「それって……」

「はい。亡くなった人の、死後の進路ですね」

内容が内容だけに、ベルは自分の鼓動の間隔が狭まっていることを

感じた。
実感が伴わない話である筈なのだが、避けられない破滅の運命故に聞きいってしまう。
リリの話を要約すると、神達は下界の者の死後を預かる身らしい。
あえて言葉で表すとしたら、それは「魂」の清算か。
それぞれの神達によって死後の扱いは千差万別で、天界での生活を許したり、浄化したり、想像を絶する責苦を与えたり、終わりのない無意味な重労働を課し続けたり、とにかく例をあげれば切りがない。
下界から解放された子供達は神達の裁量一つで管理されるのだ。そこに生前の振る舞いだとか、善や悪といった概念だとかは存在しない。
神に気に入られるか、気に入られないか。あくまでその神のポリシーに乗っ取られた処置が下されるか。その時の神の気分によって吉か凶かが決まるか。
いい加減で、規則性もなく、独断と偏見に拠った、「神の審判」がそこにはある。

「でも、大体は最終的に転生させるようです。新しい子供を生むのは中々簡単なことではないのだとか。……とういか、面倒臭いって公言しちゃってますね」

「次元が違い過ぎるような、嫌に俗っぽいような……」

「天界では激減した神様達の穴を埋め合わせるため、居残り組の神様達が今も不眠不休のデス・マーチ状態らしいです。かなり殺気だっているらしいですよ？　次回の下界行きも、血生臭い厳重な『お話し』のうえで順番を決めるそうです」

そんなところに行きたくない。いや死にたくない……。
と、ベルはちょっと本気で思ってしまった。
今、天界の神達の御前に足を運んでしまったら、俗に言われている地獄にて、問答無用で歓迎されるような気がする。憂さ晴らしで。
そんな考えが見透かされたのか、リリはベルの顔を見てクスクスと肩を揺らした。ベルもちょっと情けない顔をして、笑う。
何だか可笑しかった。

「……でも、リリは死ぬことに憧れていたことがありましたよ」

だからか。
その言葉はベルにとって不意打ちだった。

「……ぇ」

「一度、神様達のもとに還れれば……今度生まれるリリは、今のリリよりちょっとはマシになっているのかなぁ、なんて……」

バベルを、いや更にその上に広がる夜空を見上げながら、リリはそう呟いた。
ダークブラウンの前髪がこぼれて、あらわになった大きな瞳が遠い目をしている。
まるで、闇に染まったあの天に思い焦がれるかのように。

「リ……リリッ！」

気付けばベルは叫んでいた。
叫ばなければ、リリがどこかへ行ってしまうような気がした。
リリはゆるゆると瞼を閉じて、空から視線を切り、前髪で目元を隠した顔をベルに向けた。

「……シシシシッ。ごめんなさい、変なこと言って」

「……」

「昔のことです。真に受け取らないでください。リリはこれでもたくましくなりましたから、今はそんなことちっとも思っていません」

ベルは何も言えなかった。
きっとそれは事実なのだろう。むん、と軽く胸を張る少女の仕草は悲愴の欠片も感じられない。
彼女は、きっともう立ち直っているのだ。
でもだからこそ、ベルは今自分が持て余している感情を形にできず、言葉としてリリへ伝えることができなかった。

「シシシシッ。さぁベル様、もう遅いのですから早く帰りましょう。リリも今日は【ファミリア】へ一度帰っておかなければいけません」

明るく小笑いしてリリはバベルに背を向けた。小さな歩幅で、ペタ

ペタと音をたてながら前へ進んでいく。
彼女の肩を見る。重い荷物を背負うには、あまりにも小さ過ぎる肩だ。
不相応なまでの大きなバックパックを背負うリリの後ろ姿を、ベルは胸苦しい思いを引きずりながら、必死に追いかけた。

「そう。また強くなったのね」

呟きが落とされた。
遥か下方に見える小さな小さな白い影。前をゆくもう一つの影を追い、走って遠ざかっていく。
彼女は興奮が醒めやらないというように、去っていくその影へ熱い視線をそそいでいた。
雲が動き、夜空に浮かぶ月が暗闇に包まれる室内を照らし出す。
壁一面をまるまる占領する長方形の硝子。その窓際に立つ人物の立ち姿を、スポットライトのようにはっきりと浮かび上がらせた。
黒色の薄いネグリジェに包まれた、細身でありながら豊満な体つき。
冷たい月の光を浴びて一層神秘さを帯びるきめ細かな白皙の肌。
腰まで越えようかという銀の長髪が、空に浮かぶ星々を詰めこんだ

かのように輝いていた。

「それでいい。貴方はもっと輝ける……」

その行き過ぎた己の美貌を薄く映す硝子を、彼女――フレイヤは、手をついてカリと鳴らした。
ゆっくりと唇の端が持ち上がる。
美酒に陶酔したかのような光を奥に宿す銀瞳は、バベルから離れていく少年の姿を掴んで放さない。
巨塔バベルの最上階。
塔の中でも最上品質にあたる一室で、部屋の主であるフレイヤはベルを見下ろしていた。

「もっと輝きなさい。貴方には、私に見初められた故の義務がある……」

ベルを見下ろす双眸には、深い情愛と、そして己より劣位の存在との間で成立する絶対優越があった。
フレイヤは執心していた。ベルに。
些事を放り出し、いっそ火のついた痴情を解き放ってしまいたいくらいに、美の神は一人の少年に夢中になっていた。

フレイヤには、洞察眼というべき下界の者――「魂」――の本質（いろ）を見抜く瞳がある。
それは神達の間で使用禁止と取り決められた、絶対無比な神の力そのものではなく、あくまで性質……先天的能力（スペック）なのでタブーには引

っかからない。
彼女は以前からこの瞳もとい力を使い、天界にある自分の館へ死没した下界の者……特に英雄と謳われるような戦死者を運んでいた。
コレクション、と言ってもいい。
その眼でどの神よりも早く死せる魂の色を把握し、気に入った者を自分の懐へ囲っていたのだ。
死後、彼女の手による「神の審判」を受けた者は幸運だ。
死後を迎えておきながら、彼女のその目にとまった者達は幸福の絶頂だ。
美の神と称される彼女に永劫可愛がられるのだから。
それが自由を許されない、無限の束縛であったとしても。

美と愛を司る神フレイヤ。
正と負の二面性を併せ持つ、奔放で残酷な「美の女神」だ。

「より強く、より相応しく……それが貴方の義務」

他の神達がそうしていたように、自分の館を含めた領地を放り出し、気の向くまま下界に降りてきても、フレイヤの“趣味”は変わらなかった。
その瞳をもってして子供達の本質を、才能を、輝きを見抜き、より優れた「魂」の持ち主を自分の【ファミリア】に加える。
拒む者は誰もいなかった。拒める者は誰一人としていなかった。
フレイヤの魔性の美に逆らえる者は、存在しなかったのだ。
故に、彼女の【ファミリア】の構成員は周囲と隔絶した実力を持つ。
【フレイヤ・ファミリア】はこの迷宮都市オラリオの中でも、最強の【ファミリア】の内の一角だ。
彼女の瞳の力を知っているロキには、『死に腐れチート能力』とま

で言われている。

「私も強い男が好きよ？」

ベルを目にしたのは偶然だった。
ある日の早朝。メインストリートを歩む彼の姿を、その銀の瞳が捉えたのだ。

――欲しい。

一目見た瞬間、そう思った。
久しく感じていなかったあの感覚。全身がぞくぞくと打ち震え、下腹部は疼き、恍惚の吐息が喉の淵から溢れ出してくる。
これまでがそうだったように、アレを自分のモノにしたいと、醜くも子供のように純粋な願望が頭をもたげた。
ベルは、この瞳が今まで見たことのない色をしていた。透明の色だ。これからどのような色に変わるのか、それとも透き通ったままでいるのか、興味が尽きることはない。
だから、ではないが。
しばらく様子を見たくなった。自分の色に染め上げるのもそれはそれで一興だが、経過を見てからでも遅くはないような気がした。

「楽しみだわ。貴方がどこまで強くなるのか、どこまで輝けるのか……どんな色に変わるのか」

ベルの背中を見守るその瞳には確かに慈愛がこめられていた。ただ

し、倒錯した慈愛だ。
フレイヤはその蠱惑的な唇に折り曲げた人差し指を含め、甘く噛む。
扇情的な香りが一瞬で辺りを満たした。

「あら？　……うふふ、また気付いたの？」

視線の先、かなり小さくなっているベルが急に立ち止まり、頻りに顔を振っている。
不安に襲われ、何かを探し出そうとしている素振りだ。フレイヤは目を細めて笑みを深くする。
あのメインストリートで最初に見初めた時もそうだった。
熱く昂った体に促されるまま視線を傾注させていると勘付かれてしまった。彼の感覚は思ったより鋭いらしい。
あるいは、彼を見つめる自分のこの眼が無遠慮に過ぎるのか。

（今までの子達と比べて才能は乏しいように思えたけど……中々どうして。それとも、それも全部含めて“成長”しているのかしら？
ふふ、本当に面白い……）

正直に言ってしまうと、あの時に取り込んでしまっても良かった。
異性と親しげに会話しているその様子を観察しても籠絡は容易のように思えたし、他の神の恩恵を授かっていようが、強引に口説き落とせる自信もあった。
それはしなかったのは、少年のバックにいる神の存在を確かめていなかった――流石に【ロキ・ファミリア】のような同格の相手と荒事を構えたくはなかった――のと。

後は、その無邪気な笑顔を見て毒気が抜かれてしまい、気が乗らなくなったからか。

（ヘスティアには悪いことをするけど……もらうわね、あの子）

何にせよ、今回は趣向を変えて影ながら見守るのも悪くない。フレイヤはそう思う。
猫を可愛がるように自分の膝の上であやすのも新味に欠けてきた。
時には庭に放して目一杯遊ばせるのもいいだろう。
所詮、そこは自分の箱庭だ。
いつでも手出しはできる。

「貴方を私のモノにするのは待ち遠しいけれど……複雑ね、来ないでほしくもある。今この時が、一番胸が躍るのかもしれない」

きっとこれも、今までがそうであったように、手に入れた後はいずれベルのことも飽きるのだろう。
お気に入りの玩具は戸棚を飾る人形の一つに成り下がる。
思い出したように棚から取り出し、存分に遊んで可愛がり、そしてまた戻す。
最初に感じていた期待と喜びは掠れていくものだ。感情は劣化していく。
愛と同じ。絶頂を迎えた後は、ゆるやかに下っていくだけ。完全で終結している愛は憧憬の対象にはなりえない。
それが虚しい、とはフレイヤは思わない。愛とはそういうもので、そしてまた彼女は愛の女神なのだから。

故に、戸棚を飾る収集品（コレクション）は多すぎるくらいがちょうどいいと、フレイヤはそう考える。

頬を触れる一筋の髪をすくい、耳の後ろにかける。剥き出しの肩は月の光に儚く濡れていた。

時には恋に焦がれる少女のような瞳を浮かべ、フレイヤは愛おしそうにベルへ視線を送り続けた。

「……でも、そうね。『魔法』はそろそろ使えてもいいのかもしれない」

トン、と人差し指をその細い顎に当てて思案する。

首を少しだけ傾け黙考した後、名残惜しそうに眼下のベルから視線を切った。歩み出し、豪奢な絨毯の上を伝いながら部屋の隅に向かう。

フレイヤの眼は他神による【ステイタス】の正体を看破できるわけではないが、色と輝きの具合を見ておぼろげながら当たりをつけることはできる。

見るに、ベルの「魔力」は加算されていない。フレイヤにはそれが少し頼りなく見えた。

早速、“手出し”することにする。

「これがいいかしら？」

部屋の隅に鎮座しているのは本棚だ。幅は広く、高い。フレイヤを容易に覆い尽くすほどに。

彼女の細い指が中段の棚に伸ばされ、ある本の背表紙に引っかけられる。コトンと音を鳴らして倒れ込み、彼女の手の中に収まった。
ぱらぱらと頁をめくり、中身を確認する。
フレイヤは満足そうに頷いた。

「オッタル」

「はっ」

彼女が一つの名を呼ぶと、厳めしい声がそれに応えた。
最初から室内に身を置いていたのか、入口である扉の横に佇立している人物がいた。
錆色の短髪から猪耳を生やした獣人。鍛え抜かれた岩のような体を持つ、二メートルを超す大男だ。
気配を漏らすことなく彫像のように立つオッタルと呼ばれた獣人は、主人であるフレイヤの次の言葉を番犬のように待つ。

「この本を……」

腕を伸ばして本を差し出す格好をしていたフレイヤだったが、開きかけていた口を途中で止めた。
唇を閉じ、腕を戻してその一冊の本をじっと見つめる。

「どうかなされたのですか？」

「……ふふっ、いえ、何でもないわ。今のは忘れてちょうだい」

「は」

短く了解するオッタルからは既に意識を外し、手の中の本に微笑を向けた。

そうだ。重宝している配下に本をわざわざ届けてもらう必要はない。もしこの偉丈夫が目の前に現れて無言で本を差し出してきたら、あの少年は怯えに怯えることだろう。いけない、笑えてきた。

手渡す必要はないのだ。彼が手にするだけでいい。

“あそこ”へ置いてこよう。

彼を見初め、一方的な出会いを果たしたあの大通り、そこのすぐ側で営まれている“あの店”へ。

あそこへ放置しておけば、後はどうにでも彼のもとへ渡るだろう。

薄暗い部屋の中、フレイヤは従者に見守られながらクスクスと笑みを漏らしていった。

「くしゅん！」

シルは可愛らしいくしゃみを漏らした。
口元に手を当てた体勢で、やがてすぐさま赤くなる。きょろきょろと辺りを見回すと、店内で準備をしているスタッフ達がじっと彼女のことを見つめていた。
シルは頬を更に赤らめて、少し顔をうつむける。

「そんなくしゃみの一つや二つで恥ずかしがるんじゃないのニャ。シルはどこの箱入り娘ニャ」

「男なんていないんだから、もっと豪快にやっちゃえばいいじゃん。こう、『ドビュリャハッサンッ！』って」

「それはニャい」

「シル、風邪ですか？」

「う、ううん。平気、大丈夫だから」

頬を染めたままシルは苦笑いする。
ぱたぱたと振る両手に合わせ、お団子から垂れた一房の髪がゆらゆら揺れる。

「誰かがシルのことを噂でもしてるんじゃニャいか？」

「だったら答えは明白……ニュフフ、あの少年ニャ」

「クラネルさん、ですか？」

「……怒るよ、クロエ？」

ニヤリと笑みを向けてくるキャットピープルに、シルは少し眉を吊り上げた。

彼女の怒ったような顔に、クロエと呼ばれた少女は笑みを崩さないまま流し目を送る。

あまつさえ、テーブルを持ち運びながら、スカートから生えている尻尾を愉快愉快と言わんばかりに揺らしてみせた。

シルは溜息をつく。

「でもあの冒険者君、結局昨日は来なかったねー」

「いつもは空になったシルの愛情弁当を持って帰ってくるのにニャー」

「せっかくシルが早く店を上がって、少年を探しに行ったっていうのにニャー」

「探しには行ってませんっ！」

店内の準備のため、抱えたテーブルと一緒に移動する店員仲間から、四方八方の乱れ撃ち。
シルは店の中心で吠えるが、ゴキブリのように動き回る彼女達はニヤニヤと笑って懲りた様子も見せない。

「シル、大丈夫です。クラネルさんはシルの想いを等閑にする人ではない。きっと、昨日はたまたまダンジョンからの帰りが遅くなったのでしょう」

「リューもその言い方は少し違って……うん、もういいや」

諦めたように頭を垂れるシルをリューは不思議そうに見つめる。「勘違いなんだよ？」というシルの胸中を、生真面目な彼女はくみ取ることはできなかった。
ベルにあの賄い弁当を渡して以来、シルは手作りのランチを彼に渡すのが日課になっていた。理由はよくわからないが、周りに誘導されて何故かそういうことになっていたのだ。
普段ならば、迷宮で食べ終わった空の弁当をベルがその日の夜には返しに来るのだが、昨日はそれがなく、翌日の朝を迎えた今では店員達にからかわれる羽目になっている。

「ダンジョンでくたばった、なんてことはないのかニャ？」

「ちょっと、それ不謹慎！　あの冒険者君がシルを置いていなくなっちゃうことなんてないって！」

「私もう、疲れちゃったよ……」

「シル、気を確かに。クラネルさんはきっと無事です」

「いや、リュー、そうじゃなくて……」

「リューの言う通りニャ。あの少年が死ぬ筈ないニャ。というか、死んでほしくないニャ。もし死んでしまったら、ミャーは胸が張り裂けるかもしれないニャ……」

ざわ、と喧騒がふくらんだ。

「まさか……」「クロエまで……」とそんな言葉が店内のあちこちからあがり始める。

シルは混乱を来たしたかのように「え、えっ？」と目を丸くして顔を左右に振った。

「少年はかけ替えのニャい存在ニャ……今となってはどこにもいニャい……」

「ク、クロエ？　なに、言ってるの……？」

どこか上の空で言葉を紡ぐ同僚にシルは問いかけた。

クロエは宙に向けていた眼をシルへと転じ、彼女を真っ直ぐ見つめる。

「シル。ミャーはカミングアウトするニャ……」

「な、なにを？」

「ミャーは……少年のあの冒険者装備のハーフパンツルックに、興奮を覚えずにはいられないニャ……ッ！」

「……」

「あのつるりんとした膝頭がミャーの視界に入る度にっ、卑猥な劣情がミャーを焦がしてっ……！　ミャーは、ミャーはッ……フゥー、フゥー！」

「……」

「あ、ちょ……痛っ、ごめっ、ゆ、許しっ……ぁ！」

止めろ止めろ、とわらわら一ヵ所に群がり出すスタッフ一同。
こうして本日の「豊饒の女主人」の朝は、少し変わった形で始まるのだった。

「おい、馬鹿娘どもぉ！　遊んでないでさっさと働きなァ！」

ちっともはかどらない店の内装を見かね、女将のミアがカウンターの奥の扉から声を轟かせた。
一斉に肩を揺らした馬鹿娘どもは素早い動きで仕事に戻る。「ったく」と、顔をのぞかせるドワーフの彼女は肩をすくめてみせた。

「……ん？　シル、それ何？」

「えっ？」

ヒューマンの店員が指を差す方向に、近くにいたシルは振り向いた。
そこはカウンターだ。あの時、シルがベルのために用意した店内の隅の特等席。
彼が腰を下ろしていた席の上に、一冊の本が置いてあった。

「これって……」

「誰かの落し物？」

「ニャんだニャんだ？」

「どうかしたのニャ？」

本を両手で持つシルの背後から覗きこむように、店員達がひょこひょこと顔を出す。

「ミャーは本を読むほど博識じゃないのニャ」

「右に同じニャ」

「うん、知ってるから。黙っててていいよ？」

「「ぶっ殺してえニャ」」

「シル、どうしたのですか？」

「ここに本が置いてあって……みんなのものじゃないみたいだし、お客様の忘れものかな……？」

「うーん？　昨日そんなの置いてあったかなぁ……」

「ハイハイ、ルノアの勘違い勘違い、ニャ。客の忘れものじゃニャかったら、誰かが忍びこんで置いていったとでも言うつもりかニャ？　ぷっぷー、穴だらけの推理すぎてゲロ吐きそうニャ」

「これだから痴呆っ気のあるアホは困ったもんニャ……」

「うっわー、ぶっ殺してえー」

うるさい外野を放ってシルとリューはその本を観察する。
分厚い本だった。
表紙に秩序のない幾何学模様が刻まれ、題名は何も記されていない。
ただわかるとすれば、緑色に塗装されたこの本は、決して普通の書物ではないということだ。

「……待ってください。まさか、これは……」

何かに気付きかけたリューだったが、その前にミアの怒声が響き渡った。

「何べん同じこと言わすんだい！　それとも言っただけじゃあわからないって!?　よぅし、アタシが直接アンタ達の体へ“教えて”あげようじゃないか！」

みんなが怯えた。

「ま、待つニャ、母ちゃんっ。ミャー達は不審物を発見したのニャ!?」

「これっ、これっ！」

「シル、早くお見せするニャ！」

「んん、不審物ぅ?」

迫ってきたミアが怪訝そうな顔をした。
他の店員達に促される中、しかしシルは一向に動こうとしない。
髪の色と同じ鈍色の瞳が、感情に乏しい表情で本の表紙を見つめている。

「シル……?」

「あ、うん。なに?」

リューはそれを見て、声を上擦らせかけた。胸騒ぎが襲ったのだ。
投げられた声にシルは微笑を返す。見慣れているいつもの彼女の顔だった。
不意に過った違和感。
シルに今何かあったのかと、そう自問する前に、鈍色の髪の少女はミアの前に出た。

「ミアお母さん、これ、どうやらお客様の落し物のようなんです。どうしましょうか？」

「……ああん？」

自分を含めた店員達に背を向けるシルに、リューは声をかけることができなかった。
シルと向かい合い本を見るミアは、顔を思いきり顰める。

「……店の中で目につきやすそうなところに置いときな。馬鹿じゃなかったら、忘れたことに気付いて取りにくるだろ」

「はい、わかりました」

ぺこりとシルが頭を下げ、その場は解散となった。
ミアのお叱りもあっていつも以上に店員達は準備に精を出す。
そんな中でリューだけが、腑に落ちない眼差しでシルを追い続けていた。

「ベル様、いけません！？　足元っ！」

「えっ？」

リリの悲鳴が僕の耳を殴った。

《神様のナイフ》を手にキラーアントへ飛びかかろうとした僕は、突然の警告に間抜けな声をこぼす。

現在の居場所は7階層。時刻は正午を回ろうかというところ。

もはや自分の庭と自惚れていいほど慣れ親しんだこの場所で、僕は、状況の把握ができなかった。

「ピィイイイイイッ！！」

「！？」

秒を待たず、僕はリリの警告の意味を悟る。

ニードルラビット。

額に鋭い角を生やした兎のモンスターが、僕の視界の死角から地を這うように迫っていた。

ギラリと光る赤色の突起。ドロップアイテムとして武器の材料に重宝されるその角に突かれれば、まず致命傷は免れない。

真っ赤な目をぎらつかせながら、ニードルラビットは僕の左足を狙っていた。

「ッ！」

咄嗟に足を折り曲げる。ちょうど軸足だったため回避はかなわない。

ニードルラビットの攻撃が膝当てに向かうよう調整する。

僕の下半身で防具を装着しているのは膝の部分のみ。スピードを重視した軽装の設計故に、他の部分は完全に生身だ。ハーフパンツスタイルなので、膝から下は肌を露出させている有り様。

寸分違わず一角獣の奇襲は膝当てに誘導された。

ガキンッ！　と甲高い金属音とともにニードルラビットとすれ違いになる。骨の芯に伝わる痛打。

勿論、僕はバランスを失った。

「シャアアアアアアアアッ！」

見越していたかのような、最悪のタイミング。
本来の目標だったキラーアントが僕に襲いかかる。しかも、二匹。
キラーアントはこの数日で何十回何百回と戦った相手だ。中には四対一で交戦することもあった。
今更二匹――と、侮ったのが仇。
僕の目に、容赦なく薙がれた三本の鉤爪が飛び込んだ。

「ぎっ！？」

「グシャアアアアアア！！」

ガード。
左腕に装備した《グリーン・サポーター》を顔面のすぐ横に構え攻撃を防ぐ。
毎度のことながらプロテクターには損傷はない。けど、途方もない衝撃が僕の左腕を貫き、更に全身を真横に吹き飛ばす。
軸なんてもうとっくにブレてる。転倒こそしなかったものの、足が盛大に踏鞴を踏んだ。
そして追い打ちをかけるように、残ったキラーアントが突撃を仕掛けてきた。

（――まずっ）

組みつかれる。体当たりの勢いのまま押し倒されたら最後、僕はあの六本の多足に組み敷かれ、脱出できないまま爪で八つ裂きにされるだろう。

甲殻を備えたキラーアントはそれほどまで重い。また脱出に手間取れば、そこへ仲間が二匹三匹とたかってくる。それこそ羽を失った蝶に群がる蟻のように。

エイナさんに厳重注意された事項。体格の細い僕じゃあ、組み敷かれるのは詰みに等しい。

（――ぁ）

二回目。

ミノタウロスと同じ、避けられない最期を予感した瞬間。

体が戦慄と恐怖に抱きしめられ竦む。呼吸も止まる。時間はゆっくりになる。

口腔をがぱっと開け醜悪な面を晒すキラーアント。唾液は滴り、気持ち悪い歯並びが鮮明に見える。

思考に空白が生まれ、自分のもとに向かってくる蟻の光景を、ただ受け入れるがままになった。

「ダメーーーっっ！！」

リリの高いかけ声と炎の塊が横っ面から飛んできたのは、その直後

のことだった。

「っ！？」

「ヅギャアアアアアアアアアア！？」

「ベル様ぁ！」

炎塊が頭部に被弾し悶え苦しむキラーアントを前に、僕の体は速攻で再起動する。
リリの叫びにも押される形で、右手に持った《神様のナイフ》を閃かせた。

「ギュ！？」

「うあああああああああああああっ！！」

サンッ！　と快音を鳴らして燃えるキラーアントの首を飛ばし、二匹目、動転するソイツにも一撃必殺を見舞った。
相手の胴が二つに割れる。僕はその光景を最後まで見届けることなく、視界を反転。
今まさに跳躍したニードルラビットに、抜き放った《短刀》をカウンターの要領で打ち込んだ。

「ピ、ガァ……」

「……っ、は！」

このルームにいたモンスターの最後の一匹を仕留め、溜め込んでいた息を一気に吐き出す。
ぶわっと嫌な汗が今更になって吹き出して、僕は中腰になって顔を拭った。
今のは、ヤバかった。
胸の中で暴れる心臓の音を聞きながら、荒くなっている呼吸をしばらく野放しにする。

「ベル様、無事ですか！？」

「……リリぃ～。ありがとう、助かったよぉ」

駆け寄ってきたリリの姿を見てとうとう僕は脱力した。
へなへなと腰を下ろして尻餅をつく。
首をがっくりと折って、土色のダンジョンの地面を見るわけでもなく見つめた。

「今のは不用意でした！　確かに意地悪な状況でしたけどっ、ベル様にも非がありますっ！」

「ごめん……。返す言葉もないよ……」

油断、してた。
いや慢心か。
二体ならキラーアントを瞬殺できると高を括ってた。教科書通りに……エイナさんに言われた通りに一匹ずつ相対していれば、例えニードルラビットに襲われていても、こんなことにはならなかった筈。
痛感した。ダンジョンの怖さ。“絶対”なんてない。
一歩間違っていたら、リリがいなかったら、本当に死んでいたんだ。
ぶるり、と体を震わせて、僕は今回のことを教訓として肝に銘じる。
舐めた判断は即命取りだ。
ガミガミと散らされるリリの声を半ば聞き流しながら、長い息をついた。

「聞いているんですか、ベル様！」

「あぁ、うん、ごめん……反省してるよ。もう絶対あんな真似しない……」

「……確かに反省しているようですね。それだったら、リリはもう何も言いません。これで学ぶことがなかったら、それはベル様の責任です」

「うん、わかってる」

同じ轍は踏まないことを約束して僕は立ち上がった。
もう一度リリにお礼を言おうとして、そこで「そういえば」とさっきの出来事を振り返る。

「リリ、今さぁ、魔法使ったよね？」

「……はっ！？」

僕の指摘にリリは揺れた。

右手に持っていた小さな紅のナイフ、それを慌てて背に隠す。

「今のって、もしかして『魔剣』？　あぁ、それで助けてくれたんだ。……本当にありがとう、何だかすごく嬉しかったよ」

「……っっ！　べ、別にベル様を助けようとしたわけじゃないんですからねっ！　ベル様がいなくなったらリリの収入が減るからこうしたまでです！　か、勘違いしないでくださいっ！」

「……なに言ってるの、リリ？」

めちゃくちゃ対応に困る発言に僕がめちゃくちゃ困った顔をしていると、リリはハッと目を見開いた。

頬を赤らめながら「リリは一体何を言ってしまっているんですか……？」と頭を両手で抱え始める。

ううん、流石にフォローもできない……。

「えーと……リリって『魔剣』を持ってたんだね？」

「は、はははは。ええ、ちょ、ちょっと色々あって、リリのもとに転がりこんできて……」

「へぇ。でも確かそれ、使い過ぎると壊れちゃうんでしょ？」

「そうですね、リリはここぞという時しか使わないようにしています。でも、ベル様のためならリリは出し惜しみなんかしませんよ！」

……うん、さっきの発言とは真逆のこと言ってるね。

別にいいけどさ。

それから僕達は、空腹感も手伝ってお昼をとることにした。

リリがモンスター達の死骸を片付けた後、ルームの中央に陣取る。

壁際だと生まれたばかりのモンスターにガブッとやられる危険があるから、大抵ダンジョンで休息を取る時はこの位置で行う。

この空間は広いから、出入り口からモンスターが入場してきても不意打ちをされることはまずない。

「おや……？　シシシッ、ベル様、今日はお弁当を貰えなかったところを見ると、例の女性の方と喧嘩でもしてしまったんですかぁ？」

「ううん、ちょっとお店に顔を出してる暇がなくて……昨日のバスケットも返してないんだ」

「ふぇ？　そうなのですか？」

僕がシルさんにお昼ご飯を受け取っていることを知っているリリは、埋め合わせの食料品を口にしているのを見て悪戯っぽく笑ったけど、

僕の返事にきょとんとする。
昨日は夜遅くて返す暇はなかったし、今日の朝は寝坊がたたって「豊饒の女主人」には立ち寄れなかった。
既に待ち合わせ時間には遅刻していたから、リリを待たせるわけにもいかなかったのだ。
今日はちゃんと返しにいかないとなぁ……。

それから僕達は談笑に興じた。ダンジョンは静かなもので、モンスター達も現れる気配を見せない。
ころころ笑顔を浮かべるリリの顔を窺いながら、僕は機を見計らい、ずっと考えていたことを思いきって切り出してみた。

「そういえばリリ、昨日【ファミリア】に戻るって言ってたけど、何かあったの？」

さも何でもないように尋ねたつもりだったんだけど、リリは一瞬顔を硬くさせた。
すぐに取り繕って笑顔に戻ったけど、どこかぎこちない。
やっぱり、触れなかった方が良かったのかな……。

「シシシシッ。どうしてそんなことを聞くんですか、ベル様？」

「えっと……リリと【ファミリア】の人達の関係が悪そうだったから、その、気になっちゃって……ゴメン」

僕が反射的に謝ると、リリは眉尾を下げて笑った。

「お心遣いありがとうございます、ベル様。でも大丈夫です、ベル様が心配しているようなことは一切起きていませんから」

「本当？」

「ええ、本当です。昨日は一ヶ月に一度の、【ソーマ・ファミリア】の集会があったんです」

「集会って……？」

「……シシシッ。話が長くなるので省きますが、要はこれだけのお金を来月に稼いでこいっていう、布告みたいなものですね。各構成員ごとに見合った額を定められるので、みんなちゃんと集まらないといけないんです」

【ファミリア】の運営費、ということだろうか。

各構成員の実入りから資金を徴収することは、【ファミリア】に入っているならある意味当然のこと――僕の考えからすると自分の住む家を支えるってこと――だから、何もおかしいことじゃない。

「でも厳しいんだね、個人個人にノルマを決めてるなんて。稼ぎが少ない人はかなり大変のような……」

「そうですね……リリもそう思います。サポーターとか、芽のない冒険者は、特に……」

あ、と僕は目を見開いた。
確信には届かないけど、小さな納得を得る。
リリが前にあんな含みのある皮肉めいたことを言ったのも、お金が必要だったから……？
もしかしたら【ファミリア】の人達と上手くいっていないのも、お金の折り合いにあるのかもしれない。
僕は慌てて気になったことを聞いた。「ノルマを守れないとどうなるのか」と。
リリは僕の心を見透かしたように笑い、顔を振って「特に何もありません」と答えた。
つまり罰則は無し……馬鹿みたいに安堵したいけど、リリの頭の傷が脳裏にちらついてそれもできそうにない。
リリの言葉は信用したいけど……。
僕が眉間に皺を寄せて難しい顔をしていると、リリが申し訳なさそうにぺたりとフードの上を撫でた。って、申し訳なさそう……？

「……あ、あのさっ。僕聞いたんだけど、【ソーマ・ファミリア】ってお酒も販売してるんだよね？」

居たたまれない空気が流れ出したので、強引に話題の方向転換を計った。
僕は下手くそな笑顔を浮かべる。

「ああ、あれは……失敗作です」

「……しっぱい？　……え、ええっ？」

「そうです。本来作る予定だったお酒の製造工程で漏れたものを、適当に市場に回しているんです。捨てるのももったいないので」

ちょっと待って。

確かエイナさんの話だと、【ソーマ・ファミリア】のお酒はすごく美味しくて、需要も高いって……。

消費者の中には専門家（マニア）とかそっちの方面の人もいるわけだから……。

そんな人達の舌も唸らせるほどの……失敗作？

どんな失敗作なんだ、それって。

僕が戸惑いを隠せないでいると、リリは、ちょっと翳りのある苦笑いを浮かべた。

「“失敗作ですら”それほどまでの美酒、ということです」

それはもう、失敗っていう言葉は当てはまらないんじゃあ、と僕は無意識に喉へ手をやりながら思った。

いや、だったら、その“完成品”っていうのは……？

「リリ達の主神であるソーマ様は、他の神様達は愚か、何物にも全く興味を示さないのですが……一つだけ、関心を払っていることがあります。それが、お酒の製造です」

「……」

「ソーマ様の絶対唯一の“ご趣味”なので、脇目も振らず没頭して

いまして……ソーマ様が【ファミリア】を作った目的は、【ソーマ・ファミリア】の存在意義は、その“ご趣味”のためにあると言っても過言ではありません」

構成員にノルマを与えて資金を集めるのも、原材料費や製造過程で大量の出費がかさむから、らしい。

神様が“趣味”のために【ファミリア】を作る、あるいは【ファミリア】を利用するっていうのは珍しい話ではないと思う。

娯楽を絶えず求めている神様達のことだから、生活水準を確保する以外にも、道楽の一環が含まれているのは十分に理解できる。事業をおこしている神様達っていうのも、それは好奇心に似た意欲に端を発している筈だから。

でも……何だろう、【ソーマ・ファミリア】に対する違和感が払拭しきれない。

リリの境遇に触れているから神経質になっているだけかもしれないけど、【ソーマ・ファミリア】が歪なものに見えてしょうがなかった。

『死に物狂い』。

『生き急ぐ』。

『必死』。

あの時そう言っていたエイナさんの表情と声音が、僕の頭の裏側を過った。

「あ、あははは……そ、そんな美味しいお酒なら、僕も飲んでみたいかな……？」

表情がぶれてしまいそうだったので、それまでの話に乗るように冗

談を口にする。
リリはそんな僕を見て、消え入ってしまいそうに、小さく笑った。

「止めておいた方がいいと思います……」

「……」

ぽつりと呟かれた言葉を最後に、僕達の会話は途切れた。
話しかける踏ん切りもつかず、そんな風にもたもたしているうちにモンスターが現れ、僕達は選択の余地もなく戦闘に臨んだ。
リリはすぐにいつもの雰囲気に戻り、僕も内心はともかくそれに応じる。
まだ溝は埋まっていない。
埋まるのかもわからない。
僕はそれを強く実感してしまった。
何もできない弱い自分をまた見せつけられたようで、無性に情けなくなった。

あれから二日経った。
リリと最後にダンジョンにもぐってから中一日空いたことになる。
一昨日、リリは用事があるといってダンジョンへ行けない旨を僕に伝えた。【ファミリア】の事情が絡んでいるのか僕にはわからなかったけど、申し訳なさそうにこちらを見上げるリリの姿を酷く鮮明に覚えている。
僕は何だか気が進まず、昨日はダンジョンへ足を運ばなかった。
ここのところダンジョンに通いっぱなしだったからいい休息、なんて自分に言い聞かせてるけど……何だかなぁ。
ヴァレンシュタインさんの顔を思い出す度に、「こんなことしてる場合じゃないだろ」って胸の真ん中ががなり立ててくる。でも、どうしても気力が湧いてこない。
ガスの抜けた風船みたいだ。

「……あー、駄目だこんなんじゃあ」

寝転がっているソファーから身を起こして、髪を少し乱暴に掻く。
ふぅーと一息して、鬱積みたいなものを重苦しい空気と一緒に体の中から追い出した。
とにかく動こう。やることを探そう。このまま腐っていたんじゃあいけない。

心機一転じゃないけど、僕は意識を切り替える。
リリのことは一先ず心の隅に置いておいた。

（久しぶりに掃除でもしようかな……）

すっかりホームにいる時間が少なくなっているから、家事は随分とやっていないような気がする。
神様だけに任せきりは悪いと思って、行動に移ろうとソファーから立ち上がると……棚の上に放置されたバスケットが目に入った。

「……あ゛」

僕の、馬鹿。

「本っ当っに、ごめんなさいっっ！！」

「あはは……」

ばんっっ、と両手を合わせ頭を下げる。
日が燦々と輝いている真昼時、「豊饒の女主人」に駆けこんだ僕は、シルさんの目の前でありったけの誠意を込めて謝罪を行っていた。
恵んでもらっている御恩をすっかり忘れていた時点で、ありったけの誠意とか笑わせるけど。
申し開きなんてできっこないよなぁ……。

「顔を上げてください、ベルさん。ベルさんにも都合があるでしょうし、私だってそこまで気にしてはいませんから」

「いや、でも……」

「それなら、今度からは気をつけるように頑張ってください。過ぎたことは戻ってはきませんから、これからの行動で誠意を示すということで」

ごもっとも……。
僕はおずおずと上目がちになりながら顔を上げた。微笑をしているシルさんは優しく僕を見つめている。
こういう時、この人が年上だって、しみじみ感じさせられる。

「でも、そうですね。音沙汰がなくて私も心配はしていました。お仕事で間違いを起こしてしまうくらい」

「本当にすいませんでした……」

「……一杯からかわれたんですよ？」

少し恨みがましい目付きで、シルさんは口を尖らせた。

はっ？　と僕は目を丸くする。なんのこっちゃ、と正直な感想が顔にありありと浮かんでいたと思う。

わざと過ぎるくらい咳をする仕草をして、シルさんは僕をなじるのを終わりにさせた。頬っぺたに少し赤みが差していたのが印象に残った。

肌がミルクのように白いから、よく映えるみたい。

バスケットを返してから僕はメニューを受け取った。

返すものを返してじゃあさようなら、では何だか駄目なヒューマンに思えたので、忘れていた見返りというわけではないけど、簡単に注文をする。

「豊饒の女主人」は昼間は喫茶店を営んでいるようなので、夜に来る時とはメニューの内容が随分違う。値段も全体的にこっちの方が安い。

やっぱりお客が冒険者だと価格を上に設定するのかな。一般の人より一日の収入自体は遥かに高いわけだし。まぁ、そこからアイテムの購入とか武器の整備とか、色々差し引かれるけど。

僕は紅茶とケーキを頼んだ。実は甘いものはあまり好きじゃないけど、ちょっと雰囲気に流されて。

店でくつろいでいる他のお客さんは女の人が中心だ。主婦っぽい獣人に引き連れられる子供達の姿が微笑ましい。流石に神様みたいな必殺（むね）の持ち主はいなかった。

「あれ、前にこんなの飾ってありました？」

いつもお世話になっている店の隅のカウンター席、そこで店内を観察していると緑色の本が視界に飛び込んできた。
僕のすぐ後ろの壁に立てかけられてあって……インテリアとしてはあまり頂けないような。
無骨っていうか、ちょっと珍妙過ぎる気がする。

「ああ、それは……」

注文を取りにきたシルさんは一旦言葉を切った。
僕が疑問に思う前に続きを言う。

「お客様のどなたかが、お店に忘れていったモノのようなんです。取りに戻られた際に気付いてもらえるように、こうして置いていて」

はぁ、と僕は気の抜けた返事をした。酒場にこんなけったいな本を忘れちゃう人なんているんだ。
僕はそれから、ケーキと紅茶を運んできたシルさんと取りとめない会話を交わした。
独断でキャットピープルの店員さんがシルさんに休憩を言い渡していたみたいだけど、平気なのかな？　それに何かニヤついてたけど。

「それじゃあ、今は静養をしていらっしゃるんですか？」

「そんな響きのいいものじゃないんですけど……」

僕はリリに関することは伏せて、今は何だか気が抜けてしまったこと、手持ち無沙汰になってしまったことをシルさんに告げた。
口が滑ったわけじゃないけど、誰かに聞いてもらいたかったのかもしれない。
気の利いたアドバイスでもくれないかな、なんて。
シルさんは僕のことをじっと見つめた後、やがて微笑んだ。

「では、読書なんていかがですか？」

「読書？」

「はい。ベルさんはあまり本をお読みになられないようですから。この機会にぜひ試してみては？」

こういう時こそ本はいい刺激になるかもしれない、とシルさんは言う。
読書……考えてもみなかった。でも確かに、ダンジョンへ気持ちが向いていない今の僕にはいい薬になるかも。
英雄のお伽噺を呼んだ後いつも感じていた、居ても立ってもいられなくなるあの感覚。
本の世界に触れて胸が躍り出せば、今の無気力状態を一新できるかもしれない。それに、前から読もうとは思ってたんだし。

「うん、妙案かも……。ありがとう、シルさん。僕、本を読んでみることにします」

「そうですか。お役に立てたのなら嬉しいです」

僕はありがたくシルさんの助言を採用することにした。
やっぱり一人で抱えず誰かに相談してみるものなのかもしれない、こういうのは。
僕が感謝をしていると、シルさんは笑みを崩さないまま尋ねることをしてきた。

「じゃあ、何かお目当ての本はありますか？」

「んー、そういうのは特にないですね。ホームに神様の本があるから、それを貸してもらおうかな……」

いっそ書店に行っちゃうのもアリかな、なんて僕が思っていると、シルさんは「でしたら」と背後にあったあの緑色の本を手に取った。

「これなんてお読みになってみませんか？」

「えっ？　でもこの本、他のお客さんが忘れていったものじゃあ……」

「ちゃんと返していただければ問題ありません。本は読んだからといって減るものではないですし。それにこの本はきっと冒険者様のものですから、同じ冒険者のベルさんには役立つことが載っているかも」

ここは冒険者に人気の酒場だから、自然と持ち主は想像できる。恐らくシルさんの言う通りだろう。
冒険者の私物なのだからそれこそいい刺激を受けるかもしれない、ってことか。
確かに他では目にかかれない珍しい本だ。今しか触れられるチャンスはないのかも。
でも、人のものに勝手に手垢をつけるのは……。

「大丈夫です。ミアお母さんはこの本を置いておくのをあまり快く思っていないようですし、むしろベルさんが預かるという形を取ってくれれば私達も助かります。……それに」

シルさんは、はにかんだ。

「私もベルさんの力になりたいかな、なんて……」

「……」

「私にはこんなことしかできませんから、だからベルさん、どうか受け取ってくれませんか？」

いつかと似たようなお願い文句を告げられ、僕は思わず苦笑した。
そういうことなら、甘えちゃおうかな？
くすぐったいシルさんの心遣いを邪険にしたくなくて、僕は本を受

け取ることにした。
手渡される際、シルさんの柔らかい手が僕のものに当たり、ちょっとどきっとしてしまう。

「あ、ありがとうございますっ。えっと、じゃあ、僕もう行きますねっ？」

「はい。ご来店ありがとうございました」

うろたえてしまった僕は誤魔化すように立ち上がった。ケーキ美味しかったですと言ってそそくさと店を後にする。
エイナさんとの時もそうだったけど……駄目だ、女の人との肌の触れ合いはどうしようもなく緊張してしまう。赤面ものだ。
どれだけ初々しいんだよ、僕ってやつは。

『シル、あの本を、渡してしまったのですか……？』

『うん。渡しちゃった』

『一応お店のものなのに勝手に貸しちゃうなんて、真面目なシルには珍しい……』

『お二人ニャン、恋は盲目という言葉を知らないのかニャ？　シルもちょっとくらい羽目を外すのもいたし方がないことニャ』

そういえば、シルさんの手、ちょっと震えてた……？

ホームに戻って僕はすぐに本を読んでみることにした。
神様はバベルの方で仕事を頑張っているので、この時間帯にはまだ帰ってこない。
一応、定職につけたってことなのかな。でも、神様の様子を見る限り何だかそういう感じじゃないような……？
最近の神様のことを考えながら、片手に持った本をテーブルに置く。
椅子を引いて、僕はちょっと緊張しながら題名の記されていない本の表紙をパラとめくった。

『めざせマジックマスター！　～マリマリマーリンの魔法指南書～』

どうしよう、初っ端からそこはかとない地雷臭が。

『ゴブ吉にもわかる現代魔法！　その1』

ゴブリンに魔法教えちゃ駄目だろ……。
表紙を静かに閉じたくなったけど、ぐっと耐えた。
シルさんの厚意を無駄にするわけにはいかない。僕は辛抱強く連なっている文字を追っていく。

出だしはアレだったけど、中身は割と健全のようだった。
章のタイトルに記されているようにどうやら魔法に関する書物らしい。
僕は「おおっ」と目を光らせてこれ幸いと本の中にのめり込んでいく。

『魔法は先天的系と後天的系の二つに大別することができる。先天的系とは言わずもがな対象の素質、種族の根底に関わるものを指す。古よりの魔法種（マジックユーザー）はその潜在的長所から魔法の早期発現が見込める。属性には偏りが見られる分、総じて強力かつ規模の高い効果が多い』

『後天的系は神の恩恵を媒介にして芽吹く可能性、自己実現である。規則性は皆無、無限の岐路がそこにはある。発現性はランダム、【経験値】に依るところが大きい』

共通語（コイネー）で編纂されているので僕にもかろうじて読める。
でも、一文一文の間に細かく走っているこの文字って何だろう……？
文言……じゃなくて、数式か、コレ？
ページをめくる。

【神聖文字（ヒエログリフ）】とも違う、それぞれの亜人の言語とも違う。
一つとして共通した形のない複雑怪奇な記号群。
文体に……文字の海に、引きずりこまれる。
ページをめくる。

『魔法とは興味である。後者にこと限って言えばこの要素は肝要だ。
何事に関心を抱き、認め、憎み、憧れ、嘆き、崇め、誓い、渇望するか。引鉄は常に己の中に介在する。神の恩恵は常に己の心を白日のもとに抉り出す』

絵が現れた。
顔がある。目がある。鼻がある。口がある。耳がある。人の顔だ。
真っ黒な筆跡で編まれ描写された、瞼の閉じた人の顔。絵の文章。
ページをめくる。

『欲するなら問え。欲するなら砕け。欲するなら刮目せよ。虚偽を許さない醜悪な鏡はここに用意した』

違う。僕の顔だ。額から上が存在しない僕の顔面体。
違う。仮面だ。僕のもう一つの顔。ペルソナ。
ページをめくる。

『じゃあ、始めよう』

瞼が開いた。“僕の”声が聞こえた。
文字で綴られた藍色の瞳が僕を射抜く。短文で形成された小さな唇が言葉を紡ぐ。
ページをめくる。

『僕にとって魔法って何?』

わからない。
けど、漠然と凄いもの。
モンスターを倒す必殺技。英雄達が使いこなす起死回生の神秘。
強くて、激しくて、無慈悲で、圧倒的で、一度は使ってみたいと望んで止まない、純粋な好奇心。
ページをめくる。

『僕にとって魔法って?』

力だ。
強い力。
弱い自分ごとやっつける大きな武器。
弱い自分をやっつけたい僕だけの武器。
人を守る立派な盾なんかじゃない、癒しの手なんて綺麗なものでもない。
邪魔なものを蹴散らして道を切り開く、英雄達の力。
ページをめくる。

『僕にとって魔法はどんなもの？』

もの？

魔法ってどんなもの？

炎だ。

魔法と聞けば炎。真っ先に思い浮かぶのは炎。

強くて、猛々しくて、熱い。

草原を燃やし、灰を巻き上げ、大気を焦がし、波のように全てを呑み込んで、陽炎が揺らめく、弱い僕にはちっとも似つかわしくない、赤い炎。

僕は、炎になりたい。

『魔法に何を求めるの？』

より強く、あの人のもとへ。

より速く、あの人のもとへ。

誰よりも、誰よりも、誰よりも。

誰よりも速く。

あの人の隣へ。

あの人の瞳の中へ。

『それだけ？』

叶うなら。叶うなら。叶うなら。
英雄になりたい。
あの時から憧れていた、今も馬鹿みたいに憧れ続けている、英雄になりたい。
お伽噺に出てくる彼等のように、誰もが称えて認めてくれる英雄に。
情けない妄想でも、カッコ悪い虚栄心でも、みじめになるほど不相応な願いだったとしても。
僕は、あの人が認めてくれるような、英雄になりたい。

『子供だなぁ』

……ごめん。

『でも、それが僕(きみ)だ』

本の中の僕は最後に微笑んだ。
そしてすぐに、僕の意識は暗転した。

「……くん。……ル君っ」

声が、聞こえる。
真っ暗な意識の中で響く、耳に心地の良い綺麗な声。
むずむずと、暗闇に光が差していく。

「ベル君！」

次の瞬間、僕は目を覚ました。

「ぁ……か、神様？」

「ああ、そうだよ、ボクだ。どうしたんだい、テーブルの上に突っ伏したりなんかして？　寝るんならもっとマシなところで寝ればいいじゃないか」

すぐ近くにある神様の顔に、僕は寝ぼけ眼をごしごしとこすった。
顔を上げて周囲を見る。
ホームだ。下水道の隠し部屋。時間は……十九時。もう夜になっている。
僕はまだ完全に回り切ってない頭で、一つ一つ状況を確認していく。

「本を読んでたのかい？　ははぁん……慣れないことをして、まんまと眠気に敗北を喫したってところかな？」

「え……あ、はい。……そう、なのかな？」

……寝てた？
テーブルにはシルさんから借りた本が開きっぱなしのまま。どうやら、これを下にして思いきり熟睡していたらしい。
読み終わってる……？
米神を押さえる。頭の中がかき回されたかのようにふら付いて、ちぐはぐだ。
おぼろげに残っているのはあやふやな記憶だった。まるで白昼夢に遭ったかのように現実味がない。
僕は誰かと話してた？　何かを尋ねられてた？　それとも、この記憶の残りかすは全部夢？
駄目だ、混乱してる……。

「はは、可愛いね。ベル君のそんなお茶目な姿を見れて、おかげでボクの仕事疲れも吹っ飛んだよ」

「お、お茶目って……」

「ふふっ。さ、夕食にしよう」

あんまりな言い草にがっくりとしながら耳を赤くしていると、神様はご機嫌な笑顔を浮かべながらクローゼットへ向かった。
神様が着替え終わるまで下水道に出て、もういいよと扉から幼い顔が覗くと、改めて夕飯の準備に取りかかる。
先に帰っていたのに何も準備していなかったのが申し訳なかったけど、二人でキッチンに並ぶことを神様は頬を染めて嬉しがっていた。
僕もつられて笑う。

「ベル君、あんな分厚い本をどうしたんだい？　まさか君が買ってきたなんてことはないだろ？」

「そう断言されちゃうと悲しいですけど……ハイ、ちょっと知り合いの方に借りたんです」

「へぇ、後でボクにも見せてくれよ。あんな古めかしい本、あまりお目にかかったことはないんだ。食指が動く、ってね」

「本、大好きですもんね、神様」

慎ましい夕食の片付けを終えてからシャワーを交互に浴び、そして今日も僕の【ステイタス】更新をすることにした。ここ数日の更新頻度は高い。
神様もようやく【ヘファイストス・ファミリア】支店のお勤めに慣れてきたようで、時間を割けるくらいには余裕が出てきたらしい。

僕は半裸になって神様のベッドを拝借した。

「ん～……ん？　……むう！」

「か、神様……僕の熟練度の伸び、変わりませんか？」

「……ああ、変わらないよ。絶好調、と言わんばかりの伸び方さっ」

難しい声音を出してる神様に僕が恐る恐る尋ねると、不機嫌な返事が僕の後頭部に落とされた。
まだ怒ってる……。いや、“また”なのかな？
この頃【ステイタス】を更新する度にこんな感じのような……。

「ああそうだよね、君は頑固だものねっ。そうさ、知ってたさ、あのくらいで君が心変わりするわけないってっ」

返答に窮しちゃう愚痴をぶつぶつと神様が呟く。
僕はどうすることもできず、居心地の悪い空間を黙って甘んじることしかできなかった。
背中が何だか、チクッ、チクッ、って針で故意に刺されているような気がする。
って、ちょ、いたっ、痛い！？

「神様、痛いですっ！？　絶対わざとですよね！？」

「ふーんだっ」

「ふーん、じゃないですよぉ！？」

僕が泣き叫んで訴えると、神様は口応えするなというように僕の頭に針を見舞う。グサリ。

僕は枕を涙で濡らすことでしか、神様に反抗することができなかった。ううっ、寝心地悪くしてやる……。

「……ま、『耐久』とか除くと、どの基本アビリティもそろそろSに近くなってきてるから、流石に今まで通りというわけではないけど」

「グスン……そうなんですか？」

「ああ。まぁ、これでも破格なんだろうけどね……」

諦めたように溜息をつく神様。何で溜息をつかれるんだろう……。

基本アビリティの最高ランクはS。上限が迫るにつれ熟練度の上昇値も大幅に落ちる。時には何十体のモンスターを倒しても、1も上がらない場合もあるみたい。

今も熟練度が伸びているということは、成長効率が下がったというより、むしろ変化を来たさず順調ということなんだろう。

諸手を上げて喜ぶべきなんだろうけど……こう周りと比べて考えてみると、何だか自分のことながら不気味に思えてきた。

「……」

「……？　神様？」

口も手も止まった神様を僕は怪訝に思った。
呼びかけて、しばらく待っていると……。

「……魔法」

「え？」

「魔法が、発現した」

とんでもない答えが返ってきた。

「えええええええええええええっ！？」

「へぶにゅ！？」

腹の底から仰天した。
衝撃的な内容に、僕は上半身を海老反りのように起き上らせる。
伴って、僕の腰に乗っかっていった神様はブォンと投げ出され、ベッドから墜落する。後頭部がフローリングの床にヘッドバット。
って、ああ！？

「かっ、神様ぁー!?　ご、ごめんなさいっ、怪我ないですか!?」

「ま、まさかこんな形で報復されるなんて……や、やるじゃあないか、ベル君……」

ベッドの下で無残にもんどり打った体勢の神様は、涙目でぷるぷる震えていた。

て、ていうか……胸が重力に逆らっている……!?　って、そうじゃないだろ僕!?

形の崩れない神様の必殺（むね）に戦々恐々しながら僕は神様を救出した。

その後すぐに【ヘスティア・ファミリア】に広まったドゲザをしながら平謝り。

僕が【ステイタス】の詳細を知るのはかなり後のことだった。

ベル・クラネル
Ｌｖ．０
力：Ｂ　５３（→５１　耐久：Ｄ　８７（→８６　器用：Ｂ　６９（→４５　敏捷：Ａ　１７（→２８　魔力：Ｉ　０
魔法
【ファイアボルト】
・速攻魔法
スキル
【】
短刀：Ｂ　２９（→６４

「っっ……！！」

声を抑え込むのに本当に苦労をした。
神様に手渡された用紙を震える両手で持ちながら、必死に口の中で暴れる歓喜を噛み殺す。
瞳が爛々と輝き、口元がにやけているのが見なくてもわかった。

「魔法まで発現しちゃうなんて……いや【ステイタス】の状態からすればやっと発現したってことに……？　うーん、わからない」

僕とは違って眉根を寄せる神様は、顎に手を当てて考え込んでいる。
背中と僕の顔を交互に見つめてくるけど、気にもならなかった。

「かっ、神様……魔法っ、魔法ですよ……！？　僕、魔法を使えるようになりました……っ！」

「うん、わかってる。おめでとう、ベル君」

僕は手放しで喜んでいた。
感激が身を焦がす。体中が熱い。
ともすれば目から涙を流してしまいそうなくらい、僕は感動に打ち

震えた。

「……大げさ、って言うのは野暮ってものかな」

ぐしゃっと紙を握り潰してその場で蹲る僕の側で、神様の苦笑を浮かべた気配がする。

嬉しい。本当に嬉しい。

僕もやっと魔法が使えるようになった。

あの魔法！　本の中の英雄達が切り札と言わんばかりに操っていた、あの魔法を！

「水を差すようで悪いけど、早速この魔法について考察しよう。気になることがあるんだ」

「はいっっ！」

僕は立ち上がって大きく叫んだ。

落ちつけと自分自身に言い聞かせる。浮かれっぱなしでどうするんだ。

深呼吸をして、僕は昂った全身を静めた。

「いいかい？　掻い摘んで話すけど、魔法っていうのはどれも『詠唱』を経てから発動させるものなんだ。これくらいは知ってるかな？」

神様の問いにこくりと頷く。
全ての魔法はそれぞれ固定された呪文を術者の口が紡ぎ出すことによって効果を発揮する。
わかりやすく言うと、『詠唱』という魔法の制作過程で砲身を作り上げ、それが完成した時はじめて砲弾が装填される。
こう考えれば、作り上げられる砲身の規模が大きいほど、つまり『詠唱』の時間が長いほど、炸裂する砲弾も大型となり威力も増すというわけだ。
逆に砲身の規模が小さければ威力は低くなるということだけど、それは『詠唱』の時間が短いということだから、すぐに発動できるという利便性がある。
一長一短というやつだ。

「本題に入るね。ボクの友人に聞いた話だと、魔法の詠唱文は発現した際【ステイタス】の魔法スロットに表示されるんだ。それを見て、君達は魔法のトリガーを得ることになる」

「え……でもこの用紙には『詠唱』が記載されてないですけど……」

「そう、それなんだ。おっと、ボクが書き忘れたなんて勘繰らないでくれよ？」

クシャクシャに丸まった用紙を広げて、穴があくほど見る。
【ファイアボルト】と書かれた魔法スロットには『詠唱』らしき唱文の綴りは存在しない。
これでは魔法の足掛かりにもならない。
僕が首を捻っていると、神様が自分の意見を口にした。

「ここからはボクの完全な推測だ。スロットに補足されてるこの詳細情報、この文面からするとベル君の魔法は……詠唱が必要ないのかもしれない」

「……」

僕は動きを止めて、それからもう一度用紙を食い入るように見つめた。

詠唱文は一切表示されていなくて、唯一の情報が「速攻魔法」という僅かな説明のみ。

……神様の読みが的中しているように僕も感じるようになった。というか、それ以外の可能性が思い浮かばない。

「威力のほどはわからないけど、詠唱のノータイム……速攻魔法。それで間違ってないとボクは思う」

「じゃ、じゃあ、この【ファイアボ――むぐっ」

神様の柔らかい両手が僕の口を塞いだ。

背伸びをした神様は僕を見上げてくる。

「……迂闊に魔法の名前を言わない方がいい」

「むぐぅっ？」

「何がトリガーになっているかわからないけど、最悪君が【ファイアボルト】と発音しただけで、魔法が発動することになるかもしれない」

さぁっ、と顔が青くなった。

どんな効果かはまだわからないけど、こんなところで魔法が発動したら、僕達のホームは粉々に吹き飛ぶかもしれない。

「いいかい？」と確認してくる神様に僕は勢いよく頷いた。口が解放される。

「結局推測だから、何が正しいかなんて当てにならないけど……明日ダンジョンで試し撃ちでもしてくるといい。それで君だけの魔法の正体がはっきりする筈さ」

「えっ、明日……？」

「おいおい、今からダンジョンへ行く気かい？　シャワーも浴びちゃっただろう？　慌てなくても、君の魔法は逃げたりなんかしないぜ？」

「あ、はい……そうですね」

苦笑を向けてくる神様に僕はぎこちなく頷いた。

もう夜遅い。神様の言っていることはもっともだろう。

欠伸を手で押さえる神様は仕事の疲れがピークに達しているようで、すぐに就寝することになった。

歯磨きを済ませぴょんとベッドに飛び込む神様を見て、消灯。
僕もソファーに寝転がって眠りに落ちた……

（ごめんなさい、神様）

……なんて、できる筈がなくて。
目は冴えきっている。こんな状態で眠れるわけがない。
ソファーから跳ね起きる。
神様の小さな寝息を確認しながら、起こさないように苦心して、装備一式の詰まったバックパックを背負い部屋を出た。
ぱぱっと防具を身につけ、バックパックは下水道の梯子下に放置。
地上へ出る。

（使ってみたい、今すぐ！）

月と星に見下ろされながらメインストリートを駆け抜ける。雲は一つとしてなかった。
路辺の店の窓から漏れる灯りが、僕の火照った顔を照らし出す。酔っぱらった亜人達の騒ぐ声々でリズムを取るかのように、僕の足は弾んだタップを踏んだ。
オラリオはまだ眠らない。僕もまだ、眠れない。
前方で白い巨塔が大きくなってくる。
僕は笑みを滲ませてギアを上げた。

バベルの一階に飛び込んで真っ直ぐ地下へ。
ぽっかりと床に空いたダンジョンへと繋がる大穴。僕は取り付けら

れている螺旋階段を無視して、穴の中央へ飛び込んだ。
空気を裂いて、ダンッと着地。足に伝わる振動も涙目になってしまうほど心地がいい。
僕はダンジョン1階層を出発した。

「……！」

ざっ、と足を止める。
幅の広い一本道。視界の真ん中でぽつんと揺れる、身長の低いずんぐりとした緑の影。
ゴブリン。

（この、条件なら……）

的の数や大きさといい、間合いといい、申し分ない。
僕は大きく唾を嚥下した。汗で湿る掌をインナーになする。
相手のゴブリンもこっちに気付いた。目付きを鋭く構え、唸り声を上げながらドタドタと走ってくる。
僕は、グー、パー、と手の開閉を繰り返して、腕をゴブリンに真っ直ぐに突き出した。

「ギギャアアアアアア！」

「……」

心臓の音が鼓膜にはりついている。
溜まりに溜まった緊張と不安と期待が、いっぺんに僕の肩にのしかかった。
浅く、吐息。
眉尾を限界まで吊り上げ、咆哮する。

「【ファイアボルト】！」

緋色の光が、視界を埋め尽くした。

「ッッ！？」

駆け抜けたのは緋色の雷。
いや違う、“稲妻状の炎”。
鋭角的かつ不規則な線条を描くジグザグの炎が、ゴブリンの体を貫く。
僕の目が追えたのはそこまで。
炎の雷がモンスターに着弾した瞬間、眩い爆光が炸裂する。オレンジ色の華が咲いた。

「……ァ」

全身を黒焦げにし、至る皮膚から煙を立ち昇らせるゴブリンは、白

目を剥いて床に倒れ込んだ。
最後に残した掠れた呻き声が、通路に残響する。

「……うそ」

出た。本当に。
僕の魔法が。
呆然と立ち尽くしていた僕は、腕を伸ばしていた体勢を止めてまじまじと掌を見つめた。
線の細い手。いくつもできたマメが明らかにその中で浮いている。
普段と変わらない僕の手だ。何も変わらない。
でも、出たんだ。
この手から、魔法が。

「……は、ははっ」

認めてしまえばあっけなかった。
全身が発熱する。僕は開いていた掌をぎゅっと握り、拳を作った。

（よしッ……！）

確かな手応え。確かな前進。
【ステイタス】とは異なる目に見えた大きな変化な現れに、僕はあの人へ一歩近付けた確かな実感を得た。

ファイアボルト。炎の雷。
発動は一瞬、速度は神速、火力は絶大。
“誰よりも速い”、“炎の魔法”。
僕だけの魔法。

「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っっ！！」

喜びの感情が氾濫する。僕は唇を噛んで何度も一人でガッツポーズをした。何てイタイ。でも関係ない。
僕は顔を赤らめ興奮した。
馬鹿みたいに、そう、ギルドへ冒険者登録したあの時のように、瞳を輝かせた。
一頻り感情の最高潮を味わった僕は“調子に乗った”。
次なる獲物を探し、その場から駆け出したのだ。

「ファイアボルト！」

「ギャアアアアアアアアアアア！？」

モンスターを見つけては腕を突き出し。

「ファイアボルトッ！！」

「エブシッ？！」

キチガイのように大声で叫んで。

「ファイアボルトオオオオオオッ！！」

「プギャアアアアアアアアアアアアアアア！？」

即見即爆。

「ファイアボルト！」「ファイアボルト！」「ファイアボルト！」
「ファイアボルト！」「ファイアボルト！」「ファイアボルト！」
「ファイアボルト！」「ファイアボルト！」「ファイアボルト！」
「ファイアボルト！」

「「「「「「「「「チョッ！？」」」」」」」」」

豪快な花火を、狂ったように乱れ撃ちした。

「あ、５階層まで来ちゃった……」

てへへ、とご満悦に笑いながら周囲をきょろきょろと見回す。
薄青色から薄緑色に変色した壁は間違いなく４階層を越えたことを示していた。
夢中になり過ぎた、と言葉だけの反省をして僕はその場でターンす

る。
そろそろ帰ろうと鼻唄まじりに歩を進め、

「……ぅ、ん？」

――そして、最初の違和感に襲われた。
グラリ、と視界から音が鳴る。

「ぇ……？」

それは突然訪れた。
お酒なんて飲んだことないけど、多分、酩酊感っていうのはこんな感じ。
足がおぼつかない。地面を踏んでいるのかさえわからない。
視界がグラグラと頼りなく揺れた後、僕は迫ってくる地面を最後に見て、あっさりと意識を手放した。

「……？」

「どうした、アイズ」

二人の冒険者が5階層に足を踏み入れていた。ただし、上からではなく、下から上ってきて、だ。
目立った負傷もなく確固とした足取りを見せるアイズとリヴェリアの二人組は、37階層から約三日がかりで、ここまでの帰路の消化を果たしていた。
地上までの長い行程はもとより、四六時中モンスターの襲撃に脅かされていたにも関わらず、疲労の影は薄い。
もはや大した時間を要すことなくダンジョンからの帰還を目前にした彼女達であったが、ここにきて、先頭を歩いていたアイズの動きが止まった。
リヴェリアは、優美な金の髪が流れるその後ろ姿に問いかける。

「人が倒れてる」

「モンスターにやられたか」

ルームの中央でぽつねんと、一人の冒険者が転がっていた。
まるで行き倒れのように地面へ伏せているソレのもとに、二人は近付く。

「外傷は無し、治療および解毒の必要性も皆無……典型的な精神疲弊だな」

後先考えず魔法を使ったんだろう、と屈みこんで診察したリヴェリアは呆気なく結論を出した。

魔法は何の代償もなしにばかすかと行使できるものではない。体力の対をなす精神力（マインド）を削って発動させるのだ。

よくも気絶するまで自分を追い込めたものだと、リヴェリアは呆れながら感心してみせる。

一方でアイズは、膝に両手をついた中腰の姿勢で、じっとその冒険者の後頭部……白髪頭を見つめていた。

「この子……」

「何だ、知り合いかアイズ？」

「ううん、直接関わりはないけど……あの、前に話したミノタウロスの……」

「……なるほど。あの馬鹿者がそしった少年か」

リヴェリアは合点がいったと理解を示す。

彼女はアイズからこの少年――ベルがあの時酒場にいたことを聞いていた。

彼女自身は当時のやり取りを戒めていた側だったが、あの場でのベ

ルの存在を知らなかったとはいえ、すぐに止めようとしなかったことを反省している。ベルには悪いことをしたと。
そして自分以上に、ことの発端を作ってしまったこの少女は当時のことを引きずっていた。

「リヴェリア。私、この子に償いをしたい」

「……言いようは他にあるだろう」

「？」

「硬すぎる」と溜息をつくリヴェリアとは対照的に、アイズはその円らな瞳を二、三度瞬きさせる。
リヴェリアは何もわかっていない彼女の様子に、眉間に指を添えた末、もう何も言わないことにした。

「まぁ、この場を助けてやるのは当然の礼儀として……」

コクコク、と頷くアイズを隣に、リヴェリアは屈んだ姿勢のままベルを見つめる。
まだまだ起きそうにないことを確認すると、ちらりと横目で少女を見やった。

「……アイズ、今から言うことをこの少年にしてやれ。“償い”なら、恐らくそれで十分だ」

「何？」

リヴェリアは簡潔に内容を伝えた。

「……そんなことでいいの？」

「確証はないがな。だが、この場を守ってもやるんだ、これ以上尽くす義理もないだろう。……それに、お前のなら喜ばない男はいないさ」

「よく、わからないよ……」

わからなくてもいいさ、とリヴェリアは苦笑した。
少し考え込んでいるアイズを、しばし母親のように見つめながら、やがて顔を凛々しく構える。
いつもの顔付きに戻った彼女は立ち上がった。

「私は戻る。残っていてもややこしくなりそうだからな。けじめをつけたいのなら、二人きりでしろ」

「うん。ありがとう、リヴェリア」

ああ、とリヴェリアは相槌を打ってその場を後にする。
モンスターの存在など、はなから心配していなかった。

少年を守るのは、これ以上のない最強の守護者だったからだ。

まどろみに抱かれていた。
澄み切った水のような香りと、温かなお日様のような温もり。
肌を通じて感じる全ての気配が穏やかだった。
眠い。
ずっとこの居心地に抱かれていたい。

（……？）

そっと、髪を撫でられた。額に触れた細い指がくすぐったい。
優しい指使いだった。安心する。
閉じている瞼をおずおずと開けた。

（……おかあさん？）

顔も知らない、会ったこともない人の名前を唇で転がす。
瞳にぼんやりと映る輪郭の動きが、ぴたりと止まった。

（ごめんね。私は、君のお母さんじゃない……）

（……え）

“その人”は透き通った声で僕にそう応えた。
霞む目を見開く。
次第にはっきりとしてくる線の形。
最初に像を結んだのは眩い金の髪で、次は整った顔立ち。
最後は髪の色と同じ、金色の瞳。

「……」

「起きたかな……？」

目覚めました。頭は。
でも時間は止まったまま。
真っ白の頭の中、僕は、僕を見下ろしているこの人の顔にただ見入っていた。
頭の後ろが、柔らかい。温かい。
何をされているのか見当はついた。きっと、多分、膝枕。
この人の……ヴァレンシュタインさんの指が、また僕の髪を梳いた。
触れられた瞼が、熱い。

「……」

のろのろと上半身を起こした。頭の後ろから遠のく温もりがすごくもったいない気がしたけど、起きる。
一度彼女が視界から消える。代わりに散乱するモンスターの斬殺死体が目に飛び込んでくる。
見なかったことにして振り返った。ヴァレンシュタインさんは、まだ消えていなかった。

「……幻覚？」

「……幻覚じゃないよ」

むっ、とヴァレンシュタインさんの表情が変わる。
形の整った柳眉が少し斜めになった。
それから僕達はじっとお互いを見つめ合った。

藍色の瞳と金色の瞳が交差する。
無言の空間に彼女がちょっと困り出した頃。僕は首からみるみるうちに赤くなっていき。ヴァレンシュタインさんがその様子に気付いた時には。爛熟し過ぎた林檎ができあがっていた。
焦点は合わず、瞳が糸ミミズのようにグチャグチャになっている。
勢いよく、立ち上がる。

「――だぁあああ！？」

僕は、全力で駆け出した。

「……何で、いつも逃げちゃうの？」

聞く者が聞けば、それは確かに寂しそうな響きだった。

8話　リセット

「お願いします」

「はいよ」

装飾品（アミュレット）がカウンターに置かれた。

赤い帽子をかぶり白い髭をこれでもかと生やしたノームの店主は、翠の宝石の埋まるその首飾りを持って店の奥へ引っ込んでいく。

『ノームの万屋』と何のひねりもない名の骨董品店で、今日も些細な取引が交わされている。

カウンターの前にぽつんと立つホビットは、統一性のない商品の中に囲まれながら、一言も発さずたたずんでいた。

「ほいほい、お待たせ」

「結果は？」

「しっかり【ステイタス】補助……対毒効果が付与されておったよ。上等上等。そうだなぁ……４８０００ヴァリスでどうだい？」

店主の言葉にホビットは満足そうに頷いた。取引の成立だ。

「今日の支払いは現金かい？」

「いえ、いつものもので」

淡々とやり取りが進んでいく。

店内の片隅に傾いて置いてある大型時計（ホールクロック）が、彼等の間に針の音を落とす。

「ジジイ、こんなこと言える立派なノームじゃないんじゃが……」

「？」

おもむろに、ノーム店主は口を開いた。

瞬きをする顧客を尻目に、アミュレットを手で弄びながら、少し間を開けてから話し出す。

「あまり危険なことに、首、突っ込まんほうがいいぞ。今更かもしれんが」

「……」

「大して広まっちゃいないが、冒険者の間で噂になっとるよ。手癖の悪い“ホビット”に金品を掠め取られるって。時にはパーティ丸ごと出し抜かれるとか」

「……何が言いたいんですか？」

「いや、別にお前さんを疑っとるわけじゃないんじゃよ？　そのホ

ビットっちゅうのは女で、どうやら“複数犯”らしいからの。“男”であるお前さんにこんなこと言うのはお門違いなのはわかっとる」

ただのぅ、とノームの店主はふごふごと白髭を動かした。

「被害にあったって聞く品物のほとんど、ジジイがこの眼で目利きしたもんばっかだから……のう？　お友達とは程々に付き合っていた方がいいんじゃないかって、ジジイ、そんなこと思っちゃうんじゃ」

ちら、と具合が悪そうに横目で視線を投げる店主の言葉に、その“男”のホビットは、小生意気な表情で笑ってみせた。

「“悪いホビット”もいるみたいですね。でもこう言っては何ですが、冒険者様も人のことは言えないのではないですか？　彼等の多くがする振る舞いも、似たり寄ったりですよ。盗難とか、恫喝とか」

「それは、まぁ……」

「私ならこう言ってしまうかもしれません。『自分達のことを棚に上げるな』、と」

ホビットの客は、最後に意地悪く笑う。

「厳しいようですが、騙されてしまった方が悪いんです」

むぅ……、という店主の低い唸り声が、時計の鳴く音に吸い込まれていった。

「うぐぅ～……っ！」

「……何やってるんだい、ベル君」

僕はソファーに伏せた体勢で、両手で掴んだクッションをぐいぐいと引っ張り後頭部に押しつけていた。

文字通り頭隠して尻隠さずの僕の格好に神様がつっこんでくるけど、僕には答える余裕がない。
ヴァレンシュタインさんから、逃げ出してきてしまった。
何が起きたらあんな状況が完成するのかさっぱりわからないけど、はっきりしていることは、あれは全部現実だったということだ。
憧れの人が膝枕してくれたことも、そして僕の大馬鹿野郎がいつかと同じように、奇声をあげて全力逃走してしまったのも。
うあああああああぁぁぁ……死にたいぃぃぃ……。

「アレかい、おねしょでもしちゃったとか？」

「違いますよぉ～」

普段なら唾を飛ばして食ってかかるところだけど、情けない声しか出てこない。
代わりに、「おかあさん」とヴァレンシュタインさんへ言ってしまったことを思い出して、クッションから伸びる首筋が茹でダコのようになる。
爆発した羞恥と混乱によりあの人の前から脱兎の勢いで消えた後、自分がどこをどう駆け巡ったのか、僕は覚えていない。
気が付けば夜が明ける時間帯になっていて、気が付けばこのホームのドアにずるずると寄りかかり、へたり込んでいた。

「はぁ……何があったのか知らないけど、君もほどほど多感な子だよなぁ……」

多感どころじゃないです、神様。断腸ものです。
こんなこと誰にも話せない。いやそれ以前に、信じてもらえないだろう。
もしこの場で神様に暴露しても、きっとすごい悲しそうな目で、
『ベル君、大丈夫かい？　休んでいいんだよ？　あと、妄想も大概にしといた方がいい』
とか言われるに決まってる。酷いよ神様。
僕はのろのろと起き上った。疲弊しきっているのに顔は耳まで熱い。
何だか風邪をひいたみたいだ。
いや、あまり変わらないのかも……。

それから僕と神様は朝食をとった。
ずっと悶え苦しむ勢いだけど、今日という一日は始まってる。僕は無理矢理自分を奮起させた。
ヴァレンシュタインさんのことは、今日だけは忘れていたいなぁ。
……なんて、絶対無理なんだろうけど。
お礼と謝罪を伝えられる日は、いつか来るんだろうか。

「そうだ。ベル君、昨日のあの本を見せてくれよ。今日は昼まで暇なんだ」

「あ、はい。いいですよ」

テーブルで食後のお茶を飲んでいた僕は、棚に置いておいた本を取ってくるために席を立った。
神様の今日のシフトは午後からしい。【ヘファイストス・ファミリア】の方も加え露店のバイトも続けているみたいだけど……体、大丈夫なのかな？

僕はシルさんから借りた図巻のような本を神様に手渡した。

「ふぅん、見れば見るほど変わった本だ、な……ぁ？」

表紙をじろじろと見て、何ページか無造作に目を通していた神様は、不意に動きを止めた。

かと思うと、目尻をひくひくと痙攣させ始める。まるで自分のあずかり知らない借金の請求書を見せつけられたかのように。

え……？　な、なにっ？

「……コレは、魔導書（グリモア）じゃないか」

「ぐ、ぐりもあっ？」

耳にしたことのない単語を聞き返す。

嫌な予感は既に汗となって僕の顔に表れていた。

「な、何なんですか、ソレ……？」

「簡単に言っちゃうと、魔法の“強制発現書”……」

体中の汗腺という汗腺が開いたような気がした。

「発展アビリティなんて言ってもわからないと思うけど……とにかく『魔道』と『神秘』っていう超希少なスキルみたいなものを極めた者だけにしか作成できない、著述書なんだ……」

――意味わかっちゃいます、神様。

二種類の発展アビリティ修得者……つまりＬｖ．２以上の【ファミリア】構成員。そんじょそこらの冒険者より遥かに強い人の執筆作品……。

多分、「賢者様」って言われる伝説の御方と同じ職種のような人の、一筆入魂……。

僕は壊れた薄笑いを浮かべて石になる。

「君の魔法の発現はこれが理由か……。ちなみにベル君、これは一体どういう経緯で、今ここに存在しているんだい？」

「知り合いの人に、借りました……。誰かの“落し物”らしい、デス……」

「……」

「ネ、ネダンハ……」

「【ヘファイストス・ファミリア】の一級品武具と同等、あるいはそれ以上……」

ビキリッ、と罅割れが石の体に走る。

「ちなみに、一回読んだら効果は消失する。使い終わった後は、ただ重いだけの奇天烈書さ……」

終ワッタ。

魔法を外部からの干渉で発現させるという“奇跡”の詰まった貴重書を、ネコババしたうえに、使い捨てた。

ン千万ヴァリスの代物を、僕が、食べてしまった……。

重苦しい沈黙がホームに落ちる。

取り返しのつかないことをやらかした僕は絶望一色。

神様は、感情を殺した能面のような顔をうつむきがちに、やがて椅子を持ってトコトコと僕の前に運ぶ。

その上に乗って、両手を僕の肩にポンと置き、少し高い目線から語りかけてきた。

「いいかいベル君？　君は本の持ち主に“偶然”会った。そして本を“読む前に”その持ち主に直接返した。だから本は手元にない、間違っても使用済みの魔導書なんて“最初から”なかった……そういうことにするんだ」

「黒いですよ神様！？」

なに普通に誤魔化そうとしてるんですか！？

「ベル君、下界は綺麗事じゃまかり通らないことが沢山あるんだ。

ボクはそれをこの目で見てきた。住む場所を追い出されたり、ジャガ丸くんを買えないほどひもじい思いをしたり、下水道に閉じ込められたり……とんでもない額の負債を背負わされたり。世界は理不尽で満ち溢れているんだ」

「それはひとえに神様のせいですっ！？」

ていうか最後の不吉すぎる言葉ァ！？
何を隠してるんですか、神様！

「と、とにかくっ、この本を貸してくれちゃった人に、僕、事情を話してきます！」

「ベル君、止せっ、君は潔癖すぎるっ！　世界は神より気まぐれなんだぞ！」

「こんな時に名言生まないでください！？　隠したって、いつかバレるに決まってるじゃないですか！」

もう采は投げられちゃってる！
シルさんには本を読んだか尋ねられるだろうし、僕達がいくら嘘をついても、酒場に本の持ち主が現れた時点でアウト！
もうこうなったら、包み隠さず話して“ドゲザ”に賭けるしかないですよ！
僕は神様の制止を振り切って、本を片手にホームのドアを蹴り破った。

「シルさんはいますかっ！」

「おおう、少年じゃニャいか。おっはー、ニャ」

酒場「豊饒の女主人」の店先で、掃除をしているキャットピープルの店員さんに声をかける。

店員さん――確かクロエさんは、尻尾を背後でにょろにょろ振ってニヤニヤと笑いかけてきた。

「何ニャ、何ニャ？　挨拶も忘れてシルを呼べだニャんて、朝っぱらから何をやらかす気――」

「シルさんを呼んでくださいっ！！」

「――ニャア！？　わ、わかったニャ！？」

僕の剣幕と切羽詰まった叫び声に、クロエさんは飛び上がる。

普通じゃない僕の様子にただならぬものを感じ取ったのか、慌てて

店の中へ駆け込んでいった。ドアの鐘がピシャリと鳴る。
時間を置かずクロエさんは扉から顔だけ出して、ちょいちょいと手招きした。未だ準備中の店内に僕も踏み入る。

「おはようございます、ベルさん。どうかしたんですか？」

「シルさん！」

ぱたぱたと小走りでキッチンの方から出てきたシルさんは、急いで来たのか木造りのトレイを手に持ったままだった。
鈍色の髪の上に三角巾を装備したシルさんに、僕は詰め寄ってことのあらましを説明する。
ちょっと戸惑い気味に笑みを浮かべていたシルさんは、話が進むうちに目を丸くし、そのうちいよいよ顔色を変え出して……僕が言葉を終える頃には、いつぞやのようにそっと目を逸らした。

「……それは、大変なことをしてしまいましたね、ベルさん」

「ちょっとシルさーんッ！？　何でさも他人ごとみたいに言ってるんですか！？」

また棒読み入ってるし！
不自然なその態度に僕は声を散らした。僕を生贄の羊として差し出す気ですか、と。
シルさんは手にしているトレイを首の辺りまで持ってくると、顔の下半分を隠し、上目遣いで僕を見つめてくる。

「やっぱり、ダメですか？」

「すっごく可愛いですけどダメッ！」

顔を赤くしながらシルさんの哀願を両断する。本当にいい魔女してるよなぁこの人！

そうこう僕達が問答を繰り広げていると、騒ぎを聞きつけてか、なんと女将のミアさんが姿を現した。

ドワーフの中でも巨体を誇るミアさんは、その茶色い髪を一本にまとめた三つ編みを揺らしながら、僕の手の中から本を抜き取って、パラパラと中身を確認する。

「ん、確かにグリモアだねえ……でもま、読んじまったもんは仕方がない。坊主、気にするのは止しな」

「ええっ！？　で、でもっ……」

「こんなものを“どうか読んでください”とばかりに店へ置いていったヤツが悪い。坊主が読まなくたって、貴重な魔導書を見つけたら、自分が持ち主だと嘘をついてまで誰かが目を通していたよ。コレはそういうモンさ」

妙に説得力のある言葉に僕は口を閉口させた。

ミアさんは、ふんと鼻息を鳴らす。

「手放しちまった時点でコレの持ち主も覚悟はしているさ。坊主だって金の詰まった財布を無くしたら、そっくりそのまま返ってくるなんて思わないだろう？」

「それは……」

「そういうことだよ。気にするだけムダムダ。得したくらいに思って、さっさと忘れちまいな」

ミアさんは堂々とそう言ってのけてしまった。

僕が隣のシルさんを見ると、彼女も困ったような顔で苦笑して、首を横に傾けている。

いまいち煮え切らないというか、悪いことをした後のしこりのような物が残っているというか、とにかく僕が後味悪そうな顔をしていると、ミアさんはジロリと大きな横目で睨んできた。

曰く、「男だったらグズグズ言ってんじゃないよ！」。

もう普通に叩きつけられた大声に、僕は反射的に直立不動をして「はいぃ！？」と了解してしまった。

のっしのっしカウンターの奥に消えていくミアさんの背中を見送って、僕は肩の緊張を解く。

本当にこれでいいのかなぁ……。

手を頭にやりながら、僕はちょっと複雑な気分だった。

「おーい、シルニャー。お弁当を忘れてるニャー！」

と、これまでのやり取りに気付いていなかったのか、キッチンの方からキャットピープルのシェフがバスケットを持ってやって来た。
ちなみにクロエさんではない。
ここのお店キャットピープルが多いよなぁなんてぼんやり考えていると、そのシェフは、僕達の目の前で見事に後ろ足を前足に引っかけて――宙を飛んだ。

「え゛」

「あっ」

「ニョ！？」

何でもないところでずっこけた、と僕が衝撃を受けている間にも、シェフとバスケットは床に吸い込まれていく。
シルさんの心情を一言で表している呟きが虚しく響く中、ゆっくりとバスケットはその中身をぶちまける――

「世話をかけさせないで欲しい」

――ことはなかった。
リューさんがバスケットを見事にキャッチし、寸前で阻止したのだ。

「ふおおおっ！　リュー、マジ助かったニャー！　あのままだったらミャーはシルにフルボッコにされてたニャー！」

「そんなことしませんっ！」

「メイ、貴方はあまり動かない方がいい。持ち運ぶのは私達に任せて、大人しく美味しい料理を作っていてください。……あんまりな言い方ですが、貴方が動くと私達の仕事が増える」

シルさんと同じ若葉色のワンピースとサロンエプロン。
ふわりと店の制服を膨らませる細身のエルフは、バスケットの他にも自分と同じ体格のキャットピープルを片手で抱え込んでいた。
どこにそんな力があるのか、両手が塞がっていても体のバランスは少しも崩れていない。
いやそれよりも――“速かった”。
虚を突かれたといっても全く反応できなかった僕と違って、リューさんはまさに風のように颯爽と対応してみせた。
その流麗な身のこなしに鳥肌が立つ一方で、僕は時間が立った今でも目が奪われたままだった。

「シル、どうぞ」

「ありがとう、リュー」

バスケットを手渡すシルさんとリューさんを視界に、僕は『この人にならもしかして……』と少し自分勝手な希望を抱いてしまった。
見た限り【ファミリア】に所属していない……【ファミリア】に関する目立った活動をしていないこの人になら……戦い方を教われるかもしれない。

あわよくば、僕達の【ヘスティア・ファミリア】に……。
少し目論みめいたことを考えているのを自覚しながら、僕はごくりと喉を鳴らして、一先ずリューさんに尋ねることをしようとした。

『ウニャァー!?　リュー、助けてニャー!?』

『皿がっ、皿の塔が崩れるニャー!!　ババルしちゃうニャー!』

『誰が上手いこと言えって言ったのよ!　ちょ、リュー、ごめんっ本当にヘルプー!?』

「……やれやれ」

しかし僕の声は先方に先を越され、出番を失ってしまった。
リューさんは軽い溜息をついて、タンッ!　と足を鳴らす。
一跳躍でカウンターを軽やかに飛び越えてしまい、慌ただしいキッチンの収拾へ向かった。シェフのキャットピープルも急いでその後を追う。転んだ。
僕とシルさんだけがその場に取り残された。

「……えーと」

「あはは……リューはすごい動けるから、みんなに頼りにされてるんです」

だろうなぁ、と僕は心の中で相槌を打った。

前に起きた路地裏での出来事も知っているだけに、荒事でも何でも、彼女一人がいれば片がついてしまうように思える。

「あの、シルさん。リューさんは、その、冒険者だったりするんですか……？」

「はい、そうだったみたいです。ちょっと今は……所属していた【ファミリア】から独立しているんですけど……」

ミアさんと同じってことかな？

以前に聞いた、この店の従業員は多くがわけあり、というシルさんの言葉を僕は思い返した。

（時間は……ないか）

壁に設置されている時計を見て、リリとの待ち合わせが近付いていることを確認する。

今日はちゃんとダンジョン探索に合流する筈だから、遅刻して向かうのは悪い。

リューさんとちょっと話し合ってみたかったんだけど……。

「どうしたんですか、ベルさん？」

「いやぁ……リューさんって、冒険者のとして腕前が僕よりずっと高そうなんで、もしよかったら色々教えてもらおうかな、なんて…

…」

「……」

ついつい胸の内を喋ってしまった僕を、シルさんはじっと見つめてきた。

こちらの心を見透かすかのように視線を向けていたかと思うと、次にはにこっと微笑む。

「私がリューに言って、話をつけておきましょうか？」

「えっ？」

「色々あって、リューはそういうことに対しては少し気難しいところがあるんですけど、私からお願いすれば多分聞いてくれると思います。ベルさんに不都合がないようなら、どうでしょう？」

ちょっと、揺れた。魅力的な案に聞こえたのだ。

シルさんの話が確かなら、リューさんに約束を取り付けるにはこれ以上効果的なことはないのだろう。

正直、非常に助かる申し出だけど……

「……ありがとうございます。でも、やっぱり自分の口で言います。こういうの、人に任せちゃいけないことだと思いますから」

「……そうですか。ベルさんがそういうなら」

すいません、とせっかくの親切を断ってしまったことを謝罪する。
シルさんは何でもないように許してくれた。

「じゃあ、事情だけはリューに話しておきます。ベルさんが冒険者として指導を受けたいって」

「何から何まですいません、本当にありがとうございます。じゃあ、僕はこれで」

「ベルさん」

「はい？」

「今日も、受け取ってもらえますか？」

「……い、いただきます」

照れ臭さそうな笑みと一緒に両手で差し出されるバスケットを、どもりながら受け取った。
僕はいつもこのたんびに気恥かしい思いをするけど、シルさんもまた、この時は本当に嬉しそうだった。
何ていうか、普段とは違って素のままの喜びを滲ませているような……いや、いつもは喜んでいないっていうわけじゃないんだけど…
…何だろう、上手く言葉では言い表せない。
僕は赤くなりながらもう一度感謝を告げ、今度こそ「豊饒の女主人」

を後にした。
一旦ホームに戻って旧魔導書を置き、装備品を身につける。
神様に一部始終を説明してから、「いってらっしゃい」と穏やかな声で送り出された。
本日行ったり来たりばかりしている北西のメインストリートを進み、人ごみに紛れている他の冒険者達がそうするように、中央広場（セントラルパーク）へ出る。
晴れ渡る空の下、今日も広大な円形広場には、完全武装した戦士達が賑わっていた。

（まだ来てないのかな……？）

いつもなら、僕がやって来る北西のメインストリートの正面……北西の位置にあたるバベルの門にリリは立っているんだけど、視界の中にはそれらしきホビットはいない。
珍しいなと思いつつ門の前まで赴こうとすると、その途中、ある光景が偶然目に入った。
広葉樹がぽつぽつと等間隔で植えられた中央広場の一角。
木洩れ日に濡れ、そよそよと葉が風に揺れる気持ち良さそうな木陰に、リリと冒険者らしき男達がいた。
大の三人の男が小さなリリを取り囲んでいる。彼等は形相を作って何事かを言い放っていて、リリの方はというと必死に顔を横に振っていた。決していい雰囲気じゃない。
もしかして、【ソーマ・ファミリア】の構成員達？
僕は泡を食ってそちらへ向かった。他【ファミリア】の事情に干渉するのはご法度なんて、もう言ってられないっ。見過ごせない！

「……いいからっ……寄越せっ！」

「もうっ……ない……ですっ！　本当に……！」

言い争っている声が届いてくる。
僕は彼等の死角となっている広葉樹を避けて、すぐさまその場に飛び込もうとした。

「おい」

「！」

けれど、突然。
僕の行動を邪魔するかのように肩を掴まれる。
驚きに見舞われながらばっと振り返った。
男の冒険者。長大な剣を背中に装備した、体格のいい黒い髪のヒューマンだ。

（って、この人……）

「やっぱりあの時のガキか……まぁいい、聞くぜ。お前、あのホビットとつるんでんのか？」

この声と口調、間違いない。
結構前に路地裏で出くわした、あの冒険者の男だ。

「オイ、さっさと答えやがれ。お前、あのホビットを雇ってんのか？」

「……あの子は、貴方が追いかけていたホビットとは違う子ですよ」

苛ついた表情をする目の前の青年に、僕は咄嗟にそう答えていた。
半ば反射的だったと言っていい。
勘違いしないでください、とそう言ったつもりだったけど……男は唇を歪めて、嘲笑った。

「バァカ……と言ってやりてえが、思うのはてめえの勝手だな。せいぜい間抜けを演じてろ」

吐かれた暴言に思うことはあったけど、それよりその口振りが気にかかった。
まるで僕は騙されているというような指摘。この人の言葉を鵜呑みにするわけじゃないけど……。
僕が怪訝そうな顔をしていると、男は嘲笑を引っ込め顔付きを改めた。

「それよりお前、俺に協力しろ。……あのホビットを嵌めるんだ」

「なっ……」

「タダとは言わねえよ。報酬は払ってやるし、アイツから金を巻き上げられたら、分け前もくれてやる」

男は本気でそう言っているようだった。
僕はいきなりのことに言葉を失ってしまう。

「お前はいつもを装ってあのホビットとダンジョンにもぐればいい。後は適当に別れて、アイツを孤立させろ。後は俺がやる。どうってことはねえ、簡単だろ？」

口の端を裂いて男は思いっきり笑った。
嫌な笑い方。僕がこれまで触れたことのない、卑劣な臭み。
寒気と嫌悪が体中を駆け巡る一方、僕は、拳を一杯に握りしめていた。

「何で、そんなことを言うんですかっ……？」

「ああ？　うるせえよ、てめえは素直にハイって頷けばいいんだ。たったこれだけで金が手に入るんだ、上手い話じゃねえか」

はっ、と男は大きくせせら笑った。

「よぉく考えろ。アレは“ただの”サポーターだぜ？　大した役にも立ちはしねえ能無しが居なくなったって、痛くも痒くもねえだろ

？　搾れるだけ搾って、後は捨てちまばいい」

沸点が限界を越えた。
瞼の裏が熱い。
あの路地裏の時とは違う。怖気づく暇もなく、決定的な怒りが僕の体を占領した。

「絶対にっ、嫌だッ……！」

「クソガキがぁ……！」

男も顔を歪めて凄味を利かせてくるが、僕も眉間にありったけの力を入れる。
剣呑な空気が僕達を包み込む。充満する怒気に怯えるように、頭上で広がっている木の枝葉がざわざわと揺れた。
しばらく睨み合いが交わされ、やがて男は大きな舌打ちをして踵を返す。
目元に固まる険を取り除けないまま、僕は遠ざかっていくその背中を見続けていた。

「……ベル様？」

「！」

背後からの呟き。

吸い込まれるようにそちらを見ると、すぐ後ろでリリが呆然と僕のことを見上げていた。
それまで燃えていた感情が萎え、僕は不意の出来事に取り乱す。

「リ、リリっ？　いつからそこに？」

「……ちょうど今ですけど……あの冒険者様と、何をお話していらっしゃったんですか？」

「えーと……いやぁ、ちょっといちゃもんをつけられちゃって……」

頬をかきながら何とか出まかせを口にした。
目の前の本人を陥れるための交渉だなんて、言える筈がない。
胸中穏やかじゃない僕のことをじっと見るリリは、口を引き結んで少し暗い表情をしている。

「そ、そうだっ！　何だか絡まれていたみたいだけど、リリは大丈夫だった！？」

「見ていらっしゃったんですか……。安心してください、リリはこの通り無事ですから」

リリはくるりとその場で回り、最後にフードの下で微笑んだ。
乱暴された跡はなかったので僕も安心する。
何かを取られたということもなく、本当に危害は加えられなかったようだ。

「リリ、あの人達は……」

「シシシシッ。私もベル様と一緒でいちゃもんをつけられてしまいました。リリもベル様も、やはり弱っちく見えてしまうんでしょうか？」

僕の声は遮られた。

冗談を織り交ぜながらニコニコと笑うリリは、あきらかにこれ以上の言及を拒んでいる。

「さぁ、行きましょうベル様。リリは昨日付いていけなかったので、今日はベル様のご活躍を期待させてもらいますよ？」

僕の脇を通ってリリはバベルへ足を向けた。

こっちに振り返ってみせると、揺れる前髪からのぞく大きな焦げ茶色の瞳が、何事もなかったように目尻を緩ませている。

僕もそれ以上は何も言わなかった。口を閉ざし、黙ってリリの後を付いていく。

今は前を向いてしまったリリがどんな顔をしているのか、騒がしい雑踏に耳を塞がれながら、僕はずっと考えていた。

「……もう、潮時かぁ」

「あれ、エイナもう上がるの？」

「うん。そのつもり」

同僚の言葉にエイナは頷いた。

ギルド本部の窓口。

冒険者の受付ロビーであるこの一階フロアは、床も壁も黒大理石で覆われ一種の厳粛とした空気が流れている。長方形の窓から差し込む西日が、邸宅並みの広い室内を照らし出していた。

僅かだが姿の見受けられる冒険者達は、設けられた長椅子に腰かけていたり、掲示板の貼り紙を見ていたりと行動は様々だ。担当の職員と一緒に壁際の面談用ボックスに足を運ぶ者もいる。

窓口の方からそのロビーの光景を眺めながら、エイナは自分のデスクを一通り整理して席を立った。

「うわ、定時ぴったし！？　あのエイナがこんな時間に仕事あがりなんて……うそっ、まさか、男っ！？」

「何でそうなるかなぁ……」

ないないと手をぱたぱたと振って、苦笑しながらロビーを後にする。お先に失礼します、と最後に振り返って職員用の裏口を出ていった。扉を閉めた後、『嘘だぁエイナちゃーんっ！？』やら『俺じゃ駄目なのかぁチュール！？』とか、自分の名前を呼ばれたような気がして、エイナは不思議そうに首を傾げた。

「さーて……」

ギルド支給のこじゃれた靴をトッ、トッと鳴らしながら、エイナは住まいとは逆方面に歩み出す。

ギルド職員用の女子寮は本部から確認できるほど近隣にあるのだが、彼女の目指す場所は違った。

エイナの感覚からすれば早引きも当然のこの時間に、ギルドをそそくさと出たのはわけがある。

彼女は肩にかけるバッグを持ち直して北西のメインストリートを歩んだ。

夕暮れに染まるこの通りは、露店はほとんどなく、比較的大きな商店が立ち並んでいる。ギルド本部が設置されている大通りとあって、冒険者関連の店がひしめき合っているためだ。界隈の者達からは、

数あるメインストリートの中でも「冒険者通り」などとも呼ばれている。道幅も一際広い。
重装の鎧を身に纏った冒険者一団と危うげなくすれ違ってゆく。大勢の亜人達が踏んでいく敷きつめられた石畳は、夕日の色に染まっていた。

（結局、本部の資料だけじゃあ、【ソーマ・ファミリア】の情報は公式見解のものしかわからなかった……）

エイナはここ数日、【ソーマ・ファミリア】の内部事情を探る真似をしていた。
何故か、と問われれば、気になるから、という答えが簡潔に返ってくる。
より詳しく仔細に明かすなら、「ベルが厄介事に巻き込まれないか不安だから」という補足がついてくるが。

（【ソーマ・ファミリア】の担当者に聞いてもみんな似たようなことしか言わないし……ちょっと自分の足で頑張ってみるか）

ギルドの保管する参考文献から始まり、人づてに情報をかき集めてみても、成果はあまりかんばしくはなかった。
【ソーマ・ファミリア】の結成当初の記録を洗いざらい調べても不審な点は見られず――むしろ運営自体は他【ファミリア】と比べて粛々としている――、仲間内の答えも異常な金への執着が前面に出るばかりで、聞き込みとしては大して前進していない。
構成員達を遮二無二にさせる異様な雰囲気がある、という表面的事

実だけに留まっている。

（そもそも違法行為に走る兆候があったら、ギルドも黙っている筈ないんだよね。他の神の【ファミリア】だって、自分の領域（テリトリ）を荒らされるような真似を見過ごすわけないだろうし……）

【ファミリア】の内部事情や運営情報の公開は最低限しか求めていないギルドではあるが、怪しい活動は行われていないか常に目を皿にしている。

もしその【ファミリア】を不穏分子と見なしたなら――市民に害を及ばせたり明らかなルール違反を犯したなら――、オラリオの管理者の名目上、必ず制裁に乗り出すことになる。

火の粉が飛べば、他の【ファミリア】も容赦なく牙を剥くことだろう。

というか、例え一大事に繋がらなくとも、神達が“面白そうな”他【ファミリア】の動向を見逃す筈がないのだ。対岸の火事だったとしても、彼等は確実に首を突っ込む。

そのような一連の事柄が今までなかったということは、少なくとも、事件性を臭わす前兆は【ソーマ・ファミリア】は孕んでいないということになる。

（ギルドや【ファミリア】がまるまる動き出すような大げさな話じゃあない……やっぱり【ソーマ・ファミリア】の内部に限った範囲……）

きな臭いという印象、問題点を列挙するならば、金への執着と……

【ファミリア】自体の規模か。
神ソーマの評判に相応しくないほどの大量の構成員、信者があの【ファミリア】にはいる。
一応、不自然な要素と捉えることはできるものだ。

（【ファミリア】の人員の確保、規模拡大のために集団洗脳……って、やるのかなぁ、あの神達がそんなことを？）

エイナの神達のイメージ像は、掴み所のないひょうきんに過ぎる超越者達。これに尽きる。
神ソーマの性質も把握していないし、切羽詰まった神ならもしかすると悪事に手を染めることも無きにしも非ずといったところだが、流石にそれはナンセンスのように思えた。
神達の取り決めたルールを破れば、即刻天界へ強制送還か、問答無用で始末されるらしい。そのようなリスクを冒すぐらいなら、彼等は泥をすすろうが黙々と自分の体を資本にして働き出すだろう。
第一に、あの生粋の自由人である神達がそんなセコイことを行うとは、エイナはとてもではないが想像できなかった。

（神ソーマに原因がないとしたら……いや誘因だけが何かしらあったとしたら、【ファミリア】自体が……構成員達が暴走に走っちゃってる？）

そこまで思考が進んだところで、エイナの歩みが一時止まった。
酒場が視界に現れたのだ。

「う〜ん……ここに入るのが一番いいんだろうけど……」

古今東西、情報収集するなら酒場と相場は決まっている。
しかし、エイナには少し気が引ける場所でもあった。
制服を着たまま仕事の帰りに直行するのはいかがなものかという理由もある。ギルド職員である自分が探りを入れることで【ソーマ・ファミリア】に風評被害が及ぶという懸念もある。
だが一番の理由は、エイナが女ということ――種族関係ない男達が、彼女を放っておかないということだ。

「あはは……やっぱダメだ」

もしこのまま一人でエイナが酒場に入ろうものなら、冒険者達は花に群がる蜂のようにたかり始めるだろう。
ココはエイナにとって鬼門だ。それこそ、おいでませと手を振って狼が舌なめずりをしているように見えるくらいには。何も知らない赤頭巾になるつもりは毛頭ない。
エイナは歩みを再開させる。

（自惚れているわけじゃないんだけど……）

エイナは自分の容姿にそれなりの自覚がある。
他種族の間でも美女美男子と誉め称えられるエルフの血を半分引いているのだ、男達も目の色を変えて自分を放っておこうとしないの

も納得できる。
後は、まぁ、言い寄られたこともぼちぼち……どころか、数え切れないほど経験してきたからか。

（別に、お付き合することに鈍感なわけじゃないんだけどなぁ……）

本部を出る際、男かと勘ぐり驚いていた同僚の顔を思い出す。
そこまでエイナは生娘を気取ってはいないつもりだ。彼女ももう十九、交際している異性がいても何らおかしくない。彼女自身、ちょっと物欲しげに思う時だってあるにはある。
仕事欲に完敗している節があるが。

（でも、なかなか『この人だ！』っていう人がいないんだよね……）

エイナに詰め寄ってくる相手は大抵“男らしい男達”だった。
早い話が冒険者達なのだが、彼等はみなたくましく精悍だ。エイナは振り回す勢いでぐいぐい引っ張ってくれそうな、そんな頼りがいのある者達ばかり。
そんな彼等だから、ちょっとエイナには気後れしてしまうところがあった。

（もうちょっと頼りなくてもいいかなー、なんて……）

自他ともに世話焼きであると認めるだけあって、こう、もうちょっ

と甲斐性がない方が好ましいかもしれない、とエイナはそんな身も蓋もないことを思ってしまう。
一人じゃ困って困って困っていて、それでも何とか一人で頑張ろうとしていて、結局最後にはとぼとぼとエイナのもとにやってくるような、そんな人物。
エイナもしょうがないなぁと笑いながら世話を焼き、二人で協力し合いながら築く持ちつ持たれつの関係。
自分を頼ってくれる、というより保護欲をくすぐるくらいの相手が、エイナにはちょうどいい。

（あーあ、どこかにベル君みたいな男の人いないかなー……）

うん、それだ。
一番ぴったり来る。言葉にしてみてよくわかった。
そうだよ私ベル君みたいな男の人がいいんだよーあははー、とエイナはこれ以上のない納得を得た。

（……って）

おいおい、と虚空に片手で突っ込みを入れる。
“ベルみたいな男”では――もうまんまではないか。
何もないところで勝手に赤くなり、誰もいないところで「あは、あははははっ！？」と勝手に笑い出すエイナだった。

「あっ、着いた着いた！」

自分一人なのにわざと過ぎるくらい声を張った。顔の熱が冷めきらないまま、ごつごつとした加工石で構築された二階建ての道具屋（アイテムショップ）へ入る。

掲げられている店名の看板は、『リーテイル』。

板張りの店内に足を踏み入れた瞬間、エイナを包み込んだのはひんやりとした空気の流れだった。

魔力を冷気変換する魔石装置の完備はよしと、ギルド職員の性か、入店一番に査察思考が入ってしまった。

エイナがこの場所に足を運んだ理由は、【ソーマ・ファミリア】が販売している酒を調べるためだ。

食いつく選択肢がこれくらいしか残されていないこともあるが、もし洗脳の類を疑ってかかるのなら、不自然に少量の酒を売り込んでいるのはどことなく臭う。一度調べてみる価値は少なからずあるように思えた。

エイナ自身これで何かがわかるとは思ってはいないが、当初の予定通りにことを進めるようにした。

「ずっと前に来たより品数が増えたかな？」

硝子より遥かに強度を増した透明のクリスタルケースが、店内の中央を陣取るように縦横に並んでいる。背の高いそれら陳列棚をエイナは首を振って見て回った。

道具屋だけあって陳列棚に収まっている品物は多い。

丸底フラスコに溜まっている青い液体はポーション、細い試験管の緑の液体は解毒薬、洒落たデザインのボトルに入っているのはエリ

クサー……。

冒険者が使う服用型のアイテムは全て液状の形を取っている。アイテムを製造するのは各【ファミリア】の『神秘』の発展アビリティを持った構成員で、冒険者のアイテムはほとんどが彼等の手によって作り出されていた。

原材料と彼等独自の製法でアイテムに体力回復等の属性を付与させることができ、基本的に、魔剣を始めとした強化武器を作り出す『鍛治』のアビリティと似通った部分がある。

効果のほどと風味等は【ファミリア】によってそれぞれ違い、値段の示す通り高価なものがより品質が良いと評価されている。

ポーション一つ取っても５００ヴァリスのものもあれば１００００ヴァリスのものもあり、ピンからキリまであった。

エイナは酒屋や酒蔵に明るくないので、【ファミリア】の商品なら基本的に取り扱っている道具屋を代わりにすることにした。

この『リーテイル』は「冒険者通り」に面する敷地を勝ち取っただけあって、冒険者を抱える【ファミリア】の間で評判は高い。品揃えも多い方だ。

エイナは冒険者用アイテムの棚を一通り見た後、「グロサリー」と矢印で表示される店舗の隅へ向かった。

（わっ！　あったあった！）

多くのボトルが並ぶ黒色の酒棚の中で、【ソーマ・ファミリア】のプレートを見つけエイナははしゃぐ。

ケースに入っているのは、飾り気のない本当にただのガラス瓶と言ったところ。中身も透明だ。贔屓目をしても、あまり美味しそうには見えない。

しかし他の酒が多く準備されている中、【ソーマ・ファミリア】のものは一つしかなく、需要が高いというのは事実のようだった。
最後の一本ということは、きっと運が良かったのだろう。

（……『ソーマ』？）

やる気の全く感じられない白紙のラベルを見て、エイナはそのエメラルド色の瞳を瞬きさせる。
主神と同じ酒の銘柄……神ソーマ自身が名付けたのだろうか？
エイナは小首を傾げながら、ケースから商品を取り出してもらおうと店員を呼ぼうとして、値段をふと見た。
３３０００ヴァリス。
ごんっ！　とエイナは額を棚に打ちつける。

（え、えぇ～～～～～！？　た、ただのお酒なのに！？）

――信じられない！　ベル君の装備一式より高いよ！
エイナは赤くなったおでこを擦りながらまじまじと「ソーマ」を見た。
装備品を含めて冒険者の扱うアイテムの相場は高い。ものにもよるが、一般市民の雑貨品とは元々の位が違うのだ。
冒険者用のアイテムと同等かそれ以上の価格となると、とてもではないが一般人がおいそれと手を出せる代物ではない。
嗜好品のレベルとして桁が違い過ぎる。

（て、手持ちのお金、こんな持ってきてるわけない……）

ギルドの給料は並の冒険者の収入と比べて負けず劣らず高給だが、流石に３００００ヴァリスは常に懐に入れて持ち歩く額ではない。それにまず、一発購入すればエイナの生計が少し際どいところまで逼迫する。つい先日ベルに防具をプレゼントしたばかりなのだ。陳列棚の目の前で、エイナはここぞとばかりにうんうんと懊悩した。

「……エイナか？」

「えっ？」

耳朶を撫でる冴えた声。

呼びかけられた自分の名前に、エイナはくるっと振り返る。

背後にいたのは、女性としては長身のエルフの麗人だった。

きらきらと輝く翡翠色の髪を背中のあたりまで伸ばし、一本に縛っている。美しい長髪をくぐって伸びる耳は、木の葉のように尖って上向いていた。

容姿に優れたエルフの中でも、その見目は仙姿玉質とした美しさを誇っていた。超俗しているといってもいい。

常態でも凛とした気品を絶えず身に纏う彼女のその瞳の色は、エイナのものと同じ、いや更に澄み切った緑玉色だ。

エイナは今度こそ仰天した。

「リ、リヴェリア様！？」

「やはりお前か……。久しいな、少し見ない間に随分と綺麗になった。見違えたぞ」

笑み、とは言えるほどではないが、口元は柔く曲げるリヴェリア・リヨス・アールヴに、エイナは急いで畏まった。

「あ、ありがとうございますっ！　か、過分なお言葉、身に沁みる思いでっ……！」

「……その言葉遣いは止せ。ここはエルフの里ではないんだ。そもそも、お前は里の生まれですらあるまい。敬われる覚えはないぞ」

「で、ですが、高貴な御方には畏敬の心を忘れてはならないと、母に……」

「あのアイナでさえ娘にそのようなことを吹き込むか……。嘆かわしいな、共に里を逃げ出した仲だというのに」

ふぅ、と見てる方が溜息をつきたくなるような吐息をし、リヴェリアはエイナをじろっと見つめる。

「最低限の弁えは確かに心得るべきものだが、それ以上は不要だ。私はあの檻の中のような堅苦しい扱いには心底うんざりしている。私のことを敬うと言うのなら、まず私の心中を汲め」

「そ、そんな……」

リヴェリアの威圧混じりの言葉にエイナはたじたじになってしまう。
確かにエイナは、世界に大きく開いた多種族入り乱れる自由都市の生まれで、エルフの里は知識でしか知らないが……目の前にいる相手は、王族（ハイエルフ）だ。
自分の体の中に流れる半分の血が、勝手に頭を下げさせてしまう。

「何も完全に砕けろとは言っていない。過敏になるな、そう言っている」

「わ、わかりました……」

「よし」

満足気にするリヴェリアとは逆にエイナの方は気が気ではない。眉が変な方向に曲がってしまう。
参っちゃったなぁという言葉を胸の裏に隠しつつ、けれどそこで意識を切り換えて、改めてこの再会を喜ぶことにした。
子供の頃、オラリオとは違う自由都市――エイナの生まれ故郷で何度か会ったきり、リヴェリアとは顔を合わせていなかった。
エイナの方はギルドに就職してからその役職柄、すぐにリヴェリアの存在を知ることになったが、仕事の都合上、そう易々と会いにいける関係ではなくなってしまったのだ。
会いにいけないというわけでもなかったのだが、尻込んでしまったのである。

「元気そうで何よりだ。まさかギルドに身を置いていたとはな」

「すいません、連絡をしようとは思っていたんですが……」

「気にするな。私もこの都市に来てからはダンジョンにもぐる毎日だ、他のことにかまける余裕はなかった。ずるずると後回しになっていただろう」

リヴェリアは頷く仕草一つとっても洗練されていた。
エイナも自分の母親から品の良いたたずまいを見て育った口だが、やはり王族出身の彼女とは比べるまでもない。
少し次元が違い過ぎる。

「リヴェリア様はどうしてここに？」

「なに、先日のダンジョン探索でアイテムを切らしてしまってな。その補充だ」

「リヴェリア様は回復魔法が使えた筈……と聞くのは愚問ですね」

「ああ。魔法も万能ではないからな。アイテムで間に合うなら、それに越したことはない。エイナの方はどうした？」

「あっ……」

問われて自分の目的を思い出した。
といっても、実際身動きが取れない状態だ。思い出したからといっ

てどうすることもできない。
リヴェリアに「話してみろ」と促されたので、エイナは少しためらいながら、【ソーマ・ファミリア】の核心には触れないように話すことにする。

「ほう、この酒か。私の【ファミリア】の仲間も愛好している者が多いな」

「え……あ、あのっ、リヴェリア様？　このお酒を嗜んでいる方で、依存症とか、少し普通じゃない症状を引き起こしている方はいらっしゃいますか？」

「私の目には酒飲みなどみな普通ではないように見えるが……まぁ、常軌を逸した素振りを見せる者はいないな。何故そんなことを聞く？」

「ええっと……その、友人にこのお酒を勧められたんですけど、“あの”【ソーマ・ファミリア】のお酒と聞いて、ちょっと偏見が……」

少しだけ事実を織り交ぜて話した。
質問した内容の誤魔化しが利きにくかったのと、リヴェリアに尋ねてみることで、何かしら進展が得られるかもしれないと思ったからだ。

「なるほど、そういうことか……。確かに、あの【ファミリア】の団員の言動は薄ら寒いものがあると聞くな」

「リヴェリア様は、何かご存じではありませんか？」

少し期待をして、少し声を弾ませてしまった。
それがいけなかったのか。リヴェリアは心持ち踏み込んでくるエイナを、片方の目を瞑ってじっと凝視した。
うっ、とエイナは詰まる。しまった、とも思った。
リヴェリアは鋭い。心の機微を容易く看破し、相手の事情を見抜いてくる。幼少時、彼女の前だけでは隠し事ができなかった。
【ソーマ・ファミリア】を詮索していることがバレてしまっただろうか。エイナは冷や汗を湛えながらリヴェリアの反応を待つ。

「……まぁいい。生憎だが、私はあの【ファミリア】について知っていることはあまりない。それこそお前と同じか、それ以下だろうな」

「そ、そうですか」

しっかり感付かれてしまっているが、言及がなかったことにエイナは胸をなで下ろす。
リヴェリアはそんな彼女をしばらく観察してから、口を開いた。

「私は知らないが……【ソーマ・ファミリア】の事情を、少なからず知っているであろう人物なら心当たりがある」

「……えっ？」

「付いてくるか？　私達の【ファミリア】のホームに」

長邸。
言い表すならば、そんな言葉だった。

（聞いてはいたけど……流石、オラリオでも屈指のダンジョン系【ファミリア】のホーム……）

都市オラリオの最北端。
メインストリートから一つ外れた街路の脇にそれはあった。
狭い敷地面積に無理矢理築かれたような長大な館。高層の塔が槍衾

のようにいくつも重なり、お互いを補完し合っている。各塔の屋根が剣山を作っていた。
赤銅色の館の高さは流石にバベルの足元にも及ばないが、見上げているだけで首が痛くなってくるほど。最も背の高い中央塔が、黒ずんだ天頂部分を夕闇の色に染めている。
炎から削り出されたような邸宅。
そんな表現がしっくり来た。

「リヴェリアさん、お帰りなさい」

「すいません、そちらの方は……ギルドの？」

「友人の娘なんだ。大目に見てやってほしい」

男女二名の門番に話をつけ、エイナはリヴェリアとともに通される。
並べば姉妹に違いない二人の外見であるが、その実、年の差は倍ほども離れている。
エルフは亜人の中でも比較的長寿の種族だ。

「あの、今更なんですけど……本当に良かったんですか？」

「何がだ？」

「ギルドに所属している私をホームへ招いたりなんかして……【ロキ・ファミリア】の部外秘の情報が、私を通して流れでもしたら……」

「できもしないことを言うな、エイナ。お前が腹に一物ある人物ならば最初から誘いなどはしない。それとも、お前はよっぽど私に侮辱されたいのか？」

「い、いえっ。そういうわけじゃあ……」

門をくぐると、視界に広がったのは意外にも緑の芝が繁茂する庭園だった。

といっても広いわけではなく、塔と塔の隙間にできた本当に最小限のものだ。

上を見上てみると空がでこぼことした三日月状に切り取られており、頭上の景色の半分が高くそびえる壁面に埋め尽くされている。

「アイナは元気なのか？　オラリオにいるわけではないだろう？」

「はい。母さんはまだあの街にいます。文通をしていますが、元気そうです」

「そうか」

言葉少なくとも温かな雰囲気を滲ませるリヴェリアに先導され、エイナは応接間に足を踏み入れた。

橙黄色を基調とした落ち着いた感じのする部屋で、通路にそのまま面している。高そうな長いソファーとクロスのかかった丸テーブルがいくつも配置されていた。

高級感ばった演出はあるものの、応接室のそれというより憩いと団欒の間、という方が似合っている。

この空間を見ただけで、なんとなしに【ロキ・ファミリア】の中のムードを察した。

（へえ、いいなぁ、ちょっと住んでみたいかも。……ん？）

エイナが部屋を見渡していると一つの光景が目に入る。
こちらに背を向ける素材の柔らかそうなアームチェア、その背もたれに美しい金の塊がちょこんと乗っかっている。
いや違う、人の頭だ。
長い金髪が肘掛からはみ出ている。
椅子に座していた人物は、細い首をひねって、ゆっくりエイナ達の方を振り向いた。
すぐにエイナは息を呑んだ。

「おかえりなさい、リヴェリア」

「ああ、ただいま。アイズ」

エイナより一つ二つ年下の、童顔の少女。
以前、彼女が言葉にしたことがあるように、その容貌は溜息をつきたくなるほど美しかった。
アイズ・ヴァレンシュタイン。
ベルが想いを寄せる、金髪金眼の冒険者だ。

「その人は……誰ですか？」

「あっ……わ、私はっ」

「私の親戚のようなものだ。二人とも、簡単に挨拶でもしておけ」

勧められる通り自己紹介を交わし合う。アイズはエイナから目を逸らさずはっきりと自分の名を告げた。

防具を身に着けていないアイズは温室育ちの令嬢のように見えた。細い線が形作るいたいけない体は、とてもではないが【剣姫】などと謳われる歴戦の戦士には見えない。

純白のワンピースに包まれるスレンダーな体つきは華奢という印象が強く、あくまで標準ほどの胸が、かえって大きいものと感じられてしまう。

何も履いていない色白の素足は、アラバスターのように繊細で滑らかだった。

……落ち着かない。

エイナはアイズには悪いがそう思ってしまった。

ここで当事者達が顔を合わせているわけではないのに、ベルとアイズの間で板挟みに陥っているような感覚に襲われたのだ。

少しぎくしゃくしながらも、アイズと向き合う形でリヴェリアとともにテーブルを囲む。

「アイズ、消費したアイテムは揃えたのか？　十日後にはまた遠征だぞ」

「うん……明日、行くよ」

アームチェアに膝を抱えて座るアイズはぽつりと呟いた。鈴を転がしたような声がか細く応接間に響く。
ずっと前に自分へ向けられていたものと同じ、自身の子を見るかのようなリヴェリアの視線に驚きを感じながら、エイナは気にかかったことを小声で尋ねた。

「あの、リヴェリア様？」

「どうした？」

「何だかヴァレンシュタイン氏、落ち込んでいません……？」

白い生地に包まれた膝頭に顔の半分をぽふと埋めている少女からは、少し元気が感じられなかった。長い金の髪も光沢が乏しく、しょぼん、といった感じ。
面識のなかったエイナでも気付けるくらいには、そう、落ち込んでいる。
そんなエイナの質問に対しリヴェリアは珍しく、くっくっ、と笑みを漏らしてみせた。

「なに、“気になっていた男”にどうやら逃げられたらしくてな」

余程面白いのかリヴェリアは肩を揺らし続けていたが、エイナにとってその発言は笑い事では片付けられない。
「あちゃー……」と片手で額を押さえ頭を痛める。どうやら可愛い弟分に春がやって来る見込みは低いようだ。

ベルには黙っていようと、今聞いたことは自分の中だけに封印するエイナだった。

「……リヴェリア様。それで、先程の件についてなんですが……」

「ああ、すまないな。今に呼ぼう」

一頻り笑ったリヴェリアは持ち帰ったサイドバックに手を伸ばす。彼女が取り出したのは、あの「ソーマ」だった。

「えーと、リヴェリア様？　呼んでくださるんじゃあ……？」

「ここを立って探しに回っても手間だ。そもそも神出鬼没すぎて見つかるかもわからん。“来てもらう”方が確実だ」

はぁ、とエイナは生返事をした。リヴェリアの言っていることが今一わかりにくい。

リヴェリアは自分が購入した――【ロキ・ファミリア】への請求書一枚で全て買物を済ませてしまったのは鮮烈だった――酒の栓を抜く。

すぐに、酒には似つかわしくない独特な甘い香りが応接間を満たした。

「うわぁ……涼しい匂い」

「ふむ。嗅ぎ慣れているとはいえ、相変わらずだな」

「あの、本当に頂いちゃっていいんですか？　やっぱりお金を支払った方が……」

「くどいぞ、エイナ。これまでの積もる話も聞かせてもらうんだ、駄賃代わりとして受け取っておけ。それに、私は酒は飲まん」

だったら尚更悪いんだけどなぁ、という本音を呟きつつ、エイナはリヴェリアの好意に甘えることにした。

出されたグラスを手にとって、程々に注がれる。

王族である彼女に注がせるなど身に余り過ぎて卒倒しそうになったが。

（うっわ……！）

グラスを傾けた瞬間、エイナは目を見開いた。

美味い。

美味過ぎる。

舌全体を痺れさせるような強烈な甘み、それでいてしつこくなく口溶けは滑らか。芳香が鼻腔をたちまち駆け抜けていく。

後味は爽やかで、最後の最後の余韻まで意識そのものが翻弄されてしまう。まるで体の隅々まで染み渡っていくようだ。

これはリピーターが集まる筈だと、エイナは一口飲んだだけでそのことを悟った。

『この匂いはっ……！』

そして、エイナがソーマを口にしてからすぐに。
ダダダダッ、と“酒の匂いに釣られるように”、激しい足音が近付いてきた。

「お前、ソーマやなッ！？」

次の瞬間、なびく朱色の髪を振りかざし、リヴェリア達の主神、ロキが姿を現した。
どこからともなく疾走し、通路の床を削る勢いでブレーキをかけた彼女は、すぐさま応接間へと飛び込む。
その瞳は獲物を狙う狩人のそれだ。

「来たな」

「来てもらうって、そういうことですか……」

「あー！　やっぱりやぁ、やっぱりソーマやぁ！　なに、リヴェリアがうちのために買ってきてくれたん！？　かーっ、この親孝行もんめ！」

エイナは芳醇な香りを漂わせる手元のグラスを見下ろし、次にリヴェリアの目論見通り、見事誘い出されたロキへ視線を移す。
闇の中でも赤々と照るような朱色の髪と朱色の瞳。彫刻家が技術の

粋をつぎ込んであしらえたような完璧な見目形は間違いなく神のそれだ。
細面で端整な顔立ちは、今は尻尾をぶんぶんと振る犬のように輝いている。

「支払いをしたのは私だが、購入しようとしていたのは私でない」

「じゃあアイズか！　さてはダンジョンから帰ってきてずっと落ち込んだ風に見せとったのも、このドッキリをやらかす前振りやったんやな！　あぁもうマジクーデレ可愛えぇ、アイズたんモフモフさせてぇーーー！」

ぴょんっとロキはアイズ目がけ宙を飛ぶ。
真っ直ぐ自分のもとにダイブしてくる神に、アイズは無言で顎を引き、ブォンと頭突きを前に繰り出した。

「ぐぬえっ？！」

「……」

カウンター気味に入ったヘッドバットがロキの鼻柱に炸裂。
潰れたカエルのような声を出し、朱色の瞳がぐるんっと白目を剥く。
無意識のうちに迎撃を行ったアイズは、ロキの鼻を砕いた額をこしこしと擦った後、何でもなかったようにもとの状態に戻った。

「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ！？」

「あまり恥ずかしい姿を見せないでくれ、ロキ。【ファミリア】の沽券に関わる」

「ははは……」

鼻面を両手で押さえてゴロゴロ床を転がるロキに、エイナは苦笑い。
またアクの強い神が出てきたなぁ、とぼんやり思った。

「おぉっぅ……！？　……アイズたん、実はクーデレの皮を被ったツンデレやないかと最近うち思うんやけど、そこんとこどう思う？」

「同意を得たいならまず私にもわかる言葉で話せ。それより、土産を持ってきたのはこの子だ」

あ、そいうことにするのか。
と、エイナはリヴェリアの真意を悟る。
【ソーマ・ファミリア】の内情に精通している人物というのは、間違いなく、彼女達の主神であるこのロキであろう。
神に供物を捧げることで、質問に答えてもらおうというのだ。
正直、神へ直接意見を拝聴するなど気が引けるどころではなかったが、もう手段を選んではいられないと、エイナはこの時腹をくくった。

「んんぅ？　誰や、この子？」

「初めまして、神ロキ。私はエイナ・チュールと申します。この度は突然の来訪を……」

「ああ、そういうのええから。首の裏がかゆうなる。ぜひ止めて」

面倒くさそうに手をぱっぱっと振るロキは、ふと何かに気付いたように制服姿のエイナを見つめた。
右側の糸目を開いて、ニヤニヤと笑みを作る。

「何や、ギルドのもんがうちの【ファミリア】に接触してくるなんて……ウラノスのジジイ、中立とかほざきおって懐刀を備えておこうっちゅう、そういう腹か？」

「い、いえっ！？　私はっ……！」

「この子は私の客人だ。中傷など許さんぞ」

「あっ、そう。リヴェリアの客っちゅうんなら、間違いないんやろうなぁ。すまんなぁ、エイナちゃん。どうか堪忍して？」

「だ、大丈夫です。お気になさらずに……」

リヴェリアの静かな眼差しを受けて、ロキは毒気を抜かれたように肩をすくめ、苦笑。
彼女はどかっと乱暴にソファーへ腰を下ろした。

「ほな、建前とかはええ、サクサク行こうか。うちのオキニ持ってきてくれたってことは、何か聞きたいことでもあるんやろ？」

「……では、お言葉に甘えさせて、単刀直入に聞きます。【ソーマ・ファミリア】のことについて教えていただきたいのです」

「酒（ソーマ）だけに、か？　ははっ、なるほどなぁ」

片手にソーマを持って、もう片手のグラスへ無作法に並々と注ぐ。ぐいっとあおったロキは美味そうにぷはぁと息を吐き出し、ほんのり赤く染まった顔をエイナに向ける。

「一つ聞くんやけど、これってエイナちゃんの都合？　ギルドがソーマんとこを嗅ぎ回ってるとか、そんなんやなくて？」

「はい、私情です。ギルドは取りわけ【ソーマ・ファミリア】をどうこうしようと考えているわけではありません」

「まぁ、そうやろうな。あそこはキチガイに見えるってだけで、問題起こしとるわけでもないし」

今度は少しずつソーマを味わいながら、ロキは「ふむぅ」と唸る。

「うちもソーマのアホとは仲いいわけでもない、エイナちゃんの期待に応えられるかわからんけど……ええよ、ちょちょっと口を滑ら

せたげる。なに聞きたい？」

「……【ソーマ・ファミリア】を取り巻くあの異常性の原因について、何かご存じですか？」

「んっ、いきなり核心きたなぁ。……でも、どう説明したらええんやろ」

ロキはグラスを揺すりながら、その中で波をたてる酒（ソーマ）を見つめる。少しの間を置いて、彼女はくいっとグラスの中身を飲み干した。

「よしっ、うちとソーマのなりそめを語っちゃろう！　あ、ソーマって酒のソーマのことな？　間違ってもあのアホ神のことやないで？」

「は、はぁ」

「では……うちなぁ、酒が好きやねん。好きで好きで大好きで、一日も何件も店をはしごしまくって、色々な酒を飲み比べておってね？　そんである日……とうとう巡り会ったんや、このソーマに」

理解できん、とリヴェリアが嘆息して飲んだくれの神に半眼を送る。ロキは構わず話を続けた。

「運命の出会いっちゅうやつ？　一口飲んだ瞬間に惚れ込んだわ！　どっかの【ファミリア】が作ってようが関係あらへん、もう追っ

かけのごとくオラリオ中のソーマをかき集めてかき集めてかき集めて……それでなぁ、そんなことをしてる内に、面白いことを小耳に挟んでな？」

「面白いこと……？」

「信じられるか、エイナちゃん？　この酒、失敗作なんやって」

「なっ……」と、エイナは奇しくもリリから話を聞いたベルと、同じ反応を返してしまった。
ロキは笑みを深め出す。

「気になるやん、こんなに美味い失敗作を生み出す“完成品”ってやつ？　そんでうち、ソーマんとこの【ファミリア】に直接乗り込んだんよ」

エイナは愕然とし、リヴェリアは今度こそ呆れ返る。
敵対していないとはいえ、神が他の神の本拠へ土足で入り込むなど、どうか襲ってくださいと言っているようなものだ。
神達の間にもマナーがある。情報漏洩を防ぐ意味合いでも、他の【ファミリア】の者を易々とホームに侵入させるわけにはいかない。

「『酒（ソーマァ）！　うちや、結婚してくれー！』って玄関の前で叫んだんやけど、なんか寂しいくらいに全力でシカトされてなぁ……腹たったから、断りもなしに本当に入ってしもうたんや」

頭が痛くなってきた。エイナはよろめく頭部をおさえる。
一方で、そこまで他の【ファミリア】の干渉に無関心な【ソーマ・ファミリア】に疑念を抱く。

「ガランとしててなぁ。人っ子一人いないんや。ホームにやで？　みんな出払ってるってどういうこと？　って、うちったらその時いよいよ薄気味悪く感じ始める……どころか、めっちゃウキウキし出してなぁ。鼻息荒くしてそこらへんを物色しまくったんや」

「……」

「頼む、ロキ。それ以上身内の恥を晒さないでくれ」

「グフフ、リヴェリアのいけず。まぁええ、探してみたところで本物のソーマどころか、何も見つからんかったし。それでいい加減うちも飽きてきて、帰ろうかなぁ思うたら……いたんよ、あの神（アホ）が」

その時の光景を思い出したのか、ロキはうつむいて笑みを噛み殺す。

「よぉ、ってうちが言ったら、あのアホ『いらっしゃい』とか抜かしてな？　言っとくけど初対面やで？　うちにろくに目を向けないで、庭の方で何や知らんけど一人クワ持って畑を耕しておったん。後で聞いたんやけど、何でもソーマの原料が自家製の植物なんやって。あ、別にヤバイもんを肥料にしとるとかはないで？」

話してる間にもロキはソーマを口にし、頬を染めてほろ酔い加減になっていく。
声の調子が上がっていた。

「そんで、このソーマっちゅう神の外見がもう……アレでなぁ」

「アレ？」

「そう。こうひょろっとしたモヤシで、黒い前髪で目を隠した髪型で、いかにも優柔不断そうでヘタレ臭が漂うアレや。理由もないのに可愛い女の子達をはべらせてそうな、アレ」

どうしよう、意味がわからない。
エイナは汗をかく。

「しかも、ほれ、神やから結局イケメンやん？　髪の下の素顔は実はめちゃくちゃカッコええとか……ホントどこぞの主人公やお前は！！　幼馴染とか先輩を風が吹いただけでメロメロキュンさせとんじゃないわワレェ！　あーくそっ、思い出しただけで虫唾が走ってきおったっ！」

がんっ、とテーブルに拳を打ちつけ出すロキに、エイナは本当にどうしようと困り果てた。
ロキの酔いは止まらない。

「しかも、しかもやでっ、エイナたん！」

「エ、エイナたん？」

「うちが本物のソーマを恵んでくれって、誠心誠意をこめて腰を折ったんよ！　このうちがやで！？　そしたらあのヘタレ、何て言ったと思う！？」

実際、ロキはソーマからは敵意の欠片も感じなかったのでイケルと思っていたらしい。一升くらいならなんとかなるだろうと。だから、油断していた。

人畜無害そうな神は、しかしその時は手を止めて真摯にロキと向き合い、言ったのだ。

『だが断る』

その時ばかりは強い意志を見せたらしい。

「ムッキャァー！　ああいう輩にあんな台詞を言われるのが一番腹立つわぁッ！」

「……」

「ロキ、いい加減にしろ。話を脱線させてないで、早く本題に入れ」

ふぅふぅ、と息をしばらく荒くさせ、ロキは落ち着いた表情でソファーに座り直す。

「すまんすまん。そんで紆余曲折あったんやけど、あのアホからは【ファミリア】のことについて聞き出せてな。聞いたら普通に吐くわ吐くわ、馬鹿やろ？　あいつホンマ【ファミリア】を運営するセンスはないわ。というか、最初からやる気がないやんな、きっと」

エイナは細い眉をぴくりと微動させた。
最初から、やる気がない……？
一体どのような思惑があるのかと疑問が頭をもたげる。

「エイナちゃん、あまり深く考えない方がええで？　つまりソーマっちゅう神は、自分の“趣味”のことしか頭にないんや。よくいるやろ？　趣味に没頭して他のことにはなんも見えておらんやつ。あれを究極完全体にしたのがあのアホや。野望とか腹黒い魂胆なんて含んでるわけでもない、純粋に趣味に生きる純粋な趣味神やな」

「こう言うと、神の中でも悟りを開いた仙人みたいな奴やなぁ」と冗談交じりにロキは言った。
曲者が多い神の中でも一層の変わり者。
エイナはソーマの神像にそのような印象を抱く。

「で、ここで問題になってくるのが例の『ソーマ』や。アホ神は自分の趣味……酒の製造をするために【ファミリア】を作った。でも

【ファミリア】は中々稼ぎを上げてこない。金のかかる趣味や、このままじゃあ続けられへん。ない頭を捻ったあいつは、“賞品”をもうけることにした。団員達がより頑張ってくれるような、起爆剤をな」

「まさか……」

「そ、『神酒（ソーマ）』や。完成品のな」

唇に浮かぶ酒の滴を、ぺろりとロキは舌を出して舐め取る。

「この失敗作を飲んだエイナちゃんにはわかると思うけど、完成品のできはヤバくてな。飲めば“酔う”。べろんべろんに酔っ払うとかそういう意味ちゃうで？　心の底から、ただの酒に“酔う”。心酔や。人心ならぬ、心身掌握っちゅうやつかな？」

ぞっ、とエイナは寒気に襲われた。

先程の“失敗作”を飲んだ時の高揚感を思い出す。

悪い意味ではなく、純粋に酒の風味に意識を引かれ惹かれた。心が確かに浮き立った。

あれ以上の、陶酔感？

スーツの舌で静かに鳥肌が立っていく。

ロキは「こう言えばわかりやすいんかなぁ？」と前置きをした。

「あそこの子達が崇めているのはソーマやない、神酒（ソーマ）の方や」

信仰の中心が神ではなく、“神酒”。
つまり、神ソーマの評判に似つかわしくないほど【ファミリア】の構成員が多いのは、彼の創み出した神酒に心を奪われたから。
一口飲み干しただけで何事にも代えがたき多福感を与える神の酒に、信者達は溺れたのだ。

「あのヘタレ神は本物の変態や。『神秘』を持った構成員に手伝わせるでもなく、材料の開発と調合、そして製法のみで『神酒』を作り出しおった。“趣味”を極めた本物のアホが到達した、極致やな」

エイナは気付く。
ロキがソーマに向けるアホという呼称は、畏怖の意味もこめられているのだと。

「神の力なんて一切使っておらん。子供達と同じ、いやそれ以下の能力だけであそこまで漕ぎ着けた。信じれるか？　言ってしまえば人の手で神の酒を作り出しおったんや。天界でお前なにをやってったちゅう話や」

「ふむ、おおよその全容は見えた。つまり、神ソーマが神酒を団員達の餌にしたことで……」

「うん、あってるよ。一度神酒の味を知ってしまった団員達は、何に代えても金をかき集めるようになった。賞品いうても、【ファミリア】の全員に配れるわけない。資金調達のノルマを決めたうえで、成績の上位者に神酒を与えることにしたんや。【ファミリア】内競

争やな。あ、ノルマをちょっと越えれば、お猪口くらいの分はもらえるんやったかな？」

思い出せん、と唸るロキを尻目に、エイナはようやく納得することができた。

ギルドで度々見ていた【ソーマ・ファミリア】の金への異常な執着。

あれは、神酒を得たいがための“渇き”だったのだ。

「しかし聞けば聞くほど劇薬の類だな、神酒というのは。そんなものを放っておいていいのか？」

「うーん、言い方が悪かったかもしれんなぁ。“酔わせる”言うてもな、ヤバいクスリをきめたみたいに、頭がパーになるとか錯乱するとかはないんや。ただ感動する。打ち震える。もう一口と飲みたくなってしまう。でも、“酔いは必ずどこかで醒める”。普通の酒と同じようにな」

薬物と違うのはそこだとロキは言う。

禁断症状はない。依存症状も酷くない。

あくまで信者達の心酔は一時的なもので、本来ならば時間を置けば綺麗に消失する。

ただ【ソーマ・ファミリア】の場合、飲酒してから次の飲酒をする間隔が短すぎて、蟻地獄から抜け出せなくなっているのだ。

「依存症状はあくまで短期的、ということですか？」

「せや。神酒を飲めなくなって、正気に戻っている子達も大勢いるんやないかな？」

付け加えるなら、神酒にも耐性はつくらしい。

常に成績上位者に君臨する【ソーマ・ファミリア】の構成員は、そこまで“酔う”ことなく平静な状態でいるとのこと。彼等はノルマをあげる他にも、神酒の貯蔵された蔵を守る守護人（ガンダルヴァ）という役職にも就く。

そういえば、とエイナは思い出す。

大部分が金へ執着していた【ソーマ・ファミリア】の冒険者の中で、Ｌｖ．１に登りつめている何人かの者達は比較的冷静であったと。

「結論から言ってしまうと、趣味にしか興味のないアホ神のずさんな【ファミリア】の管理、神酒の魔力、そして団員達の神酒への飢え、これ全部がうま～く組み合わさって、今のキチガイ【ファミリア】ができあがったちゅうわけやな」

本来ならば、【ファミリア】のトップである神が目を光らせていればこうはならない。

鶴の一声が発動すればどのような【ファミリア】も必ず沈黙するのだから。もしそこで逆らえば、神の恩恵の剥奪が待っている。

そう考えるとこの状況を招いているのは、人畜無害といっても、やはりソーマ本人にあると言えるのかもしれない。

「こんなところやな。で、エイナちゃん、まだ聞きたいことはあるか？」

「いえ、もう大丈夫です。本当にありがとうございました」

【ソーマ・ファミリア】の抱えている事情はわかった。
少なくともベルが命の危険に晒されるという最悪の事態はなさそうだと、エイナは内心で安堵した。
そんな彼女を、ロキはその細い双眸をそっと開いて正視する。

「エイナちゃん」

「はい？」

「目の前に人参を吊るされたロバ達が、ずっとその人参を食えないでいるとどうなるか、知っとるか？」

いきなり出された変わった質問に、エイナは顔をきょとんとさせる。
ロキは両手の人差しをぴっ、ぴっ、と一本ずつ上げ、彼女の返答を待たず、次の言葉を継いだ。

「力のないロバはぶっ倒れて退場して、せこいロバは他のロバの人参を食らおうと、蹴っ飛ばしてまで横取りに走る」

最初に浮かんだのは当惑で、次に起ったのは理解。
ロキが何を言わんとしているのかエイナは察した。

「今のあそこの【ファミリア】はまさにそういう感じや。あのアホが人参吊るしとるから、止める者もおらんしな」

「……」

そしてロキは全ての指を折りたたみ、右手の小指だけ、ぴっと上げる。

「そんでな、中には仲間に蹴っ飛ばされてもめげないロバがおるかもしれん。一人ではなんにもできない代わりに……同情なんかを買ったりして、うまーく他所の飼い主に取り入るような、ずる賢くて、したたかなロバが」

朱色の瞳に映る自分（エイナ）の顔が、静かに強張っていた。

「気付いたら身ぐるみをはがされていました、ってこともあるかもなぁ」

ロキはエイナの瞳を覗きこむようにしていた姿勢を直し、ソファーに深く腰かける。
半分も中身のないエイナのグラスにソーマを注いで、そっと勧めた。

「もしな？　あそこのキチガイ【ファミリア】の連中とつるんでい

る友達がおったら、それとなく声をかけておいた方がええかも、なんてな？　大事にはならなくとも、痛い目には合うかもしれん」

「ギルドで冒険者の世話するのも大変やろ？」とロキはおどけてみせる。

見透かされている。

流石は神といったところなのか。

エイナはゆっくり息をはいて、神妙な顔で頷いた。

「ちょっと老婆心ちゅうか、余計なお世話かもしれんけど」

「……いえ。肝に銘じておきます」

いい神なのだろう、彼女は。

話で聞いていたより、ずっと親切だ。あるいは自分が身内（リヴェリア）の知人だからなのかもしれない。

エイナの視線の礼で、ロキはにへらっと笑った。

「さて。酒も無くなってしもうたし、お開きにしよか」

「すまないな。最後まで付き合ってもらって」

「ええよぉ。うちも美人で可愛いエイナちゃんと話せて良かったわ」

「あはは……」

ん～、と立ち上がって思いきり伸びをするロキは、終始黙ってしょんぼりしっぱなしだったアイズのもとへ向かう。

「ほれ、アイズぅ。自分、いつまで落ち込んでんねん」

「……」

「そや、【ステイタス】更新しよ？　返ってきてからまだやっとらへんやろ？　な？」

「……わかりました」

「フヒヒ、久しぶりにアイズたんの柔肌を蹂躙したるわ……！」

「変なことしたら斬ります」

「えっマジで？」と少しビビるロキは、アイズの肩に手を回して応接間を後にする。
壁の向こうに消える直前、エイナ達にウインクして手を振った。

「面白い、神ですね」

「面白いかは賛同しかねるが、あれで存外に切れる。我々からの信頼も厚い」

「リヴェリア様も、ですか？」

「ああ、私もだ」

両目を瞑って、少しだけ微笑を浮かべるリヴェリアに、エイナも笑う。

テーブルに置かれている、最後に酌をされたグラスを手に取って頂戴した。

――明日、ベル君に会えるかな。

ロキの忠告を思い出しながら、少し苦く感じるようになったソーマを口に含むエイナだった。

『アイズたんＬｖ．５キタァァアアア！！』

「ぶっっ！？」

「……エイナ」

「わあああああああっ！？　ご、ごめんなさぁあいっ！？」

日が暮れて、月が出て、夜が明けて、東の空からまた日が顔を出した、今日。
僕は昨日までならまだホームにいる時間帯に、バベルの門の前へやって来ていた。
昨日の男とのやり取り。
ダンジョンにもぐっている最中も、男と交わしたあの言葉の断片が頭から離れず、僕はモンスターの他にもすれ違う冒険者達に警戒を払うことをしていた。
そして今日も。
リリのことが気になってしょうがなかった僕は、いつもより遥かに早い時間へ集合場所であるこのバベルへ足を運んでいる。

正直、リリを不安にさせている自覚がある。
しつこいくらいに自分のことを確認してくる僕のことを、リリは怪訝に思っただろう。
何か尋ねてくるということはしなかったけど、不安そうな心細そうな、そんな暗い表情をずっと浮かべていたように思う。
余計な心配させたくないから事情は話してないけど……黙っているのが心苦しい。

散々悩んだ挙句、昨日、思いきってリリを誘いもした。しばらく夜も行動をともにしてみないかって。

ホームへ呼ぶのは神様の許可がないといけないから僕だけの一任じゃ決められないけど、そうじゃなくてもバベルの宿泊施設なら付きっきりでいられる。僕がリリの隣室を取ればいいだけの話だ。

せめてもう危険がないと判断できるまで――と僕は僕の都合で勝手にそう思っていたわけだけど、まぁ、当たり前というか何というか、断られてしまった。

あの小気味のいい笑い声でやんわりと拒絶され、取り付きようもなく。

リリも女の子だから、むしろ僕の要求の方が無神経すぎる。何言ってんだコイツと思われたかもしれない。自分ですらそう思うくらいだし。

でも、なぁ……。

「……ベル様？」

「あっ、リリ。おはよう」

ぐたぐたと考えて気を揉んでいると、リリがやって来た。

目を丸くしているリリに、僕は一先ずの安堵を抱きながら挨拶をした。

「……シシシシッ。おはようございます、ベル様。まさかこんな時間にベル様がいるなんて、リリはリリの目を疑ってしまいました」

「あはは、そうだね。どんな時でもリリは僕より早く来てたし」

思ってた通り、男は宿泊施設……バベルの中で騒ぎを起こす気はないらしい。
ギルドの膝元で何か事件を起こせばたちまち御用になる。もし冒険者の登録を取り消されれば、魔石やドロップアイテムは買い取ってもらえず見返りなしで引き取られるし、【ファミリア】の脱退――つまり神様から切り捨てられる可能性も出てくる。
最悪牢屋行きで、刑罰。
冒険者に対する法は、冒険者達のアウトローっぷりからほぼ形骸化しているって話だけど、ギルドも動く時に動かなければ示しがつかなくなる。
犯罪行為は取り締まられると考えていて問題ない。

「ベル様」

「あ、ごめん。なに？」

「今日は１０階層まで行ってみませんか？」

「えっ……」

ほんのちょっと思考に耽っていた僕を、リリの不意の提案が叩く。
僕は目を隠しながら笑うリリを驚きの表情で見つめた。

「どうして、いきなりそんな……？」

「シシシッ。ベル様、リリがお気付きにならないと思っていたのですか？　ベル様はとうに１０階層までは踏破できる“実力”をお持ちになっているのでしょう？」

「……」

リリの言う“実力”が【ステイタス】のことを示しているのはすぐにわかった。

確かに僕は「敏捷」を初め基本アビリティがＡやＢの段階に突入しつつある。ギルドの示すダンジョンのランクでいえば、Ｌｖ．０の冒険者が攻略可能とされる最下層、１１～１２階層までの規定をクリアしていることになる。

それでも今すぐに下層に降りようとしない理由は、僕がソロだからということ。

いくら階層のランクと能力が拮抗していても、モンスターの数は無限だ、単独ではギリギリの綱渡りを常に強要されてしまう。一つのミスが冗談抜きで命取り。

何より、１０階層以降はダンジョン自体の性質がそれまでの階層より殊更悪辣になる。地形条件が牙を剥くっていうのかな？　とにかく各アビリティ評価Ｆで７階層に挑むのと、評価Ｓで１２階層に挑むのとでは難易度の桁が違うのだ。

少なくとも、１２階層はＬｖ．１の冒険者が手始めに挑むっていう、そういう次元。

実は、僕はもう９階層まで危なげなく到達階層を増やしている。

このままの調子なら、例えソロであっても１１階層以下はともかく１０階層までは行けると、リリはそう判断したんだろう。

事実、僕も手応え自体は感じてる。ちょっと自信に偏っているかもしれないけど、やれるという確信もあった。

それでも、僕が迂闊に１０階層へ足を踏み入れようとしなかったのは。
出るのだ、１０階層には。
これまでの階層には姿を現さなかった、「大型級」のモンスターが。
……そう、“あの”ミノタウロスのような。

「……でも、僕、この前7階層で死にかけたばかりじゃない？　そんな僕が１０階層に行っても……」

「ですが、あの慢心が招いた失敗を経験したからこそ、今のベル様には驕りはありえないのではないですか？　あえて言えば、痛い思いをしたベル様は冒険者様の器としてより完成されたと、リリはそう感じています」

「……」

「それにベル様は魔法を手に入れました。あの魔法は強力です。今のベル様には死角は存在しません」

昨日リリには【ファイアボルト】の行使を見せてある。
「魔力」の強化（神様には昨夜【ステイタス】更新をしてもらった）と使い慣れるっていう意味合いの方が強かったけど、リリには絶賛されていた。
「速攻魔法」という属性は、それだけソロでダンジョンにもぐる僕にとって価値がある。

「他の冒険者様のパーティに随伴して、１１階層まで降りたことの

あるリリが太鼓判を押しましょう。ベル様は１０階層を楽に攻略できます。“絶対”です」

僕はかなり悩んでいた。

魔法を手に入れる前から、エイナさんからは１０階層まで降りる許可はもらっている（厳重注意だったけど）。

そう考えると、リリの口にした通り、魔法が発現した今なら１０階層は確実に攻略できる。

そんなことを言い切れるくらい魔法の力は計り知れない。形勢逆転の必殺技、どんな事態をも打破しえる可能性。“それが魔法というもの”。

【ファイアボルト】の存在は僕の自信の源泉になっていた。勿論頼り過ぎるのはいけないけど、とにかく心強い。

前進か、現状維持か。

僕は岐路の前でしばらく立ちつくす。

「……実は、リリはお金を用意しなければいけないのです」

「っ！　もしかして、それって……」

「事情は言えません。ただ、リリの【ファミリア】に関係することなので……」

あたかも迷う僕に追い打ちをかけるかのように、リリは自分の事情を打ち明けた。

昨日リリが三人組の冒険者達に絡まれている光景が蘇る。意識を離れて僕の右手はびくっと痙攣した。

「どうか、リリの我儘を聞いてくれませんか、ベル様？」

リリは頭を下げ、そろっと上目がちに僕を見上げる。
もし本当に【ファミリア】での約束事だった場合、僕の干渉は――
リリの必要とする負担（おかね）を肩代わりすることは、リリのためにもならない。
他の【ファミリア】の構成員に見返りもなしに助けられたとなれば、その【ファミリア】の名前に泥を塗ることになる。恥と言ってもいいかもしれない。
僕にはリリの事情を確かめる術がない。尋ねてもきっとリリは本当のことを言わないだろう。同じ状況だったら、僕だってそうする。
僕は右手をぎゅっと握り、覚悟を決めた。

「わかったよ。行こう、１０階層」

一瞬、僕を見上げるリリの大きな瞳が、前髪の奥で細まった気がした。
けれどそれは幻覚だったかのようにリリの顔には笑みが咲いた。「ありがとうございます！」とはしゃいで僕に何度も頭を下げる。
僕は眉尾を落としながら苦笑いした。

「じゃあ、すぐに出発する？　それとも、念のためにバベルの中でアイテムを補充しとこうか？」

「アイテムの方はリリが昨日揃えておきました。それより、ベル様、これを使ってみませんか？」

「……これって」

地面に下ろしたバックパックからリリが取り出したのは、墨色の柄の短剣だった。

《神様のナイフ》が刃渡り１５センチくらいだとすると、この剣は５０センチに届くか届かないかくらい。

ショートソード……いやバゼラードか、これ？

棒状の柄頭の部分と鍔が刀身に対して垂直の形を取っている。シンプルな形状の短剣だ。

【ヘファイストス・ファミリア】の店しか行ったことはないけど、どこの武器屋でも売ってそうな感じ。

「どうしたの、これ？」

「ベル様には悪いのですが、事前に準備させてもらいました。大型のモンスターと戦うことになると、今のベル様の武器ではリーチが低すぎますので。そうでなくとも、リリはもう少し射程があった方がいいと前々から思っていました」

「ええっと、くれるんだよね？　タダで頂くってのはちょっと……」

「リリの我儘を聞いてもらうんですから、いわば恩返しです。もらってあげてください」

「……そういうことなら」

受け取った《バゼラード》を鞘から抜く。
銀の剣身は両刃で薄い。割と軽く、短刀の延長といえるので、剣を装備したことのない僕でも比較的取り回しは利きそうだけど……。

「いきなり長剣を渡されるよりまだマシだけど、平気かな？　【ステイタス】の補正もつかないし……」

「シシシッ。１０階層にたどり着くまで、試し切りを行ってみてはいかがですか？　７階層までの敵ならちょうどいいでしょう。それにリリの目が間違っていなければ、ベル様は短剣との相性もいい筈です」

沢山の冒険者パーティと行動をともにしていたリリの眼力は確かだ。
今日まで預かった指摘は全てが的を射ていた。
僕はリリの言葉を疑わず信じることにした。

「あっ……僕、剣帯装備ないや……」

剣を吊るすための装備がないことに遅まきながら気付く。
これじゃあ鞘が邪魔になっちゃう……。

「ベル様、ベル様」

「？」

「リリの記憶が確かなら、そのプロテクターには武器を収納できた筈では？」

おおっ、忘れてた。僕自身が口にしていた言葉なのに。
僕は《神様のナイフ》を一旦プロテクターから取り外して、格納装置を調節してから《バゼラード》をあてがった。
問題ない。しまえる。

「リリ、よく覚えてたね。僕なんかすっかり忘れちゃってよ」

「シシシシッ。リリも閃いたように今思い出しました」

頭に手をやるリリは照れたような素振りを見せる。
僕は微笑を漏らしつつ、今度は《神様のナイフ》のしまっておく位置に迷う。
前は腰にやって落としちゃったから……レッグホルスターなら平気かな？
僕はちょうど空になっていた試験管サイズの嚢に《神様のナイフ》を差し込んだ。ちょっときついけど、まぁ平気だろう。念のため蓋をするようにカバーを留めておいた。

「……」

「それじゃあ、行こっか？」

僕の確認に、リリはフードの下でニコリと笑い、「はい」と頷いた。

8〜9階層は7階層からまた毛色が違い、ダンジョンの景色と地形が大きく変化する。

まずルームの数が多くなり、また広い。ルームの間を繋ぐ通路は短いものばかりで、伴って三メートルから四メートルが精々だった天井の高さが、十メートル近くもなる。

地面も普通の土から短い草の生えた草原に。木色の壁面には苔がまとわりつき、頭上から降る燐光は太陽の光を彷彿させる。まるで広原に足を運んだかのような錯覚に陥ってしまう。

ダンジョン全体の規模が、ぐっと大きくなった印象だ。

モンスターは今までの総まとめといった感じ。新しい種類のモンスターはいないけど、代わりに1階層のゴブリンやコボルトなどが、より強くなった状態で現れる（微妙に色の濃淡も違う）。

低層にいる時の乗りでかかると痛い目にあうどころじゃ済まされな

い。
けれどその分、この階層に来るまで何度もやり合った相手というだけあって、基本的な対処法に変わりはない。相手の力を見紛わなければこれまで通りに戦える。
だからどっちかっていうと、この８～９階層はまだ攻略が楽の方かもしれない。これまでのおさらいと考えればそれで。
ただゴブリンやコボルトを始めとした群れる習性を持つモンスターが、冒険者と同じ“パーティ”を組み出す。連携はまだ雑だけど、そこの所だけは要注意しなければいけない。

で、肝心の１０階層。
この階層は……

「霧……」

そこまでは深くない、けれど視界を妨げるには十分な白いもやが、ダンジョン中に立ちこめていた。
人が並べば十人ほど優に通れる一本道を僕とリリは黙々と歩む。
１０階層のダンジョンの作りは８～９階層をそのまま引き継いでいる。ただ天井からの光源だけは先程までの燦々としたものではなく、まさに朝霧を連想させるような光度。
ダンジョンに入ってから初めて受ける、視野の妨害だ。

「リリ、離れないでね」

「……はい」

もう何度とも知れない言葉をリリへ告げる。
この霧ではぐれてしまうかもしれないっていう心配も勿論あるけど、それ以上に僕は昨日の男の襲撃に注意を配っていた。
この階層に来る前もしつこいくらいにリリの方を見て確認しているので、もうとことんウンザリされているかもしれない。
証拠に今日のリリは言葉数がぐっと減っている。表情も僕の方をちらちらと見ては沈んでいた。
ちょっと傷付くけど、仕方ない、リリが無事でいてくれるなら甘んじて受けよう。

（それにしても、案外しっくりくるなぁ、コレ）

僕はリリの気配に意識を割くのと平行して、手の中にある短剣を見やった。
使い勝手は上々。間合いの取り方が短刀を使い込んでいた影響を受けてまだ拙いけど、十分及第点だと思う。キラーアントも余裕を持って料理することができた。
リーチの長さが本当に新鮮だった。僕からすれば安全地帯からぽんぽんと攻撃を仕掛けている気分。
威力はやっぱり短刀ほど見込めないみたいけど……それには目を瞑るしかないだろう。

「……！」

進んでいた通路を抜け、視界が開ける。

僕は生え渡る雑草を踏みしめ、広々としたルームを見渡した。
ここにも霧が広がっているけど、ルームの中ほど辺りまでは視界が利く。勿論うっすらとぼやけているが。
そしてその中で、葉と枝を失っている枯木が辺りに点々と立ち通していた。

「……」

僕はまばらに木が林立しているその光景に顔をしかめた。取りあえず、モンスターが生まれてくる壁際を避けて奥へ。
それぞれ一メートル、二メートルほどある木の群れに近付く。
木肌は以外にもしっかりとしていた。幹は下から上に行くにつれて極端に細くなっていく。明らかにヘンテコな構造だった。
――ああ、やっぱりこれが。
僕は苦々しい気持ちで木々を一通り見つめた後、リリの方を顧みる。

「どうしよう。これ、先に切っておこうか？」

「いえ、その暇はないようです」

前方を見据えるリリにはっとする。
背筋をぴりぴりさせる緊張感を覚えながら、僕は後ろを振り返った。
大柄なシルエットが霧の向こうで揺らめいている。ズシンッズシンッという足音と、僅かな地面の震動が僕の全身を通して伝わってきた。
僕は引きつりそうになる顔面を我慢して、奥歯を精一杯噛む。

「ブグゥゥゥ……」

低い呻き声とともに大型級のモンスター、「オーク」は姿を現した。
茶色い肌に豚頭。ずるずる剥けた古い体皮が腰の周りを覆っており、まるでボロ衣のスカートを履いているようだ。
身長は三メートルを越すか。ミノタウロスよりやや高いくらい。
ただあっちの方が引き締まった筋肉質の体をしているのに対し、オークは丸く太ったずんぐりとした体型だった。

「やっぱり、大きい、よね……」

「シシシッ。逃げてはいけませんよ、ベル様？」

避けては通れない道です、と言うリリに僕は唾を飲み込みながら頷いた。
そうだ。このオークを倒さなきゃ、この先の大型のモンスターなんて……ミノタウロスなんて、一生攻略できっこない。
自分より遥かにでかいからって、びびってなんかいられないんだ。
僕は大きく息を吸い込んで眦を決した。

「ブギッ、ブォフオオオッ……！」

オークがその潰れた黄色い瞳で、僕とリリを射抜く。

獲物を肉眼ではっきりと視認した豚の化物は、腹の底に響く地響きを起こしながら木々の間を抜け、おもむろに手を伸ばす。
そして、オークはその巨腕で太木を――“引き抜いた”
僕の歪めた瞳の先で、ダンジョンの自然の一部だった筈の枯木は、その瞬間、無骨な棍棒へと成り果てる。

『迷宮の武器庫（ランドフォーム）』。
ダンジョンの厄介な特性の一つ。この生きている迷宮が、ダンジョン内を徘徊するモンスター達に提供する天然武器（ネイチャーウエポン）。
１０階層で初出となるこの地形効果はもっぱらモンスター達の能力を後押しする。
素手や生身の状態でなら倒せるモンスター達も、このダンジョンからの支援を受けることによって、一癖も二癖もある敵へと変貌するのだ。
特に、大型級のモンスターがこのサポートを得るとその力は一気に増す。他のモンスターとは比べ物にならない怪力は、ネイチャーウエポンを手にすることによって凄まじい破壊力を上乗せされる。
こんな風に実物で見せつけられると、やはりダンジョンとモンスターは密接な共存関係を結んでることがわかる。

「タイミング、悪いよ……」

『ランドフォーム』は破壊可能だけど、これもダンジョンの一部なのだから、時間が経てば当然のように修復する。
モンスターが使用した後も同じだ。この木だったらすぐにもとの場所から生えてくるらしい。
通常なら、暇があれば『ランドフォーム』は破壊しておき、少しでもモンスターの増強は防ぐところなんだけど……本当にタイミング

が悪い。
完全武装したオークと、僕はもう僅かの距離を残して対峙することになった。

「グゥウ、グブゥウウウウウウ……！」

「……」

オークの荒い呼吸音の間隔が狭まっている。今にも飛びかからんと醜悪な瞳がギラギラと輝いていた。
初の大型級モンスターの戦闘。これまでのモンスター達とは違う別格の敵。激する緊迫感。
爆発しそうになる心臓を意志の力でねじ伏せながら、僕は、肩の力を抜いた。
そして、オークが雄叫びをあげる。

「ブゴオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッ！！」

戦闘開始の合図。
それを聞いて、僕はオークに向かって駆け出した。

（攻撃はもらえない！）

体格差からはっきりしている通り、オークの攻撃は僕じゃ防げない。
当たれば即座に吹っ飛ばされる。間違ってもプロテクターを用いた防御なんて無しだ。

（逆に、こっちが狙うとしたら……！）

まずは下半身。特に地に根を張る二脚。
でかければいいってもんじゃない。いや本音を言っちゃえばあのサイズに終始ビビりっぱなしだけど、大きいヤツは大きいヤツなりに弱点を抱えている。
的が大きいのは当たり前として、小回りが利きにくい。
オークなんて動きがのろいヤツは尚更だ。重すぎる自重はバランスも失いやすい。
一撃。
一撃だ。
相手の一撃をやり過ごせば、僕のリターンは大きい。
視界の中のオークが、見る見るうちに迫ってくる！

「ゴフォオオオオオオオオオオオオ！」

まっしぐらに向かってくる僕にオークは棍棒を構えた。
根だった部分が丸く肥大したハンマーを、頭上に高く高く振りかぶる。
“振りかぶる”ってことは……！

「っ！」

僕は怯まず突進した。
得物を振り下ろす攻撃は薙ぎ払いと違って効果範囲は狭い。その軌道を見極めてしまえば回避はずっと楽だ。
地面に叩きつけるわけだから連続攻撃の心配もいらない。棍棒を引き上げるまでは完璧に相手は隙だらけ。
一気に、畳みかけてやる！

「ブォグウウウッ！！」

「当たりぃっ！」

「ゲブォア！？」

振り下ろされた棍棒を余裕をもって回避。
突撃の勢いを緩めずオークの脇を駆け抜け、すれ違い様に横っ腹を切っておく。
裂かれた腹から緑色の鮮血が飛び散り、オークは堪らず叫び声をあげた。
草原がより色の濃い緑液に染め上げられる。

「ふっ！！」

ガラ空きの背後から、予定通りに右足を狙った。

地面ギリギリからすくい上げるような、斬り上げ。
両手で持った短剣の切っ先が草を削り、間髪いれずオークの太い短足に銀の刃が叩きこまれる。

「ブゴォオオオオオオオオオオオオオ！？」

耳を聾する大絶叫。
膝を叩き割って内部に滑り込んだ《バゼラード》は一旦停止した。
硬い骨の感触、更にオークの全体重もそこへかかり剣身がこれ以上動かない。
けど僕は、歯を食い縛って、オークを持ち上げるかのように力任せで《バゼラード》を突き進ませた。

「こんッ、のぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおっ！！」

切断する。
短剣が勢いよく右足から飛び出し、すぐに片足を失ったオークは草原に倒れ込んだ。
潰れる悲鳴にルーム全体を震わす衝撃。オークは悶えるけど、僕は止まらない。
ダッ、ダッ、とオークの巨大な背中の上を駆け抜け、そして後頭部、剣先が真下に向いた《バゼラード》を振り下ろす。
鈍い音とともに刃がオークの頭が貫通した。

「ギッ、ごぉ……」

「ベル様、もう一匹来ました！」

「！」

ビクンッと痙攣してやがては絶命したモンスターから顔を上げ、リリの言葉通り、僕達のやって来た逆方面の通路から現れたオークを視認する。

戦闘の音を聞きつけたのか、既に興奮しながら霧の海をかきわけてくる。周囲のネイチャーウェポンを装備しようともしない。

僕は死体となったオークから飛び降りて右腕を突き出した。

外れるわけがない。

つり上げた双眸をでか過ぎる図体のオークへと照準させ、僕は一気に魔法の引鉄を引く。

「【ファイアボルト】！」

「ブゲェエアアアアア！？」

電撃のごとく折れ曲がる炎の矛はオークの胸部に命中する。

オークは叫び声をあげて踏鞴を踏むけど、それだけ。黒焦げた胸は破れてボロボロになっていても、まだ撃破には至っていない。

やっぱり発現したばかりだけあって、今の僕の魔法じゃあオークを一発で倒すことはできないようだ。

【ファイアボルト】の火力はまだまだ低い。

でも――

「――ファイアボルトォッッ！！」

連射。

立て続けに放たれた炎の雷が再びオークを襲う。

狂いなく同じ箇所を被弾したオークは、胸元で巻き起こった大爆発に顎を殴り飛ばされ、天井を仰いだ格好でよろよろと後ろにふらつき……固まった。

「……」

無言でオークは灰色の塵に変わっていく。

二度に渡り【ファイアボルト】が直撃した胸部は風穴が開いており、その中にあっただろう魔石は綺麗に姿を消失させていた。

ぼろぼろと崩れていくオークだったものを見届け、僕は荒い呼吸をつきながらゆっくりと腕を下ろす。

（勝てた……）

通用した。

剣も、戦い方も、魔法も。

自分より遥かに大きい、あのミノタウロスのような大型級のモンスターに。

平静を取り戻していた心臓が、今度は次第に熱を宿していく。

達成感と、たぶん充実感。
口の端をゆるゆると引き上げていく火照った感情を、僕は思う存分に噛み締めた。

「リリ。やったよ、ぉ……」

喜色を浮かべながら振り返る僕の視界に映ったのは、白い霧だけだった。
今日まで行動をともにしてきたパートナーが、忽然と消えてしまっている。
それまでの感情が一瞬で消失した。

「リリッ！？」

悲鳴に近い声が喉から放たれる。
弾かれたように顔を左右に振って、僕はルームを見回す。でも目に映るのは立ちこめる霧ばかりで、リリの姿は影も形もない。
最悪の予想が思い浮かぶけど、すぐに頭を冷やしてその場から駆け出す。
もしあの冒険者の男が襲ってきたならリリも抵抗するなり叫ぶなりする筈だ。まだモンスターと何かあったと考えた方が真実味があった。
このルームは広い。ちょっとした公園ほどの面積がある。それこそオークが何十匹と溢れてこようが問題ないほどに。
僕は視界の悪い正方形の空間を探し回った。

「……っ？」

焦りながら枯木を縫うようにして走っていると、突然鼻が異臭に襲われた。

腕で口元を覆い視線を左右にさまよわせる。そして、臭いのもとはすぐに見つかった。

木の根元に、生々しい血肉が転がっていた。

「これって……モンスターをおびき寄せるための？」

膝をついて屈み、特殊に加工されている脂ぎった血肉を凝視する。

間違いない。確か道具屋で売っていた。冒険者（どうぎょうしゃ）が多く回るダンジョン内で、モンスターを狩る効率をあげるためのトラップアイテム……。

どうして、今ここに……。

「――」

地響きが鼓膜を震わせる。オークだ。

しかも、足音は一つだけじゃない。下手くそな重奏のように、いくつも重なり合っている。

そして僕は気付いた。ぬめぬめと光沢を放つ肉の塊が、周囲の草原に散乱している。

思考が一瞬止まった後、いよいよ間近に迫った気配の数に、僕は言

葉を失う。

「グゥウウウウウ……」

「ブギッ、ブブフゥ！」

「ヌブゥウフッ？」

「ゴボォオオオオオオオオ……！」

「……嘘でしょ？」

四体。

仲良く並んで前の方からやって来るオークの群れに、僕は呆然と呟いた。

一匹でも手間取る相手を同時に四匹だなんて、無理だ、敵いっこない。

個別に対処しようとしたところであの巨体だ、射程の広いネイチャーウェポンを使われれば必ずどこかで捕まる。

逃げる。逃げなきゃ。

僕じゃこの状況は切り抜けられない。

でも、リリは？

もし怪我とか何か理由があって、このルームから動けないとしたら？

取り残すの、リリを？

血肉に釣られて引き寄せられたオーク達は、既に僕を見るなり穏やかじゃない空気を醸し出していた。

もはや一戦は避けられない距離まで詰められ、それでも僕は動けな

いでいると。
視界の外側から、ヒュンと風の切る音が聞こえてきた。

「いでっ！？」

バチン！　と右脚から何かが弾けたような音が鳴り、取り付けられていたレッグホルスターの一部が宙に投げ出される。ナイフがしまってある嚢だ。
ホルスターの革の留め具には、キラリと光る金属矢が突き刺さっていた。
あ、と呟きが漏れる中、オーク達はそれを皮切りにしたかのように、一斉に襲いかかってきた。

『オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！！』

「っっ！？」

武器を装備した二体が大振りの一撃を繰り出す。
僕はなりふり構わない横っ跳びでその場を離脱した。
休む暇もない。鈍重でありながらその広い歩幅で間合いを貪り食って、瞬く間に残る二匹が掴みかかろうとする。

「ブギョァアアアアアアアアッ！」

「う、わぁっ！？」

顔のすれすれを横切った肉腕に悲鳴をあげる。
本当に冗談にならないっ！　どうするんだよ、こんなの！？
ソロの弊害を今ほど味わったことはない。息をつかせる暇もないモンスター達の乱暴な嵐に、僕は焦燥を浮かべながら必死にやり過ごした。
そして、薙がれた棍棒の一撃をかいくぐった、その時だった。
オーク達の図体の隙間の奥で、リリがてくてくと歩いているのを見つけたのは。

「リリ！？　って、どわあぁ！？」

叫ぶと同時にオークの攻撃が僕を掠める。意識を他所に向けられない。
その間にリリは、外れたレッグホルスターのケースをひょいと拾って、中から《神様のナイフ》を取り出した。
よく見た後でそれを懐の中に入れて、僕の方を向き、あのいつもの笑顔を向ける。

「シシシシッ。ごめんなさい、ベル様。もうここまでです」

「リリ、なに言ってんの！？」

「……リリは、ベル様はもう少し人を疑うことを覚えた方がいいと思います」

僕の混乱した叫びにリリは可愛らしく首を横に傾ける。
瞳はフードと前髪で窺えず、小さな唇は笑みを描いたままだった。
それも、どこか寂しそうに。

「折を見て逃げ出してくださいね」

最後の助言を残すように、リリはオーク達の向こうでそう言った。
ぱんぱんに膨らんだバックパックを背負い直し、彼女は僕に背を向ける。

「さようなら、ベル様。もう会うことはないでしょう」

最後に首だけひねって、リリは霧の奥へ消えていった。

「リリ、リリィ！？　――っっ、あーもうっ、うるせえええっ！！」

「ブギョオ！？」

「人が良すぎですよ、ベル様」

常人ではとてもではないが抱えきれない荷物を持って、リリは通路を走る。

両肩に回るバックパックの帯に手をかけながら、淀みなく迷いなく、入り乱れる迷路を進んでいった。

リリはベルに二つの嘘をついていた。

一つは、金に困ったサポーターなどではないということ。

リリは盗人だ。詐欺師と言ってもいいかもしれない。

実入りの高い職種の冒険者を狙い、特に高価な武具や貴重なアイテムを盗み取っていく賊。

例によって、武具の名店【ヘファイストス・ファミリア】のナイフを持つベルにターゲットを絞り、今日まで行動をともにしてきたのだ。

貧乏なサポーター云々は、ベルに近付くための方便に過ぎない。

そしてもう一つは……。

「んっ」

風圧によりフードが頭から外れる。
誰もが目を逸らす醜い傷痕があらわになった。
リリはその傷の上を小さな手でぺたりと撫で、そっと唇に“詠唱”を乗せた。

「【響く十二時のお告げ】」

灰をまぶされたように、グレーの光膜がリリの頭を覆う。
音もたてず光は溶けていき、あっという間に頭部の傷は塞がった。
いや、“消え失せた”。
ついでに目元を覆っていた前髪も、綺麗さっぱりと無くなる。

「やっぱり完全に“変身”しないで、ちょちょっとパーツを弄くった方が効率はいいですね」

ベルがこの場にいたら、はっとしていただろう。
大きくて円らな焦げ茶色の瞳。快活そうで可愛げな面立ち。生々しい傷は一つとして負っていない。
今のリリは紛れもなく、ベルがあの路地裏で会ったホビットの少女だった。
リリのもう一つの嘘。それは正体を偽っていたこと。

冒険者の男に追われていた、いかにも怪しいホビットという印象を払拭するため、既に発現しているこの“変身魔法”、【シンダー・エラ】で、自分の外見を装っていたのだ。

リリはこの特殊な変身魔法を駆使して多くの冒険者を騙してきた。被害にあった冒険者が怒り狂って盗人を追ったところで、その人物はもうリリにとって“赤の他人”だ。捕まるわけがない。

少し噂になっている“盗みを働くホビットの複数犯”は、リリの魔法の成果を如実に表している。

時にはサポーターに成りすまし。

時には無害な市民に成りすまし。

完璧な他人への変身だけでなく、傷といった身体的特徴をも付与できる魔法効果を使いこなして、リリは今日まで悪事を積み重ねてきた。

（やっぱり、あの冒険者に変身の最中を見られてしまったのは失敗でした……）

路地裏で追いかけてきたあの男は、リリに金品を巻き上げられた冒険者の一人で、たまたま【シンダー・エラ】の発動が目撃されてしまったのである。あの路地裏の追走劇の真相はそれだ。

あの時は何とか事無きを得たものの、しかし今になって、あの冒険者はどうやらベルにいらぬ告げ口をしたらしい。

昨日ベルと男との密会を見つけた後、明らかにあの少年の様子は異なっていた。頻りにリリの身を確認し、何度も何度も隠れてこちらのことを窺ってきた。まるでリリのことを疑って探り、あるいは姿をくらますことを警戒するかのように。

あの時に潮時だと判断したのは、間違っていなかっただろう。

もったいないなぁ、とベルから掠める利益を名残惜しく感じる自分がおり。
終わってしまった、と少年が貸してくれていた居心地を、未練に思っている自分がいる。
だがどんなに思いを馳せたところで、あれ以上関係を続けることはできない。叩きつけられてしまったリスクに目を背けることなどできはしない。
全てを知ったベルは、自分のことを許そうとしないに決まっているのだから。

「……」

リリは顔色を暗くした。だがすぐにはっとなって、ぶんぶんと頭を振る。
何を今更、と罪悪感を蹴りつける。冒険者にほだされるなんていい笑い種だ。
冒険者なんてみんな一緒なのだから。
ベルも腹の内ではリリのことを馬鹿にしているに違いない。リリのことをいつでも裏切れるに違いない。
リリは無理矢理に眉をつり上げた

（冒険者なんて、冒険者なんてっ……！）

リリは、【ソーマ・ファミリア】の構成員の夫婦から生まれた子供だった。つまり生を授かった時点で、彼女は【ソーマ・ファミリア】

の末端に加わることを義務付けられていた。
だから、リリはリリでいた時点で、既に歯車が狂っていたのかもしれない。
世界はリリにちっとも優しくなかった。
両親は年端もいかないリリに金を稼いでくるように再三申しつけていた。親らしいことはせず、気付いたら死んでいた。金――神酒を求めるあまり、ダンジョンでモンスターに殺されたそうだ。
神酒を奪い合う【ソーマ・ファミリア】の中でリリは当然のように孤立し、独りぼっちになる。【ファミリア】の仲間は小さなリリを気にも留めなかった。苦しい毎日が続いた。
それから構成員の拡張の際に配られた神酒を飲んでしまったことで、リリも神酒の魔力に取りつかれた。
頼れる仲間はいない。独学独力で金を稼ごうと躍起になった。けれど無駄だった。リリには冒険者の才能がなく、サポーターへの転換を余儀なくされた。

そしてリリは搾取された。

冒険者パーティのサポーターを務める度、彼等は口々に言った。
魔石をくすねたな。金をちょろまかしたな。これは罰だ。お前には分け前をくれてやらない。
身に覚えはないリリは誤解ですと必死に取りすがったが、彼等はニヤニヤと笑って自分を振り払うだけ。
モンスターにリリが殺されかけても助けようとしない、治療しようともしない。荷物を無くしたらただじゃあおかないと、蹴りが飛んでくるだけだった。
【ソーマ・ファミリア】の者達は最初から当てにならない。ダンジョンをもぐり終えた後は、醜い報酬の奪い合いが待っている。

（リリは冒険者が嫌いです。ええ、大っ嫌いですっ！）

神酒の魔力が尽きた後も、リリはサポーターを続けるしかなかった。生きていけないからだ。

一度、涙を滂沱と流しながら【ファミリア】から逃げ出したことがある。

【ファミリア】の構成員という肩書を捨て、一般人に成りすまし何とか仕事にありつき、ようやく平穏を手にしたのも束の間。よりによって、【ソーマ・ファミリア】の仲間にリリのささやかな幸せは壊された。

どこから聞きつけたのか、目を狂わせた冒険者達がリリのもとへ押しかけ、金を奪っていたのだ。彼女の居場所も徹底的に打ち壊していって。

それまで優しく気さくだった花屋の老人夫婦はすぐにリリを追い出した。汚物でも見るかのような彼等の瞳を、リリは今でも覚えている。

【ソーマ・ファミリア】はここでも自分を苛めた。

リリはソーマを恨んでいる。何故こんな【ファミリア】を作り上げたのかと。

ソーマに悪意はない。害意もない。そもそもリリ達には興味すらない。無関心。

ソーマは何もしてこないし、してくれない。【ファミリア】の状態が今どうなっているのか、把握しているのかも不明だ。

ひょっとしたら彼を恨むのはお門違いなのかもしれない。偉大なる父（カミ）の視点からすれば、子供達がいっそ哀れむほどに愚かなだけなのかもしれない。

しかしリリは、自分の主神を恨めしく思うのを止められなかった。

そして結局、リリに残された道は【ソーマ・ファミリア】所属のサ

ポーターとして生きていくしか他なかった。周囲に迷惑が及ぶ。
例え【ファミリア】の一部の構成員からはいい財布と目をつけられ、冒険者達からはタダ働きを強要させられたとしても。

そう、冒険者なんてみんな同じだ。
自分より弱いリリに酷いことをする。
あの少年だって、きっと、きっと……。

（ベル様だって……ベル様だって！）

あの優しい少年だって、いつか手の平を返すに決まっている。そうに違いない。
裏切られる前に裏切って何が悪いというのだ。
自分を孫のように良くしてくれた老人夫婦、彼等の最後の目を思い出す。そうだ、どうせ最後には捨てられる。見捨てられる。
自分の意思と反して疼く胸の痛みを、リリは思いきりひた走ることで塗り潰した。

ベルと別れたルームから上層への連絡階段は全く離れていない。難なく１０階層を後にして９階層、８階層と順調に上っていく。
リリは１１階層までのダンジョンの地理を徹底的に網羅していた。
彼女が冒険者をはめる手口は、今回のベルのように、何らかのハプニングを人為的に見舞い、混乱している隙をついて彼等の有り金を奪って一目散に逃げるというものだ（或いは気付かれないうちに“する”）。

その場合、彼等に追い付かれてしまっては元も子もない。リリは柔軟な対応が可能な完璧な逃走経路を、ギルドに貼り出されている階層事のマップを頭に叩き込むことで確保していた。
モンスターと遭遇したとしても、リリは他の冒険者になすりつける術に長けている。むしろそんな技術ばっかり鍛え続けてきた。
もはやダンジョンの低層はリリにとっての庭だ。モンスター達を手玉にとる自信すらある。
後は、戦利品を処理して手早く“リリに”戻ってしまえば、追手の手はもう彼女にたどり着くことはない。
あくどくて、姑息で、そして一人では何もできない、リリの精一杯な手口だった。

リリがこうして冒険者達を襲うようになった理由は、ひとえに復讐、意趣返しだ。
散々自分を苛み苦しめてきた彼等から、今まで奪われたものを取り返すと決めたのだ。【ソーマ・ファミリア】の身内さえ何人か毒牙にかけてやった。
リリはその行為を正当な権利だと信じて疑っていない。ベルのような冒険者の場合は……ついていなかった、と自分に嘘をついてまでそう思い込んでいる。自分と同じで運がなかったのだと。
神酒にはもう関心がない。逆に忌み嫌っている。また心のどこかで怯えてもいる。
ほんの香りに触れただけでも、再び自分は獣のように酒の魔力に取りつかれてしまうのではないかと。
だから、金を集めている目的は特にない。あえて言うなら生きるためだろうか。復讐自体が目的になっている節もあるのかもしれない。
いつかは大量の金と引き換えに【ファミリア】から脱退して、オラリオを出てみようかとぼんやりと考えてもいる。

「んんっ！」

背の高い雑草を踏みつけ、リリは走行を中断した。
ルームに足を踏み入れたリリの真正面、一本しかない出口の通路の前で、８階層仕様のゴブリンが一匹でうろうろとしている。
他の冒険者の姿はない。通路の真ん前に陣取っているため避けても通れない。引き返して別のルートをゆくとなると、ベルの身体能力を考慮したら少々危なくなってくる。
あっちはリリと比べ物にならない速度で追ってくるのだ、捕捉される可能性がある。

「リリの体は野蛮なことには向いていないのですよ？」

言いつつ、リリの決断は早かった。
クリーム色の外套、その右手の裾をぐいっとまくる。
現れたのは腕に取りつけられた小型のハンドボウガンだった。リリの、いやホビットの細い腕にもぴったりあうように採寸されている。

（ゴブリンに『魔剣』はもったいないです！）

一歩右足を踏んでボウガンを構える。
ホビットは総じて視力が高い。リリの円らな瞳がこの時は鋭くなって、ゴブリンを真っ直ぐに射抜く。
相手もこちらの存在に気付いた。

「ばっきゅーんっ！」

恐ろしい速度で金属矢がボウガンから撃ち出された。
大気を貫く高速の矢はゴブリンの右目へと吸い込まれる。

「ギギャアアアアア！？」

「失礼します！」

醜い叫喚をあげて目玉を押さえるゴブリンの横脇を抜く。
どんっと幅の広いバックパックがゴブリンを突き飛ばした。
リリも工夫さえすれば戦える。しかしそれは多くが武器の性能とアイテムに頼る行為だ。一体のモンスターにかける費用が割に合わな過ぎる。
あくまで自衛の時にのみリリは戦うようにしている。

「シシシシッ。リリはお一人で何でもできるベル様が羨ましいです！」

【シンダー・エラ】を始め、リリの力は戦闘には向いていない。リリは非力の身だ。
冒険者達に復讐を誓うようになって手に入れた魔法も、弱い自分を変えることができるのではないかと期待を膨らませていただけに、その効果を知った後は酷く落胆したものだった。

だが次第に自分にできることとできないことを正確に掴んでいったリリは、自分の能力を最大限に活かせる方向へ開拓していった。
証拠に賊まがいのこの方法では着実に成功を収められるようになっている。
今では以前の弱い自分を笑ってやれるくらい、リリはたくましくなった。

（7階層っと！）

壁の中に埋め込まれた形の階段を駆け上げ、また一つ階層を上げる。
ダンジョンの壁面の色が薄緑色に変わる中、リリは依然速度を落とさず走り続ける。

（この階層を越えてしまえば、後はもう楽勝ですね）

モンスターの傾向からいえば、気が抜けないのはこの7階層が山だ。
ここを乗り越えれば後はどうにでもなる。
リリは少し口元を緩めて、見えてくる次のルームの入口に足を進めた。

「大当たりだぜ」

「えっ？」

狭い通路を抜け、ルームに身を飛びこませた次の瞬間だった。
横から伸びた足が、身長の低いリリの膝を捉えた。
つんのめったリリは豪快に地面へ飛び込む。背のバックパックが何点かの荷物を吐き出した。

（な、なにがっ……？）

混乱しながら地面に手をついて起き上ろうとするが、長い影がリリを被覆する。
はっとして顔を上げる前に、強引に掴み上げられて、顔面を思いきっり殴られた。

「ふぎっ！？」

「詫びを入れさせてもらうぜぇ？　……このっ、糞ホビットがあっ！！」

鼻血がボタボタと滴り出る間にも、もう一発、力任せの拳が頬に叩きこまれる。
視点が碌に定まらないそこへ蹴り。ごろごろと地面に転がり、バックパックがとうとう背中から離れた。
追い打ちをかけるように、腹部へ足のつま先が突き刺さる。

「――ぁ！？」

ボールのように吹き飛び、一回、二回と、迷宮のフロアをバウンドする。
勢いがようやく止まった頃、リリは襲いかかってくる痛みの渦にもがき苦しんだ。

「あっ、づっ、うあぁっ……！？」

「はっはははははははっ！！　いいザマじゃねえか、コソ泥がぁ！」

チカチカと点滅する視界の中で、リリは何とか声の主を見た。
ヒューマンの冒険者。昨日ベルと接触していたあの男だ。
男は醜いほど口を上げて笑ってみせる。

「そろそろあのガキを捨てる頃だと思ってたぜぇ？　ここで待ってりゃあ、絶対会えるってもなぁ！」

今リリ達のいるルームはいわば7階層の中間地点。
迂回ルートはなく、8階層へ向かうにしても6階層へ戻るにしても、必ずこの空間を通過しなければならない。
リリはまんまと待ち伏せされたのだ。

「見覚えのある白髪のガキにホビットが付きまとっているのを見た時には、まさかとは思ったがよ……何だ、あのガキは目もくらんじ

まうほどいいもん持ってたのか？　迂闊じゃねえかよ？」

「っ……！」

「まぁんなことはどうでもいい。ブッ殺す前に、俺の剣を盗っていてくれた落とし前、つけさせてもらうからなぁ……！」

身ぐるみをはいでやる、と男は嗜虐的な目をして告げた。
血の止まらない鼻を押さえていたリリに手を伸ばし、その外套をはぎ取って装備品を取り上げる。
革の服だけになったリリは抵抗らしい抵抗も働けない。

「魔石に、金時計にぃ……おいおい、お前、魔剣なんか持ってやがったのかっ！？　ひゃはははははははっ！　これも盗み取ったってわけかよ！」

高価な魔剣の存在に男は愉悦する。
他人の所有物とわかっていながら、己のことは棚に上げ、既に自分のものにするつもりらしい。
男は紅のナイフを片手で取り回し、一気に上機嫌になった。

「くくくっ……！　いいぜ、許してやるよクソホビット。てめえからこんなプレゼントもらっちゃあ、俺も器のでけえところを見せてやらねえと……なぁっ！」

「あぐっ！？」

二度に渡り腹を蹴られ、リリは悶絶した。
碌に息を吸えない中、男の声が遠くに聞こえる。

「こりゃあ振れば炎でも出てくんのか？　くははっ、てめえで試してみるか？」

「ギィィ……グシィイイイイイイイイ！」

「……あぁ、コイツでいいなぁ」

通路からのっそりと姿を現したキラーアントに、男は口をつり上げた。
長剣をそうするように上段からナイフを振るう。

「そらよっ！」

「グバァアアアアアアアアア？！」

「おー、燃える燃える」

ちょうど頭部と同じ大きさの炎を食らい、キラーアントは悲鳴をあげる。
男はそれを満足気に見た後、ニヤニヤと地面に這いつくばるリリを見下ろした。

「じゃあな、糞ホビット。あの獲物はてめえにくれてやるよ。俺様の“最後”のお給金ってやつだ」

「……！」

「少し待ってりゃ狩り放題だぜ？　ははははっ！　わらわらと集まってくるからなぁ！」

男はリリのバックパックまで物色し、目ぼしいものを奪ってルームの外へ向かう。
燃え盛るキラーアントを放置して、冒険者は哄笑しながらその場を去っていった。

「報酬なんてっ、一度もっ、渡してなんかないくせに……っ！」

爪を地面に突き立てながらリリは吐き捨てる。
追剥にでもあったような彼女の姿は無残の一言に尽きた。

「シッ、シシシッ……。いい、ですっ……くれてやりますっ。調子に乗って使えばっ、あんな魔剣、もうすぐに砕けるのですから……！」

無理をして頬を引き攣らせ、ふてぶてしい笑みを浮かべる。ともす

れば、その言葉は負け惜しみに違いなかった。
サポーターとしての財産を全て奪われながら、リリは再起を計る。
手をぷるぷる震わせながら、何とか上半身を起き上らせた。

「はぁ、はぁ……っ！？」

「ガバァ、ギシャァアアアアアアアアアア！？」

キラーアントの絶叫が、リリの視線の先で暴れ馬のように猛っている。
炎の衣を纏っているモンスターは手足をばたつかせ、滑稽なダンスを踊っていた。だがリリにはそれを笑うことはできない。
キラーアントは瀕死の状態に陥ると特別なフェロモンを発散する。
仲間を呼び寄せる、特別な救援信号をだ。
やがて男の言葉通り、通路から二匹のキラーアントがやって来た。
ぐらぐらと体をよろめかせ、視線の先の一匹と同じように、燃え盛りながら。

「ギガァアアアアアアア……ッ！」

「なっ……」

また、魔剣を使ったのか。しかもあんな炙り殺すような使い方をして。
リリは目を剥いて、そしてすぐにあの冒険者の真意を悟ってしまった。

最も凄惨なやり方でリリを始末する気だ。絶望という絶望を与えてリリを殺す気だ。
醜悪な蟲の大群に、リリの肉片一つ残さず食い荒らさせる気だ。

「うぐぅっ……！」

不味い、不味い、不味い。
三体のキラーアントが永遠とフェロモンを出し続けたらどうなるのか、どれほどの数の仲間が引き寄せられるのか、リリには皆目見当がつかない。
今すぐこの場から離れなければ取り返しのつかないことになる。
リリは必死に鞭を打ち込むが、しかし小さい体は簡単に言うことを聞こうとしない。
痛めつけられた全身は、しばらくまともに動き出しそうになかった。

「ガァアアアア……」

「ギュシイイイイイッ」

「ひっ……！」

たちまちキラーアントはその数を増した。
通路の奥から四匹も固まっていっぺんに出てくる。
このルームの出入り口は三方向、ちょうどT字を描くように配置されていた。
男が消えた左手の通路からは続々とキラーアントが溢れてくる。

Tの下の部分に当たる、リリが8階層からやって来た方向からも、いよいよ蟻のモンスターは姿を現し始めた。

「何だこりゃあ……」

「キラーアントの群れ？」

「おい、やべえぞ。さっさと逃げねえと」

聞こえてきた声にリリは顔を振り向けた。
残された右手側の通路、そこから三人の冒険者が顔を覗かせている。
見覚えのある三人組に、リリは藁にも縋る思いで声を張った。

「カヌゥさん！　ケイさん！　レンダーさん！　助けてくださいっ！」

「？」

「ありゃあ……アーデか？」

男達がリリの方に気付いた。
迫ってくるキラーアントに尻餅をついたまま後退しながら、リリは必死に懇願する。

「お願いです、リリを助けてください！　……お礼は、お礼はちゃ

んとしますからっ！」

『……』

男達は顔を見合わせ、ニッと笑った。
ずかずかとルームに入り込んでリリのもとへ足を進める。
近寄って来た数匹のキラーアントは連携して素早く息の根を止めた。

「大丈夫か、アーデ？　来てやったぜ？　お前を助けるためにな？」

「……はい。ありがとうございます」

「同じ【ファミリア】の仲間だからな、頼まれちゃ断れないってもんだ」

男達はリリと同じ【ソーマ・ファミリア】の構成員だった。
そして先日、リリを脅迫して金を巻き上げようとしていた者達でもある。
リリはうつむきながら仲間の一人、カヌゥに言葉を絞り出した。

「そうだぜぇ、来てやったんだぜぇ、アーデ？　お前のために、こんなヤバいところへ危険を顧みないでな？」

「……はいっ」

「俺の言いたいこと、わかるよな？」

どこか芝居のかかった口調がうつむくリリに絡みつく。
リリを見つめる瞳は、実際には彼女を見ていなかった。
男が見ているのは金だ。厳密に言えばその先にある神酒だ。
一見冷静そうに映るカヌゥの顔は、その内側に不安定な情緒を厄介なまでに抱え込んでいる。

「おい、早くしろ！　本当にやべえ！」

「わかってる！　……お前、昨日は金はないって言って出さなかったよな？　もし、また誤魔化そうとしたら……」

「わかってます！　わかってますからっ！」

かろうじて理性を繋ぎ止めているような顔に、リリは顔を縦に振った。
出し惜しみしている暇はないと、隠していた小さな鍵の首飾りを男に差し出す。

「何だ、これは？」

「オラリオの東区画にある、ノームの貸し出し金庫の鍵です……」

「セーフポイントのことを言っているのか？　あの小さいボックスに大金を保管できる余裕なんて……」

「入っているのは、ノームの宝石です……」

「……なるほどなぁ」

ノームが所有する宝石や鉱物は貴重だ。確かな価値と信用がある。
リリは所持に困る金貨を件の万屋で宝石に変えてもらい、万が一のために貸し出し金庫に隠していたのだ。
薄ら笑いを浮かべ頬りに頷くカヌゥは、リリの服の襟を掴んで立ち上がらせ、そしてそのまま、その軽い体を自分の眼前に持ち上げた。

「カ、カヌゥ、さんっ……？　なにをっ……！」

「ちょっとヤバいんでなぁ。周りを見てみろ。もう囲まれかけちまってる」

二十にも及ぼうかというモンスターの大群がリリ達を方位しつつあった。かろうじて右手の出口だけは塞ぎきっていない。
吊るし上げられたリリは細い足をばたばたと振るが、虚しく宙を泳ぐだけだった。
無精髭を生やす獣人のカヌゥは嫌らしく笑みを浮かべる。

「囮になってくれや」

「！？」

「アーデがあの虫どもを引きつけてくれりゃあ、俺達はもと来た道

を戻れる。あそこにはまだそこまで群がっていねえし、時間を稼いでくれりゃあ俺達でも蹴散らせるだろ」

驚愕した眼差しで目の前の男を見つめる。
ばっと他の男達を見ると、彼等もまた下卑た笑みを浮かべていた。

「金がねえって言うんなら、お前はもういらねえよ。最後に俺達をしっかり支援してくれよ、“サポーター”？」

投げられた。
宙高く放物線を描き、キラーアント達の頭上を飛んでいく。モンスターは飛んできたリリに敏感に反応し、一斉に彼女を仰いだ。
時間を止めるリリは、大笑いして去っていく仲間達を見つめ、やがて地面に叩きつけられた。
衝撃で呼吸が止まりかけたが、それだけだった。

「……は、ははは っ」

仰向けのままダンジョンの天井を見上げながら、リリは壊れたように笑った。キラーアント達が足並みを揃えて彼女のもとに反転する。
最後の最後でこれかと、リリは無性に笑いたくなった。
やはり冒険者は信用ならない。
もしこの仕打ちが因果応報と言うのなら、あまりにもあんまりだと、リリは思う。

『ギシャァアアアアアアアアアアアアッ！』

数え切れないキラーアントが、ぽっかりと空いているリリの周囲に詰めてくる。
リリの投げられた場所は通路が唯一ない、一面が壁に面した空間。
壁面を背にする形で、リリは虫のモンスター達に取り囲まれた。

「……悔しい、なぁ」

ぽつりと呟かれた言葉がキラーアントの粗雑な足音に踏み潰されていく。
専門職のサポーター。蔑視の対象。
欠損しても冒険者は痛くも痒くも思わないただの荷物持ち。役立たず。
一人では何もできないリリの天職。まさに、リリそのものだ。
愚図な自分。
リリは、リリのことが一番嫌いだった。

「神様、どうして……」

リリは誰かに呼ばれたかった。リリは誰かに頼られたかった。
利用されるのではなく、必要とされたかった。
弱い自分は嫌いだった。他人の手で人生を左右される自分のことが大嫌いだった。

リリは、リリではない誰かになりたかった。
発現した魔法も、きっとリリのそんな思いが形になって現れたのだ。

「どうして、リリを、こんなリリにしたんですか……？」

これまで何度死のうと考えたかわからない。
神のもとへ還り、何度リセットを望んだのか覚えていない。
リリは今の自分ではない、もっとマシな、別のリリになりたかったのだ。
弱虫なリリは、結局そこまで踏み出すことはできなかったが。
リリは心のどこかで、己のリセットを望み続けてきた。

「ギシュゥゥゥッ……！」

「……そうですね。もう、関係ないですね」

モンスター達が作る半円形の空間が狭まっていく。キラーアントの波が蠢きながら詰め寄ってくる。
コトン、と米神を地面につけて横を向いたリリは、諦念にまみれた笑みを浮かべた。
横になった視界の中で、一匹のキラーアントが大きくなってくる。
最期が目前に迫っていた。

「……寂しかったなぁ」

ぽろりと口から転がった言葉に、リリは驚いた。
最後の最後でこぼれた胸の中の本音。
そうか、自分は寂しかったのか。
誰からも必要とされてないことにはもう慣れていた。
慣れてはいたが、寂しさが消えることはなかったのだ。
寂しい。
誰も頼れず誰からも頼られなかったことが、寂しかった。
独りでいることは慣れてしまったけど、寂しかった。

「そうですか、リリは……」

誰かと一緒に居たかったのだ。
ようやく認めることのできた胸の内の気持ちに、リリは自嘲した。

「ギシュアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

キラーアントが爪を振りかぶる。ダンジョンの天井から降る燐光を浴びて、ギラリと輝いた。
もうさよなら。
やっと死ねる。やっと終わる。やっと天に還れる。
ようやく、ようやくリセットだ。
何もできない自分を止められる。弱い自分を終わらせることができる。
誰も助けてくれない自分を、何の価値もない自分を、寂しい自分を、やっと、リセットすることができる。

（あぁ、リリはやっと……）

……やっと、一緒にいてくれる誰かを見つけられそうだったのに。

（やっと…………死んでしまうんですか？）

リリは泣き笑いを浮かべた。
そして、

「ファイアボルトオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッ！！」

爆炎。

「……え？」

緋色の炎が、ルームに立ち昇った。

「リリィイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイイッ！！」

リリを呼ぶ声がキラーアントの群れを引き裂く。
爆炎が爆炎を生む轟音。突如として始まった後方からの襲撃に、キラーアント達は慌てふためいて方向転換しようとするが、互いの体が阻害しあって身動きがとれない。
立て続けに炸裂する火炎は穿孔機のように虫の大群を抉り、リリの見開いた目にもはっきりとその炎の雷が見えた瞬間……白髪の少年が、モンスターの壁を割って飛び出してきた。

「そこどけえええええええッ！」

「ギガッ！？」

短剣と短刀を振りまわす少年、ベルは、強引にキラーアントの群れを退けた。
リリの側で腕を振り上げたまま固まっていた一匹に肉薄し、瞬時に首を刈る。

「リリッ！　大丈夫、ねえ！？　僕のことわかる！？」

「……」

自分の体を抱く人物が、リリには最初わからなかった。
藍色の瞳が動揺に震えている。肩を掴む指が痛いくらいに握りしめられていた。

慌てながら取り出されたポーションが、口元に寄せられる。
縋るような眼差しを向けられてリリはゆっくりと口を開き、その青い液体を飲みほした。
すぐに、けほっ、けほっ、と可愛らしい咳が響く。

「……ベル、さま？」

「そうだよっ。無事、だよね？」

先程のリリのように涙ぐむベルは、笑いながら声を上擦らせていた。
先程まで寒かったリリの胸が痛いくらいに締めつけられ、熱くなる。
ベルはリリの安否を確認すると、すぐに顔を上げた。
鋭い双眸が依然として健在しているモンスターの群れに向けられる。
リリは無意識にその小さな手を動かし、懐に隠していた漆黒のナイフをベルのもとに差し出した。
彼は相好を崩してそのナイフを受け取る。

「いつもみたいに待っててて？」

最後にそう言って、ベルは立ち上がった。
怒りの啼き声がルームのそこら中を木霊している。あちこちで上がっている炎はベルの魔法の残滓だ。
これ以上のない孤立無援。
ベル達を完全包囲するキラーアントのその数なんと三十。更に通路の奥からまだ量産されてくる。
今にも飛びかかってきそうなモンスターの一群に、しかしベルは怖

じけない。
先日までのベルなら間違いなくその数の多寡に屈していた相手。いや、今でさえまともにやり合っては太刀打ちすることはかなわない。しかし、今のベルには『魔法』がある。

「いくぞっ……！」

レッグホルスターから柑橘色の液体が詰まった試験管を取り出す。最近ようやく魔法制限に関わる精神力（マインド）の存在を知ったベルが、決死の覚悟で購入した価格８７００ヴァリスの切り札。
「マジックポーション」。精神力回復特効薬。
ベルは栓を抜いて一気に嚥下した。

「……グシャァアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッッ！！」

「ッッ！」

一匹のキラーアントが駆け出した瞬間、ベルも右腕を正面に構える。

「ファイアボルトーーーーーーッ！！」

炎の稲光が炸裂した瞬間、キラーアントは爆砕され吹き飛ばされた。
一斉に動き出したモンスター達にベルは咆哮を連ねる。

炎雷の速射砲。
ベルが叫ぶ度、猛り狂った炎が走り抜けダンジョンを煌々と照らし出す。
緋色の雷は確実にキラーアント一体を葬り去り、時には二体まとめて串刺しにする。
爆風の余波を受け、キラーアント達はベルに取りつくことを許されない。
圧倒的な数の差を、魔法の恩恵が覆す。

「あああああああああああああああああああッ！！」

その数を激減させたキラーアントの集団にベルは武器を装備した。
《ヘスティア・ナイフ》と《短刀》を両手に持ち、満身創痍の体の敵軍へぶち当たる。
ナイフから発せられる紫紺の輝きが走る度、キラーアントの首が、胴が宙を飛んだ。

「……」

リリがその光景を半ば呆然としながら見守っていた。
白い影が駆け抜ける度に化物達は蹂躙され、瞬く間に体液を迸らせ事切れていく。
速くて、鋭くて、強い。
気が付くと、あれだけいたキラーアントの大群は動かなくなっており、ルームに立っているのは少年一人だけになっていた。
二刀の短刀を鞘に戻すベルは、自身も安堵したような表情で振り返

り、リリのもとへ小走りでやって来た。

「……して」

「え？　何、リリ？」

「どうしてですか？」

リリの口は勝手に動いていた。
他に何か言うことがある筈なのに、それとは別の言葉がこぼれていた。

「何でリリを助けたんですか？　どうしてベル様は、リリを見捨てようとしないんですかっ？」

「……ええぇ？」

「まさかご自分が騙されていたことに気付いていないんですかっ？　リリがベル様を驚かしてやろうとナイフを持っていったなんて、そんな馬鹿なことを考えているんですか！？」

間抜けな顔をするベルにリリはとうとう声を荒げていた。
自制の利かない感情が口をついて出てくる。

「ベル様って何なんですか！　馬鹿なんですか！　死ぬんですか！

？　救いようのない阿呆なんですか！？」

「死っ……！？　ちょ、リリっ、落ち着いて……！？」

「無理です！！　ベル様は何も気付いていらっしゃらないでしょう！　リリは換金の際にお金をちょろまかしていました！　ベル様とリリの分け前は半々などではなく４：６です！　後から調子に乗って３：７にした時だってありました！　アイテムのお使いを頼まれた時も定価の倍以上の代金の額をベル様に吹きかけました！　合計十二品もです！　盗む食指もわかない装備品やアイテムのしょぼさに失望したことなんて数え切れません！！」

次々と暴露される事実にベルは口をひくつかせる。

リリの声は止まらない。

頭の片隅がもう止めてと必死に訴えてくるが、どうしても告白することを止められなかった。

「これでわかりましたか！？　リリは悪いやつです！　盗人です！　サポーターの風上にもおけない最低のホビットです！」

「え、えと……」

「それでもっ……それでもベル様は、リリを助けるんですか！？」

「う、うん」

「どうしてっ！？」

息を切らしながらリリはベルを見つめた。
少年が次に言う言葉に何を期待しているのか、リリ自身わからなかった。
ただ心臓が馬鹿みたいに動悸を抱えている。
ベルは面食らったような顔をしてから、頬に指をやって困ったように言った。

「お、女の子だから？」

――かぁっ、と全身が熱で湯だった。
グッと眉が怒りの角度に持ち上がる。
何故かはわからないが、体がぐつぐつと煮え滾る。
何故かはわからないが、言葉では説明できない感情が募りに募る。
意味がわからない不満が爆発した。

「ばかぁっ！　ベル様の馬鹿ぁぁッ！！　またそんなことを言ってっ、あの時と同じじゃないですか!?　ベル様は女性の方だったら誰でも助けるんですか!?　信じられませんっ、最低ですっ！　ベル様のすけこましっ、女ったらしっ、好色漢っ、女の敵ぃいいいい!!」

口走っている自分が何故か涙ぐみそうになっていた。
そんなことを言える立場ではないのに、目の前の少年に不満をぶつけていく。
不満。何が不満なのだ。助けられておいて、一体全体何が不満だと

いうのか。
もう、わけがわからない。
ベルはリリの非難の嵐をたじろいで受け止めていたが、やがてリリが息も絶え絶えになると。
本当に困ったように眉を下げて笑みを浮かべ、傷が消えたリリの頭に手を添えた。

「じゃあ、リリだからだよ」

「――」

焦げ茶色の瞳が一杯に見開かれた。

「僕、リリだから助けたかったんだ。リリだから、いなくなってほしくなかったんだ」

「……ふ、えっ……！」

「理由なんてさ、見つけられないよ。リリを助けることに、理由なんて……」

涙腺が決壊する。
大粒の涙がぐしゃぐしゃになった瞳からぽろぽろ溢れ出てきた。
リリは我慢することもできず、声を出して泣き出した。

「うえっ、うえええええええええええぇぇぇぇ……っ！」

「リリ。困ってることがあったら、相談してよ。僕ってバカだから、言ってくれなきゃわからないんだ」

「ひぅっ……！　うあああああぁぁっ……！？」

「ちゃんと、助けるから」

少年のお腹に抱きついた。

鉄色の鎧が抱擁を邪魔するが、どうでもよかった。背後に回した手で思いきりかき抱く。

頭の後ろと背中に置かれた温かい手の平が、何度もリリをしゃくりあげさせた。

知っていた。気付いていた。

ベルが自分のことを思って駆け付けてきてくれたなんてことは。

纏う軽装はあちこちへこんでいて、傷だらけで。

色素の薄い肌には掠り傷がいくつもついている。

モンスター達を無理矢理倒し、かきわけて、必死にここまで来てくれたなんてことは、わかっていた。

呼んでほしかった。言って欲しかった。認めてほしかった。

リリが大っ嫌いなリリのことを、受け入れてほしかった。

「ごめっ、ごめんっ……ごめん、なさいっ……！」

「……うん」

いつまでもどこまでも涙声は響き続けた。
虫の死骸が散乱する殺風景な一角。にも関わらず、その絵は神達が見ていたなら涙をちょちょ切れさせる光景だった。
小人を抱きしめるヒューマンは、苦笑しながら、ずっと顔を綻ばせ続けていた。

ベルはバベルへと歩んでいた。
空は快晴。いつか誰かに突然声をかけられた日と同じように、雲一つなく晴れ渡っている。
あれから二日。
リリと別れてから、音沙汰がすっかり無くなっていた。
宿泊施設からも荷物は引き払われ完璧な音信不通。【ソーマ・ファミリア】に足を運んでも得るものはなく、リリはベルの前から姿を消したことになる。

心配と不安は感じている。
あてもなく都市中を探し回ろうと思ったことも何度か。
しかしベルは同時に、何となく思っていた。
近いうちに会えるだろう、と。
本当に何となくそう思って、こうしていつもの自分のサイクルをなぞる真似をしている。
自分を見つけてもらえるように。

「！」

ベルは足を止めた。そしてすぐに動かし出した。
北西を向くバベルの門。そこに、小さくちょこんとたたずむ、クリーム色の外套。
背負ったバックパックの肩の帯に手をやって、うつむき加減。
前髪は取り払われ、円らで可愛らしい瞳が、日の下に晒されている。
足早になる歩みを抑えて少女のもとへ向かった。驚かさないように、

刺激しないように。
やがてホビットの彼女もこちらの存在に気付く。可哀相なくらい肩を上下させて、小さく身じろぎを繰り返す。

「……」

「……」

互いに手を伸ばせば届く位置までやって来た。
リリは顔を上げて、何度も口を開けようとして、またすぐにうつむいてしまう。
最初の一声が掴めないようだった。彼女らしくない姿。
ベルはリリが喋れるようになるまで辛抱強く待っていたが、やがて苦笑して、自分から口を開いた。

「サポーターさん、サポーターさん。冒険者を探していませんか？」

「えっ？」

リリは顔を上げる。
目を丸くしているその焦げ茶色の瞳に、ベルは笑いかけた。

「混乱していますか？　でも、今の状況は簡単ですよ？　サポーターさんの手を借りたい半人前の冒険者が、自分を売り込みに来ているんです」

リリも気付いたようだった。
頬が温もりに染まり、ぐっと潤み出す瞳が喜びを湛えていく。
ベルは照れ臭そうに――実際、恥ずかしながら――右手を伸ばした。

「僕と一緒に、ダンジョンへもぐってくれないかな？」

今日からまたやり直し。
ベルとリリが本当に手を繋ぐ、二人だけの小さなパーティ。
二人の関係のリセット。改めての、始まり。

「――はいっ、リリを連れていってください！」

向日葵のような笑顔を浮かべ、リリは差し出された手に自分の手を重ねた。

【リリルカ・アーデ】
所属：【ソーマ・ファミリア】
ホーム：田酒
種族：ホビット
ジョブ：サポーター
・到達階層：１１階層
・武器：短刀　弓矢
所持金：３００ヴァリス

【ステイタス】
Ｌｖ．０
力：Ｉ　４６　耐久：Ｉ　４２　器用：Ｇ　６１　敏捷：Ｇ　８５
魔力：Ｆ　１７
《魔法》
【シンダー・エラ】
・変身魔法。
・変化効果は身体的特徴に限る。極端な体格変化は無効。
・変身像は詠唱時のイメージ依存。具体性欠乏の際は失敗（ファンブル）。
・模倣推奨。

・詠唱式【貴方の刻印（きず）は私のもの。私の刻印は私のもの】
・解呪式【響く十二時のお告げ】
《スキル》
【縁下力持（エンノシタノチカラモチ）】
・一定以上の装備過重時における積載影響軽減。
・軽減補正は重量に比例。

短刀：Ｉ　５０
弓矢：Ｈ　３９

【装備】
≪リトル・バリスタ≫
・【ゴブニュ・ファミリア】作。ホビットを始めとした小人専用装備。
・サイズに似合わない高威力が売り。ボルト式弾装により連射も手軽。ただし射程に難あり。
・別売りの矢によって破壊力および飛距離は変動。

≪サポーター・グローブ≫
・モンスターの死骸処理を目的としたサポーターの装備品。使い捨て。
・強力な胃酸等から皮膚を防ぐ。異常効果にも耐性あり。
・彩色バリエーション豊富。リリのお気に入りはブラウンカラー。

9話　冒険の意味を

「オッタル。あの子、また強くなったわ」

「重畳、ですか」

「ええ」

薄暗い室内。窓の外を包む夜闇が部屋の奥まではびこっている。
テーブルの上の魔石灯が蝋燭のようにほのかに揺れる中、フレイヤは静かに口端を上げた。
バベル最上階、神の殿居。
調度品の数は少ない。一級のスイートルームを彷彿させる広い室内に似合わないほど飾り気はないが、代わりに品のどれを取っても豪奢に過ぎていた。同時に部屋の内装と品よくあしらえてもある。
巨大な本棚に常識では考えられないほど大きなベッド、暗赤色でシックな絨毯。壁には境を挟んだ太陽と月の絵画がかけられている。
どれも売りに出せば、冒険者の装備が一通り揃えられそうなほど意匠が凝らされていた。
ワイングラスを手に取りながら、銀髪の女神は選りすぐりの従者と一つの話題に興じていた。

「見違えたわ。【ステイタス】がどうこうじゃないの。魔法という切っかけを一つ手に入れただけで、あの子の輝きは一層鮮やかになった……私の目には器が洗練されたように見える」

広い一室へ冷たく差し込む月明かりにグラスをかざし、ゆらゆらと光が反射する水面に視線を馳せる。
照らされる若い白ワインには色の深みはない。勿論味わいも。
しかしフレイヤは、その透いた色こそ何事にも代えがたいと思っているかのように、己の銀瞳を笑みの形に細め、グラスに口付けた。

「器の発展……進境が著しいと？」

「そういうことになるかしら」

部屋の隅で顔色を変えることのないオッタルと、短く受け答えをする。
直立不動の姿勢で主神を見つめる従者は静かだった。
彼の黒色の瞳に見守られながら、そこでおもむろに、フレイヤはそろりと瞼を半分下ろす。

「でも、一つだけ……一つだけ、輝きを邪魔する淀みがある。まるで枷のようにあの子を縛っているわ」

「……」

「そうね、十分に足る器はある。けれど、芯が足りない。いえ芯そのものはある、でもそれが曇って見える……何かが欠けているのか、何かが邪魔しているのか」

「オッタルはわからない？」とフレイヤは振り返り意見を求めた。

まるで同じ男の子でしょう、と尋ねるかのように。
巌のように屹立する獣人はしばし口を引き結び、主人の問いに答えた。

「因縁かと」

「因縁……？」

「はい。フレイヤ様がお話してくださった、その者とミノタウロスの因縁……払拭できない過去の汚点が、本人もあずかり知らない場所で棘となり、苛んでいるのかもしれません」

オッタルにはベルとミノタウロスの話を聞かせてある。
フレイヤ自身、直接その話をベルの口から聞いたわけでもなく、あくまでそれらしい話が耳に入っただけだ。
推測の域に過ぎないのだが、しかし彼があの猛牛のモンスターに惨敗さえ生温い体たらくを演じただろうことは、確信に近い。
フレイヤは折りたたんだ指をその細い顎に添えた。

「つまり、トラウマ……本当に子供達は繊細なのね。私達は執着することはあっても過去には縛られない。興味深いわ。……それとも、貴方達の方から見たら、私達は能天気なだけ？」

「滅相もありません」

「もう少し乗ってくれると、私も退屈せずに済むのだけど……」

殷懃な態度を崩さないオッタルに「まぁいいわ」と微笑し、再び彼を見る。

「それなら、あの子に取りついている茨を取り除くには、どうしたらいいのかしら？」

いっそ挑戦的に見える眼差しと笑みを向け、フレイヤは従者に問うた。

「因縁たる過去と決別するというのなら、己の手で過去たる象徴を打ち破る以外に、方法はありますまい」

オッタルもまた、主神の問いを真正面から受け止める。

「……さしもの貴方もそうだったの？」

「男はみな轍を踏む生き物だと、自分はそのように愚考します」

クスリ、とフレイヤは笑って視線を引き払った。

憂慮の原因を一つ取り上げた彼女は、機嫌の良さを窺わせながら思考に耽る。

（ミノタウロスというモンスターがあの子に影を落としているというのなら、答えは明瞭、何をするわけでもなく待てばいい。いつか今より成長したあの子なら、確実に乗り越えられる壁……）

時が経てばベルはミノタウロスを倒す実力を備えることになる。
尾を引いている過去から脱却できるということだ。
何も問題はないだろう。

（そして、ミノタウロスを倒した暁には、あの子の輝きを阻むものは何もなくなる……）

そうなれば、やがてフレイヤの前に完熟して現れるだろう。きっと彼女の瞳が見惚れてしまうほどに。
その後は自分のお気に入りとして一生可愛がろうかと、今から想いを馳せてしまう。待ちわびる分、想いが募っていた。
今のフレイヤにとってベルは関心の中心だ。何者よりも魅力的になっている。
欲しいのだ、あの少年が。
ずっと手に届く位置に置いておきたいと思えるほどに。
そう考えたところで、フレイヤはふとオッタルに問いかけた。

「オッタル」

「何でしょうか？」

「貴方、何か思わないの？　私はあの子に夢中になって、既にいる

【ファミリア】の貴方達を放ってばっかり」

表情を変えず黙っているオッタルに、フレイヤはなおも続ける。

「もしあの子が貴方より強くなったら、どうするのかしら？」

「……」

「私は貴方よりあの子を重宝するようになるかもしれないわ。貴方の今いるその場所を取り上げて、代わりにあの子をすげ替えるかもしれない」

「フレイヤ様のお心のままに」

「妬かないの？」

オッタルは顔色を変えず真摯に、むしろ信頼さえ覗かせて言った。

「貴方の愛はみなに平等です。特別はあれ、“優劣”はない」

「……」

「私がこの場から姿を消したとしても、貴方の愛は消えないと確信しております」

銀の瞳と黒の瞳が交差する。
無言が流れる中、オッタルはその巨体を折って静かに頭を下げた。

「出すぎた言葉を」

「構わないわ。むしろ益々愛しく思えてきた、貴方のこと」

「光栄の極みでございます」

軽口を叩きあうかのように二人は言葉を交わした。
フレイヤはそれから少し意地悪そうに笑みを浮かべ、その美しい声を紡ぐ。

「でも残念ね。堅物の貴方が嫉妬する姿、少し見てみたかったのに」

「お望みとあらば」

「……ふ、うふふふっ！　あははははっ！　お願いよっ、オッタル？　あまり笑わせないでちょうだい？　貴方が生真面目にやきもちを焼いているところなんて見たら、私、笑いを堪えられる自信がないわ」

「……」

心底可笑しそうにフレイヤは声を漏らして笑った。口元に手の甲を当て、まるでいたいけな少女のようにお腹を抱えてみせる。

オッタルの方といえば、随時引き締まっている顔がこの時ばかりはほんの少し――恥じらうように――揺れた。
頭部から生える猪耳がやや変な方向に曲がる。
一頻り笑ったフレイヤは目元拭う仕草をしてから、内心では羞恥を全開にしている配下の心情を察してやり、空気を入れ替えるように話をそれとなく変えた。

「ねぇ、オッタルはどう思う？」

「……と言いますと？」

「あの子のこと。私の不安は杞憂に過ぎないかしら？」

先程までの自分の考えについて尋ねてみる。
オッタルはすぐに雰囲気を纏い直しフレイヤの言葉に耳を傾けた。

「あの子はもう私が手を出さずとも強くなる。いずれは貴方の言う因縁も断ち切れるほどに」

「……」

「でも、本当にそれでいいのかと思う私もいるわ。言葉では上手く説明できないけれど……いずれ、その内、時間が経てば……そんな文句を並べていると、そうね、酷く小心のようにも思えてしまう。そんなことないのに、自分が堕落しているみたい」

考え過ぎかしら、と独白のように呟く。
何も問題ない、何も間違っていないベルの現状に、フレイヤはただ漠然と思ってしまう。本当にこのままでいいのかと。
はっきりとした根拠はない。ただ、多くの子供達……才能ある自らの【ファミリア】の団員達を見守ってきた彼女は、時間の経過だけに全てを委ねてしまってもいいのかと思ってしまうのだ。
オッタルはこの時、初めてその瞳を細めた。

「オッタルも、この問題は時間が解決してくれると思う？」

「ええ、間違ってはいません。いずれはそうなるでしょう。しかし……」

オッタルは一度言葉を切り、絶対の確信とともに口を開く。

「冒険しない者が殻を破れぬのも、また真理でしょう」

言い切った。
己の持論を。
ここにはいない、とあるハーフエルフの少女と対極の論を。
いくども命を賭し現在の自分を築き上げた生粋の武人は、冒険しない者に“高み”へは至れないとはっきり言い切った。
それはフレイヤさえ見通すことのできない少年の未知を引き出す可能性も示唆している。
そう。フレイヤは見通せず、オッタルだけが見込んだ、少年の可能性。

「……今度のあの子への働きかけ、貴方に任せるわ、オッタル」

美の女神は葡萄酒の香るグラスを手放した。両目を閉じ、どこか投げやりに椅子の背もたれへ体重をかける。

オッタルはこの時ばかりは訝しげな顔を隠そうとしなかった。

「……どのような風の吹き回しですか？」

「だって、私より貴方の方が今のあの子のこと、わかっているんだもの」

うつむいて、少し拗ねたように言葉をこぼした後。

顔を上げたフレイヤは、瞳を細めて妖麗に笑った。

「嫉妬しちゃうくらいに」

太陽が空の正中に差しかかろうとしている。
バベルから真西に進んだメインストリート。
「冒険者通り」と呼ばれている北西の大通りとは異なり、冒険者より市民の姿が目立つ街路に、広いオープンカフェが面していた。
からっとした日差しの下で多くの客が談笑を交わしている。道ゆく雑踏が彼等のすぐ近くを流れていく。
パラソルがいくつも開き日除けを作るその内の一つに、ベルとリリは白いテーブルを挟んで向かい合っていた。

「じゃあ、【ソーマ・ファミリア】の方はもういいの？」

「はい。リリはじきに死んだことにされるでしょうから」

ベルとリリが改めてパーティを組んでから一日。
リリを今取り巻いている状況の確認のため、ベルは彼女から説明を受けていた。
初めのうちはその後ろめたさからか、中々以前のように会話を進められなかったリリであったが、それも昨日までの話。
ベルの思いも伝わってか、すっかり元通りとは言わなくとも、こう

して気兼ねなく話せるくらいにはなっていた。

「死人という扱いになれば【ソーマ・ファミリア】に関わる必要はないですし、あちらからも付け狙われることはないでしょう。何せ、もういないことになっているのですから」

「ですからベル様に迷惑はかけません」とリリは笑って言う。
変装時の前髪が無くなったことであらわになっている、その円らな瞳と愛くるしい顔立ちを視界に収めながら、ベルは若干眉を曇らす。

「僕のことはどうでもいいんだけど……その、死人だなんて、リリはいいの？」

「お心遣いありがとうございます、ベル様。ですけど割り切った方がいいと思います。リリには身寄りはいませんし……ベル様がリリのことをご存じであるなら、リリはそれだけで満足です」

本心からそう言っているリリに、ベルもこれ以上触れるのは止めた。
彼女の傷口を広げるような真似になると思ったからだ。
あとに心が残りつつも、無理矢理自分の中で完結させる。

「リリがそう言うならわかったよ。でも、【ソーマ・ファミリア】の人達にバレないかな？　リリが生きてるってこと」

「絶対とは言い切れませんが、今のリリに繋がりそうな足跡はこの

二日で消しておきました。そこまで心配することはないと思います。……それに、リリにはこれもありますし」

ぺたりとリリは自分の頭を撫でる。本来のダークブラウンではなく、白、黒、茶の混じった三毛の髪がさらりと揺れた。またそのすぐ近くで獣耳がぴくぴくと動く。瞳も輝くような黄金色だ。

【シンダー・エラ】。

リリの十八番の変身魔法により、今の彼女の外見はどっからどう見ても獣人の子供だった。

顔立ちだけはそのままであるが、間違ってもホビットには見えない。

「リリの魔法がバレちゃっている人も一人ほどいますけど……もう付き纏われることもないでしょう」

いざとなったら、リリはいくらでも他人に成りすますことができる。この能力を知らない限り、他者が「リリルカ・アーデ」に辿り着ける可能性は万が一にもない。ベル自身、この魔法の存在を打ち明けられた時はそれは驚いたものだ。

じーっと今のリリの顔を見て、確かにこれなら一発で見破られることはないかな、とベルは客観的に分析する。

「えーっと、それじゃあ……」

「はい、後腐れはありません。あっても、ベル様の手を煩わせることはさせませんから」

「それはもういいよ」とベルは苦笑しながら、取りあえず安堵を覚えた。
これでリリが危険な揉め事に巻き込まれることもないだろうと。もしそうなっても、今度は力になってやれる筈だと。
正直なところ、リリが死にかけたことの顛末を聞いて怒りと悔しさも感じている。人を人と思わない暴挙に対する怒りと、そんな彼等に仕返しができないという悔しさだ。
だが、触らぬ神に祟りなしという言葉通り、リリのことを思えば【ソーマ・ファミリア】やあの男の冒険者に関わるべきではない。こと限って、現状での報復は自ら危険を呼びにいく行為だ。
リリが無事ならそれでいい。ベルは厄介な感情を振り払ってそう結論付ける。
今の自分達にその感情は不要なものだ。

溝は埋まった。
全てではないかもしれないが、ぽっかりと隔たっていた自分達の距離は確かに縮まった。互いに手を繋げられるほどに。
ここから再出発だと、ベルは笑みを滲ませた。

「……ベル様」

「ん、なに？」

「ベル様は、本当にこのままでいいんですか？」

「え？」

「リリをこのまま許してしまっていいんですか？」

ところが、ベルとは真逆にリリは表情を暗くさせる。
ともすれば縋るような目でベルを見つめてきた。

「リリはベル様を騙していたんですよ？　ベル様の厚意につけ込んで、あまつさえ裏切ったんですよ？」

「……」

「しかも、くすねてきたお金も返せません。このまま許されてしまったら、リリは……」

最後は消え入りそうな声だった。
リリとの関係が“すっかり元通り”にならないのは、これが原因だった。
自責だ。罪悪感だ。贖罪の渇望だ。
犯した自分の行為にリリは苛まれている。もう何度謝罪されたかわからない。
大丈夫だから、と繰り返して言っても彼女の顔は優れることはなかった。むしろベルがそう言う度に落ち込んでいる風にも見える。
こういうのは求めてなんかないんだけどなぁ……、とベルは参ったように頭をかいた。
とにかく、苦手なのだ。
こういう人様の上から偉そうに物を言ったり、諭したりするのは。
今までがことごとく、されてきた側だっただけに。

「お金のことはいいよ、これからサポーターとして頑張ってくれれば。逆に、割に合わないほど働かせちゃうかもしれないし」

先日の一件で、リリは全財産を失っている。
換金していた手持ちのお金とアイテム類は全て冒険者の男に持っていかれ、貯金と言えたノームの宝石も【ファミリア】の仲間に奪われてしまったからだ。
証拠に、サポーターとしての装備は前と比べ極端に貧相になってしまっている。
返すものがないというと負い目は、随分とリリの心に自己嫌悪の念を落としているようだった。

「でもっ……」

「う～ん……隠してもしょうがないから言うけど　僕、リリに何をすればいいかわからないんだよ。怒鳴って怒るのも違うような気がするし、手を上げるなんてできっこないし、説教できるほど偉いやつでもないし……」

「……ベル様は」

「？」

「ベル様は、何とも思っていないんですか？　危険な目にまで合ったんですよ？　リリのことを……恨んでいるとか、腹が立ったとか……本当にないんですか？」

大きな瞳が必死にベルのことを見上げてくる。
自分の顔を映し上げるその目が、ちょんと触れただけでぼろぼろと壊れてしまいそうな、飴細工のように見えた。
うぐっ、と唸る。
ベルは頭を絞ってどうすればリリが納得するだろうかと深く考え、こうなったら馬鹿正直に腹を割ってみることにした。

「……正直に言うとさ、あの時はショックだったよ？　一度《神様のナイフ》を無くした時も、落としたんじゃなくて、リリが盗ったんじゃないかって真っ先に疑っちゃった。そうじゃなくても、まぁ、少し怪しいかななんて、人の話を聞いて思ってたりもしてたし」

「……」

「冗談じゃないよって思ったよ？　神様に顔向けできないって、すごく焦ったりもした。あのオーク達にだって八つ当たりしちゃったし」

「それじゃあっ……」

「ただ……【ファミリア】の人に脅されてるんじゃあ、って思ったら、怒れなくなっちゃった……」

ゴンッ！　とリリはテーブルに額を振り下ろす。

「僕のナイフは高価っていうのはわかってたから、それをお金に代えて何とかするつもりじゃあって思ってさ……だからとにかく追い

かけたんだよ。危ないことに巻き込まれているんじゃないかって」

早い話、ベルはずっとリリの裏に【ソーマ・ファミリア】の怪しい影が潜んでいるものだと思い込んでいたのだ。
小さなリリに暴力を振るって、あるいは弱味を握って、「金を集めてこい」と彼女を脅しているのではないか……つまり［リリ＝悪くない］［【ソーマ・ファミリア】＝悪い］の構図である。
リリを救出した際の「困ってること」「相談してよ」「助けるから」という、リリからしてみればある意味的外れであるあの言葉は、つまりそういう意味であった。何か厄介事に巻き込まれているなら力を貸すから、と。
ナイフの安否より、リリの安否だったのである。

「……ベル様はっ！！　繰り返しますがっ、お人好しすぎです！？　そこはリリを罰するところです！」

「で、でもさぁ、リリは【ファミリア】の事情を何も話してくれなかったし……」

「うっ……」

「わけありなのかなって、そう思っちゃったんだよ」

あの時だって絡まれていたし、とベルは付け足した。
ベルは前々から、身内が行ったリリへの暴力――頭の傷――といい、その異常な性質といい、【ソーマ・ファミリア】に思うところがあった。

リリに誘導されていた節もあるが、とにかく、【ソーマ・ファミリア】に対して疑念が膨らんでいたのだ。そこに、とどめとしてリリに絡んできたあの三人組である。
わけを聞こうとしてもリリは口を割ろうとはしなかったので、いよいよ「リリは脅迫されている」とベルの中でたくましい妄想が膨らんだのだった。

リリが悪事を白状した後も、彼女をどうにかしようとする気にはなれなかった。
自ら告白してきた時点で、既に意味のないことのように思えたからだ。リリが自分を傷付けているように見えてしまったのも原因かもしれない。
彼女の剣幕に押されベルを形成する骨子がポロリと出てしまったが、それはともかく。
ベルは間違っても、リリを制裁する気にはなれなかった。

「それにリリだってさ、キラーアントにやられそうになった僕のこと、助けてくれたでしょ？　本当にさ、あの時嬉しかったんだよ、僕？」

「あれは、でも……ただ反射的に」

「じゃあ、僕もそれでいいよ。ほら、理由も理屈もいらないじゃない？」

くしゃっと顔を破顔させるベルにリリは一度言葉を失い、すぐに恥ずかしがるように顔をうつむける。
詰まるところ、ベルはもうリリのことを信頼していた。数々のアド

バイスと親身に世話を焼いてくれた彼女のことを、仲間に等しい存在として認めていたのだ。
何より彼女と会った時から抱いていた、放っておけないという直感が、ベルのリリに対する思いを昇華させていた。
ベルはリリと出会った時から既に詰んでいたのである。

「でも、リリはっ……リリは」

顔をうつむけたまま、リリは声を次第に小さくしていった。
今のリリを見てベルはわかったことがある。
報いることができないということは、苦痛なのだ。
どれだけ許しを得たとしても、痛みの伴わない赦免は、過ちを悔いる本人にとってもはや罰に等しい。
何とかしなくてはいけないと思い、必死に上手い解決法を模索していたベルだったが……そこに援軍がやって来た。

「おーい、ベル君！」

「あっ、神様！」

幼い声がベルを呼んだ。すぐに反応して立ち上がると、案の定、ヘスティアがカフェに姿を現していた。
リリとそこまで変わらない小さな体が、賑わう客の群れを縫って、時間をかけずベル達の前にやって来る。

「お待たせ。すまない、待ったかい？」

「そんなことないです。それよりもすいません、バイトに都合をつけてもらって……」

この西のメインストリートの近くには、ヘスティアがバイトとして雇われている露店がある。

彼女と合流するために、ベル達はこの店を話し合いの場として選んだのだ。

「ボクの方は平気さ。それより……彼女がそうかい？」

「あ、はい。この子が前に話したリリです」

「は、初めましてっ」

向けられる視線にリリは転がるように椅子を降りて、地面に立った。

慌てて一礼をする。

ヘスティアがこの場に同席することになったのは、元々彼女自身が言い出したことだった。

彼女の真意は明らかだ。つまり、自分の【ファミリア】の団員に関わるサポーターをこの目で確かめようというのだ。

彼女の眼鏡にかなわなければ、リリはベルとのパーティ解消もありうるかもしれない。それを事前から察しているリリは、緊張した面差しでヘスティアと向かい合う。

だがそこで、ベルは思い出したように「あっ」と呟きをこぼした。

「いけない。神様の椅子を用意してもらってないや……」

「……！　なぁにっ、気にすることはないさ！　この客の数だ、代わりの椅子もないだろう！　よし、ベル君座るんだっ、ボクは君の膝の上に座らせてもらうよ！」

「あはは、神様もそんな冗談を言うんですね。ちょっと待っていてください、店の人に頼んできますから」

笑いながらベルは去っていた。謀を知らない純粋な子供の笑みだった。

置いてかれたヘスティアはしばし動きを止めていたかと思うと、へにゅん、とツインテールがしおれる。

哀愁を漂わせる後ろ姿に、リリは戸惑いを隠せない。

声もかけられず、一瞬で緊張感がどこかへ行ってしまった。

「……ちょ、ちょうどいい。ベル君には最初から席を外してもらう予定だったんだ、何も問題はないさっ」

「は、はぁ」

強がりのように見えたが、リリは触れないことにした。

少し強張った頬を赤らめながら、ヘスティアはぴょんっとベルの座っていた席に腰かける。

リリもそれにならった。

「じゃあ、早速付き合ってもらうよ。あの子もすぐ帰ってくるだろうしね。自己紹介なんかはいいだろう？　君もベル君からボクのことは聞いているだろうし」

「は、はい」

話の主導権を真っ先に握られていたことに気付いたのは、もう少し後のことだった。

ホビットであり年幼く見えるリリと比べても、ヘスティアのあどけなさは遜色ない。本当に少女と幼女の境を揺れ動いている。

だが、かえってそのアンバランスさが、整い過ぎた容貌の美しさに拍車をかけていた。

いじらしくあり、凛々しくもある。あたかも矛盾した二つの美を内包させ両立させてしまったような。

日傘を掠めて届いてくる日の光を浴びて、漆黒の髪が艶を帯びていた。

「率直に聞くよ。サポーター君、君はまだ打算を働かせているかい？」

「――っ」

言葉違わず真っ直ぐに切り出された問いに、リリは動揺した。

ヘスティアは表情も瞳の色も変えず常時のままだ。しかしそこには神たらしめる威厳が確かにある。

リリは試されていることを知った。見極められていると。リリの名

前を呼んでもらえていないのが何よりの証拠だった。
これまでベルにしてきたことを考えれば当然の成り行きでもある。
まず信用に足るホビットではないのだから。
だからリリは、嘘偽りなく己をぶつけることにした。

「ありえません。リリは、ベル様に助けられました。もう、あの人を裏切る真似なんかしたくない」

視線が混じり合う。どちらも逸らそうとしない。周囲の喧騒が遠い場所に離れていく。
神の前では嘘はつけない。
どこかで聞いたことのあるその言葉が真実だということを、リリは全てを見透かしているような神の瞳を前にして悟った。
彼女達がその気になれば、下界の者の嘘は全て看破されるのだろう。

「……うん、わかった。君のその言葉は、まず信じよう」

リリにとって長い時間が終わりを告げた。肺に溜めた空気を一気に解放するのを堪えながら、ゆっくりと肩の力を抜いていく。
ヘスティアの方は一呼吸を置いて、その後も姿勢を崩さず発言を続ける。

「サポーター君、ボクはベル君のことを大事に思っている。あの子なら目に入れても痛くないと豪語できるほどにね。あの子はボクの初めての家族だ、失いたくないというのが心からの本音だよ」

突然の吐露に不意を打たれつつ、リリはすぐに聞く姿勢を作る。
小柄な神はなおも言葉を継いだ。

「ベル君に話を聞いて、君の境遇は概ね把握してるつもりだ。何故泥棒まがいのことをやっていたのかも含めてね」

「……」

「君に安い同情をするつもりはないし、それは無駄だと思ってる。だから過ぎたことに何も言うつもりはない。……ただ」

本題だ、と言うようにヘスティアは言葉を溜めた。
黒の双眸からリリ以外のものを全て取り除いて、言う。

「もし同じことを繰り返して、あまつさえあの子を危険に晒したら……ボクは君のことをただじゃあおかないからな」

――リリは体を硬直させた。
呼吸の仕方が一瞬わからなくなる。
忘れていた。
目の前の少女は、自分達の身近にいる彼等彼女達は、人知を越えた『神』という存在であるということを。
リリは愚か、この都市を一瞬で灰塵に帰す力を持った超越存在だということを、当たり前すぎていて忘れていた。

漆黒の瞳に射竦められ、心臓を鷲掴みにされる中、それでももうぶれることのない想いを支えにして、リリは前を見据えながら口を開いた。

「……誓います。もう二度とあのようなことはしないと。ベル様にも、ヘスティア様にも……何より、リリ自身に」

何も知らない街の活気が賑やかに流れていく。
無言を交わし合っていた二人の時間は、ヘスティアの瞑目することで終わりを告げた。
ぱちぱちと瞬きをした彼女は「わかったよ」というように視線を飛ばし、リリの方はもう我慢できず脱力する。テーブルの上に突っ伏しそうになった。

リリに釘を刺したヘスティアはそれから、その豊満な胸の前で腕を組み押し黙っていた。何故か急激にむっつりし出している。
自分にはないものを見せつけられうぐっと詰まりながら、リリは居心地の悪い空間に体を小さくさせた。
どうしてヘスティアがこうまでご機嫌斜めなのかはわからないが、他方で、彼女もまたベルのことを大事に思っていることを肌で感じる。
どちらも思いやっている神と眷族との関係を、羨ましいと、少しだけそう思ってしまった。

「……サポーター君、正直に言うよ」

「は、はいっ」

前触れなくヘスティアが口を開いた。機嫌の悪さを発散させながら。
リリは引っ張られるように背筋を伸ばす。

「ボクは君のことが嫌いだ。ベル君に付き纏ってほしくないと思ってる」

「！」

リリが目を見開く間にも彼女は声を連ねた。

「当たり前だろう。話を聞いた時から君に対するボクの心証は最悪さ。ベル君の人の良さに付けこんで好き放題たぶらかして、あまつさえ手の平を返したように今では取り入ろうとして。何が目的だ、この泥棒猫めっ」

【シンダー・エラ】によって生えている獣耳がビクリと揺れる。
言い得て妙だとも思ったが、少し違うような、とリリは汗を流しながら思った。
ぐわっ、と揺らぎ出すツインテールに僅かに仰け反りながら、何故か神の私怨を感じ取ってしまった。

「大体さっきから何だい？　会った時からずっとしょぼくれたような顔をして。見ているこっちがほとほと憂鬱になってくるよ」

まるでお前の顔を見ていると飯が不味くなるというような言われようだった。
目を尖らせたヘスティアの言葉は止まらない。

「大方、ベル君のことを考えていたんだろう？」

「っ！」

「何故わかったかって？　ふんっ、いつも鏡の前で類は違えど似たような顔を見ているからさっ。あー、やっぱり嫌だっ、君をベル君の側になんか置きたくないっ！」

ついにはえも言えない雰囲気がヘスティアの背中から立ち昇りはじめた。ツインテールがうねうねと蠢いている。
ぎょっと目を剥いた周囲の客が途端に距離を取り始める中、リリは半泣きしそうになる。

「優しいベル君に助けられて、心を入れ替えたなんて言っている君のことだ、どうせ今度はあの子が優し過ぎて、困り果てているんじゃないかい？」

「！？」

「あの子が君に何もしようとしないから、君は罪悪感に潰れそうなんだ。ボクから言わせればそれはただの甘えだね。本当に嫌な奴だ、

君はっ」

とうとうヘスティアは言葉にも険を乗せ始めた。
じろっとやや目を据わらせながら、ぐうの音も出ないリリを見つめる。

「それならいいだろう、ボクがベル君の代わりに君を裁いてやる。言っておくけど拒否権なんてないからな。疑似『神の審判』だ、光栄に思うといいさ」

ふんっと鼻を鳴らしヘスティアはふんぞり返る。
ひるみっぱなしのリリはかろうじて頷くことしかできなかった。
むしろベルの主神である彼女に言い渡されるなら、という思う気持ちもあったのかもしれない。
リリは落ち着きなく次の瞬間を待った。
ヘスティアの方はというと、ぐぎぎっと口をあらん限りに引き結びながら、どこか苦心するようにして、やがてその言葉を吐息とともに吐き出した。

「ベル君の、面倒を見てやってくれ」

「……えっ？」

思いきり「ぶすっ」としながらヘスティアは続ける。

「言っとくけど、君のためなんかじゃないんだからな。ボクは今回の話をあの子の口から聞いて、つくづく彼のことが心配になったんだ。というか、確信した。……騙される、と」

「……」

「だから君に頼むんだ。変な奴に引っかからないように常に目を光らせてくれ。お目付役さ」

リリは今度こそ驚いた。思考がまとまらないまま何か言い返そうとしたが、かなわない。
目の前の瞳が口応えを許さなかったからだ。
ヘスティアは語調を強める。

「そもそも、断罪なんて生意気なこと言ってるんじゃないよ。いまどき神だってそんなことしないぜ？　罪悪感なんて、結局自分が自分のことを許せるか許せないかでしかないんだ」

それをベルに求めるな、とヘスティアは眼差しを強くする。

「あの子に後ろめたいことがあるなら、自分が満足するまで恩を返せばいい。当たり前だろう。それが誠意だ、真心だ、けじめだ。君が心を入れ替えたというのなら、行動で証明してみせろ」

一気に浴びせられた言葉はそこで終わった。
辛辣にも聞こえる女神の神意に、リリは頭を垂れる。
神ヘスティアはリリにチャンスをくれているのだ。いっそ慈悲深いまでに。
彼女は寛大だ。同時に人格者だ。
先程までの非難は彼女の偽りのない本音だろう。それでいてなお、リリにベルのもとへいることを許している。
いかなる者でも慈心を恵む、嘆願の庇護者。
その温情に感謝しながら、自分のことを真っ直ぐ見守るヘスティアに、リリは黙って一礼した。
彼女達の間で、森の泉に浮かぶような静寂が流れる。

「ごめんなさーいっ、遅くなりましたぁー！」

「……パーティの加入は許可する。あの子のお守も任せた。けどっ、くれぐれもっ、出過ぎた真似はしないようにッ」

「はっ？」

静寂を破ったヘスティアの重苦しい“警告”に、リリは目を丸くした。
真意を尋ねる前にベルが椅子を持ってリリ達のテーブルへと帰還する。
頬りに謝ろうとする彼の言葉をみなまで言わせず、ヘスティアはその腕を取って自分のもとに引き寄せた。

「――なっ」

「神様……？」

「さて改めて……初めまして、サポーター君。“ボクの”ベル君が世話になっていたようだね」

「ボクの」を強調させてのたまるヘスティア。纏う雰囲気はがらりと一変していた。まるで縄張りを守る虎のごときだ。

リリはぎょっとして、そのヘスティアの牽制に頬を引き攣らせる。

手を出したら食うぞ、と視線が物語っていた。

彼女は神だ。寛大で人格者で、崇めるに相応しい気高い存在だ。

しかしそれ以上に、子供だ。

というか――敵ダ。

わざわざベルの腕を自分のものに絡ませ、わざわざベルの前で仕切り直してくるその“意趣返し”に、リリは頭の裏側あたりに青筋を立てた。

忠誠に近い感情を彼女へ預けたリリだが、“こればっかり”は話は別。ぱしっ！　とベルの反対の手を両手で握って引き寄せる。

射殺さんばかりに鋭くなったヘスティアの視線に、リリは真っ向から迎え撃った。

「シシシシッ。いえいえ、こちらこそ。“リリにはお優しい”ベル様には、いつも良くしてもらっていますから」

「……ッ！」

かたや幼女、かたや幼女。

外見はいじらしく可愛い幼子のそれでありながら、二人は女の顔をして睨み合う。
座っているイスから地面に足もつかない彼女達は、バチバチと火花を散らし合った。

（かっ、神様ぁあああああ！？）

腕に押しつけられた双丘もとい非常事態によって、ベルは今自分の眼前で何が起きているのかもわからない。パニックの極みだ。
小さい彼女達の前哨戦は、ひとまず神が先制を奪うのだった。

「くっ、さすが神様……！　腐ろうが神ということですね……！」

「何が言いたいのかな、ホビット君っ……？」

「えっと、リリ。それで、これからのことなんだけど……」

一悶着の後、ベルが口を切った。
落ち着きを取り戻した各自がテーブルにつく中、今は黄金色に染まっているリリの瞳が、不思議そうにベルの方を見る。

「リリは今、ホーム……寝泊まりする家がないんだよね？」

「はい。前からもそうでしたけど、料金の安い宿を転々としています」

「ここ最近はお金が底をついてて危なかったんですけど」と恥ずかしそうに笑うリリを尻目に、ベルはこっそりヘスティアに目配せする。
彼女はぶすぅとしながらもしっかりと頷いた。

「リリ、もしよかったら……僕達のホームに来ない？」

「……え？」

「というか、【ヘスティア・ファミリア】に入らないかな？　まだ神様と僕しかいないけど……」

リリがもう【ソーマ・ファミリア】でやっていけないだろうことは、ベルにだってわかる。
以前からリリが【ファミリア】内で孤立気味だったことに加え、あの先日の事件。【ソーマ・ファミリア】に彼女の居場所は既にない

と言っていい。リリの胸中も想像に難しくなかった。
ならいっそ、とベルは思ったのだ。彼女を独りにさせるくらいなら自分達のホームに迎えたいと。むしろ彼自身の希望でもある。
リリを見定めたヘスティアから目立った反対もなく、後はリリ自身が頷くのを残すのみだ。
リリは瞳を大きく見開いて、驚きの表情でヘスティアの方を見た。

「……ヘスティア様、よろしいんですか？　ヘスティア様はリリのことを……」

「ふ、ふんっ……勘違いしないでくれよ？　いくら嫌いなやつでも、身寄りのない子供を放っておくのはボクの存在意義に関わるんだ。再就職先が見つかるまで、少し面倒を見てやろうと思っていただけさっ」

ヘスティアは頬を染めて顔を背けた。結わえてある二房の髪が翻る。
ベルは自分の主神の素直じゃない姿に苦笑する。
リリはその光景にクスリと穏やかな笑みを漏らした後、ゆっくりと、顔を横に振った。

「ありがとうございます、ベル様、ヘスティア様。そのお気持ちだけでリリは十分です」

「え……ど、どうして！？」

「これ以上お二人の優しさに溺れることが心苦しいのと……リリはまだ、【ソーマ・ファミリア】の一員ですから」

唖然とするベルにリリは淡く笑いかけながら、肩の上からそっと背中に手を伸ばす。
彼女の背に刻まれているだろう【ステイタス】の存在に、ヘスティアも眉を顰めた。

「まだ【ソーマ・ファミリア】の構成員であるリリは、ベル様達のホームへは行けません。もしリリがベル様達のホームに通っていることがバレてしまえば、いらぬ火の粉が確実にお二人に及びます。そんなことになってしまったら、リリは耐えられません」

「ぼ、僕は別にそんなことっ……ぁ」

食い下がろうとするベルだったが、何かを思い出したように止まる。
ことは彼一人の問題ではない。そこには巻き込んでしまう者が確かにいる
ベルは沈痛そうに瞼を重くしながら、何かを考え込んでいるヘスティアの方を見た。

「ホビット君、【ソーマ・ファミリア】脱退の条件は、いや脱退自体は禁止されているのかい？　君の主神は何て言っているんだ？」

「ソーマ様はこれと明言しているわけではないのですが……多分、大量のお金が必要になってくると思います」

「金か……」

人員に次いで、資金は【ヘスティア・ファミリア】に圧倒的に不足しているものの一つだ。
ベルの著しいダンジョン進捗状況もあって、約一月前に比べれば遥かに潤沢になっているが、やはりそれも生半可に過ぎる。せいぜい十万ヴァリスそこそこが支払い能力の限界だ。
それにもしヘスティア達が脱会金を立て替えることができたとしても、リリは決して受け取らないだろう。

「あの、【ファミリア】から抜けることって、そんなに難しいんですか……？　僕の知人の方に、何人か【ファミリア】から脱退している人がいますけど……」

「その主神次第だね。構成員の申し出を受け入れてくれる神もいれば、取り合わない神もいる」

【ファミリア】の脱退は、抜ける側の当人だけではなく、抜けられる側の【ファミリア】側にもリスクが付きまとう。
情報漏洩はその最たる例だ。もし脱退した構成員が他の【ファミリア】に移籍した場合、旧【ファミリア】の機密が流れる事態が起こる。無所属（フリー）でいようとも、その者の口が軽ければ情報はタダ漏れだ。
脱退式が行われる際、その【ファミリア】の主神と構成員の間では厳重な契約と儀式が執行されるのが常である。
どんなに放縦な神でも、【ファミリア】の管理だけはデリケートに行っているものなので、大概の場合、神達は構成員の脱退を嫌っていた。

「君のその知り合いも、案外“人には言えない事情”っていう子が多いかもしれないよ？」

リリのことを一度見やってからそのように告げてくるヘスティアに、ベルも彼女の言わんとしていることがわかった。

リリと同じ、【ファミリア】に所属しつつ脱退……つまり、脱走状態。

野良猫ならぬ、野良の冒険者だ。

神の許しを受けている「豊穣の女主人」のミアはともかく、シルが言葉を濁していたリューは、まさにそれが当てはまるのかもしれない。

聞けば、そのような者には捕えるにしても口を封じるにしても、【ファミリア】の方から刺客が放たれるのだと言う。

途端に【ファミリア】という響きが物騒なものに思えてきて、ベルは二の腕を擦った。薄ら寒さが肌の上を滑る。

もしあの店に身を隠しているのだとしたら、間違ってもリューを【ヘスティア・ファミリア】に誘うことはできないと、ベルは心の中で一人思った。

「……自分の意思で【ファミリア】に入った人じゃなくても、そうなっちゃうんですか？」

「シシシシッ。貴族の子は貴族、農民の子は農民。つまりはそういうことです、ベル様」

【ファミリア】の構成員の間で子がなされれば、その子供が【ファ

ミリア】に入団するのは義務だ。
主神にしてみれば、己の分身を作った時点でそれは親の責任、自分は望んでいなかっただのどうだの子供が騒ぎ出しても関与するところではない。
突き放した言い方をしてしまえば、神の知ったことではないのだ。
脱退が認められるかは、結局、その神の度量次第。善良な神に恵まれるか否か。
運がなければ、ある神には多額の金を請求され、ある神には無理難題を課せられニヤニヤと成り行きを見守られる。
ベルは複雑そうな顔で、笑っているリリを見つめた。

「ソーマの協力が得られないのなら、恩恵の引き継ぎもできない……改宗（コンバージョン）も無理か」

「そうなりますね……」

「けど、君もこのままでいるつもりはないんだろう？　いつか打診しにでも行くつもりかい？」

「はい。今はまだ無理だと思いますけど、折を見てソーマ様のもとへ足を運ぼうと思います。いい返事が聞けるかどうかはわかりませんが……」

それきり話が一時途切れた。それぞれが思い詰めたような顔を浮かべる。
うららかな陽光が少々無神経に照る中、ベルは顔を上げてリリに向かって尋ねる。

「じゃあリリ、これからどうするの？　またバベルとか他の宿泊施設に、一人で……？」

「実は顔馴染みのお店……まぁ“リリ”にとっては正確には違うんですけど、ともかく、ちょっと気を許せるノームのお爺さんがいるので、そこでしばらくお世話になろうかと思っています。あっ、勿論働きますよ？　なるべく変身も使わないで、ちゃんと認めてもらうように努力します」

影もなく明るく言うリリの言葉に、一先ずあてがあるとわかったベルは安心を得る。
リリを一人にするのは見過ごせなかったが、そういうことならば大丈夫だろう。

（今度、エイナさんとも話した方がいいよね……）

話がどう転がるかはわからないが、エイナに一度相談しておいた方がいいだろうとベルは考える。
情けない話だが、【ソーマ・ファミリア】の問題はエイナの手を借りないことには何も状況が進みそうにない。
【ファミリア】が他所の【ファミリア】の事情に干渉することはタブーだ。面子の問題もあるが、どこの【ファミリア】も自分達の領域（テリトリ）を荒らされたくはないのである。
内々のことが漏れる心配もあるので、小難しいルールが定められていない各【ファミリア】の間でも、これぱっかりは鉄の掟だった。
【ヘスティア・ファミリア】は実際に【ソーマ・ファミリア】に危

害を加えられたわけでもない。弾劾することは勿論、訴えることも不可能だ。いちゃもんをつけたとして手痛いしっぺ返しが待ち受けていることだろう。

『気に食わなければ潰す』……【ファミリア】の世界ではこの法則が実は存分に成り立つのだが、事実上ベルだけで支えている【ヘスティア・ファミリア】と中堅規模の【ソーマ・ファミリア】が争うことになれば、潰されるのはどちらかなど火を見るより明らかだった。

そしてまた、ギルドもよっぽど大きな案件でなければ【ファミリア】の問題に対しては動かない。

彼等はダンジョン……オラリオの管理者であって、冒険者のための機関ではないのだ。

ギルドが冒険者をサポートするのは、あくまでダンジョンから生まれる利益を効率良く回収するために過ぎないのである。冒険者やサポーターの個人間のトラブルは本来ならば受け合うことはない。

エイナの人の良さと厚情に甘えてしまっていると、ベルはこめかみを片手で押さえた。

「おいおい、そんな押しかける真似して平気なのかい？　何だったら、ボクのバイト先を紹介してあげようか？」

「シシシシッ。リリはジャガ丸くんの魔石点火装置の扱いを間違えて、露店ごと大爆発させる真似だけは御免なので、丁重にお断りさせてもらいます」

「なぜそれを知っているッ！？」

「つい先程周囲の喧騒から拾ったのですが、ロリ神の祟りこと、西

通りの天災の噂はこの界隈でも有名なのだとか……」

「うわあああああああっ！？　ベル君の前でバラすなぁあああああああああ！！」

「むぐぐぐうっ！？」

でもまぁ、ともベルは思う。

いま目の前でふざけ合い笑っている女の子ためなら、この白い頭で良かったらいくらでも下げようと。

ベルはようやく本当の笑みを咲かせているリリを見守りながら、自らも相好を崩した。

空が闇に包まれている。
東の空から夜明けはまだ始まっておらず、夜と朝の境界が曖昧になっている時間帯。
普段ならありえないほどの早起きをして、僕はがらんとした空き地にやって来ていた。
空き地、と言っても正確には屋外倉庫だ。周囲は木造建築の家々に囲まれている。
「豊饒の女主人」の内庭にあたるこの場所は、元々別の棟が建てられる予定だったらしく、そのスペースはかなり広い。
長方形の空間は、隅っこに木箱や掃除用具などが乱雑に置かれているだけで、一面に広がる殺風景な舗装材の地面が目立つ。とてもじゃないが有効活用されているようには見えなかった。
閑散とした物置場の中央で立ちつくす僕は、肌寒い空気を肺に取り込みながら、少し緊張しかけている体を落ちつける。
僕がこの「豊饒の女主人」の内庭に来たのは、リューさんから戦い方の指導を受けるためだ。
神様とリリが顔合わせした昨日の夜、僕はリューさんに会いに行った。
かねてから持ちかけようとしていた師事の件、それを頼むためだ。

昨夜、シルさんの計らいによってあらかじめ僕の訪問を承知していたリューさんとは、すんなりと話の場を設けることができた。
といってもリューさんが仕事の合間を縫って、夜に出向いた僕を店の裏口に案内しただけなんだけど。

「話はシルから聞いています。私に冒険者として指導してもらいたいと」

「は、はいっ」

少し冷たくも感じる普段通りの物腰でリューさんは僕と相対した。
これもいつも通りで、その時は僕もしっかりと肩を緊張させていた。

「私は人にものを教えられるほど、できたエルフではないのですが……何故私に教えを請おうとしたのか、理由を聞いてもいいですか？」

「その、本当に単純なんですけど……僕よりリューさんの方が、ずっと強そうだったから……」

つまらないほど明快な理由だった。僕も言ってからオイオイと自分で突っ込んでしまったほどだ。
リューさんに気に入られなくてはいけない、なんて思うところを働かせていたわけじゃないけど、シルさんの話によれば、彼女はこと冒険者に関わる話には頑固な一面を見せるという。認めてもらうためにも不出来なところは見せられない。
それに、リューさんはエルフだ。
ハーフエルフで気さくなエイナさんと接していて忘れそうになっていたけど、本来、森の妖精とも謳われる彼の種族はプライドが高い。これは偏見かもしれないけど、大抵は他種族に対して鼻持ちならない態度を取ると聞く。認めた者でなければ肌の接触を許さないとまで。

リューさんは僕の知識に似合わないほど礼儀正しくて恬淡なエルフだけど、やはり彼女を彼女たらしめる気高さが確かにある。
森の中で静かに月の光を浴びる、抜き身の短剣のイメージ。
自身の矜持にそぐわない言動や姿勢は、即切って捨てられそうだ。
こちらのことを実直に見据えてくる空色の瞳に、僕は慌てて言葉を付け足そうとした。もっとマシなことを言おうとして。

「えっと!?　ただ強い人なら誰でもいいっていうわけじゃなくて！　リューさんだったから頼みたかったからというかっ、つまり、あのっ、体捌きとかが様になっているように見えたから、この人なら僕にはないものを一杯持ってるんじゃないかって！　だからっ……その」

「……」

「……教わりたいって、そう思ったんです、リューさんに。僕の目標が、リューさんの動きの中に見ることができたっていうか……」

「……」

「ごめんなさい、後は……僕の都合です」

現在【ファミリア】から独立している冒険者の存在は、僕の抱える条件にちょうどよかった旨を告げる。
リューさんの真摯な瞳に隠し事ができなかった僕は、余計なことまで全て吐いてしまった。
馬鹿正直に語った自分自身に項垂れる。脈がないことを悟りつつ、リューさんの言葉を待った

「わかりました。いいでしょう」

「……？」

「クラネルさんの求めるところの師範を引き受けると、そう言っているのです」

僕は間抜けな顔をして面食らった。見込みのない筈だった先行きのどんでん返し。
鳩が豆鉄砲を食らうとはあのことだった。

「貴方は偽ることをしなかった。至情も伝わってきた。十分です。私は貴方のその直向きな意志を無下にしたくはない」

「え、ええっと……？」

「貴方は尊敬に値するヒューマンだ」

リューさんが、笑みを浮かべた。
冷静然とした顔立ちから溶けて出てきた淡い笑み。その細い眉を柔らかくして、小振りな唇が綻ぶ。
清楚な白い花のようなリューさんの笑顔に、僕は一瞬で真っ赤になった。

「私の冒険者への印象は落ちるところまで落ちていましたが……貴方のような人ならば、協力することにやぶさかではない。私で良かったら、力を貸しましょう」

快諾してくれたリューさんは今後の予定を言い渡して、すぐにお店の勤めに戻っていた。
僕はというと、半分放心しながらリューさんの言葉を聞き流していた。いや、かろうじて覚えてはいたけど。
今更ではあるが、エルフの笑顔は危険なものだと、僕はそのとき身を持って思い知らされた。
特に、常日頃から顔を凛々しく構えているエルフの笑顔は凶悪だ。
本命がいるのに目移りしてしまう僕みたいな大馬鹿野郎を骨抜きにする、伝家の宝刀。

その美しい容姿だけじゃないんだ、エルフは。
気を許した相手だけに見せる可憐な笑顔。
何でエルフが他の種族に人気があるのか、僕はその一端を垣間見たような気がした。

「お待たせしました」

冴えた声が耳朶を叩く。
顔を赤くした僕が回想から戻ってくると、リューさんが手ぶらの状態で店の渡り廊下から出てくるところだった。
リューさんはいつも僕が目にしているお店の制服ではなく、ショー

トパンツに簡素なシャツ姿。洒落なんて一切気にせず、ただただ動き易そう。

この時間帯は選んだのはリューさんの都合から。
早朝から店の準備がある「豊穣の女主人」のスタッフは一日を通して暇というものが少ない。
わけありなリューさん達から言わせると働かせてもらっているから文句はないらしいけど、とにかく余暇に割ける時間がないのだ。
僕の相手をするのはこんな朝早くからじゃないと事実上不可能らしく、頼み事をした立場としては申し訳なくはある。
僕が内心でそんなことを思っていると、リューさんは僕の前まで来て、すっと手を差し出す。

「リュ、リューさん？　何を……」

「まずは契りを。至らない身ではありますが、貴方の指南役を務めさせてもらいます。全身全霊をもって取り組ませていただくので、よろしくお願いします」

「こ、こちらこそ！？」

慌てて差し出された手を握った。こっちが頭を下げた側なのに、何でへりくだられているんだ。
僕は恐れ多く思いながらリューさんと手を重ね、はっと気付く。
エルフって認めた相手じゃないと握手なんかしない……これって、自惚れてもいいのかな？
冷たく柔らかい手の感触と気付いた事柄に平静さを手放していると、やがて僕達の手は離れた。

リューさんは自分の手をじっと見つめると、「そういえば二回目でしたね」と少し口元を和らげた。
二回目？　と首を傾げた僕は、しかしすぐに乾いた笑い声を漏らす。
《神様のナイフ》を見つけてもらった時、どさくさに紛れて見事に握ってたよ、僕。両手で。
斬られても文句言えなかったのか……。

ドゲザをしたくなる衝動に僕が襲われていると、リューさんは雑具が山積みされている内庭の隅からデッキブラシを持ってきた。
柄をよく見た後ブラシの方を持って、一思いに引き抜く。
きゅぽんという小気味のいい音とともに、長い木の棒が彼女の手に収まった。

「冒険者の指導とのことでしたので、最初は私の経験も織り交ぜて雑学でも教え込もうかと思いましたが……クラネルさんの話を聞いた限り、貴方が私に求めていることは、そういうことではないのでしょう？」

「は、はい」

「そもそも、ダンジョンの知識ならばギルドの方で適任者がいるに決まっていました。見識の養成は、そちらの方にお任せします」

「私は実技のみに集中させてもらいます」とリューさんは続けた。
そういえばそっちもエルフから指導を受けているんだよなぁ、と僕はエイナさんの顔を頭の中に描きながら思った。まぁ、エイナさんはハーフだけど。
僕の教役はエルフづくしのようだ。

……あれ、これって傍から見ると、結構羨ましい状況なんじゃあ……？

「さて、肝心な教導の方針ですが……生憎、私が教えられることは少ない。正直、今この瞬間まで何をするか迷っていました」

「えっと、リュー……先生？　それはどういう……？」

「私のことは師と敬わなくていい。私もまだ十と少ししか生きていない若輩者です、大仰に教授できる器ではありません」

ぴしゃり、と言われて僕は口をつくんだ。
謙遜し過ぎているようにも思ったけど、生真面目なリューさんらしいとも感じた。

「続けます。私の結論は、私もクラネルさんも断然未熟ということでした。教えるのも教えられるのも、私達は慣れていない」

謙遜、という言葉を僕が持ち出したのは当然理由がある。
何せリューさんは確かな実力者だ。
彼女の口から直接聞いた。リューさんの【ステイタス】はＬｖ．２。
現役の頃は、当時の第二級冒険者の規定ラインへもう少しで足を踏み入れようかというほどのつわもの。
つまり、Ｌｖ．３に限りなく近いＬｖ．２。

「難しいことを考えても失敗します。なら答えは単純明快です――仕合います」

リューさんの空気が変わった。
長剣と同等のリーチを誇る木の柄を両手で持って、静かに構える。
突っ立っているだけだった僕の肌が、ぞっ、と敏感に反応した。
咄嗟に手に腰をやり《短刀》を構えてしまう。

「……なるほど、貴方になら余計な言葉は少なくて済みそうです」

「っ……！？」

「貴方が今反応した通り、これから始める模擬戦の中で私の“教え”を汲み取ってください。学んでください。糧にしてください。そして利用できるもの、全てを盗みなさい」

構えは右半身。
腰を下げて柄を持つ手も低く置いた。
木棒の先端が僕の方を向き、気圧される。何の変哲もない、たたの木の筈なのに。

「……ぼ、僕の武器、刃を潰してなんかはっ……？」

「構いません。傷を負ったなら未熟な私に責がある。クラネルさんは全力で来てください」

「で、でもっ……」

「では、もしものことがあれば、店のスタッフを叩き起して回復魔法の使える者を召喚しましょう。これなら問題はないでしょう」

も、問題はない……のか？

色々な意味で完璧に解決されていないように思えたけど、リューさんの鋭くなった瞳に「集中しろ」と見咎められたような気がして、慌ててそれまでの思考を投げ捨てた。

眼前のリューさんだけを見る。

張り詰めた空気がぴりぴりと耳の奥で鳴る。東の空はまだ明るくなってすらいない。

リューさんは微動だにしなかった。僕もまた動かない。

いや、僕の場合は動けない。

間合いを詰めるビジョンがことごとく八つ裂きにされる。踏み込んだ瞬間、僕の手持ちの射程と速度を上回る一撃が見舞われるだろうことは、確信に近かった。

汗ばむ手で握る短刀が、こんなに頼りなく思えた時があっただろうか。

「……まず一つわかりました。貴方には冒険者として見込みがあります。ですが、同時に“臆病”だ」

「っ！」

「これでも誉めています。ソロでダンジョンに挑戦しているという貴方の場合、臆病という言葉は何よりの称賛です。恥に思わなくていい」

しかし、と前置きを入れて、リューさんは静かに一歩踏み出した。

「理不尽な状況に追い込まれた時、貴方はその現実を打破することはできないでしょう」

――恐らく貴方は逃げ出すことしかできない、と、確信のこめられた言葉が僕の頬を殴る。

かぁっと体の中心から熱くなる。羞恥か、痛憤か。多分、前者。

自分自身でさえもよくわからないのに、図星を指された気分。これ以上のない指摘。頭を一瞬過ったのは、背後から迫る猛牛の遠吠え。

そんなこと感じてる場合じゃないってのに、みじめな気分が込み上げてくる。

歯が震えそうになった。でも、意地でも抑え込んだ。

短刀の柄を握る手に思いきり力を入れ、僕は湿りかけている目を斜に構える。

全身に喝を入れ、一歩、また一歩と歩み寄ってくるリューさんに――自分から突っ込んだ。

「うあぁぁあああああああああっ！？」

「阿呆」

――吹っ飛んだ。

鮮烈な風切り音が耳に届いた瞬間、僕は真横に引っくり返る。地面

と熱い抱擁。
横っ腹が、尋常なく、痛い。

「あっっ……がっ！？」

「今のは蛮勇ですらない。ただの無謀、絶対の禁止事項です」

律儀に説明してくれるリューさんの言葉も、碌に頭に入らなかった。
薙がれた。
とんでもないスピードで木棒が横一閃に走って、短刀を繰り出すべくガラ空きになっていた脇腹に、叩きこまれた。
僕の目に見えたのはぶれた斜線だけだった。しかもかろうじて。
知ってた。知っていた。
知って、いたけど……。
この人、滅茶苦茶“速い”……っ！？

「さぁ、立ってください」

「……っ！」

促されるまま、地面に手をついて緩慢な動きで立ち上がる。
呼吸が乱れている。腹で明滅する痛みに屈しそうなる。泣きたい。
いやもう半分泣いている。
僕は唇に前歯を思いきり突き立てて、リューさんと再び対峙した。

「痛覚に慣れていませんか。ちょうどいい、耐性を身に付けてください」

「ギッ？！」

「同時に痛みに怯えないようにしてください。痛みから逃げるようになった瞬間、貴方は使い物にならなくなる」

刺突。

超速の突きが鳩尾を貫く。僕は勢いを殺せないままブッ飛んだ。

後頭部を強打。それ以上に呼吸が機能しない。

「立ってください」と無慈悲の言葉。僕は咽び返りそうになりながら、なんとか立ち上がる。

「間に合わなくていい。“防御”をしなさい。貴方になら、私の今の太刀は反応できる筈です」

「ぶっっ！？」

「これでは稽古にならない。貴方が反応し、動くことができたという事実が必要だ」

「げぐっ！？」

「それでいい」

初手の切り上げから、再び横薙ぎ。

最初は直撃を許して最後も直撃を許す。
ただ短刀を軌道上に構えられただけ。とっくのとうに木棒は短刀のあった場所を通り過ぎて僕を打ちのめした。横転する。
「立ってください」と感慨のない言葉。僕は鼻から血を噴出させる気概で立ち上がる。

「視野を広く持ちなさい。そして片時も目の前の敵から意識を逸らさないでください。ソロの貴方は絶対死角を作ってはいけない」

「っ！」

「お見事。ですが、言っている側から悪手です」

「フアっ！？」

やっと回避してやったと思ったら、追撃。
そっちは行き止まりだとばかりに膝を打ち据えられた。地面と今度は熱い接吻。
ちなみに、僕はしっかりと軽装を身に纏っている。その上で、このダメージ。
「立ってください」。魔法の言葉。僕は立ち上がる。

「今の貴方と私の差は何だと思いますか？」

「ステイタッずぅっ！？」

「それも勿論あります。ですがそれ以上に、技量と経験」

「ス、すギルっ！？」

「違います。言わば私の“自力”と貴方の“自力”です」

「！？」

「私の個人的見解ですが、冒険者は【ステイタス】に振り回されている者が多い」

「ふえっ！？」

「つまり神の恩恵に寄りかかり過ぎている。能力と技術は異なるものです」

「づぬ？！」

「第一級と呼ばれる冒険者達は全員がその力と見合った技術を持っています。【ステイタス】に使われるのではなく、掌握している。彼等がいるのはそういった“高み”です」

「――ッッ！！」

「……いい眼だ」

振り下ろされた一撃を渾身の力で弾き返す。

リューさんは目を細めて、息絶え絶えになる僕を見つめた。

そしてすぐに一方的な被劇（ヒゲキ）が再開される。

「まずはより洗練された戦い方を身に付けましょう。【ステイタス】の数値に囚われないでください。あくまで貴方の技術（ちから）は貴方のものだ」

「もし【ステイタス】を失っても、クラネルさんの中に残るもの。それを培ってやることしか私にはできない」

「一人で今日まで戦い抜いてきた貴方の力は、【ステイタス】も含め紛れもなく貴方の実力です。誇っていい。そして貴方が望むなら、器よりも芯よりの発展を」

「技巧を、挙動を、機転を、直感を、駆け引きを、閃きを」

喋っている間にもリューさんの熾烈な攻撃は続いた。
僕はもうビクッと中途半端に反応を示すだけのサンドバックに成り下がっている。
仮借のない木棒の乱れ撃ち。
いし、き、が……。

「立ちなさい。次」

「次」

「次」

「次」

「次」

「次」

「次」

「次……むっ、もう日が出ましたか。では、今日はここまでとします」

どごしゃ、と何かが倒れたような音。気が付けば僕の体は地面に縫い付けられていた。
返事をする気力がない。
やけにリューさんの声が小さく聞こえる。

「どうやら貴方は防御に難があるようだ。当面は守備が課題です。今回の反省を次回に活かすようにしてください」

「それではクラネルさん、また」と言ってリューさんは去っていったようだった。足音が遠ざかっていく。
僕は顔を上げられなかった。ボロ雑巾になって冷たい地面の上に突

っ伏している。全身、痛くないところがない。
思い出す。
いつかの路地裏。あの時リューさんが自分で言っていた「私はいつもやり過ぎてしまう」という言葉を。
やはり、あれは脅しでも誇張でも何でもなかったのだ。ていうかリューさん、自分がしたことに今はまだ気付いていないのか。
死んで、しまう。

少し前の僕に言ってやりたかった。全然羨ましい状況なんかじゃない、と。
エイナさんと、リューさん。
あっちもスパルタ。こっちもスパルタ。
受難、といってはあんまりだけど。
文武に渡って叩きこまれるエルフの苦行を、僕は今更ながら少し後悔することになった。
エルフに憧れるのも、程々にしておこう……。

あとに、僕は可愛い悲鳴をあげるキャットピープルの女の子に回収された。
後日聞いた話によると、リューさんはシルさんと数名のスタッフからこっぴどくお叱りを受けたらしい。
……至らない弟子でゴメンナサイ。

ごつごつとした岩肌が、上下左右、視界の一面を占領している。
天井が高いにも関わらず生まれる閉塞感。壁から剥き出しになっている巨大な岩々が四方から重苦しい圧迫感を放ってきている。光源が心もとなく、薄暗いのもその一因だ。
地面は当然舗装などされておらず、でこぼことした石の通路は歩きにくい。
洞窟、炭鉱、坑道。
規則性なく道が入り組む天然の隧道から連想するのは、そんな岩盤の空洞だ。
無骨な洞穴は、迷い込んだ旅人をより深みへ誘うかのように、どこまでも奥まった暗がりへ続いていた。

「この階層に留まるのも久しいな……」

ダンジョン１８階層。

Ｌｖ１の冒険者達が縄張りとする層域に、たくましい体をした獣人、オッタルは一人さまよっていた。
ダンジョンの壁面上部から盛り上がった拳大の石がランタンのように光を燃やし、オッタルの巨体を照らし出す。
纏う装備は、何と軽装。二メートルを越える体格を誇り超重量の全身型鎧をも易々と使いこなせるにも関わらず、モンスターの攻撃から身を守る生命線はごく限られた部位にしか及んでいない。
しかし、その各パーツの装甲はありえないほどの厚みと規模を帯びており、もはや全身に盾を仕込んでいるようにも見える。いざこれは軽装の分類かと問われると、はっきりと頷けるかは怪しいところだった。
右肩に背負った巨大で丈夫そうな背嚢は、何やら窮屈そうにぱんぱんに膨れ上がっている。

（そもそも、最後にダンジョンにもぐった日も定かではないか）

歩む度に巨体が揺れる。地響きの一つや二つが起きてもおかしくないにも関わらず、足音のたたないその進行には酷く違和感が付きまとう。
ただ、決して無視できない存在感は終始振り撒かれていた。
モンスターの気配はまるでしない。まるでオッタルに怯えているかのように、彼の前にモンスターの影が現れることはなかった。

（……嫉妬、か）

周囲に意識の網を張り巡らす一方、オッタルはフレイヤとの会話を

思い出していた。
妬まないのか、と自分の主神は問いかけた。
あの時のオッタルの言葉に嘘はない。何が起きようと、フレイヤの愛を疑うことなく崇拝し続けている。

神フレイヤは大地を撫でる風のような存在だ。
望んで手を伸ばしたところで決して掴めない。そよ風によってからかわれるように愛でられ、やっと指先が掠めたと思ったら、ひゅるりとすり抜けていってしまう。
風は縛れない。独占できない。留められない。
何より、風は伴侶を求めない。
風は気の向くままに一人で空の下を泳ぐ。平原をさすらう旅人を見つけもし気に入れば、笑みを浮かべて近寄り後ろからそっと抱き締めていく。そして旅人が振り向いた時には、またどこかへ行ってしまうのだ。
けれど同時に、そう、風は平等なのだ。
大地に立つ全ての者に涼やかな祝福を送る。時には激しく、時には優しく。北風のように、春風のように。
耳朶にそっと触れ、ささやきかけてくる風の声がやむことはない。
途切れることはない。風は永遠だ。
オッタル達が大地に立っている限り、例えどこかに行ったとしても、風が失われることは決してない。

（ここにいるということが、既に答えということか）

ただ、もし風が還るところの空が現れたなら。風の焦がれる空が現れたなら。
大地に立つ自分は、それを見上げることしかできない。

遥か下よりその光景を仰ぐことで己の卑小さに打ちひしがれれば、あるいは、そこには確かな羨望があるのかもしれない。
そして羨望と猜みは表裏だ。

（青い……）

武骨な面差しがほどけたように浅く苦笑を描いた。見る者が見たならばさぞ驚いたことだろう。
結局、フレイヤの命を拒絶しなかった時点で、オッタルにも含むところがあったというわけだ。あの女神にも見抜かれていたのか。
くっ、と自嘲にも似た笑みが洞窟内を低く残響した。

「……む」

オッタルの歩みが止まる。
もはや額当てと言っていい被覆面積の少ない黒鉄のヘルム、そこから覗く猪耳がピクリと反応を示した。
ザリッとブーツに包まれたつま先が方向を変える先、壁に空いた横穴から、ぬぅっと赤黒い牛頭が生えた。

「ヴゥモオッ……！」

「出たか」

血走った巨大な目玉が立ち止まったオッタルを捉える。
ミノタウロス。牛頭人体の外見を持つ筋骨隆々の大型級モンスター。
全長はオッタルと同じか少し上。その体型からして、非常に彼と似通った点が多い。
オッタルが自身のＬｖ．より大幅に適性の低いこの階層に留まっていた理由。
それは、目の前に現れたこの凶暴なモンスターの“捕獲”だった。

「ヴヌウウウウウッ……！」

ミノタウロスは興奮していた。
『迷宮の武器庫（ランドフォーム）』を利用したのだろう、その手には石斧の天然武器（ネイチャーウェポン）が握られていた。
片手大の斧には紅い液体がぶちまけられたようにこびり付いている。
冒険者と一戦交わしたか、あるいはその頭をかち割ったか。見たところ体には目立ったダメージはない。
これは“当たり”かと、オッタルはその黒い眼を細める。
帯に手をかけ、ドンッと特注の背嚢を肩から地面に落とす。一見すれば建物の柱のような袋からは、地面を割る音の他にジャラリと鎖の音も交じって出てきた。
ミノタウロスはそれを見た瞬間、ぐわっと目を剥いて走り出す。

「ヴゥゴオオォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッ！！」

ダンジョンの床を蹴り上げ石の欠片を巻き上げる。斧が大上段に構

えられた。
岩洞を震撼させる吠声を正面から当てられても、オッタルは顔色一つ変えなかった。
右手で背嚢を地面に垂直に支えながら、左手はだらりと下げたまま。
一直線に向かってくるミノタウロスを武器も持たずに待つ。
そして眼前に迫ったミノタウロスの踏み込みの足が、轟然と地面を陥没させた瞬間、オッタルはゆるりと左腕を掲げた。

「ヴォオオオオオオオオウッ……ヴゥオ！？」

「……上々だ。お前に決めたぞ」

受け止めた。完全防御。
あたかも骨が潰されるような不快音の次に、石斧の刃がばらばらに砕け、宙へと舞う。
ミノタウロス渾身の一撃が、手甲を纏ったオッタルの左腕一本で抑えこまれた。
防具の強度もさることながら、驚くべきはその異常な「耐久」補正。
棒立ちの姿勢でありながら、その巨体は微塵も動かない。“戦闘に臨まずとも”、猪の獣人はミノタウロスの突撃を真正面からねじ伏せてしまう。
まるで地中に根をはった大木のようにオッタルは微動だにせず、いっそ非情なまでにミノタウロスを“値踏み”していた。
本能か、その瞳に怯えを宿しながら、あのミノタウロスが一歩二歩とよろけるように後退する。
遅まきながら、目の前の生物が自分以上の化物だということを悟ったようだった。

「止まれ」

「ゴッ……！？」

「そのまま“ぶつけても”いいが……さて」

射竦められたミノタウロスは本当に足を止めた。オッタルは相手の手から滑り落ちる破損した石斧に視線を落とし、しばし思案する。やがて後ろに手をやる。ミノタウロスが一々反応するのを尻目に、腰のところで交差させてある二本の双剣――規格は大剣のそれだ――の一本を抜き取り、放り投げた。

「……ヴォ？」

「先程の動きなら問題あるまい。使いこなしてみせろ」

見る者に猛烈な違和感を抱かせる愛嬌を覗かせながら、ミノタウロスは自分の目の前に突き立った大剣に首を傾げる。

オッタルと剣の間で視線を往復させながら、恐る恐る手を伸ばす。

蹄に包まれた指がしっかりと柄を握りしめた。

（命を授かった以上、加減はできません。フレイヤ様）

フレイヤは言った。少年、ベルの大成にオッタルのやり方で働きか

けろと。
あの会話のやり取りからもわかる通り、自分が示すとしたらその指針は一つだけだ。彼女もそれを承知の上でオッタルに全てを一任したのだろう。
ミノタウロスを、ベルに送り込む。
用意された道は、少年にとって残酷なまでな茨の道だった。

（……膳立てには過ぎるかもしれんが）

オッタルはこの時まで、数多のミノタウロスを吟味し、抜選することをしていた。
ひとえにベルの一皮剥くために。フレイヤの望む輝きを引き出すために。
Ｌｖ．０の冒険者にとって、Ｌｖ．１にカテゴライズされるミノタウロスの相手はあまりにも過酷。まともに戦えば自殺行為に等しい相手だ。にも関わらず、こうして武器まで与えている。
いっそ横暴なまでに、オッタルはベルを虐げる真似をしていた。

愚かな感情が心の底で根付いているのは認めよう。オッタルはベルのことを少なからず意識せざるをえない。
それで、だから、故に、フレイヤの視界からベルを消そうとしているのか。
その自問に対し、否、とオッタルは断言することができる。
ベルが死んだところできっとフレイヤは彼の魂を追いかけるつもりだろう。すなわち天界にまで戻ってベルを自分の胸の中へと誘う。懐抱する。でなければ、万が一にも死の危険を孕むとわかっていてオッタルに扱いを任せることはしない。
もはやベルの生死に意味はない。生きようが死のうが、愛の女神に

よる呪縛がその未来には待ち受けている。
これは嫉妬ではない。
これは、“洗礼”だ。

（あの御方の寵愛を受けるというのなら、超えてみせろ）

オッタルが求めるのは資格の提示。神フレイヤが見初めるに相応しい魂であることの証明。
彼女の関心を攫うのはいい。彼女の寵愛を独占するのも受け入れよう。
だが、あの崇高な女神の名を汚すことだけは許さない。
フレイヤに見入られた以上、それが貴様の義務なのだと、オッタルは決して届くことのない激励を心の中で呟いた。

「ヴォオオオオオオオッ！！」

「……訂正だ。使いこなしてもらうぞ」

出鱈目に振るわれた大剣をいとも容易く弾く。
オッタルは目の前のモンスターに与えられた役割を全うさせようと、重い足を踏み出し“教育”に取りかかる。
散っていく火花は治まることはなく、広大なトンネル内を金属の喚く音が幾重にも反響していった。何時間も、何十時間も。
全てはフレイヤのために、オッタルは課せられた己の使命をただ果たす。

「ベル様……どうしてこの頃、ダンジョンにもぐる前からいつもボロボロなんですか？」

「は、ははっ……ちょっとね」

リリの疑問をズタボロな笑みで誤魔化す。
あのリューさんのしごき……過酷な稽古を乞うようになって三日。
ダンジョン探索の集合時にことごとく満身創痍になっている僕に、流石にリリも腑に落ちなそうな顔をしている。
でも打ち明けられない、打ち明けたくない。ありえないほど無様な自分を晒したくない……。
あれから全く、一向に、ボロボロになることが止められなかった。
リューさんの攻撃もとい指導は、僕の体を的確に打ちすえてくる。
そんなすぐに上達するなんて上手い話ある筈ないんだけど……ちょっとだけ積み上げられていた自信みたいなものが、あっさりと崩れてしまった。
わかっていたけど、本当にまだまだなんだ。
あの人がいる場所と、僕の立っている場所。本当に気が遠くなるほどの開きが存在している。

少し気落ちしながらバベルの門をくぐる。
一階の大広間。主に白と蒼色で彩られた巨大な円陣が床（フロア）に描かれている。ステンドグラスを想像させる花のような模様は相も変わらず美しかった。その大きさもあいまって圧倒される。
雄大な画図を見て、これもいつも通り頭にスイッチが入り、今日もやるぞ、と意識がダンジョン用のものに切り替わった。後ろ向きな感情を頭の隅に追いやる。
バベルの玄関口には沢山の冒険者達が出入りしていた。
僕達と同じようにこれからダンジョンへ挑戦しようとする冒険者がほとんどだけど、中には夜中にもぐっていたと思しき人達もいた。
すれ違う彼等はかっかっと快活に大笑いしているパーティもいれば、明らかに顔を暗くさせているパーティもいたりと対照的。
ダンジョンの中であげた成果のほどを如実に物語っており、今から迷宮へ立ち向かう僕達もああなるまいと自然に顔が引き締まってしまう。

笑い事でなければ他人事でもないのだ、決して。

「すいません、ベル様。お疲れのところにリリの荷物を任せてしまって」

「いやぁ、疲れているのは自業自得だし……それに空のバックパックくらい大丈夫だよ」

地下につながる階段の一つを下っていると、リリが申し訳なさそうに肩を小さくした。僕は笑いながらまだ何も入っていない背荷物を担ぎ直して、軽い軽い、とアピールする。

今、僕とリリの装備は“あべこべ”だ。つまり僕がリリのバックパックを背負い、いわゆるサポーターの格好をしている。

リリの方はいつもの外套を羽織っておらず、冒険者がよく防具の下に着込んでいるトレジャーウェア姿。更に僕のプロテクターを鞘のように背に備えて《バゼラード》も装備……しているように見せていた。

何で僕達があたかも立場を入れ換えるような真似をしているかというと、【ソーマ・ファミリア】の構成員達にリリの存在を突き止めさせないためだ。

今もリリは見さらせとばかりに獣人の子供を装っているけど、流石にこの身長で山のような荷物を運んでいるところを見ると、勘のいい人は既視感を覚えるかもしれない。ホビットを代表とした小人の種族が大荷物を担ぐというのは、普通に考えてまず珍しいから。子供の場合は言わずもがなだろう。

僕達は念には念を入れて、リリの正体を隠すよう小細工を働かせていた。

「それにすぐ交代しちゃうからね。心配しないで」

あくまでポーズだけなので、冒険者の目が少なくなってきたら装備は交換しているようにしている。

具体的には１０階層を前にした９階層のあたり。１０階層からはダンジョンに霧が発生するから、そこまできたら周囲の目を注意する必要もないのだ。まず見えにくい。

一応それまではバックパックを背負うことになるけど、リリと会うまで何から何までひぃひぃ言ってこなしていたソロの僕にとって、多少の荷物は戦闘に支障を出さない。既に踏破した階層なら特に問題もなく行ける。

帰りの道はリリと分担。見た目は半分ずつ荷物を分け合うようにして、違和感を出さないようにしていた。

僕もようやく１０階層に慣れてきたので、このやり方でも以前と遜色ない成果はあげられている。

事件があってまだ数日しか経っていないので、今はまだこんな風に慎重過ぎるくらいがちょうどいいと、僕はそう思っていた。

「うぅ～、リリはベル様に借りを作ってばかりなのが心苦しいんですよ……」

見た目は身軽さを売りにした冒険者スタイルのリリは、声のトーンを少し下げて拗ねるように言う。頭の上にちょこんと生えている獣耳が、先端をくるりと器用に丸めた。

苦笑しながら僕は改めてリリの姿を見る。

僕にとって短剣扱いになる《バゼラード》も、リリが持った途端急

に大きくなって微笑ましい。
髪は灰褐色をしたロングヘア。円らな瞳は金色で、どうやら今日は狼の獣人、ウェアウルフをイメージしたようだ。
背中まで伸びた滑らかな髪だけでぐっと雰囲気が変わって、少しどきっとしてしまう。悪戯好きそうな明るい子供から、室内で大人しく本を愛読する貴族の息女に変貌してしまったような感じ。
他にもちょちょっと特徴を変えてあるから、普段のリリとは印象がまるで違った。
顔立ちはリリそのものなんだけど、本当に、これならはっきりと別人に見える。

「あ、あのっ……やっぱり、変ですか？」

僕の視線に気付いたのか、今度は不安そうな声を出してリリは見上げてくる。
冒険者の格好のことか、それとも獣人に変身していることか、どちらを指しているのかはわからなかったけど、僕は笑いながら首を振った。
そんなことないよと言ってあげる。

「いつもと雰囲気が違って、何だか新鮮……なのかな？　僕は可愛いと思うよ？」

「ほ、本当ですかっ？」

「うん。似合ってる」

おどおどした上目遣いが、表情と一緒にきらきらと輝き出した。
顔を上気させたリリはすぐに前を向いたけど、獣耳がピンッと立って、スカートの中から生えている尻尾がぶんぶんっと左右に揺れる。
無意識なのかなぁ、とか、どうやって動かしているんだろう、とか思うところは結構あったけど、僕の言葉で一喜一憂しているリリが微笑ましくて、つい口元がにやけてしまう。
何だか可愛い妹ができたみたいだった。癒される感じ。
冒険者の目は常に気を付けなきゃいけないけど……もしかしたら、周りからは仲の良い兄妹にでも見えているのかもしれない。

『兎と狼……』

『オオカミとウサギ……』

『兎が格下（サポーター）だから……ああ、喰われるのな』

『もしもの時の非常食（みがわり）ということか……哀れな』

『怖ぇ、怖ぇ。外見じゃ【ステイタス】なんて判断できねえし、これだから冒険者は油断ならねえ』

……おかしい。どうして僕は居たたまれなくなっているんだ。
ヒソヒソ、と周囲の冒険者達が囁き合っている。普段は絶対見せないような優しい目をして、僕に不憫そうな視線が集中砲火。
地味に男のエルフから聞こえてきた『哀れな』という最後の呟きが気になる。

わけもわからないまま僕は浮かべていた笑みを引き攣らせていたけど、冒険者姿のリリを見て急に疑問が湧いた。
いまだご機嫌なパートナーの横顔を眺めながら、僕は口を開く。

「ねえ、リリ。リリはこの先【ステイタス】を更新できないんだよね？」

「？　どういうことですか？」

「いや……ほら、【ソーマ・ファミリア】には近寄れないからさ、神様にも会えないじゃない？」

聞き取られないようにリリの耳元に寄って声を潜める。
リリは神様としばらく面会できない。つまりソーマ様に刻まれた【ステイタス】も更新できないということになる。
【ステイタス】を更新できないということは冒険者にとってかなり致命的だ。それなりに実力が築き上げられた後ならその限りじゃないかもしれないけど、少なくともＬｖ．０の冒険者にとっては苦しいものがある筈。
サポーターだって同じだ。いくら戦闘職じゃないからって、モンスターの危険にはパーティの前線と等しく晒されているわけだから。
僕が到達階層を増やしていけば、当然モンスター達も強くなって、その危険も高くなっていくわけで……。
不安じゃないのか、という言葉を視線に乗せながら、僕は冒険者姿のリリに問いかけた。

「実を言うと、それに関してはリリも多少不安なんですが……でも、

恐らく大丈夫ですよ。少なくとも今はまだ」

「そ、そうなの？」

「はい、何とかやっていけると思います。モンスターのあしらい方ならリリは得意ですし……証拠に、ここ半年近く、リリは【ステイタス】を一度も更新せずにやってきましたし」

「ええっ！　半年！？」

リリの口から出た言葉に僕は仰天した。
言うまでもないだろう。【ステイタス】を更新しないっていうのはまさに百害あって一利なし。自分の首を自分で絞めているようなものだ。
ダンジョン内での生存率を高めるためにも能力の強化は必須、進んで行わない理由が見当たらない。
僕が唖然としていると、リリは苦笑いしながら説明してくれた。

「【ソーマ・ファミリア】で【ステイタス】を更新するには、資金集めのノルマを達成しなければいけなかったんです」

「え……それって」

「はい、ソーマ様の事情です」

リリの話によると、元々はソーマ様も【ステイタス】更新は小まめに行っていたらしい。

言い方は変になるけど、ソーマ様にとって【ステイタス】更新は“必要出費”。お酒作りという趣味のためにも資金のやりくりをしなければならず、リリ達に強くなってお金を稼いできてもらわないと、ソーマ様ご自身も困るというわけだ。

だけど【ファミリア】の構成員の数が増えていくにつれ、それも面倒になっていったそうで……。

やっぱり趣味の方に没頭したかったらしく、結構いい加減に『ノルマを越えたら【ステイタス】を見る』と宣言してしまったらしい。

確かに、規模の大きい【ファミリア】の中には、主神に見込まれた団員や組織に貢献した者達だけが優遇……つまり【ステイタス】を多く更新されているところがあって、神様の手を煩わせるためにはそれなりの実績を示さなければいけない、いわゆる成果主義な【ファミリア】もあるって聞いたことはある。

この場合は真の意味で弱肉強食の世界だ。冒険者っていうのは長期的に見れば資質というものが重要視されるから、本当に強い【ファミリア】を作るという意味では、確かに効果はあるのかもしれない。

“篩にかける”ってやつなのだろう。

話を聞く感じ、ソーマ様は【ファミリア】の意識を高めるとかそんなんじゃなくて、ただ面倒臭いからその決まりを作ったんだと思うけど……構成員達にとっては、実際かなり厳しいんじゃないのかなぁ。

「それじゃあ、リリもノルマを稼げなかったから【ステイタス】が更新できなかったの？」

「それが、ちょっと違うんです。リリはあまり目立ちたくなかったので」

「目立つ？」

「ノルマを達成できるということは、それなりに実入りが良いということです。戦えないリリは、周囲から見ればそれこそ恰好の餌になってしまいます」

あっ、と呟きながらリリの言いたいことがわかった。

つまりリリは……。

「要は、リリは資金調達のノルマに届いていましたが、お金を献上していませんでした。碌にお金も持っていないと周りの目を欺くためです。【ステイタス】が更新できなかったのは、その弊害ですね」

何でも、集会に一々出ていたのもそのことをアピールするためだったらしい。

【魔法】が発現してからは数度ソーマ様に面倒を見てもらっただけで、それからは本当に【ステイタス】更新をしていない、と。

僕は今度ばかりは眉を歪める。仲間の目を気にして【ステイタス】を強化できないなんて、【ファミリア】として破綻しているじゃないか。

同時に、リリが本当に独りぼっちだったということを改めて思い知る。

乏しい【ステイタス】の値を埋め合わせながら日々ダンジョンの中でやっていけたのも、過酷な状況の中に身を置いてきたからこそなんだろう。

知恵と工夫だけでリリは今日まで生きてきたんだ。

【ステイタス】を更新できずともやっていけるというその自信は、

歪な環境から派生したものだった。
僕は顔を顰めてしまう。

「やはり、軽蔑しますか？」

「えっ？」

「誰も彼も騙すような真似をしていたリリをです。リリは、嘘の塊でした」

まるで見越していたかのように、話の内容がかちりと入れ替わる。
金色の瞳は僕を視界に入れず前だけを見ている。
リリの静かな声音に、僕は押し黙ってしまった。

「リリは冒険者が嫌いです。ベル様を除いて、いまだに彼等に嫌悪を……偏見を持ち続けています」

「……」

「ベル様に何と思われようとも、リリは自分がしてきたことを謝罪するつもりはありません。……反省も、しません」

それは、嘘だよ。
と、そんな言葉を、優柔な僕はまたしても口にすることはできなかった。
頑固な思いを必死に吐き出そうとするリリの表情に呑み込まれて、

発言する機を逸してしまう。

「こんなリリを、ベル様は、軽蔑しますか？」

歩みを続けながらリリはもう一度聞いた。
声は普通。視線も気丈に前を向いているように見える……けど、これは……気付いてないのかな、本人は？
頭の獣耳が、ぎゅうぎゅうと縮こまって髪の上に伏せ切っている。
まるで何かを怖がっているかのように。
僕は数度の瞬きを経てから、思わず、少し吹き出しそうになってしまった。
リリには悪いけど、眉を八の形にした場違いな笑みがこぼれてしまう。

「……素直になれない人を軽蔑するのは、僕には難しいかなぁ」

「え？」

足を止め、リリが弾かれたようにこちらを向く。
僕は笑いながら思ったことを言った。

「大丈夫。僕、リリのこと好きだから。軽蔑なんてできっこないし、嫌いにもなれないよ」

本心だった。
リリの不安を拭うように、ありのままの本音を伝えてあげる。
こっちがびっくりするほど目を見張ったリリは、すぐに紅くなる。
伏せていた耳は起き上って、びぃんっと真上を突いていた。
僕はぎょっとした。尻尾がすごいことになっている。
内心でうろたえた僕をリリはじっと見つめていたかと思うと、頬の赤みは抜け切らないまま、クスリと小さくはにかんだ。

「それはどういう意味ですか、なんて聞くのは……愚問なのでしょうね」

えっ？　と聞き返す前にリリは歩みを再開させる。
小さな背中は、さっきよりも遥かに機嫌が良さそうに見えた。
元気になってもらえたのかな、と僕はちょっとわからないままリリを追いかける。

「ベル様のお声は、心に響く鐘の音のようですね」

リリの呟きは、いつも小さいんだ。
いくら聞いても何も教えてくれないリリの態度に少しふて腐りながら、僕はそんなことを思った。

「ヒィャアアア！」

「ギイイイイ！」

甲高い鳴き声を喚かせ小鬼のモンスター「インプ」が突っ込んでくる。

全体の色は黒。尖った小石のような一角を伸ばす丸い頭はやや大きめで、ひょろひょろとした体躯と比べて少しアンバランス。

けれどその見た目からは想像できないほど動きは俊敏かつ鋭い。

鉤のついた細長い尻尾が、動作に応じて上下にしなっている。

「っ！」

跳びはねるように間合いを詰めてくるインプ二匹を、僕は《神様の

ナイフ》と《バゼラード》を両手に迎え撃つ。
右のインプへ向かってサイドステップ。
一匹の影に隠れる形で、もう片方の接敵を防ぐ位置関係を作り上げる。
事実上の一対一。目前まで迫ってきたインプは無数に生えわたる牙を剥きながら、僕に向かって左手の爪を振るった。

「ヒィイイイイイイイイッ！！」

「全っ然っ、のろいッッ！」

――あの人の足元にも及ばない！！
弧を描く鋭利な指爪を打ち払うつもりで僕は右手の《神様のナイフ》を振るう。
壮烈な紫紺の輝きが走ったかと思うと、インプの爪は弾かれるどころか、五指ごと宙に飛散していた。

「ゲッ、ガギィイイ!?」

インプが驚愕に次いで金切り声をあげる最中、僕はスイングと連動させて体を回転。
頭の中に浮かぶ、エルフの少女の動きに自分のものをなぞらせる。
右足を軸にして、一気に、強烈な回し蹴りを目の前のインプへ繰り出した。

「ヒゲャ！？」

「？！」

胸の真ん中を打たれ、体重の軽いインプは簡単に吹き飛んだ。
そのまま後方にいた一体にぶち当たる。仲間を受け止めたインプはかろうじて踏ん張るが、僕は既に次の動きへ転じていた。
左腕を思いきり後ろに溜めて、《バゼラード》を……突き出す！

「「ギギィ！？」」

撃ち出された一発の剣突がインプ達を丸ごと穿つ。
折り重なる断末魔。
心臓をまとめて貫いた銀の短剣（パイル）から、壊れた鼓動が掌に伝わってきた。

「ベル様、後ろからっ！」

「ヒッヒャアアアアアアアアア！」

――わかってる！
リリの警告にも動じない。僕の感覚は接近してくるモンスターの気配をクリアに捉えていた。
視界は広く。死角は決して作らない。
《バゼラード》から手を離し、振り向き様《短刀》を装備。

自ら突っ込み、両手の中の二つのナイフで、小振りの斬撃を二閃させる。

「ギェ――！？」

「ふあぁ……ベル様、すごい」

屠る。

下半身、胴体、頭部。

三つのパーツに分断されたインプとすれ違い、僕は地面に着地した。

すぐさま頭を上げ視界を確保する。白い霧の奥で揺らめく影の数は依然として減っていない。

リリに《バゼラード》の回収を頼み、僕はまだ控えるモンスター達へと駆け出した。

階層は１０階層。

一つの出入り口しかない広々としたルームを根城にして、今日もダンジョンの攻略に明け暮れる。

この三日ほど、僕はリューさんの教えを復習する形でモンスター達と交戦を続けていた。

このくらいの敵なら十分かつ安全的に相手取れる。オークじゃなければ間違いが起こる確率はまず低い。

ちょうどいい稽古の反復相手。翌日に待ち受けているだろう死活問題のためにも、僕は気を抜くことなくリューさんの教えを活かし、取り入れ、励む。

『ヒビャアアアアアアアアアア！！』

僕達が今相手にしているのはインプの群れだ。この階層からはオークよりも頻繁に顔を合わせる小型のモンスター。
数を武器にしながら続々と襲いかかってくる敵に、僕は一旦攻めあぐねていた。
インプっていうモンスターは小賢しい。
一見するとゴブリンと似ているけど、あのモンスターと違って浅知恵がよく働く。つまり、利口なのだ。
決して単体では戦おうとはせず群れて戦う。その敏捷性を除いたら、総合的な能力は贔屓目に見ても８階層のゴブリンやコボルトの方が高いけど、一つのパーティとして見たら中々優秀であったりする。
今までモンスター達と違ってにわかじゃない。一冒険者としては感心してしまうほど。
この霧のはびこる１０階層では、オーク一体よりインプの一群の方が厄介だと言われていた。

「ヒビィイイイ！」

「とっ！」

僕もそれには同意見。斜め後ろからの攻撃をプロテクターで防御しつつ、すぐに霧の奥へ引っ込んでいくインプに口を曲げてしまう。
インプのパーティはこの霧も利用して四方八方から襲いかかってくる。それでいて、しっかり取り囲もうとしてくるのだからあざとい。

こちらがそうはさせじと場所を移動すれば、霧の向こうで露骨に舌打ちをしてきた。しかもその数八つ。増えてるじゃねーか。
パーティならいくらでも対処はできるけど、ソロの冒険者にとっては例のごとく手厳しいモンスター達だ。

「ヒャヒッ！」

「ヒビィイイイイイッ……」

「……」

足を止めた瞬間、あっという間に包囲網が完成した。
薄い霧の向こうでいくつもの黒い影が肩を揺らしている。
徐々に狭まっていくインプ達の輪。床かから生える草を踏みしめる音がそこかしこから聞こえてきた。
形成有利。たった一人の冒険者を前に、インプ達はそれを疑っていないことだろう。
僕もつい前までなら慌てていたかもしれない。多少のダメージは覚悟して包囲網の一角を無理矢理破ろうとしていたかも。
けど、

「見るにも値しないと思われているのなら、リリは少しだけ心外ぃ～～～っ、ですッ！」

今の僕は一人じゃない。
僕を囲むインプの群れの更に外側。

モンスター達の背後を取る形で、一本の矢が撃ち出された。

「ヒギャッ！？」

「！？」

リリの放った矢は一匹の頭に命中。まさかの不意討ちにインプ達の間で動揺が走った。

何も霧を利用できるのはモンスターだけじゃない。リリは一時的に霧の中へ身をくらますことで、見事にインプ達の警戒網から外れていた。

小賢しいと言ってもまだ高が知れている。目先のものに集中し出したら、インプも大して周りに意識を割けやしない。

事前に陽動と奇襲の分担を取り決めていた僕達の方が、まだパーティとしては一枚上手だ。

“パーティプレイ”という言葉の響きに、僕は内心で心を踊らせた。

（僕もっ！）

そのまま間を置かず連射される金属矢にモンスター達は浮き足立つ。

僕はその機を逃さず弾かれたように発進した。

立っていた場所から見て真正面。リリの方に気を取られていたそのインプは、自分に被さった影にハッとしたけど、僕は即座に《神様のナイフ》でそいつを両断した。

足は止めない。しっちゃかめっちゃかに喚き出し混乱するインプの群れへ次々と踊りかかり、容赦なく蹴散らしていく。

「ヒシャアアア！」

「っ！　リリッ！」

矢を食らったインプを切り捨てた時だった。二匹のモンスターが崩れかかっている包囲網を放棄してリリへ狙いを定める。

怒り狂うインプ達が小さいリリへ迫っていく光景に、一瞬ひやっとして【ファイアボルト】を口ずさみかけた。

でも、リリは慌てる素振りもなく、にっこりと笑って懐から口を縛った小袋を取り出した。

「シシシシッ。ご苦労様です」

ひょいっ、と放られた小袋はすぐに口を開き、インプ達の目の前で大量の粉末を吐き出した。

突然撒き散らされた紫色の粉煙に度肝を抜かれるのも束の間、インプ達はゲェッ、ゲェッ、と激しく咳き込み出す。

ドロップアイテム「パープル・モスの翅」。それから採取される毒鱗粉を調合して作られる毒袋だ。

パープル・モスのものと違って即効性で、弱いモンスターなら「毒」のペナルティを発生させる。

上手い！　言うだけあって、リリはモンスターのあしらい方に慣れてる！

リリが軽やかにバックステップを踏む時には僕も走り出していた。

金色の瞳と視線が噛み合い、後はお願いします、と恭しく任される。
僕は唇の端をつり上げた。

「合点！」

「「ヒピィイイイ！？」」

呼吸を止め毒粉の中に突っ込む。そして、瞬殺。
二本の短刀を閃かせ、一呼吸も置かず二匹のインプの息の根を止める。
あと残るは……！

「……！　ベル様、ちょっとすごいのが来ました！」

「！！」

ルームを揺らす地響き。僕もすぐに気付いた。
オーク。三メートルに届こうかという巨体が手ぶらのまま前進してくる。
更に数匹のインプがその周囲を取り巻いている。まるで親玉に率いられる子分達みたいだ。
上空には「バッドバット」。暗色をしたコウモリのモンスターで、鋭い牙の他に集中力を乱す音波攻撃なんかも仕掛けてくる。
残っていたインプ達も尻尾を巻いて逃げ出し、あの御一行に合流した。

「ちょっと、多いね……」

「はい。多種のモンスターがああまで群れるなんて珍しいくらいです。どうしますか、オークだけでもリリが引き付けましょうか？」

膨らみ出しているバックパックを地面に下ろし、右腕へ装備しているハンドボウガンに触れながらリリが提案してくる。

僕はじっと眼を凝らした。

霧のせいでオーク以外のモンスターの数が把握しにくい。確認できている以上のモンスターが潜んでいるとしたら、リリを別行動させるのはちょっと不味いかも……。

僕は装備している武器類を全て鞘の中に戻し、右の手首をぱっぱっと振り始めた。

「ベル様？」

「あはは、少し頼り過ぎているような気もするけど……」

やっちゃうね？　と笑ってみせる僕の意図に、リリも気付いたようだった。

ささっと僕の側から離れて道を開ける。

一つ距離を置いて響き渡ってくるモンスターの混声を耳にしながら、僕は右腕を砲身に見立てて前方へと突き出した。

「【ファイアボルト】！」

霧の海を引き裂く何条もの炎の雷は、ものの数分でモンスター達を全滅させた。

「ねぇリリ。僕、魔法に依存しちゃってるかなぁ？」

僕はサンドイッチをつまみながら、リリにそんなことを聞いた。
昼食を取るにはちょうどいい頃合い。ダンジョンにそぐわなそうな麦と香辛料の匂いが辺りに広がっている。
モンスターをあらかた倒した僕達は休息を挟もうと、１０階層の始点であるルームへ引き返していた。つまり９階層を繋ぐ階段がある場所だ。
ここだけは他のエリアと少し勝手が違って霧が出ていない。見晴らしがいいため奇襲される可能性がぐっと減るわけで、気付いたらモンスターに囲まれてましたなんて心配せずに済む。
９階層への階段もあるわけだから、万が一のための脱出経路も確保されているのだ。霧を発生させる１０階層唯一の安全地帯と言っていい。
僕はいつも通りシルさんが作ってくれたランチを頂かせてもらいな

がら、リリの返事を待つ。
ちなみに口に含むシルさんお手製のサンドイッチは相変わらず一風変わった仕上がり。噛めば噛むほどフレッシュな苦味が舌の上に広がる。
今日も試行錯誤したんだろうなぁ、泥沼に陥っているけどぉ、とちょっと失礼な感想を抱きながらむぐむぐ頬を動かす。正直に言うと、半分涙目だ。
僕は日に日に凶化されていくこのお弁当が怖い。

「う～ん、リリはそこまで気にはなりませんが……確かにベル様の魔法は使い易い節もありますし……」

こぢんまりしたパンを両手に、リリは少し考えに耽っているようだった。
小さな唇が可愛らしく動きパンをかじっていく。やがて食べ終わると、リリはナプキンで口元を拭ってから喋り出した。

「発動条件のハードルが低いので、手軽に使ってしまっているという点はあるかもしれません。依存というより、ベル様の動作の一部になっている、という感じでしょうか」

「そう言われてみると……」

結構しっくりくるような気がする。
【ファイアボルト】は速攻魔法。どんな魔法にもある筈の詠唱……いわゆる溜めが存在しない。

手足を使うがごとく、とまでは言い過ぎかもしれないけど、【ファイアボルト】の発動はそれに近い感覚だ。
僕にとって「魔法」は、それこそ弓矢を取り扱うような、数ある動作（アクション）の一つに過ぎないのかもしれない。

「こう考えると、ベル様の魔法は効率性に富んだ分、本来の魔法としての意味が薄れているということになりますね」

「えっと……つまり？」

「必殺としての一面です」

必殺技……。
すぐに想起したのは、英雄達の活躍を書き綴ったとある絵本の一頁。
巨大な怪物に向かって凍える吹雪を放つ、エルフの勇者の姿。

「『魔法』とは切り札です。奥の手と言い換えてもいいかもしれません。強力な魔法なら、Ｌｖ．の高低を無視して、格上の相手を撃退することも十二分にありえるのですから。ベル様の魔法は使い勝手が非常によろしいぶん、その必殺としての一面が見劣りするかもしれません」

確かに、僕の【ファイアボルト】はポンポンと行使できる分、真の意味で“ありがたみ”という言葉とは一歩無縁だ。
一撃一撃の重さも、リリが言うような強大無比と言えるレベルではない。

僕は神妙な顔をしてリリの話に聞き入る。

「長文詠唱の魔法は時間をかけるぶん効果も高いわけですから、大きな局面に波紋を投じることも可能とします。まさしく起死回生の一手ですね」

つまり、裏を返せば……。

「僕の魔法には、その力がない……？」

「いえ、そういうわけではありません。要は、量より質か、質より量か、という話です。ベル様の魔法の発動速度は侮れないものがありますし……少なくともリリの場合は、時間をかける特大の一発より、瞬時に連射してくるベル様の【ファイアボルト】の方が怖いです」

「絶対に逃げ切れませんから」とリリはおどけて笑ってみせる。

まとめてみると、僕の魔法は相手にとっては十分脅威にはなりえる。ただし単発としての威力は乏しい。

手数でまかなえるだけ、瞬間の爆発力、一撃必殺としての力は低い……。

本当に強いモンスター――例えば耐久力が高い相手――には、一般的な攻撃魔法より効きづらいということになる。

いや、まぁ、魔法だって万能じゃないから、欠点をあげだしたら切りはないんだけど……。

小さな頃から魔法というものに憧れ続けていた反動か、いざ発現し

た魔法の短所を突きつけられると……何というか、ちょっと残念な気持ちになってしまう。
その心の動きが表情に出ていたのか、リリは僕を見て苦笑した。

「ベル様、ベル様？　リリはベル様の魔法は飛び抜けていると思いますよ？　発動速度や弾速もそうですが、成長という側面が非常に優れています。群を抜いているといっていいでしょう」

「……？」

「発動まで時間のかかる魔法は、使用する場面が限られています。詠唱が完了するまでモンスター達は暢気に待っててくれませんから。使用する機会が少ないということは、それだけ【ステイタス】に反映されないということです」

熟練度の仕組みや【経験値】の都合上、弱い相手に魔法を使用してみたところで「魔力」のアビリティは上がりにくい。
頻繁に使う努力をしてみたところで、その労力と時間は、確かに僕のかけるものより何倍以上のものになってしまう。

「『魔力』さえ上がれば、規模も出力も上昇します。戦闘には直接関係しないリリのこんな魔法でも、【ステイタス】の強化によって少し具合が変わってきていますから」

リリの【シンダー・エラ】は、身長や体格に作用する範囲に限界がある。基本的に小人の種族や子供にしか変身できないのだ。その点

は確かに使い勝手が悪いように感じられる。
だけど「魔力」の上昇に伴って、模倣という判定に限り、服装の融通は多少利くようになったらしい。
今のトレジャーウェアも、あくまで外見だけだけど、魔法の効果で“変装”させたものなのだとか（攻撃されしまうと解けてしまうらしい）。
ぴょこぴょこと獣耳を動かしながら説明してくれるリリに、僕は自分の手の平をまじまじと見つめた。
確かに、炎雷の太さや威力は初めの頃より随分と大きくなっている。

「蒸し返しますが、魔法に依存しているのではないかという件。あれも魔法の成長を促すのなら、それこそしょうがないことです。魔法に頼り過ぎても白兵戦の技術がおろそかになるので、難しい問題ではありますが……リリは、ベル様は今のままでいいと思います」

リリの考察には確かにと頷かせる説得力がある。
冒険者としての僕を、これまで誰よりも近くで見てきた人の助言だ。
パートナーとしての彼女の言葉が、背中をぽんと押してくれているかのようだった。

「ベル様の魔法の属性は単純で、威力も平凡かもしれませんが、成長性はきっとピカ一です。自信を持ってください」

微笑みかけてくれるリリに、僕はちょっと頬を緩める。
あのリリが太鼓判を押してくれたとなれば、僕は自分の魔法の可能性を信じられた。

何だか、大船に乗った気分でいられる。
僕は照れながら「ありがとう」と告げて立ち上がった。

「午後も、頑張ろうか？」

「シシシッ。はい、どこまでも力添えさせていただきます」

硬いよぉ、と苦笑を一つして。
僕達はその日も、そして次の日も、ダンジョン攻略に精を出すのだった。

エイナはデスクに広げられた報告書をまとめ、ふぅと一息ついた。
周りでは、仕事に区切りをつけた同僚達がぽつぽつと帰宅していく。
天井近くの壁にかかっている時計は夜の八時を回る所。窓口を隔てギルドのロビーと隣接する事務室は、残業組の職員だけを残し、すっかり空白が目立つようになっていた。
飲み物でも淹れてこようかな、とエイナが辺りを見回しながら思っていると、同じ受付嬢の友人が部屋の奥で声を散らしてきた。

「ふぇ～ん、エイナぁ、手伝ってぇ～！　こんなの明日になっても終わりっこなーい！？」

「……自業自得。今日まで何もやってなかったミィシャが悪い」

嘆息し、ヒューマンの友人の泣きごとをにべも無く断る。
ミィシャと呼ばれた童顔の女性職員のデスクには、書類という書類が山積みされていた。各【ファミリア】の神達がこぞって請求した資料が、本人の職務怠慢によって静かに蓄積されていた結果だ。
原因が原因だけに、エイナも手を貸してやるつもりは毛頭ない。少し痛い目に会った方がいいだろうと。

「何で今期はこんな【ランクアップ】した人が沢山いるのぉ！？　神会（チャット）の目前にこんなレベルアップラッシュ、酷い～！？　誰かの陰謀だよー！？」

「こら、冒険者の血と汗の結晶をそんなこと言わない。最初からコツコツやっておけば、こんなことにならなかったでしょう？」

「ハイ、反省してますっ、反省してるからっ……エイナ、助けてー！？」

「いーや」

話は終わりというように背を向けた。

「薄情者ぉー！」と飛んでくる文句にもう一度溜息をつきながら、後でコーヒーでも持っていてあげるかと思うエイナだった。

「……」

作業による疲労の余韻に浸るように、肘をついた両手にそのほっそりとした顎を乗せ、エイナは今しがた書き終えた眼下の紙を眺めた。申請書、と書き綴られた用紙には、【ソーマ・ファミリア】の運営自粛を勧告するべきという旨が記されている。

ロキとベルの話を聞いて作り上げてしまった、自筆の報告書だ。

エイナは【ソーマ・ファミリア】を裁こうとは思わない。勿論思うところはあるが、【ファミリア】内におけるずさんな管理を糾弾しようなどとは、露にも。

そもそも裁断うんぬんを語るなら、ベルの話に出てきたリリというサポーターもまた、公平の立場から見れば罰せられる側だ。情状酌量の余地はどうであれ、罪は問われることになる。

エイナは正義の女神を気取るつもりは更々なかった。少なくとも、それは自分の犯すべき領域ではないと思っている。

ただ、である。

一つの状況が改善されることで、冒険者やサポーターの環境に光が

差し込むなら……差し出がましい真似をすることに躊躇はない。
冒険者達がダンジョンから無事帰還することを何より望むエイナは、どうしてもお節介を焼きにいってしまう。

（特定の【ファミリア】に肩入れしちゃってる時点で、言い逃れなんてできないなぁ……）

このある種の密告めいた報告に、私情が大いに絡んでいることはエイナにも自覚がある。
特定の【ファミリア】……つまりベル達だ。結果的に見れば、エイナはあの少年を気遣う形で【ロキ・ファミリア】に潜入するような真似をし、そして故意に【ソーマ・ファミリア】を陥れようとしている。
表面上は中立を謳うギルドとしてはあるまじき行為だ。ベルから相談を聞き、客観的にアドバイスを送るのとはまたわけが違う。
職権乱用。ギルドの一員として失格といえた。
しかし、

（……でも、見捨てるのはもっと違うな）

例えギルドの職員として相応しくなくとも、エイナは“エイナ・チュール”として失格にはなりたくない。
詭弁に過ぎずとも、もう決めた。
自分の中に流れる、リヴェリアと同じ高邁な血。半端なエルフのちっぽけな誇りであったとしても、エイナはそれに背きたくない。

（もし解雇にでもなっちゃったら……ふふっ、【ヘスティア・ファミリア】に加入させてもらおうかな、なんて）

手に顎を乗せたまま、ほわりと笑う。

エイナにとって深刻な問題である筈なのだが、どうしてか、その深刻さに比例するように周囲の空気が甘く緩み出す。

ブラウンの髪がかかる背中から、機嫌の良さが滲み出ていた。

「どうしたの、エイナ？　急にニヤニヤなんかしちゃって」

「にっ、にやにやなんかしてないよ！　出まかせは止す！」

「いいからいいから、何かあったの？　気になるぞぉー」

「別に……ちょっと、再就職先のことを考えてただけで……」

「再就職先、って……嘘！　エイナ、ギルド辞めちゃうの！？」

ミィシャが声を張った瞬間、『ガタッ！？』と他の職員が一斉に椅子から立ち上がった。全員男性である。

一糸乱れのない光景にエイナはぎょっと目を奪われながら、慌てて友人の勘違いを正す。

「ち、違う違う。もしギルドをクビにされちゃったら、っていう話。私から辞職するつもりはないよ」

「何だぁ、驚かせないでよ……。エイナが辞めさせられるなんて、あるわけないない」

エイナは友人の言葉に、そうでもないんだけどなぁ、と苦笑の思いを抱く。

一方立ち上がっていた男性陣は、『ふぅ……』と安堵とも知れぬ息を吐いて着席した。

（まぁ、とにかく……）

この報告書が上に通れば、少なくとも神ソーマは【ファミリア】管理の問題を取り上げられることになるだろう。

もともと【ファミリア】自体に問題はなくとも、構成員である冒険者達はホーム外の活動が黒に近いグレーなのだ。ベルの証言から得られた市民の被害報告を添えれば、多少のペナルティはほぼ確実になる。

警告を無視すれば、場合によってはオラリオからの強制退去、【ファミリア】存続の危機だ。

ロキから“趣味神”などと呼ばれるソーマも、運営方針を真剣に考えざるを得ないだろう。

（アーデ氏も悪いホビットじゃないみたいだし……）

リリと【ファミリア】のいざこざに巻き込まれた花屋を訪問してみ

た所、老夫婦はばつが悪そうに教えてくれた。
少女を追い出したその日を境に、店の前にいつの間にかお金が置いていかれるようになったのだと。
ギルドに被害届けを出すのも、そのせいでできなくなってしまったらしい。
彼等から頼まれた少女への謝罪の言葉を、エイナは受け取らなかった。それを渡すのは本人達の仕事だ。

（……冒険者の血と汗、か）

先程口にした言葉をエイナは反芻する。
どこか遠くを見るように、瞳を少し上に向けた。

（冒険者達が足元で誰かを踏みつけているなら……その血と汗は、その誰かのものでもあるんだよね）

ままならないなぁ、とエイナは思う。
冒険者の無事を願うエイナは彼等をサポートしたい。けれどその意思を揺るがすように、彼等の中には看過できないような事柄を平気な顔で犯す者達もいる。
例えば平気でサポーターを見捨てたという話を聞いた折には、綺麗事では済ませないし、庇えない。
二律背反する複雑な感情。今回に限った話ではない、エイナは時々自分のやっていることが虚しく感じるときがある。
とても許容できない話を聞いてしまうと、本当に、自分の立っているこの場所がぐらついてしまうのだ。

考え過ぎだということはわかっているのだが、一抹のやるせなさを抱いてしまう。

「……チュール」

「あ、はい？」

答えの出ない思考にはまっていたエイナだったが、かけられた声に顔を上げた。
窓口から近いデスクに座っていた男性職員が、ちょいちょいとロビーの入口を指している。
エイナの視線が向くのと同じタイミングで、ベルがギルド本部に入ってきた。

「……すいません、ありがとうございます」

エイナは頭を下げて席を立った。
曇りかけていた顔が心無し、清く晴れている。
少し駆け足でフロントの方まで出向かう。

（……でも、必死に頑張っている冒険者も、ちゃんといるんだよね）

ぴょこ、とフロントから顔を出したエイナを見た途端、ベルはぱっと笑みを咲かせた。

エイナもにっこりと笑って手を振る。

やはりエイナは冒険者達が好きだ。
大勢多数があれくれ者であるが、気さくで細かいことを気にしない彼等を、見ていて気持ちのいい彼等を、好ましく思っている。
サポーターを見殺しにする利己的な冒険者がいたとしても、そのサポーターを救ってくれるのもまた、同じ冒険者なのだ。
そんな冒険者達のためなら、エイナは例え免職されようが憂鬱になろうが、身を粉にできる。彼等を死なせたくないというこの気持ちに嘘はない。
自分が受け持つ半人前の冒険者の顔を見て、エイナはそう思えた。

（良い人は先に死んじゃって、悪い人が生き残っちゃうなんて言うけど……）

エイナは信じたくないし、信じない。少なくとも死なせないように、エイナは今を頑張っている。
それに、その“迷信”はあてにもならない。
ここは迷宮都市。
何が起こるかわからない、世界で一番気まぐれな都市だ。

ゲド・ライッシュは立ちつくす。

「カ、カヌゥ！？　待っ――ぁ　ゞ！！」

鮮血が爆ぜる光景を前に、双眸を凍らせる。

「グブゥウウウウウウウウッ……！」

紅い紅い、猛牛。

全身を真っ赤な液体で彩った二メートル強のモンスターが、遥か高いダンジョンの天井に向かって口内を爆発させる

「フヴォオオオッッ！！」

大音声。
鼓膜を食い破るかのような吠声に打ちすえられ、ゲドは危うく尻餅をつきそうになった。
肉質的巨躯。全身凶器。そして本物の重圧感。
ミノタウロス。
モンスターの代名詞の一つに数えられる真性の化物が、手に持った大剣で冒険者を断殺してのけていた。

始まりは、複数の冒険者が一人の偉丈夫を取り囲んでいるところを目の当たりにした時だ。
立ち寄ったルーム内に広がっていた熾烈な争い。それはおよそ低層に相応しくない実力者達が繰り広げる、凄まじい交戦だった。
ソロの冒険者を狙った略奪行動かと最初は目を疑ったゲドだったが、孤立している獣人の装備に刻まれたエンブレム──黄金の首飾りで縁取った戦乙女の側面像(プロフィール)──を見て、それが【ファミリア】同士の対立だということを悟った。
獣人の所属する【フレイヤ・ファミリア】は敵が多い。主に、神フレイヤの美貌に対する女神の嫉妬的な意味で。
神フレイヤは面白がって軽くあしらっている節を見せているが、彼女の信者がソロでダンジョンに潜ろうものなら、ここぞとばかりに付け狙われるのも頷けるものであった。
また、この時のゲドはあずかり知らないことではあったが、１８階層にて一人留まっていたオッタルの目撃情報はこの一週間の間に流

布されていた。
今回の戦闘は突発的なものではなく、今がチャンスと目を光らせたとある女神の計画的な襲撃だったのだ。

己の知る世界とは別次元の攻防劇にひたすら喉を鳴らしていたゲドだったが、そこでふと気付いた。
数の差をものともしない武人オッタルが、背後に物資運搬用の大型カーゴを守るようにして戦っていることを。
そしてそのカーゴを、オッタル達とは別の三人組のパーティが盗み取ろうと、通路の影から機を窺っている光景を。
そこが運命の分かれ道。
隙を突いて瞬く間にカーゴをかっさらっていた男達と同じ下卑た笑みを浮かべ、ゲドはすぐにそこから踵を返した。
――あの冒険者達が奪ったカーゴを、再び自分が横からかっさらう。
オッタル達とは異なり冒険者グループは自身と実力が拮抗しているだろうと肌で感じ、ゲドはすぐさま企み事を働かせたのだ。
響き渡ってきた怒号には心底肝が冷えたが、むしろそれだけだ。オッタルは敵勢力に抑え込まれ、すぐに身動きは取れまいという確信があった。
男達の逃走ルートを予想しつつダンジョンを急いだ。あれだけの規模のカーゴである、距離を稼ぎたくてもそう簡単にはいかない。
恐らく第一級であろう冒険者の戦利品、一体どれほどの価値があるのかとゲドは心を浮き立たせた。
先日ホビットから奪い取った……手に入れた魔剣の件といい、自分はついていると、そう信じて疑わなかった。

そして。

男達を発見し、まさにカーゴを開放させようする瞬間に間に合ったゲドは、それを見ることができた。

カーゴに“封じ込められていた”中身を。
鎖で雁字搦めにされ束縛されていた、ミノタウロスというモンスターを。
例外なく、その場にいた者達は思考が真っ白に染まった筈だ。そしてすぐに、視界が真っ赤に染まったのも同じ。
片方の角をへし折られ、鼻息荒く興奮していたミノタウロスは、あっという間に鎖を引き千切り、側にいた冒険者を潰れたトマトに変えた。
この世の終わりのような悲鳴に祝福されながら、ミノタウロスは歓喜に迸ったのだ。

「ひぇあっ……！？　ひひゃああっ！？」

仲間を無残に殺された獣人の男が、壊れた笛のような声を出しながら逃げ惑う。
地面から伸びた草原は血の海に沈んでいる。事切れた男達は塗料となり、凄惨な光景に一役買っていた。漂うのは濃厚な死の気配だ。
見捨てた仲間にカヌゥと呼ばれた冒険者は、しかし冷静な判断を失っているのか、ルームの隅へと自らを追いやった。
ミノタウロスはいっそ雄邁な足取りで、のしのしと背を晒すカヌゥへと歩み寄っていく。
カーゴに入っていた大剣を装備するモンスターの姿は不自然なほどに様になっていて、ゲドは、自分の見ているこの絵が酷く現実離れしているように見えた。

「!?　いっ、行き止まっ……!?」

「ヴゥンンンンンンッッ……!」

「うあああああああああああああああああああっ!?」

自分の位置を理解し惨めな一人芝居を演じるカヌゥを、ゲドは笑うことができない。
体も頭も動かせないまま、顔色だけを絶えず変化させ、視線がその一点へ釘付けにされる。

「ゴォオオッ……!」

「な、何でだよっ、何でてめぇが、９階層（ココ）にいやがるんだよぉおおおおおおおおおおおお!?」

壁を背にして発狂するカヌゥを、ミノタウロスは肩を上下させながら見下ろした。
ずるずると音を鳴らしながら地面にへたり込む“敵”を前に、モンスターは本能に従うまま大剣を構える。
引き締まりスリムな印象さえ与えてくる筋肉質な体がギリギリと絞られ、まさにその姿は断頭台を彷彿させた。
黒い巨影がカヌゥを覆い隠し、絶望が彼の顔に差す。
もはや言葉になっていない喚き声がルームを盛大に木霊し、転瞬。

「ウウウウウウウウウウウウウウウウウンッッ！！」

ドゴンッ、という剣が振り下ろされた轟音が炸裂し。
グチャ、とミノタウロスの体の奥で、真っ赤なペンキが飛び散った。

「……ぁ？」

盛り上がった背中に阻まれ、一人の冒険者がどんな肉塊に成り下がったのか、ゲドの位置からは確認できない。
ただ壁と床にこびりついた紅い体液と肉の欠片が全てを物語っている。
隠れることも忘れ棒立ちになり、通路の陰から一部始終を見たゲドの口から、乾いた呟きがこぼれ落ちた。

「――ヴ」

そしてその音は、ミノタウロスの耳に届いた。
振り返りあらわになる筋張った顔面。血化粧をした凶悪な面が、瞳をぎょろりと転がしゲドの体を射抜く。
心臓に楔が打たれたように全身が硬直し、呼吸が不細工に引き攣った。

「ヴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！」

逃げ出す。
反転し、あらん限りの力でダンジョンの床を蹴りつける。
威嚇の雄叫びが残響する中、ゲドは全速力でその場を離れた。
すぐに槌を地面に叩きつけるかのような超重量の駆け音が続いてきて、瞳孔が己の意思を離れて広がった。
あまりにも醜悪な死神が、凄まじい速度で追いかけてくる。

（ふ、ふざけっ――！？）

呼吸がおかしい。舌が干上がる。意味をなさない思考が再三に渡って弾けていく。
頭の中に埋まっている脳が沸騰しているかのようだった。熱い。とにかく熱い。
狂ったように、汗が溢れ出してくる。
ゲドはなりふり構わず走り続けた。足が何度ももつれそうになる中、ひたすら趨走する。
現在は深夜。周囲に冒険者の影は見当たらない。無人のダンジョンは今のゲドにとってまさに迷宮のようであり、いくら走れども同じ景色から脱出できていないような気がした。
近寄ってくるモンスターがいれば進路を大きく変え、空いている道へとその身を突っ込む。
とにかく前へ。とにかく距離を。平静さなど放り出し、とにかくこの恐怖からの解放を望んだ。
どこをどう走り辿ったかなどわからない。ただ死に物狂いで足をこぎ続けて。
気が付けば、ゲドは袋小路に入っていた。

「かっっ……！？」

眼窩から目玉が飛び出そうになった。

絞り出したような声の破片が喉から漏れる。両目をわなわなと震わせた後、ゲドはばっと後ろを振り返った。

あの鳴動するような足音は途絶えていた。鼓膜が痺れるほどの静寂が一瞬訪れる。

次の瞬間、ぬぅっ、と。

片角のミノタウロスが、曲がり角から顔を出した。

「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ！？」

絶叫を散らす。一度線を越えてしまえば、パニックに陥るのは容易かった。

ミノタウロスは大剣の柄をギリギリと握り締めながら完全に角から姿を現す。確かな質量と大きさを誇る金属塊は、その巨身と見比べるとごく普通の片手剣にしか見えない。

浅く開かれた白歯の奥から獰猛な呼気が吐き出される。

血走った目と、赤く錆びた銀の光を放つ得物が、次の贄に飢えていた。

「く、来るんじゃねぇえええええええええええええええええっ！？」

ゲドは腰に手を回し紅色のナイフを取り出した。
緩慢に踏み寄ってくる化物に向かって「魔剣」を振り抜く。

「グヴゥッ……！」

「来るなっ、失せろっ、消えやがれえぇぇッ！！」

炎の塊がナイフより放出されミノタウロスに当たる。
ゲドは出鱈目にナイフを振るい、何度も劣化した魔法をぶつけた。
逃げ場を失った空間の中で小爆破が連続する。
煩わしそうに太い腕を振るうモンスターに、ゲドは壊れたように魔剣を閃かせ続け……やがて紅の刀身がバキリと音をたて、木端微塵に砕け散った。

「は……はぁあああああああっ！？」

寿命が尽きたかのように光を失った刃は、無数の鉄屑となって地面に散乱した。
驚愕の声をあげながらその黒い目を剥く。魔剣が使用限界を越え自砕したのだ。
最後の最後でゲドは武器に裏切られた。

「フゥーッ、フゥーッ……！」

「ひ、ひぃいっ！？」

火の粉を引き連れるモンスターが目の前までやって来た。
怒りに染まった双眼が、ゲドを睨みつけている。
やがて巨大なシルエットは上腕の筋肉を膨張させ、剣を大上段に振り上げる。

「やっ、止めえええええええええええええええええええええええええええええっ――――」

額が叩き割られる感触とともに、ゲドの意識はあっさりと潰えた。

バキリ、と。
カップの取っ手が割れた。

「……」

ヘスティアはぴたりと動きを止め、じっとその陶器を見下ろす。
テーブルに置かれた白色のマグカップがひとりでに壊れ、湾曲した取っ手が卓上に転がっている。
本体の方は無事で全壊こそしなかったが、白い欠片がバラバラとなって散っていた。

「……」

しばらく押し黙っていたヘスティアは、不自然に割れたカップから顔を上げ、キッチンを忙しく駆け回っているベルを見る。
何でも今日は早くからダンジョンにもぐる予定らしく、普段より余裕がないらしい。
既に冒険者用のインナーとハーフパンツを身に付けているベルとマグカップを交互に見て、ヘスティアは、えも言えない胸騒ぎに襲われた。

「じゃあ神様、後片付けはもうやっておきましたから！　魔石装置だけお願いしますね！」

「あ……ベル君！」

軽装の詰まったバックパックを持って出ていこうとするベルを、ヘスティアは咄嗟に呼び止めてしまった。

ベルは立ち止まり、不思議そうな顔を向けてくる。

ヘスティアは言葉に詰まった。まさか「嫌な予感がするから今日は行かないでくれ」などと根も葉もないことは言えない。自分でも何じゃそりゃあと思ってしまう。

しかし、この胸のざわめきを無視できないのも事実だった。凶報を告げるかのようにへし折れたカップをちらりと見て、ぐむむっと唸る。

「あ、あー……ほら、【ステイタス】を更新しておかないかい？ここ最近やってあげられなかっただろう？」

「ええっと……」

「なぁに、すぐ終わらせるよ。時間の心配はしなくていい。だから……ね？」

ヘスティア自身、自分でも戸惑っているような笑みを浮かべていた。必死になり過ぎではないかという。

ベルはそんなヘスティアの様子には気付かず、眉を下げて笑い彼女

の提案を呑んだ。
ヘスティアは一先ず破損したマグカップを放置し、手早く【ステイタス】の更新に取りかかった。

「……ねえ、ベル君？　あのホビット君とは上手くやっているかい？」

「神様……一週間前からずっと同じこと聞いてますよ？」

「そ、そうだったかいっ？」

黙っていると落ち付かなかったので言葉を探したが、ベルに苦笑されてしまった。
言葉の通り、ヘスティアがリリと会ってから既に一週間が経とうとしている。
諸事情によりベルとリリの二人だけのパーティタイムを危ぶむヘスティアは、何度も同じ質問を重ねてしまっていた。
ベルの上で赤くなり、こほんとわざとらしく咳をする。小さい手を動かしながら【神聖文字（ヒエログリフ）】を刻んでいった。

「あとさ、今更なんだけど……最近、何をしてるんだい？　『耐久』の熟練度の伸びが、他のアビリティを差し置いて凄まじいことになっているんだけど……」

「……は、ははは……っ」

何故そこで空笑いをするんだとヘスティアは思った。
師事を仰げる人が見つかったと最近報告されたので、恐らくそれに起因しているのだろうと察してはいるのだが。
やがて急いで【ステイタス】を更新していく内に、案の定というか、ヘスティアの機嫌は悪くなっていった。言わずもがな、【憧憬一途】のスキル効果のせいである。
ヘスティアは途轍もなく面白くなさそうな顔をしながら、前々から気になっていたことを聞いた。

「ベル君。ちょっと掘り返すようで悪いんだけど……例の【剣姫】と何かあったり、した？」

ぶっっ、とベルは伏せた態勢で吹き出した。げほげほと噎せながら、ヘスティアの眼下で耳を真っ赤にしている。
くそっヴァレン何某めっ……！　とヘスティアは歯？みした。
ちょうど「魔法」が発現した辺りから、ベルの【ステイタス】の伸びが一段と顕著となったのだ。このベルの反応から見るに、何かしら接触を果たしたに違いないとヘスティアは確信する。
おのれぇ、と心の中でジェラシーをメラメラ燃やす。

「あ、あの、神様！？　【ステイタス】ってモンスターの戦闘以外でも強化されるものなんですか！　その、対人戦闘とかでも！？」

逃げたな、と思いつつヘスティアはあえて言及しない。何故ならばヘスティアは大人だからである。見逃してやるくらいの器量はあるのだ。

おっと手が。ブスリ。
ベルがしくしくと泣き出した。知らん顔して説明を始める。

「ああ、強化されるよ。モンスターや対人がどうたらというより、真っ当な【経験値】として君達の体に蓄積される……判断されるかがポイントなんだ。お遊びやただ機械的に作業しているだけじゃあ絶対に【経験値】として加算されないし、逆に訓練でも死闘なみに打ち込めたなら、確かな糧として【経験値】として認められるよ」

「それじゃあ……」

「しっかり実になったかならなかったか、ってところかな。色濃い足跡（カセキ）を残せていたなら、後はボク達が勝手に発掘するから」

どちらかというとその言い回しは「スキル」を発現させる感覚に近かったが、特に訂正はしない。こう言った方がベルにはわかり易いだろう、と。
ややあって、全ての作業を終え【ステイタス】をじっくり俯瞰していると……ヘスティアは静かに、口端を痙攣させた。

「うわっ……。神様、ごめんなさいっ、僕もう行きます！」

時計を見たベルが血相を変えて体を起こす。
器用にヘスティアを脇に退かせ、そのまま荷物を持って扉へ直進した。

「べ、ベル君っ、ちょっと【ステイタス】が……！」

「ごめんなさい、帰ってから聞きます！　いってきます！」

慌てた表情でベルは部屋を後にした。

取り残されたヘスティアは伸ばしかけていた腕を下げ、はぁ、と溜息をつく。

テーブルにあるマグカップを横目で見て、ベルが先程まで背中を向けていた場所を見つめて。

頭を抱えるように額へ手をやった後、ヘスティアはぽつりと呟いた。

「何だよ、ＳＳって……」

オラリオ東方にそびえる山脈から、太陽が顔を覗かせようとしていた。
屋敷の最上階に近いこの部屋からは、都市をぐるりと囲む市壁を越えて輝く山々を見渡すことができる。四角い窓の外に広がるその景色に軽く目を細めた。
まだ浅い朝日を横に浴びながら、アイズは金の長髪をばっと後ろに流す。
細い身体は純白のスカートとシャツを着こみ、その上から澄んだ蒼色の軽装によって包みこまれている。
膝まで保護する銀のブーツは丸みを残しつつも鋭角的なフォルム。
腰には唯一の武器であるサーベルが差し込まれていた。
腕の形にフィットした薄手の手甲の具合をカチャリと音をたてて確かめ、アイズは静かに前を向く。
姿見に映る完全装備。日の光を浴びて光沢を放つ蒼の鎧、銀の胸当て、金の髪。
【剣姫】と畏れられる少女の形をした“戦闘狂”が、アイズのことを真っ直ぐ見据えていた。

「おーい、アイズ、まだかぁ？　いつまで準備に時間をかけてんだよ、お前」

「……今、行きます」

扉の向こうのベートの声に返事をし、アイズは己の立ち姿から視線を切った。
アイズがＬｖ．５になってからもう十日。今日は待ちに待ったダンジョン攻略当日。

【ロキ・ファミリア】の団員を結集させ深層を開拓する、「遠征」のイベントだ。
強くなり過ぎたアイズ・ヴァレンシュタインが、より“高み”へと進出することのできる、唯一に等しい絶好の機会。

「アイズ、早く行こうー！　どっちが一杯モンスター狩るか競争しようねー！」

「うるせえなぁ……何でお前がここにいるんだよ、エルナ」

「それはこっちの台詞ぅ。負け犬は負け犬らしく尻尾巻いてどっか行っててよ！」

「犬じゃねえ、オオカミだっ！　そもそも俺が何に負けたってんだ！」

「完膚無きまでフラれた癖にぃ！　『私は負け犬とだけはゴメンです！』ってさぁ！　やーい！」

「ぐぁあああああああああああああああああああああああああああああああああああああ！？」

派手に騒がしくなってきた扉の奥をマイペースに無視し、アイズは最後に一つ視線を飛ばす。
耳を叩いてくる音響。朝空に広がっていく金属の声音。
西の方角に見える長い鐘楼が、重々しく鳴き始めていた。

ちり、と首筋が疼いた。

「……」

「ベル様？」

僕は首に手をやりながら、ぐるっと周囲を見る。

木色をした壁面に背の低い草花が繁茂する広いフロア。９階層のルームで僕は怪訝な顔付きを隠せない。

すぐ横で顔を見上げてくるリリにも、言い訳をすることができなかった。

「何か気になることでも？」

「……いや、何て言うんだろ」

……視られている、のか？

僕自身煮え切らない、どこかにあるやもしれない“目”の存在。

敵意や害意は全く感じられないけど……漠然とした不安が、どうしてか肩の辺りにのしかかってくる。

今日はいよいよ１０階層を突破しようということで、僕達は朝早くからダンジョンにやって来ていた。他の冒険者の数は極端に少ない。

ここまで来てすれ違ったのも、やたらと体格のいい獣人の冒険者だけだ。

追跡されてるなんてこと、普通はありうる筈ないんだけど……いよいよ気のせいでは片付けられなくなってきた。

「リリ、ここで装備を取り変えちゃっていいかな？」

「あ、は、はい」

いつもとは違う緊張を見せているせいか、リリは慌てて背に担いだプロテクターと《バゼラード》を渡してくる。

僕はバックパックに詰めてあったライトアーマーを装備し、万全の態勢を整えた。

慣れ親しんだ装備の感触に触れれば少しは楽になるかと思ったけど……眉間から険が取り除けない。
嫌に、心臓が低く喚いている。

「ちょっと、おかしくない……？」

「おかしい、ですか？」

「モンスターの数が少なすぎる」

先程から気がかりだったことを口にする。リリも「そういえば……」と元来た通路を振り返った。
９階層についてからやけにダンジョンの中が静かだ。現在地は９階層の深部といっていい、１０階層を目の前にしておきながらモンスターと一度も遭遇（エンカウント）していなかった。
精々ゴブリン達が逃げるように駆け回っていたのを、ちらりと見かけた程度だ。

（何だろう……すごく、気持ち悪い）

違和感が積み重なって、胃が軽く捻じれそうだった。
思い出したくない“何か”を無理矢理掘り起こされている感じ。
そう。
あの時も、ダンジョンはこんなにも静まり返っていて……。
僕はそこで頭を振った。

「べ、ベル様？」

「……行こう。１０階層に」

口元を押さえてかろうじて言う。

「９階層（ここ）から離れよう」とは、情けない気持ちがこみ上げてきて、言えなかった。

二つあるルームの出入り口のうち、１０階層へ繋がる方へ足を進めようとする――まさにその時。

――さぁ、見せてみなさい？――

えっ？　と。

いきなり頭に直接響いてきた蠱惑的な声に、僕は目を見張る。

そして次には、

「――ヴ――ォ」

足が、固まった。

「……」

「い、今のは……？」

リリが何かを言っている。だけど頭に入らない。
何かが聞こえた。何かが、聞こえてきた。
脳裏に刻まれた“あの雄叫び”と酷似した音の欠片が、僕の神経という神経を焦がす。

「……」

潤滑さを失った玩具のように、錆びついた動きで首を背後に巡らす。
音源の方角はちょうど僕達が通ってきた道からだ。あの一本の小径の向こうに、何かがいる。
気付けば僕の呼吸は乱れていた。指先が震えて力が入らない。
喉の代わりに頭が『嘘だ』とがなりたてている。そんなことがあるわけないと子供のように泣き叫んでいる。
リリが固唾を呑んで目を凝らす中、僕は、必死に何かを祈っていた。
そして、

「……ヴゥゥ」

現れやがった。

「――ぇ？」

「……」

予感は的中した。してしまった。
いや、そもそも、僕が“アイツ”の声を忘れる筈がないのだ。
何度夢に出てきたのかわからない。何度別のモンスターにそれぞれの面影を重ねてきたのかわからない。
何度“アイツ”を怖がってきたのか、もう、数え切れない。

「オオオオォオオォオオォオォオオオ……ッッ！！」

ミノタウロス。

「な、なんで、９階層にミノタウロスが……」

僕が聞きたい。
ああ、でも僕は知っている。
このどうしようもない理不尽を知っている。
言葉では語り尽くせないこの絶望感を知っている。
“この戦慄”を、僕は経験したことがある。
同じだ。
あの時と、同じだ。

「ヴヴォオオ！！」

狂牛が咆哮した。
押し寄せるのは洒落にならない威圧とド迫力。対峙する者の戦意を簡単に挫く大音塊。
恐怖の津波に僕とリリは体を仰け反らせかける。
そして、アイツは鮮血に染まった銀の剣を見せつけ、一歩、地面を踏みつけた。

「にっ、逃げましょう、ベル様！？　今のリリ達では太刀打ちできませんっ！？　早くここからっ……ベル、様？」

視線が動かせない。
足も動かない。
あの赤黒い化物に射竦められ、僕の行動は奪われた。
ひょっとしたらそれは放棄に近かったのかもしれない。
小さい頃、祖父がよく作って楽しませてくれた、英雄をモチーフにした案山子……今の僕は、まさにそれだった。

「ベル様！？　ベル様ぁ！」

怖い怖い怖い怖い怖い怖い怖い。
怖い。
あのモンスターが、滅茶苦茶、恐い。
眦に涙が浮かぶ。肺がしゃくり上げかけている。歯が噛み合わない。
顔色は、もうどんな色になっているのか見当もつかなかった。
蹄を持つ二本の足が地面の草花を踏みにじる度、自分のことと重な

って見える。
溜め込まれてきていた恐怖の象徴が、僕の身体の中で一気に膨れ上がった。

「ヌゥヴゥァアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

ミノタウロスが弾丸になった。
恐ろしい速度でルームの真ん中を突っ切り、僕との間合いを喰らいつくす。
武器も抜けない。何もできない。
終わりだ。
あっという間に眼前に迫った巨牛が、その大剣を袈裟に振り下ろした。

「――ぁ！？」

「え？」

転がる視界の中、か細い悲鳴が僕の耳朶を打った。
生きているという認識より先に、僕のお腹に被さっているリリの温もりを認めた。
その頭から止めどなく流れる、大量の血液も。

「リ、リリ……？」

僕は地面に投げ出されていた。恐らく、リリの体当たりによって。
横合いから伸びてきた捨て身の飛び込みのおかげで、僕はミノタウロスの攻撃をやり過ごすことができて、代わりに、リリは怪我をした。
大剣が掠った？　いや、ミノタウロスの砕いてみせた硬い岩盤が、リリの頭を直撃した？
渾身の一撃を被った床は見事に破砕していた。雑草ごと硬質な土くれが捲れあがっている。
リリは顔を歪め、小さく呻いた。
かあぁっ、と全身が赤熱する。

「ヴオオオオオオオオオオオオッ！」

「ッッ！！」

腑抜けきっている筋肉へ強引に力をこめる。立ち上がった。
怖い。一向に怖い。ひたすら怖い。
目の前で吠えるミノタウロスが依然として怖くてたまらない。
でも、この子を死なせるのは――もっと怖いっ！！

「ゴォオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

「ごめん！」と心の中で謝りながら、リリの体を思いきり横へ投げた。

小さな体がどうなったか見届けることもせず、巨躯を翻してきたミノタウロスに僕は真正面から相対する。
震える唇に歯を突き立て、噛み千切る。振りかぶられた大剣が僕を殺すより早く、もはや反射的に右腕を突き出し、叫んだ。

「――ファイアボルトォオオオオオオオオオオッ！？」

「ブゥオッ！？」

緋色の雷がミノタウロスの肉薄をはね返す。
炎の花弁を咲かせた【ファイアボルト】の威力に押され、あの猛牛が、後退した。
僕の見開かれた瞳が、勝機には程遠い淡い希望を宿す。
僕は取りつかれたように魔法を使い始めた。

「うあああああああああああああああああああああああああああああああっ！？」

撃つ。撃つ。撃つ。撃つ。
闇雲に剣を振るうかのように魔法を行使し続ける。
鋭い炎の矛が相手の巨体を何度も刺し貫き、炸裂。爆発音とともに猛火が荒ぶる。
苦悶の声をあげるミノタウロスはずるずると後ずさり、連鎖する爆炎の中に消えていく。
僕は魔法に縋った。
あの時にはないこの力なら、と一縷の望みに願い乞うように、【フ

ァイアボルト】を乱射する。
僕は心の中で魔法の引鉄を引き続けた。

「はぁ、はっ……！」

正気に戻って魔法を中断すると、視界は黒い煙に埋めつくされていた。
土と草木が燃えたような焦げくさい臭いが鼻腔を刺激する。ミノタウロスの形も見えない。
――やっ、た？
何の反応もなく炎の残滓が舞っている空間を前に、僕は突き出していた右腕を下げかけた。

「ンヴゥッ」

「――」

フォンッ、という風の切る音が鼓膜を殴った。
黒煙が揺らめきを作り、その中から巨腕が突如として伸びてくる。
下からアーチを描く岩のような拳は、僕の腹に吸い込まれるようにして収まった。
蹄が鎧を噛んだ感触。
衝撃が爆ぜた。

「がっっ！？」

視界の振動。体の中の空気が引きずり出され、状況を把握しきれないまま後方へ飛ぶ。
一つだけわかったことは、僕はリューさんに助けられたということ。
咄嗟に後ろへ飛ぶことで、その殴打の威力を半減させた。
しかし勿論衝撃の全ては殺し切れない。棒立ちになっていれば間違いなく腹を爆発させていた一撃だ、僕は決河の勢いで吹き飛んで、そしてダンジョンの壁に叩きつけられた。

「～～～～～～～～～～っ？！　……ぁ、ぎ！？」

壁面が破れる。半ば壁の中に埋まるような格好で、僕は降りかかる痛みの渦に悶え苦しんだ。
声にもならない。壁の一部が音をたてて崩れ、地面に尻をついている僕に石欠が雨あられと注ぐ。
真芯に捉えられた軽装は、壊れた。文字通り。
叩きつけられた背中部分がどうやら破損したようで、一気に脱落した。支えを失った鎧はあっという間にバラバラに瓦解する。
どこまで派手に飛ばせば、気が済むんだよっ……！？
上半身をボロボロになったインナー一枚にしながら、僕は震える足でなんとか立ち上がった。

「フゥウウウウウウッ……！」

「……！！」

顔面の筋肉が、引き攣った。
ダメージ無し。
あれだけの【ファイアボルト】が被弾してもなお、ミノタウロスは五体満足、目立った外傷は存在しなかった。
僕の魔法は厚い体皮に火傷を負わせただけで、致命傷すら与えていない。
歯が、立たない。
茫然自失する僕を見据え、片角を失ったミノタウロスは天を仰いで喉を震わせる。

「ヴヴォォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッ！！」

これが、“冒険”。
冒険者ベル・クラネルが犯す、初めての“冒険”。

――勝てない。

雄々しく空に向かって雄叫びをあげる狂牛は、絶望にしか見えなかった。

【ベル・クラネル】
所属：【ヘスティア・ファミリア】
ホーム：下水道の隠し部屋
種族：ヒューマン
ジョブ：冒険者
・到達階層：１０階層
・武器：短刀　短剣
・《神様のナイフ》
・《短刀》
所持金：６９５００ヴァリス

【ステイタス】
Ｌｖ．０
力：Ｓ　８２　耐久：Ｓ　０　器用：Ｓ　８８　敏捷：ＳＳ　３

魔力：Ｂ　５１
≪魔法≫
【ファイアボルト】
・速攻魔法
≪スキル≫
【憧憬一途】
・早熟する。
・懸想が続く限り効果持続。
・懸想の丈により効果向上。

短刀：Ｓ　３７
短剣：Ｃ　１４

【装備】
≪シュワイザーデーゲン≫
・バゼラード。短剣。
・『ノームの万屋』にて飾られてあったもの。１９０００ヴァリス。
・実は結構な業物。駆け出しの冒険者には十分過ぎるほどの武器。
・素直になれなかったホビットがベルへせめての事に置き土産として奮発。当然値切った。ジジイ涙目。
・ちなみに万屋の店主の名前は「ボム・コーンホール」。

１０話　英雄願望

ダンジョンは下層に行くにつれ階層の面積が増える特徴がある。
５階層で既に中央広場（セントラルパーク）と同等の広さを誇るフロアは、降りれば降りるほどその範囲を拡大していき、４０階層地点では都市オラリオ全域の規模に匹敵すると言われている。
途中その法則を無視する階層も存在するが、基本ダンジョンは円錐構造を取っていると考えていい。通路の道幅や各ルーム等も開放的になっていく傾向がある。
従って、「遠征」……とりわけ何十人規模のパーティがダンジョン攻略を行う場合、「深層」と定義づけられている階層まで進めば問題はないが、スタート地点である１階層から上層域は窮屈な思いをすることになる。
狭い通路、小さいルームの中での大集団の移動は不自由の極みだ。
兵隊の行軍のごとく、進行自体が苦になってくる。
モンスターの対応も一々手間で、そもそも閉鎖空間であるダンジョン内での行列はマナー違反でもある。
よって、大人数での遠征の際は部隊を二つ、三つに分け、取り決められた階層（ポイント）で合流、再編成するのが定例だった。
例に漏れず、【ロキ・ファミリア】も部隊を二つに分け遠征を開始していた。

「ねえねえ、エルマ。どうして他の【ファミリア】の人達がパーティに交ざってるの？　あの人達、雇ったサポーターっていうわけじゃないんでしょ？」

「馬鹿エルナ。前の遠征の撤退理由、もう忘れたの？」

「？？」

「彼等は鍛冶師だ、エルナ」

「あぁ！」

【ロキ・ファミリア】首領であるホビットのフィン・ディムナを筆頭に、数人の第一級冒険者が組み込まれた先遣隊は7階層に到達しようとしていた。

十五人ほどの徒党が移動を続ける中、エルナ、エルマ、リヴェリアと、順々に声が響く。

「前は私達より先に武器の方が使い物にならなくなったから、団長が手を回してくれたのよ」

「『鍛冶』のアビリティ持ちの鍛冶師がいれば、どんな武器も新品同然になっちゃうもんね！　フィン、やるぅ！」

「ンー、運搬する物資にスペアの武器を取り揃えるのも非効率的だったからね。神ヘファイストスと友好があるって聞いたから、ロキにも協力してもらったよ」

「鍛冶の【ファミリア】でもない我々がねだるのもおこがましいが……一人、鍛冶師の団員が欲しいところだな」

中層まで下っ端である【ロキ・ファミリア】の構成員達……つまり遠征時のサポーターが集団の先頭を務める中、第一級冒険者達はそ

の後ろでゆるりと構えていた。
深層から本格的な出番を迎える彼等は一見軽く言葉を交わし合っているが、その実、静かに英気を養っている。

「アイズ、アイズ、聞いた!?　【ヘファイストス・ファミリア】の上級鍛冶師達が付いてきてくれてるんだって!」

「うん……聞いたよ。すごいね」

「だよねー!　これなら深層でもじゃんじゃん暴れられるし、あたし、爆発しちゃうよー!」

「壊れた武器は【ヘファイストス・ファミリア】の鍛冶師でも直せないのよ、言っておくけど」

後ろから肩に抱きついてくるエルナに、黙々と歩いていたアイズは振り返り、少し笑った。
エルナはそれを見てへらっと相好を崩す。生まれてくる種族を間違えたかのような人懐こいアマゾネスの少女に、氷面で知れるアイズ・ヴァレンシュタインも感情を溶かす。
あるいは戦闘狂いの似た者同士に、姉のエルマが半眼で釘をさす中、彼女達は年相応の少女のように戯れた。

「ほー、【ヘファイストス・ファミリア】の連中なら、間違っても足手纏いにはならねえな。安心した」

「はい出たー。ベートの高慢ちき」

アイズの肩に張り付いたまま、エルナは横にいるベートに白けた視線を向ける。
口をつり上げていたベートは「あんだよ」とエルナを見返す。

「ベートはさ、何でそういう言い方しかできないの？　他の冒険者を見下して気持ちいいの？　あたし、そういうの嫌い」

「勘違いするなっての。雑魚なんぞを見下して優越感に浸るなんて、俺はそんな恥ずかしい真似しねぇー。事実を言ってるだけだ」

「これでも誉めたんだぜ？」と後方にいる【ヘファイストス・ファミリア】の鍛冶師達を顎でしゃくりながら、ベートは言った。

「ならば最低限の言動を慎め。お前の口から出る言葉は、まるで誤解して欲しいように聞こえるぞ」

「あーあー、うるせえうるせえ！　エルフの説教は聞き飽きたっての！　そもそも横から口出しすんなよ、リヴェリア」

鋭くまとめあげられた灰髪をぶんぶんと揺らしながら、ベートはふて腐れたように顔をしかめた。
左側の額から顎にかけて刻まれた稲妻のような刺青が軽く歪む。

「どうせお前等だって、そのド貧相な胸の中で似たようなこと考えてんだろう。雑魚を見て少しもダセエと感じてねえって、言えるのかよ？」

「あたしはエルマに全部奪われただけだぁあああああああああ！！」

「ちょっと止めてよ、その言いがかり……」

「確かに、一度も哀れんだことがないと嘘はつけん。だが、私の憐憫とお前の侮辱を一括りにするな」

「哀れんでるだけ、エルフ様の方がよっぽどタチが悪いように思えるぜ、俺は？」

はぁ、と溜息をつくフィンを他所にベートとリヴェリア達の論争は続く。

リヴェリアに限った話ではないが、エルフは他種族と意見の食い違いから衝突しやすい。獣人のウェアウルフもまた一匹狼の節があるので、融通の利かない時がある。

本人達も別段ムキになっているわけではなく、もはや恒例のようなものだ。リヴェリアの方に関してはあれでもベートを諭そうとしている。

それを知っているから、リーダーを含めた他の団員達も止めようとはしなかった。アイズも黙って彼等のやり取りを見守る。

「俺は弱ぇ奴が大っ嫌いなだけだ。一人では何もできないくせにヘラヘラしやがって、吐き気が止まらねえ」

「強者の位置に立った者の驕りにしか、私には聞こえんな」

「そうだよ、ベートだって弱っちい時があったくせにぃ」

「身の程を知れって言ってんだよ、俺は」

両肩にかかっているエルナの重みを感じながらアイズは、身の程、と小さく呟いた。

少し、思う。

哀れみでも侮辱でも呆れでもない、透明な疑問。

あの時、身の程を嫌と言うほど叩きつけられた一人の少年は、一体何を思って何を感じ、どうなったのかと。

もう記憶としては既に掠れかけている、今にも泣き出してしまいそうだったあの藍色の瞳を、アイズはぼんやりと思い浮かべた。

そして、それからすぐに。

彼女は前触れもなく鋭く顔を上げた。

「……四人かな」

「あんだよ、噂すれば何とかってやつか？」

彼女と一様にそれぞれの者も反応する。エルナはアイズに密着したままそちらを見やり、ベートは頭の耳をくいっと立ち上げた。

ちょうどアイズ達が通過しようとしている十字路、その右手の方角から激しい足音が響いていた。聞くからに慌ただしい。

集団の前衛と後衛にそれぞれいるサポーター達が対応に向かおうと

するが、フィンが手を上げてそれを制す。持ち場を離れなくていい、と指示を送った。
ややあって、アイズ達の視界に冒険者のパーティが現れる。

「なーんか、やけに泡食ってるね。声かけてみる？」

「止めなさい、ダンジョン内では他所のパーティに基本不干渉よ」

「ねえっ、どうしたのー！」

「……馬鹿たれ」

がっくりするエルマを無視してことは進む。
頬りに後ろを振り返っていた冒険者達は、突然かけられたエルナの声に肩を跳ねさせ立ち止まった。

「な、何だお前っ？　って……げえっ！？　ア、【大切断（アマゾン）】！？」

「エルナ・ヒリュテぇっ！？」

「ていうか、【ロキ・ファミリア】！？　え、遠征！？」

通路から出てきた計四名のパーティはエルナ達を見て驚愕し、自然に尻込みし始めた。
一瞬響いたこの世の終わりのような悲鳴にエルナは目付きを怪しくするが、お構いなしにベートが前に出る。

「よし、黙ろうぜ？　んで、こっちの質問に答えろ。お前達は何してんだ？　キラーアントの群れにでも襲われて、仲間でも見捨ててきちまったか？」

「んだとっ……！？」

「おい、止せって」

「……あれに比べたら、キラーアントの方が百倍マシだっ」

吐き捨てるように落とされた最後の男の言葉に、ベートは訝しげに眉を上げた。
何を言っているんだと視線で問うと、相手の冒険者達は互いに顔を見合わせた後、リーダー格のヒューマンが絞り出すように答えた。

「……ミノタウロスが、いたんだ」

「……あぁ？」

「だからっ、ミノタウロスだよ！　あの牛の化物が、この上層でうろついてやがったんだ！！」

相手の必死の形相にベートは瞬きを繰り返し、ばっと後ろを振り返った。
ベートと冒険者のやり取りを呆れながら傍観していたフィン達の顔

に、怪訝そうな色が走る。
誰も見ていない所で、アイズの右手がぴくりと震えた。

「ねぇ、もしかして……あたし達の逃がしたミノタウロス、だったり？」

「ありえねえだろ？　確かに全部仕留めた筈だぞっ」

「それに、もし私達の討ち漏らしだったとしたら少しおかしいわ。あの遠征からもう一ヶ月経つのよ？　ミノタウロスなんかが上層に留まっていたら、第三級以下の冒険者達の被害は馬鹿にならないわ。そんな噂、一つも耳にしたことがない」

「……申し訳ない。貴方がたが見たものを、僕達に詳しく聞かせてもらえないだろうか？」

「あ、ああ……」

毅然とした態度のフィンに見上げられながら、相手のリーダーはどもりつつも語った。
いつも通りダンジョンにもぐっていたら、遥か通路の奥でミノタウロスの姿を一瞬捉えたこと。
すぐに響いてきた冒険者と思われる叫喚とミノタウロスの遠吠えに当てられて、急いでこの階層まで逃げ込んできたこと。
そしてそのミノタウロスは、冒険者の大剣を装備していたこと。

「大剣だぁ～？」

「『迷宮の武器庫（ランドフォーム）』じゃなくて？」

「は、はい、間違いないです……」

「……今日までに、ミノタウロスの目撃情報は耳に挟んだか？」

「ないないっ、あってたまるか！」

「団長……」

「ああ、いよいよきな臭くなってきたね」

事情を聞き出した【ロキ・ファミリア】は自分達の討ち漏らしではないと確信する一方で、ことに対する不審さを深める。

フィンを始めとした勘のいい者は、これが意地の悪い神の“戯れ”ではないかと察しかけていた。少なくとも神の何者かが関与しているものだと当たりをつける。つけるしか、状況が説明できない。

フィン達先遣隊は完全に進行を止めてしまっていた。

「そのミノタウロスを見たのはどこ？」

そんな中で、金髪の少女が一人動きを見せる。

冒険者の一人に詰め寄って静かに問い質す。

「はっ？」

「冒険者が襲われている階層は、どこですか？」

「きゅ、９階層……動いていなければ……」

言い終わるより早く、アイズは走り出していた。
冒険者達がやって来た通路を、風のように疾走する。

「アイズ！？」

「何やってんだ、お前！」

「ちょっとあんた達、今は遠征中よ！？」

「……フィン」

「ああ、わかってる……隊はこのまま前進！　当初の予定通り、最短距離で１９階層まで進め！　指揮はレイナード、君がとるんだ！」

「は、はい！？」

「指揮……まさか、行くつもりか？」

「親指がうずうずいってるんだ。見にいっておきたい。それとも、君は残るつもりだったのかい、リヴェリア？」

「……フィンの勘が働いているなら確かだな。どれ、私も行かせてもらおう」

「ははははっ」

呆然とする【ロキ・ファミリア】と【ヘファイストス・ファミリア】の面々を残して、暇を持て余していた第一級冒険者達は、９階層へと先行するのだった。

祖父の顔を。
お祖父ちゃんの顔を、見たくなった。

両親のいなかった僕の、名実ともに育ての親。
皺だらけの顔をいつもくちゃくちゃにして笑っていて、「可愛い女の子を助けて仲良くなりたいよなー」とか、「美女美少女侍らすのはロマンだよなー」とか、「スケコマシでもいいじゃない」とか、「あっでもヤンデレだけは勘弁な？」とか、たまによくわからないことを言っていたけど、とにかく愉快な人だった。
祖父はまるで自分の目で見てきたかのように英雄達の逸話を知っていて、よく僕に聞かせてくれた。
誕生日にくれる絵本が祖父の直筆だったことを知ったのは、あの人が亡くなってから随分あとのことだ。
アイツ等すげえよなぁ、自分より強い奴に一人でも立ち向かえるんだぜぇ、儂には絶対無理じゃぁ。
自分はあんな真似できないと口にしながら、祖父はいつも嬉しそうに英雄達を称えていた。

でも、英雄みたいなことはできないなんて、それは嘘だ。
祖父はカッコ良かった。
幼い僕がゴブリンに殺されかけた時、あの人は誰よりも速く、あたかも雷霆のように駆けつけてきてくれて、両手に持った鍬をモンスター達へ叩きこんでいった。
いつも外衣に隠れていた体は戦士のようにたくましかった。
丸太のような腕はモンスター達を寄せつけることはなかった。
大きな大きな手は、僕の小さな体を抱き上げてくれた。
今、思えば。
僕が初めて憧れた英雄は、お祖父ちゃんだった。

やばい時は逃げろ。
怖かったら逃げろ。
死にそうだったら助けを求めろ。
女の人がキレそうだったらすぐ謝れ。
馬鹿にされたって指をさされたって、それは恥ずかしいことなんかじゃない。
一番恥ずかしいことは、何も決められず動けないでいることだ。
いつもそう言っていた祖父。
目の前からいなくなってしまった後も、その教えだけはずっと心の側に残し、僕に一大決心をさせてくれたお祖父ちゃん。
オラリオに送り出してくれた、あの人の言葉。
お祖父ちゃんの顔が、見たくなった。

「オオッ！！」

お祖父ちゃん。
今の僕は、動けない。

「……ぅ、ぁ」

顔を振り上げて、口から漏れ出た大粒の唾液を飛ばすミノタウロス。
遥か視線の先にいるモンスターは、自分という存在を誇示するかの

ように大剣を携え、吠声をあげている。
まるでそれ自体が重鎧のような体躯に、深い損傷は見られない。傷はあくまで表面的なもの。
魔法が通用しないという現実の前に、無力感が全身を支配していく。
勝てない、という言葉が頭の裏を何度も反響していた。
力が、入らない。
せっかく立ち上がった膝が、今にも折れてしまいそうだった。

「フゥゥ……！」

「……っ！？」

差し向けられた視線の切っ先が、首筋をぞくっとさせる。
誘発された冷たい電流が再び恐怖を呼びさまし、その代わりに、こみ上げていた脱力感を一斉に追い払った。
僕の意識とは別に、本能が死から遠ざかろうともがき始める。
このまま突っ立っていたら、殺される。
僕も、リリも切り殺される。
動かなきゃ……！
僕はあらん限りに手を握り締めた。

「ノヴゥウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウウッ！」

――壁際は不味い！
迫りくるミノタウロスを見て、僕はすぐにその場を離れた。

壁を背にしていればあの巨体によってあっという間に逃げ道を塞がれてしまう。
リリのいる場所とは逆方向に駆け出し、僕は広いフィールドへ戻るのを最優先させた。
こちら目がけてまっしぐらに進んでいたミノタウロスは、僕の移動とともにぐぐっと急カーブを描き、ドゴンッドゴンッドゴンッと床を踏み抜きながら追尾してくる。
側面からの急迫。震える瞳の中で、凶悪な牛面が大きくなる――！

「ヴムゥンッ！」

「――ぐっっ！？」

ミノタウロスが地を蹴った。
飛びかかってそのまま振り下ろされた大剣の一撃を、僕もまた地を蹴り込んで宙に身を投げる。
横合いからの攻撃に対し、前方に頭から飛び込む形で跳躍、回避。
間を置かず首のすぐ後ろで爆砕音が鳴り響き、戦慄しながらも地面の上をごろっと前転して立ち上がった。
急いでターン、そしてバックステップ。
眼前にできあがっている地割れに汗をぶわっと噴き出させ、こちらを睥睨してくるミノタウロスから必死に距離を取る。

「ヌヴァアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

強靭な下腿が床に踏み込んだ瞬間、一気に間合いをゼロにされた。

瞳を見開く僕の前で、両手に持った大鉄塊がフルスイングされる。
頭が真っ赤に染まった。
風の悲鳴に促されるまま僕は全力で膝をたたんで、間一髪、その必殺をやり過ごす。
上半身があったところを大剣が凄まじい勢いで通過し、頭髪を何本か持っていかれた。

「ヴォオッ！！」

「うっ！？」

真っ白な白髪が空中に散る中、ミノタウロスは屈み込んだ僕へ剣を叩きつけてくる。弾かれるように横へ転がった。轟音。
濁流のような猛攻が始まった。
大力をもって振り回される血塗れの銀剣が大気を唸らせ、抉りとる。
長いリーチを誇る剣撃は僕をどこまでも追跡し逃さない。時折おり交ぜられる拳打や蹴りが体のすぐ側を舐める度に、寿命が削り落とされていく思いをした。
呼吸が、動悸が焦げている。
強要される際どい回避の連続、一歩間違えればすかさず死に繋がる状況が僕の思考を狭めていく。
頭の打ち鳴らす警鐘が治まらない。
鼓膜が、壊れてしまう。

「っ！？　……ッ！？」

気が付けば僕は擦り傷だらけになっていた。ミノタウロスの攻撃を無我夢中で避け続け、床を転げ回った代償だ。
余裕なんてない。ある筈がない。満身創痍に一歩踏み込んでいる。
もし、このまま攻撃が続けば――。
あやふやだった未来のイメージが現実味を帯びて僕の頭の中をちらつく。一瞬過った真っ赤な末路。
このままではジリ貧だ。生き永らえることはできても、死ぬことは避けられない。
逃げる。
逃げろ、逃げなくちゃ！
逃げ出さなきゃ、助かりっこないっ！？

「ベル、様ぁ……！」

視界の隅で小さな山が身動ぎした。
リリだ。ぐらつく体を支えて立ち上がり、霞んだ視線を僕の方にさまよわせている。出血は止まっていない。
僕は余裕のない表情で叫んだ。

「リリ、逃げて！」

悲鳴に近い声に小柄な体が震える。
薙ぎ払われる剣を躱しながら僕は必死になって訴えた。
でも、リリは動かない。立ちつくしたまま、泣きそうな目でこっちを見てる。
かあっっ、と頭に血が上った。

「にげてっ……逃げろよっ！！」

リリは泣きながら頭をぶんぶんっと振った。意識が定かではないのか、子供の我儘みたいに言うことを聞かない。

何でだよっ！？

リリがいたら逃げられないだろう！？

リリがこの場を離れたら、僕だって逃げられるんだよ！！

わかるでしょうっ？　わからないのっ？　お願いだからわかれよ！

「早くッ、いけぇえええええええええええええ！！」

怒鳴り声がリリを突き飛ばした。

止めどなく涙を溢れさせながら、リリは顔をくしゃっと歪めて僕に背を向ける。

その場から駆け出し、たったったっという足音とともに通路の奥に消えていった。

これで僕も逃げられる！

やっと僕も、逃げ出せる！

逃げ、出せるっ……

（……わけっ、ねーだろっ……！？）

今僕が逃げたら、誰がコイツを押さえ込むんだ。

コイツをこのルームから出したら、今行かせてしまったら、リリが死ぬ。
この牛の化物がリリに狙いを定めたら、リリがっ、リリは……っ！

「……畜生ッ！！」

プロテクターに右腕を突っ込み、《バゼラード》を抜剣。右に回ろうとする足を殴り飛ばしてミノタウロスに相対する。
泣きたいのか怒りたいのかわからない。体の中で絡み合う感情の束は既にぐちゃぐちゃだ。
もはやヤケクソの境地に片足を突っ込みながら、僕はミノタウロスと一方的な戦闘を続行させる。

「ヴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッ！！」

「ッッ！？」

繰り出される左ストレートを《バゼラード》で横に叩く。
右手を衝撃で痺れさせながら、向かってくる大剣を回避。短剣ではあの得物は弾けない。
すぐに後退。詰められる。
盛大に歪めた僕の双眸と、ミノタウロスの鋭い両眼が交差する。

「ルヴッ、ヴゥゥッ、ウウウッ！」

「ぐ、ぅぅぅっ！」

命綱の防具もないまま死地の中に身を置き続ける。大剣が地面を揺るがす都度、砕かれた鋭い石片群が、青白くなっている肌と黒いインナーをボロボロに傷付けていった。

ミノタウロスの呼吸が荒い。捕まらない僕に業を煮やしているのか。僕の呼吸は言うまでもない。大粒の汗が何度も頬を伝う。喉の渇きが最高潮に達しようとしていた。

ミノタウロスから発散される力の余波が再三にわたって草原をざわめかせる。ダンジョンの中の音という音が全て僕達の攻防から生まれていた。

天井一面に灯っている燐光に見下ろされながら、茫漠としたルームを二つの影が動き回っていく。

「フウッ……ゴォオオオオオオオオッ！！」

ミノタウロスが怒号をあげる。まるで「逃げるな」と一喝されているようだった。

ありったけの勇気を総動員して短剣での防御を用い始めていた僕は、速度が――「敏捷」が何とかせり合えることに気付いていた。

でも、前に出れない。

耳のすぐ横を掠めていく破滅の風切り音が、体の熱を奪っていく。

足をすくませる。僕の恐怖心を膨張させる。

前になんか出るな。

無様に下がり続けろ。

逃げ回って逃げ回って逃げ回って、時間を稼げればそれだけでいい。

この瞬間を切り抜けられれば、それで……！
それで、いいだろう……！？

「は、ぁっ！」

上がる息を野放しにして剛剣を回避。
もう何度目とも知れない死と隣り合わせの脱出劇に、心臓が圧搾される。風圧で頬が切られた。
わななきながら僕は走った。
剣を振り下ろした格好で前屈みになっているミノタウロスの側面に回り込もうとする。相手にとっての死角、つまり唯一の安全地帯だ。
そして僕がそこに足を踏み入れた瞬間、ミノタウロスの瞳が、鋭く光った。

「――」

フッ、フッ、と鼻息を断続させるミノタウロスは、地にめりこんだ大剣から視線を引き剥がすと一気に、自身の頭蓋を僕に向かって振るってきた。

「――なっ！？」

「ヴゥウウウウウウウウウウウウウッ！」

無理な体勢から繰り出された横殴りの頭突き。
強張った牛頭に生えているのは――角！
湾曲した片角が、瞠目する僕を急襲する！

「うあっ！？」

「ンンンンンッ！！」

無意味と知りながら構えたプロテクターを、ミノタウロスの角は呆気なく貫いた。
僥倖だったのは致命傷を免れたこと。すくい上げられるように打ち出された牛角は、プロテクターを貫通することで僅かに角度がずれ、僕の左腕を浅く切り裂いただけで済んだ。
けれど。
ミノタウロスの角は、プロテクターを引っかけたまま。
がっしりと固定された角に引っ張られるように、僕は左腕ごとミノタウロスの頭上に掲げられた。

「ひっ！？」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッ！！」

振り回される。
ミノタウロスが首を振るう度に、僕は振り子のように左右へ流れた。
ダンジョンの床から二メートル以上も離れた空中で体中をシェイクされる。地面が遠い。視界が、ままならない！

猛烈な勢いで揺さ振られこみ上げてくる吐き気。体を繋いでいる左腕が軋み、唸り、関節がイカれてしまう。
やがて二回、三回と、ミノタウロスが狂ったように首を振っていると、僕より先にプロテクターの方が限界を越えた。
既に半壊していた防具が繋ぎ目から千切れる。ミノタウロスの首が大きく斜め上に振るわれるのと同時に左腕が開放され、僕は、天高く放り出された。

「ぅ――ゎぁあああああああああああああああああああああああああ！？」

十メートル以上もある9階層の天井にぐっと近付いて、すぐに僕は落下運動に入った。
山なりの放物線を描いて、ダンジョンの床に引き寄せられる。
身構えもできないまま、天井があっという間に遠くなり――墜落。

「い〝っっ！？」

背中からまともに激突した。
背骨を起点に体中へ絶叫が走り抜ける。頭が、スパークする。
手足が不細工に痙攣した。
【スティタス】の「耐久」補正がなかったら、とっくに死んでる……っ！？

「ぁ……！？」

目がちかちかする。
打ち寄せてくる痛みの波に呻き声が漏れ、僕は眉間に皺を寄せて両目をぎゅうっと瞑った。
やがて接着している地面を通して、ミノタウロスの足音が伝わってくる。
不味い、と思っても体が思うように動かない。喉が喘ぐように酸素を求めるだけだった。
そして身動きが取れなくなった途端、無理矢理封じ込めていた恐怖は簡単にぶり返した。
歯が、かち、かち、と鳴り始める。瞳が揺れて潤み始める。
怖い。
やっぱり、滅茶苦茶怖い。
苦しいし、痛いし、辛い。
でも、何よりも。
恐い。
もう、立ち上がれないくらいに。

「ウウ……！」

地響きが徐々に近付いてくるのがはっきりとわかり、身の毛が逆立つ。ゆっくりとミノタウロスはこちらに迫ってきている。
こんなの生殺しだ。足先からじわじわと恐怖感に蝕まれていく。
発狂しそうになる。壊れそうになる。いっそそうなってしまえば楽なのかもしれない。
僕は眩いダンジョンの天井を見上げることしかできなかった。いくつもの燐光に目を焼かれて、涙腺が静かに砕け散りそうになる。

――もぅ、無理。
恐怖に雁字搦めにされる中、は、と湿った吐息が口から漏れた。

「……？」

地響きが、止まった。
刻々と読み上げられていた死刑宣告が、不自然に途切れた。
代わりに鳴ったのは、そよ風。
怪訝に思った。何があったのかという、訪れた完全な静寂に対する純粋な疑問。
顔を歪めながら身じろぎする。
いまだ震えがおさまらない体を動かして、何とか首を持ち上げた。
すると、

「――」

あの人が、いた。

「……」

澄んだ黄金の長髪。蒼色の鎧。銀のサーベル。
いつかどこかで目にした光景と同じように、あの女剣士が、僕に背を向けて立っていた。
僕は時間を止めた。

「ウ、ヴォオ……！？」

ミノタウロスが、怯えている。
何も喋らない彼女に見据えられ、じりじりと後ずさっていく。
風が鳴っていた。
一人の少女を取り巻くように気流が踊り、ルームを静謐に震撼させる。
研ぎ澄まされた威圧が、渦巻いていた。
――【剣姫】、アイズ・ヴァレンシュタイン。

「いたぁ！　アイズゥー！？」

「ちッ、つまんねえことに振り回されてんじゃねえっての！」

続々と駆け付けてくる足音と声が耳に飛び込んでくるけど、僕の瞳と意識はその後ろ姿に縫い付けられたままだった。
目と鼻の先。
ヴァレンシュタインさんが、僕を庇うようにミノタウロスと対峙している。
頭が混乱する。状況に思考がついていけない。
何が起こっているのか。何が起ころうとしているのか。
吸い寄せられるように上体が起き上ったことに気付かないまま、僕は呆然と彼女の背中を見上げ続けた。

「……大丈夫？」

――大丈夫？
あの時と同じように。
細い横顔が小さく振り向いて、同じ言葉を告げた。
ズクン、と心臓が打ち震える。

「……頑張ったね」

――頑張っ、た？
あの時とは異なって。
労わりの言葉が、添えられる。
グシャッッ、と心臓が唸る。

「今、助けるから」

――たす、け？
心臓の音が、暴走する。
視界の中の光景に色が戻った。
灼熱の色が、灯った。

助ける？
助けられる？
また？
この人に？

同じように？
繰り返すように？
誰が？
――僕が。

「ッッッッ！！」

頭に火がついた。
それまでの感情という感情が一掃される。
馬鹿みたいに一途な気炎が、恐怖を上回った。
みじめな強がりが、とどまることを知らない想いの丈が、無様な体たらくを粉砕する。
立て。
立てっ。
立てよッ！
いつまで寝てれば、気が済むんだんよッ！？
同じ時を繰り返すのは御免だ！
この人に助けられるだけの弱い自分なんて、絶対にっ、御免だ！！

「～～～～～～～～～～～～～～～～～～ッッ！！」

竦む体はどこかにいってろ。
怯える暇があったら覚悟を決めろ。
憧れの人の前でこれ以上醜態をさらしてどうする。
誰よりも想いを伝えたいこの人の前で、これ以上カッコ悪い姿を見せてどうする。

そんなこと、耐えられない、耐えられない、耐えられない！
ここで格好をつけないで、いつ格好をつけるんだ！
ここで見返さないで、いつ見返すっていうんだ！
ここで立ち上がらなくて、いつ立ち上がるっていうんだ！

ここで“高み”に手を伸ばさないで、いつ、届くっていうんだっ！！

僕の足は地面を蹴り飛ばした。
立ち上がり、再起した。

「！？」

「……じゃ、ないんだっ」

彼女の手を掴む。
力を入れれば折れてしまいそうなそのか細い手を取って、自分の背後に押しやる。
僕は、自分の意志で前に出た。

「アイズ・ヴァレンシュタインは、まだお呼びじゃないんだっ！」

腹の底から叫んで短刀を構える。
狂牛は再び現れた僕に目を見開き、そして確かに、獰猛に笑った。
こちらの意志に呼応するように大剣の刃を僕へと向ける。

「勝負だッ……！」

冒険を、しよう。
この譲れない想いのために。
僕は今日、初めて冒険をする。

少年が駆け出していく。
アイズの唖然とした視線をその一身に引き受け、小さな冒険者は待ち受ける巨大なモンスターのもとへ飛び込んでいった。

「ま、ダンジョンで獲物を横取りするのはルール違反だわな。ふられたな、アイズ」

「……」

置いていかれてしまったアイズの背中に、ベートはのん気に言う。
冒険者としてあいつの方が正しいと鼻で笑った。
ルームにはベートとエルナに続いてエルマが到着しており、遅れてリヴェリアとフィンも足を踏み入れていた。彼等が目撃する中、ベル対ミノタウロスの戦いの火蓋が切られる。
相手の初撃を上手い具合に避けたベルをちらと見たベートは、「ほー」と口を円にした後、「ん？」とあることに気付く。

「あの白髪頭……もしかして、あの時のトマト野郎か？　くっ、はっははははっ！　何だよ、つくづくミノタウロスと縁があるみたいだな、あのガキ！」

「それって、アイズが間一髪で助けたっていう？」

「おお、間違いねえ！　ミノタウロスに惚れられちまったんじゃねえか！　あのガキが恋しくて、はるばる中層からやって来ましたってよ！」

「ふざけないで、ベート」

エルマの注意にベートは肩をすくめる。
ニヤニヤと薄笑いを浮かべてアイズとベルを交互に見た。

「合点いった！　そりゃ助けられたくねえよなぁ～。前に助けられ

ちまった時とまるきり同じ状況で、みっともねえ所を見せた相手になんかよ～」

「ねぇ、いいの？　あの男の子、Ｌｖ．０なんでしょ？　絶対にミノタウロスにやられちゃうよ！」

「トマト野郎が決めたんだ、俺達が口出しするもんじゃねえっての。なぁエルマ」

「私に振らないでくれる？」

笑みを残したまま軽々しい態度を崩さないベートに、エルマは呆れた表情。

三人で小さな円を作る中、エルナは異議ありとばかりに食ってかかった。

「どっちにしたって、あのミノタウロス放っておくわけにはいかないんでしょ！　先か後かの違いだけじゃん！　あたし、行くよ！」

「放っておいてやれって。あのガキ、“男”してるんだぜ？　あれだけ痛い目にあって身の程知らずってわけじゃねえだろ。また助けられちまったら、俺だったら死にたくなるね」

「ベートの美学なんてどうでもいいし！」

現状を忘れぎゃーぎゃーと喚くエルナ達だったが、そこにかき消えてしまいそうな声がかかった。

小さな影がずるずると己の体をひきずり、よろめく。

「……お願いします、冒険者様。ベル様を、助けてください……」

「ホ、ホビットちゃん……」

「な、何だよ！　離せっての！？」

変身の解けているリリが、倒れ込むようにしてベートのトレジャーウェアを掴んだ。
震える小さな手が膝に取りすがってきて、ベートはあからさまに動揺する。

「ご恩には必ず報います。リリは何でもします、何でもしますからっ……ベル様を、助けてくださいっ……！」

「お、おい……」

朦朧としながら必死に言葉を紡ぎ出すホビットの姿に、ベートは頭上の獣耳を垂らし、この時ばかりは弱り切った顔をした。
リリの背後に歩み寄ったリヴェリアが膝を折り、そっと彼女の両目を右手で覆う。左手をお腹に回し、そのまま抱き締めるように自分の胸の中へ誘った。

「まだ無理をするな。傷は塞がっても、流れ出た血は戻っていない」

リヴェリアの唇が詠唱を口ずさむと、翡翠色の光が目元を覆った手から発せられる。彼女が口にしたように、リリの傷は出血の痕を残して塞がりきっていた。
アイズ達がこのルームに駆け付けることができたのは偶然ではない、ひとえにリリのおかげだった。
ベルを置いて逃げ出せる筈のなかった彼女は、怪我の身でありながら必死にひた走り続け、執念か、９階層に到達していたアイズを見つけ出したのだ。
仲間のために助けを求めたサポーターの懇願が、彼等をこの場に導いていた。

「お願いします、お願い、します……っ」

「……ちッ」

うわ言のように呟かれる懇請にベートは口を引き垂り、苦り切ったように舌打ちをした。
灰髪をガリガリと無造作にかいた後、足を回し、アイズとベルのいる方向につま先を向ける。

「行くのか？」

「勘違いすんな、雑魚なんて助けるのはまっぴら御免だ。けど、自分より弱ぇ奴を苛める雑魚に成り下がるのは、もっと御免だ」

リヴェリアへ無愛想に言い返し、ベートは足を進めた。
ベル達の方に顔を向け、背中を見せているアイズに声を張る。

「どけ、アイズ！　俺がやる！」

「……」

「おい、何ぼさっと突っ立ってっ……」

アイズを追い越そうと彼女の真横に並んだベートは、ぴたりと動きを止めた。
相変わらず感情に乏しい少女の顔は無表情で――その金色の瞳だけが、驚愕に見開かれていた。
これ以上のない真剣な眼差しで、ある光景を真っ直ぐに見据えている。

「……あ？」

ベートも見た。
そして、固まった。
大剣を振り回すミノタウロスと、ナイフを閃かす少年が。
お互い一歩も引かずに、凄まじい剣戟を繰り広げていた。

「……あぁ？」

苛烈な剣舞の音が鳴り響く。
あらゆる物を破砕する力の轟音と、どんな物も切り裂く速度の清音。
過激な曲調がベートの鼓膜に届き、果てはダンジョン全体に染み渡っていく。
交わされるのは銀の光と紫紺の光の応酬だった。銀の輝きが振るわれたかと思えば、紫紺の閃きが円弧を作りあげる。
ミノタウロスとベルの両者が形相を作り、“互角”の攻防戦を展開していた。

「え……あ、あれ？」

「……誰がＬｖ．０ですって？」

その交戦模様にエルナ達も気付く。
形勢こそ、その身体能力（キャパシティ）を活かし攻め続けているミノタウロスが終始有利ではある。だが、誰もが疑わなかった蹂躙（ワンサイドゲーム）はそこにはなかった。
あるのは、互いの命を平等な条件のもとで賭けた、確かな死闘だ。
一際甲高い音響が炸裂する。
大剣を短刀で弾いてみせたベルから視線を切って、エルナ達はベートの方をばっと振り向いた。どういうことか、と。
ベートは、答える術を持っていなかった。

「僕の記憶が正しければ……」

落ち付いた声音が転がる。
びくっと肩を上下させたベートは、いま自分がどのような顔をしているのかわからないまま、己の背後を顧みた。
彼等の首領であるフィン・ディムナが短い歩幅でゆっくりと近付いてくる。
自身の得物である長槍を担ぎながらベートの隣で足を止め、彼は静かに尋ねた。

「一ヶ月前、ベートの目には、あの少年が“いかにも駆け出し”に見えたんじゃなかったのかい？」

「……」

彼方で爆炎が咲いた。爆風が足の間をくぐり抜け、緋色の熱光に二人の顔が照らし出される。
じっと見上げてくる黄金の瞳に、ベートは目くじらを震わせたじろいだ。
駆け出しだった。間違いなく。
ミノタウロスに散々追いかけ回されていたあの子供は、戦いの基本も心構えも何もできていない、一目でわかる新米の冒険者だった。
失笑を買う、みじめな冒険者だった。
それが、

（何が、起きやがった……！？）

激変を遂げていた。
今ミノタウロスと渡り合っているのは、ベートの忌み嫌う、愚かで惰弱な冒険者の一人ではない。
確かな実力の片鱗を窺わせる、紛れもない新人（ルーキー）冒険者だ。
一ヶ月。まだ、一ヶ月である。
僅か三十日前後のスパンでは、才能に恵まれた冒険者とはいえ見違えるほどの成長は得られない。並大抵の冒険者ではそれこそ亀の歩みだ。
底辺の脱出からの、ありえない飛躍。
ベートは立ちつくす。
月日とも言えない短い時間の中で、もはや別人に化けたベルに戸惑いを覚えるしかない。
心中で巻き起こるのはことに対する不可解さと、戦慄だった。

「……」

ベートの隣でまた、アイズの視線もベル達に釘付けとなっていた。
透いた輝きを湛える金色の瞳が、驚きを孕み、僅かな興味に揺れている。

「ウヴォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッ！！」

「あああああああああああああああああああああああああああああああッッ！！」

雄叫びが走る。

モンスターとヒューマンが真っ向から衝突し、力と速度の戦いを継続させる。
自然にアマゾネスの姉妹はアイズ達のもとへ引き寄せられ、リリを横抱きに抱えるリヴェリアも合流する。
誰もが口を閉ざし、一人と一匹が交わす闘争を最も近い所から凝望した。

「……」

精鋭である【ロキ・ファミリア】の冒険者達がその死闘を見守った。
第一級冒険者を名乗ることを許された彼等から見れば、やはりそれは稚拙な戦いだった。
彼等の足元にも及ぶことはない、レベルの低い争い。
けれど同時に、彼等の瞳を掴んで離さない何かがあった。少なくとも、彼等の足を縫い止める何かがその中にはあった。
ある者は瞠目し、ある者は鋭く見定め、ある者は冷静に静観する。
幾多の火花が散っていった。高らかな風の音が生まれていた。薄光が、周囲の空間から切り離すように、その光景を包み込んでいた。

それはまるで童話の一頁のように。
荒ぶる牛の怪物と、小さな少年が、互いの命を燃やし、しのぎを削り合う。
エルナはゆっくりと目を細めた。

「『アルゴノゥト』……」

それは一つのお伽噺。
英雄になりたいと夢を持つただの青年が、牛人によってラビリンスへ連れ攫われた、とある国の王女を救いに向かう物語。
時には人に騙され、時には王に利用され、多くの者達の思惑に振り回される、滑稽な男の物語。
友人の知恵を借り、精霊から武器を授かって、なし崩しに王女を助け出してしまう、滑稽な、英雄の名前。

「あたし、あの童話、好きだったなぁ……」

エルナは両手を胸に抱き、宝物を見るかのように少年と牛人が戦う光景を眺めた。
静かに浮かぶ懐古の笑みが、少女の面影を残す彼女の顔を彩る。
水面に波紋を投じるように、呟きはその場にいた者達の耳朶を叩いた。

音響が弾け、白い影と赤銅の影はぶつかり合う。
多くの者が見守る中、童話まがいの戦闘は白熱の一途をたどった。

体が軽かった。
頭が冴えていた。
想いが燃えていた。
視界を絶え間なく過ぎ去っていく大刃をくぐり、前へ。
浴びせられる雄叫びを自身の咆哮で相殺し、前へ。
勝利をもぎ取ろうと全身を奮い立たせて、前へ。
目の前の敵が、今の自分の全てだった。

初めて思った。
情けない妄想でもない。
カッコ悪い虚栄心でもない。
ただ夢を見ているだけの、不相応な願いでもない。
英雄になりたいって。
コイツを倒せる英雄になりたいって。
弱い自分を打ち倒してみせる、強い英雄みたいな男になりたいって、
初めて心から思った。
僕は。
英雄に、なりたい。

「……っ！」

ガタッ、と。
フレイヤは椅子を飛ばし、その場で立ち上がった。
ベルとミノタウロスが激戦を繰り広げている同時刻。
宙に浮かぶ円形の“窓”の前で、フレイヤは立ったままその銀瞳を愕然と見開く。

「……まさか、本当に？」

『神の鏡』と呼ばれる、下界で行使の許された神の力がある。
本来は天界から下界を覗くための千里眼めいた一方通行の能力であるが、道楽のもと企画される“下界の催し”を、神達が楽しむために認められた唯一の特例であった。
勿論、“催し”以外の私的な流用は固く禁じられている。露見すれば即刻天界へ強制送還だ。
また『神の鏡』は各チャンネルパターンにおいて、特定の波動数が出て最寄りの神達にまず察知される。自滅する愚かな真似はどの神もしなかった。
だがこの美の神（フレイヤ）は、己の美貌を使って周囲の神（おとこ）を“誑し込んでいた”。
「今日一日限り」、「どの【ファミリア】にも不利益を出さない」、「ダンジョンの一部分」、という契約のもと、リスクを承知で一本の抜け道を作り出していたのである。
全ては、この一戦を眼にするため。

「……ああっ！」

目の前で浮かぶ『鏡』を通して見える光景に、フレイヤは顔を驚愕から歓喜、恍惚へと移ろわせる。

「ふふっ、うふふふふっ……！？　見ている、オッタル？　この美しい光景を……！」

光った。
ベルの魂が、輝かしいまでに。フレイヤの瞳を焼くほどに。
あれだけの輝きを放ちながら、まだその色は澄み切った透明色。
純粋な願望。
意図も打算もない、汚れも穢れも知らない、純然な意志。少年は何かを願ったのだ。
ベルの中で、“可能性”が芽吹いた。

戦いが続く。

ベルとミノタウロスは頻りに互いの立ち位置を入れ替えた。
四本の足が草原を踏み締め、駆け上げ、蹴り貫き、何度も何度も交錯していく。
絡み合う二つの動きは止まらない。

（図体に、騙されるな！）

眦をつり上げ、ベルは猛る意志を己の体に装填する。
ベルは既に恐怖とは無縁の位置にいた。
枷を砕き、呪縛から解き放たれたベルにはもう後退の文字はない。
怯むことなくミノタウロスの猛攻を防ぎ続け、隙を見つけては勇猛果敢に斬りかかる。

（ただでかいだけだ！　よく見ろ、目を瞑るな！）

ベルは自分の双眸へと念じる。
ミノタウロスの怪力は確かに脅威だ。まともに受ければ致命傷は避けられず、掠っただけでも体の半壊は免れない。壊すことに特化した力はたった一撃のもとに敵を圧倒してのける。
だが、それだけだ。
一撃を食らう前提は前提を越えない。命中しなければ、大剣という必殺もただの粉飾に成り下がる。
ベルの視界は今までにないほどクリアだった。
その藍色の瞳を凝らし、ミノタウロスの表情から筋肉の動きまで鮮明に捉えている。
恐怖を拭い注視すれば、相手の巨躯はありあまる情報をベルに与え

てくれた。常に全力全壊で回転し続ける敵の肉体は――凄まじいまでに怒張する筋肉の塊は、攻撃のタイミングから方向性まで何から何までベルに教えてくれる。
ミノタウロスの動きは愚直だった。雑だった。
ベルが容易に先読みできてしまうほど、“なっちゃいなかった”。

（コイツより“速い”腕利きの相手と、何度も戦ってきたんだろう！）

自分が師事するあの少女と比べれば、目の前の相手は、ただの動く木偶だ。
冒険者の武器を装備してのけるその特殊性も、あくまで大剣を“使える”ようになった、それだけのこと。
この程度では、あのエルフの少女には遠く及ばない。

ミノタウロスの攻撃は当たらない。当たらせない。
筒抜けの一撃必殺はことごとく空を切り、見え透いた軌道はその漆黒の短刀で叩き落とす。
ベルは速度という己の十八番を最大限に稼働させ、ミノタウロスの攻撃を往なし、防ぎ続けていった。

「……さっきから何なんだ、あのナイフは？　自分（てめぇ）よりずっとでけえ大剣を弾いてやがんぞ？」

「いや、武器の性能もそうだが……」

「上手い。技でミノタウロスの攻撃を捌いてるよ」

紫紺の輝きが瞬き、大剣を打ち払う。
その光景を外から見つめるベートの疑問に、リヴェリアとフィンが答えた。
使用者の【ステイタス】によって能力を上昇させる《ヘスティア・ナイフ》と言えど、二メートルにも及ぶ大剣が相手では真っ向から太刀打ちできない。際立ったミノタウロスの膂力もあって、まず力負けする。
ベルは向かってくる大剣に対し、その側面を狙っていた。
最小限の軌道をずらし、僅かに生じた空隙へ体をねじ込んでいる。
少しの手元の狂いも許されない、紙一重の防御だ。

「本当によく凌いでる。でも……」

「攻めきれないっ」

瞳を薄くするエルマと、落ち着きなく体を揺らすエルナの視線の先、剣撃を右手の《ヘスティア・ナイフ》で迎撃したベルは左手の《バゼラード》で反撃を試みるも、弾かれる。
短剣はミノタウロスの体を浅く斬りつけるものの、ダメージといえる傷に至っていないのは明白だった。精々かすり傷がいい所だ。
ミノタウロスは荒い鼻息を出して、すぐさまベルを懐から追い払う。

「……ミノタウロスの肉は、断ちにくい」

幾千幾万というモンスターを斬ってきた【剣姫】の、ミノタウロスに対する確かな評価。
その隆々とした肉質は飾りではない。筋肉の束はその強度もさることながら、過剰なまでに重なり合うことで、あたかも分厚いゴムを切っているかのような感覚を相手に預けてくる。
更に、耐久力の充実しているドロップアイテムとして評判の高い体皮と組み合わさることで、ミノタウロスの守りは半端な攻撃では崩せない構造となっている。皮それ自体は耐熱耐寒効果を持つことでも重宝されていた。
中層域のモンスターの中でも群を抜いて特化したその力と耐久力が、多くの冒険者達にモンスターの代表格として覚えられる所以でもあるのだ。

「ヴゥムゥウウウウンッ！」

「づっ！」

攻守一体を体現するミノタウロスに、少しずつではあるが、ベルは劣勢に立たされつつあった。
もとよりＬｖ．１にカテゴライズされるミノタウロスとＬｖ．０のベルの間には、埋め合わせることのできない能力の開きがある。
それはミノタウロスの揺るがないアドバンテージ。ベルにとっては絶望的なまでの“基礎（ステイタス）”の差。
生まれ持った怪物の能力は、にわか仕込みの技術を高圧的にねじ伏せてしまう。

「ベル様っ……」

ある程度回復の兆しを見せ、リヴェリアから下ろしてもらったリリが絞り出すようにベルの名を呼ぶ。
彼女が見守る中、ベルはもらえば一溜りもない剛剣を地面へ転がって躱す。すかさずミノタウロスが蹄で踏み潰そうとしてくるが、持ち前の速さで緊急脱出し《ヘスティア・ナイフ》を一閃。
咄嗟に大剣で防がれる。鋭い金属音。

「……！」

「オオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

《ヘスティア・ナイフ》を異常なまでに警戒するミノタウロスに、ベルは焦燥を隠せない。
間違いなくこのモンスターは、《ヘスティア・ナイフ》が自分に有効打を与えうるベル唯一の武器だと勘付いている。
同時に、ベルの方も感じ取っていた。
敵は、このミノタウロスは、こちらが本格的にナイフで攻勢に転じようとしたその瞬間、防御を捨てて潰しにくると。
肉を切らせて骨を断つ。相手はそれを心得ている。
その瞳の奥に宿る理性の光と、何より不自然にへし折られている片方の角を見て、ベルは直感していた。

「こん、のッッ！」

間合いが若干開いて仕切り直し。
ベルはこなくそとばかりに勢いよく右手を突き出した。
ミノタウロスはその両眼を大きく見開く。

「【ファイアボルト】！」

炎雷が轟いた。
爆砕音とともにその巨大な体が後退を余儀なくされる。
ダンジョンの天井にも届く叫喚が、緋炎の向こうから発せられた。

「……詠唱、してる？　あの魔法？」
「いや……小声で口ずさんでいるようにも見えねえ」

Ｌｖ．０のベルがＬｖ．１のミノタウロスと戦闘が成り立っているのは、魔法の恩恵に依るところも大きかった。
身体能力では完璧に劣っている中、あわやという場面で追い込まれても「速攻魔法」が絶体絶命の危機を何とか退けている。
しかし、

「ブモォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

「……っ！」

通らない。

「軽い」

「ああ、決定打には届かない」

「あの行使速度には目を見張るものがあるけど、相手が悪い。対人には凄い効果を発揮しそうなんだけど……」

【ファイアボルト】の弊害がここに現れていた。

威力が低い。

二メートルを越えるミノタウロスの体は傷付いてはいる。炎雷によって焼け焦げた胴体は、しかしそれだけだ。深手にはほど遠い。

一般的な攻撃魔法ならばいざ知らず、【ファイアボルト】の場合は必殺に足りえなかった。

火力が、未熟すぎた。

「手詰まりか」

「決めつけるにはまだ早い……と言いたいところだけど」

猛然と襲いかかってくるミノタウロスにベルは再び防戦を課せられる。

攻められる時間が徐々に長くなっているベルの旗色を、リヴェリアとフィンはいっそ冷徹なまでに観察していた。

どんなにベルがミノタウロスと張り合い奮戦しても、攻撃が成立しないことには勝機は絶対に訪れない。
もはや残されているのは玉砕覚悟の特攻くらいなものだ。
そしてその戦術が敢行されてしまった瞬間、ミノタウロスの勝ちが九分九厘決定してしまう。
攻撃の無機能。いかなる戦局においても、それは致命的と言えた。
ミノタウロスが咆哮する。
大剣によるフルパワーの振り下ろしが、逃げ遅れた《バゼラード》の刃を真っ二つに叩き折った。
ベルの顔が硬直する。

「彼には、武器がない」

フィンの言葉が風に乗った。
爆撃めいた一撃が地中を掘り返し、小規模のクレーターを作り上げる。
破壊された短剣を持った左腕で顔を覆うベルは、衝撃波に踊らされながら空中を泳ぎ。
短い滞空時間を経て地面に着地した、次の瞬間。

（――“武器”ならっ、ここにあるだろうっ！！）

“ミノタウロスの大剣”を睨みつけ、顔を覆っていた――振りかぶった短剣の残骸を、全力で投擲した。

「ヴムヌッ！？」

一直線に撃ち出された短剣がミノタウロスを奇襲する。
刃を半分から失った《バゼラード》がその瞳に映り、歪な剣身の断面が鋭利に光る。
顔面に突き進んでくる銀の矢に対し、ミノタウロスは小賢しいとばかりに首を振るった。
頭の片角があっけなく短剣を弾き返す。
一方で、ベルは。
その光景を見届けるまでもなく、既にスタートを切っていった。

「――――！？」

「はあああああああああああああああっ！」

迎撃に手間取ったミノタウロスの対処が遅れる。
体を捻り刺突を繰り出そうとするのは右手、《ヘスティア・ナイフ》。
“調教”されたモンスターは目の色を変え、今はまだベルの半身に隠れている右手の一撃を防御しようとする。
地面を抉っていた大剣を無理矢理に引き戻し、刃の腹を盾のように構えた。

（かかったッ！）

ミノタウロスの驚愕のほどは、一杯に見開かれたその双眼が如実に表していた。

ベルの体に隠れ、今まさに放たれようとしている刀身の色は、漆黒ではなかった。

白刃。ただの《短刀》。

神のナイフは、《バゼラード》を投じた次には忍ばせておいた左手の中だ。

腕の影から紫紺の輝きが溢れ出す。

藍色の瞳が鋭く射抜く方向、ベルの狙いは、その大剣。

「ふッッ！！」

「グヴゥ！？」

《ヘスティア・ナイフ》を逆手に持った左手が翻り、大剣の柄を握るミノタウロスの右手に叩き込まれる。

不安定な体勢のまま、敵の刺突だけを警戒し構えられた大剣本体は、あまりにも無防備だった。

グズリ、と漆黒の刃が右手首に埋まり、骨も、筋組織も断絶する。

ミノタウロスの苦悶の鳴き声が散る最中、ベルは一思いに刃を捻り、ありったけの力で大剣ごと右手を空へと飛ばした。

血飛沫が一気に舞い、遠くでフィン達が目を見張る。

「ゴ、ォオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオオッッ！？」

ミノタウロスが天井へ仰け反る。
間近で爆発する絶叫にも関わらず、ベルは膝を溜め、その場で跳んだ。
相手の巨体を梯子に見立てるかのように、膨れ上がった肩へ足をかけて蹴り飛ばす。中空へと飛翔した。
ぐぐっとその白い細腕を懸命に伸ばす先には、血塗れた大剣。
フォンッ、フォンッ、と空中で円を描く長大な剣の柄に指をかすめて、次には――掴み取る。
間を置かず、フロアへ落下。

「ヴッ、ヴガォアアアアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！」

切り裂かれた手首に悶え苦しむミノタウロスは反転し、後方に降り立ったベルへ飛びかかる。
ソレを返せと言わんばかりに筋肉で編まれた左剛腕を伸ばし、大剣を奪回しようとする。
ミノタウロスに背を向けるベルは、左手に剣の柄をあてがったまま、ゆっくりと振り返った。
右腕を静かに突き出し、一声。

「【ファイアボルト】」

大爆発。

「〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜ォ、ツォォ！？」

至近距離からの射撃に、ミノタウロスの体は浮く。

今までがそうであったように炎雷の速度と爆圧に押され、空足を踏みながら後ろへ下がらせられた。

炎の矛が直撃した胴体から体皮が焼け落ち、そして爆炎が大気中にのさばる。黒い煙とともに、地面の草原にも緋色の火が燃え移っていく。

間髪入れず。

視界を塞ぐ爆炎の中から、黒煙を突き破ったベルが、大剣を両手に斬りかかった。

「あああッッ！」

大上段から振り下ろされた、渾身の一撃。

「ブグゥッッ！？」

鋼を彷彿させる強靭な肉体に、太い赤線が走った。

「入ったぁっ！？」

斜に刻み込まれた傷痕から血が飛び散り地面を斑模様に彩る。
エルナの口から驚愕の歓声が漏れ、ミノタウロスはぐらりと後方によろめいた。
ベルはこの好機を逃さない。

「んのぉおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！」

「ヴオォォッ！？」

相手の手へ渡った武器がミノタウロスへ牙を剥く。
肉厚の刃が風を巻き込んで、ベルの手を散々焼かせた破壊力を解放させた。
立て続けに迸る強撃。
大規格の得物が休むことなく駆け続ける。

「うわっ、下っ手くそ……！？」

「でも、押してるわ」

お世辞にもベルの大剣捌きは格好のいいとは言えなかった。
大剣を振るうのではなく、むしろ大剣に振り回されているような絵。
細い体が大重量の銀塊に外見負けしてしまっている。
しかし、怒涛のごとき勢いはミノタウロスを圧倒する。
まるで風の渦だ。剣が縦横無尽に走り抜け、ベルの咆哮を道連れに銀の大閃を見舞っていく。

狂牛のモンスターは動揺していた。瞬間的に逆転したこの戦況に置いてけぼりにされ、防衛行動を上手く働けない。立ちつくす体が破竹の進撃にじりじりと押され、連続の被斬。

散り散りと血の欠片が飛ぶ光景の中、ミノタウロスの体が裂傷まみれになっていく。

それまで与えられなかった傷が、ダメージが、確実に蓄積されていった。

「ゥ――ォオオッ！？」

怯んでいたミノタウロスが、吠えた。

調子に乗るなと全身を怒らせ獣の本能を取り戻す。

地面に打ち込んだ踵がそれ以上の後退を許さず、負けじとばかりにベルを押し返した。

『――――――――――――――――――アッッッ！！』

決戦する。

もつれ合う気勢と気迫が空気をわななかせた。既に意味をなさない互いの轟声がダンジョンに満ち満ちる。

モンスターの剛拳に応えるようにヒューマンが巨剣を振るった。人の技剣に真っ向から対決するように怪力が尽くされた。

妥協を彼方に放り投げたぶつかり合い。凄烈な一進一退を繰り返す。

加速が、止まらない。

不格好に放たれた前蹴りを大剣が打ち落とす。

防御に構えられた剣の上から殴撃が敵の額を割る。
振り上げられた斬撃が相手の骨を砕き、肉を裂く。
蹄型に陥没する地面、剣圧で一線に切り裂かれる草花、激突の猛威に千切られる空からの燐光。舞台装置が静かに壊れていく。
なけなしの力を振り絞る雄と雄は決して止まろうとしなかった。決して手を休めようとしなかった。
止まらない、止まれない、譲れない。
血塗れた銀剣とひび割れた蹄が、火花を打って、もう一度ぶつかり合う。
闘いの終結が間近に迫っていることは、誰の目から見ても明らかだった。

「うあああああああああああああああっ！」

「ヴゴォッ！？」

ベルの全身を利用して放たれた回転切りがミノタウロスの横っ腹に決まる。
肉の鎧と化している腹横筋の表層を半ばまで斬り裂き、刃は止まった。そこからは一気に弾くように大剣が振り抜かれ、ミノタウロスは横合いに吹き飛ばされる。
ビキリ、という大剣の小さな呻きが、激痛に歪む悲鳴にかき消された。

「フゥーッ、フゥーッ……！？　ンヴゥウウウウウウオオオオオオオオオオッ！！」

離れた彼我の間合い、およそ五メートル。
出血する胴を一頻り押さえた後、ミノタウロスは目を真っ赤に染め、両手を地面に振り下ろした。
原型の無くなった両手が地面を“踏み締め”、頭は低く構えられる。臀部の位置は高く保たれ四つん這いになるその姿は、まさに猛牛のそれだ。
ベート達は目を剥いた。
追い込まれたミノタウロスに度々見られる突撃体勢。己の最大の角（ぶき）を用いる言わば切り札。
進行上の障害物を全て粉砕してのける強力無比なラッシュだ。
ただし、この距離では助走が足りない。短い間隔では威力も半減する。
なりふり構っていられないほどミノタウロスが瀬戸際まで追い詰められた、何よりの証左。

『――』

最後の矜持によって残されていた片角が、ベルの見張られた瞳をギラリと焼いた。
眼球の奥底に届く視線の矛。無言の疎通。溶け合う意志と意志。
呼吸を止めたかのように、一瞬、周囲の空気が限界まで張り詰めた。
ベルの眼差しと、ミノタウロスの眼光がかち合う。
そして、

「あああああああああああああああああああああああああああああああああああああああ

あああああああああああッッ！！」
「ヴヴォオオオッッ！！」

突っ込んだ。

（――若い）

真っ向からの突撃を断行したベルに、リヴェリアは目を細める。

「馬鹿がッ！」

「駄目です、ベル様ぁ！？」

青い感情を非難するベートの罵声と、張り裂けるようなリリの悲鳴。
響き渡る声さえも突撃風景の加速剤へと変わり果て、ベルとミノタウロスの耳には疾風の音が渦巻く。
一気に縮まる間合い。瞳の中で大きくなる互いの姿。肌を打つ猛々しい覇気。
大剣が右肩に振り上げられ、一角が巻くように右肩へ溜められる。
振り下ろしと、すくい上げ。
寸分狂わず同時に発進する。
瞬く間に、決着の一撃が邂逅した。

（――）

銀塊が砕ける音。
大剣に食い込んだミノタウロスの角が、そのまま突き進み、果てに、刃をへし折った。

「ヴヴッ――！」

“武器は摩耗する”。
遠征中、いずれ武器が使い物にならなくなるように。
碌に整備の受けられなかった剣は、摩耗する。
ダンジョンに閉じ込められること一週間。オッタル、そしてミノタウロスという力自慢に振り回され続け、著しく強度を下げていた銀の大剣は、ついに限界を迎えた。
根元の辺りを粉々に破砕され、その上からの剣身が明後日の方向に飛ぶ。
ミノタウロスの角は、傷一つついていない。

細かい銀の雨がベルの視界を飛散していく。
右袈裟に振り下ろされた刃のない大剣は、虚しく空を切った。
左上方に振り上げられた片角も剣を仕留めるにとどまり、ベルとミノタウロスは綺麗にお互いの脇をすり抜ける。
ベルの瞳に映った、口端を裂くミノタウロスの相貌。
敗者に送りつける嘲笑ではない。勝利に飢えた者の剛毅な笑み。
切り札を失った相手に対し、ミノタウロスは確実な勝機を見出していた。

白い前髪が、静かに藍色の瞳を覆う。
時間がスローモーションになり、ゆっくりとミノタウロスが視界の外へと消えていく中。

（切り札は――）

ベルは、

（――こっちだッッ！！）

漆黒のナイフを抜いた。

「ッッ！」

急激な超ブレーキ。
すれ違ったミノタウロスのすぐ後方で突貫の勢いを殺してのける。
最大酷使される膝からの悲鳴を無視し、回転。
互いの位置は密着に届こうかという背中合わせ。限界突破した「敏捷」アビリティが、ベルに突撃からの第二撃を繋げさせる。
左逆手に装備された《ヘスティア・ナイフ》が、大気の上を滑り抜け燦然と輝いた。
角を上方へ振り上げた体勢で足を止めたミノタウロス目がけ、迫撃する。

「シッッ！！」

「ヴオッ！？」

巨躯の右脇下に叩き込まれた《ヘスティア・ナイフ》は天然の鎧を貫通した。

遠心力が上乗せされた最大威力。まさかの不意打ちにミノタウロスの姿勢が揺らぎ、横にぐらりと流れる。

そして、ベルは敵の体内に届いた黒刃をぐっと押し込み、ありったけの力を込めて――“砲声”した。

「ファイアボルト！」

ドゴンッ、とミノタウロスの全身が振り乱れる。

体内で何かが“爆発”したかのように、肉厚の胸板が膨張した。

ナイフに貫かれている傷口から火炎の息吹ががばっと溢れ出し、ミノタウロスの血走った瞳が限界まで見開かれる。

「ファイアボルトォッ！」

更に肥大。

奇天烈なまでに、ミノタウロスの上半身が風船のごとく膨れ上がる。

体皮の上ならば魔法を無効化するさしもの肉体と言えど、“体内”では防ぐ術などありはしない。

刃伝いに送り込まれた炎雷が体の中で暴れ狂い、ミノタウロスを直に焼き焦がす。
行き場の無くなった火炎流は出口を求め、一気に喉内を駆け上がり。
ゴオウッ、と鼻腔と口腔から緋色の炎が勢いよく噴出した。

「ガハッ、ゲッハッ……！？　グッ……グヴォオ゛ッ！？」

喉を焼かれながらもミノタウロスは咆哮し、振り上げた巨腕を張り付いているベルへ直下させた。
超膂力から繰り出された肘鉄。
寸分の疑いもなくベルの体を無残な肉塊へと変える極鉄槌。
死が、一秒後に迫る。
そして猛落下するハンマーが頭皮に触れる、その僅差。
ベルの方が、速かった。

「ファイアボルトォオオオッ！！」

爆散。

『―――――――――――――――――――――――――――――――――――ッッ！？』

凄まじい断末魔が炸裂し、ミノタウロスの上半身は粉々に弾け飛んだ。
体内で圧縮されていた熱塊は爆ぜ、炎の轟華が咲く。
ダンジョン天井にまで緋炎と煙が緩慢と立ち昇る。見る者に火山の噴火を連想させる光景の中、かろうじて原型を留めた下半身がぐらりと崩れ落ちた。

降りしきる血と肉の雨。
千々に漂う黒焦げたそれらを、火炎の霧が彩る。
音をたてて狂牛の破片が地面に転がっていくそんな最中。
空高く舞い上がり、その身を回転させていた巨大な魔石が、ザンッと地面に突き立った。

「勝ち、やがった……」

呆然と、ベートは呟いた。
信じられないものを見るかのように、視線の先でたたずむベルを見つめる。
こちら側を向く背中から喚起される自己への問い。
自分がミノタウロスを圧倒できるようになったのは、いつの頃だった？
いや、自分一人であのモンスターを倒せるようになるまで、どれほどの時間がかかった？
そう考えた矢先、ベートの顔と体が煮えたぎる。
腹の中心から沸き起こるどうしようもない苛立ちと、羞恥が、全身の隅々まで行き渡った。

「……精神枯渇（マインドゼロ）」

「た、立ったまま気絶しちゃってる……」

《ヘスティア・ナイフ》を振り抜いた体勢でぴくりとも身動ぎしないベルに、エルマとエルナの姉妹も唖然と呟きをこぼした。
文字通り力を絞り尽くした少年の姿に、ともすれば畏怖を覚える。
まるで物語のワンシーンを切り抜いたかのように、冒険者は一体の彫刻と化していた。

「っ……！　質問に答えろ、ホビット！　あのガキは一体っ……！」

「ベル様……ベル様ぁっ！」

「おい！？　……ちッ！」

覚束ない足取りで駆け出していったリリにベートは舌打ちをする。
説明できない情動に苛まれながら苦虫を噛み潰していると、その光景が目に飛び込んできた。
防具を剥がされたベルの背中。ボロボロになった黒のインナーは破れ落ちる寸前で、肩甲骨辺りで綱のように残っている生地によって何とか繋ぎ止められている状態だ。
そして所々に穴の空いたその薄布の下、夥しく刻まれている【神聖文字（ヒエログリフ）】が姿をちらつかせていた。

「――！　リヴェリアッ、あいつの【ステイタス】を教えろ！」

「……私に盗み見をしろというのか、お前は」

ベルの素肌が露出されているのは背中の上半分だけだった。
下部の方に記されている魔法やスキルのスロットは窺えず、千切れかかっている生地が邪魔をして目の届かないアビリティ欄もいくつかある。

「あんな堂々と晒しておいて盗み見になるかよ！　あれをこのまま放置しておけば、お前が見なくたって他の奴等が目にするだろうぜ！」

ただ視界に入っただけ、違反をするわけではないと、ベートは声を荒げて【ヒエログリフ】を解読できるリヴェリアに詰め寄った。

博識のエルフは嘆息しながら、それでもやはり興味があるのか、すっとベルの背に視線を走らせる。
翡翠色の瞳が黒い文字群を追っていく。

「おい、まだかよっ」

「待て、もうすぐ読み終わ――」

リヴェリアはそこで中途半端に言葉を切った。
ベートは顔を訝しげにし、聞き耳を立てているエルナ達も不思議そうに彼女を見る。
すぐしないうちに、鈴を転がしたような笑声が彼女の口から漏れ始めた。

「……くっ、ふふ、ははは っ」

「何なんだよ、オイ!?　ったくっ、アイズ、お前もちっとは【ヒエログリフ】が読めんだろ!　何かわからないのかよ!」

心底おかしそうに肩を揺らすリヴェリアにベートは悪態をつき、問答の先をアイズへと向けた。
直立不動を続ける彼女は、少年以外何も見えていないかのように視線をその背にそそいでいる。
金の双眸は剣のように、鋭く構えられていた。

「……S」

「……はっ？」

「全アビリティ、オールS」

『オールS！？』

ベートとエルナ達が驚愕の声を揃える。今度こそ、言葉を失った。

実際の所、「魔力」を始めとしたアビリティ欄はインナーの影に隠れて判然としないのだが、どちらにせよ似たようなものだとアイズは解釈していた。

彼女は一つの事実を告げていない。

今もリヴェリアの喉をくすぐっている、SS――アビリティの“限界突破”という、目を疑う現実を。

「名前は？」

響く。

沈黙を破る静かな声が。

その声の出所に、アイズ以外の視線が集中する。

いくつもの瞳が見下ろす所、フィンが、ポンポンと長槍の柄で自分の肩を叩いていた。

冷静沈着にヒューマンの冒険者を見つめていた目は、くいっとベート達へ持ち上げられる。真剣な色に塗り固められた眼差しが、少年の名前を求めていた。

「彼の名前は？」

「し、知らねぇ……。聞いていない……」

「……リヴェリア。いつまでも笑っていないでくれ」

「ふふっ……ああ、すまない。それで、何だったか？」

「彼の【ステイタス】を読み取ってくれ。彼の真名を、だ」

「ああ、そうだったな。待っててくれ……」

【ステイタス】は神と恩恵を授かった者の関係を示す契約書のようなものだ。

恩恵を機能させるためにも主神の名を表す象徴（シンボル）と、その対象者の名前が必ず刻み込まれている。

リヴェリアは記されている名を読み取ろうと目を細める、が、彼女の口が開くより先に。

アイズがその名前を唇に乗せた。

「ベル」

「アイズ……」

静かな声音が辺りに通った。

依然その姿勢は変わらないまま。

エルナの声にも振り向かず、アイズは真っ直ぐ少年のもとへ意識を馳せる。

「ベル・クラネル」

路傍の石ではない、はっきりとした少年の姿が、その金色の瞳の中に映し出されていた。

所要期間、約一ヶ月。

モンスター撃破スコア、３００１体。

Ｌｖ．１到達記録を大幅に塗り替えた、世界最速兎誕生（レコードホルダー）の、三日前のことだった。

設定集（前書き）

１０話までの復習。不真面目な設定集です。今後変更点も色々出てくるやもしれません。

設定集

用語・【ステイタス】関連

・【ステイタス】

「神の恩恵」。神達が子供達（下界の者）に【神聖文字】を刻むことで発現する。

初期効果は身体能力の向上。追加効果としてあらゆる“可能性”の発現性を孕む。【ステイタス】の成長は大部分が【経験値】に依存する。

【ステイタス】の更新は神の直筆による完全他動。【神聖文字】が書き換えられて初めて能力に変化が起きる。

・【経験値】

個々人それぞれが蓄積する歴史、そこから抽出される諸要素。

経験した事象を【神聖文字】が評価することで、【ステイタス】の組成へと変える。モンスターの撃退が【経験値】の一般例であるが、度を過ぎた行為ならば全て評価の対象になり、スキルやアビリティ等の発現に繋がる。

強い心の動きも作用する。

・【アビリティ】

基本アビリティと発展アビリティの二種類。前者は【ステイタス】の基本設定、後者は【経験値】の傾向により発現。当然発現しないこともありうる。

共通項はＳ～Ｉ　の十段階評価による能力高低。Ｓに行くほど効力

が強まる。これも【経験値】の獲得によって上昇する。
基本アビリティのみ、つまり戦闘能力関係のアビリティのみに「熟練度」が発生。０から９９までの値に別れ、９９に近付くほど以下同文。大抵において成長には戦闘系の【経験値】が必要。
能力高低および熟練度は、戦闘対象の実力が自身と同等あるいは格上であるほど上質の【経験値】を得やすく、結果、値が上昇しやすい。逆に相手が弱ければ上がりにくい。アビリティに限らず、【ステイタス】の性質は量より質の法則。
能力高低も熟練度も、極まるにつれ成長は難儀となる。評価Ｂ以上の成長はもはや至難。【ランクアップ】できるほどの才能ある者達でさえ、多くがＢを頭打ちにＬｖ．を次の段階へ進ませる。
能力高低はＳ　０でカウンターストップ……と誰もが認識している。一般見解というより、もはや常識。

・【ランクアップ】
レベルアップ。現【ステイタス】の段階を一つ上昇させる。
アビリティの増加が【ステイタス】内のシステム強化ならば、【ランクアップ】は【ステイタス】そのものをグレードアップ、というより“別物”へと昇華させる。
【ステイタス】内に発現している既存能力全体を底上げし、その際における上昇幅はアビリティ補正の比にならない。ただしアビリティ評価が高ければ高いほど【ランクアップ】時の強化度合いに反映される。アビリティ評価ＡのケースとＢのケースが【ランクアップ】したならば、前者の方が格段に優越。
また、【ランクアップ】を経た直後の【ステイタス】のアビリティ評価はオールＩ　となる。「別物への昇華」の件からわかるように、リセットというよりは、次ステージでの再スタートと言った方が正しい。
【ランクアップ】条件は絶対的な【経験値】の一定量超過。詰まる

ところ、自分より強大な相手との交戦、ひいては勝利が必要。険しい通過儀礼を何度も経て次回の“高み”に到達する。例え戦闘職（冒険者等）でなくとも、【ランクアップ】には闘争におけるより上質な【経験値】が不可欠。

・【魔法】

字の如く。大抵、切り札、必殺。

前儀式である「詠唱」を行って発動に至る。詠唱が長文であるほど現れる威力は高い。効果内容は千差万別。

神の恩恵により万人の行使が可能となり、エルフや妖精を代表とする魔法種（マジックユーザー）の専売特許ではなくなった。ただし発現のタイミングは未知。一生自身の魔法を拝めない者も多く存在する。

使用できる魔法の数は【ステイタス】内にある「スロット」によって決定。一つしかスロットがない者は、一つの魔法のみしか発現できない。一種類の魔法を使えるのが標準的で、二種類以上を扱える者は稀。

・【スキル】

アビリティとは別種の効能効果。【ステイタス】の能力値とは関係なしに、スキルの能力自体が独立しているものが多く、単純な能力補正に留まらないケースが多い。スロットは無制限。

用語・その他

【魔石】
謎な物質。モンスターの核であり、冒険者の収入でもある。そしてオラリオの金のなる木。
ヒューマンの技術によって照明などの器具に利用される。実際彼等もよく原理はわかっていない。
下層のモンスターほど巨大かつ上質な魔石を体内に保有する。

・【ファミリア】
「神の眷族」。神が恩恵を与えた者を構成員とし、独自の組織とする。
活動内容は様々で、基本的に周囲の営利組織と何ら変わらない。一般の組織との違いは、【ステイタス】を宿す構成員の能力幅。【ステイタス】という無限の可能性がある以上、【ファミリア】の活動も無限の選択肢が存在している。よって【ファミリア】の活動自体が神の道楽、“ゲーム”となっている節がある。ただし、基本的に神は無能。いわゆる世界の親玉や悪の根源という存在にはキャラ的に役者不足。
どちらかといえば、【ステイタス】という促進剤を手に入れた構成員達が自らの意志でそっち系に走り易い。面白そうであれば、神達はその成り行きを黙ってニヤニヤと傍観する。なので、王国、帝国を名乗る【ファミリア】はざらに存在する。

・迷宮都市オラリオ
世界で“唯一”の「迷宮都市」。モンスターを生み出す「ダンジョン」の上に築かれている。現代でも亜人を上回る数で世界に散在しているモンスター達は、全てこのダンジョンから下界へ進出した（ちなみに、外のモンスター達は度重なる生殖行動を経たせいか、ダンジョンのモンスターと比べ魔石の大きさと質は極めて低い）。

当然、世界一の魔石製品輸出都市。ダンジョンの恩恵――魔石産業による莫大な利益を受け、そこらの一国家より遥かに発展している。

「オラリオの魔石技術は世界一ィイイイイイイイ！」。

その類ない資源に目をつける周囲の国々（ファミリア）は、昔日から飽きずに侵略行為を繰り返しているが、オラリオの特定多数の【ファミリア】があまりにも強過ぎて軒並み返り討ちにあっている。

ダンジョンの恩恵は、年がら年中迷宮を攻略し続ける冒険者の“育成”にも及んでいる。

遥か古代から続く、世界で最も“熱い”都市。

登場人物（登場順）

ベル・クラネル
主人公。１４歳。
【ヘスティア・ファミリア】所属。１００％天然のヒューマン。元農民。純朴そうで実はヨコシマ。
とある人物との出会いが全ての契機となる。成長の塊。

アイズ・ヴァレンシュタイン
高すぎる高嶺の花。１６歳。
【ロキ・ファミリア】所属。あまり感情を表に出さない。
ありえないくらい強い。具体的にはベルが１００人いようが瞬殺してのけるほど強い。

エイナ・チュール
世話焼きハーフエルフ。１９歳。

ギルド所属。ベルのことが弟的な意味で気になっている。可愛らしい受付嬢として冒険者達に人気。

ヘスティア
ロリ神。ン億歳。
ベルキュン。相手が神の存在を神格化し過ぎているので好意に気付いてもらえない。気付いてもらえたとしても畏れ多いと平伏してしまうキャラなので、目下懊悩中。
ベルだったから惚れ込んだ。外見ほどホイホイ悪い人に付いていくただのロリではない。腐っても神。

シル・フローヴァ
良質町娘という名のフェイント。したたかな女性(ひと)。
酒場「豊饒の女主人」で働いているウエイトレス。普通よりちょっと上くらいの美人。着やせするタイプ。

ミア・グランド
母ちゃん。豪傑な女性(ひと)。
でっかいドワーフ。一流冒険者だった過去を持つ。今は「豊饒の女主人」を馬鹿娘達と切り盛りしている。
酒落にならないほど強い。

ベート・ローガ
狼耳のクソイケメン。獣人ウェアウルフ。
【ロキ・ファミリア】所属。弱い奴大っ嫌い。基本女好きだが、弱い女は一番嫌い。
尋常なく強い。

ヘファイストス
鍛冶神。紅髪紅眼。

【ヘファイストス・ファミリア】の主神にして永遠現役社長。神の中でも人格者の部類。
ヘスティアとは腐れ縁。右眼に眼帯をしている。超美人。

フレイヤ
「美の神」。ラスボス的な何か。
嫉妬を買う天才。超越した美貌と完璧のプロポーションを持つ。色んな意味でベルのストーカー。
子供達の輝きを視認できる「眼」を持つ。

ロキ
現役引退したトリックスター。朱髪朱瞳。
【ロキ・ファミリア】主神で、子供達が可愛くてしょうがない。中でもアイズがお気に入り。というか、気に掛けている。無乳。
男のように後頭部で髪を縛っている。クソ美人だが、基本下劣。

リュー・リオン
ブレーキブレイカー。「マッタクリューサンハドジッコダナー」。
ウエイトレスの格好をした武装エルフ。「豊饒の女主人」の実力派Ｎｏ２。トップは母ちゃん。
エルフという種族の中でも際立って礼儀正しい変わり種。空色の瞳をしている。
めっちゃ強い。

リリルカ・アーデ
薄倖の賊。１５歳。
【ソーマ・ファミリア】所属。ホビットのサポーター。条件付きで多種多様な変身を行える。
すごい勢いでグレていたが、愛の力で改心。堅気に戻ろうと鋭意努力中。「ノームの万屋」でアルバイトとサポーターを兼業。

エルナ・ヒリュテ
天真爛漫バーサーカー。黒髪小麦肌。
【ロキ・ファミリア】所属。アイズの親友。元ネタは仮面ライダーア〇ゾン。
べらぼうに強い。

エルマ・ヒリュテ
知的気どりのアマゾネス。エルナの双子の姉。
【ロキ・ファミリア】所属。微妙に鍛冶神とキャラ被ってて方向性を模索中。団長命。エルナの分も含めて胸がでかい。
くっそ強い。

フィン・ディムナ
ホビットの勇者。ショタなのにイケメン。
【ロキ・ファミリア】首領。頭が切れる。普段は温厚だが、スイッチが入ると誰も逆らえない。
どちらかというと指揮官タイプ。しかしやはりどうしようもなく強い。

リヴェリア・リヨス・アールヴ
ハイエルフの家出娘。緑髪緑眼。
【ロキ・ファミリア】副首領。魔法のスペシャリスト。近接戦闘もそつなくこなす火力の塊。そこらの神を越える美貌を持つ。
エイナの実母アイナ・チュールとはもと主従の仲。エイナやアイズへ実の娘のような感情を見せる。
超絶に強い。

オッタル
オラリオの最終兵器。Ｌｖ．６。

【フレイヤ・ファミリア】首領。フレイヤ腹心の団員。
強化ミノタウロスを生み出した張本人。“教育”の最中にやり過ぎて片角を折ってしまった。
オメガ強い。

アーニャ
「豊饒の女主人」店員その1。
リューと一緒に初登場して即退場した獣人キャットピープル。アホの子。
ベルより強い。

クロエ
「豊饒の女主人」店員その2。
神のような性格の獣人キャットピープル。シルやリューや母ちゃんからよく折檻を喰らう。
ベルより強い。

ルノア
「豊饒の女主人」店員その3。
ヒューマン。結構はっちゃけっている馬鹿娘の一人。
ベルより強い。

メイ
「豊饒の女主人」店員その4。
キャットピープルのコック。ドジ。
ベルより強い。

ソーマ
趣味神。普通にイケメン。
趣味に没頭し過ぎて周りが見えておらず、いたずらに被害を広めて

いるハタ迷惑な神。他意は皆無なので一層たちが悪い。
悪い神ではない。

ボム・コーンホール
一人称ジジイ。白髭もじゃもじゃノーム。
「ノームの万屋」店主。リリ絶賛の鑑定眼の持ち主。貴重な装備品から怪しげなアイテムまで色々買い取っては在庫に取っておき、高値で捌いている。
変身を止めたリリに気付かない振りをしながら、住み込みで働いてもらっている。

ゲド・ライッシュ
すごく、難産でした。

カヌゥ
同上。

ケイ
同上。

レンダー
同上。

ミィシャ・フロット
童顔受付嬢。ヒューマン。
ギルド所属。エイナの友人で、彼女とは学区からの付き合い。テスト前日まで勉強をしないタイプ。

おまけ

強さ

アイズ＞ウダイオス＞＞＞＞～～～～～～～～～＞＞＞＞ベル≧強化ミノ＞＞＞＞＞＞Ｌｖ．０平均的冒険者＞＞＞＞＞＞ゴブリン

※ウダイオスのデコピン一発で強化ミノは弾け飛ぶ。

美しさ

フレイヤ＞＞＞＞～～～～～～～～～＞＞＞＞リヴェリア＞ヘファイストス≧アイズ＞ロキ＞＞＞＞リュー＞エイナ＞＞＞＞シル＞＞＞＞～～～～～～～～～～～～＞＞＞＞ミア

※あくまで指標。好みは人それぞれ。

ロリ度（ショタ度）

ヘスティア≧リリ＞フィン＞＞＞＞越えられない壁＞＞＞＞ベル

※越えようがない。

11話　変わる環境・加わる関係

ガヤガヤと、朝のギルド本部は雑多な喧騒に包まれていた。
朝、とりわけ九時から正午までの間、このだだっ広いロビーでは冒険者達の出入りが激しい。
ダンジョン探索の前に担当職員のもとで今後の打ち合わせを行う冒険者もいるが、多くは昨晩から更新された情報を掲示板の前や口コミから収集に来ている。
商業系【ファミリア】の新商品発売告知から特定のドロップアイテム買い取り依頼に始まり、他【ファミリア】の勢力状況もあればダンジョン内で未確認であったレアモンスター目撃報告など、ギルドを通じて公開される情報一覧は冒険者達にとってぶれない価値がある。
明日の命運を左右する、あるいは明日の千金になるやもしれない情報収集に、彼等は大概――当然と言えば当然――抜かりがない。
強い朝日がフロントの中頃まで差し込む中、種族入り乱れる亜人達は足と口を頻りに動かしていた。

「あちゃ～。冒険者の人達、今日は一段と押し寄せちゃってるね」

「こら、勤務中。話しかけてこない」

ロビー窓口で椅子に座っているエイナは、隣から耳打ちしてくるミィシャを軽く注意する。
ミィシャの言った通り、本日の朝はいつにも増して大勢の冒険者達の姿が見受けられる。エイナを含めた受付嬢達は何かと対応に追われており、忙しさにも拍車がかかっていた。先程まで冒険者の案内

をしていたエイナ自身も、今ようやく小休止を得たところだ。
いつものノリで見目麗しい彼女達を白昼堂々とナンパしてくる輩など、今日ばかりはばっさばっさと切り捨てられている。

「神会（チャット）が間近だし、冒険者達の方でも【ランクアップ】続出の話が持ちきりになってるみたいだけどさぁ……やっぱり極めつけはアレだね、９階層にミノタウロスが出たっていう」

「……うん、そうみたい」

三日前、Ｌｖ．０の冒険者達の目の色を変えさせる情報が出回った。
『ミノタウロスの上層進出』である。
【ロキ・ファミリア】からもたらされたこの報せはオラリオの過半数の冒険者を震え上がらせ、今日まで連日ギルドへ詳細を求める声が後を絶たない。
名高い冒険系の【ファミリア】が提供した情報だけあって、真偽を確かめる余地がなく、またミノタウロスを直接見たというとあるパーティの声も真実味を増す一役に買っていた。

モンスターの階層間の移動はイレギュラーとはいえ度々確認されていることなので、本来ならばここまで騒ぎになることはないのだが……今回はケースがケースだった。
中層から上層へのモンスター進出はごく稀だ。しかも目撃情報は９階層、ミノタウロスとの遭遇（エンカウント）が始まる１５階層から約６階層分もの道程を上がってきたことになる。
モンスターの階層移動は精々２階層までというのが一般見解なので、それを加味すると、今回のハプニングの異常さが際立ってくる。
そして何より、ミノタウロスの上層進出が初めてではないという点

が、冒険者達の不安を倍増させていた。
まだほんの一ヶ月前だ、ミノタウロスが三日前と同じように上層へ姿を現したのは。他ならない、ベルとアイズが邂逅したあの日である。
そちらの一件は【ロキ・ファミリア】の「遠征」帰りのアクシデントであると、エイナ達ギルド側は再三に渡って説明しているのだが、冒険者達はそう簡単に納得しない。
Ｌｖ．０の彼等からすれば、中層のモンスターが上層をうろついてもらってはおちおち探索もできなかった。Ｌｖ．１にカテゴライズされるモンスターと遭遇してしまえば、その瞬間が自身の最期に直結してしまうからだ。
死活問題なだけに、一度抱いた危惧を払拭することは難しい。
中にはダンジョンの構造が変化して、ミノタウロスを上層に産むようになったのではないかと言う者もいる。
大仰に過ぎる、とはエイナ達は言えない。
冒険者達と日々触れ合っている分、エイナ達も彼等の心の内が痛いほどわかるので、間違ってもぞんざいな対応など働けなかった。
こうして冒険者達が押しかけてくるのも仕方のないことだと受け止めている。

（……あの日から音沙汰ないけど、大丈夫だよね？）

ベルの連絡が途切れていることが、エイナを酷く不安にさせる。
少年はあのモンスターに一度殺されかけている、ミノタウロスという単語を聞いて必要以上に反応してしまうのも無理もないことだった。
ベルが最後にギルドへ訪れてからまだ一週間も経っていないので、

杞憂に過ぎないと理性は訴えているのだが……。
エイナは途端にそわそわし出し、落ち着くことのない感情を胸の中に持て余した。

「あ、エイナのお気に入りの冒険者君、はっけーん」

「！」

友人の間延びした声にエイナははっと顔を上げた。
見れば、あの見慣れた白髪頭が、密集した冒険者達の間を右へ左へと忙しなく縫ってきている。
やがて「ぷはっ」と人混みから顔を出し、示し合わしていたようにエイナと目をばっちり合わせたベルは、ニカッと頬を染めながら笑った。

「あれれ、今日は何だか一段と機嫌良さそうだね、あの子？」

「……」

今度は、ミィシャの言葉も左から右に流れてしまった。
胸を温める安心感とともに笑みがエイナの顔一杯に広がった。すぐに彼女はそれを引っ込めたが、桜色の唇がどうしても緩みかけてしまう。
嬉々とした様子でウサギのように飛んで跳ねてくるベルに、こっちの気もしらないでっ、と小憎らしく思いはすれど、やはり安堵の方が勝った。

ギルド職員の体裁を忘れ、エイナは思わず顔を綻ばせる。

「やっほー、ベル君、久しぶり」

「あ、おはようございます！」

もう互いの声が届く距離まで来て、ミィシャが気さくに声をかけた。
エイナを通してベル達は既に面識がある。
ミィシャはそれからエイナをちらりと見て、わざとらしくデスク上の書類をまとめ出し席を立とうとする。どうやら、エイナの心の動きを少なからず見透かしていたようだった。
やや気恥ずかしい思いをしながらも、エイナは近付いてくるベルを笑顔で迎えた。

「おはようございます、エイナさん！」

「おはよう、ベル君。ダンジョン攻略は頑張ってる……なんて、聞くまでもないかな？」

「はい、ちゃんとやってます！　今はちょっと、最後にもぐった日から間が空いちゃってますけど！」

「うん、休息も大事だからね。休む時はしっかり休まないといけないから、ちょうどいいんじゃないかな？」

普段の自分を意識しながらエイナは上機嫌なベルと会話を進めた。

といっても彼女が浮かれ気味であるのは、隣で笑みを噛み殺しているミィシャからすれば一目瞭然だったが。
目尻を柔らかくしながらエイナは言葉を続ける。

「それで、何かいいことでもあったの？」

「わ、わかりますか？」

「ふふっ、そんな顔してちゃあ、誰でもわかっちゃうよ？」

にやけている頬に手をやるベルに、エイナは苦笑をこぼした。
エイナの指摘した“いいこと”を喋りたくてうずうずしているのが、その様子から簡単に見て取れる。
「話してごらん？」とエイナは緑色の瞳で伝えた。ベルは冒険者登録を済ませたあの日のように顔を輝かせて頷く。
横でミィシャも苦笑していた。彼女は椅子から立ち上がって、小山になった書類を両手に抱える。
本当に嘘がつけないなぁ、と実の弟を見るような穏やかな気持ちで、エイナはベルの次の言葉を待った。

「じ、実はですねっ……」

「うん」

見ていてこっちまで嬉しくなるような笑みを浮かべて、ベルは言った。

「僕、とうとうＬｖ．１になったんです！」

――バサバサバサッ、とミィシャが書類の山を落下させた。
ベル達に背を向けた体勢で、石のように固まっている。
エイナを通してベル達は既に面識がある――だからミィシャは、ベルが冒険者になって“二ヶ月も経っていない駆け出し”であることを、知っている。
エイナは笑っていた。
綺麗に笑っていた。
先程から引き続いて、満面の笑みを浮かべていた。
そしてその綺麗な笑顔は、ぴくりとも動かなかった。
正確には、時間が止まっていた。
彼女達を取り残して、これまでと変わらない喧騒がロビーを往来する。

「……ん？」

可愛らしい笑みを維持したまま、エイナはリアクションを取った。
聞き間違いかな？　と言うように可愛らしく小首を傾げてみせる。
微妙に笑顔の奥で有無を言わせない雰囲気を滲ませながら、「ゴメン、もう一度言ってみて？」とベルにリピートを促した。

「だから、Ｌｖ．１になったんです、僕！　三日前に！」

それに全く気付かないベルは、元気よく同じ言葉を繰り返す。
ぷるっ、とエイナの笑みが全身と一緒に揺れた。

「Ｌｖ．１？」

「はい！」

「三日前？」

「はい！」

「嘘なんかついてないよね？」

「はい！」

「ベル君、冒険者になったのいつ？」

「一ヶ月半前です！」

言葉はそこで打ち切られた。
ヒューマンとハーフエルフの間で、にこにこニコニコと無言の笑みが交わされ続ける。
再び窓口で列をなそうとしている冒険者達が、彼女達を見て怪訝そうな顔を浮かべた。
石像となったミィシャを傍らに置くその光景が、膠着すること少し。
エイナは、ぎしっと音を鳴らして椅子から立ち上がり――爆発した。

「一ヶ月半で、レベル1〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜っ！？」

周囲のざわめきを丸のみにする大音声。

本部にいた者全てを振り向かせる叫び声が、雷鳴のように響き渡った。

そして至近距離で鼓膜を打ち据えられたベルは、大きく仰け反るのだった。

「ごめんっっ！」

「あはは……」

両手をぱんっと鳴らして頭を下げるエイナに、ベルは苦笑い。

場所は面談用ボックス。少人数までならディスカッションも行える

この部屋は、一対一で使用する分にはそれなりに広い。内装は質素であるが、防音設備等の機能面は充実している。
デスクと椅子を揃えられたクリーンな一室で、エイナはベルに謝罪していた。

「他の【ファミリア】の人達がいるあんなところで叫んじゃって…
…本当にごめん！」

数分前のロビーにて、エイナが衝動的に声を張り上げてしまったことにより、ベルの【ランクアップ】はあの場にいた全員が知るところとなってしまった。
いくら取り乱していたとはいえ、あまりにも迂闊な真似だった。驚愕と奇異の視線に集中砲火されていたあの光景を思い出すと、エイナは今からでも顔から火が出る思いだ。
個人の情報を不用意に暴露した大失態と、何より羞恥心に焦がされ、そのちょんと尖っている耳を赤く染めてしまう。

「い、いいですよ、エイナさん。Ｌｖ．はどうせ公開されちゃうんですし……早いか遅いかの違いだけじゃないですか？」

顔を上げようとしないエイナにベルは困惑気味に言った。
全く気にしていないと眉尾を落とした笑みを作る。
エイナは気まずそうに顔を上げた。

（確かにキミの言うとおりなんだけど……問題は【ランクアップ】

自体じゃなくて、そのかかった時間なんだってば……）

目の前にいるベルをじっと見ながら、エイナは心底参ったように呟きをこぼす。

Ｌｖ．１到達が約一ヶ月というのは異例の最短期間だ。言葉で説明するのがもはや馬鹿馬鹿しくなってくるほどの。

確かに、兆候はあった。

自分のもとに足しげく通うベルから階層攻略の相談をされる度、彼のダンジョンの進捗状況を聞いて、エイナは内心で冷や汗をかいていたものだ。

一週間も経たないうちに８、９階層をまとめて攻略したと耳にした時は、「はっ？」と目を丸くしてしまったのを覚えている。

冒険者としての能力と照らし合わせ、ベルに階層突破のゴーサインを出してきたのは他ならないエイナである。ソロでの攻略を許す代わりに【ステイタス】の基本アビリティをつぶさに確認させてもらっていたが、その異常な成長速度にはすぐ気が付いた。

システム上、熟練度の成長と【ランクアップ】するタイミングは別枠だ。

いくら基本アビリティの伸びが激しくてもＬｖ．までは――と半ば祈るように高をくくっていたのだが、見事に裏切られてしまった。

やはり、いずれ明るみに出るとはいえ、できることなら隠しておきたかった事柄である。

もはやこの際、急成長の“原因”はどうでもいいのだ。それよりも、一ヶ月半でＬｖ．１に到達してしまったという事実が肝要になってくる。

今きょとんとしている目の前の本人に自覚がなくても、周囲が彼を放っておかない。

同業者達の目を引くのは勿論、「前例がない」という文句は娯楽に飢えている神達の大好物だ。彼等のあのニヤけ顔を想像するだけでエイナは頭が痛くなってくる。
実際、破天荒な内容なので、眉唾物だと言って真に受け取らない者達の方が数多いとは推測できるのだが……しかしギルドの方は十中八九、【ファミリア】のルールの中に守秘義務があるとはいえ、今日からベルをマークすることだろう。
自分がベルに引導を渡してしまったのかもしれない。
大袈裟かもしれないが、今のエイナは本気でそう思ってしまった。

「あの、エイナさん……？」

「……うん、何でもないよ。ごめんね、ぼーとしちゃって」

難しい顔をしていたエイナにベルは遠慮がちに声をかける。
浅く吐息をして頭を切り換えたエイナは、少し苦労して、普段の笑顔を引き出しの中から取り出した。
この負い目は手強そうだなぁと、自分のことながら察してしまった。

「ベル君、ごめん。先にこっちのお願い聞いてもらっていいかな？
せっかく来てもらったのに悪いんだけど」

「あ、はい、大丈夫です。何ですか？」

「ちょっと、今日までの冒険者の活動記録を教えてほしいんだ。私もお仕事しなくちゃいけないから」

「えっと……？」

「大雑把でいいよ。どんなモンスターと戦ったとか、こんなイベントをこなしてみたとか」

紙とペンをデスクに用意しながらそう告げる。

上にこの一件を報告すれば仔細の情報を求められるのは明白だった。

特に例外的な成長速度を実現させたベルの場合は、その【経験値】の傾向が焦点となってくるだろう。

冒険者の質の向上に繋がるならば、ギルドは各【ファミリア】に不都合が生じない範囲で情報を公開する。莫大な利益を生む魔石の収集量を高めるためだ。

要は、「ベルの成長を参考にして、他の冒険者もじゃんじゃん強くなってくださいね」ということだ。

冒険者の水準が上がるということは犠牲者の数の低下にも繋がるので、これぱっかりはエイナ達担当官も積極的にこなす。

ベルのプライベートを決して犯さないよう注意を払いながら、エイナは自分の仕事に集中していく。

そして、ベルの話が三日前まで遡った折だった。

二度目の頭痛がエイナを襲う。

「ミ、ミノタウロス……」

くらっ、と後方によろける頭を右手で押さえる。

――三日前、９階層、ミノタウロスと遭遇、これを撃破。

ベルが順々と発していく言葉に、エイナは今度こそ卒倒しそうになった。

【ロキ・ファミリア】の末端成員がギルドに知らせにきた報告と、ベルの証言が、条件の上で全て合致する。

だからミノタウロス処理の行方を尋ねられた時、あの構成員はあんなに言葉を濁していたのかと、エイナは当時の絵を振り返りながら思い至った。Ｌｖ．０らしき冒険者がミノタウロスを始末したと言っても、誰も信じはしない。

聞くところによると、決着と同時に力尽きてしまったベルは、パーティのサポーターと仲良くバベルの治療施設に運ばれたそうだ。付き添ってくれたのはサポーターを治療してくれた一人のエルフらしい。

額に手の甲を当てながら目眩に耐えていたエイナは、重くなっていた瞼をこじ開けて、ベルを怒ったように見据えた。

あれだけ冒険するなって言ったのにっ、という恨みがましい視線に、ベルは汗をダラダラと流した後、そっと目を横に逸らす。

「……もうっ、どんな魔法使ったのよ、キミはっ」

半分は怒り気味に、そしてもう半分は呆れ気味に。

エイナはいっそ否定してほしいと投げやりに言葉を放つ。

こうしている今でも、Ｌｖ．０の冒険者がミノタウロスを単独撃破したなど信じられない。

自分の常識が冗談のように壊れていくような気がした。

「ぼ、僕の『魔法』ですか？　ええっと、こう、炎が出る感じなんですけど……」

一方でベルは、そんなエイナの言葉を額面通りに受け取ったようだった。
手の動きと合わせて、自分の魔法の説明を始める。
そして、それを見てエイナはピンときた。

（そっか、『魔法』……）

『魔法』が発現していたとなれば、ミノタウロスも倒せるかもしれないと納得を得る。
恐らくは強力な攻撃魔法を隙を見て叩きこんだのだろう。魔法という必殺があれば、Ｌｖ．の差を覆して打倒も可能だ。疑問が氷解する。
事実はエイナの予想をことごとく裏切るものであったが、それを正す存在もなく、彼女は極めて妥当な自己完結をするのだった。

「……はぁ。大体わかったよ、ベル君が私の言いつけを、ち～っとも守ってくれる気がないってことは」

「ええっ！？　いや、それはっ……ごめんなさい」

両目を瞑りつんっとそっぽを向くエイナに、ベルは慌てて言い繕うとしたが、声は次第に尻すぼみになっていった。最後は謝罪とともに頭を垂れる。
片目を開き、落ち込んでいるベルをちらと見やったエイナは、少し溜飲が下がるのと平行して、ちょっと大人げないかなと反省を胸の

中で一つ。
けれど、自分のやったことをきちんと自覚してもらわなくては困るというのも本音だ。
一歩間違えていれば、ベルはここにいなかったのだから。

「……ベル君。その場にいなかった私の言葉は見当違いかもしれない。安易に逃げようとしなかったキミの判断は、もしかしたら最善だったのかもしれない」

「エイナさん……」

「私には何も言う資格はないのかもしれないけど……でもね？　これだけはどんな時でも忘れないで。……死んじゃったら、何も意味がないんだよ」

お願いだよ、とエイナはベルのことを見つめる。
生きて帰ってくるのが一番大切なのだと、自分の心情を包み隠さず伝えた。
身動きを止めていたベルはややあって、ぎこちなく頷いた。
しばらくお互いの視線を絡ませた状態が続いたが、エイナはおもむろにこほんと咳をつく。
少々しんみりした空気を入れ替えるように、ぴっと指をベルの目の前に伸ばした。

「とにかく、いい？　無茶は絶対ダメ。わかった？」

「は、はいっ」

眼前に突きつけられる細い人差し指に、ベルはこくこくと頷く。最後に鼻の先をちょんと押されて、「あうっ」と呻いた。
エイナはそれから椅子に座り直し、ふっと笑う。
今日はもう、これ以上の無粋な真似をするのは止そうと。
ブラウンの髪をほのかに揺らしながら、ベルへ優しく微笑んだ。

「……ベル君、Ｌｖ．１到達おめでとう。頑張ったね」

鼻を押さえていたベルははっと目を見開き、やがて本当に嬉しそうに、くしゃっと破顔した。
自惚れでなければ、自分のこの言葉が、今のベルが一番言ってもらいたかった言葉の筈だ。
「はいっ」と鼻の先まで赤く染める少年を見ていると、今日まで世話を焼いてきたエイナも、何だか万感のようなものが胸を過った。

「じゃあ、今日は【ランクアップ】の報告だけってことだけでいいのかな？　まだ私に用事があったりする？」

「あ、そうだった。実は、ちょっとエイナさんの意見を聞かせてもらいたいんですけど……」

一段落ついてエイナが今後のことを確認すると、ベルは忘れていたと用件を切り出す。どうやら今から言うことが本題らしい。
エイナは「いいよ、何でも聞いちゃって」と笑いながら快諾した。

「その、『発展アビリティ』のことなんですけど……」

「ああ、そっか。ベル君、Ｌｖ．１になったんだもんね」

『発展アビリティ』は既存の『基本アビリティ』に加えて発現するアビリティ項目だ。

発現するタイミングは【ランクアップ】の際で、Ｌｖ．が上がる都度、【ステイタス】に追加される可能性がある。

基本アビリティとは毛色が異なり、特殊的（スペシャル）、あるいは専門的（プロフェッショナル）な方向性の能力を開花、強化させる。

どちらかと言えば、一風変わった能力を付与させるスキルに似通った一面を持っている。

「それじゃあもしかして、選択可能のアビリティが複数出てきちゃったのかな？」

「はい。神様とも話し合ったんですけど、エイナさんの意見も参考にしてから慎重に選んだ方がいいって……」

なるほどね、とエイナは頷いた。

発展アビリティの発現するか否かもまた、積み重ねられてきた【経験値】に反映される。どのようなアビリティが生まれるかは、神の恩恵を授かったその者の行動次第。

特筆するような【経験値】が存在しなければ例え【ランクアップ】しても発展アビリティは発現しないし、逆に見合った【経験値】さ

えあれば、候補として潜在的に浮かび上がる複数の発展アビリティが選択可能になる。
一度の【ランクアップ】につき発現できるアビリティは一つ。最後は【神聖文字（ヒエログリフ）】を操る神の手によって、発展アビリティは【ステイタス】に刻まれる。
発展アビリティの発現はあくまで任意なのだ。

発展アビリティは【ランクアップ】を経た【ステイタス】上に発現する。
なので厳密にいえば、ベルはまだＬｖ．１になっていない。
今は発展アビリティを選ぶための猶予期間。最後の熟練度の更新を終え、後はヘスティアの手で【ステイタス】を一新されることを残す、いわば“保留”の状態だ。

「選択可能なアビリティはいくつ？」

「三つ、ですね。それでちょっと、よくわからないアビリティがあって……」

ふむふむ、とエイナは相槌を打ちながら、ベルの発展アビリティの詳細を紙に書き記していく。
まず一つ目は『耐異常』。
これはモンスターの特殊な攻撃によって発生するペナルティ――パープル・モスの『毒』効果といったような――から身を守る耐性力が発生する。
モンスターの特殊攻撃に晒され続けるというのが主な発現条件なので、ダンジョン上層にてパープル・モスと交戦する機会が多いオラリオの冒険者は、比較的このアビリティを入手しやすい。地味では

あるが、モンスターとの戦闘を主とした者には重宝される。冒険者の代表的な発展アビリティの一つだ。

次に『狩人』。

このアビリティは短期間のうちにどれだけモンスターを撃退できるかが発現条件と言われている。Ｌｖ．１の【ランクアップ】時にしか発現しないアビリティとされており、その達成条件から手に入れるのはかなり厳しい。碌に実力のついていないＬｖ．０の段階で、モンスターの亡骸の山を築かなければいけないからである。

自分より弱いモンスターばかり倒していてもＬｖ．は一向に上がらないので、短期間内という条件の内の一つに弾かれてしまう。貴重なアビリティに数えられており、冒険者達からも神達からも人気が高い。

効力は既戦したモンスターに対する【ステイタス】のアドバンテージ。撃退した【経験値】を得た対象モンスターの戦闘に限り、【ステイタス】の能力に補正をかける。何度も同じモンスターと戦う羽目になるダンジョン攻略では、相当に強力な武器となる。

そして、三つ目が……。

「……『幸運』？」

「はい……」

エイナは筆記していたペンを止め、瞬きを繰り返した。

聞いたことのないアビリティ名だった。ギルドに勤め【ステイタス】全般の知識に精通するエイナが初耳なのだから、目の前で苦そうな顔をしているベルも当然手余しているのだろう。

アビリティの効力はなんとなしに察せる。読んで字のごとく“運が良くなる”のだろう。

問題は、“運が向上して”いかなる“効果”を表すかだ。
そもそも運って個人の能力で左右されるものなのかなぁ、とエイナは首をひねる。人力の及ばない概念なので半信半疑だ。方向性も具体性も掴めない。
「神の恩恵」がもたらす能力なので、運気が上昇すると言われれば納得できなくはないが……。

「えっと、神へスティアは何も言ってなかった？」

「ちょっと見当がつかないって……」

まぁ当然か、とエイナは胸中で一言。
今日まで判明されている【ステイタス】の全ての情報――効果は、神が下界に降臨した遥か昔から検証、解析して証明されたものだ。
【ステイタス】を発生させる神自身にも、子供達に己の恩恵を授けることでどのような“化学変化”が生まれるかは見通せない。初期設定を除けば全て【経験値】に依拠する【ステイタス】は、言わば下界の者達の“可能性”を示すものだ。それこそ我が子の成長を見守る親の心境と同じで、こればかりは神さえも知りえない世界と言えるだろう。
だから神達も、レアスキル等と聞いてあそこまで大はしゃぎするのだ。多くの神達にとって未知とは何にも代えがたい“ごちそう”なのである。

閑話休題。エイナは参ったなと素直に思う。
ギルドには登録されておらず一度も耳にしたこともないアビリティ。つまり、正真正銘の『レアアビリティ』。
恐らくは、ベルがこの発展アビリティを発現させた第一号となる。

『耐異常』と『狩人』だけならば自分の考えも織り交ぜてアドバイスできたが、流石に勝手のわからないアビリティに対しては憶測くらいしか言えない。

「あっ、でも……」

「？」

うーんと思考の森を彷徨っていると、ベルが何かを思い出したように声を上げた。
エイナは顔を上げる。

「神様は勘って言ってましたけど……加護に近いかもしれないって、そんなこと口にしてました」

加護、とその音を口の中で転がす。
どんな神物（じんぶつ）であれ、神の洞察はなかなか侮れないものがある。
ヘスティアがベルのアビリティを見てそうこぼしたらなら、核心に近い部分をついているのかもしれない。
加護……つまり、本人のあずかり知らないところで働く超常的な護り。神助めいた力が対象者を外部的な作用から守るのかもしれない。
全ては推測の域を出ないので断言はできないが、そのように考えると、確保しておく価値は十二分にあるように思える。
ふむ、とエイナはそこでざっと自分の考えをまとめた。
取りあえず、ギルドに報告するのは黙っておこうと、ベルのこれ以上の注目回避へ配慮してそう決めた。

「……んー、そうだなぁ。他の可能性を探るなら、『幸運』っていうくらいだし、冒険者の場合だと……ドロップアイテムがよく出るようになるとか、かな？」

「あ、なるほど」

「でも、コレはちょっと現金すぎるね。ごめん、私じゃ役に立てそうにないや」

「そ、そんなっ！」

ベルは胸の高さで両手をぱたぱたと振る。
大した力になれないことを申し訳なく思いながらも、エイナは【ヘスティア・ファミリア】としてはどう考えているのかを尋ねてみた。

「ベル君と神ヘスティアは何か希望はあるの？」

「神様は『幸運』一押しでした。こう、片手で拳を作りながら、『君にはこのアビリティが必要だ！』って」

まぁ危なっかしいしなぁ、とエイナは目の前の少年をじっと直視して思う。
今更ながら、このアビリティが発現するに至った経緯を非常に知りたくなった。
エイナの訝しげともとれる探るような目つきに、ベルはよくわから

ないまま気圧される。

「……じゃあ、ベル君は？」

「僕は、えーと、『狩人』の方がカッコいい……じゃないんですけど、無視できないというか、その……」

「ふふっ。うん、まぁ言いたいことはわかるよ。それで？」

「は、はい。でも、『幸運』の方も捨てがたくて……レアアビリティ、なんですよね？　運だなんていまいち魅力は感じられないんですけど、これもちょっと気になっちゃって……」

煮え切らない態度だが、ベルが思っていることは大体わかる。

『狩人』はその効果からいっても強力なアビリティだ。ダンジョンの恐ろしさを日々肌で感じている冒険者は、発現可能であるならまずこのアビリティに飛びつく。

また、入手の機会が一度きりというのもベルの心を揺さ振っている一つの原因だろう。

一方の『幸運』は過去に例がないだけに、言ってはなんだが、得体が知れない。ベルが魅力を感じにくいといったように、『狩人』と比べてぱっとしないというのも事実だ。果たして身になるのか疑問を持つのも仕方がないだろう。

だが、レアアビリティという言葉に敏感に反応してしまうのもまた人の性というものだ。ましてや誰も持っていないアビリティだというのなら、尚更。

次回にも入手できる可能性がある『耐異常』は今回選択肢にはない

上で、ベルの中では、少々『狩人』寄りに傾いているといったところか。
本音の本音を代弁するなら、どちらも欲しい、だろう。
まかり通らないがそう思う気持ちは理解できる。エイナは苦笑せずにはいられなかった。

「いつも言ってるけど、あくまで決めるのはベル君だから、私の感想に誘導されちゃうようなことはしたくないんだ。だから、アビリティ選択する上での考え方みたいなものを言うね？」

「は、はい」

居住まいを正すベルを待ってからエイナは口を開いた。

「一番簡単なのは、目指すものの違いで考えてみることだと思う」

「目指すもの？」

「うん。着実に堅実にダンジョンを攻略したいっていうのなら、『狩人』っていうアビリティはこの上なくベル君の力になってくれる。ベル君がしっかりコツコツと進んでいきたいっていうんなら、私もぜひそっちをお勧めしたい」

いったん言葉を切って、藍色の瞳の奥に語りかける。

「でも、ベル君の目標がもっと上に、ずっと高いところにあるっていうのなら……その道のりには実力とは関係ない、『運』っていうものも味方につけなきゃいけない時が訪れるかもしれない」

「……」

「だったら、『幸運』っていうアビリティはキミに必要なのかもって、私はそうも思う」

そこで一度、静寂が交わされた。
ベルは目を少し見張った後、自分の手の平に視線を落とす。
そっと、そしてぎゅっと握られる彼の拳を視界に映して、手応えはあったようにエイナは感じた。

「どっちのアビリティを選んだって間違いじゃない。だから、ベル君が自信をもって決めてごらん？　その選んだアビリティが、きっと今のキミに必要なものの筈だから」

「……はいっ、ありがとうございます」

ベルは顎を持ち上げて、幾分かすっきりした表情で頷いた。
Ｌｖ．１になろうが、今までのように必死に悩んで、今までのように躓きながら答えを出す少年の姿を見て。
もうちょっと面倒を見てあげた方がいいのかな、とエイナは少し嬉しく思ってしまった。

「ただいま帰りました、神様ー！」

僕はホームである下水道の隠し部屋の扉を開けた。
大きな声で挨拶すると、ソファーに座っていた神様が開いていた本から顔を上げ、にっこりと微笑んだ。
テッ、テッ、と跳ぶような歩調でこっちまでやって来て、帰宅した僕を迎えてくれる。

「お帰り、ベル君。それで、決まったかい？　君の選ぶアビリティは」

「はい。僕、『幸運』のアビリティにします」

エイナさんの話を聞いて決めた。

現状維持じゃない、僕は前進を取る。
『幸運』っていうアビリティが本当に僕に必要なものなのかはわからないけど、エイナさんの言葉を受け入れた自分の直感を、信じることにした。
答えを出した僕に、神様は自分の瞳を優しい線で縁取って、「そっか」と呟いた。

「じゃあ、早速やろうか。君の【ランクアップ】を」

目の前で見上げてくる神様に、僕は緊張した面持ちで同意した。
二人一緒に定位置となっている神様のベッドへ移動し、【ステイタス】の更新を始める。

「とうとうベル君もＬｖ．１かぁ……なぁんて普通なら言うんだろうけど、君の場合、感慨を感じる暇もなかったね」

「そ、そうですか？」

「ああ。本当、つい最近までヘナチョコだったのに。ボクの【ファミリア】に入ってすぐ、君がゴブリンに勝てたって大はしゃぎで帰ってきたことを、比喩抜きで昨日のことのように思い出せるよ。何だか不思議な気分だなぁ……」

神様はいつもの調子で僕に話を振ってくれたけど、僕は「え、ええ」とか「う、うん」とか、おぼつかない返事しかできなかった。
Ｌｖ．１に、なるんだ。

肌を通してシーツの上を滑る鼓動の響きがうるさい。
ベッドに寝そべっているのに体がふわふわしていて、気持ちが馬鹿みたいに高ぶっていることが嫌でもわかってしまう。
これがまだまだ通過点に過ぎないのはわかってる。でも、達成感じみた確かな手応えが、お腹の辺りを頻りにくすぐって止まなかった。
すごく、むずかゆい。
頭は全然回らず中身は真っ白、逆に首から下はこみ上げてくる熱で真っ赤にあぶられている。
ウズウズでもハラハラでもない、ただ静かに心臓の音に翻弄されていると……あっさりと、その瞬間は訪れた。
神様が手の動きを止めた。

「！」

「……終わったよ」

神様が腰から降りるのと合わせて僕は上半身を起き上がらせた。
膝を畳んだ格好でベッドの上に座り続け、おもむろに両手を見下ろす。
すぐ横で神様にじーと見守られながら、僕は手を握ったり開いたりを繰り返した。

「……特に、何も変わらないですね」

「『ち、力が溢れてくる……っ！』……なんて起きると思ってたのかい？」

わなわなと震える演技をした後に苦笑する神様を、器用だなぁと少し失礼かもしれない感想を抱きながら、僕は正直に頷いた。
【ランクアップ】を終えた僕の体に著しい変化はなかった。
体が軽くなるだとか、世界が広がったような感覚だとか、そんなものは一切無し。数分前の自分とあまりにも変わらなすぎて、Ｌｖ．１になったっていう実感が湧かない。
拍子抜けなんて言っちゃあアレだけど……何だか肩すかしを食らった感じ。

「体の構造が作り変わるわけでもないしね、劇的な変化なんて期待させていたなら悪かったよ」

「あっ、いえ、そんな風にはっ……」

「ふふっ、でもね？　【ステイタス】の昇華は本物さ。君という“器”は高次の段階に移った。“ボク達に近付いた”って言えばわかりやすいかい？　ベル君が意識できていないだけで、いざスイッチを入れればさっきまでとは比べ物にならない動きができる筈だよ？」

可笑しそうに笑う神様はそう言うと、いつものように共通語（コイネー）に書き換えた【ステイタス】を用紙へ記していった。
アビリティが全部Ｉ　に変わったことはもうわかっちゃってるから、見る意味もないような気がするけど……自分の目でも確認しろってことなのかな？
僕は少し首を傾げながらベッドから立ち上がった。インナーはまだ着ないで、姿見の前まで赴き背を向ける。
少し苦労しながら鏡に映る自分の後ろ姿を見ると、見慣れていた文

字群はその様式をがらっと変えていた。

（す、すごっ……）

Ｌｖ．０までの【ステイタス】は箇条書きのような感じで、あくまで【ヒエログリフ】のただの羅列に過ぎなかったけど、今は所々に鋭角的な細かい紋様が刻まれていて、どこかアーティスティック。

文字列は綺麗に正中に揃っている。

一番の変化は文字群本体を覆う額縁（フレーム）ができたことで、蔓のようなその枠組は緩やかな曲線美を誇っていた。

何だか【ステイタス】そのものが一つの紋章に見える。もっと遠くから見たなら、その印象はより強くなることだろう。

僕の頬はいつの間にか緩み、丸みを帯びていた。

しっかり変わっているところを見れたおかげで、単純だけど、ちょっと嬉しくなった。

気分が上向きになったところでふと自分の格好を思い出し、僕はいそいそと着替え出す。

ミノタウロスとの戦闘でボロボロになったインナーのスペア、その黒い肌着に腕を通していく。

そしてすぽんと首を出したところで、【ステイタス】を書き終えた神様と目が合った。

「驚かせようと思ったけど、先に言っておこうかな」

「？」

相好を崩している神様は、用紙を渡しながらそんなことを言った。
僕が紙を受け取って突っ立っていると、神様はあらかじめ浮かべていた笑みをより深くして、「朗報だぜ、ベル君？」と続ける。
何がですか？　と僕が尋ね返す前に、神様は種明かしをしてくれた。

「スキル、さ」

「へっ？」

「君の二つめぇ――じゃなくてっ！　……うん、ほら、アレだ。君の待望だった、スキルの発現だよ」

ぽかんとしていたのは数秒くらい。
神様の言葉の意味をゆっくりと咀嚼して、きちんと意味を理解した瞬間、僕はがばっと勢いよく用紙に視線を落とした。
文字通り血眼になって僕は神様の筆記を視線で追う。
そして、

ベル・クラネル
Ｌｖ．１
力：Ｉ　０　耐久：Ｉ　０　器用：Ｉ　０　敏捷：Ｉ　０　魔力：Ｉ　０
幸運：Ｉ
≪魔法≫

【ファイアボルト】
・速攻魔法。
≪スキル≫
【英雄願望（アルゴノゥト）】
・全アクティブアクションに対するチャージ実行権。

短刀：Ｉ　０
短剣：Ｉ　０
大剣：Ｉ　０

目を、見開いた。
スキルのスロットが、埋まっている。
僕は慌てて神様の方を見た。背の低い小柄な彼女は年長者の笑みを浮かべ、僕の視線の問いかけをゆっくり肯定した。
間違いないよ、と。
笑みが、弾けた。すぐに表情は喜色で上塗りされていき、今日一番の興奮を手に入れる。顔の筋肉が言うことを聞いてくれない。
用紙を見ながら自分でもわかるくらい瞳を俄然と輝かせていると、ふと、「ん？」と気付くことがあった。
……【英雄願望】？
スキルの発現を手放しで喜んでいた状態から抜け出して、そのスキル名に着目する。
視線の先の“ご大層”な名前を見て、浮き立ちっぱなしだった頭の隅の隅が、驚くくらいに冷え込んできた。

（……ちょっと、待って）

急速に笑みが消え失せていく。
【ステイタス】に表れるスキルや魔法は【経験値】は勿論のこと、恩恵を授かった者の本質や望み等も反映されることがあると聞く。スキル名も同様で、そのネーミングは恐らく本人の心を鏡で映す行為に等しい。
つまり、【英雄願望】なんて名前が自分の背中（ステイタス）に刻まれた暁には……いい年して「英雄になりたい！」なんて心の奥底で妄想していることが、筒抜けになってしまうわけで……。
自分で知覚できてしまうほど耳を真っ赤にさせた後、僕は、ギギギッと用紙から首を持ち上げた。

「……」

真正面には、すごく生温かい眼差しをする神様の姿が――。

「――う、うぁあああああああああああああああああああああああああああああああ！？」

めちゃくちゃ微笑ましそうにこちらを見守る神様に、僕は絶叫した。
用紙を宙に放り出し一回転、神様に背を向けてドスンッと墜落するようにしゃがみこむ。両手で耳を塞いで「うぎゃー！？」と滂沱の涙を流した。
うわぁ、うわぁーッ！？
バレたぁ！　いい年こいてお伽噺の英雄なんかに本気で憧れている

ことが、神様にバレたぁあああああああああああああ!?
顔から火が出てきてしまう。恥ずかしさのあまり、憤死してしまう。僕は悶えた。ヴァレンシュタインさんの前で犯した失態の数々と同レベル、とんでもない赤っ恥。想像を絶する焦熱が僕をタコ殴りにする。
死ぬっ、本当に死んじゃうーっ!?

「……ベルくん」

びくっ、と体が震えた。
優しい声が耳をくすぐったかと思うと、小さくて柔らかい手が、ぽむっと肩に置かれる。
すぐ後ろにある気配に、僕は涙目のまま恐る恐る振り返る。
神様の笑みは、慈愛に満ちていた。

「――可愛いね」

「うわァぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」

神様の馬鹿ぁーーーーーーーーーーーーーーっ!?

「うぅぅ……」

「おいおい、いつまでそうしている気だい？」

部屋の角で両膝を抱え込みながら呻く。
天国から地獄に突き落とされた僕の傷は深かった。一生消えない傷痕となって心の中に残るかもしれない。
神様の呆れた声を背中で聞きながら、僕はしくしくと熱い滴を流していく。

「いい加減立ち直りなって。いいじゃないか、英雄に憧れるくらい。今時こんなピュアでいられる“子供”なんて、そうはいないぜ？」

「だから止めてよ神様ぁー！？」

“子供”っていう部分にそこはかとない悪意を感じてしまう！
天井を仰いで打ち上げた叫び声が地下室に響く。心の均衡がいよいよ危なくなってきてるよ、僕。
神様は苦笑いして「傷付けたなら謝るよ」と背中をさすってきた。
外見は幼女の神様に慰められる僕は、部外者が見たならすごい情けない奴に見えるんだろうと想像して、更にへこんだ。

「もう大丈夫かい？」

「はい、何とか……」

それから時間をかけて、僕は立ち直った。
実際全然立ち直れてなかったけど、埒があかないので。
気を抜けばがっくりと折れそうになる首を我慢しながら、地面に放り出した用紙を拾い、改めて【ステイタス】を読む。
【英雄願望】……もう名前の方は置いておくとして、肝心のスキルの中身を理解しようと努めるけど……いまいち要領を得ない。詳細情報も少なすぎる。
【ファイアボルト】の時もそうだったけど、僕の発現する魔法やスキルはやたらと解説が不親切のような気がした。
これじゃあ、何が起きるのかもわからない……。

「神様、このスキルの効果わかりますか……？」

「んー、これだって断言することは難しいね。文面からすると、常時発動しているタイプじゃないみたいだけど……能動行動（アクティブアクション）、つまりベル君が自分から意識的に動いた時に、何か効果が表れるんじゃないかな？」

「意識的に動く……？」

「要するに、攻撃とか自発的な動きさ」

「この場合だと、反撃は当てはまらないのかな」と神様は付け足した。

うぅん？　わかったような、わからないような……。
ダメだ、僕の頭じゃあスキルの正体に見当がつかない。

「ま、これも実戦の中でおいおい探ってみるしかないね。ちょっと無責任な言い方だけど」

「いえ、気にしないでください。むしろ僕の【ステイタス】ですし……」

結局、スキルについては様子見という結論に落ち着いた。
後ろ髪を引かれる思いを抱きながらも、僕はもう一度だけ用紙を見る。
スキル自体はさっぱりだけど、この【英雄願望】……アルゴノゥトっていう単語はよく知っている。
いや、記憶に残っていると言った方が正しいのか。
『アルゴノゥト』。
牛の怪物に攫われた美しい王女様を、何の取り柄もない主人公が助けにいく、喜劇みたいなお伽噺。
主人公は他人に騙されてばっかで、それでいて騙されていることにも気付かない。どこか道化じみた雰囲気でストーリーを進行させていき、そしてあれよあれよとモンスターのもとまで辿り着く。最後には、救出に向かった筈の王女様にも助けられちゃうんだっけ？
他の英雄譚の主人公達と比べるまでもない、群を抜いて冴えない英雄のお話だ。

多分ユーモラスに富んだ、どっちかっていうと大人向きの物語だったんだろうけど……主人公があまりに栄えないものだから、当時その絵本を読んだ幼かった僕は、口をへの字に曲げてしまった。だっ

て、カッコ良くなかったし……。
祖父はお気に入りだって言っていたけど、僕はどうしても好きになれなかった。「英雄を夢見る英雄なんてアリ？」って。
「まだまだコイツはこれから」なんてお祖父ちゃんはかっかっと笑っていて、それに対して僕は、もうお話は終わっちゃったよと唇を尖らせていたことを今でも覚えている。
思いがけないところで再会を果たした幼少の頃の思い出に、僕は正直混乱していた。

「ごめん、ベル君。ボクはそろそろ出かけるよ」

「え？　神様、今日お仕事あったんですか？」

記憶の海から上がると、ちょうど神様から外出の旨を告げられた。
これまでのスケジュールから今日は定休日だと思い込んでいた僕は、顔をぽかんとさせる。

「今日はね、三ヶ月に一度開かれる『神会（チャット）』の日なんだ」

「『チャット』って……も、もしかしてっ？」

「ああ、そうさ。暇な神達の歓談会だよ……【ランクアップ】した者の称号（ふたつな）を決める、ね」

二つ名、と聞いて僕はぐっと肩を緊張させた。
ヴァレンシュタインさんの呼び名である【剣姫】。この称号も神様

達の命名――神託を承ったものだ。
そしてもとをたどれば称号は、他ならない神会という神様達の論争の中から生まれる。
そんな『チャット』に、神様が出席するってことは……。

「ベル君がＬｖ．１になったからね、ボクもあの席の末端に入ることを許されたんだ。今日、君の称号も決めることになる」

やっぱり！
神様の言葉が僕の予想を肯定する。
僕は何度目とも知れない興奮を全身で味わった。

「わっ、わっ、わっ！　それじゃあ僕も、ヴァレンシュタインさんみたいな通り名を頂けるんですよね！？」

「……偉く乗り気だね？」

「そりゃあそうですよ！」

二つ名って言ったら冒険者の代名詞！
【ランクアップ】した者だけにしか与えられなくて、言っちゃえば神様達に実力を認められたってこと！
とても名誉なことですよ！
あと、それに……！

「神様達が決める称号はどれも洗練されていて、カッコいいじゃないですか！　【漆黒の堕天使（ダークエンジェル）】とか、聞いただけでも強そうって思っちゃいますよ！」

「……ああ、そういうことか」

僕が意気揚々とそう語ると――神様は訝しげな顔から一転、力のない笑みを向けてきた。

具体的に言うと、すごい悲しそうな笑み。神様が、すごく遠い。

あ、あれ？

何でさっきより生温かい目で見られてるんだ……？

「そうだね。子供達にはまだ“早過ぎる”……」

「え……そ、それってどういう……」

「いや、何でもないよ。いつかベル君達にもわかる日が必ず来る」

意味深なことを言い残して、神様は無言で支度をし始めた。

僕はうろたえた顔で疑問符を浮かべることしかできない。

『チャット』って、僕が思っているものより……ち、違ったりするのかな？

神様達が神意をぶつけ合う、厳粛な雰囲気のもとで進む会議って聞いてたんだけど……？

「じゃあ、行ってくるね」

「は、はいっ」

準備を終えた神様がドアの前で振り返る。
その姿がどこか死に軍に臨む戦士のように見えて、僕は声を上擦らせた。
最後に神様は僕のことを見据え、キッと決然とした表情で口を開く。

「ベル君、ボクは泥水をすることになっても、必ず“無難な”二つ名を勝ち取ってくるよ……！」

君のために……！　と神様はそんな誓いの言葉を言い残した。
ギィィ――と音を立ててホームのドアが閉じる。
やる気というか、是が非でもという必死さが滲み出ていた神様の背中を、僕は汗を流しながら見送った。

神会とは、もとをたどると一部の神々が退屈しのぎに企画した一種の社交的集会（サロン）だった。

ある程度【ファミリア】の実力と地盤を築き上げた神は、今を生きるという苦労を忘れ堕落期に突入しがちとなる。時間を持て余すようになった彼等は戯れに同郷の者同士で集まることを覚え、些細なことをくっちゃべっては暇を潰すようになったのだ。

要はただの歓談であったのだが、ここで重要なのは、奔放な神達が一定周期で一ヶ所に集まる場が設けられたということだった。

やがてその集会は参加する神が多くなるにつれ規模を広め、時代を経るごとに会の主旨を変えていった。ただの駄弁りはホットな“ネタ”の共有となり、また意見を交わすことで相互の【ファミリア】だけでなく都市全体を巻き込む“催し”を企画するまでに至った。

ただし“催し”の開催にはオラリオの管理者であるギルドの許可が絶対不可欠であるので、よって神々の暇潰しは必然、迷宮都市であるが故にオラリオの中で最も熱い職種、冒険者に向かうことになる。

称号の進呈はその一端で、今ではもう恒例なものとなった。

今日での神会の名の由来は、過去の歓談会（チャット）の名残である。

「『神秘持ち（アイテムメーカー）』とか非戦闘職も含めて、今回【ランクアップ】した子供は多いらしい」

「ああ、豊作って聞いた」

「くはは、我が邪気眼が疼きおる」

神会の会場は都市中央に位置する摩天楼（バベル）、その地上三十階。
神の殿居を改装し一つのフロアを丸々使った会議室は、存在していた全ての仕切りが取り払われ、一つの広大な空間となっている。太く、長大な列柱が整然と並び遥か上の天井を支えていた。
室内には巨大な円卓が中央にぽつんとあるだけで、他には何も設置していない。透明なガラスがぐるりと部屋の外苑を一周しており、地上三十階の空に囲まれている。
天井が異様に高いこともあって、まるで空に浮かぶ神殿にいるかのようだ。

「ここに顔を出す神もかなり増えたか」

「ひひっ、いなくなった奴も多いけどなぁ」

一定間隔を空け円形のテーブルにつく神の数は、ざっと数えただけでも三十は超える。つまりその数だけ、上級冒険者――第三級以上の冒険者――に匹敵する構成員を保有し、実力を認められた【ファミリア】がオラリオの中で存在するということだ。
ニヤニヤと笑みを浮かべながら隣席の者と雑談を交わす神達。口を真一文字に引き結び緊張の色を隠せない男神。巨大な象の仮面を被

った謎の存在。両目を瞑り、微笑を浮かべながら会の始まりを待つ銀髪の女神。
正装を指定されている神の宴と異なり各々が自由な服装でいる中、ヘスティアは、用意された席の上で出席メンバーを軽く一望していた。

「案外落ち着いてるわね？」

「緊張する理由もないだろ？」

このメンバーだし、とヘスティアは隣からの声に返答した。隣の席にいる紅髪紅眼の神、ヘファイストスを見やる。
煌びやかな紅髪を背に流す彼女の格好は黒のビジネススーツ。ギルド職員と似た背広を着こなすその姿は、その美貌もあいまって、異性同姓問わず視線を引き寄せる魅力に溢れている。
右眼に眼帯をした女神は緩慢に肩を上げてみせた。

「もっと張り詰めているかと思ったわ。いつもみたいに、ぐぬぅ～、って顔をして」

「……何かが変わるんならいくらでも呻いてやるさ。でも、そんなところを見せるだけ、あいつ等を楽しませるだけだろう？」

「ちがいないわね……」

ヘファイストスの苦笑を肩で感じる間にも、いくつもの視線がヘス

ティアのぷにぷにとした頬にぐさぐさと突き刺さってくる。
視線の出所である神達は、飛んで火にいる夏の虫と言わんばかりの嫌らしい笑みを作り、全く隠そうともしない。
ヘスティアでなくとも彼等の考えなど見透かせる。“奇跡”とでも言うべき弱小【ファミリア】の成り上がりを、彼等なりのもてなし方で“歓迎”してくれるつもりなのだ。つまり、「散々おちょくり回してやる」。
そもそも既に、ヘスティアの座る椅子は、料理店（レストラン）で満五歳未満の子供が使うようなキッズチェアだ。陰湿なお持てなしは始まっている。
「あのチクショウどもめっ……！」とヘスティアは内心で奥歯をぐぎぎっと噛み締めた。
可愛らしい木製の椅子が、彼女のツインテールと一緒にぷるぷると震え出す。

「先に言っておくけど、私の発言なんて期待しないでよ。多数決の前じゃ、こっちの意見もたったの一票に過ぎないんだから」

「わかってるよっ」

ヘスティアの語気が少し荒くなったところで、「じゃ、始めるでー」と間延びした声が響いた。
ざわついていた円卓がすぐに静まり返る。やがて声の主は己の席から立ち上がり、その朱髪を揺らした。

「第ン千回迷宮都市オラリオ神会（チャット）開かせてもらいます、今回の司会進行役はうちことロキや！　よろしくなー」

『イェー！』とやんやの喝采と一緒に拍手が巻き起こる。大盛況だ。
長いパンツにくたびれたシャツという出で立ちのロキは、細い目を笑みの形に緩ませながら手を振った。
同じ男装であっても、ヘファイストスと比べて大分やる気のない男装だった。言い表すなら、ずぼら。彼女の常時の性質が滲み出ている。
ヘスティアは遠く離れた位置にいるロキをじろっと横目に、不満げそうに呟いた。

「何でロキが司会進行役なのさっ」

「自分から買って出たらしいわよ？　何でも、『遠征』で【ファミリア】の団員ほとんどがホームから出払っちゃったから、手持無沙汰らしくて」

「ふんっ、暇なやつ」

日頃の仲の悪さも手伝ってヘスティアは悪態をこぼす。
そんな彼女の愚痴を知ってから知らずか、ロキはその細い目をちらりとヘスティア達のもとに飛ばしたが、今は無視するかのように自分の役目に従事する。
いつもと異なりすぐ突っかかってこないロキに、ヘスティアは少し訝しげな顔をした。

「よぅし、サクサクいくでー。じゃあまず、『お前のネタはうちのネタ、うちのネタはみんなのネタ』、小耳に挟んだおもしろおかし

い話を共有しましょ！」

「ハイ、先生！　ソーマ君がギルドに警告食らって、唯一のご趣味（笑）を没収されたそうです！」

『なんだってぇーーーーーーーーーーーーーーー!?』

「で、ソーマの趣味ってなに？ｗｗ」

「全く知らねえｗｗｗ」

「あー、エイナちゃんの仕業かぁ……」

「まさかのソーマ様キタコレッ！」

「みなぎってきたぁっ！」

「続きは、続きはどうなったでおじゃる!?」

「膝を抱えて部屋の隅から動かないらしい！」

「見てぇえええええええええええええええええええええええええええええ!!」

「アタイちょっとソーマきゅん慰めに行ってくる！」

「やめとけってｗｗ」

「傷口に塩ぬる気満々ｗｗ」

「すまない。話の腰を折るようで悪いのだが、真面目な話、王国（ラキア）がまたオラリオを攻め込む準備をしているらしい」

「ほんと突然だな」

「ていうか、またアレスかよｗｗ」

「あのバカ神そろそろ何とかした方が良くないか？　正直ウザいんだが」

「何で国の中じゃあんな信仰あるんだ、アイツ」

「どこか憎めない性格してるからかな。子供達はああいうの好きそう」

「容姿が抜群だからだろ。ぶっちゃけ『美の神』とタメはれる。あっ、俺はフレイヤ様一筋ですよー！」

「脳ミソは筋肉なのになｗｗ」

ふざけた内容から真剣な話まで、円卓の間で行き交う話題は忙しなく二転三転していく。

弛緩した空気はそのまま、神達は各々の話を好き勝手に喋っては他の意見に噛みついていった。

眼前のマイペース模様に、前もって予想されていたことではあるが、神会に初参加のヘスティアは改めてうんざりした顔をする。

収拾など、とてもではないがつきそうもなかったが――「よし一回黙れ！」と司会が一喝すると、ほうぼうの声は嘘のようにすぐ途絶えた。

「うっし。まとめとくと、今気にしときゃあかんのはラキアの方やな。一応ギルドに報告しとく。まぁウラノスのジジイのことやから、独自に情報は掴んでそうなもんやけど。ここにいるもんの【ファミリア】は召集かけられるかもしれんから、よろしくな？」

『了解』

ロキは簡潔に提供された情報を総括し、要点だけを抽出していった。神会はオラリオの主要な【ファミリア】が多く集まるだけに、何かしら注目度の高い情報を伝達する役割も持っている。

そしてロキはその後も淡々とその場を進めていき、もうあらかた話題が出つくしたことを確認すると……彼女は一拍あけて、ニッと口を吊り上げた。

「なら、次に進もうか。命名式や」

緊張が走る。

ロキのその発言を皮切りに、それまで口を閉ざしていた数名の神が一気に顔色を変えた。押し黙るヘスティアもその中の一人だ。

他方、ニマァ、と。

神会常連である一部の神々が、これみよがしにゲスな笑みを作った。

悲劇（ウタゲ）の始まりである。

「資料は行き渡ってるなー？　なら行くでー？　んじゃあ、今回の

トップバッターは……セトのとこの、セティっちゅう冒険者から」

「た、頼む、どうかお手柔らかにっ……！」

「「「「「「「「「断る」」」」」」」」」

「ノォォォォォォォォォォォォォォォォォ！？」

神と下界の者達の感性は、神々が下界の文化を享受しているところからわかるとおり、ほぼ似たり寄ったりだ。

超越存在だからといって人知を越えた感覚を有しているとか、そういった感受性の齟齬というものもなく、子供達のそれと大差ないのである。

しかし、である。

“ネーミング”のセンスだけはその限りではない。

神がおかしいのか、子が愚かなのか。

神々が前衛的すぎるのか、子供達の時代が追い付いていないのか。

真偽は定かではないが、ともかく、子供達が目を輝かせる裏で神達は身悶えてしまう「イタイ名前」があるということだけは、当事者達にとって動かない事実なのである。

「――決定。冒険者セティ・セルティ、称号は【覚醒廃墟（アシッドエラプション）】」

「イテェエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエッ！？」

「傑作すぎるｗｗｗｗｗｗ」

「近年まれに見るできだったなｗｗｗ」

そして神会ではそんな「イタイ名前」が大量生産される。
性根の悪い特定の神達が、酸欠に陥りかねない笑いの衝動を得たいがために、子供達には畏敬さえ抱かれている“称号”を連続発射するのだ。
彼等は発狂する同郷者と二つ名をもらい誇らしげにする子供達、その両名に指をさし、今日も爆笑しながら床を転げ回るのである。
十中八九、後世で語り継がれるであろう『神話』の一つだ。

「狂ってる……」

「あんたの気持ちはよーくわかる……」

吐き捨てるように呟くヘスティアに、「私も最初そうだったし」と同調するヘファイストス。紅の左眼がどこか遠くを見つめていた。
神会、とりわけ称号の命名式では、新参の神の扱いは大概“酷い”。上位【ファミリア】を持つ格上の神達が、神会では一日の長があるのをいいことに、ここぞとばかり新人嬲りを始めるのだ。私刑（リンチ）と言ってもいい。
絶叫してはバタバタと崩れ落ちていく神達と、ゲラゲラと笑い声を上げる神達、両極端のグループを見て、ヘスティアは惨いと顔を背けた。

「ほい、次。タケミカヅチんとこの……おおぅ、めっちゃ可愛ええぇ、この子。えーと……ヤマト・命（ミコト）ちゃんやな」

あらかじめギルドに請求していた手元の資料にロキは目を落とす。
資料には名前の他にプロフィール、そして冒険者登録の際に描かれた写実的な似顔絵が貼りつけてある。
周囲の神もぱらぱらと用紙の束をめくりながら「ほぅ？」と口々に言った。

「こいつは……レベル高いぞ」

「やっぱ黒髪はいいなー」

「うーん、流石にこの子にはちょっと……」

「そうだな、こんないたいけな娘に残酷な真似をすると……胸が熱くなる、じゃなかった、良心が痛むな」

「ほ、本当かっ！？」

神会にて「イタイ名前」を回避する方法はいくつかある。
手っ取り早いのは会の始まる前から「ドウゾつまらないモノですが……」と有力者達に金品を貢ぎ回ることだが、これは大抵法外な額を要求されるので、発展途上で財産力が整ってない【ファミリア】には難しい。
総じて多いのは、今論議が起っているように、その構成員の人物像（キャラクター）がよっぽど神達に気に入られたケースだ。こちらは比較的、女性の方が見込みは高い。
暗雲に差し込んだ一筋の光明に、黒い頭髪を角髪（みずら）にした男神、タケ

ミカヅチは慌てて席から立ち上がる。

「だが、タケミカヅチ、てめーがダメだ」

「この天然ジゴロがぁ……」

「女神だろうが子供達だろうがぞっこんさせやがって……」

「このロリコンめッ！」

「な、なに言ってんだよお前等！？」

「きっと命ちゃんも……」

「ああ、この想い届かぬというのならいっそこの手で……フヒヒ」

「てめぇ等ぁ……！？」

神ほど気まぐれな存在はない。

ぬか喜びに終わったタケミカヅチは思いっきり歯を食い縛る。

「よし、命ちゃんに引導を渡すのはオレだ！　【未来銀河（フォーチュンギャラクシー）】！」

「ミコトたん、君はいい女の子だったが、君の主神がいけないのだよ。【零落聖女（ラスト・ヒロイン）】」

「お前ら冒険者の資料なにも見てないだろｗｗ」

「戦闘スタイル欠片も反映されてない命ちゃんマジ不憫ｗｗｗ」

「おい、よせっ、止めろ！　命はっ、命は手塩にかけてここまで育てきたんだぞ！？」

「【天使（テ・シーオ）】」

「「「「「それだｗｗｗ」」」」」

「もう許してやれよｗｗ」

始まってから最高潮の盛り上がりを見せる神会。
ヘスティアやヘファイストスも合間を縫っては意見を口にするのだが、まるで相手にされない。

「じゃあ、命ちゃんの称号は……【絶†影】に決まりで」

『異議なし』

「うわぁ、うわぁあああああああああああああああああああああああああっ！？」

頭を両手で抱え慟哭を散らす気のいい友人を、ヘスティアは気の毒そうに見やった。今夜は酒を奢ってやろうと心の中で約束する。
武神とまで言われた男神（おとこ）が血涙を流したその後も、犠牲者は絶えることはなく。

阿鼻叫喚は響き続け、そして中小【ファミリア】があらかた出つくすと、今度は神会古参の【ファミリア】の出番となる。
【ヘファイストス・ファミリア】に続き【ガネーシャ・ファミリア】、【イシュタル・ファミリア】と、そうそうたる【ファミリア】の団員名が列挙されていった。

「……フレイヤぁ、今期はおたくの子【ランクアップ】していないみたいだけど、暇を持て余しているわけ？　こんなにところにわざわざ顔を出すなんて、あの天下のフレイヤ様が？」

「ええ。天界の時もそう、退屈は私達を殺す毒だわ。つい足を運んでしまったの、イシュタル」

一度神会に参加した者ならば、その後の会議にも出席できる権利がある。
【ランクアップ】した構成員がいなければ別段この場に居合わせる意味もないのだが、暇を潰したい神達は進んで参加しようとする。
率先して二つ名を決めようとする神達がいい例だ。
言葉の端々に嘲弄を臭わせる「美の神」イシュタルに、同じ美神であるフレイヤは涼しく微笑を向けた。

「へぇ、そうかい。暇って言えば、おたくの子も相当なんだねぇ。中層に留まってミノタウロスと来る日も来る日も格闘していたんだろ？　子は神（おや）に似るのかい？」

「ふふ、そうかもしれないわね」

「……あぁ、そういえば、上層にミノタウロスが紛れ込んだって聞いたけど……まさかぁ、おたくのところの“仕業”だったりするのかい、フレイヤぁ？　もしそうだったとしたら、ギルドは何て言うだろうねぇ……？」

「それが聞いてちょうだい、イシュタル。私の【ファミリア】の子がミノタウロスと遊んでいたら、覆面をした“アマゾネス達”が襲いかかってきたらしいの。そのどさくさに紛れてミノタウロスは“暴走”してしまって……全く、不躾だと思わない？　神（おや）の顔を見てみたくなってしまう……」

「……ッ！」

褐色の肌の上から極めて煽情的な服装をまとうイシュタルは、その顔を盛大に歪めた。

フレイヤはクスリと小さく笑った後、話はもう終わりというように、微笑はそのまま両の瞼を閉じる。

今、巷で冒険者達を騒がしている事件の真相は闇の中となった。少なくとも、この場にいる神達の認識ではそうなった。

絶世の美貌を誇る美神同士のやり取りを、周囲の神達は薄笑いをして見守る。

（アマゾネスってことは、またイシュタルがフレイヤにちょっかい出したのかしら？）

（さぁね。まぁ、似たようなことはあったんだろう。イシュタルがフレイヤを目の敵にしているのは今更だし）

（それでフレイヤの方は軽くあしらってる、と。……どっちが綺麗かだなんて、あの二人のレベルになっちゃうと不毛のような気がするんだけどね）

（イシュタルに言ってあげなよ）

耳を寄せあってヘファイストスと小声で話す傍ら、ヘスティアの瞳はフレイヤにそそがれた。

ミノタウロスの事件はベルが巻き込まれただけにヘスティアにとって他人事ではない……が、フレイヤの言葉も、イシュタルの言葉も鵜呑みにはできない今、問い詰める真似もできない。濡れ衣はヘスティアの望むところではなかった。

視界の中で笑っている女神が気にはなりつつも、彼女は勘繰ることは止めにした。

「ほいほい、茶番をそこまでにしとき。話もとに戻すでー。今度の冒険者は……ぬふふっ、大本命、うちのアイズや！」

「【剣姫】キタァー！！」

「姫は相変わらず美しいな」

「ていうかもうＬｖ．５かよ……」

脱線しかけていた命名式が、アイズ・ヴァレンシュタインの名前で再び勢いを持ち直す。

神達がぺらりと資料の次ページをめくると、用紙に描かれている似

顔絵が現れ、一人の少女が精緻な人形のような表情で真正面を向いていた。
下界の者につけられる称号は【ランクアップ】する度に改名する余地を得る。一度「イタイ名前」をつけられたとしても、次回の神会までに何かしらの策を講じていれば、文字通りの汚名返上も可能ということだ。

「アイズたんは別に無理に変えなくてよくね？」

「だな」

「バージョンアップするとしたら、【剣聖】とか？」

「え～？」

「アイズたんのイメージとはちょっと違うだろ、それ」

「まぁ、最終候補は間違いなく【オレ達の嫁】だな」

「「「「「「「「「だなｗｗｗ」」」」」」」」」

「殺すぞ」

「「「「「「「「「サーセンっしたぁぁぁ！！」」」」」」」」」

恥晒しの称号を回避する手段の一つとして【ファミリア】の勢力拡大も挙げられる。
早い話、「あの【ファミリア】に因縁をつけられたらヤバイ」と周

囲に思わせればいいのだ。報復が待っていると知って自爆する神はいないからである。
ロキの射殺すような眼光に、調子に乗っていた神達は全員、円卓へ額を振り下ろした。

「ったく、喧嘩売る相手は選べっちゅうに。まぁええ、進むで。……ん、次で、最後やな」

ヘスティアはぐっと息を吸って、溜めた。
手元の資料は残すところあと一枚。神会が始まる直前、最後の最後に滑り込んだこともあって、その冒険者の関連情報は申し訳程度しか記載されていない。
ついこの間まで完璧に無名であった、【ヘスティア・ファミリア】所属。
ベルだ。

「本当にＬｖ．１になったのね、あんたのとこの子は……」

確かに【ランクアップ】を認めたというギルドの印影が用紙に施されているのを見て、ヘファイストスがぽつりとこぼす。
親友の呟きを聞くわけでもなく耳にしながら、ヘスティアは視線を周囲に走らせた。
沢山の笑みがある。料理のフルコースを締めくくるデザートを待ってましたと言わんばかりの、意地汚そうな、下品な笑みだ。
最初で最後の正念場だとヘスティアは自分に言い聞かせる。
ベルにああ言った手前、碌な対策も用意していないのだが、そこは

ボク達の愛と勇気の力で……！　と気概を募らせていた――その時。
ロキが静かに席から立ち上がった。

「……ロキ？」

「二つ名決める前になぁ、ちょっと聞かせろや、ドチビ」

周囲の反応は一切無視し。
普段にはない棘を滲ませながら、ロキはその細い目をすっと開く。

「一ヶ月半でうちらの恩恵を昇華させるっちゅうのは、一体どういうことや？」

バンッ、と。
広げられた資料の上から手の平を卓に叩きつけ、ロキは瞠目するヘスティアのことを鋭く見据えた。

「うちのアイズでも最初の【ランクアップ】を迎えるのに一年、一年かかったんやぞ？　それをこの少年は一ヶ月やと？　なにアホ抜かしとんねん」

八年前だ。
当時“八歳の少女”が、身の程も弁えず異常な速度でＬｖ．１に登りつめたことは比較的記憶に新しい。

しかもそれも、他種族と並べて身体能力や叡智が遥かに劣るヒューマンがだ。
過去のＬｖ．１到達速度とタイ記録であったその偉烈は、世間を、世界を大いに騒がせたのである。

「うちらの恩恵は“こういうもん”やない。七百時間そこそこで子供らみんなが器を一変させたら、世話ないっちゅう話や。それができへんから、どいつもこいつも苦労しとるんやろうが」

神の恩恵は決して即成紛いの力ではない、とロキは言う。
【ステイタス】はあくまで切っかけに過ぎない。その者の生涯のうちで具現化することのない可能性を掘り起こし、形にすることで明確な能力として浮き彫りにする。
アビリティ、スキル、魔法。それら全ての能力はその者の内側に潜在する『素質』という名の刃だ。それが様々な経過――【経験値】を通してもとの姿からかけ離れ、進化、あるいは頽廃し、変容する。
土の中に埋まる種は環境によって異なる花を咲かすのだ。
故に、“促進剤”。
神の恩恵は外部からもたらされる万能の力ではなく、誤解を恐れずして言うならば、究極的な“自己実現”の鍵である。

「おいこら、ドチビ、説明せえ」

「……」

凄みを利かせてくるロキに、ヘスティアは胸中でだらだらと汗を流

す。

不味い、非常に不味い、と。

ベルのスキル【憧憬一途】の存在が明るみになった瞬間、この場は“祭り”となる。短期間でＬｖ．１になったという事実と相乗して、この場にいるバカ神全員がベルのもとに殺到するかもしれない。そうでなくとも、レコードを樹立したベルは、既にちょっかいをかけられることが約束されているようなものなのだから。

守秘義務を貫くか。しかしそれではベルに何かがあると言外に告げているようなものだ。迎える結果は恐らく一緒。

ロキを納得させるだけの上手い言い訳を差し出すのが一番の得策だが、そんなものすぐに思いつく筈もなく。

既にはまってしまった蟻地獄から、懸命に腕を振って脱出しようとする己の姿を、ヘスティアを頭の中で思い浮かべてしまった。

「言えんのか？　まさかうちらの“力”を使ったんじゃないんやろうな？」

「そ、そんなことするわけないだろうっ！」

「じゃあ、ほれ、言ってみい。後ろめたいことがなかったら、楽勝やろう」

「うっ……」

禁止されている“神の力”の行使……ベルを“改造”したのかという指摘に声を荒げ反発するが、言葉巧みにまんまと誘導され返答を促される。

隣にいるヘファイストスも流石に口を挟めないようで、非常に困っ

た顔をしていた。
今や円卓中の視線という視線がヘスティアに集中していた。興味を覗かせ、一字一句も聞き逃さないようにしている神達の姿勢に、ヘスティアの鼓動がバクバクと破裂寸前まで向かう。
万事休すか、とヘスティアが諦めかけた、次の瞬間。

「あら、別にいいじゃない」

美しいソプラノの声がその場に響き渡った。

「……ぇ？」

「あぁん？」

ヘスティアに向けられていた視線が離れ、一斉に声の主のもとへ引き寄せられる。
椅子に深く座るフレイヤは、動じることもなく、あっけらかんと言葉を続けていった。

「ヘスティアが“不正”をしていないというのなら、無理に問いただす必要はないでしょう？　【ファミリア】の内部事情には不干渉、とりわけ団員のプライベートはタブーなのだから」

一筋の銀髪をすくい、耳へ流す。

大して関心もなく、ありのままの事実をただ告げるかのように、フレイヤはロキの言及に歯止めをかけた。

「……一ヶ月やぞ？　この数字の意味わかっとんのか、色ボケ女神」

「ふふ、どうしてそこまで強情になっているの、ロキ？　私には、今の貴方の態度の方がよっぽど不思議に思えるけれど？　……もしかして、焼き餅？　自分のお気に入りの子供の記録が、ヘスティアの子に抜かれたから？」

「んなわけあるか」

吐き捨てるロキに対し、フレイヤは「本当かしら？」と微笑を崩さない。

カチンときたロキは反抗しようと口を開きかけたが、寸前で踏みとどまった。あたかも先程のヘスティアとのやり取りを巻き戻すかのように、自分の発言が誘導され上手く丸めこまれるシナリオを、女神の笑みから読み取ったからだ。

ちッ、と舌打ちをした後、途轍もなく胡散臭げそうな顔で、ロキは旧知の女神にじろじろと無遠慮な視線を送った。

「確かに数字単体を受け取れば耳を疑ってしまう……でも、この子は“奇跡的にも”あのミノタウロスを倒したのでしょう？　Ｌｖという差を覆して」

「……」

「強引に推理をしてもいいのなら、このミノタウロスが因縁の相手だった場合、獲得した【経験値】はこの子にとって特別な意味を持つ……【ランクアップ】することだってありえるかもしれない……と、私は思うけれど？」

フレイヤの一言一言によって神会が翻弄される。

神達がにわかに読み進めていく【ベル・クラネル】の資料には、過去の特筆すべきイベントとして、ミノタウロスとの二度に渡る遭遇、うち一回はこれを撃破とある。

理にはかなっているフレイヤの見解に周囲の神は「ふむ」と同調の意を示しかけ、ロキさえも口をへの字に曲げた。

神が下界の者に恩恵をもたらすようになって数千年。自分達さえまだ知らないイレギュラーが眠っていることは否定できない。今回のような逸脱した成長現象が起っても、何ら不思議はないのではないか――と、フレイヤは遠回しに告げる。

それから暫時の空白を置き。

興味は湧くが、少なくとも冒険者ベル・クラネルを探るような真似はする必要がない……と【ファミリア】のルールにも乗っ取った声がちらほらと上がるようになり、やがて一部を除いたこの場の総意となった。

フレイヤは静かに一笑し、優艶な仕草でヘスティアに流し目を作る。

そっと向けられた銀の視線に、ぽけっと状況に取り残されていたヘスティアは、瞬きを繰り返すことしかできなかった。

間を置かずフレイヤは用意されていた席から立ち上がる。

「あれ。フレイヤ様、帰んの？」

「ええ。今から急用があるから、失礼させてもらうわ」

「せっかくだし、ロリ神んとこのヒューマンの称号を決めてからにしない？　最後の最後だしさぁ」

「ふふ、悪いけれど、そういうわけにもいかないの」

「でも、そうね……」と立ったままの姿勢で資料を手にとり、フレイヤはベルの似顔絵を見下ろして、言った。

「どうせなら、可愛い名前を付けてあげてね？」

「「「「「「「「「「「「「「おk」」」」」」」」」」」」」」

『……』

美神の今日一番の微笑みに、男神は清々しい笑みとともに満場一致してみせた。女神達がゴミを見るかのように白けた視線を送る。
フレイヤは最後にもう一度笑みを浮かべ、円卓に背を向けた。

「よし、ちょっと本気出して二つ名決めるか」

「おうよ」

「オールハイルフレイヤ」

「しかしこのヒューマン……完全にノーマークだったんだが」

「むしろ見越してた奴がスゲェ」

「噂も評判も何も入ってきてないぞ」

俄然真面目に、そして積極的にベルの称号について論じ合う神達。

ヘスティアは先刻までの雰囲気とは一変した光景を前にしばらく黙っていたが、首を回して隣のヘファイストスを見上げた。どうなっているの、と。

ヘファイストスは少々うんざりした顔で、わからないわよ、と肩をすくめてみせた。

「つうかデータ少なすぎ。マジで参考にならん。ギルド手抜きにもほどがあるだろう」

「【ランクアップ】したのが神会直前で、滑り込み参加だったからな。しゃあない」

「ていうかこの子、ショタ入ってね？」

「いや微妙……」

「くそっ、あと二年早かったら……！」

「外見、特徴……白髪に色白……ウサギ……兎吉（ピョンきち）とかは？」

「いや、それ既に中古。どっかの鍛冶師が自分の作品につけてた」

「神より先に行くとかｗｗｗ」

「うーん、ガネーシャ様、なんか意見ないー？」

「……俺が、ガネーシャだ！」

「ハイハイ、ワロスワロス」

「いざマシなもん決めようとすると、中々ピンとくるもの出てこないなー」

男神を中心にあーでもないこーでもないと論じ合いが続いていく。
取りあえず危惧は回避されたのか……とヘスティアが首を傾げていたが、そこに。
ふっ、と彼女の体に影が差した。

「……ロキ？」

「……」

ヘスティアの隣に立っていたのはロキだった。
自分の席から離れ、ヘスティアをその細い目で真っ直ぐ見下ろしている。
むっつりとしていて、そしてどこか機嫌の悪さを滲ませながら、彼女はぼそっと呟いた。

「……注意しとけよ、ドチビ」

「えっ？」

「目を光らせとけって、そう言っとるんや。ドチビにこんな忠告するような真似するのも癪やけど、あのアホに好き勝手やられるのは、今のうちにはよっぽど我慢ならん」

コケにしおって、とロキは顔を上げて忌々しそうに口にする。

彼女の視線を追うと、フレイヤが部屋を後にするところだった。女神はこちらに振り返ることなく銀の長髪をさらと泳がせて、完全に姿を消す。

ロキの言っていることが掴めず、ヘスティアは少し動転しながら聞き返した。

「ちょ、ちょっと待ってくれ。注意しろって、一体何を言ってるんだよ？」

ロキは眉を顰めた。

わからないのかと言うようにヘスティアを一頻り見つめた後、ぐっと自分の鼻を彼女のものに近付ける。

「アホウ、気付け。あの女神（オンナ）が、子供（オトコ）を庇ったんやぞ？」

「っ……？」

ヘスティアは、そのロキの真剣な眼差しにたじろぐことしかできなかった。しばし思考が追い付かない。
ロキは顔を上げ、呆れたかのように鼻を鳴らす。

「かっ、本当にわからんのか。幸せなやっちゃ。……まぁええ、そもそもうちには関係ないし」

「あほくさ」と呟いてロキは自分の席に戻っていった。
一部始終を目の当たりにしたヘファイストスに見守られながら、ヘスティアはロキの背中を見つめ、それからフレイヤの出ていった扉の方に目を向けた。
ロキの言葉を反芻する。
そして美の神が自分に向けた、あの意味ありげな笑みを思い出す。
……フレイヤが庇った？　……誰を？
とある可能性が、ヘスティアの胸の中に芽生えかけようとしたその時。
彼女の思考を遮るように、円卓がドッと爆発した。

「「「「「「「「「決まったぁー！！」」」」」」」」」

異様、と言えるほどではないが。
ギルド本部の広い室内は、ある種の緊張感に包まれていた。

（みんな殺気立ってる？）

（そんなんじゃないと思うけど……）

ちょんと尖った耳元に口を寄せてくる友人、ミィシャ・フロットに、エイナは小声で答えた。
場所は彼女の仕事場であるロビーではなく、いくつものデスクが並ぶ広いオフィスだ。
玄関口にあたるロビーと壁一枚隔てている広い執務エリアは、普段とは異なり、低い静けさを滞留させている。

「チュール、聞いているのか？」

「あ……す、すいませんっ、班長」

目の前の呼びかけにエイナははっと意識を戻す。隣にいるミィシャも慌てて姿勢を正し直立不動を取った。

彼女達の前には上司である男の獣人が、エイナの作成した数枚の書類を片手に、冷静然とした視線を向けている。

エイナ達は諸事情で、このオフィスに呼び出しを食らっていたのだ。

「繰り返すが、これでは……Ｌｖ．０の冒険者に『死ね』と言っているようなものだ」

「はい……」

「提出させておいて悪いが、ギルドとしてはこんな情報を公開するわけにはいかない。……冒険者ベル・クラネルの成長モデルはお蔵入りだ」

ですよね、とエイナは恐縮そうにしゅんと立ちつくす。

冒険者の質の底上げとして求められたベルの【経験値】傾向は――ひとえに【憧憬一途】というスキルに支えられているものだけあって――、全くもって他の冒険者達にとって参考になるものではなかった。

【ランクアップ】期間は冒険者登録を終えて一ヶ月半内、到達階層は１０階層。付き加えるならばソロ・プレイヤー。

撃破したモンスターの類はキラーアントを中心にコボルト、ゴブリン、インプ、オーク……そしてミノタウロス。

迷宮都市オラリオにおいて模範的、あるいは勤勉的ともいえる典型な冒険者タイプであるが故に、異彩と言えるほどのイベントも無し。ひたすらダンジョンにもぐってはモンスターを狩るの反復で、特別なことは本当に何もしていない。
あえて特記事項として挙げるならば……“無茶苦茶”を繰り返している。
短期間【ランクアップ】条件と銘打って、このようなモデルケースを冒険者達に公開した暁には、大ブーイング間違いなしである。
舐めているのか、と。

「……この件は誤魔化しておく。上は私が説得しておこう」

「申し訳ありません……」

線が細い顔付きの上司は、エイナの作成した報告書をもう一度見やって、自分のファイルにしまいこんだ。
恐らく、人目につくことは以後ないだろう。
くりくり、と頭に生えている毛並みのいい獣耳をかきながら、彼は何とも言えない顔を浮かべた。

「チュール、それと」

「何でしょうか？」

「あまり軽率な真似はしないように」

「……はい、今後は注意します」

最後にしっかり朝の一件を注意され、エイナは深く頭を垂れた。
大目に見てもらっている、と思わず溜息をつく。大声で叫び散らしてしまったあの失態は本来ならば大目玉だ。部下思いの上司に感謝すると同時に、それ以上の申し訳なさを覚えた。
一拍置いてから上司は顔の向きを変え「次に、フロット」とミィシャを呼ぶ。

「は、はいっ」

「……神会へ提出する資料のできが酷い。特に最後のベル・クラネルのものは」

「は、班長～っ。あんな直前に【ランクアップ】申請されて、時間なかったんですよ～！？　私だってあの土壇場で頑張ったんですから、手抜きだとか言わないでくださぁ～い」

「お前の言い分もわかるが……全体的に雑だった。神達から苦情から届いた場合、フロット一人で対応しろ。流石に私も助けられん」

「ふぇ～ん、エイナァ～」と泣きながら肩に抱きついてくるミィシャに、エイナは二度目の溜息をつく。
背を向けられた後「行ってよし」と告げられ、エイナ達はその場を辞した。
ロビーにはすぐに帰らず、ちゃっかりしたミィシャに引っ張られるまま、部屋の隅に備わっている給湯設備へ寄っていく。
使い慣れた魔石装置を操作し、すぐに湯気の立つコーヒーが二人分

できあがった。

「はぁ。やってくれたよねぇ、エイナの弟君……」

「弟って……でも、ミィシャの場合はベル君だけのせいじゃないでしょ？」

「聞こえないっ、全く聞こえなーいっ」

サッ！　と小さな背を向けるヒューマンの友人に、エイナは呆れた顔。

やや赤みのかかったストロベリーブロンドの髪が波立ち、今は少し丸まっている背中が「ずずっ」とコーヒーをすすった。

学区に所属していた時から何も変わらない友人の姿に、思わず苦笑が漏れる。

「話変わるけどさぁ、やっぱり班長達落ち着きがない感じ？　そわそわ～、って」

「うん、まぁ、いつもとは違うよね……」

部屋の片隅から眺めると、ミィシャの言う通り、オフィスにいる者達からは落ち着きが感じられなかった。

多くの職員がふらふら同じ場所を歩き回っており、椅子に座っている者も頻りに時計を確認している。普段ならば絶えることのないペンの走る音が、今はすっかり消えてしまっていた。

実のところ、エイナ達はこの雰囲気の原因に察しをつけているのだが。

「十五時過ぎてるし……終わってるよね、神会？」

「多分ね。結果報告はもう届いていると思うけど……」

時計をちらりと見上げたミィシャにエイナは相槌を打つ。

神会の後は恒例的に目の前の風景を見かけるようになる。この時の職員達の興味関心は、ずばり神が命名した冒険者達の称号だ。

称号のセンスには“定評”がある。見せつけられる神の神威に下界の者は脱帽するものばかりで、誰もが神託……神会の結果発表を自分のことのように待ちわびているのだ。

自分の上司達も浮かれ立つものなのかと、いつもはロビーでこれと全く同じ光景を見ているために、エイナとミィシャはそんな感想を抱いていた。

「エイナも気になる？　今度はどんな称号が出てくるか？」

「私は……ううん、そうだね、今日はちょっとだけ気になってるかな」

「やっぱり？　私もさぁ、担当してる冒険者の一人が【ランクアップ】したから、かなり楽しみにしてるんだぁ～」

二人の話に花が咲いていると、やがて前触れなく、バタンッと。

勢いよくドアの開く音が鳴り、室内にいる職員達がはっと振り向かされる。
扉の前には、息を切らしている職員が書類の束を持って立っていた。

「来た、届いたぞっ！　神会の結果！」

「冒険者の渾名か！」

「おい、見せてくれ！」

彼等の行動は速かった。
業務そっちのけで、我先にと部屋の出入り口へ押し寄せる。
群がりはやがて円になり、称号の記された何枚もの紙が目まぐるしく沢山の手に渡っていく。
すぐに讃嘆の声があちこちで漏れ始めた。

「おい見ろよっ、この二つ名」

「おお、すげぇ……」

「流石だ」

「ああ、まるで敵わん」

「やはり神は俺達とは違う。【美尾爛手（ビオランテ）】だなんて……鳥肌が立ってきた」

「ゾクゾクするよな」

「神は簡単にこんな称号を頭の中からひねり出しちゃうんだろうな。やっぱり敬うべき存在だよ、彼等は」

男性職員を中心に賑わい出すギルド本部。何か通じるものがあるのか、互いに意気投合し合っている。エイナ達の上司もさりげなく輪に交ざり声を唸らせていた。

どこから聞き寄せたのか、別の部署からやって来た女性陣の黄色い声も後が絶たない。

弾んでくる多くの声に、ぽつんと置き去りにされたエイナとミィシャもようやく再起動した。

「で、出遅れた……！　行こう、エイナ！」

「あ、うん」

駆け出すミィシャの後に続く。

人垣をつついて用紙を見せてもうらえるよう交渉する彼女を視界に、エイナはベルの顔を頭の上に描いた。

（う～ん、あんまりごつい名前じゃない方がいいかなぁ……）

【鮮血の冒険者（ブラッディ・ガイ）】とか付いてたらどうしよう……と、エイナは今度ベルに会った時のリアクションのことも想像しながら考える。胸を

張るベルと汗を湛え言葉を慎重に選ぼうとしている自分。ああ、シュールだ。
有名無実とまではいかないが、そういった方面の名前は、ちょっとベルには似合わないような気がした。
苦笑を浮かべつつ、シンプルなところに落ち着きますようにと、エイナは少しそんなことを願ってしまった。

「エイナ、もらったよー！　ほら、早く！」

手招きするミィシャから速報結果を受け取る。
冒険者とその称号がずらっと書き記される数枚の用紙。上から順に目で追っていき、二枚目、三枚目、と紙をめくり。
そして最後の用紙に辿り着いたところで、一番下にお目当ての名前を発見した。

「――あははっ」

「ん、ベル君のやつ？」

思わず笑声がこぼれた。
頬を緩め、小振りな唇が柔和な笑みを作り上げる。
肩越しから覗きこんでくるミィシャの顔をすぐ横に、エイナはその二つ名を読み上げた。

「【リトル・ルーキー】だって」

「……」

ぼんやりと、白い天井を見上げる。

一人しかいない下水道の隠し部屋で、僕はソファーに寝転がっていた。

何をするわけでもなく、仰向けのまま無為に今を過ごしていく。

チクチク、チクチク、と一定のリズムで降ってくる秒針の音が、淡々と時間の消費を告げてきた。

ミノタウロスと対決してから三日。

少し、癖になっている。こんな風にとりとめもなく、ぼーっと時間

を過ごすのが。

僕は二日間バベルの治療室で眠り続けていた。
戦闘の反動、肉体の酷使と精神力（マインド）の急激な消費に僕の頭と体は付いていけず、完全に音を上げてしまったのだ。まるで死人のように、それこそ泥のように眠っていたらしい。
半分目覚めきっていない視界に映った、神様と、リリの安堵の表情は今でも鮮明に思い出せる。
それから神様とリリにこっぴどくお叱りを受け半日、そしてもう半日を休息――今みたいな態勢で過ごした。

「レベル、１……」

Ｌｖ．１に到達した。素直に嬉しい。これは本当。
【ランクアップ】したって聞いた時は浮かれきっていた口だし、何よりあの人に近付けたっていう証が、背中を頬りに熱くさせる。
……ただ、あのモンスターを、ミノタウロスを倒したという名残りが消えない。
熱さとは無縁の透明な余韻にずっと浸っている。無気力とかじゃなくて、泉の水面に浮かぶように、不思議な感情に身を任せ続けている。
達成感と言うには少し乱暴で、解放感って言うには少しずれてる。
喪失感……って感じるのも、間違いじゃないような気がする。
言葉じゃ上手く言い表せないけれど、確かなのは、ミノタウロスという存在はそれほど僕の中で大きかったということだ。
【ランクアップ】したという事実より、ミノタウロスを倒したという意味の方が重いと、そう思えるほどに。

「……」

腰の辺りをまさぐって、目当てのものを掴まえる。視界の上にそれを持ち上げた。

鋭い突起。

砕けて、ひび割れて、今は長い短刀のように形状を変えた一本の角。

ドロップアイテム「ミノタウロスの角」。

全てが灰に還ったミノタウロスの体の中で、これと「魔石」だけが残ったらしい。魔石の方はもう換金しちゃったけど、僕はこれだけは手元に残しておいた。

魔石灯を浴びる角の表面を軽く引っかいて、削る。白い粉がぱらぱらと降ってくると、もともと中身がそうだったのか、それとも僕の魔法の“影響”なのか、赤緋に染まった芯があらわになった。

紅色の角。

最後まで僕に襲いかかってきたミノタウロスの得物。

耳の裏側で、頭のどこかで響き続けていたあの狂牛の咆哮が、今は遠い。

もう何も物言わなくなった片角が、静かに決別を言い渡してきたような、そんな気がした。

「……うん」

立ち上がる。体は軽かった。

たった今からまた意識を切り換えようと、最後に紅角へ視線を落とし、僕はんっと下顎に力を込めた。

感慨にを耽るのは、もう終わり。

行動を起こす。
僕はまず最初に時計を見上げた。
実は今日、これから“パーティー”に参加させてもらえることになっている。場所は僕の行きつけのお店、「豊饒の女主人」だ。
いやまぁ、パーティーそのものは僕が【ランクアップ】したお祝いなんだけど……。
今日の朝シルさんにバスケットを返しにいって、ついでにリューさんへ【ランクアップ】したことを報告したら、いつの間にか「豊穣の女主人」で祝賀会を開くことになっていた。
ちゃっかりお金はもらっていく辺り、らしいと言えばらしいし、そう気兼ねする必要もないのかもしれないけど……どうもこそばゆいなぁ。
誰かに何かを祝ってもらえるのは、オラリオに来る前はお祖父ちゃんが居た時だけだったから。

（どうせなら、神様もいてほしかったけど……）

神様は来れないらしい。
何でも神様の方でも飲み会というか慰め会というか、とにかく神様同士のお付き合いがあるのだそうだ。
さっき帰ってきた時に、【リトル・ルーキー】という称号とセットでそう告げられた。
【リトル・ルーキー】……うーん、神様は「やったぞベル君、“無難”だ！」と僕に抱きついてきてご満悦そうだったけど……いやいや、神様が喜んでくれてるんだから不満なんてない不満なんてない、不満なんて……ない。

そうこうしているうちに時計の針は六時を示していた。もういい時間だ、そろそろ出発しよう。
隠し部屋から悪臭の立ち込める下水道に出る。悲しいけどもうすっかり耐性がついてしまった。鼻も押さえずスイスイと薄暗いトンネルを進んでいく。
無理矢理下水道の壁にはめ込んだ魔石灯が乏しく揺らめいているのを見て、もう寿命だなぁ、と変え時を思案する。
魔石製品のほとんどは冒険者じゃなくても、貴族だろうが平民だろうが広く扱われる日常品の一つだから、そこまで値段は高くない。
今度神様と話し合っておこう。
垂直に伸びる梯子をよじ上り、黒い人孔蓋を取り外す。
外に出ると西の方角が茜色の光に染まっていた。夜が間近に迫ってきている。
入り組んだ路地裏の小径を出ると、そこは活気に満ちたメインストリートだ。

「――見っけぇえええええええええええええ！！」

「え」

目の前の人込みに加わろうとした瞬間だった。突如として大声が僕を襲う。
「な、なにっ？」と顔を左右に振る暇もなく、僕は数人の“神様達”にバッと囲まれた。
って、神様……！？

「ロリ神んとこのホームがちっとも見つからなくて苦労したぜぇぇ

……」

「しかし近辺をはっていた甲斐があったというものよ……」

「待ち伏せはハントの基本なんだぜ？」

「やっと出てきやがったな、子兎ちゃん☆」

――悪寒が。

僕を取り囲むいくつもの目に、理屈抜きで怯えた。最後にやられたウィンクなんて顔から血の気を奪われた。

状況が、見えない。

次々と告げられる意味のわからない言葉は僕の混乱に拍車をかける。

「先手必勝！　ベル君オレの【ファミリア】に入んなーい！？　今だったら【ファミリア】総出で大歓迎するよ！」

「あっ、てめっ！？　必死すぎるだろ、節度持てよ！　これだから弱小【ファミリア】は……！」

「カスどもは引っ込んでいろ！　ベル・クラネル、こっちに来い！　お前は俺のハートを奪っていった！　ふふっ、罪作りなバニーちゃんだぜ！」

「お前この子になに着せる気だｗｗｗ」

一歩近付いてくる神様達の形相に、ひっ、と僕の喉が怯える

……ファ、【ファミリア】の勧誘？　なんで、今更？
僕がこの都市に最初に来た時、どの【ファミリア】からもことごとく門前払いを受けていたっていうのに……。

「あ、あのっ！　僕は神様の……ヘスティア様の【ファミリア】にもう入っていてっ……！？」

「愛の前に他者の存在なんて関係ない。そうだろう？」

「ロリ神にはちょっともったいないんだな！」

「こんな非常識な奴等の話は聞かなくていいからさ、ちょっとあそこのお店でお茶なんかしない？　話するだけでいいから。おじさん君に興味津々なのよー」

き、聞いてくれない……！

「真剣な話、お前さんの成長速度の正体は体質か？　スキルか？
それともイカサマなのか？」

「レアスキル？　レアスキル？　ねぇ、ねぇ！？　やっぱレアスキル！？」

「ちょっと気になるあの子の背中」

「もし良かったら、その服脱いでくれない？　上半身だけでいいからさ、お金も奮発しちゃうよ？　……むふっ」

「ていうか、剥いでいい？」

「無理矢理っていうのもオツですなぁ」

『――フヒヒ』

――僕は、全速力で逃走した。

「あ、やっと来たニャ！」

「あはは、よく遅れるねえ、冒険者君」

僕がやっと「豊饒の女主人」にたどり着くと、空はすっかり月夜に変わっていた。

入口の柱に手をついて、乱れに乱れている呼吸を床に落とす。ぜぇぜぇという荒い息が止まらない。

裏路地に逃げ込んで沢山の神様達を撒いたのは、ついさっきのこと

だ。身体能力は完全に勝っている筈なのに……何なんだ、アレ。
本当に捕まりそうになった場面だってあったし、命からがら逃げのびたって感じ。
神様達が怖いと、初めてそう思ってしまった。どうしてあんないきなり……。

「シル達はずっと待ってるニャー。厨房の方もクソ忙しいのに融通きかせているんだから、さっさとするニャ」

「す、すいません……」

「主役がいないようじゃ始められないからね、早く行ってあげな」

盛大な追いかけっこを繰り広げたツケは、待ち合わせ時間の遅刻。
キャットピープルの店員の一人であるアーニャさんに、僕は非難の声と一緒に出迎えられる。ヒューマンの……確か、ルノアさんにも笑われてしまった。
汗を拭ってから中腰を止めて、僕は店内に足を踏み入れる。

「ベル様ー！　こちらですよー！」

全席に客が埋まり店内は相変わらず繁盛を見せる中、部屋の奥でリリがぶんぶんと手を振ってきた。椅子の上に立って、心なし嬉しそう。
今日のパーティーにはリリも出ることになっている。せっかくだからリリも誘ってみたら是非という返事をもらったから、前もってシ

ルさん達に頼んでおいたのだ。
準備されたテーブルは、僕の特等席であるカウンター隅の近くにある。テーブルにはリリの他にシルさんとリューさんがついていて、格好はお店の制服のままだ。
微笑んでくるシルさんと目線で挨拶をするリューさんに、僕は申し訳なさそうに頭を下げた。
少し足早に彼女達のもとに向かう。

『ベル……？』

『【ヘスティア・ファミリア】、か？』

顔の辺りに刺さってくる、複数の視線に気付く。賑わっていた店内の一部が、少し趣の異なるざわめきを灯していた。
僕は首を傾げながらも足は止めなかった。

『白髪頭のヒューマン……間違いねえよ』

『何つったか……【リトル・ルーキー】？』

『あんなガキがか』

『世界最速兎（レコードホルダー）、らしいな』

『おいおい、決まりかよ？　神の野郎どもが騒いでるだけだろ？一ヶ月はいくらなんでもねぇって』

『ちげぇねえ』

『でも、ミノタウロスをやりやがったのは本当らしいぞ。ほれ、例の9階層のヤツ』

『たかがミノタウロス一匹殺しただけだろ。ぴーぴー騒ぐな』

『ならてめぇはＬｖ．０でミノタウロスをやれんのか？　ソロでだぞ』

『ひひっ、んなキチガイな真似、誰がするかよ』

……いつくもののテーブルを縫って進んでいく間、あちこちでちらりと横目を投げられ、その度に声を潜めた囁きが生まれる。
多くの人の意識が自分に向けられているのを肌で感じ取り、僕はうろたえた。
挙動不審になりかけて、我慢できず視界を横に開くと、目の合った冒険者の一人にクッと口を吊り上げられる。
僕は意味もなく緊張し、姿勢をできるだけ低くして、逃げるようにテーブルへと急いだ。

「シシシシッ。一躍人気者になってしまいましたね、ベル様」

「そ、そうなのっ？　何だかすごく落ち着かないんだけど……さっきも、知らないうちに神様達に追いかけ回されちゃって……」

「名をあげた冒険者の宿命みたいなものです。ベル様に限った話ではありませんし、どうか甘んじてください」

笑いかけてくるリリに、僕は情けない顔を浮かべる。
首の後ろに右手を回しながら身じろぎを繰り返してしまった。

「ふふ、じゃあベルさんもいらっしゃったことですし、始めましょうか」

「あの、シルさん達はお店の方は……？」

「私達を貸してやるから存分に笑って飲めと、ミア母さんからの伝言です。後は金を使えと」

「はは……」

リューさんの落ち着いた声に僕は乾いた笑いをした。
カウンターの奥で、ミアさんが不敵に笑いながら手をぱっぱっと振っている。
こういう日くらい羽目を外せ、ということなのだろう。

それからすぐ、僕達は乾杯とそれぞれのグラスをぶつけ合った。
ミアさんの勧めもあり僕はお酒に挑戦した。取りあえず、ジョッキのエール。
シルさんは柑橘色のカクテル、リリはお酒は苦手になってしまったと言ってジュースを、そしてリューさんはお水だけをと言って貫き通した。って、僕とシルさんしかお酒頼んでない……。
料理が運ばれてくるようになると僕に向けられていた視線も消え、ほっと一息。アーニャさんやクロエさんのちょっかいをかわしながが

ら、僕達はこの時間を楽しんだ。
リリは前の泥棒騒ぎもあってリューさん達に苦手意識を持っているようだけど、そんなことはおくびにも出さずころころと笑っていた。
シルさんの方もにこにこと、リューさんははっきりと受け答えを。
僕が来る前に何かあったのかな、とリリの横顔を見ながらそんなことを考える。

「さぁ、ベルさん。沢山お飲みになってください。今日はベルさんが主役なんですから。それとも、何かお食べになりますか？」

「あ、ありがとうございます……」

いつの間にか隣に来て、シルさんは甲斐甲斐しく僕の世話を焼いてくる。
酌を取って、料理を小皿に盛って、頻りに声をかけてきて、せっせっとせっせっと……。何故か普通に笑っているリリが怖い。
僕が思わず面食らっている間も、シルさんはとても嬉しそうだった。

「何だか……すごい機嫌が良さそうですね、シルさん」

「そう、ですか？」

何か良いことでもあったのかと感じてしまうくらい。
興奮気味だったシルさんは、うっすらと上気させている頬に手をやった後、くすぐったそうにはにかんだ。

「私のお手柄というのはおこがましいんですけど……あの本を渡して、ベルさんのお役になれたのかな、って」

本とは『魔導書（グリモア）』のことだろう。熱っぽい視線が僕に直撃する。
こちらの瞳を見つめて上目遣いに微笑んだシルさんは、強烈だった。
そして横から伸びてきたリリのつねりも痛烈だった。
色んな意味で顔面が引きつる。今僕の顔どうなってんだ。

「ですが、本当におめでとうございます、クラネルさん。貴方の根気は十分に認めるところでしたが……どうやら、私はまだ貴方のことを見誤っていたようだ」

「い、いやぁ……」

向かい側の席からも祝いの言葉を頂く。
リューさんの表情は全く変わらなかったけど、それでも僕は照れ臭くなった。
師事している人に誉めてもらえて、こみ上げてくる嬉しさを誤魔化せない。

「リュ、リューさんが僕に色々叩きこんでくれたから、そのおかげですよ。あれがなかったら、今頃……」

「謙遜しなくていい。私の鍛錬が活きたと言ってもらえるなら喜ばしい限りですが、それを活かしてのけたのは、クラネルさん自身で

す。貴方はもっと自分を誇っていい」

Ｌｖ．１にカテゴライズされるモンスターの中でも、ミノタウロスを倒したことは壮挙と言うべきです、と。
リューさんは真剣な声音でそう告げた。凛々しい眼差しが僕をじっと見つめてきている。
今更気付いたけど、僕は、誉めちぎられるのがどうやら苦手らしい。少し赤くなった顔をうつむけて、「ハイ……」と呻いたような声を絞り出すのが精一杯だった。
シルさんにはクスクスと笑われちゃうし……。

「リリは心配で心配で堪りませんでしたけど。何度この胸が張り裂けそうになったことか……」

「ご、ごめん、リリ……」

「……でも、格好良かったですよ、ベル様？」

も、もういいよぉ……。
僕の肩にぐっと顔を寄せて、可愛く微笑んでくるリリにとうとう弱り切ってしまう。
頬が少し朱に濡れていて、大きな焦げ茶色の瞳がとても近い位置から僕を見上げてきた。
お酒も手伝っているせいか、ちょっと体が熱くなる。

「クラネルさん、今後はどうするのですか？」

「？」

「貴方達の動向が、私はいささか気になっています」

凄く苦いという感想が先に来るお酒と格闘していたら、リューさんから声がかかった。

彼女の質問に対して、僕は特に何も考えず明日からの予定を言う。

「えーと、取りあえず明日は、リリと一緒に装備品を揃えに行こうと思っています。防具とか、一杯壊れちゃったんで」

「……それがベル様」

「なに、リリ？」

「実は、リリの下宿先の仕事が急遽立てこんでしまって……明日はご同伴できそうにないのです」

「え、そうなの？」

リリは申し訳なさそうに体を縮める。

うーん……でも、それはしょうがないよね？　泊めてもらっているならお仕事を等閑にはできないし。

気にしないでとリリには伝えて、僕は明日の予定について考え込む。

そろそろダンジョン探索も再開したいし、そのためにも防具だけは準備しておきたい……僕一人でも買うことくらいできるし、平気か

な？　明日行っちゃっても。
目利きはまぁ、上手くいかないかもしれないけど……。

「それじゃあ、ベルさんは明日一人で買物に行かれるんですか？」

「そう、なっちゃいますかね」

「でしたら、私も付いていっていいですか？」

「えっ！？」

シルさんの提案に僕は素っ頓狂な声を上げる。
隣にいるリリはぎょっとして、すぐに眉を斜に構え出した。
威嚇めいた雰囲気が……。

「ど、どうしてまた？」

「私もそろそろ買い出しに行かないといけなくて……お邪魔かもしれないですけど、ベルさんがよろしければ、一緒に買物をして回りたいんです」

「いけません、ベル様！　シル様はきっと勝手のいい荷物運びが欲しいだけです！　ええ、リリにはそんな魂胆見え見えです！　このままではベル様は骨の髄までしゃぶり尽くされてしまうでしょうっ、断ってください！」

「な、何もそこまで……」

詰め寄ってくるリリに汗を流しながら、僕はシルさんの方を見やる。
彼女はリリの言葉に動じることなくにこっと笑う。「私はそんなことしませんよー？」と鈍色の瞳が一段と優しく語りかけてきた。
ど、どうしよう……？
買物に付き合うくらい全然構わないし、一方的に断っちゃうのも気が引ける……あー、でも一応、シルさん前科持ちなんだよなぁ。このお店に最初に招待された時のやつ……。
リリの抗議とシルさんの微笑みに板挟みにあいながら、僕が判断に窮していると――ぬっ、と。
シルさんの背後に大きな影が現れた。

「馬鹿言ってんじゃないよ」

「うきゅぅ！？」

斜め下に振り下ろされたトレイが、ズパァン、とシルさんの頭を鳴らす。
ミアさんだ。容赦なく片手に持った盆を振り抜いて、頭を押さえるシルさんを冷酷に見下ろしていた。

「そう簡単に何度も休まれちゃこっちも堪ったもんじゃないんだよ、この不良娘。調子乗ってんじゃないよ」

「アタシに話も通さないでサボろうだなんてどういう了見だい」と

ミアさんは続けた。
テーブルに伏せて痛みに耐えていたシルさんは、ゆっくりと起き上り、ミアさんを見上げた。
お団子にまとめ尻尾の垂れた鈍色の髪が僕達の方を向く。顔は見えないけど、恨みがましい目で抗議してるんだろうなぁ、と容易に察しがついた。

「そんな目をしても無駄さ。ここじゃあアタシがルールなんだからね。リュー、明日はシルを見張っておきな」

鼻を鳴らすミアさんはリューさんの返事も待たず踵を返し、カウンターに戻っていった。
周りでは冒険者の気持ちよさそうな大声が轟いている。酔っ払い特有の笑い声が押し黙る僕達を包み込んだ。
しばらくばつが悪い沈黙が続き、シルさんは僕達の方に振り返る。

「ベルさん、私、傷物にされました。どうか頭を撫でて慰めてくれませんか？」

「さぁベル様！　何はともあれ明日は“お一人”で良品を見つけてきてくださいね！　リリは期待していますよ！」

僕はリリとシルさんが不和にならないか心配だ。

「クラネルさん、その後は？」

「え？」

「装備を整えた後、どうするつもりなのか、そう聞いています」

「どういう……意味ですか？」

「そうですね、端的に聞きましょう。クラネルさんとアーデさん、貴方達はダンジョン攻略に戻る際、すぐに中層へ向かうつもりですか？」

その言葉を聞いて、やっと僕はリューさんの意図を掴みかけた。
パーティを組んでいるリリと顔を見合わせてから、彼女に向き直る。

「ひとまず、１１階層で今の体の調子を確かめようと思っています。もしそこで攻略が簡単に進みそうだったら、１２階層までは足を伸ばすつもりです」

「ええ、それが賢明でしょう」

【ランクアップ】した自分の力を確認することと、上層の区切りである１２階層までは突破する手筈を伝える。中層へもぐる前にワンクッションを置くことは、リリと相談して決めていた。
まずは上層で肩慣らしをして、改めて中層へ向かう。僕達はそう計画を練っていた。
そしてリューさんは、多分、そんな僕達を心配してくれている。

「老婆心ながら言わせてもらうと……中層へもぐることはまだ止めておいた方がいい。貴方達の状況を見るに、少なからず私はそう思います」

「つまりリュー様は、ベル様とリリが中層では歯が立たないと、そうお考えなのですか？」

「そこまで言うつもりはありません。ですが、上層と中層は“違う”」

今更口にすることではないと思いますが、とリューさんは後に続ける。

「各個人の能力の問題ではなく、“ソロでは処理しきれなくなる”。中層とはそういう場所です。アーデさんがどれほど助力できるのか私はわかりませんが、クラネルさん一人では、モンスターやダンジョンの地形に対応が追い付かないでしょう」

「では、リュー様は……」

「ええ。貴方達はパーティを増やすべきだ」

ダンジョン攻略には、スリーマンセルの形式が基本だと言われている。少なくともギルドはそれを推奨している。

三人一組……つまり攻撃、防御、支援の連携が機能する体系だ。

前衛が攻撃を仕掛ける際に中衛は敵の反撃に備えて守備、時には前

衛の補助を務め、後衛は長距離から支援攻撃、あるいは傷付いた前線二人の回復役に徹する。
これが受けの態勢になっても同じ。後衛にモンスターをはね返す力があれば、複数から攻め込められても二人組で耐え凌ぎ、状況を打開することができる。
これがツーマンセルだと一方の負担は大きくなってしまうし、ソロなんてもう例外。引っくり返して言えば、スリーマンセルかそれ以上のパーティでなければ、ダンジョン攻略は難しいという話になる。
つまり仲間が一人増えるということは、たった一人の力が大きく向上するよりも、パーティにとって遥かに有意義になるということだ。
リューさんは僕とリリだけのパーティでは、これからのダンジョン攻略に差し当たって厳しいものがあるとそう判断したのだろう。

「でも、リュー？　ベルさんとリリさんだけなら、逃げ出すことは簡単なんじゃないの？　人が多いと、逃げ遅れる人も出てきちゃうんじゃあ？」

「シルの言うことも一理ありますが、逃走を計るということ自体、既に追い込まれてしまったという意味です。最初から窮地のことを考えるより、その局面に遭遇しないことを考えた方がより建設的だ」

ふあぁ、と感嘆の声をもらす。
経験者の言葉は今の僕達に大いに説得力と納得を預けるものだった。

「クラネルさんなら、あるいは単独でも中層域に留まれるかもしれませんが……いえ、やはり万全は期すべきだ。少なくともあと一人、仲間と呼べる者を見つけた方がいい」

リューさんの言いたいことはよくわかった。隣にいるリリもコクリと小さく頷いて、一考するべきと告げてくる。
でも……肝心のパーティに加わってくれそうな人がない。当てがあるなら最初からパーティに加わってもらっているという話だし。いや、だから「見つけなさい」とも言われているわけだけど……。
今、目の前にいるリューさんは訳ありみたいだから論外だし……やっぱり【ファミリア】の勧誘をした方がいいのかな……？
不景気な声を出して頭を抱える。

「はっはっ、パーティのことでお困りかあっ、【リトル・ルーキー】！？」

へっ？　と突然の大声に僕は素の声を出してしまう。
見ると、別のテーブルについている客の一人がお酒をあおりながら声を張り上げていた。
僕が間抜けな顔をしていると、そのお客――冒険者の男は、仲間の二人を引き連れ僕達のテーブルまでやって来る。背を向けているリューさんの真後ろで、彼等は立ち止まった。
ていうか……い、いかつい。
額や頬にすごい傷痕もあるし……無条件で尻込みしちゃいそうなくらい。

「話は聞いーた。仲間が欲しいんだってなぁ？　なんなら、俺達のパーティにてめえを入れてやろうか？」

「えっ！？」

今度こそ驚いた。
見も知らずの筈の赤の他人が、いきなり自分のパーティに誘い出したのだから。

「ど、どういうことですかっ？」

「どうもこうも、ボランティアだよ、ボランティア。同業者が困っているんだ、広ぇ～心を持って手を差し伸べてやってるんだよ。ひひっ、こんなナリじゃあ似合わねえかぁ？」

「い、いえっ、別にそんなことは……」

「だぁろぉう？　助け合いって奴だ、助け合い～ぃ。それに今、話題かっさっらってるお前さんなら、俺達のパーティに入れても構わねえし……なぁ！」

（うっ……！）

お酒、臭い……！
強烈な吐息が僕の方まで来て、思わず仰け反りかけた。
見ればシルさんは困ったような苦笑を浮かべ、リリに至っては不機嫌そうな顔を隠してもいない。って、そうか、冒険者アレルギー……。
側にいるリューさんは僕より被害が甚大の筈だけど、そこは慣れているのか、顔色一つ変えずに椅子へ座っている。

「それで、だ！　俺達がお前を中層に連れてってやる代わりによぉ……」

（……ん？）

雲行き、が……？

「この嬢ちゃん達を貸してくれよ？　こんのえれぇー別嬪のエルフ様達をよっ！」

「……」

うわぁ、うわぁー……。

「俺もエルフに酌を受けてみてぇんだよ、なぁわかるだろ？　お前さんがいくら払ったかは知らねえけどよぉ、仲間なら助け合い分かち合いが基本ってよぉ！　だろう！？」

いや、確かにお金は結構払うことになってるけど……どうでもいいか。

この人の中では僕がパーティに加わることは決定事項らしい。

真ん中で喋り続けているこの人の他にも、後ろの二人はシルさんとリリに、なんていうか、その、すごくいやらしい視線を送っていた。

リリなんてもうドン引きだ。
……駄目だ、これは駄目だ。
女の人をこんな目で見る相手と、手なんか繋げられない。
こういう雰囲気は相変わらず苦手のまんまだけど……シルさん達の前だ、男の僕が“漢”を見せないと……！
言い返す言葉も整理できないまま、僕はとにかく彼等の要求を突っぱねようとした。

「いい。結構です。貴方達の手は、彼は借りない」

けど、その直前。
黙っていたリューさんが口を開いた。

「……おぉ？　何でだい、妖精さんよぉ？　俺達じゃあソイツのお守を務まらないかい？」

「ええ、だから帰りなさい」

「くひひっ、おいっ、聞いたかぁ！　ぽっと出の新人（ルーキー）相手に、俺達は足手纏いだとっ！　逆じゃなくてよ、はっはっ！！」

男達の哄笑。僕はタイミングを失ってしまい言葉を挟めない。
椅子から浮かせかけていた腰が、上がるのか下がるのか判断に悩んでいる。

「嬢ちゃん、俺達はこれでもずっと前から中層にこもってるんだがよ？」

「そうでしたか」

「ああ、Ｌｖ．１さ。俺達全員、な」

「わかりました。では、失せなさい。貴方達では彼に相応しくない」

ピクリ、と豪快に笑っていた男の顔が揺れた。
笑みを一旦消して、もう一度笑う。目を軽く細めた仮面みたいな笑顔。
不穏な空気が立ち込めるのが僕でもわかった。

「……嬢ちゃん、そんなに俺達は頼りねえかい、そこのカスみたいなクソガキよりよぉ？」

一歩近付いた冒険者の男は、自分の左手をリューさんの肩に置こうとした。
あっ、と僕は咄嗟に立ちあがる前に思ってしまった。
エルフは、認めた相手じゃないと肌の接触を許さない――。

「触れるな」

そこからのリューさんの行動は電光石火だった。

僕の飲みかけのエールが入った大ジョッキ、それを閃くような速度で掴まえ、右肩にかつぐようにして後ろへ振った。
次の瞬間、ガポッと。
肩に触れようとしていた手が見事にジョッキの中に収まってしまい、
「は？」と男は目を丸くする。
そしてリューさんは立ち上がる動きと平行して、ジョッキを捻った。

「いっ、でででででででででぇぇっ！？」

腕をとんでもない角度に曲げられた屈強な男が、悲鳴を上げる。

「いえ、すまない。これは我儘で、独善的な感情のようだ。私はクラネルさんに、貴方達とパーティを組んで欲しくない」

苦悶する男の眼前でリューさんは声を打つ。

「そして蔑むことも許せない。彼は私の教え子だ」

彼女はたじろぐ冒険者達を強く睨めつけ、更にジョッキをねじった。
叫び声が倍増する。慌てふためく仲間の助けもあって、男の手はようやく硝子容器から抜けた。
ドタッと音を立て、床に尻餅をつく。

「……て、てめえぇ！？」

「このアマッ！！」

「何しやがる！？」

リューさんの言葉に僕が胸を打たれていると、激昂した男達は剣幕を作って彼女に食ってかかろうとする。

ウエイトレス姿のエルフは瞬時に小太刀を装備。大男三人を一人で迎え撃とうとしたけれど、その前に。

ガツンッ！　と鈍い音が彼等の頭の裏に炸裂した。

「はゲっ！？」

「？！」

男の仲間が地面に叩きつけられる。

愕然と硬直する男の背後で、二人のキャットピープルが“半壊した椅子”を肩にかついでいた。

「――ニュフフ、後頭部がお留守になっていますよ、ニャ」

「男ってーのは本当にめんど臭いニャー」

神様達みたいな笑みを浮かべるクロエさんと、ネコ耳をちょいちょ

いと前後させるアーニャさん。
彼女達が後ろから殴りかかったのは明らかだけど……一撃！？　Ｌｖ．１の冒険者を！

「お客さん。うちのエルフは凶暴だから、そこまでにしといた方がいいよ？」

使用済みのお皿やジョッキを両手で大量に抱えるルノアさんが、一人残った男に淡々と告げた。
一目見ただけでも戦える状況じゃないのに、臨戦態勢へ入っているように映るのは、僕の目がおかしいからなのか。
周囲からは「あーあ、やっちまった……」という声が聞こえてくる。
他の客はこうなることがわかり切っていたように笑っており、すっかり孤立してしまった男へ視線を送っていた。

「……なっ、何なんだってめえ等はぁぁぁぁぁぁ！？」

男が腰に手を伸ばし、白い刃を魔石灯の下に晒した。
短剣だ。動揺している男はいつその得物を振り回し出すかもわからない。そしてそれを見た「豊饒の女主人」の店員達は、一斉に目を細めた。
あっヤバイ、と僕は反射的に思ってしまった。
冒険者の男が凄惨な結末を迎えるだろう、次の瞬間。
別の方向から“大爆発”が起きた。

（こ、今度は何っ！？）

目まぐるしい展開に付いていけず、半ば混乱しながら振り向くと……今度こそ僕は言葉を失った。

カウンター……水平だった細長い卓が、Ｖの字に変形してしまっている。カウンター席に座っていた客達は口を半開きにしていた。

台の真ん中が床に陥没しており、その場には、握り拳を振り下ろしたミアさんの姿が。

ルノアさん達が、びくっと一斉に怯え出す。

「騒ぎを起こしたいなら外でやりな。ココは飯を食べて酒を飲む場所さ」

店内は静まり返っていた。ルノアさん達は巨身のドワーフから目を逸らすと、自分達の仕事にこそこそと戻り始める。

ミアさんは最後に、青い顔をして突っ立っている冒険者を真正面から見据えた。

「で、そこのアホンダラ。そこに転がってる馬鹿どもを連れてさっさと行っちまいな。もし今度面倒を起こしたら――この店の下に埋めるからね」

店の下は不味いんじゃないんですかと僕が汗を流す傍らで、男は一言も喋れないまま顔を上下に振った。

仲間を抱え込んで、足をもつれさせながら出口へと急ぐ。

「アホタレエェッ、金は払っていくんだよぉ！！」

「は、はいぃぃっ！？」

ミアさんの怒号に打ちすえられ、男は有り金を全て置いていったようだった。大量のヴァリス金貨が詰まった袋が床の上に放置される。転げるように店を後にした冒険者達が消えて、客達は徐々に喧騒を取り戻していった。それこそ何もなかったかのように。ホビット達の飲み直しの声が、賑やかに響き渡る。

Ｌｖ．１のパーティが、裸足で逃げ出していく酒場……。

僕、見ていることしかできなかった……。

「すいません、せっかくの場に水をさすような真似をしてしまって」

「い、いえ、大丈夫です……」

「シシシシッ。リュー様はやはりお強いのですね……リリもお腹が疼いてきました」

狼狽が抜け切らない僕とは対照的に、リリはけろっとして謝罪するリューさんを称えた。

こういうの慣れてないの、僕だけなのかな……。

乱闘騒ぎの尾を引いてちょっと気まずい空気が流れ出していたけど、そんな中でシルさんが立ちあがり、ぱんっと両手を鳴らす。

「それじゃあ、仕切り直しをしましょうか？」

……強いよなぁ、この人も。

新しくお酒を頼んでそれぞれにグラスを渡す笑顔のシルさんを見て、僕は苦笑する。

「豊饒の女主人」の店員達はみんなしたたかであることを、改めて見せつけられた格好だった。

それから僕達は、夜遅くまで美味しい料理とお酒に興じた。

空が青く澄み渡り、気持ちいい風が吹いている。
あの祝賀会から一夜明けて、朝。
今日もオラリオの天気は晴れ。僕は燦々と照る太陽に対し手で傘を作り、そっと頭上を見上げた。
白い巨塔。バベルだ。
装備品を購入するということで、僕はまた【ヘファイストス・ファミリア】の武具店を利用するつもりだった。
前にお世話になったこともあるし、それ以上にここ以外のお店を知らないという理由もある。
目利きもできないのに背伸びして火傷する理由もないし、【ヘファイストス・ファミリア】の品質は言うまでもなく折紙付きだ。
値段の方だって今日はあまり気にしない。これまで溜めてきたお金はかなりの額になってきているし……それに、先日換金したミノタウロスの魔石、あれが何と５００００ヴァリスもしたのだ。
換金所の人もかなり驚いていたから、きっとあのミノタウロスが特別だったんだと思う。……大剣を装備してたくらいだしなぁ。
とにかく、手持ちの予算は何と１０万ヴァリス以上。今日の僕は一味違うのだ。
思わず鼻歌を乗せながら僕は終始ご機嫌に駆けていく。

バベルの門をくぐり、僕は階段を使った。
途中からも魔石昇降機を使わず、目的地である八階テナントまで自分の足で上っていく。
たまに点在する窓から見える青いオラリオの風景は綺麗だった。

（着いた）

八階。黒鉛色に染まったフロア全体を、天井の魔石灯がライトアップしている。
最上階まで昇降機が伸びている中央部分は吹き抜けで、円周に沿ってぐるっと商店が並んでいる。剣や槍といった様々な武具をかたどる看板が、店の出入口に飾られていた。
通りかかるテナントの前で一々足を止めながら、僕は防具のお店にやって来た。
身を守るライトアーマーが完全に壊れちゃったから、まずはここからだ。
店内は相変わらず鎧の森。
トルソーが装着するアーマーの多くが、前に来た時より色彩を地味なものに変えているような気がする。黒とか、灰色とか。

（このフロアの防具なら、もうほとんど手を出せる……のかな？）

視界を横切っていく値札を次々と確認する……２１０００、３０００、６４０００……うん、何とかなりそう。
防具だけを買いにきたわけじゃないから自重しないといけないけど。
ちょっと前じゃあ、こんな日が来るなんて想像できなかったよなぁ。

（……もう、売ってないのかな）

堅実そうなところから絢爛そうなところまで、高級そうな鎧をより取り見取りのくせに、僕は性懲りもなく一人の鍛冶師の作品を探していた。
店内をくまなくほっつき歩き、置いてあるボックスを見つけては屈

みこんで中を確認していく。
収穫は……ゼロ。

「……」

お腹の辺りが消化不良を起こしているな感じ。別にこだわる必要なんてないのに……。
ヴェルフ・クロッゾ、かぁ。

「……一応、聞いてみようかな」

往生際悪く、僕は店のカウンターに進路を取った。
前に使っていた軽装よりも優れている防具なんてここには沢山あるっていうのに、踏ん切りがつかない。
いつの間にファンになっていたんだろうか、僕。

『何でっ……あんなっ……！』

（ん？）

ちょっと進むと、もう既に見えている勘定台から怒鳴り声がしてきた。
二つあるカウンターのうちの一つで、【ヘファイストス・ファミリア】の店員と、どうやら客が揉め事を起こしていた。何だか言い争

っている感じ。
トラブルでもあったのかな？

「何でいつもいつもっ……あんな端っこに……！　俺に恨みでも……！」

目前までくると声がはっきり聞こえてくる。
弱り果てた店員の前にいるのは男性のヒューマンだった。身に付けているのは黒色の着流……というより、ボロ衣に見える。
服と同じ色の黒い瞳と黒い髪。結構年上に見える。身長も僕よりちょっと高くて、中肉中背。
髪型は少し伸びた短髪で、ただ邪魔だからいい加減にはさみを入れたような感じ。
カウンターの上には鎧のパーツが詰まれたボックスがあり、苦情を吐き散らしているところから、どうも冒険者のようだ。
買った防具に欠陥でもあったんだろうか。

「こちとら命懸けでやってんだぞ！　もうちょっとマシな扱いをだなぁ！」

「ですが上の決定ですし……せめて売れるようになっていただかないと……」

「おまっ、それを引き合いに出すのか！？　だったら尚更――！！」

着流の冒険者は一方的に声を荒げ店員に食い下がっている。

隣のカウンターの店員も傍迷惑そうな目をしていたけど、そこで僕の存在に気付いたようだった。「いらっしゃいませ」と店員スマイルをもらう。
結構気になるけど、僕は彼等の隣のカウンターに入った。すぐ横で散る大声は我慢して、目の前の店員に質問しようとした。

「何かご用ですか？」

「はい。ヴェルフ・クロッゾさんの作品って、今は売られてないんですか……？」

――ピタリ、と声が止んだ。
正面の店員が唖然としたかと思うと、隣でやり合っていた二人も呆然となり、僕の方を向く。
え、な、何……？
三方向からじっと凝視され、僕はたじろいでしまった。

「……あ、あのぅ、ヴェルフ・クロッゾ氏の作品を、お求めですか……？」

「は、はい。ヴェルフ・クロッゾさんの防具を、使いたいんです……」

恐る恐るといった感じで尋ねてくる店員に、僕もどもりながら返事をする。
そして次に反応したのは、僕に対応していた店員さんではなく、先

程まで怒鳴り散らしていた男性だった。

「ふ……うっはははははははははは！！　ざまぁーみやがれっ！
俺にだってなぁ、ファンの一人くらい付いてんだよ！！」

高らかに笑い始めたかと思うと、その人はさっきまで食ってかかっていた店員の方に向き直り、ばんっとカウンターの上を叩く。
店員は何も言い返せないようで、居心地悪そうに視線を左右にやる。
何事なんだと僕は戸惑いを隠せなかったけど、男はすぐにこちらを振り返った。

「あるぜ、冒険者。ヴェルフ・クロッゾの防具ならな」

「えっ！？」

「これだ」

ずい、と鎧の詰まったボックスが眼前のカウンターにまで寄せられる。
中身は白い光沢に溢れた鉄色のライトアーマー。
ついこの前まで僕が愛用していたものと、とてもよく似た防具だった。
細部はちょっと形状を変えているけど……見間違う筈ない、本物だ！

「どうだ、使ってくれるか？」

「え？　こ、これ、貴方のものじゃあないんですか……？」

僕の質問をどう捉えたのか、目の前の青年は瞳を数度瞬かせた後、くっと子供のように笑みをこぼした。
そのまま僕に、にかっ、と笑いかけてくる。

「ああ、俺のものだな。……俺の打った作品だ」

「――ぇ」

「どうせだから名乗っておくぜ、ファン一号。俺はヴェルフ・クロッゾ。【ヘファイストス・ファミリア】の、今はまだ下っ端の鍛冶師だ」

「サイン入るか？」とまるで面倒見のいい実兄のように笑う青年…
…クロッゾさんを、僕は呆気に取られながら見つめ続けた。

「じゃあ、お前があの【リトル・ルーキー】か！？　世界最速兎！」

「こ、声大きいですっ……あと、兎って……」

対面のクロッゾさんに声を押さえるように言う。

僕達がいるところは八階に設けられた小さな休息スペース。

魔力昇降機の近くにある空間で、僕とクロッゾさんは話を交わしてた。

あの後、僕はクロッゾさんに少し話をしないかとこの場所に誘われた。

何でもクロッゾさんの武具は過去二回しか売れたことがなく、その内の一つを買ってなおかつまた自分の防具を探していた僕に、彼は興味を持ったそうだ。

これまでの苦労話……経営陣にはしっかり評価をもらっておきながら店頭ではお粗末な扱いを受けたり、一度は購入してもらった作品を返品されてしまったり、【ファミリア】の同僚は陰険な奴ばっかりだったり……まぁ、色々聞かされた。

自分に客が現れたということで柄にもなく興奮してしまったらしい。

照れ臭そうに頭をガシガシかくクロッゾさんは、まだ出会って間もないけど、気前のいい職人気質の人という印象を僕に与えた。

「本当に俺より年下なんだな。いや、冒険者に年なんてそれこそ関係ないか？」

「えっと、クロッゾさんの年は……？」

「今年で十七だな。で、そのクロッゾさんっていうのは止めてくれ。苗字、嫌いなんだよ。名前で来い、名前で」

言う暇もなかった僕の自己紹介を済ませ、今は取りとめない会話を交わしている。
両手で自分の胸をあおぐような仕草をするクロッゾさんに困りながらも、僕は名前を呼ばせてもらうことにした。

「え、えー……ヴェ、ヴェルフさん？　それで、僕に用って……？」

「おいおい、さん付けか？　……まぁ、今はいいか。じゃあちょっと話を聞いてくれ」

備え付けてあった椅子から立ち上がり、ヴェルフさんは僕を見下ろす格好になる。
足元には新作の防具が入った例のボックス。「俺の打ったものなんだから、別に持っていってもいいだろう？」と店から勝手に持ち出してきたのだ。

「単刀直入に言うとな、俺はお前さんを離したくなかったわけだ」

「？」

「何故か知らんが、俺の打つ武具は剣だろうが鎧だろうが全く売れん。自分で言うのも何だが、いいモノを出している自信がある。け

ど、からっきしだ。購入されるあと一歩で返却されるらしい。解せねえ」

「……」

ピョンキチ……。

「鍛冶師なのに冒険者の真似ごとをして生計を立てるなんてざらでな、全く鉄を打つ機会がなかったんだが……そこにお前が現れた。俺の防具の価値を認めてくれた、お前さんがな」

「えっと、それで……？」

「お前さんは二度も俺の作品を買いにきてくれた。リピーター、本物だ。俺のお得意さん、違うか？」

そう言われてみると……そうなんだろう。

あの鎧の森に入っても、何だかんだでヴェルフさんの防具が気になっていたんだし。

「結局な、下っ端鍛冶師の俺達は客を奪い合っているんだ。有名になれば誰も彼も寄ってくるが、無名だとそうはいかない。俺達の作品は、同じ未熟の冒険者が財布と相談してたまたま買い取っていく。そんなもんなんだ」

「ここまでわかるか？」と尋ねられ、かろうじて頷く。
客の奪い合い……つまり顧客になってもらえるか否か。商売業の基本とも言えるし、それに顧客である冒険者の方が名を馳せるだけでも、使われている武具も脚光を浴びることになるかもしれない。例え、鍛冶師の方がまだ燃え燻ぶっていたとしても。
広告代わりなんて言ったらそれまでだけど……末端の鍛冶師達にとって、冒険者の繋がりは僕が思っていたよりも重要らしい。
エイナさんの話以上に、鍛冶師の、とりわけ【ヘファイストス・ファミリア】の鍛冶師の世界はハードのようだ。
だからこそ、ここまで【ファミリア】の規模を発展してきたのかもしれないけど。

「貴重なんだぜ、冒険者の方から雑魚鍛冶師の作品を求めてくれるってのは。さっきも言ったが、“認めてもらった”、今の俺達にとってこんな嬉しいことはない。俺の初めての“客”だ。だから逃がしたくない……逃がすわけにはいかねえ」

不敵の言葉とは裏腹に、腕を組むヴェルフさんはまた子供のように笑っていた。
僕は眉尻を寄せて苦笑してみせるけど、ヴェルフさんの人柄に、気持ちの良さには好感を抱いていた。
この人、いい鍛冶師(ひと)だ。

「じゃあ、僕にこれからも顧客でいてほしいっていうことですか？」

「間違いじゃないが……もうちょっと奥に踏み込ませてもらう」

そして今度こそ、ヴェルフさんはニヤと不敵に笑った。

「俺と直接契約しないか、ベル・クラネル？」

――直接契約。

鍛冶師と冒険者が結ぶ契約。より強固なギブアンドテイク。

冒険者は鍛冶師のためにドロップアイテムを持ち帰り、鍛冶師は冒険者のために強力な武器を作成し、それを格安で譲る。

持ちつ持たれつ。鍛冶師と冒険者の助け合い。

そして――特定の誰かのために打った武具は、特別な威力を発揮する。

エイナさんの言葉が僕の脳裏に蘇った。

「えっ……い、いいんですかっ！？」

「おいおい、それは俺の台詞だって。そっちはもうＬｖ．１で、『鍛治』のアビリティも持ってない無名の俺とじゃあ、普通に考えて釣り合わないだろう？」

そんなことはないと言いかけそうになったけど、改めて自分の立ち位置を見つめると、きっと、恐らく、そうなのだろう。

ここで違うと言えば謙遜ではなく、多分、ヴェルフさんへの嫌味になってしまう。

背筋が途端にむず痒くなったけど、僕は何とか口を閉じた。

一方、ヴェルフさんは中腰になって僕の首に腕を回し、笑みを近く

まで寄せる。

「それにだ、見ろ。剣と、斧と、装靴の店の方だ。俺達のことをちらちらと見ている奴等がいるだろう？」

「あ、はい……」

種族はばらばらだったけど、数人の亜人達が僕とクロッゾさんのことを頻りに気にしていた。
何だかすごいじれったそうな……。

「あいつ等全員、お前のこと狙ってるんだぜ。俺と同じように、契約しましょうってな」

「え〝」

「お前だけじゃない。Ｌｖ．１に【ランクアップ】した冒険者は全員マークされる。これが下級冒険者と上級冒険者の違いってやつだ」

ほ、本当に……？
目を見張る僕はまじまじとヴェルフさんの横顔を見つめた。
けけけっ、と例の鍛冶師達に勝ち誇った笑みを向けていた彼は僕の視線に気付くと、軽く一笑して「まぁ、そういうことだ」と回していた腕を解いた。

「お前さんの専属鍛冶師になれるなら願ったりなんだよ、俺は。ぐずぐずしていると他の鍛冶師がきっと手を出してくるからな、手に入れかけた顧客も失うことになる。俺としては是が非でも契約したいわけだ」

「それに将来有望のルーキーと契約できれば、箔が付くしな」と快活に笑った。

「……こんな話の後じゃあ信じてもらえないかもしれないが、Ｌｖ．云々はどうでもよかったんだ。あんな数ある作品の中から、俺のものを選んでくれたからな。挙句に、俺の作品を使いたいだなんて言われた日には、な？」

「……」

「こう、グッとこみ上げてくるもんがあるってもんだろう？」

鍛冶師冥利に尽きるって言うのか、とヴェルフさんははにかんだ。言葉の裏から最初から契約するつもりだったという本音を拾い上げて、僕も嬉しくなった。

買いかぶりすぎですなんて言いたくもなるけど、まだ未熟者同士、底辺から二人三脚をする自分達の姿を思い浮かべて、何だか胸が温かくなる。

上手く言えないけど……そういうの、いいと思う。

「……わかりました。ヴェルフさんと、契約を結ばせてもらいます」

「よし、きた！　フラれちまったらどうしようかと思った！」

差し出される手を取って立ち上がる。

「よろしくな、ベル」という言葉に照れながら笑う。

僕より大きな手は、まるで炉のように熱かった。

「正式な契約書とかはまた今度に回すとして……」

ヴェルフさんは口を動かしながら、繋がっている僕の手を掲げてブラブラと揺らす。

自分が勝ち取ったということを周囲に見せつけ、そしてその光景を目にした鍛冶師達は悔しそうにその場を去っていった。

顔を巡らし同業者が去っていったのをあらかた確認すると、ヴェルフさんは僕の手を離し、ちょっと申し訳なさそうに頬をかく。

「で、早速なんだが……俺のわがままってやつを聞いてくれないか？」

僕はきょとんとしてヴェルフさんを見返した。

「勿論見返りはするぞ。お前さんの装備、タダで俺が全部新調してやる」

「ええっ！？」

「だから驚くなって。鍛冶師が冒険者にものをねだるんだ、これくらいは当然だろう」

咄嗟にエイナさんが言っていたこと――作品の無料譲渡――を思い出したけど、まさか自分が当事者になるなんて思ってもみなかった。僕はぼけっと馬鹿みたいな顔をさらす。

「本題だ。言うぞ？」

「……」

固唾を呑んで、僕を次の言葉を待った。

「俺を、お前のパーティに入れてくれ」

11話　変わる環境・加わる関係（後書き）

しばらく作者の都合で更新停止が続くと思います。
申し訳ありません。

１２話　鍛冶師の事情　（１）　＊微修正

「やってきたぜ、１１階層！」

腰に手を当てたヴェルフさんが、自分の得物を肩に担ぎながら快活に言い放った。

威勢のいいその言葉の通りに僕達はダンジョン、その１１階層にいる。

幅の広い階段が中央に伸びているこのルームは１１階層のスタート地点。このフロアでも発生する霧は、１０階層から仕様を引き継いで、始点である空間のみ立ち込めていないようになっている。視野は十分に確保されていた。

靴を半ばほど飲み込む草原が見渡す限り生え渡っており、迷宮（ランドフ）の武器庫（オーム）である太い枯木が辺り一帯に広がっている。

「ヴェルフさんの到達階層も１１階層なんでしたっけ？」

「ああ、そうだ。にしても、悪いな、ベル。会ったばかりでいきなりこんな無茶聞いてもらって」

昨日ヴェルフさんからパーティに加えてほしいと言われた僕は、最初こそ驚いたものの、その事情を聞いた後はすぐに快諾した。

直接契約なんてもの交わしておいて断る理由もなかったし、そもそもパーティの増員を考えていたこちらとしてはそれこそ大歓迎の申し出だったからだ。

それに、ヴェルフさんは“冒険者寄り”の鍛冶師でもある（【ヘフ

ァイストス・ファミリア】の鍛冶師は全員そうなのかもしれないけど）。
本来の収入源である武具作品の売れ行きが芳しくないこともあって、ここのところ頻繁にダンジョンにもぐっているらしい。Ｌｖ．０でも実力は上位の類、決して足手まといにはならないと、この人は豪語していた。
実際に道すがらヴェルフさんの戦いっぷりを見させてもらったけど、うん、杞憂する必要は確かにないように思えた。

「大丈夫ですよ。それに『鍛冶』のアビリティのためなら、僕もまるで無関係っていうわけじゃないですし……」

「そう言ってもらうと助かるな」

ヴェルフさんの事情というのが、発展アビリティ『鍛冶』の獲得だった。
このアビリティがあるのとないのとでは鍛冶師としての能力は大分変わってくる。鍛冶師としての一生を左右すると言っても決して言い過ぎじゃない。
同じ頃に【ファミリア】へ入り【ランクアップ】した同僚とはもう随分差を広げられてしまったと、ヴェルフさんは悔しそうに語っていたし。
本来なら、どんな【ファミリア】でもダンジョンにもぐる際は仲間内でパーティを組むのが基本なんだけど……。

「身内の恥なんて晒したくなかったんだが……ったく、あいつ等、いざダンジョンに行こうとすると俺だけのけ者にするんだぜ。信じ

られるか？」

……つまり、そういうこと。

【ファミリア】の中で仲間外れにあっているらしいヴェルフさんは、【ランクアップ】のために質の高い【経験値】を手に入れようにもソロでは下層へもぐれず（言わずもがな危険だからだ）、最後の手段として他【ファミリア】のパーティに協力を仰ぐことにしたのだ。

【ヘファイストス・ファミリア】の構成員――鍛冶師達は、一人前の鍛冶師になるための様々な過程を自己解決し、ライバル達と切磋琢磨していくらしい。ただ『鍛冶』のアビリティ、つまり【ランクアップ】の件だけは命懸けということもあって、同じ【ファミリア】でちゃんと親交もある同僚達とダンジョン探索に臨むそうなんだけど……。

例外的に仲間外れにされている理由を、ヴェルフさんは「俺の隠れた才能に嫉妬しているんじゃないか」なんて不貞腐れて言っていたけど、どうなんだろう、実際？

僕のちょっと気がかりそうな視線に気付いたのか、髪をバリバリかいていたヴェルフさんは眉を落としながら笑ってみせた。

「ま、とにかくだ。感謝してるぜ、ベル。【ファミリア】は閉鎖的だなんて言うが、捨てたもんじゃないな」

「え、えーと……こんなもの頂いた後じゃあ、断れるものも断れない気も……」

ヴェルフさんがすっかり気を許した笑みを向けてくるものだから、“もらうものをしっかりもらっていた”僕は、少しばつが悪い思い

をしながら控えめに笑う。
首の下で身に付けている新品同然の鎧が、ピカピカに輝いていた。

「……新しいお仲間が増えたと聞いてみれば、なーんですか、ただベル様はモノで釣られて買収されただけではありませんか」

と、会話を交わす僕達の隣で、不機嫌な声が発せられる。
あきらかに非難と不満がこめられた物言いに、僕はたらりと汗を流す。
ぐさぐさと刺さるプレッシャーみたいなものに耐え切れずそろりと振り返ると、リリはバックパックの肩ベルトに両手を添えた態勢で、こちらをじろーと見つめていた。

語弊があると訴えたいけど、傍から見れば買収されたのと同じことなのかもしれない。
今の僕の装備、防具は、ヴェルフさんが打った例の新作ライトアーマーだ。
前の軽装とあまり変更点はない。膝頭を保護する膝当てに、薄手のブレストアーマー。肩や上腕を覆うパーツはなく、貴石の埋め込まれた手甲が手首から肘関節の直前まで及んでいる。ちょっとだけお洒落になったかも？
鎧自体の軽さは健在。ヴェルフさんは前作より装甲を厚めにしたって言っていたけど、僕にはそこまで重量感は感じられない。装備の交換で起こる違和感は皆無だった。
やっぱり、馴染む。
この動きやすさがいいというか、鎧板が体に貼り付いているんじゃなくて、あくまで自分の体が一回りだけ大きくなったような感覚がいい。

決して欲が働いたなんてことはないけど……うん、まぁ、この防具にちっとも惹かれなかったなんて言うと、それは嘘になるかもしれない。
半眼をして見つめてくるリリに、僕は空笑いをすることもできなかった。

「リ、リリ……」

「はぁー、リリは悲しいです。とてもとても悲しいです。お買い物に行かれただけなのに、見事リリの不安（キタイ）を裏切らず厄介事をお持ち帰りになるなんて……ベル様のご厚意に、リリは涙が出てしまいます」

オブラートに包み込まれた悪意が何発もボディブローを放ってくる。
ヴェルフさんの鎧でも防げない……！
いつにも増してリリの言葉は皮肉に満ち溢れていた。落胆の色も含まれているものだから堪らない。
いや、でもっ、厄介事っていうのは流石に……！

「言い過ぎでしょ、リリ！？　確かにパーティのことは簡単に決めちゃったかもしれないけど、ヴェルフさんは別に悪いことしようとしてるわけじゃないんだしっ……厄介事なんて、誤解だよ！？」

「どこが誤解ですか！　『発展アビリティを獲得するまでの間だけ』なんてっ、リリ達は都合良く利用されているだけです！　しかも完璧に臨時のパーティ要員じゃないですか！　この誰とも知らない鍛冶師の方が目的を終えてパーティから離脱すれば、ベル様は実質サ

ポーターがいるだけのソロに逆戻りです！　一歩進んですぐ後退してどうするんですか!?　全く不毛です！　ええっ、全くもってお先が真っ暗です！！」

僕の反論に、リリはキッと目付きを鋭くして反論し返す。
凄まじい指摘の弾幕に僕はハチの巣にされた。全く言い返すこともできず、リリの剣幕に仰け反りかける始末。
情けなさ過ぎる……。ヴェ、ヴェルフさんの視線がぁ……！

「どうしてリリに相談もなしに、勝手にパーティの編入を決めたんですか、ベル様！」

「だ、ダメだった……？」

「駄目ではありません、駄目ではありませんがっ、ちゃんとこういうことはリリを通してもらわないと困ります！　リリはヘスティア様にもベル様の周りのことを頼まれているのですから！」

そ、そうなんだ。というか神様、そんなことリリに頼んでたんだ……どれだけ信用ないんだよ、僕。
がっくりと項垂れそうになる傍ら、僕は盛大にむくれているパートナーの姿を見て、何だかリリが怒っているのはヴェルフさん云々じゃなくて、今言った言葉にあるような気がした。
つまり、僕の世話を焼きたがっているような……なんて、違うか。
きっと危なっかしいとか何とかで、僕の手綱を握ってないと気が済まないんだ、多分。

「何だよ、そんなに俺が邪魔か、チビスケ？」

と、そこに。

今まで僕達のやり取りを傍観していたヴェルフさんが口を挟んだ。

ヴェルフさんにもともと良くない感情を抱いているらしいリリは、

「チビ」と言われ、焦げ茶色の瞳を一層尖らせる。

「チビではありません！　リリにはリリルカ・アーデという名前があります！」

「そうか。じゃあよろしくな、リリスケ」

「……もういいですっ、構うだけムダですね！」

まるで小馬鹿にするように（いや実際してるんだろうけど）、腰を折ってにっと笑いかけてくるヴェルフさんに、リリはとうとうそっぽを向いた。

不機嫌そうな雰囲気を隠そうともしない。ヴェルフさんの方は相変わらず面白おかしそうににやついてる。

何だか、前途多難そうなのが目に見えてる感じ……。

「……えーっと、リリ。今更だけど紹介するよ？　この人はヴェルフ・クロッゾさん。【ヘファイストス・ファミリア】の鍛冶師さんなんだ」

取りあえず必要なことだけは済ませようと、ヴェルフさんの本名を教えておく。朝、ヴェルフさんと集合場所に向かった時から、リリの機嫌は急激に悪くなって話をするどころじゃなかったのだ。
リリの名前は、ヴェルフさんも今聞いていたから問題ないだろう。
返事が返ってくることには期待せず、僕はリリの後ろ姿に語りかけた――が。

「クロッゾっ？」

ヴェルフさんのフルネームを耳にした瞬間、リリは弾かれるように振り返った。
思いもよらない反応に、僕は「えっ」と呟きを落としてしまう。

「呪われた魔剣鍛冶師の家名？　あの凋落した鍛冶貴族の？」

魔剣、鍛冶師……？
いやそれより、鍛冶“貴族”って……。
リリの言葉に僕は半ば面喰いながらヴェルフさんの方を見た。
彼は一転してばつが悪そうな顔を浮かべ、口の形をへの字にしている。

「あ、あの……『クロッゾ』って？」

別々の表情を浮かべる二人を交互に見ながら、僕はヴェルフさんの家名について聞き返した。
瞳を見開いていたリリは僕の方を向き、何とも言えない顔をする。

「何も知らないんですか、ベル様……？」

「ええっと、その……う、うん」

否定してもしょうがないので、素直に頷く。
リリは短い吐息をついた後、簡単に説明を始めた。

「『クロッゾ』とは一昔前、とある王家に『魔剣』を献上することで貴族の地位を得た、名門鍛冶一族の名です。『クロッゾ』の打つ作品は全て『魔剣』だったと伝わっており……彼等が世代を通して王族に贈った剣の数は、数千、数万に及んだと言われています」

「すうまっ……！？」

「魔剣の第一人者、名匠所と言っても過言ではありません。その威力は『海を焼き払った』とまで謳われるほどでしたが……」

そこで言葉を区切ったリリは、ちらりとヴェルフさんを窺った後、言いにくそうに逡巡してから、小声で後を続けた。

「……ある日を境に王家からの信を失ってしまい、今では、完全に

没落してしまって……」

リリが尻すぼみに説明を言い終えると、僕はどんな顔をしていいかわからないまま、ヴェルフさんの方を見やる。
ヴェルフさんは髪をグシャグシャとかきわけた後、ぱっぱっと手首を振るった。

「……ま、今はんなこと、どうでもいいだろ？　ダンジョンにもぐってるんだから、することは一つだ。なっ？」

「あ……は、はい」

「……」

一つ高い目線で軽く笑ってくるヴェルフさんは、さらりと話題を流す。
肩に担いでいた得物……広刃で長大なリーチを誇る『大刀』を、ドンッと草原に突き刺した。
僕がかろうじて頷く横で、リリは観察するようにじっとヴェルフさんの顔を見上げる。

「……？」

「ん？」

その時だった。向かい合っている僕達の耳に、ビキリ、という音が届く。
動きを止めたのは少しだけ。ダンジョンにもぐり慣れた僕達は、何の音か、と考える必要もなくその不吉な裂音の正体を察した。
ダンジョンから、モンスターが産まれる。
このルームで。

「う、わっ……！」

「……でけえな」

「『オーク』、ですね」

三者三様のリアクションを取る僕達の視線の先で、ダンジョンの壁が罅割れ、破れる。
壁面を内側からこじ開け出たのは、既に脂ぎっている茶色の太腕だった。
砕かれたダンジョンの一部は卵の殻のようにぼろぼろと地面に落ちていく。壁を破壊しながら左腕が現れたと思えば、今度は右手、次には巨大な豚頭とその後を追った。

「ブギッ……ォオオオオオオオ……！」

潰れた産声を上げながら、オークは完全にその姿を現した。

（オークが生まれるところ、初めて見た……）

大型級のモンスター誕生の瞬間に、僕はごくりと喉を鳴らす。
巨体が壁を破る光景は圧巻としかいいようがない。
地面に四つん這いになっているオークは、緩慢な動作でゆっくりと立ち上がっていく。

「……まだ続く、と。これがあるから１０階層からは怖ぇよな」

更に、壁のひび割れる音はそれで終わりではなかった。周囲からビキリビキリと、いくつもの同じ音が響き渡る。
そしてヴェルフさんの言葉を契機にするように、四方八方、ルームの壁から一斉にモンスター達が壁を突き破ってきた。
主に１０階層からは、同地点上での瞬間的なモンスター大量発生がよく確認されている。
この現象が起きるとがらがらだった筈のルームはあっという間にモンスターのたまり場となるのだ。『モンスター・ラッシュ』、なんて言われる時もある。
無論、危険だ。特にルームの中心にいる時に出くわすと、“こんな”風に一瞬でモンスター達に囲まれることになる。
僕が思わず少し引き気味の笑みを見せると、ヴェルフさんは肩をすくめてみせた。

「まぁ、そこまで悲観することはないでしょう。幸いこのルームでは霧は発生しませんし、面積も広いです。すぐに囲まれることはありませんし、いざとなれば１０階層に引き返せます」

リリは落ち着きながら「ほっ」と言ってバックパックを担ぎ直す。
多くの冒険者パーティと行動をともにしてきたリリは既に１１階層を経験済み、【ステイタス】は僕達の中で一番乏しいかもしれないけど、中々肝が据わっていた。
でもリリの言う通り、危なくなったらこのルームから脱出すればいいわけだから、俗に言う『追い込まれた状況』っていうやつではないのかな。
後方に位置している幅広の大階段を顧みながら、僕も少し緊張を解く。
……それに、不謹慎かもしれないけど。
今の自分の“力”、試してみたい。

「よし、オークは俺に任せろ」

「えっ、いいんですか？」

ヴェルフさんの申し出に僕は目を見張った。
オークの怪力は凄まじい。Ｌｖ．０、いやＬｖ．１の冒険者でも直撃を受ければそれだけで戦闘不能に陥る可能性がある。
驚いた僕に対し、ヴェルフさんは逆に怪訝そうな顔を作る。

「むしろ大歓迎だろ？　動きはトロイし的はでかい。俺の腕でも楽勝に当てられる」

すぐに前方を見て口を吊り上げるヴェルフさん。
あっ、そんな風に考えられるんだ……。
僕が小心者なのかヴェルフさんが剛胆なのかはわからないけど、とにかく彼にとってオークは与しやすい相手らしい。

「ベル様はお一人で好きなように動いてください。この鍛冶師の方はリリが微力ながら援護をしましょう。正直に言えば、時折こちらも気にかけてくれると助かりますが」

「お？　何だ、俺のことが気に食わないんじゃなかったのか、リリスケ？」

「シシシッ。嫌っているに決まっています。ただリリはベル様のお邪魔になりたくないだけです」

にっこりとリリはヴェルフさんに向かって満面に微笑む。僕は苦笑いするしかない。
リリの提案は、Ｌｖ．１になった僕の【ステイタス】を考慮した上でのものだろう。【ランクアップ】した今の僕なら遅れを取ることはないと、リリはそう判断したわけだ。
後は、昂っている僕の気持ちを汲んでくれたんだと思う。

「そろそろ行こうぜ。インプあたりが群れ出す前にな」

「言われるまでもありません。ベル様？　わかっているとは思いますが……」

「うん、大丈夫。油断だけはしない」

それぞれの武器を構えて準備を整える。

僕はその場で一度屈伸してから、意識をカチリと切り替え、そして一気に駆け出した。

「ヒィエ！」

「ヒッギャ！」

草原を疾走し、既に集団を作っているインプ達のもとに向かう。

この１１階層に来るまでの道中、何度か経たモンスターとの遭遇戦はほとんどヴェルフさんがこなした。僕はそのサポート。今日本格的に戦闘を行うのは、これが初めてだ。

殺到するいくつもの視線に、放たれる威嚇の声。膨れ上がる敵意を肌で感じ取りながら、僕はなお前進する。

一直線に突き進んでくる僕に対し、インプ達は甲高い声で互いに合図を送りながら迎え撃とうと動きを作った。

五対一。数の多寡。まだ増える。

ダンジョンから産み落とされたモンスターは数知れない。周囲から続々と複数のインプが合流してくる。

――今日だけは、景気良く突っ込もう。

上体を更に前傾に。

インプ達との間隔が見る見る内に狭まっていく中、僕は振り下ろす右足を、思い切り地面へと叩きつけた。
次の瞬間、草原が爆ぜる。

「――ヒェ？」

インプが目の前に現れた。
違う。僕が、敵との間合いを食らいつくした。
洒落になってない加速力。耳元で風が千切れた。
けれど、これまでとは一線を画したその速力に、僕の感覚は見事に追い付いている。
突然眼前に出現した相手に、目を丸くするインプの表情を子細に捉えながら、僕は《神様のナイフ》を閃かせる。
サンッッ、という快音。

『！？』

インプの首が宙に飛ぶ。
飛翔する仲間の頭を仰ぎ見たインプと、走り抜けた紫紺の光に目を奪われたインプは、集団の中でそれぞれ半々くらい。
一瞬の出来事に棒立ちになるモンスター達に、僕は、動きの流れを緩めず群れ全体へと襲いかかった。

「ヒュグ！？」

「グェ！」

「ヒ、ガァァァ！？」

斬り伏せる。
羽のように軽い体を躍動させ、あたかも稲妻のように敵の間を縫っていく。僕とすれ違う度にインプ達は切り裂かれ、その場に崩れ落ちていった。
一匹につき、一太刀。
僕が武器を一度振るごとにモンスターは例外なくこと切れていく。
《短刀》と《神様のナイフ》、白い刃と黒い刃が閃けば、それだけで小柄な体に鋭い斜線が走り、インプ達は戦闘不能に陥った。
一撃必殺。

（遅い……いやっ）

常に先制。インプは飛びかかってくる僕に対し一度も反撃をしてこない。
抵抗といえるほどの抵抗を行えないまま、僕のいいようにされている。
敵の動きが鈍い、じゃない。
敵が目の前の動きに反応できないほど――。

（僕が、速くなってる！）

違う。全然違う。
これまでとは、次元が違う！
攻撃も、速度も、反応も、全ての身体能力が桁違い！
これが【ランクアップ】！
神の、恩恵！！

「はあああああああああああッ！！」

「ガヒッ！？」

リューさん直伝の回し蹴りがインプの胸に決まり、次にはあられもない速度で彼方に吹き飛んだ。何度か地面を擦過した後、小鬼のモンスターは草原の上でぐったりと力を失う。
十を優に超えていたインプの群れは瞬く間に全滅した。
みなぎる力。実感する自身の現状。湧き上がる興奮を堪えるように奥歯を噛む。
ちょっと不味いと思う。
体の熱が、治まりそうにない。

「ロオオオオオオオッ！」

「！」

雄叫びを上げながら新しいモンスターが迫ってきた。
インプよりずっと大きい体格。オークを大型級と呼ぶなら、そいつは中型、つまり僕と同等の身の丈。短い二本足で立ち上がり、前肢

には丈夫そうな爪が備わっている。
まるで鎧を背負っているかのように、体の背部はいくつかの帯に分かれた硬質な甲で覆われていた。その滑らかな鱗状の外皮は頭にまで及び、角ばった形状も相まってあたかも兜を被っているよう。
１１階層初出のモンスター、『ハード・アーマード』。

「ロウォ！」

「ウゥ！」

緑青色の全身を震わせ、二匹いる鎧鼠（アルマジロ）のモンスターは僕に真っ直ぐ向かってくる。
初見である相手を前に、僕は分厚い辞書をぱらぱらめくるイメージで、エイナさんに叩き込まれたモンスターの情報を頭の中で探り当てた。
キラーアントと似通った属性を持つハード・アーマードは、頑丈な身体組織を持つ反面、その組織に守られていない部分は柔く脆い。丸出しの腹や胸を含めた前面がそうだ。全身を甲殻で固めているキラーアントに比べれば、断然狙い易いウィークポイントだけど……甲羅の強度自体はキラーアントのそれを遥かに凌駕している。
いや、この場合は個体としての耐久力そのものが、と言った方が正しいかもしれない。
１１～１２階層に出現するモンスターの追随を許さない守り。つまり、上層域において最強の防御力を誇る。
ドワーフの攻撃を難なく打ち返す甲羅ははっきり言って鉄壁だ。白兵戦において、Ｌｖ．０の冒険者は単独でコイツを倒すことができないとまで言われている。
基本アビリティ到達基準Ｂ～Ｓに該当する１１～１２階層の難度は、

このハード・アーマードがはね上げているといっても過言じゃない。

「――ふッ！」

「ロォッ！」

真っ向から対峙する僕等は、互いに双眸を吊り上げた瞬間スタートを切った。

僕は【ステイタス】にものを言わせた加速を。

ハード・アーマードの一体は全身を丸め、回転運動から行う猛烈な突進を。

各パーツの背面に備わったハード・アーマードの甲は、堅牢な盾となると同時に武器にもなる。

凄まじい強度の鎧を駆使して放ってくるあの体当たりは、冒険者パーティをまとめて蹴散らしてしまうほどの威力を秘めている。高速回転する敵の体は力ずくの迎撃ではまず止まらない。

転がりながら急迫してくる巨大な玉弾を瞳が映す。

あっという間に距離がかき消えた中、食らえば一溜りもない突撃を、僕はギリギリのところで往なした。

先に後続を叩く。

球状に変形していないもう片方のハード・アーマードに僕は進路を取った。

「ロオオアッ！」

鋭い爪を構え直進してくるハード・アーマード。
同じく距離を詰めていく僕は相手を限界まで引き付けて――大きく横に跳んだ。

「!?」

モンスターの目と鼻の先でほぼ直角の軌道を描く。
一瞬で視界から消えた動きに付いてこれず、ハード・アーマードは完璧に僕を見失った。
掠め取るのは相手の死角にあたる斜め後方。
ブレーキの反動で膝を一杯に溜めた僕は、そこから体ごと突っ込ませて、逆手に持った《神様のナイフ》を振り抜いた。

「――――ガッッ!?」

大振りの斬撃が、ハード・アーマードの胴体を切断する。
――通る!
上層最硬の防御も貫ける。硬質な甲羅の上から敵の体を切り裂いた自分の攻撃を見て、僕は柄を握る手にぎゅっと力を込めた。
間を置かず、宙に浮いていたモンスターの上半身がドサッと地面に落ちる。

「ロォォォォォォォォ!!」

残ったハード・アーマードが再びボール状となって突進してきた。
僕は着地した格好からすぐさま体を反転させ、高速で転がってくるモンスターへ右腕を構える。

「【ファイアボルト】！」

炎雷が吠えた。
今までにない轟音を発しながら緋色の炎は飛び、回転球を穿つ。
爆破。
より速くより太くなった炎の雷はハード・アーマードを真芯に捉えた。爆風が吹く最中、丸焦げになったボールがすぐに姿を現す。
鱗がボロボロに剥がれ、原型を留めていない悲惨な状態。背面のパーツを一部ごっそりと失った鎧球はやがて綺麗に割れ、ばたりと体を地面に投げ出した。
全身を開いたハード・アーマードは煙をあちこちから吐き出したまま、沈黙する。

（魔法も、強くなってる……）

火の粉が大量に踊る光景を眺めながら、構えていた右腕をゆっくりと胸元に持ってくる。
威力はやはり桁違いだった。規模自体も。
【ファイアボルト】に限った話じゃなく、まだ力を持て余している感じは否めないけど……。

（近付いてる、絶対っ！）

脳裏に浮かぶのは一人の女剣士。あの金色の背中を追うことが、できている。
今になって高鳴る心臓の音を、僕は必死に押さえ込んだ。

『ブゥオオオオオオオオ！』

「！」

と、そこで不意打ち気味に、オークの大音声に意識を引っ張られる。
リリの言葉を思い出した僕は顔を振り上げた。
モンスターの咆哮に導かれるようにそちらを見ると、ヴェルフさんとオークが、今まさに戦闘に臨もうとするところだった。

「速ぇ……」

ヴェルフはそう呟いた。
ふと瞥見して視界に飛び込んできた一連のベルの動き。

動作も、攻撃の初動も、魔法の発動速度さえも全てが全て、途轍もなく速い。
出所は知らないが、“兎”という呼び名の由来を察するヴェルフだった。

「シシシッ。ぼーっとしてぺちゃんこにされないでくださいね。ベル様が悲しみますから」

「リリスケ、お前の性格もよーくわかった」

すぐ背後から投げられるリリの声にヴェルフは鷹揚に頷く。
彼女の方を振り返りはしない。あと数秒もかければ接敵する位置に、醜い鳴き声を喚き散らす巨大なモンスターがいるからだ。
ベルの視線がこちらに向いているのに気付き、ヴェルフは笑いながら構ってくれるなと顎をしゃくる。

「よし。いくぜ、二匹目」

後方、リリの側で倒れ伏すオークの死骸を背景に、ヴェルフは自身の得物である大刀を肩に担いだ。

「ブゴォオオオオオオオオオオッ！」

ガスッ、ガスッ、ガスッ、とのろい動きと大きな歩幅でオークが近

付いてくる。
ヴェルフは口端を上げながら自らも大胆に間合いを埋めにいった。

「ブグルアァッ！！」

ヴェルフが射程距離に入り込んだのを認め、素手のオークはその丸太のような腕を勢いよく薙いだ。
空気を抉る大威力。無造作に放たれた横殴りの一撃を、しかしヴェルフは素早く身を伏せることで回避する。
右手に持つ大刀は肩に乗せたまま、限りなく低い姿勢で左手を地面に手をつくその様は、今にも飛びかからんとする野獣を彷彿させた。
そしてオークの巨腕が頭上を通過しきった瞬間、ヴェルフははね上がり、手の中の大刀を一挙に振るう。

「らああァッ！」

「ブゲエッ！？」

肉を裂く音。
下方から振り上げられた大刃はすくい上げるようにオークの体を斬りつけた。たぷんとそのたるんだ腹が波打つ。
緑色の血飛沫が宙を走る中、大型武器がもたらす凄まじい衝撃にオークは後方へ反り返り、そのまま後頭部から地面に倒れ込んだ。

「持ってけ！」

すかさず草地を蹴ってヴェルフはオークの頭部真横に着地する。
そして、柄を両手で握った得物を大上段に構え、潰れた瞳を見開くその顔目がけ振り下ろした。
ドンッッ！！　という撃砕音が轟く。

「リリスケ、次だ！」

「もう来てます！」

頭を叩き割ったオークから離れ、ヴェルフは次なる獲物を求める。
リリの示す方向に足を回せば巨大な体躯が猛進してきている。
天然武器（ネイチャーウェポン）、枯木であった棍棒を振りかざすその姿に、ヴェルフは笑みを浮かべたまま舌打ちをした。

「ありゃ面倒だな！」

「わかってっ……ます！」

リリは円を書くように大きく回り込み、オーク進路方向に対して横合いの位置に出る。
バックパックをガシャリと揺らす彼女は外套の裾をめくり、その細い腕に装備したハンドボウガンを用いた。
発射された金属矢がオークの肩に命中する。

「ブゥゥ！」

肩を突いた鈍い痛みにオークは足を止める。豚頭のモンスターは醜い形相を作り、それまで標的だった筈のヴェルフからリリに目標を変えた。

瞬時。

簡単に注意力が散漫になるオークの懐に、ヴェルフは思いきり左足を踏み込ませた。

身に付けている黒の着流しが陽炎のようにはためき、草履を模した装靴が地面を噛み締める。

「くたばれ」

肩に担いだ大刀が、獰猛な円弧を描いた。

右手一本で振り抜かれた渾身の斬撃が、袈裟の軌道でオークの体に叩き込まれる。

その分厚い巨躯を両断したのでないかと思わせるほどの太刀筋。深く鋭く食い込んだ刀身が緑色の体液に染め上げられた。

両眼を血走らせたオークは一声も発せぬままガフッと吐血すると、硬直、体から色素を失い遂には灰となって崩れる。

ヴェルフの一撃は魔石の埋まる胸を綺麗に切り抜いていた。

「クロッゾ様っ、せっかくの魔石を台無しにされては困ります！ベル様とリリの収入が減るではありませんか！」

「しょうがないだろ、やっちまったもんは。あと、その名前で呼ぶな」

ここぞとばかりに責めかかってくるリリにヴェルフは少しげんなりした顔。

そもそも俺の分け前は無しか、と喚くホビットとその場で軽く言い合う。

草の上には深い色を湛える紫紺の結晶だけが残った。

「っ……クロッゾ様！」

「だからその名前でっ……げっ」

リリの叫び声に大きく口を開きかけたヴェルフだったが、彼も気付く。

オークとは別種のモンスターが二体、ヴェルフを取り囲むように忍び寄っていた。

『シルバーバック』。

筋肉質で真っ白な体毛を持つ、野猿を連想させるモンスター。唯一銀色に輝く頭髪が背を流れ尻尾のように伸びている。

ハード・アーマードと並んで１１階層の看板モンスターであり、目立った偏り――力と敏捷の差が著しいオークのような――のない身体能力はハイレベルにまとまっている。率直に言えば“相当強い”。

ヴェルフが思わず顔を引きつらせていると、背後にある一際大きい枯木から音が鳴り、ドッともう一体のシルバーバックが地面に着地した。

「……」

『ギィィ……』

やばい、とヴェルフは口の中でその言葉を転がした。

複数対一。ダンジョンで絶対に遭遇してはいけない場面の一つ。しかも、相手はあのシルバーバックだ。

到達階層が11階層であるヴェルフは、以前このモンスターと交戦したこともあるが、その時は組んでいたパーティの助け、連携があっての“辛勝”だった。

ここで言う“辛勝”とは、『時間をかけ過ぎた勝利』という意味である。

モンスター一匹を倒すのにどれほど時間がかかるか、これはダンジョン探索を行う上で肝要だ。瞬殺がかなわないのならあっという間にモンスター達にたかられ連戦を被る羽目になってしまう、体力を消耗し冷静さも失った後に待ち受けるのは身の破滅でしかない。

一対一でどれほどモンスターを圧倒できようが関係ない、ダンジョン内では無限に産まれるモンスター――詰まるところ数との勝負なのだ。楽勝とまではいかなくとも素早い決着が求められる。

少なくとも、この要素が優れていなければソロは絶対にできない。

そして、だから誰もやりたがらない。

（やっちまった……これじゃあソロでやっているのと変わらねえじゃねえか）

額に滲みかける汗を感じながら、ヴェルフは三つの影を用心深く見

回す。
【ステイタス】を加味した上で、現在のヴェルフがソロでもぐれるとしたら、それは精々8、9階層まで。それも慎重に万全を重ねての、石橋を叩いて渡るかなり消極的な探索だ。
そこから先は例えポーションを何十個揃えようが行く気にはなれない。
死ぬ、という自信があるからだ。

『ソロとは“アホ”がやることである』。

ヴェルフはそう思っている。
実際、身を置く環境のせいで“不可抗力”の者（自分とか）もこのオラリオでは少なくないだろうが、それでもソロでダンジョンにもぐるという行為は“馬鹿な真似”に違いないのだ。
今の状況もそれを物語っている。少し気を抜いただけでヴェルフは今、首元に刃を突きつけられており、あと何か一つ間違えればそこで息の根は止まる。
仲間と言える者がいる場合でさえこのザマだ、些細なことにも終始気を張り巡らさなくてはいけないソロの苦労は馬鹿にならない。生き残ることに精一杯で、ダンジョンにもぐっても身にならないと言うのも極めて正しい。
だから、ソロで実績を挙げられる冒険者というのも、きっとおかしいくらいに“アホ”に違いないのだ。
故に、『ソロとは“アホ”がやることである』。

（逃げるしかねえ……いや、逃げれるのか？）

自分を囲う輪が小さくなっていることに焦燥を感じつつ、ヴェルフ

は思考を回転させる。
軽く見積もっても己の実力はシルバーバックを少し上回っている程度。そしてその程度では現状は打開できない。ダンジョンのセオリー通り、一匹に手間取っているうちに袋叩きだ。
張り詰めた顔をするリリは迂闊に動けずにいる。一介のサポーターに助けを求めるのも酷だろう。
詰んでやがる、という頭が下した結論を、ヴェルフは無視することにした。武器を肩に抱え正面のシルバーバックに凄みを利かせる。
包囲網の一点を玉砕覚悟で抜く心算。ちりちりという音が独りでに耳元で弾け、これまでも幾度となく味わってきたあの嫌な緊張感が身を焦がす。
死にたくはねえなぁと心中でこぼしながらもヴェルフは腹を固めた。
剣呑な空気が場を飽和する。
ヴェルフと睨み合っているシルバーバックの双眼がギラリと光った。
モンスター達が動く。
次の瞬間。

「――せぇーのッッ！！」

「ギゴオッ！？」

「っ！？」

凄まじい“横槍”が入った。
恐ろしい勢いで疾駆してきたベルが、まさに投槍のごとく強烈な飛び蹴りをシルバーバックの横っ面へお見舞いする。
グシャッという何かが鈍く砕ける音。顔をおかしな角度に曲げながら、野猿のモンスターは隣にいる仲間の方まで蹴り飛ばされる。

出し抜けの展開にヴェルフもシルバーバック達も固まる中、ベルは鞘から《短刀》を抜いた。

「ヴェルフさんっ！」

「！！」

藍色の瞳と視線がぶつかり、もはや条件反射のように悟った。
上半身を横にずらし“射線”から外れる。
間髪入れずベルは動き、頭の後ろに溜めた右手から《短刀》を撃ち出した。

「グエッ！？」

「――――ッッ！」

ヴェルフの背後にいたシルバーバックの肩に《短刀》が命中。
悲鳴とともにモンスターの体がぐらりと泳ぐ最中、ヴェルフは独楽のように回り、振り向きざま大刀を上段から疾走させた。
炸裂。
銀の大閃が見事に敵の体へ決まり、撃破する。

「ギ、ェ……」

「……」

シルバーバックは膝を折って地面に伏す。
大刀を振り抜いた格好で固まっていたヴェルフは、おもむろに顔を上げて後ろを振り返った。
そこにはちょうど二匹目のシルバーバックを倒したベルの姿がある。
しばらくその背中を見つめていたヴェルフは、ふっと破顔して、大刀を肩に担ぎ直した。

「やっぱりいいよな、仲間（パーティ）っていうのは」

心底同意するように、振り返った白髪の少年は苦笑するのだった。

「しかしとんでもなく速かったなぁ、お前。いつ飛んできたかのか全然わからなかったぞ」

「い、いやぁ……僕もちょっと戸惑っているというか……」

大群だったモンスターとの戦闘を終えて、僕達は今小休止を取っている。
場所は変わらず11階層始点のルーム。戦いの跡が残る草原には砕けたダンジョン壁面の一部が転がっていたり、引っこ抜かれた枯木が散乱していたりと、結構すごいことになっている。
大刀を腰の鞘に戻して手を組んでいるヴェルフさんと、僕は気軽に話を交わしていた。

「やっぱり頭一つ飛び抜けた奴がいるとダンジョン探索も楽になるな。頼り切るのも駄目なんだが」

「でも、僕も他の人と共闘するのは新鮮でした。負担っていうのが、ぐっと減ったっていうか……」

「パーティの利点だな。体だろうが気持ちだろうが、余裕を持てるようになれば動きも変わってくる。モンスターの対処もかなり変わってくるだろ？」

パーティの有用性を語るヴェルフさん。
以前はパーティを組んでダンジョンにもぐっていたみたいだから、そこら辺の事情には僕なんかよりずっと精通してる。

「急造のパーティにしては良かったと思うぞ、俺達。連携とまではいかないが動きは噛み合ってた……というか、これはリリスケのおかげだな。あいつがいい仕事をしてた」

「リリがですか？」

「ああ。やることは小さいが、的確っていうか。合流した後も動きがかぶらないように、俺とお前の仲介役こなしてたしな」

言い方はあれだけど、早い話、僕達はリリに動かされていたらしい。誘導してくれたって言えばいいのかな。一つ後方の視点から戦場を見渡すリリは、巧妙な援護を挟むことで僕達の足並みを揃えさせていたのだ。

「冒険者の動きってやつを知ってやがる」とヴェルフさんが言ったのを聞いて、僕は「ああなるほど」と簡単に納得することができた。サポーター業も盗賊業も含めて、これまでリリは冒険者という存在を頻りに観察してきたから。

「にしてもよく働くな、リリスケ」

「この時ばっかりは、サポーターの人に悪い気がしますよね……」

確かに、と笑うヴェルフさんと僕の視線の先、リリは魔石の回収作業にせっせと務めていた。

僕達が屠ったモンスターの数は馬鹿にならないからその分、負担も大きい。かなりの手間だ。

さっき手伝うよと言ったんだけど、見事に断られた。こればっかりは自分の仕事だからだと。今のうちにしっかり休めと背中をグイグイ押されてしまったほどだ。

戦っている最中は大して力にもなってやれない、なんてリリは笑いながら自分のことを卑下してたけど……そんなことないのに。

今さっきのヴェルフさんの話を聞いて、僕は尚更そう思った。

「ところで……他の【ファミリア】の連中も増えてきたし、どうする？　この後は場所を移すか？」

「うーん、そうですよねぇ」

周囲には先程までいなかった何組かのパーティがちらほらと見える。このルームは階層間を繋ぐ位置関係ゆえに、ダンジョン各部に比べて人通りは多い。霧が出ておらず、安全地帯でもあるこの場を探索の拠点に置くパーティも少なくないから、ここで狩りを続けるのは少し難しいかもしれない。

出現したモンスターの奪い合いにでもなったら悲惨だ。いざこざが起きて【ファミリア】間のトラブルに発展してしまったら目も当てられない。実際に僕達が戦っている間も、残っていたモンスターを狩っていたパーティがいたし。

ダンジョンにもぐる者は他者がいるところを避け、不干渉を貫くというのが暗黙の了解なのだ。

……ちなみに、他のパーティの存在にいち早く気付いたリリは、俊敏な動きで僕達が狩ったモンスターを一ヵ所にまとめていた。

これは僕達のパーティの取り分である、横取りは許さない、と。

抜け目がないっていうか、熟練のサポーターだけにしっかりした早技だった。

「……どうせならここで昼食取りましょうか？　沢山の人達がいるから、モンスターに警戒することもないでしょうし」

「なるほどな、ただ場を譲るの癪だし、利用させてもらうか。いいぞ、俺は賛成だ」

ちょっとずうずうしいかと思ったけど、ヴェルフさんは僕の意見に同意してくれる。
リリが戻ったら早いお昼にしようということで決まった。

（それにしても……１１階層だけあって、どのパーティも強そう……）

ふと視線を巡らせて、そんな感想を抱いた。
ルームの各位置に陣取るパーティは、メインストリートや中央広場（セントラルパーク）ですれ違う冒険者達よりも、身に纏う空気が研ぎ澄まされているような気がする。
武器や防具だってそうだ。切れる、頑丈、といった言葉がそれぞれの得物から触らずとも伝わってきた。
破砕弓を背にする獣人、特大の戦斧を地に下ろしたアマゾネス、白銀の杖とローブを装備するエルフ……一癖も二癖もありそうな面々、多種多様の亜人達。

（どれくらい【ランクアップ】してる人達がいるんだろう……？）

１１、１２階層で探索をするパーティっていうのは、目前に控える中層攻略を視野に入れている組が多いだろうから、この中のうちの何人かはＬｖ．１に到達している筈だ。

……本当にあの人達と同じ立ち位置にいるんだろうか、僕。
一応Ｌｖ．１だし、きっと堂々としていてもいいんだろうけど……凄まじいガタイを誇るドワーフとか見ていると、途端に姿勢を低くしたくなる。
「あんな人と互角なんて嘘でしょ？　ぶっ飛ばされるよ！」なんてちょっと前の僕なら喚いてそうだ。
ヴァレンシュタインさん……目指す場所は遥かに高いんだから、こんなところで尻込みしてちゃいけないんだけど。
きっとあの人達、すごい『魔法』とか『スキル』持ってるんだろうな……。

（って、そうだ、僕の『スキル』……）

忘れていた事柄を思い出す。
僕も一つ、正体不明の『スキル』が発現していたんだ。
【英雄願望（アルゴノウト）】。実戦を通して能力を把握していこうって神様と決めていた、アレ。
今の今まですっかり抜け落ちていたから、さっきの戦闘の中じゃ意識してなかったけど……。

（普通に戦ってる分には、何も起きなかったよね……？）

速く動けるだとか力が上がっただとかは【ランクアップ】の影響の筈だから、スキルが発動したということはないと思う。
『能動行動（アクティブアクション）』、『僕から意識的に動く』、『攻撃とか意識的な動き』。

神様の会話を思い出して言葉を拾ってみるけど、うーんと首をひねる。

スキルのことは忘れていたとはいえ、神様の言う行為は戦闘の中に組み込まれていた。それでも何も起きないってことは、行動を起こすだけじゃ駄目、ということなのだろうか。

ただ動くだけじゃなく、何か切っかけがいる？

詠唱という引鉄（トリガー）を必要とする魔法と同じ？

……“念じる”必要が、ある？

「念じるって、何を……？」

「ん、何か言ったか？」

「あ、いやっ、何でもないです」

こぼれていた声を聞かれ、慌てて誤魔化した。ヴェルフさんに苦しい愛想笑いを向けながら僕は思考の続きを試みる。

念じる、念じる、念じる……スキルよ発動しろー、なんて心の中で叫べばいいのだろうか。そんな簡単な話ならわけはないんだけど。

そもそも、【英雄願望】っていうスキルはどうして発現したんだ？

特殊な【経験値】を得たから？

【ランクアップ】できたから？

あのモンスターを、ミノタウロスを倒したから？

ヴァレンシュタインさんに情けない姿を見せたくないと、このままじゃ嫌だと、心底思ったから？

……僕は、あの時。

『僕は』

『英雄に――』

……なりたい。

そう、願った。

「……」

お伽噺の住人達のように。

とんでもない相手に臆することなく立ち向かう彼等のように。

危険も顧みず沢山の人々を救う彼女達のように。

僕を助けてくれた、あの人のように。

なりたいと、一歩でも近づきたいと、心から望んだ。

英雄、願望。

「……おい、ベル。それ、何だ？」

「えっ？」

耳を叩いた声に、心の深海に沈んでいた僕の意識は、急速に浮上した。

顔を上げると、目の前には眉根を寄り合せた困惑顔のヴェルフさんがいる。

何を言っているんですか、とそう聞くより先に彼の視線を追うと、

僕の右手があった。
白い光の粒が、明滅している。

「……へっ？」

目を丸くした。間抜けな声も落ちる。
手首から上、淡い輝きを灯す純白の光が取り巻いていた。
雪の結晶より更に小さい光の微粒が、一定間隔で右手の中に吸い寄せられ、かと思うとまた新しい光粒が生まれ、時間を巻き戻すようにまた吸い込まれていく。
光の集束、収斂、その繰り返し。
まるで僕の右手の周りだけ粉雪が降りそそぎ、渦を巻いているよう。
また、リン、リン、というか細く高い音が生じていることにも僕は気付いた。
あたかも小刻みに鐘（チャイム）を鳴らしているかのようだ。

「……」

「……」

僕とヴェルフさんは顔を見合わせた。
混乱と戸惑いを共有した僕達はもう一度、最初から色白である僕の右手に視線を落とす。
まるでリスが鳴くように、鐘の音が小さく響いていく。

「お、おいっ……」

「……」

ヴェルフさんより二、三歩前に出て、右腕を突き出す。

自分に巻き起こっている謎の状況に、どう対処をすればいいのか見当は付かなかったけど……。

『能動行動（アクティブアクション）』

『“攻撃”とか意識的な動き』

……困った時の、神様頼みってことで。

「【ファイアボルト】」

次の瞬間、視覚と聴覚が爆ぜた。

「――――――」

「うっ、おおおっ！？」

純白の閃光。

視界を白く埋め尽くす光輝が弾け、伴って巨獣の咆哮のような激音が鳴り響く。

右手で爆発した純白光の中から飛び出したのは、炎の雷、【ファイアボルト】。

ただし規模がおかしい。白い光線に縁取られた緋色の炎雷は、人の

上半身を丸飲みしてしまうほどの厚みと大きさをもって、そして驀進する。
遂には進路状にあった枯木を一瞬で撃ち抜き、遠く離れたダンジョンの壁面へと到達した。
大爆発。

「……えぇっ？」

僕は、また情けない声を出した。
視界には無残な光景が広がっている。
幹の部分に大穴が空いている極太の枯木は、首の皮一枚繋がっているという表現がぴったり当てはまった。【ファイアボルト】は綺麗な弾丸などではなく稲妻を模した形状を取っているから、その矛先は歪で鋭い。炎の顎の餌食になった天然武器（ネイチャーウェポン）はまさに肉を抉り取られたような様相を呈している。
もはや五メートルに届こうかというその枯木は思い出したように、皮がメキメキと引き千切れていく嫌な音を奏で、草原へと倒れ込んだ。
魔法が通過しただろう進路にはことごとく炎の残滓が舞い上がり、中には白い光を宿しているものある。ひょっとしたら幻想的な風景なのかもしれない。炎雷の余波で焼き焦げ削られた草原が存在しなかったら。
ルームの最奥には、竜の爪痕のような亀裂が刻み込まれている。【ファイアボルト】を受け止めたダンジョンの壁面は、煙を吐きながらボロボロになっていた。

「……」

こう言うのも変だけど、本当に雷が落ちたかのようだった。
雲を突き抜けて落ちる雷霆が、大地へまっしぐらに向かって、光と音をばら撒くように。

「……」

「……」

僕とヴェルフさんは顔を見合わせた。さっきとは意味がまるで異なって。
『何やってんだお前』という無言の訴えを、僕は目の前の黒い瞳から読み取ってしまう。

「な、何をしていらっしゃるんですか、ベル様!?　い、いえっ、クロッゾ様の方ですかっ？　と、とにかくっ、今何をしたんですか!?」

リリが泡を食いながら僕達の側に駆け寄ってくる。
何をしたと説明するのは簡単だったけど、壊れてしまったかのように冷静な頭の一部分が、周囲に目を向けさせた。
この場にいる全ての視線が、僕達へ突き刺さっている。
驚愕と、剣呑。それくらいしか場の空気は読み取れなかった。けど、それでも十分過ぎるくらい。目立ち過ぎダ。
そこから先の僕達の行動は迅速だった。

ヴェルフさんは膨れ上がったバックパックを持って、僕はリリを小脇に抱えて。
僕達は、全速力で１１階層から１０階層への階段へと飛び込んだ。

僕はその後、何十回もリリとヴェルフさんに頭を下げた。

「ふぅ……」

シャツからすぽんと顔を出し、全身の疲労感を吐き出すように息をついた。

部屋着に着替えた僕はドアをがちゃりと開け、シャワー室から出る。
室内には既に着替えを終えている神様がいた。

「ベル君、疲れているんだったら休んでていいよ？　夕飯の支度はボクがするから」

「いえっ、大丈夫です。手伝います！」

「ふふっ、そうかい？　じゃあ一緒にやろうか」

時刻は二十時半ば。
【ヘスティア・ファミリア】のホーム、『下水道の隠し部屋』で、僕と神様は夕飯の準備に取りかかった。
お仕事の都合と長引いたダンジョン探索。二人して帰宅するのが遅れた僕達は、協力しながらそれぞれの作業をこなす。
神様の希望もあって、家事諸々はできる限り二人でこなしていた。
本当は神様の手を煩わせちゃいけないんだろうけど、「水臭いこと言うなよ、ベル君」、なのだそうだ。
でもやっぱり、ちょっと畏れ多い気もするんだよなぁ……。それに今はスケジュール的に落ち着いているけど、まだダンジョンに入り浸るようになると、結局神様に任せっきりになっちゃうし。

「……あー、ベル君？　ちょっと聞いていいかな？」

「何ですか？」

キッチンとも言えない狭い流し台でジャガイモを洗っていると、並んでお肉を細かく刻んでいる神様が、どこかためらいがちな声を出す。
身長が低いため椅子の上に立って調理している神様を、僕は手を止めて見た。

「フレイヤ……あーいやっ、銀髪の女神と面識があったりなんか、しないよね？」

「銀髪の女神様、ですか？　いえ、会ったことはないと思いますけど……」

記憶を掘り返しながら答える。
この都市に来てから女神様を見かけること自体数えるほどだし、銀なんて目立つ髪の色だったらまず覚えている筈だ。

「うん、そうだよね、そうだよなぁ……」

相槌を打つ神様はどこか上の空だった。うーん、と顎を上げて天井を見上げている。
どうしたんだろう、神様？
そういえば神会（チャット）が終わった辺りから、何か考え込んでる神様の姿をちらほら見るようになった気がする。
何かあったんですかと尋ねても、神様は苦笑して「何でもないよ」と顔を振るだけだった。
ちょっと気になりつつもその後は料理に集中し、ややあって神様と

食卓を囲んだ。

「へ～、じゃあその鍛冶師君はいい男そうじゃないか」

「はい。すごい気さくで何だか頼りがいがあるんです。リリとは、仲が良いのか悪いのか、ちょっとわかりにくいんですけど……」

「ははは っ」

夜食の時間帯に片足を突っ込んでいる夕餉を取りながら、僕は神様と談笑する。

二人で作る料理はこの頃華やかなものになっていた。いや質素に過ぎるものが少なくなってきているのかな。

当たり前のように二人前のパンが並び、当たり前のようにお肉の乗ったサラダを皿に盛り付け、当たり前のようにジャガ丸くんが山を築く。

ここまで来るのに長かったような短かったような……きっと、感無量ってやつだ。何だか内容が偏っているような気がしなくもないけど。

貧乏、という状態からは一歩抜けられたんじゃないだろうか。

「うん、そんなに人が良くて、男だったら何も問題ないな。ボクも諸手を上げて歓迎するよ。ベル君、その子を逃がしちゃダメだぜ？」

「はいっ。何て言ったってヴェルフさんは鍛冶師ですしっ、それにパーティでもスリーマンセルを組めばぐっと危険も低くなるって聞きますから！　できればずっと居てほしいんですけど……」

「そうだね、何としてでも捕まえておくんだ。君とサポーター君が“二人きりの状態”は“非常に危険”だからね」

にこりと清々しいくらい女神様の笑みを浮かべる神様に、僕も少し興奮気味に頷いた。

神様のツインテールがめちゃくちゃ機嫌良さそうに揺らめいている。

どうやら僕達のことをかなり心配してくれていたらしい。

これもいつもの習慣だけど、僕は神様に今日あったことを話していた。

まずはヴェルフさんのこと。

昨日のうちに直接契約云々のことは伝えてあったけど、今日一日接してみて感じたパーティの一員としての印象を告げていく。

「それにしてもヘファイストスのところの子とパーティを組むなんて……ふふっ、これも君がボクの【ファミリア】に入った何かの縁かな？」

神様はくすくすと笑う。

ヘスティア様とヘファイストス様は天界にいる時から付き合いがあるそうで、親友も同然なのだそうだ。オラリオに来てからは色々あったり、【ファミリア】のシステム上、以前のように気軽に接することはできにくくなってしまったそうだけど。

何だかんだで切っても切れない縁に、神様はおかしそうに肩を揺らしていた。

「……あの、神様？　ヴェルフさんのクロッゾっていう家名について、何か聞き覚えってありますか？」

僕は合間を見計らって、思いきって気になっていたことを尋ねてみた。

リリが言っていた魔剣にまつわる『クロッゾ』の話。

ヴェルフさんの知らないところで探るような真似をして何だか気まずいけど、僕は好奇心めいた感情を抑えることができなかった。

「『クロッゾの魔剣』か……。ボクもそれくらいの話なら小耳に挟んだことはあるけど……多分、ベル君の知っていることとあまり大差ないと思うなぁ」

「そう、ですか……」

神様は天界から降りてきてまだ間もないと聞く。下界の情報に明るくない、それこそ僕と同じくらいの知識しかないのは仕方のないことだ。

結局ヴェルフさんのことは、詳しくわからないまま、か。

「……クロッゾの一族のことはわからないけど、その鍛冶師君、ヴェルフ君個人の評判なら、少し教えてあげることはできるかな」

「えっ！？」

「ふふん、ベル君、ボクがどこで働いているのか忘れたかい？」

あ！

と、僕もそう言われてすぐわかった。

神様は武具を売る【ヘファイストス・ファミリア】のバベル支店に勤めているんだ。

【ヘファイストス・ファミリア】、つまりヴェルフさんが所属する【ファミリア】。確かにそこで働いていれば、ある鍛冶師の評判の一つや二つ、耳にするかもしれない。

「どうだベル君！」と言わんばかりに神様は、その大き過ぎる胸を張って誇らしげにしてみせる。

僕は「うっ」と詰まりながら頬を赤くし、頑張って作った苦笑を浮かべながら話の続きを促した。

聞くところによると、どうやら神様は、昨日僕がヴェルフさんの名前を出した時点で彼のことを聞いて回るつもりだったらしい。

「鍛冶師としての腕前はいいみたいだね。まだ芽が出てないみたいだけど、ヘファイストスの話の中でもよく名前が出てくるから、そこは間違いないと思う」

「へ、ヘファイストス様が、ヴェルフさんのことを話していたんですか！？」

「うん。こう飲みに行って酔ったはずみにこぼすんだけどね、誰それは才能がある、この子はすごくもったいなーい、とか」

世界でも屈指の鍛冶【ファミリア】をまとめる主神様に、才能を見出されてる、って……。

ひょっとしてヴェルフさん、【ファミリア】の中でも出世頭候補だったりするんじゃあ？

「ヘファイストスは目をかけていたよ。評価もしてる、光るものがあるって。……ただ、有り余るくらい残念な子でもあるって言ってた。感性的に」

「……」

ピョンキチ、という名の強烈な既視感が僕の頭に過った。

ちなみに、ヴェルフさんから頂いた軽装はその名を元祖一世から脈々と受け継いでいる。今ので『Ｍｋ－ＩＩＩ』だ。

少し凡人には付いていけないあのネーミングセンス。何でも、ヘファイストス様をして「どうしてそうなったの」と言わしめたほどらしい。

ヴェルフさん、すごすぎる。

「それでね、ヘファイストスの言葉とは打って変わって、【ファミリア】内だと彼の評価は厳しいものになるんだ」

「はっ？　どういうことですか？」

一転した流れに僕が戸惑う中、神様は「うん」と頷く仕草をする。

「まず結論から言っちゃうと、彼は魔剣が打てるらしい」

「……！」

「贋作なんかじゃない、正真正銘の『魔剣』さ。その出来は【ファミリア】内にある既存の魔剣作品……上級鍛冶師の作品をも凌ぐって言われてる。それこそ、『クロッゾの魔剣』と呼ばれるに相応しいほどにね」

――魔剣、鍛冶師。

この耳で聞いた言葉が現実味を帯びながら、頭の中で反芻される。

「あれ、でも……ちょっと待ってください。魔剣って確か『鍛冶』の発展アビリティを発現させてなきゃ、作れない筈じゃあ……？」

そうだ。

初めて【ヘファイストス・ファミリア】のテナントに行ったあの日、エイナさんは教えてくれた。確かに言っていた。

魔剣は『鍛冶』のアビリティを習得した者、その中でも更に一握りの鍛冶師しか作ることはできないって。

「そこら辺のことはボクにもわからないんだけど、とにかく彼は魔剣が打てるそうなんだ。ヘファイストスも認めてた」

「……」

ヘファイストス様……神様の証言。
これはもう、信じるしかないのか。

「その家名は本物さ、彼には正統のクロッゾの血が流れてる」

自分でもよくわからない衝撃に見舞われる。
ヴェルフさんは鍛冶貴族、没落したとはいえ高貴の出身であること。
そして彼は『鍛冶』という発展アビリティを持っていなくても、魔剣が打てるということ。
……スキル？
僕は咄嗟にそう思った。何か特別なスキルの恩恵によって、ヴェルフさんは魔剣が製造可能なのではないかと。
いやでも、クロッゾの血縁者は全員魔剣が作れたってリリは言っていたような……。クロッゾさん達は、みんな同じスキルを持っていたってこと？
うぅん、流石にそれは……。僕は頭を抱えてしまう。
駄目だ、余計な憶測をしたって埒があかない。僕は湧いてくる疑問を封じ込めて、神様の話に集中することにした。

「でも、彼は魔剣を作らないんだ」

「……ぇ」

「作成しようとしないんだよ、何故か。一度作ってしまえば富と名声が確約されている筈なのに、彼は魔剣を打とうとしない。上級鍛冶師の末席まで蹴飛ばして、頑なまでにね」

魔剣を作れるのに、作らない。
振るうだけで魔法（と同じ効果）を発揮する魔剣は強力だ。
行使制限がある代わりに手にすれば誰でも魔法の恩恵に与れる。誰でも、容易に力を手に入れることができる。
多くの人が求めてやまないだろう魔の剣を。
顧客だってお金だって、簡単に集められるだろう武具を。
ヴェルフさんは、作ろうとしない……？

「ボクの働いてるテナントの中じゃ、『宝の持ち腐れ』なんて嘆かれてる。他の【ファミリア】の構成員の間でも『出来損ないのクロッゾ』って誹謗中傷されているらしいんだ」

ヘファイストスがそういうの嫌いだから表立って言う子はいないらしいんだけど、と神様は締めくくった。
……そればっかりは、話をみなまで聞かなくても、わかる。
持ち腐れって嘆くお店側の声はともかく、構成員――ヴェルフさんと同じ鍛冶師が彼をそしるのは、きっと妬んでいるからだ。
その気になれば容易く上級鍛冶師の仲間入りを果たせる才能に、努力せずとも名剣を生み出せるその血筋に。
ヴェルフさんが【ファミリア】の中で疎外されている原因が見えた。

「腕は確か、だけど何か訳あり……ってところかな、君が契約を結んだ鍛冶師君は」

「……」

訳あり、か……。
ヴェルフさんは魔剣を打てることを、僕に黙っていたかったのだろうか。
出会ってまだ二日しか経っていない相手に、自分の身の上話を打ち明けることは普通しないし、ヴェルフさんの方は隠し事をしているつもりなんてないかもしれないけど。
今日のあの人の態度なんかを振り返ってみて、僕は何となくそう感じた。

「ベル君、隠し事の一つや二つ、笑って受け入れてあげなきゃダメだぜ？　神にだってやましいことが一杯あるんだから。ぜひ度量が大きい男になってくれよ」

「神様……」

どこか優しく諭すような口調に、どこか優しく見守るような眼差し。
卓に両肘をついて手にはちょこんと顔を乗せる神様に、僕は思わず、眉を下げながら笑ってしまった。
僕の気の抜けた笑みを見て、神様もほにゃと笑う。

「結構長く話してたね。ご飯を済ませちゃおう。それとも、まだ他に話しておきたいことはあるかい？」

すっかり冷たくなっている料理を見て神様はそう告げる。
僕は少しためらったけど、この場で言ってしまうことにした。

最後に、あのスキルのことを。

「じゃあ、発動したのかい？　君のスキルが」

「はい」

英雄達のことを、憧憬の存在を思い浮かべることでスキルのスイッチが入ったこと。
体の一部分が、スキルの影響を及ぼす箇所が白い光の粒に包まれたこと。
そしてその箇所から発する攻撃が、能動行動（アクティブアクション）の効果が飛躍的に激上すること。
恐らく、蓄力（チャージ）した分だけ。
僕はこれらのことを包み隠さず神様に話した。

「……ベル君、ちょっとそこに立って、【ステイタス】を見せてくれないかい？」

「えっ、は、はい」

真面目な顔をする神様に僕は従った。
ぴょんっ、と椅子から下りた神様の前まで行って、身に付けているインナーを脱ぐ。
気恥かしい思いを少々頬で感じながら、僕は神様に背を晒した。
神様のじっという視線が【ステイタス】の刻まれた肌の上を彷徨う。

「……うん」

神様の手が、僕の背中に置かれる。
柔らかい指がそっと撫でたのは中心より少し下がったところ。
不意に、今なぞられた部分が熱を帯びた気がした。
目には見えない筈の漆黒の【神聖文字（ヒエログリフ）】が、頭の中に描かれるイメージ。
一枚の碑石に刻まれた【英雄願望】の一文を、僕の瞳は幻視した。

「もういいよ」

その声を聞いて僕は振り向いた。
神様は椅子の上に置いておいたインナーを取って僕に手渡してくれる。

「ボクの勝手な見解を言わせてもらうよ。君のそのスキルは逆転の力だ」

神様は言う。
手を差し出したままの格好で、静かに。

「自分より強大な敵を打ち倒すための力……どんな窮地も覆す可能性を持った、言っちゃうなら、資格かな」

漆黒の瞳が僕を見上げ、僕だけを映す。

「馬鹿みたいに英雄に憧れた子供が、英雄になるための切符（スキル）さ」

――アルゴノゥト。
英雄になることを夢見た男の話。
英雄を夢見て、英雄になってのけた男の軌跡。
英雄への道程。

「その一撃に全てを賭けて、その一撃に全ての力を注ぎこむ。圧倒的な力の不条理に対して、そのたった一つのちっぽけな力で、逆らうんだ」

英雄達がやってのけてきたように。
神様はそう言葉を継いだ。

「君が手に入れたものは、『英雄の一撃』だ」

神様のその言葉を最後に、部屋には静謐が訪れた。
僕の目は知らないうちに神様の瞳に釘付けになっていて、しばらくの間見つめ合っていたけど。
神様がちょんちょんとインナーを叩くと、僕ははっとして今の状況

に気付いた。
耳を紅色に染めながら慌てて服をかぶる。しっちゃかめっちゃかになる僕のことを、神様は側でずっと見つめていた。

そして最後に。
ふっ、と神様は笑った。
いつも見ている笑みとは違う、もっと、ずっと、手の届かない場所で浮かべるような、遠い微笑み。
空の上からたった一人の子供を見守り、送られる、遠い慈愛の笑み。
僕はこの時初めて。
意識も鼓動も、神様に奪われたのかもしれない。
僕が呆然と立ち尽くす中、神様は「覚えておくといいよ」と、そう言った。

１２話　鍛冶師の事情　（１）　＊微修正（後書き）

次回の更新も二か月ほどのインターバルが空くと思われます。
申し訳ありません。

（2）

「がるぁあああああああああああああっ！！」

雄叫びが飛ぶ。
繰り出される蹴りが恐ろしい速度を纏い、瞠目し棒立ちとなっているモンスターの顔面を粉砕した。
血塗られた装靴。既に何百もの怪物達の頭蓋を砕きマグマを浴びたような様相を呈しつつも、その奥で鈍く輝く金属光沢は一向に衰えていない。
足を保護するための防具ではなく、武器としての方向性を持たせた特注のメタルブーツは、惜しみなくその威力を目の前の敵へ解放していった。
貪欲に獰猛に凶暴に次なる標的を探す。
未だ数多く残るモンスターの群れに飛びかかる彼の姿は、獲物に餓える狼を彷彿させた。

「ベート、邪魔ーっ！　ぶった切っちゃっても知らないからね！」

「てめぇのノロくせぇ剣に誰が当たるか！」

「エルマー！　今日の食糧は狼の輪切りだよー！　うわっ、不味そうー！」

「殺すぞォ！！」

「……馬鹿」

４４階層。

うだるような蒸し暑さが立ち込める、ダンジョン深層域。

燃えるような朱の色が辺り一帯の地面を埋め尽くしており、歪な岩の塊がそこかしこに転がっている。

視界の中にまとわりつく壁面は所々がひび割れ黒ずんでいて、あたかも炭化したかのよう。刻まれた亀裂の中でうっすらと輝く赤い光が、その黒鉛色の壁の中で不気味な存在感を放っている。

まるで火山の腹の中に放り込まれたような錯覚を催す中、『遠征』真っ最中の【ロキ・ファミリア】は、Ｌｖ．４にカテゴライズされる岩石のモンスター、『フレイムロック』の群れと激しい戦闘を繰り広げていた。

「何をずっと興奮しとるんじゃ、あやつらは」

「ガレス」

呆れたような低い声音が、【ロキ・ファミリア】首領、フィンの耳に届く。

歩み寄ってくるのは一人のドワーフだった。

長い髭に、防具の隙間から僅かに覗く鋼のような筋肉。強固な重装を纏うその体は重戦車を連想させる。

大規格の斧を軽々しく背負っており、貫禄と迫力を兼ね備えたその姿はまさに歴戦の戦士のそれだ。

ガレスと呼ばれたドワーフは、前方で暴れに暴れまくっているベート達を半眼で眺めながら、ぼやくように呟いた。

「中層からあの調子だぞ？　あれでは他の者達が育たん。見ろ、レイナード達が困り果てとる」

「ンー。不味いとは思っているんだけどね、止まりそうにないんだ」

今、ベート達を取り囲んでいるのはモンスターの大群だけではなく、仲間である【ロキ・ファミリア】の構成員達も含まれている。

Ｌｖ．３の団員を中心とした第二級冒険者の一団は、一つ次元の高い第一級冒険者達の戦いっ振りにドン引きだった。それこそ汗を流して及び腰だ。

ベート、エルナ、エルマ。たった三人の冒険者が深層における貴重な【経験値】を根こそぎ奪っていく有様に、盛り上がった岩の上で腕を組んでいるホビットのフィンも、今にも溜息をつきそうな表情を浮かべている。

「エルマも化けの皮が剥がれかかっておるし……フィン、わしが合流するまで何があった？」

普段は憧憬（フィン）の視線を気にして冷静沈着を装っている双子のアマゾネスの片割れは、静かな表情で、けれど薄らと口端を吊り上げている。

二刀の曲刃（グルカナイフ）を振り回すエルマはどこか熱に浮かされた雰囲気で、淡々と戦いに耽っていた。彼女の黒の長髪が陽炎の奥で激しく舞っている。

目深に装着されている分厚いヘルムをくいっと上げながら、ガレスは岩に立っているフィンを見上げた。

「少しね、来る途中で見た冒険者に当てられたみたいだ」

「む？　中層にそんな活きのいい者がおったのか？」

「いや、上層」

「何と」

『遠征』におけるルールに則り部隊を二つに分けていた【ロキ・ファミリア】のうち、後続の部隊を率いていたのがガレスだった。

【ロキ・ファミリア】最後の第一級冒険者である彼は、不慮の事態に備え戦力を集中させていた先遣隊の後を追う形でダンジョンを進み、取り決められた階層（ポイント）で合流したのだ。よってフィン達が何を見たのか彼は知らない。

ルビーのような赤い瞳を僅かに見開き、ガレスは驚いた顔を作る。

「恐らく何者かが糸を引いていたと思うけど、ミノタウロスが９階層に現れてね。Ｌｖ．０の冒険者がこれを一人で撃破した」

「Ｌｖ．０がミノタウロスを？　いや、待て待て、何故Ｌｖ．０だとわかる？」

「【ステイタス】を拝める機会があったんだ。そこで確認させてもらった。まぁ、リヴェリアの【神聖文字（ヒエログリフ）】解読が間違っていなければの話だけどね」

「何だ、私の目を疑っているのか、フィン」

「おお、リヴェリア」

フィン達の会話に、後ろから近付いてきたエルフの女性、リヴェリアが加わる。

光り輝く翡翠色の長髪。透き通った白い肌はこのダンジョン独自の熱気に晒されながら汗一つかいていない。

申し訳程度の軽装の下に美しい青の衣を纏っている彼女は、フィン達の前で止まった。

「フィン。やはり次回からは私もローブでいい。精霊（ウンディーネ）のドレスは、装備するのに一々手間だ」

「ンー。ロキがせっかく仕入れてくれたんだ、我慢してあげたらどうだい」

「うむ。似合っとるぞ」

「あれの舐め回すような視線を思い出すだけで、私はこれを放り出したくなるんだがな……」

『リヴェリア、後生や、コレを着てくれェー！！』と己の主神が手渡してきたやけに生地が薄いドレスを、リヴェリアは冷めた目で見下ろす。

フィンもガレスも、彼女のものと材質が似た青い肌着を防具の下に身に付けていた。リヴェリア同様、暑さに参った素振りを一度も見

せていない。
彼等はその装備品――『精霊』の恩恵によって、押し寄せる熱波から守られていた。

「話を戻すが、私以外にアイズも証人だ。あの子もベル・クラネルの【ステイタス】を読んだからな」

ガレスは、あのリヴェリアが件の冒険者のものらしい名前を読んだことに片眉を上げたが、一先ず触れようとはしなかった。
リヴェリアが目をやった方向に自らも視線を飛ばし、一人黙って立っているアイズを見る。

「……お主等の話が本当なら、アイズが真っ先にモンスターのもとへ駆け出していくと思うが、わしの気のせいか？」

「ンー？　そういえばどうしたんだろうね。大人しかったからつい忘れてたよ」

「なに、放っておいてやれ。いずれ調子を取り戻す」

訝しげなフィンとは対照的に、何かを知っていそうなリヴェリアは細く笑む。
アイズは顎を少し引き、まるで地面を注視するような姿勢で何事かを考え込んでいた。
無表情の割には今にも、もんもんモンモン、と音が聞こえてきそうだった。

「何も見ていないわしは話だけ聞いても眉唾物としか思えんが……お主等はどう思ったんじゃ？　その冒険者を見て」

「まだまだ荒いし、甘さも目立つ。……でも、そうだね、ベート達が居ても立ってもいられなくなるのは、僕もわかる。自分もあの子と同じ“冒険者”だったってこと、思い出させてもらったよ」

黄金色の髪を揺らしガレスの方を振り向いたフィンは、そのあどけない顔を年相応の子供のように緩ませ、微笑んだ。
リヴェリアも同感とばかりに言葉を付け足す。

「【ファミリア】を統率する身になって、仲間も含め保身に長けた戦闘に慣れ過ぎた。万が一を侵さない今の私達にとって、あの瀬戸際の戦いは……少々、眩しかったな」

「……何だか惜しいことしたように思えたきたのう」

フィン達の話を聞いたガレスは、髭に手を伸ばし、その場にいなかった自分を悔やむように呟く。
迂闊な真似を働けない【ファミリア】首脳陣三人の視線の先で、若い団員達は体の熱が赴くまま暴れ回っていた。

「……リヴェリア」

「何だ、アイズ」

おもむろに呟かれた鈴のような声に、リヴェリアはそろそろ来ることがわかっていたように反応する。
アイズはしばらく時間を置いてから、口を開いた。

「アビリティの、限界……どうすれば超えられると思う？」

質問の意味に、耳を立てていたガレスとフィンは怪訝そうな顔をした。
だがすぐにフィンだけは何かに気付いたように目を細め、アイズ達を強く見据える。

「我々が踏み入るにはまず不可能な領域だ。アビリティの値を追求したところで、先に【ランクアップ】を迎えるのは目に見えている」

基本アビリティは極め切れない。リヴェリアは言い切った。
熟練度を効率良く加算させようと上質な【経験値】を獲得し続けていったところで、【ステイタス】は次回の段階へと移行してしまう。
『絶対的な【経験値】の一定量超過』という【ランクアップ】の条件に引っかかることになるからだ。
基本アビリティ値Ｓへ到達前の、高確率の【ランクアップ】達成。
基本アビリティの成長と【ランクアップ】の間には、確かな“ジレンマ”が存在するのだ。

「それでもこだわるというのなら、己より劣位の存在（モンスター）と交戦し続けるしかないだろうな」

絶対的な【経験値】――つまり格上の存在との交戦から得られる【経験値】が、一定量に到達する前の段階で熟練度を上昇させていけば、基本アビリティを究めるのは理論上可能ではある。

だが、それは同時に気の遠くなる作業だ。

基本アビリティの値が高まっていくにつれ、自身より弱小な存在と交戦しても――力量の差にもよるが――熟練度は加算され難くなっていく。頑固なまでに。

それこそアイズ達ほどの高みにいる者達ならば、数百数千のモンスターを殲滅したところで熟練度が一つ加算されるかさえ怪しい。

基本アビリティが高ければ高いほど次回【ステイタス】の強化度合いに反映されるからといって、基本アビリティのみに執着していては本末転倒なのだ。あるいは、それは強者のみに許された贅沢な悩みと言える。

時間の大幅な消費。効率の悪さ。

“高み”を目指すというのなら、アビリティは度外視し、【ランクアップ】の到達を第一に考えることの方が建設的なのである。

「馬鹿なことを考えるなよ、アイズ。たとえ極めることができたとしても、我々が【ステイタス】の上限を超えることは、できん」

「……そう、だよね」

そして間違っても、基本アビリティ限界突破など、アイズ達が身を

置く世界ではありえない。
限界へと至る道はそれほどまでに険しく、限界という壁はどうしようもないほど分厚い。

「……」

アイズは沈黙する。己の意識をどこかへ飛ばしているかのように動きを止めていたと思うと――剣を抜いた。
鞘から現れる研ぎ澄まされた刀身が、纏わりつく熱気をヒュンと切り裂く。
アイズはリヴェリア達が見守る中、戦場の方向へと歩み出していった。

「……おい、リヴェリア」

「無駄だ。火がついてしまっている」

嘆息を抑え込んだリヴェリアはガレスに答える。
ベート達のもとへ進路を取るその足取りは確固としていた。金の髪を揺らし、金の瞳を静かに燃やす少女は、その美貌を氷面で覆う。
アイズ・ヴァレンシュタインのもう一つの顔。
誰かが言った、『戦姫』と。
頑なまでに力を求める少女は、ひたすら戦場に身を投じていく。

（……もっと、私は強くなれる）

ダンジョンの熱気に呟きがかき消される中、少女は提示された可能性へと飛び付く。
その脳裏には、限界を超えてみせた少年の後ろ姿が、今も焼き付いていた。

早朝。
日はまだ出ておらず、街を包む暗闇に青みがかかり始める時間帯。
僕はリューさんに朝稽古をつけてもらうため、『豊饒の女主人』に赴いていた。

「そうですか。無事にパーティメンバーを」

「厳密には、臨時のメンバーってことになっちゃうかもしれないですけど……」

お互いに武器を装備しながら向かい合う。
ミノタウロス戦の後しばらく朝稽古は中断されていたので、この目の前の光景も随分と久しぶりのように感じてしまう。
リューさんは前の時と同じシャツとショートパンツ姿で、自分が使う木の棒の具合を軽く確かめていた。
茶色に染まったショートヘアは、今は後ろに束ねられている。

「クラネルさん、その方は信頼に足る人物ですか？」

「え、っと……？」

「いえ、すいません、貴方を疑っているわけではないのですが、他の【ファミリア】の団員がパーティに加わるとなると、話も変わってきますので」

個人の問題以外にも組織同士の背景も留意しなければならない、とリューさんは空色の瞳を僕に向けて言った。
気を使ってくれていることはすぐにわかった。あの祝賀会の日、冒険者達に絡まれた僕を庇って立ち回りを演じたこの人のことだ、形式的とはいえ教え子のことを心配してくれているのだろう。
リューさんの真摯の気持ちを嬉しく思いながら、僕は返答した。

「相手の方は【ヘファイストス・ファミリア】の所属ですから、僕達の【ファミリア】と問題を起こすことはないと思います。神様達も仲が良いそうなんで」

【ヘファイストス・ファミリア】は多くの組織から個人単位まで契約を交わしている鍛冶屋の大御所だから、その意味でも十分信頼は預けられる。利害関係で結ばれる【ファミリア】の繋がりは本当に危ういものだと聞くけど、【ヘファイストス・ファミリア】はそういった【ファミリア】と一線を画していると言ってもいい。

ヴェルフさん個人に限っては勿論文句なんてあるわけない……のだけれど。

昨夜の神様の会話を思い出した僕は、少し考えてから、あえてリューさんの反応を窺うようにヴェルフさんの名前を出してみた。

何だか見事に嗅ぎ回っちゃってるなぁ……。

「クロッゾ……」

ヴェルフさんのフルネームを聞いたリューさんは動きを止めた。口の中で転がすようにその家名を呟く。

普段あまり目にできない彼女の反応に、少しどきっとする。

「な、何か、知ってるんですか……？」

「いえ、知っているというより……『クロッゾ』は、一部のエルフ達が無視できない名前です」

エ、エルフが？
思いもよらない角度からきた『クロッゾ』の情報に、僕は面食らってしまう。

「よかったら、教えてもらえませんか？　僕、ヴェルフさんのことを知りたくて……」

「……いいでしょう。と言っても、これは貴方の求めているようなものではないと思いますが」

一つ前置きをしてリューさんは語り始めた。

「『クロッゾの魔剣』についてはご存じだと思いますが、魔剣鍛冶師である彼等がどこに仕えていたかは知っていますか？」

「いえ、知りません」

「王国（ラキア）、という国です。諸国の中では、このオラリオの比較的近隣に位置します」

ラキア……オラリオに来る前、田舎にいた時もちょくちょく耳に挟んでいた気がする。
またあの国が戦争を始めたー、とか、今度はどこそこに遠征へ向かうらしいぞー、とか。

「ラキア自体は一柱の神が君臨している国家系の【ファミリア】です。クロッゾの一族は地位を得るために、彼の王権神授の国へ大量の『魔剣』を提供していました」

僕は相槌を打つ。

ここまでの大筋はリリが教えてくれた話の内容と共通している。

「戦の神を名乗る主神の神意もあって、ラキアは非常に好戦的な国です。現在もなお引き続いていますが、機会を見つけては他国、他都市との戦争に明け暮れています」

（本当にそうだったんだ……）

「そして何度と繰り返されてきた過去の戦争の中で、『クロッゾの魔剣』は、その威力を遺憾なく発揮してきました」

核心に迫ろうとする雰囲気を感じ取り、僕は息を凝らして話に聞き入った。

「一兵卒から魔剣を取り揃えた軍隊、というものをクラネルさんは想像できますか？」

「……もしかして」

「そうです。当時のラキアは魔剣を駆使し凄まじい火力を誇ってい

た。それこそ策を用意せずとも相手を根絶やしにしてしまうほどの、圧倒的火力です」

連戦連勝、無敗無敵、不敗神話。

当時、魔剣の恩恵にあずかっていたラキア軍の進撃はとどまることを知らなかったという。

「ラキアは“暴れ過ぎた”。魔剣の乱発により戦場はことごとく地形が変わり果て、草の根一本も残らない焦土と化したと聞きます。……そしてその戦火は、同胞（エルフ）が住んでいた森にも及んだ」

神様が下界に降臨してから人間（ヒューマン）と亜人達の交流は一層盛んになったけど、閉鎖的な思考を持つ人達はまだ現代にもいる。

その最たる例がエルフだ。あくまで一部らしいけれど、ちょっとプライドが高い彼等は他種族との交流を嫌い、里を作って森の奥深くに閉じこもっているらしい。

ということは、つまり……。

「追い出されたんですか、エルフが？　戦争のあおりを食らって、住んでいた森から？」

「正確には焼き払われました。里が、森そのものが」

里を、焼かれた。

その言葉に僕は息を呑んでしまう。

話の続きによると、里を失ったエルフ達はその後とある神様の助けを借りて……つまり『恩恵』を授かり【ファミリア】に所属することで、ラキアに攻め入ったそうだ。
その時には既に魔剣の力を失っていた王国は大損害を被り、エルフ達の報復は一先ず鳴りをひそめたという。
今日では、遺恨と言えるほどのものはもう残っていないそうだけど……。

「被害を悪戯に広めたのはあくまで武器を持った兵士達。振るわれる立場にあった魔剣、ひいてはクロッゾの一族を恨むのはお門違いなのでしょうが……やはり、割り切れない者達は多くいるようです」

「……」

「つまりそういう意味です、エルフにとってクロッゾが無視できない名というのは」

「……リューさんも、ですか？」

「いえ、私はそこまで」

あっさり言い切ってしまうリューさんに、僕は内心驚いた。
エルフは自分達に誇りを持っている者が多く、種族内の仲間意識はかなり強いと聞く。
リューさんは、これはあくまで過去のことで、また自分の里が直接焼き払われたわけではないから、と口にするけれど……その、何ていうか、意外っていう思いは隠せない。
シルさん達は勿論、会って間もない僕にだって気遣いを払ってくれ

る彼女は、身内をとても大切にしている人だと思っていたから。

「さて、話が長引いてしまいました。切り換えましょう」

「は、はいっ」

表情を改め臨戦態勢を作るリューさんに、僕も慌てて構えた。
腰を落とす彼女は、目の鋭さを崩さないまま口を開く。

「集中してください。貴方は【ランクアップ】を経た。身体能力は以前と雲泥の差の筈です……よって、その力を見極めるためにも、今日の私は力加減を誤るかもしれません」

「え〝っ」

「いきます」

さらりと死刑宣告を告げられた僕は、【ランクアップ】したにもかかわらず、これまで以上にボコボコにされた。

「い、痛い……」

ズキズキと悲鳴を上げる体を引きずりながら前に進む。
リューさんとの鍛錬を終えた僕は、やや遅刻気味にリリ達が待っている摩天楼（バベル）施設を目指している。
打たれ蹴られた体のあちこちが痛い。リューさんには安易に痛み止め……ポーションを使うなと厳命されているから、しばらく悶え苦しむ状態は続きそうだ。

（僕、強くなったんだよね……？）

ソレ本当かよ、と昨日の今日なのにそんなことを思ってしまう。
以前にも増してリューさんに歯が立たなかったような気がする（端にあの人が実力の一部を解禁しただけっていう話なんだろうけど）。
真っ白な脚が視界に飛び込んできたと思ったら、僕、横に吹っ飛んでたよ……。
本当に、慢心する暇がない。
上には上がいるのだと、つくづく再認識させられる。

「お、本当に来たな」

「……？」

足付きがよろよろとしている僕の耳に声が届く。
顔を上げると、真正面からヴェルフさんがこちらへやって来るところだった。
あれ、と僕は不思議に思う。集合場所は昨日と同じって伝えたんだけど……。
それとも、わざわざ迎えにきてくれたのかな？

「よ、ベル。おはよう」

「あ、おはようございます。ええっと……ヴェルフさん、どうしてここに？」

「ああ、リリスケの伝言だ。今日はダンジョン探索に付き合えないらしい」

「え！？」

何でも、ヴェルフさんが一人バベルで待っていると、リリが凄い勢いで飛んできて事情を説明に来たそうだ。最近忙しかったこともあり、下宿先のノームの店主さんが倒れてしまったらしい。
看病できる人が他にいないらしく、リリは頭を何度も下げ詫びてきたそうだった。
僕が西のメインストリートから来ることを聞いて、ヴェルフさんは

自分から伝えに来たとのこと。

「どうする、二人でダンジョンに行くか？」

「う、うーん……」

サポーターのリリがいないとなると、モンスターから得られる魔石やドロップアイテムの収拾効率が悪くなる。
かといってダンジョン探索を中止にすると、今日一日暇を持て余すことになるし……避けたいなぁ、それは。
こうなったら、ソロの時みたいに僕がバックパックを装備して、サポーターの仕事も兼ねてしまおうか？

「……ベル。何だったら、今日一日俺に時間を貸してくれないか？」

「はい？」

ヴェルフさんの申し出に僕は首を傾げる。
彼は口元を軽く緩めながら、手をぱっぱっと振るった。

「約束しただろう？　お前の装備、全部新調してやるってな」

「や、やっぱり僕、このライトアーマーだけで十分ですよ、ヴェルフさん……」

「遠慮するな。鍛冶師に二言はない」

ずんずん進んでいくヴェルフさんの背を、僕は弱り切った顔で追いかける。

一度は了承してしまったこととはいえ、これからタダで装備を提供する、と改めて言われると、申し訳ない気持ちがむくむく膨れ上がってきた。

断ろうとする僕を、けれどヴェルフさんはあっけらかんと「いいから任せとけ」の一点張り。黒の着流を揺らしながら堂々と大通りを進んでいく。

「ベル、わかった風な口きくけどな、お前はもっと欲深くなった方がいいと思うぞ？　冒険者なんて明日にはどうなってるかわからないんだ。もしもの時のためにも、今できる最高の準備ってやつを整えなきゃいけないんじゃないか？」

「うっ……」

一理、ある。僕は見事に喉を詰まらせた。
死んでしまったら何も意味がない、エイナさんにそう言われたばかりだ。
一人にしないって、神様とも約束した。
節度は必要なことかもしれないけど、一番大切なことだけは見誤っちゃいけない、のかな？
しばらく悩んでいた僕は、結局、ヴェルフさんの好意を受けることにした。
お願いしますと思い切って頭を下げると、ヴェルフさんは「おう」と笑ってみせる。

「それで、ヴェルフさん。今どこに向かおうとしてるんですか？」

「俺の『工房』だ」

工房？　と僕がおうむ返しすると、ヴェルフさんは説明してくれた。
『工房』というのは、鍛冶師としてのヴェルフさんの仕事部屋。鍛冶を行うための道具と設備が一通り揃っているらしく、ヴェルフさんはその場所で鉄を鍛え武具を製作しているらしい。
何でも【ファミリア】側から提供されたものらしく……構成員それぞれに個別の工房を与えられるのは、【ヘファイストス・ファミリア】の特権なのだそうだ。

「特権ってことは、別々の工房を与えられるのは普通じゃないんですか？」

「ないだろうな。共同の工房を設ける方が安く済むだろうし、作業

も効率的だ」

「じゃあ、どうして？」

「自分の技術を他の鍛冶師（なかま）に見せないためだ。俺の技は俺だけのものだ、ってな」

それは職人としての性……鍛冶師としてのプライドでもあるんだろうか？

【ファミリア】の仲間全員が競争相手。

そんなフレーズが真っ先に思い浮かんだ。

「陰気で偏屈とかは思わないでくれよ？　これはヘファイストス様の方針でもあるからな」

冗談めかしながらそう言って、ヴェルフさんは少し歩く速度を速めた。

僕達は今北東のメインストリートを進んでいる。こっちの方面には来たことがなかったなぁ、と僕は辺りを見回した。

大通りの両端に軒を連ねる大小の商店。酒場とかじゃなくて、工具等を取り扱うような専門的な店が目立つ。道を行く人々は様々な作業衣に身を包んでおり、いかにも職人風な姿。【ファミリア】構成員ではない、無所属（フリー）の市民労働者も多そうだった。

ギルド本部が面している北西のメインストリート、『冒険者通り』のような荒々しい賑やかさはではなく、雑多で騒がしい感じ？

そういえば、オラリオの利益の大本である魔石製品も、この北東の通りで造られているんだっけ？

工業区、という言葉が真っ先に浮かんだ。

「そこの角、曲がるぞ」

太い丸太を担ぎのっしのっし歩くドワーフに意識を引っ張られつつも、ヴェルフさんの後に続く。
大通りから外れた僕達は次第に細い道を移動するようになった。まだ早い時間の筈だけど、太陽は僕達の真上でぎんぎん輝いている。
高くそびえる石造りの市壁が視界の中でぐんぐんと迫ってきて、やがて都市の端に辿り着こうかというところで、ヴェルフさんは足を止めた。

「わぁ……」

細い路地を何度も曲がったところに、それはあった。
小ぢんまりとした、平屋造りの家屋。
所々黒ずんでいて汚れが結構目立つけど、まさに鍛冶屋！　という雰囲気を醸し出している。
屋根の上には煙突が一本伸びていて、少し愛嬌みたいなものを感じてしまった。

「知ってるかもしれないが、ここら辺一帯は職人連中の縄張りでな。こんな工房や工場はざらにある。俺達のホームもすぐ近くだ」

勿論そんなことを知らなかった僕は、「そ、そうですかー」と言葉を濁しながら周囲を観察する。
ヴェルフさんの工房はメインストリートから離れた区画にあった。僕達のホームである下水道の隠し部屋、その入口のある裏路地と風景が似ている。周囲はちょっと薄暗い感じ。
耳を澄まさなくても何かを打つ音……金属の打撃音が周りから響いてきて、鍛冶師の存在感をすぐ側に感じ取る。
何でも、この工業地帯を利用して【ヘファイストス・ファミリア】は団員のための工房をいくつも用意しているらしい。
管理はあくまで自己責任らしいけど……太っ腹だよなぁ。

「突っ立ってないで、そろそろ入ろうぜ？」

「あ、はい」

誘われた僕は、とうとうヴェルフさんの工房の戸をくぐった。お邪魔しますと小声で言いながら、部屋の中に足を踏み入れる。
最初に感じたのは強い鉄の匂い。ヴェルフさんが鎧戸を開けるとたちまち明るくなり、暗かった室内の全貌があらわになる。
無数の鉄器が壁に吊るされていた。鎚とか、鋏とか、とにかく一杯。
今まで目にすることのなかった道具ばかりだ。
隅の方には大きな炉があって、部屋の中央寄りには作業台……確か、鉄床だったっけ？　とにかくテーブル大の鋳鉄製の板がある。小さい種類のものもすぐ近くに置いてあった。
仕切りも何もない一室の中に、鍛冶のための道具と設備がところ狭しと並んでいる光景。
本物の、鍛冶師の仕事場だ。

「悪いな、汚い場所で。少しだけ我慢してくれないか？」

「い、いえっ、大丈夫です！」

というか、もっと見学したい気も……。僕は興奮を覚えながら首を振った。

苦笑するヴェルフさんは椅子を持って、ほれ、と勧めてくれる。

「取りあえず、採寸だけ付き合ってくれ。後は俺が勝手にやる」

「採寸、ですか？」

「ああ。オーダメイドと似たようなもんなんだ、どうせならお前専用の装備にした方がいいだろ」

武器屋に出す装備品なんかは、不特定多数の冒険者を対象にしているのでサイズが微妙に噛み合わないものが多い。

誤差は冒険者達の方でも調整できるけど、本来ならその者に合った武器と防具を用意するのが理想なのだそうだ。

「俺は装靴を作ろうと思ってるんだが、ベルは何か希望はあるか？」

「え？　ん、と……」

「装備品にこだわりがあるんだったらそれでも構わない。盾がない

と気が済まない、とかな。……そうだな、欲しいものがあったら、何でも言ってくれ」

僕に背を向けながら、ヴェルフさんは壁に吊るされた色々な道具を選んでは手に取る。

ガチャガチャと鳴る音を聞きながら、僕は椅子の上で考え込んだ。

僕のこだわりって言ったら、それこそ短刀と軽装くらい？　あまりずうずうしい真似はしたくないけど、いざ新しい装備を考えようとしても、ぱっと思いつくものがない。

うーん……盾じゃないけど、軽量のプロテクターなんかまた使ってみようかな？

（あ、大剣……）

ふと部屋の隅、壁に作り付けされた木棚が目に入った。数点の武器が立てかけられている。きっとヴェルフさんの過去の作品だろう。

その中にあった一際大きい武器……大剣を見て、僕はミノタウロスと戦った時のことを思い出した。

「……ヴェルフさん、これは、使っちゃ駄目ですか？」

引き寄せられるように棚へ近付いて、じっくりと抜き身の大剣を見つめてみる。

飾り毛はない。ただ武器としての機能が、その銀の刃の腹にはっきりと浮かび上がっている。

僕の使わせてもらっている防具にも言えることだけど、“ヴェルフさんらしい”作りだ。

「駄目、ってことはないが……それ、店の方から返された売れ残りだぞ？」

「でも僕、これ使ってみたいです」

手に取ってみていいか尋ねると、戸惑っているヴェルフさんはゆっくり頷いた。

トッ、と引っ張り上げるようにして大剣を宙に浮かせ、柄を掴む。

下を向く刃を回転させて天井に軽くかざすと、きらりと銀の光沢がこぼれた。僕は思わず笑みを浮かべる。

そのまま軽く振ってみた。やっぱりすごい重量に、短刀を扱うようには上手くいかない。

「……」

「……？　どうしたんですか？」

ぎこちない素振りを二度ほど試したところで、ヴェルフさんが動きを止めていることに気付いた。

声をかけると、僕を見つめていたヴェルフさんは口端を緩める。

「お前は、魔剣を欲しがらないんだな」

にっ、と素の笑顔が僕に向けられた。

「え？」

「なに、魔剣じゃなくて売れ残りの剣を要求されるなんて、流石に思ってもみなかったっていう話だ」

どこか嬉しそうに見えるヴェルフさんを前にして、僕は「あ」と呟く。

そうだ、『クロッゾの魔剣』……この工房に気を取られっぱなしで、今の今まで忘れてた。途端にそわそわし出す。

僕がどう反応しようか困っていると、ヴェルフさんは意地悪そうな笑みを浮かべる。

「で、何て聞いたんだ？　お前んとこの主神……ヘスティア様から、俺のことを」

「！？」

「バベルで働いている従業員が教えてくれたんだよ。店で雇われてる幼女の神が、俺のことを調べて回ってたってな」

丁寧に説明してくれヴェルフさんの前で、僕の顔色は激しく悪くなった。

こそこそ嗅ぎ回るような真似してたの、筒抜けちゃってる！？

「す、すいませんっ！　神様は悪気があったわけじゃなくて、その、僕を心配してヴェルフさんのことを調べていたというかっ……つまり僕のせいというかっ！？」

「別に構わないぞ。自分のところの団員が、他所の【ファミリア】の奴とパーティを組もうとしてるんだ。気になりもするだろ」

逆にいい主神様じゃないか、とヴェルフさんはてんで気にしてないように言った。
僕はほっと安堵の息をついてしまう。

「ベルが俺のことを知って態度を変えるか……ちょっと気になってな。悪い、試すような真似して」

ヴェルフさんは申し訳なさそうに苦笑を浮かべた。
……つまり、僕の口から『魔剣』という言葉が出てくるかどうか、見極めてたってこと？
魔剣鍛冶師の家系であるヴェルフさんを利用して、『魔剣』を手に入れてやろう、って？
クロッゾっていう家名は有名みたいだし、神経質になっちゃうものなのかな。
ヴェルフさんの言葉の裏側を汲み取りながら、僕は少し不思議に思った。

「脱線したな、話戻すぞ。大剣以外に、何か欲しいものはないのか？」

「あ、はい……えーっと」

聞かれてしまったので、再び考える。
どうせだから短剣を頼んでみようかなと思いながら、僕はヴェルフさんの作品も参考にしようとまた木棚の方を見やった。
ヴェルフさんに背を向ける格好。

「……なぁ、ベル。気になってたんだが、それってドロップアイテムか？」

「え？　あ」

ヴェルフさんが指を向けた僕の腰には、《神様のナイフ》と《短刀》、そして『ミノタウロスの角』が差さっていた。

「これは……そうですね。ミノタウロスのドロップアイテムなんですけど……何だか、手放せなくなっちゃって」

所々が紅色に染まっている鋭い一角。
お守りなんて言うつもりはないけど、簡単に売り払っちゃうのも、間違っているような気がしたのだ。

……あのモンスターを、あの出来事を、僕は蔑ろにしたくないのかもしれない。少なくとも、こうして形に残そうとするくらいには。
こんなのを持ってても、使い道はないんだけど……。

「……何なら、それを使うか？」

「えっ？」

「その角を材料にして、装備品を作成するんだ。ミノタウロスから取れるドロップアイテムは、何だって武具に活用できるからな」

僕は目を見開いた。
そうか！　直接契約――専属の鍛冶師がいてくれるんだ、ドロップアイテムを渡して依頼すれば武器を作ってもらえる！
ヴェルフさんの提案は天啓のように聞こえた。これなら手放すことにもならないし、せっかくのドロップアイテムを持ち腐れにすることもない。
僕は勢いよく頭を下げた。

「お、お願いします！」

「決まりだな」

材料面の方針が一つ決まり、僕はヴェルフさんに『ミノタウロスの角』を渡した。
ヴェルフさんはドロップアイテムをじっと見つめた後、両手を用い

て調べ出す。
叩いたり、持ち上げてみたり。

「……『ミノタウロスの角』って、赤かったか？」

「はい？」

「いや、何でもない。……そうだな、破損は酷くない、硬度も並以上だ。これなら研磨して形状を整えるだけで、十分武器として使えると思うが……」

『ミノタウロスの角』を熱心に観察するヴェルフさん。
眉間に力を入れながらぶつぶつと呟きを落とし、ややあって僕へと顔を上げた。

「ベル。これの製造工程、俺に任せてもらっていいか？　少し手間をかけたい」

「ど、どうぞ。鍛冶師でもない僕が、意見できることなんてないですし……」

「すまん、助かる。それでだな、このドロップアイテムだけで武具を作るとしたら、できるものは限られてくるんだが……」

短剣一本か、短刀二本。
これがヴェルフさんの判断した、『ミノタウロスの角』から作成で

きるメニューらしい。
短剣の場合はかなり薄刃になるとのことで、ヴェルフさんは後者の方を勧めてくる。
《神様のナイフ》はともかく、ギルドの支給品である《短刀》は……流石に、もう替え時だと僕自身思う。武器の位置付けとしては最低ランクの筈で、これからの戦闘、つまり中層のモンスター相手に通用するかどうか疑わしい。
ちょうどいい機会なのかもしれない。この二ヶ月間、慣れ親しんだ武器を引退させることに僕は決めた。
ヴェルフさんに短刀の作成を依頼する。

「よし、わかった。取りあえず今回は短刀一本だけ打っておく。余った材料は、そうだな、俺が『鍛治』のアビリティを取った後のお楽しみにでもしといてくれ」

「あはは……」

得意顔をわざと作るヴェルフさんに、眉を落としながら笑う。
時間を待たず僕達は採寸に取りかかった。バケツに入れた何種類かの道具を交換しながら、ヴェルフさんは僕の体の寸法を測っていく。
靴を脱いで足の形を具体的に取る作業が、何だか印象的だった。

「これが終わったら、もう帰ってくれていいぞ」

「あの、ヴェルフさん、それなんですけど……」

「ん？」

「ヴェルフさんが作業をやってるところ、見てちゃ駄目ですかね……？」

武器の柄を握る手の平を確かめているヴェルフさんに、おずおずと切り出した。

鍛冶という作業を拝見したい、というのが僕の正直な本音だった。

こんな工房（とこころ）に連れ込まれてしまって、幼心めいた好奇心は存分に刺激されちゃってる。まだ肩の辺りからうずうずしてくるし、この後どんな光景が広がるのか気になってしょうがない。

思ってることを誤魔化さずに話すと、ヴェルフさんは少し困ったように笑いながら「変なやつだな」と口にして、見学することを許可してくれた。

作業の邪魔はしないと固く約束した僕は、興奮のせいか、ついつい頬を熱くさせてしまった。

「部屋は相当暑くなるからな？　防具は外しておいた方がいいぞ」

「え、あ、はい」

言葉の意味を捉えきれないまま、素直に従っておく。脱着した軽装を僕は部屋の隅に置かせてもらった。

インナーとハーフパンツ一枚でいると、ヴェルフさんは備え付けられている炉の方へと歩み出して……そして炉の準備を始めた。

「な、何をするんですかっ？」

「ドロップアイテムを加熱する」

「モンスターの角を、焼いちゃうんですか！？」

作業の邪魔はしないと言った側から、僕は大声を張り上げてしまった。

動物の角って、確か骨と似たようなものじゃなかった？　いや、よくわからないんだけど……とにかく、焼いちゃったらボロボロになるんじゃあ……？

僕が疑問に思ってると、ヴェルフさんは笑いながら説明してくれた。

「モンスターの爪や角の中には、金属の性質を持つものがあるんだ」

「金属……？」

「ああ。『アダマンタイト』って聞いたことないか？」

『アダマンタイト』……耳にしたことがあるような、ないような。

レアメタルっていうイメージが漠然と頭の中にある……。

「アダマンタイトはダンジョンでしか取れない鉱物でな、武器の素材としては一級品だ。硬度が半端じゃあない」

「ダ、ダンジョンで取れるんですか？」

「ああ、モンスターも出てくるあの壁面からぽろりって感じで、本当に稀にな。上層でも出てきたなんて話も聞くが、持ち帰られるのはもっぱら下層や深層のものだな」

ダンジョンでしか取れない、つまりオラリオではないと手に入らない。

魔石と同じくしてアダマンタイトはこの迷宮都市の特産物らしく、しかも中々発見しにくい鉱物ということで、その価値は魔石の比ではないらしい。

「……ひょっとして、ダンジョンの中で産まれるモンスターも、そのアダマンタイトの性質を……？」

「おっ、察しがいいな。その通りだ。まぁ、塊で出てくるオリジナルの鉱石と比べれば、強度なんかは格段に劣化してるけどな」

同じダンジョンから“産まれる”のなら、モンスターの組成にその金属の性質が反映されるのはおかしなことじゃないのかもしれない。

あくまで一部のモンスターらしいけど、牙や爪といったいわゆる“武器的”な体の各部分に金属属性（アダマント）が現れると、ヴェルフさんは聞かせてくれた。

……そういえば、このミノタウロスの角に、あんな分厚い大剣が折られたんだっけ。

「ミノタウロスの角も金属質的な側面を持ってる。熱を加えれば、そのまま加工もできるようになるってわけだ」

ヴェルフさんは作業の手を止めずにそう締めくくった。
なるほどと僕は納得する。要は、金属と同質の『ミノタウロスの角』を熱して、加工……鍛造をするための前段階に持っていくわけだ。
加熱され赤い飴のように柔らかくなった鉄塊の絵が、頭の上に浮かぶ。
あたかも鉄をそうするように、ヴェルフさんはこれからドロップアイテムを鍛練するのだろう。

「悪い、ベル。鎧戸と、あとドアも全開で開けてくれないか？」

「は、はいっ」

言われるまま閉じていた鎧戸全てと扉を開ける。視線を戻すと、ヴェルフさんは炉に火種を投じるところだった。
魔石を利用した発火剤……余りにも作用が激しいため、確か一般人には非売品だった筈。

「アダマンタイトもそうだが、コイツの角はちょっとの熱じゃ加工できないんだ」

炉に視線を縫い付けたままヴェルフさんはそう口にする。
あっという間に大型の炉の中は火と熱に猛り始め、部屋全体の温度をはね上げる。炉から十分に離れている僕の額にも汗が滲み出していた。防具を外しとけって、こういうことか。

それからヴェルフさんは炉の調整に没頭した。僕も椅子に座らせてもらいながらその姿を見守る。

時刻はまだ正午にほど遠い。

リューさんとの朝稽古を終えて一時間も経っていない筈だから、今頃バベルではダンジョン探索に向かう冒険者達が賑わい出していることだろう。冒険者とほぼ無縁のこの区画では、それを確認する術はないけれど。

屋内も、鎧戸から覗く外の景色も、裏路地特有の薄暗さが目立つ中。空いている口を段々と真っ赤に染めあげていく炉は、どこか神秘的だった。

ヴェルフさんの真剣な横顔を、火が静かに燃え照らしている。

「何か、聞きたそうな顔してるな」

「へっ!?」

「いいぞ、何でも聞いてくれて。契約まで結んだ相手に、隠し事はしたくない」

しばらく時間が経った時だった。一段落したのか、ヴェルフさんは炉から顔を上げる。

突然の言葉に、いや図星を指されたことに、僕は目を白黒させた。聞きたい、というよりソレはずっと気になっていたことだ。ヴェルフさんの話を耳にするうちに小さな疑問は積もっていって、気を抜けば口からぽろりとこぼれ出てしまいそうになっている。こうして、本人に感付かれてしまったくらい。

ヴェルフさんの纏う空気は柔らかかった。軽く笑みを浮かべていて、

こちらを見る目にも信頼の色が映っている……ような気がする。
僕は唾を浅く飲み込んで、一歩、ヴェルフさんの懐に踏み込んでみることにした。

「ヴェルフさんは、どうして、魔剣を打とうとしないんですか？」

僕というお客を得て喜んでいたこの人の姿を思い出す。
魔剣を打ちさえすればそんなお客も、お金も、思うがまま引き寄せることができるだろう。
富や名声を容易くかき集められる魔法の武器。クロッゾの、真骨頂。
ヴェルフさんが魔剣を作ろうとしない理由を、僕は尋ねた。

「まぁ、理由は色々あるんだが……」

苦笑いを浮かべながら、ヴェルフさんは一旦炉に視線を戻す。

「俺、魔剣は嫌いなんだ」

そして魔剣に対して、はっきりと拒絶の意を示した。

「実はな、作品が売れないとは言ったが、客は腐るほどいたんだ。
……いや、今でもいるか」

「え……」

「腹が立つくらい簡単な話だ。店に並んだ俺の武具を見つけて、『クロッゾ』のサインを見て、この工房に駆け込んでくる。『魔剣を作ってくれ！』ってな」

足元の道具を操り、ヴェルフさんは炉に空気を送りながら言葉を続けた。

「“俺の作品”は放り出して、魔剣、魔剣、魔剣……お前以外のやつはそれしか口にしなかった。いや、自分の腕が未熟だってことは重々承知しているんだが……でも、なぁ？　辟易もする」

真っ赤な炎を凝視するヴェルフさんの口元に、少しげんなりした皺ができる。

海を焼き払ったとまで言われる、恐らくは至高の魔剣。求められたのはその『クロッゾの魔剣』で、“ヴェルフさんの作品”ではない。

ここを尋ねてきた客は、誰も彼もヴェルフさん自身には目を向けず、そのクロッゾの血に価値を見出していた。

魔剣、目当て。

「それじゃあ、ヴェルフさんは……ええっと、その」

「まぁ、グレたな。このクソッタレどもが、って。誰がお前等の依頼を聞くかって、魔剣目的の輩は突っぱねてる」

「は、ははは……」

言い淀んだ僕の言葉を引き継いだヴェルフさんに空笑いしつつ、これはこれで一応納得できた。

自分の作品を評価しようとしない人達への反発心。いや、自分の中に流れるクロッゾの血への反抗心、かな？

要はサラブレッドなんてはやし立てられて、自分自身の力を認められないどころか、見向きもされてないってことだから。

納得はできる。できるけど……でも。

「あの……それだけ、ですか？」

まだ、何かあるような気がした。

魔剣が嫌いと告げたこの人の言葉には、他に深い意味があるのではないのかと。

「……」

返答はすぐには返ってこなかった。

炉から視線を放したヴェルフさんは立ち上がり、『ミノタウロスの角』が置いてある台に歩み寄る。鑿（のみ）のような道具と金鎚を両手に、ドロップアイテムの切断作業に取りかかった。けたたましい打撃音。耳を聾する音響が五十に達しようかというところで、『ミノタウロスの角』はようやく折れた。

半分に分かれたうちの比較的短い方を持って、ヴェルフさんは再び

炉の前に座る。

「クロッゾの一族が何で魔剣を製造できたか、知ってるか？」

遠目からでも特別製とわかる鋼色の鋏に、打ち砕いた角の塊を挟んで、十分に熱せられた炉の中に突っ込む。

既に作業へのめり込んでいるヴェルフさんを眺めながら、僕は「いえ……」とだけ返した。

「もともと、クロッゾは一人の男の名前なんだ。後から子孫達が家名として使うようになった。俺達はその男を初代って呼んでる。神が下界に顕現する前の話だ」

神様がまだ地上に降りていなかった時代を、僕達は『古代』と呼んでいる。数千年も前の話だ。

触れられる『クロッゾ』の起源に、そんな昔から、と僕は静かに驚く。

「初代は売れない鍛冶師だったらしい。勿論魔剣なんて打てなかった。が、初代が『クロッゾ』繁栄の基礎を築いたのは確かだ」

一拍。

「初代は、モンスターに襲われていたある種族を、体を張って助け出した」

「ある種族、って……」

「“精霊”だ」

――なっ、と僕の口はひとりでに声を床に落としていた。
驚愕を顔に貼りつける僕を尻目に、ヴェルフさんは淡々と話を続ける。

「瀕死の重傷を負った初代を、助けられた精霊は何とか生かそうとしたらしい。体の一部を切って、自分の血を初代に分け与えたんだ」

「そ、それじゃあ、『クロッゾ』にはっ……？」

「ああ。精霊の血が流れてる」

――精霊。
ニンフ、スピリット、エレメンタル、ジン……他にも様々な呼称が存在する下界の住人。他の種族と比べてその数は極めて少ない、神秘的存在。
『最も神に愛された子供』。
『神の分身』。
多くの人間（ヒューマン）や亜人達から色々言われているけど、はっきりしていることは、精霊は神様達に最も“近い”種族ということだ。

「精霊の血を飲んだ初代は何もなかったかのように復活した。文字通り、奇跡の力でな。しかもそれ以降、初代はヒューマンでありながら魔法を行使できるようになったらしい。……魔剣も打てるようになった」

精霊のポテンシャルは他の種族を圧倒する。
エルフと並ぶ代表的な魔法種（マジックユーザー）。劫火を生めば嵐も呼ぶ、森の中に湖を作り出すこともできれば、金銀宝石も練成できる。
その力は半ば神様のものと等しいと言っていいかもしれない。
つまり、“奇跡”を引き起こすのだ。

「もしかして、クロッゾって英雄の一族なんですか……？」

「ああ、それはない。初代は良くも悪くも、平凡に輪をかけた庶民だったらしいからな」

精霊は多くの物語、とりわけ英雄譚の中で度々姿を現す（英雄譚の多くはただの創作ではなく、事実に基づいた“原型”がある。僕は祖父からそう聞いた）。
精霊達はその奇跡の力をもって英雄達を導き、時には力を貸し、彼等に課せられた使命達成を後押しするのだ。
具体的には、今ヴェルフさんの話に出てきたように魔法を授けたり、強力な武器を与えたりする。自分自身の体を武器そのものに変えた精霊なんていうのもいた筈だ。
精霊の力は英雄達の偉業と密接に関係し、そして大きく貢献している。

神様達がまだ地上にいない頃だったら、まさに彼等の恩寵が、『神の恩恵』の代理板だったと言っていいだろう。

「寿命まで伸びた初代の血は、精霊の恩恵もあってか、ン千年も経った現代でもまだしぶとく続いている。全てを“視ていた”神の証言なんかもあってな、俺達が初代の正当な子孫であることは、間違いないらしい」

神様が下界に降臨してからは、雲の上の存在だった精霊との交流も例によって始まっている。といっても精霊は気まぐれというか、自我っていうものが薄いみたいで、一部を除いて全く進んでないらしいけど。

ノームなんかはその中でも上手く僕達に溶け込んでいる。外見が押し並べて老人である彼等は、貴重な金属や宝石を生成したり器用な手先を用いて、僕達の生活を地味に支えているのだ。

【ステイタス】の流行により精霊達のありがたみは以前より薄れつつあるけど、『神秘的』な傾向が強い彼等の存在は、未だ人間や亜人の、色んな意味で憧れであることは間違いない。

「いくら血を受け継いでいるとはいえ、初代の子孫に精霊の力が表面化することはなかったんだが……数代前の『クロッゾ』が神に恩恵を授かった時、それは“発現”した」

「……スキル？」

「ああ。魔剣を製造するためだけのな。『クロッゾ』の一族の多くが、無条件でこれと同じスキルを手にした」

【ステイタス】を切っかけにして、『クロッゾ』という系譜の中に眠っていた“可能性”は覚醒した。
時代を越えて、精霊の力が蘇った瞬間。

「それからはリリスケが言っていた通りだ。従来のものより遥かに強力だった魔剣を、クロッゾは王家に売り込みにいった」

王国の一員になったのもその時だとヴェルフさんは言う。
まとめると、初代クロッゾは与えられた精霊の力によって、『神の恩恵』を授かる以前より魔剣を作ることができた。
そして『クロッゾ』が魔剣鍛冶の一族と呼ばれていたのは……血縁者が共通して強力な魔剣を打てたのは、その体に精霊の血を宿していたため。
クロッゾ繁栄の基礎、それは“血”という名の素質だった。

「地位を得た後は好き放題だったらしいぜ。一族が作る魔剣のおかげで国は戦争で敵知らず、称賛の声と王家からの褒美は引っ切りなし。毎日美味い飯と酒に溺れ……鍛冶師が貴族の真似をして、何のつもりだったんだろうな」

自嘲にも聞こえる言葉を吐きながら、ヴェルフさんは炉の燃え盛る炎を見据え続けた。
話が途切れる。長い間、火の鳴く音だけが工房の中に響き渡っていく。

「『クロッゾ』は思い上がった。体に流れている血の存在も忘れ、魔剣の力は自分達の力だと錯覚して……私利私欲のためだけに、魔剣を安易に量産し続けた」

――だから“呪われた”。

ヴェルフさんは、はっきりとそう言った。

「クロッゾが仕えていた王家……王国は戦争中に暴れ回って、里を焼かれたエルフ達から恨みを買ったんだが……」

「し、知ってます」

「恨みを買ったのはエルフだけじゃなかった。初代に血を与えた、精霊達からもだ」

「!?」

「精霊は自然豊かな土地に好んで住み着く。魔剣の力で山は抉れ、河川は干からび、森は燃えて……エルフが里を失ったように、精霊達も居場所を追われたんだろうな」

リューさんに聞かせてもらった、エルフとの因縁。

恩を仇で返されるような形で、精霊達もまた『クロッゾの魔剣』から大切なものを奪われていたのか。

「エルフ達の怒りの矛先は国に。そして精霊達の怒りは、魔剣と、『クロッゾ』に向けられた」

「……」

「とある戦争の際、戦場に出ていた全ての魔剣が、前触れなく“破砕”してな。使用する前に、木端微塵だ。勿論魔剣に頼り切りだった王国軍はその戦争に惨敗した」

「それが、精霊達の仕業なんですか？」

「きっとな。同時期に『クロッゾ』も魔剣を一切作れなくなってる。一族は精霊達に呪われたんだ」

呪われたって、そういうことなの……？
僕は知らないうちに肩を緊張させていた。

「王国をその後も連戦連敗。使い物にならなくなった『クロッゾ』は敗戦の責任も負わされ、地位を剥奪された。没落貴族ってやつだ。俺が生まれた頃には、『クロッゾ』は完全に廃れ切っていた」

天国から地獄。因果応報って言ったらそれまでだけど……。
これが現在凋落している、『クロッゾ』の一族にまつわる話。
あれ、でも、待てよ……？

「あの、『クロッゾ』は魔剣が作れなくなったんですよね？　でも、ヴェルフさんは魔剣が打てるって……？」

「ああ。打てるな、俺は。何故か知らんが」

呪いの効果が切れたのか。精霊達の気が済んだのか。それとも、“ヴェルフさんだから”なのか。

理由ははっきりしないけど、現在ヴェルフさんだけが、一族の中で唯一『クロッゾの魔剣』を作り出すことができるらしい。

でもヴェルフさんは、クロッゾの家の制止を振り切って生まれ故郷を飛び出し……当てもなく放浪していたところを、ヘファイストス様に拾われたのだと言う。

「家を再興させることが目的だったとはいえ、鍛冶の技術を叩き込んでくれた親父達には感謝してる。武具を自分の手で作り出す鍛冶の喜びを、俺は知ることができたからな」

体感温度が一段と上がったような気がする。既に正午は過ぎたのだろうか。

時間の感覚がもはや曖昧になってる中、ヴェルフさんはドロップアイテムを炉の中から取り出し、台の上に移した。

原型は残しつつ、『ミノタウロスの角』は今にも溶け出すような真っ赤色に染まっていた。

「嫌いじゃなかったんだがな。煤まみれのボロ臭い工房の中で、親父や爺の隣に陣取って、助手紛いのことをやらせてもらうのは」

始めて鉄を打たせてもらった感覚も覚えてる、という声がこぼれた。
どこか、湿った響きを伴って。
やがてヴェルフさんはお粗末な腰かけに座り、鋏で『ミノタウロスの角』をしっかりと固定する。

「けど……俺に素質があるとわかると、親父たちは魔剣を作れと強要した。『クロッゾ』の栄華を取り戻すってな」

空いた片手にハンマーを持ち、一つ呼吸を置く。
次には眦を吊り上げ、ヴェルフさんは口を置真一文字に引き結んだ形相を作った。
始めて見る、ヴェルフさんの鍛冶師の顔。僕の息が一瞬止まる。

「……王家に取り入るための“道具”を打てと、そう抜かしやがった」

そしてヴェルフさんは、握ったハンマーを、一気に振り下ろした。

「違うだろ、そうじゃないだろ、武器ってやつは」

凄まじい金属の打撃音。鍛錬の開始。
想いを叩きつけかのように、ヴェルフさんは鎚を打ちつける。

「政治の道具でも、成り上がるための手段でもない。武器は、使い手の半身だ」

小振りの振り下ろしながら、その衝撃音はびっくりするほど甲高く大きい。
アビリティの『力』の補正によって、その一撃一撃は常人離れした威力を秘めている。

「使い手がたった一人で、どんな窮地に立たされたとしても、武器だけは裏切っちゃいけない。柄を掴まれた時から、そいつと使い手は一心同体なんだ」

力の大小を使い分けているのか、鎚の振るい方は一々モーションが異なっている。
時には金属を伸ばすように大きく、時には形を整えるように微細に。
相槌も必要とせず、赤い金属の塊は見る見るうちにその姿形を変えていった。

「鍛冶師（おれたち）は、そんな作品を送り出さなきゃいけない」

注がれるのは武器に対する情熱。まるでヴェルフさん自身が炎のような。
真摯過ぎるくらいの、ひた向きな想い。

「極限まで熱い熱で、極限まで鉄とやり合う。俺達が鉄と正面から向き合って、やっと一つの武器ができるんだ。片手間で片付けてどうする、血で剣を作り上げてどうする、鍛冶師の本懐を忘れて、どうする？」

一心不乱に鉄を打つ。
鬼気迫るように、何かに取りつかれたかのように。
ヴェルフさんは、その赤く燃える金属の奥に、何を見ているのか。

「俺は魔剣が嫌いだ。使い手を残して絶対に砕けていく」

散る火花。真っ赤な閃光。
ハンマーがドロップアイテムに命中する度、焼けた細かい金属片が飛ぶ。冒険者の防具と遜色ないのか、ヴェルフさんの着ている黒の着流は、赤熱の粒をはね返しては床に落とす。
今、気付いた。
この人のボロ衣のようなその着流は作業衣で。
その焼けて黒ずんだ色と襤褸のような外見は、数えることも億劫なほど鍛冶作業に徹してきた、証なのだと。

「俺は、魔剣が大っ嫌いだ。あれの力は人を腐らせる。使い手の矜持も、鍛冶師の誇りも、何もかも。少なくとも、俺達（クロッゾ）の打つ剣はそうだ」

打ち手側である鍛冶一族も堕落させた、強力無比な魔剣。
『呪われた魔剣鍛冶師』。
この言葉の本当の意味が、わかったような気がした。

「俺は魔剣を打たない。打ったとしても、それは売らねえ」

頬を伝い滴る汗も放置して、ヴェルフさんは鎚を振り上げる。
鉄を打つ音は響き続けた。途切れることのない熱く激しい旋律が狭い工房の中を埋めつくす。
その姿を見せつけられる僕も、流れ出る汗を拭うことを忘れていた。
この部屋に入った時感じた、鉄と炭の匂い。
鼻を塞ぎたくなるほど感じたあの強い香りが、今は、こんなにも遠い。
ヴェルフさんは、目の前にある“鉄”だけを見つめ、手に持った鎚を打ち重ねていった。

鎧戸から見える外の光景が、日の光の色から宵闇の色に染まり始め、すっかり暗くなり出した頃。
ようやく、ヴェルフさんの作業は終わりを迎えた。

「……完成だ」

「うわ……！」

工房の奥から出てきたヴェルフさんは、両手に持った浅い箱を台の上に置く。
僕が身を乗り出して覗き込むと、箱の中には、一本の短刀が紅緋色に輝いていた。
透明感のある鋭い刀身。リーチは《神様のナイフ》よりちょっと短いくらい。『ミノタウロスの角』の面影がその鮮やかな色に宿っている。
柄は至ってシンプル。刃の色に近い赤銅色で、多分、僕の手の平のサイズに合うよう採寸されている。

「こ、これっ、ひょっとしなくても、かなりすごいんじゃあ……！？」

「材料（もの）が良かったんだろうな。俺の今までの作品の中では、間違いなく最高のできだ」

気持ち良さそうな疲労を滲ませながら、ヴェルフさんはにっと両目

を瞑って笑った。
謙遜してるけど、やっぱりヴェルフさん自身もいい仕事ができたと実感しているんだろう。じゃなかったら「最高」なんて言葉、出てこないと思うから。
僕はヴェルフさんに、落ち着きなく何度も頭を下げてしまった。

「あー、すまん。鞘は用意する暇がなかった。明日中には作っておくから、今日は適当なやつで間に合わせてもらっていいか？」

「だ、大丈夫ですっ。というか、別に明日じゃなくても……今日はもう遅いですし」

「いや、こういうのは“熱い”うちに全部やった方がいい」

鉄だってそうだろ、とヴェルフさんは右の肩を回しながら言う。
鍛冶師みたいだ、とそんなことを思って、いや本物の鍛冶師だよ、と自分の思考に苦笑する。
職人っていう人達はみんなヴェルフさんみたいなのかなと、微笑みながらぼんやり思った。

「よし。それじゃあ、名前もつけるか」

そんな僕が微笑ましそうにしている横で、ヴェルフさんはずいっと頭を伸ばし、紅緋色の短刀を見下ろす。
顎に添えられた右手に、すっと細められる瞳。ありえないほどの集中力を発揮し出したヴェルフさんは、ゆっくりと口を開いた。

「牛若丸……いや、牛肉斬（ミノたん）」

「いやいやいやいやいやいやいやいやいやっ！？　最初のやつでいいじゃないですか！？　悩む必要皆無ですよ！？」

「ん？　ベルは牛若丸推しか？」

「ソレ一択決まりですっ！！」

血相を激変させる僕はヴェルフさんに唾を飛ばす勢いで吠えた。

今更だけどこの人のネーミングセンスは奇抜過ぎだ！　神様が授けてくれる称号と比べたって斜め上にぶっ飛じゃってる！

勘弁してくださいという僕の必死の説得により、ヴェルフさんは「そうか……」とかなり残念そうな声音とともに、渋々了承してくれた。

「じゃあ、ほれ」

「はい。本当にありがとうございます、ヴェルフさん」

他の作品の鞘を代用して、ヴェルフさんは片手で短刀を差し出してくる。

最後にもう一度お礼を口にしてから、僕が頂こうと手を伸ばすと…

…ひょい、と短刀を上に持ち上げられた。

すかっと空振りした手に、僕は「へっ？」と間抜けな顔を作る。

「それだ」

「は、はい？」

「その堅苦しい言い方、止めようぜ」

かけられた言葉に、僕は目を見開く。

「会ってまだ全然経っちゃいないし、信頼丸ごと預けろとは言わない。ただ、リリスケみたいに俺のことも、“それっぽく”呼んでくれよ」

仲間みたいにな、とヴェルフさんは……いや、ヴェルフは笑った。

僕は、笑みを滲ませながら答える。

「わかった、ヴェルフ」

差し出された短刀を、僕はしっかり受け取った。

『聞いたか？』

『何がだ』

『【ヘスティア・ファミリア】だよ。掲示板見たら、また到達階層増やしてた。このままじゃあ中堅所に食い込むぞ』

『ああ、“インチキ・ルーキー”のところか。【ロキ・ファミリア】が半殺しにしたミノタウロスを横取りして【ランクアップ】した、あいつだろ？』

『え、そうなのか？』

『当たり前だろ。Ｌｖ．０がどうやって一人でミノタウロスを殺るんだよ。最速記録もガセだって、そこかしこで言われてるぜ。今だけ調子乗らせとけよ、すぐにメッキが剥がれる』

『……アホ神どもの馬鹿騒ぎが、どうしても気にかかるんだが』

『気になるんだったら直接問いただしてこいよ。さっき見たぜ、白髪のガキがここに入ってくるの』

『本当か？』

『ああ……クソッタレめ、何でエイナちゃんがあのインチキ野郎の担当なんだっ……！　俺なんか、俺なんかっ……！』

『……あ、ミィシャちゃんが呼んでる。じゃあな』

『クソッタレェッ！』

今日も騒がしいギルド本部で、多くの冒険者達がロビー内を行き来する。
そんな入り混じる多くの足音と話し声も届かない、ロビー隅、面談用ボックス。
防音設備の行き届いた一室で、ベルとエイナは、デスクを挟んで向き合っていた。

「クロッゾ？　えっと、間違ってたらごめんね？　それって、あの鍛冶貴族の……？」

「はい……やっぱり、そんなに有名なんですか？」

「うん、そうだね。冒険者やその界隈の人なら、クロッゾって聞いたらまず彼の家のことを考えちゃうかなぁ」

ベルはヴェルフのことを報告していた。

直接契約も結んだ鍛冶師のパーティ新メンバーは、また話題性に欠かない人物ということで、話を聞いたエイナは苦笑いを浮かべている。

「でも、驚いたな」

「えっ？」

「クロッゾの人間がオラリオにいたってことが。普通なら、すぐにでも都市中に名を馳せている筈だから。右に出る者はいない、高名な魔剣鍛冶師としてね」

「……」

ヴェルフの名が大してオラリオに広まっていないのは、彼が客の要求、魔剣製作を断り続けたことにある。

単純な話、本物の魔剣が出てこなければヴェルフを『クロッゾ』だと認めるのは難しい。【ファミリア】に所属している限り、神との

誓約のもと自身の名は偽ってはいけないことになっているが、『クロッゾ』と同じ家名が存在している可能性もある。
つまり、素性は知っている【ヘファイストス・ファミリア】とは異なり何も知らない客側は、ヴェルフのことを偽物のクロッゾと捉えていた。
“魔剣を作れないクロッゾ”に用はない。
ヴェルフを見つけた一部の客達はそう口々にして、彼の名は噂になることもなく日陰に埋もれているのだ。
エイナのことを非難するわけではないが……魔剣という尺度でしか測られていないヴェルフの現実を改めて目の当たりにして、ベルは少し落ち込んだ。

「すいません、それで、さっきのことなんですけど」

「あ、うん……じゃあ、今日も見せてもらっていいかな？」

思考を切り換えたベルは本題を切り出す。
少し動じた様子を見せるエイナは、顔の強張りを隠せないまま席を立つ。
同じく立ち上がり、彼女の目の前で背を向けたベルは、防具とインナーを脱いだ。

ベル・クラネル
Ｌｖ．１
力：Ｇ６７　耐久：Ｇ　２４　器用：Ｇ　８８　敏捷：Ｆ　７５

魔力：Ｈ　８９
幸運：Ｉ

短刀：Ｇ　１１
短剣：Ｉ　０
大剣：Ｈ　１１

「……」

ベルの【ステイタス】を確認したエイナは、その小振りな唇を開きかけ、噤む。
インナーを着ながら席に座り直すベルの方は、対面のエイナに心持ち身を乗り出した。

「パーティもスリーマンセルを組めます。これなら、中層に行けますか？」

１３階層から１４階層――中層初層の基本アビリティ評価到達基準は、Ｉ　からＨ。
つまり、ベルは次層における安全基準を十分クリアしていることになる。
意志のこもった強い眼差し。眼前の藍色の瞳にぐっと息を詰まらせた後、エイナはゆっくり瞼を瞑った。

Ｌｖ．０の前衛型鍛冶師に、【ステイタス】の乏しいサポーター。
ベル一人の力が突出した形の変則的パーティ。
とはいえ、１３階層に出現するモンスターと１２階層のモンスターの間にはそこまで力の差はない。『ハード・アーマード』を始めとした数種類のモンスターも中層ではまた出てくる。
ベルのサポートが届くと言うのなら、こと戦闘において全滅の危険性はない。
中層進出を認められる、ぎりぎりのパーティレベル。

「……ちょっと待ってて」

目を開けたエイナは駆け足で一度ボックスを後にする。
しばし一人になったベルだったが、すぐに彼女は戻ってきた。その手には三枚の細長い切符らしき紙がある。

「ベル君、これ」

「これは……」

「サラマンダー・ウールのクーポン券。これを持ってバベルに行けば、少しは割引されるから」

状況がよくわかっていない顔のベルに、エイナは説明する。

「中層へ進むのは許可するよ。ただし、条件付き。パーティ分のサ

ラマンダー・ウールを揃えること」

「さ、サラマンダー・ウール？」

「精霊の護布。いい、これを装備しなかったら、ぜっったいに行っちゃダメだからね！　わかった！？」

「は、はいっ！？」

指を一本立ち上げ、ぐわっとデスクから身を寄せてくるエイナの迫力に、ベルは慌てて返事をした。

細い柳眉を吊り上げていたハーフエルフの少女は、ふぅと脱力すると、椅子に腰を戻す。

「ベル君、無理は禁物。危なくなったらすぐに引き返すこと。約束だよ？」

「……はいっ」

緑玉色の瞳に見つめられ、ベルは頷きを返した。

中層という未知の領域に対する緊張感を、エイナから分けてもらう。

彼女の言葉をしっかりと肝に銘じた。

「頑張ってね」

眉尻を落としがちにした、けれど綺麗な微笑み。
その笑顔を目に焼き付け、ベルは仲間の待つダンジョンに向かった。

「ルギャアッ！？」

赤い斬撃が『シルバーバック』を戦闘不能に陥れる。
振り抜かれる左手に提げた紅の短刀。まるで深紅に燃えているかのような光沢を放つ刃が、ダンジョンの霧に赤い軌跡を刻み込む。
間を置かず濃霧の奥から襲いかかってきた新しいモンスターに、ベルは、今度は右手の《ヘスティア・ナイフ》で応戦した。

「せっ！」

「グエェ！？」

Ｌｖ．０を超えた速度をもって先制を奪い取り、高速のカウンター。
斬り伏せられた『インプ』が絶叫を上げながら草原の上に転がる。

「霧、抜けます！」

１０階層とは比べらものにならないほど深い霧の中、ベルはすぐ側でリリの声を聞く。
ダンジョン１２階層における最終のルーム、つまり１２階層と１３階層を繋ぐ階層間のポイント。
霧が立ち込めるのはこの正方形の空間のちょうど半分まで。その境界を越えてしまえば視野を妨げるものはもう何もなくなる。
目の良いホビットであるリリが断言した、終点が近い。
はぐれないようヴェルフも合わせ三人一塊になりながら、ザザザザッ、と足首ほどもある草原を蹴り分けていく。
とうとう辿り着く上層の終着駅を目の前にして、ベルの足は一層速

まった。

「！」

白い霧が煙のように揺らいだかと思うと、視界が一気に晴れた。
ベルの目に飛び込んできたのは、方々に点在するモンスターの群れ、次に岩石の壁を形成しているダンジョンの最奥部。
周囲の壁面は濃い木色で構成されているにもかかわらず、そこだけが灰色の岩で編まれている。壁の真ん中には、ぽっかりと巨大な穴が開いていた。
――あれが！
中層への、入口。
ドクンッと心臓が胸を打った。

「ふッッ！」

リリとヴェルフを置いていく形で先行する。
威嚇の声をぶつけてくるモンスターの集団に、ベルは『敏捷』にものを言わせ奇襲を仕掛けた。

「っ！」

「――ァ！？」

紅の短刀が一撃で『ハード・アーマード』を灰へと変えた。
胸部(きゅうしょ)からやや下を狙ったにもかかわらず、衝撃が伝播。魔石が破砕する。
《牛若丸》。
刃渡り１５センチほどの両刃。ミノタウロスのパーツから生み出されたヴェルフ印の武器は、《ヘスティア・ナイフ》とは種の異なった猛々しい”破壊力”を発揮する。
紫紺と紅緋、二種類の斬閃。
高威力の二振りの武器を使いこなし、ベルはモンスターの屍を積み上げていった。

「いい使いっぷり……だなっ！」

『『ヒガッッ！？』』

己の作品を持って暴れ回るベルに笑みを隠せないヴェルフは、肩に担いだ大刀をモンスターにぶつけていく。
ベルの討ち漏らしたインプを二匹まとめて斬り倒す。

「ブギァアアアアアアアアアアッ！！」

「来るか……！」

地面を揺らしながら突っ込んでくる巨体。
枯木の天然武器(ネイチャーウェポン)も装備した『オーク』を、ヴェルフは迎え撃とうとした。

が、

『キィイイイイイッッ！』

「！？」

オークの間合いに入る寸前、恐ろしい金切り声がヴェルフを襲う。
音源は上空、宙を飛行する『バットパット』。
蝙蝠型のモンスターの殺人的な怪音波に、ヴェルフの平衡感覚が一瞬破壊される。
膝が砕けかけ態勢が崩れるそんな彼に、オークは構うことなく前進を続け、極太の棍棒を振りかぶった。

「ヴェルフ様！？」

「！」

リリの悲鳴を聞きつけ、ベルもヴェルフの危機を察知する。
状況を把握すると同時に、瞬間的な直感。オークへの射線にヴェルフも重なってしまっている、【ファイアボルト】は使えない。
判断は早かった。
ベルは弾丸のごとく発走し、一直線、最短距離をぶち抜く。

「リリ、大剣！」

激声が飛んだ。
リリはそれだけでベルのやろうとしていることを理解した。
ぴょんっと跳ねるように駆け出すのと平行して、バックパックの外部面、無理矢理取り付けられた大剣に手を回す。
留め具を外し抜剣可能にすると、柄が真横に突き出るようサイドベルトを操作。その小さな体と大剣が綺麗な十字架を描く。
少年の予測進路上に体を割り込ませ、背を向けるように回転し。
そしてベルは、リリ自身を鞘のように見立て、シャランッ、と銀色の大刃を抜き放った。

「――――ッッ！！」

最高加速。
今まさにヴェルフへ一撃を見舞おうとするオークへ、トップスピードをもって突貫する。

「グボォオオオオオオオオオオオ！」

「あああああああああああああああッッ！！」

怪物のフルスイングに対し、全力の振り下ろし。
横殴りの棍棒に極厚の大剣が食い込み、そして、叩き折った。

「ブブェ！？」

動転の奇声。
力自慢の己の攻撃が不発に終わり、オークはその瞳を驚愕一色に染める。
加速も上乗せさせられたベル渾身の大斬撃は、オークの怪力を上回った。
間髪入れず、体の自由を取り戻したヴェルフがベルの頭上を飛び越し、横一閃、オークの頭を大刀ではね飛ばす。

「……あー、悪い」

「いやぁ……仲間、だしね」

頭をかくヴェルフに、ベルはくすぐたっそうに苦笑。
ヴェルフは目を丸くさせた後、くっと破顔する。
やがて、スパァンッ、と。
リリの放った矢が、バットパットを撃ち落とす快音が響き渡った。

「では、最後の打ち合わせをします」

ルーム内のモンスターを一掃したベル達は、床に膝をついて小さな円を作っていた。

草原が切れ切れになった岩壁の大穴前で、土の地面に簡単な絵を書きながらリリが口を切る。

「中層からはセオリー通り、三人一列（スリーマンセル）の形式を取ります。まず、前衛はヴェルフ様」

「俺でいいのか？」

「むしろここ以外、ヴェルフ様が務まる場所がありません。いえリリが偉そうに言えたことではないのですが……すいません、続けます」

三つ並ぶ円形のうち、真ん中のものがナイフでつんつんと突かれる。

「ベル様は中衛を。ヴェルフ様のサポートです。攻撃と守備を両方こなしてもらうことになります。負担は一番大きくなってしまいますが……よろしいですか？」

「うん、大丈夫」

頷くベルを見て、リリは最後に「消去法でリリは後衛です」と最後尾の円を指した。

「わかっていると思いますが、このパーティは非常に不安定です。サポーターが後衛を担う時点で火力は不足していますから、窮地に陥ってしまったら立て直しは利かないと思ってください」

「一度でも判断を誤れば命取りか。厳しいな」

「シシシッ。尻尾を巻いて引き返しますか？　今ならまだ間に合いますよ？」

「馬鹿言え。俺はさっさと上級鍛冶師になるんだ。最高の近道を前に尻なんか向けられるか」

既に恒例になりかけているリリとヴェルフの軽口を、ベルはぼんやりと見守る。
聞くわけでもなくそのやり取りを耳にしていると、二人が怪訝そうに自分を見ていることに気付いた。

「何笑ってるんだ、お前？」

「え……僕、笑ってた？」

「はい、すっごくにやけてました。……ベル様、緊張感が足りていないのではないですか？」

頬に手をやると、確かに唇が緩んでいた。
ベルは慌ててごめんと謝罪をする。

「それはいいから、何で笑ってんだ？　気になるぞ」

「え、えっと……賑やかでいいなぁっていうか……すごいパーティらしくなってきて、嬉しいというか」

頬を赤らめるベルは一度目を地面に落してから、再びリリとヴェルフを交互に見る。

「それに、さ。こういうのワクワクしてこない？　みんなで力を合わせて、冒険をしようって」

赤らんだ頬はそのまま、ベルは興奮したように小さく一笑する。
それは本来の冒険者という職業の醍醐味だった。
まだ知らぬ未開の地に足を踏み込み、仲間と協力して新たな発見を重ねていく。
未知という名の興奮と、助け合う手と手、そして分かち合う喜びは……ワクワクするものだと。
冒険者は冒険してはいけないという格言もこの時は忘れ、藍色の瞳は年相応の少年のように輝いていた。

「……くっ、ははははははっ！　そうだよな、こういうの、ワクワ

クするよな！　ワクワクしなきゃ、男じゃないもんな！」

「リリは少し賛同しかねますが……でも、ベル様のお気持ちはわかります」

互いの顔を見合った後、ヴェルフは豪快に笑い出し、リリも苦笑を浮かべながらも微笑ましそうに目尻を和らげる。

何故だかぐっと嬉しくなったベルは、感情が促すまま、くしゃっと満面の笑みを二人に見せた。

「それでは、準備はよろしいですか？」

「ああ、問題ない。行こうぜ」

「うんっ」

立ち上がり三人並んだベル達は、穴の開いた岩壁に近付いていく。

黒い黒い中層への入口は、ごつごつとした岩肌が下り坂の先まで続いており、そしてその奥で鈍い燐光がぼやぼやと輝いていた。

少し土臭い岩の香りと濁り湿った空気は、綺麗事では片付けられない恐怖も誘発してくる。この先には、まだ見たことのない凶暴なモンスターもいるのだ。

すっと立ちかける鳥肌を、ぎゅっと浅い拳を作ることで堪え、ベルはダンジョンの奥を強く見据えた。

（……大丈夫）

一人ではないのだ。
同じ【家族（ファミリア）】でもないが、心強い仲間がいるのだ。
なら、きっと、何とかいける。
ベルはそう思えた。

（……よしっ！）

想いの根幹、金の憧憬を胸の奥で噛み締め。
ベルは、中層へと進出した。

【ヴェルフ・クロッゾ】
所属：【ヘファイストス・ファミリア】
ホーム：エトナ・ボルケーノ
種族：ヒューマン
ジョブ：鍛冶師
・到達階層：１２階層
・武器：大刀　鎚
・《大刀》
所持金：１１０００ヴァリス

【ステイタス】
Ｌｖ．０
力：Ｃ　１７　耐久：Ｄ　２１　器用：Ｃ　４５　敏捷：Ｆ１７
魔力：Ｉ　７０
≪魔法≫
【ウィル・オ・ウィスプ】
・対呪文魔法（アンチ・マジック・ファイア）
・詠唱式【燃えつきろ、外法の業】
≪スキル≫
【魔剣血統】

・魔剣製造可能。
・製造時における魔剣威力強化。
・血の契り。子孫に確率遺伝。

大刀：Ｃ　４６
鎚：Ａ　２

【装備】
≪大刀≫
・幅広の片刃。リーチは１５０センチ。
・ヴェルフ自作。上層ならば十分まかり通る威力。
・自身専用の武器なので、銘はなし。他人の武器でなければヴェルフは題名をつけることはしない。

《着流》
・本来は鍛冶用の作業衣。火と熱に耐性はあるが、防御力は薄い。
・通常はこの上に防具を纏う。

（2）（後書き）

描写のしつこさ、ごちゃごちゃした設定の多さ、会話の流れ、臭い台詞。
今回思うところが沢山ありました。読者様を置いてきぼりにしていないか不安で一杯です。
上記の点を見て何かピンときたら、遠慮のないご意見お聞かせください。ご迷惑をおかけしますが、どうかよろしくお願いします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8625u/

ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか

2011年12月23日21時50分発行